シャッフルワールド!!

夙多史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シャッフルワールド！！

【Ｎコード】
Ｎ４５２３Ｑ

【作者名】
夙多史

【あらすじ】
　この世界は常に別世界と繋がっている。『次元の門』という世界間を繋げる扉を通り、行方不明となる地球人もいれば、異世界の人や獣が迷い込んでくることもある。そうした事態への対処を人知れず行っているのが、俺――白峰零児の所属している異界監査局だ。その夜、ちょっとした油断で不幸にも異世界へ引きずり込まれてしまった俺は、？魔帝？と名乗る金髪美少女・リーゼロッテと出会った。この世界は彼女の父親のせいで既に滅んでおり、退屈していたリーゼは俺の世界に行きたいとか言い出して……。　※縦書きＰＤ

Fだと文字化けする文字を使用しております。

登場人物紹介（前書き）

はっきり申します。
最初に読む必要性は皆無です。あまりオススメはしません。

※差し障りない程度のネタバレを含みます。
また、本編中には明記していないことも多少記述しております。

登場人物紹介

第一巻

◆白峰零児（しらみねれいじ）

本作の主人公。異界監査官をしている高校2年生。17歳。ぶっきら棒なお人好し。日本人と異世界人のハーフであり、そのため地球人にはない異能力を持っている。右手に収束した魔力を自分がイメージできる近接武具として具現させる能力――〈魔武具生成〉の性質上、様々な武具の扱いに長けている。最も得意な武器は日本刀だが、その場その場で臨機応変に武器を生成している。無殺生を心掛けているため、最も使用頻度の高い武器は棍である。

◆リーゼロッテ・ヴァレファール

既に滅びた世界――『イヴリア』に君臨する？魔帝？の少女。金髪のストレートヘアーにルビーレッドの瞳、背は低く見た目の年齢は中学生くらいである。好戦的で無邪気な性格をしていて、退屈が大嫌い。膨大な魔力量を秘めており、己の魔力を燃焼させた〈黒炎〉を用いて戦う。愛称は『リーゼ』。

◆レランジェ

リーゼロッテに仕える侍女。ゴスロリのメイド服を着用している。人間ではなく、主人の魔力で稼働する魔工機械人形と呼ばれる存在。近接格闘術が得意だが、主に右手に仕込まれている魔導電磁放射砲をぶっ放している。

◆法界院誘波（ほうかいいんいざなみ）

日本異界監査局局長にして風を自在に操る最強の異界監査官。少女の姿をしており、本人は１８歳だと言い張るが実年齢は不明。名前も偽名らしい。常に派手な十二単を纏った天女みたいな姿をしており、おっとり穏やかな口調や雰囲気とは裏腹に人を（主に零児）をからかうことが大好き。出身は異世界『アストラリア』。

◆セレスティナ・ラハイアン・フェンサリル

異世界の王国『ラ・フェルデ』に仕える１７歳の女騎士。聖剣十二将と呼ばれる、騎士として最高の位を若くして与えられている。ポニーテールに結った銀髪にモデル顔負けのスレンダーなプロポーション。正義感が強く騎士としてのプライドも高いが、自分に非がある場合は素直に認めて謝罪できる。槍のように長い剣――聖剣ラハイアンを常時帯剣している。愛称は『セレス』。

◆桜居謙斗（さくらいけんと）

零児の中学時代からの悪友。１６歳。一般人だが異世界に対する憧れが人一倍強く、異世界人の存在や異界監査局についてある程度知っている。学校では異世界研究部なる部活を創設している（非公認）。お調子者で癖っ毛が酷い。

◆スヴェン・ベルティル

二丁拳銃と機械仕掛けの首なし巨人『デュラハン』を使いこなす２２歳の男性異界監査官。眼鏡に燕尾スーツを着用している。普段は伊海大学院の院生としてなにかの研究に没頭している。

◆稲葉（いなば）レト

零児の後輩にあたる異界監査官の少女。１５歳。ボーイッシュな顔立ちをし、服装はジャージなど動きやすいものを好む。関西弁の

ような言葉を使うが、関西人ではない。

◆紅楼悠里（くろうゆうり）
　零児の幼馴染の少女。零児と同じく日本人と異世界人のハーフ。とある事故で『次元の門』をくぐってしまい、行方不明となっている。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第二巻

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

◆マルファ
？形？という概念が存在しない異世界――『クレイブル』から地球に迷い込んできた生命体。ピンク色のスライム。

◆迫間漣（はくまれん）
　高校生異界監査官の少年。１７歳。純血の日本人だが、ある特殊な異世界の影響で異能の力を身につけてしまった影魔導師と呼ばれる存在である。漆黒の大剣を振り回し、闇を纏った転移術などを使用する。面倒臭がり屋。

◆四条瑠美奈（しじょうるみな）
　高校生異界監査官の少女。１６歳。腰まで届く黒髪に黒い瞳、小柄な体躯。迫間漣とは幼馴染で、共にある特殊な異世界の影響を受けて影魔導師となった。影の翼を背に生やして自在に空を舞う。リーゼロッテに負けず劣らず好戦的で、なにかと突っかかっていく。背が低いことを言うと怒る。

◆鷹羽畔彰（たかばくろあき）
影魔導師連盟の幹部であり、迫間漣と四条瑠美奈の師匠である男。３３歳。ヘビースモーカー。鍔広の黒帽子に影魔導師のロングコート、無精髭を生やしている。不良中年でいい加減、ひたすらに口が悪い。法界院誘波とは腐れ縁で、『クロちゃん』と呼ばれるとキレる。

◆望月絵理香（もちづきえりか）
迫間漣と四条瑠美奈の幼馴染であり一つ上の先輩。実家は剣道道場を経営しており、そこでは目上の門下生を苗字で先輩をつけて呼ぶというよくわからない決まりがある。三年前に巨大な影霊の腕に捕まり、『混沌の闇』に呑み込まれた。

◆広瀬智治（ひろせともはる）
迫間漣と四条瑠美奈の幼馴染であり一つ上の先輩。そして望月絵理香の恋人である。特徴を挙げるなら『普通すぎるところ』と答えられるくらい冴えない男子。望月絵理香と同様に、三年前『混沌の闇』に呑み込まれた。

＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第三巻

＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

◆クロウディクス・ユーヴィレード・ラ・フェルデ
異世界の王国『ラ・フェルデ』の若き国王。２５歳。神剣ユーヴィレードの継承者。

◆アレイン・グラリペル・キャクストン

異世界の王国『ラ・フェルデ』に仕える聖剣十二将のリーダー。２７歳。クロウディクスとは幼馴染の関係であり、政治にも直接関わっているため大臣のように頭が硬い。

◆郷野美鶴（こうのみつる）

伊海学園高等部二年Ｄ組に所属する女子生徒（白峰零児のクラスメイト）。１７歳。高い身長に大きなバスト、保健委員だからと言って常に白衣を纏っている変わり者。地球人で日本人で一般人だが、『悪魔の保健委員長』という異名を学園内に轟かせている。振舞いは冷静沈着だが、意外とノリがいい。

◆グレアム・ザトペック

異界監査官の青年。２０歳。街の不良たちからは『大兄貴』と慕われている。生粋の戦闘狂だが弱者をいたぶる趣味はなく、寧ろそういうことをしている者には容赦なく鉄槌を加える実はいい奴。「～的に」が口癖で、自分の考察を全部口に出すため謎の独り言が多い。誘波に素手で一撃入れるほどの実力。しかし能力者ではなく、異常なまでの強靭な肉体と身体能力を有しているだけで他は地球人と変わりない。

◆クライン・アーベント

日本異界監査局第三支局に所属する異界監査官。２７歳。ありえないくらい前方に跳ねた揉み上げと割れた顎が特徴の男で、レヴィアとは恋人の関係。四肢を竜人化して戦うが、そちらが本当の姿であり、やろうと思えば全身を竜人化できる（恋人のレヴィアの前では見せたくないらしい）。本来なら地球でいうドラゴニュートのような姿をした異世界人である。武器はラム・ダオ。

◆レヴィア・フリーゲン

日本異界監査局第三支局に所属する異界監査官。２５歳。エルフのように尖った耳と、新緑色の長髪をした女性。クラインとは恋人の関係。改造クロスボウの矢を使った魔術で戦う。元気いっぱいな明るい性格。

◆ルノード

日本異界監査局第六支局に所属する異界監査官。胸元に薔薇の刺繍が施された貴族風の衣装と、真紅のマントを纏った優男。２４歳。武器はフランベルジェ。刻印魔術師と呼ばれる存在で、形のあるなしに拘わらず様々なモノに術式を刻んで使役することができるが、前もって準備していないといけない。

◆ラシュリー

日本異界監査局第六支局に所属する異界監査官。カールスタイルの金髪に毒々しい紫色をしたドレスを纏った三つ目の美女。２３歳。常に両目は閉じられ、第三の目だけで物を見ている。卓越した魔力制御能力を持ち、無機物に魔力を流してゴーレムとして操ることもできる。閉ざされた両目は魔眼になっているが、能力故に開くことは滅多にない。

◆パクダ・カットゥヤーヤナ

日本異界監査局第十一支局に所属する異界監査官。六本腕を生やした牛角の巨男。３８歳。首に七つの玉を繋げた数珠をかけている。万物を構成するとされる七要素――地・水・火・風・苦・楽・命を操る。

◆ハイカル・アズミ

日本異界監査局第十一支局に所属する異界監査官。包帯を巻いたマジシャン風の男。２９歳。基本的に喋らない。なにもない空間に突如物体を出現させたりするが、本人が超絶的に無口なためその

仕組みは素性と共に謎のベールに包まれている。

◆リャンシャオ

日本異界監査局第二十八支局に所属する異界監査官。双子の姉。１６歳。髪は黒いが狐耳と尻尾は金色。赤いチャイナドレスに三つ編みポニテ。自在に変化・分身・物の取り出しなどができる狐妖術（こようじゅつ）の使い手。近・中距離戦が得意。

◆チェンフェン

日本異界監査局第二十八支局に所属する異界監査官。双子の妹。１６歳。髪は黒いが狐耳と尻尾は金色。赤いチャイナドレスに三つ編みツインテ。自在に変化・分身・物の取り出しなどができる狐妖術の使い手。中・遠距離戦が得意。

◆ヴィルゲルム

日本異界監査局第三十二支局に所属する異界監査官。五メートルはあるロボットに搭乗した赤ちゃん。ヴィルゲルムという名前はロボの名前なのか赤ちゃんの名前なのかは不明。

◆ウェルシー・ホーネッカー

日本異界監査局第三十二支局に所属する異界監査官。影魔導師。くすんだ赤毛を後ろで雑に縛った目つきの鋭い女性。男口調。２２歳。鷹羽とは兄妹弟子の関係だが、犬猿の中。馬が合わずに影魔導師連盟を脱却し、異界監査官となった。

◆カルトゥム

日本異界監査局第四十四支局に所属する異界監査官。漆黒の西洋鎧を全身に纏った寡黙な戦士。３０歳。

◆ゼクンドゥム

日本異界監査局第四十四支局に所属する異界監査官。天女の羽衣のような白い長布だけで裸身を覆った白髪の少女。１３歳。ボクっ娘。

登場人物紹介（後書き）

キャラ増加に伴い順次更新していきます。
ここに乗せたいと考えていたキャラの公式イラストは、たぶんもう無理だと思います。

『こんなことも知りたい』
『これってどういうこと？』
『あそこでは○○だったのになんでここでは△△になってるの？』
などなど、気になっていることもあると思います。
そういった疑問や質問、要望があれば、感想もしくはメッセージで絶賛受付け中です。
くだらない質問も大歓迎♪

最新話の後書きでQ＆Aコーナーを設け、答えられる範囲でお答えするつもりです。

ついでに人気投票とかお願いしまーす♪　下のリンクから飛べるんで。

用語資料集（前書き）

お気に入り登録件数１００件記念。
たぶん遠慮なくネタバレしていると思います。
なので、できれば最新話まで読んでからをオススメします。

用語資料集

第一巻

◆次元の門（プレナーゲート）

無数に存在する異世界とランダムに繋がる扉。次空の歪みにより出現し、一般人には目視できない。なにかが門を通過する時、陽炎に似た空間の揺らぎや波紋が発生する。

◆異界監査局

主に『次元の門』の監視、迷い込んできた異世界人の保護、異世界関係の被害の対処を行っている組織。表向きは異世界の技術等を取り入れて様々な物を制作しているグループ企業となっている。世界各地の『次元の門』が発生し易い地域に構えられ、各国に本局と複数の支局が存在する。それら全ての監査局を統括する機関もあるが、所在地は各国の本局長しか知らない。構成員は大きく監査官と監査局員の二種類に分かれる。監査官は現場にて直接『次元の門』を監視したり、発生した問題を臨機応変に対処する戦闘員。監査局員は監査官のサポートや異世界の研究、組織運営の全般的なことなどを行う非戦闘員である。

◆異獣

異世界から『次元の門』と通って現れる獣のこと。

◆私立伊海学園

主人公たちが通う学校。日本異界監査局が創設。その理念は、元の世界に帰れなくなった異世界人をこちらの世界に馴染ませることであり、多くの異世界人が通っている。山一つ丸ごと買い取って造られたので広大な敷地面積を所有し、敷地内には日本異界監査局の本局や研究機関、異世界人のみの教育機関など様々な施設がある。異世界人がなにか問題を起こさないために、異界監査官や監査局員が教師や生徒として紛れている。

◆言意の調べ

言葉の通じない相手と意思疎通するための魔導具。ペンダント型やブレスレット型といったタイプがある。

◆現の幻想

質量ある幻を出現させる魔導具。

◆人化の魔導具

とても人間には見えない異形の姿をした?人?を、地球人と同じ姿に変化させる魔導具。

◆魔武具生成

本作の主人公――白峰零児が持つ異能力の一つ。構造や性質さえ理解していれば右手に集中させた魔力を用いてナイフからミサイルまでどのような武具でも生成することが可能であるが、使用者のイメージだけでもある程度の『形』を具現させることはできる。しかしハーフの白峰零児は能力が劣化しており、武具が右手を離れると構成する魔力が乖離して消滅するため近距離武具しか生成できない。武具が大きく複雑になるほど生成する魔力消費量が増大する。また、小さく単純な武具でも込める魔力量を多くすればより強力になったりする。

――生成した武具――

・棍
・日本刀
・戦棍
・巨大ハンマー
・ナイフ
・大薙刀
・鉄槌
・スパイクド・クラブ
・カイトシールド
・斬馬刀
・グングニル（イメージのみで生成）
・ロンパイア
・オウル・パイク
・フレイル
・ライオットシールド
・クレイモア
・黒き滅剣（形のみ似せた武器）
・青龍偃月刀
・魔帝剣ヴァレファール（?.魔帝?.の炎を纏う異能武器）
・ハルベルト
・トゥ・ハンド・ソード
・野太刀
・神鉄変幻棍（?.不完全な生成?.による長さ・向き・太さを自在に変えられる武器）

◆吸力（ドレイン）

白峰零児が持つ異能力の一つ。左手で触れた相手の魔力を吸収する。

◆黒炎

?魔帝?リーゼロッテ・ヴァレファールが自身の魔力を燃焼させて使用する高い攻撃力を秘めた炎。攻撃以外にも転移術や出納術として使用される。

◆魔工機械人形

異世界イヴリアの魔帝城にてリーゼロッテの世話及び護衛を行っている人形機械。一見すると人間と区別できないほど精密に作られている。リーゼロッテの側近であるレランジェだけは特別製で、?人?と変わらない意志を持っている。

◆聖剣

異世界ラ・フェルデに存在する特殊能力を持つ十二本の剣。王国が聖剣の所持者と認めた者は聖剣十二将と呼ばれ、全員が軍の将軍の地位にいる。聖剣は使用者の精神力を消費して力を発現させることができるが、相当な精神力の持ち主でない限り使用することはできない。セレスティナ・ラハイアン・フェンサリルが所有する聖剣ラハイアンは、攻撃性のある光を放つ槍のように長い超長剣である。

◆デュラハン

スヴェン・ベルティルが操る機械仕掛けの首なし巨人。スヴェンの思念がリンクされ、それによって動作している。ドリル状の巨大槍が装備されており、地中を掘り進むことができる。

◆魔力還元術式

使用した魔力を全て使用者に還元する術式。

◆魔力疾患

魔力量が肉体の許容量を超えた時に起きる病気のようなもの。

◆イヴリア

リーゼロッテとレランジェの出身世界。前魔帝であるアルゴス・ヴァレファールが世界を滅ぼしている。しかし人間は絶滅しておらず、アルゴス死後に安定した生活を取り戻しつつある。そんな中、魔帝打倒を掲げて新たなる支配者となることを目論む者もいる。

◆アストラリア
　法界院誘波の出身世界。詳細は不明。

◆ラ・フェルデ
　セレスティナの出身世界。世界そのものの名前ではなく、一国の名前のようである。

◆ラーゲルレイブ
　スヴェンの出身世界。地球よりも科学が発展している。

◆クッキングシーカー
　レランジェが愛読している週間料理雑誌。

＝＝

第二巻

＝＝

◆混沌の闇（ケイオス・ダーク）
　地球と同じ次元の別の空間に在る世界。この世界は空間の歪みに加えて、楕円形の?穴?となって開かれる。中はドロドロの闇が蠢き、その闇に触れたものは黒く侵蝕され、やがて消滅する。?穴?から漏れ出た闇のことを『混沌の闇』の?影?と呼ぶこともある。侵蝕に打ち勝ち、逆に『混沌の闇』の?影?を制御できるようにな

った者が影魔導師となる。？穴？は夜にしか開かない。

◆影魔導師（かげまどうし）

周囲にある影に干渉し、繰り、練り、様々な力として行使することのできる人間。その全てが地球人とされている。周囲が暗ければ暗いほど操れる？影？の量が増えるため、主に活動は夜に行っている。ゾンビや吸血鬼のように強烈な光を浴びると気絶、もしくは死亡する。そのため全ての影魔導師は、日常生活に支障をきたさないよう光の影響を大幅に緩和する特殊な防護服を常に着用しなければならない。そんな影魔導師たちが集まって創られた組織が影魔導師連盟である。異界監査局が『次元の門』を監視するように、影魔導師連盟は『混沌の闇』を監視し、世界をその侵蝕から守っている。連盟には、『混沌の闇』に侵蝕された者を見つけた影魔導師が、その被侵蝕者の師となるという決まりがある。

――影魔導師の術――

・出納（キャシア）……術者自身の影に物を入れたり、取り出したりする収納術。
・縫合（スティッチ）……『混沌の闇』の？穴？を塞ぐ空間修復術。
・封緘（スィール）……『混沌の闇』から漏れ出た？影？の侵蝕を堰き止める結界術。
・飛行（フライ）……背中に反重力効果を持つ？影？の翼を出現させて宙に浮かぶ飛翔術。
・転移（ムーブ）……？繋がった状態の影？という範囲内を移動する転移術。
・束縛（チェイン）……帯状や鎖状の？影？で相手を拘束する捕縛術。
・付加（アド）……炎や雷といった性質を？影？に持たせて武器や人体に付加させる攻撃術。
・構築（ビルド）……武器などの物質を？影？から作り出す創造術。

◆祝ノ森リゾートガーデン

山間に位置する、日本の城と城下町をモチーフとした温泉地。城風の旅館・ジャングルスパ・温泉街などで構成され、レジャー施設

や他の宿泊施設も充実している。城風旅館の裏手には深い森が広がっており、秘湯もいくつか存在するらしい。法界院誘波のお気に入りの温泉地である。

◆影霊（レイス）
『混沌の闇』から出現する異獣。通常の生物とは異なり、『混沌の闇』の?影?で構成された意識集合体のような存在。

◆黒き滅剣（ニゲルカーシス）
影魔導師・迫間漣が使う漆黒の大剣。?影喰み?という『混沌の闇』の?影?を吸収して力に変換できる能力を秘めている。

◆歪震（わいしん）
次空が大きく歪んだ際に?元へ戻ろうとする力?が働くことで生じる空間振動のこと。一般人には地震との区別はつかないが、歪みを感知できるタイプの異界監査官には感覚的にわかる。二次災害として『次元の門』が大量発生することがある。

◆次元の柱
世界の構成を安定させる大黒柱のようなもの。これが破壊されると、次元の壁が崩壊し様々な異世界が逆流すると言われている。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第三巻

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

◆監査官対抗戦
年に一度、伊海学園学園祭と同時期に開催される異界監査局の武

闘大会。賞品が豪華であり、優勝者を出した局には莫大な支援金が払われるなどといった理由から大勢の腕自慢が集う。予選はその年その年で形式が異なっているが、本選は決まって異界監査局が所有する大闘技場で行われる。この大闘技場は少々特殊な土地に建設されているため、普段は封印が施されている。

◆狐妖術（こようじゅつ）

双子の半狐人姉妹――リャンシャオとチェンフェンが扱う術。物体を異空間に出し入れしたり、分身や変身などで主に相手を翻弄する術。

◆刻印魔術師（こくいんまじゅつし）

日本異界監査局第六支局のルノードの肩書き。形の有無に問わず様々な物に術式を刻み、使役する魔術師。刻印術には手間暇がかかるため、実戦で使用するためには前もって準備が必要。

◆吸魂（きゅうこん）の魔眼

日本異界監査局第六支局のラシュリーが持つ魔眼。見詰め合った相手の魂を問答無用で抜き取る。抜き取った魂は体内に保管することも可能。

用語資料集（後書き）

逐次更新していく予定です。
質問等があれば受け付けます。
「あれ？　〇〇については書いてないの？」というのがあれば言ってください。書き忘れがある可能性大です。

イラストコーナー（最新更新日：１１月２６日）

＞ｉ２４１７６｜２７１７＜
『シャッフルワールド！！表紙イラスト（絵師様：羽鳥　紘）』

　シャッフルワールド！！ユニーク１０００記念と称しましてイラストの募集をしたところ、綺麗で格好よくて可愛らしいステキなイラストをたくさん頂きました。公式絵は未完成ですが、頂いた素晴らしいイラストを絵師様方が執筆されている小説の紹介と共に展示したいと思います。ではご覧ください。

◆羽鳥　紘様より頂いたイラスト

＞ｉ２４１７５｜２７１７＜
　『リーゼロッテ（通常衣装）』
＞ｉ２４１７３｜２７１７＜
　『リーゼロッテ（水着）』
＞ｉ２４１７４｜２７１７＜
　『セレスティナ（水着）』
＞ｉ３３６５８｜２７１７＜
　　『レランジェ』
＞ｉ３３６６２｜２７１７＜
　『魔帝様的ハロウィン』

＝＝絵師様紹介＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

羽鳥　紘様は『ＩＮ　ＢＬＯＯＭ　～聖少女と黒の英雄～』とい

うファンタジー小説を書かれています。
　名前と容姿のせいで十六年間女性と間違えられて生きてきた姫野咲良が、召喚された異世界で救国の聖少女に仕立てられバッタバッタと敵兵を薙ぎ倒していくお話……かと思えば、脱走し敵国の英雄に保護されてしまいます。周囲に敵視されながらも徐々に人間関係を構築していく様子を、巧みな描写表現で綴っている作品です。
　英雄の正体には驚かされました。というか、「やられた！」と思いましたね。
　シリアスな中にも少しの笑いがあって、ピュアでラブな話にものめり込みます。是非とも一読あれ。

［ＩＮ　ＢＬＯＯＭ　～聖少女と黒の英雄～］
＞ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６７４９ｑ／＜
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝

◆ｍｉｌｋｖｅｒ様より頂いたイラスト
＞ｉ２４１７７｜２７１７＜
　　　『リーゼロッテ』
＝＝絵師様紹介＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝
　ｍｉｌｋｖｅｒ様は『そして君がいる史《ストーリア》』という恋愛小説を書きながら、イラストの依頼も行っている方です。
『そして君がいる史《ストーリア》』は現在休止中ですが、勉強も運動も一般人並でなんのとりえもなく生きてきた新城たつやが、帰宅するとなぜか部屋の中にいた戦国娘に親の仇と間違えられて斬りかかられる、という始まりのタイムスリップラブコメディーです。
　挿絵も御自分で描かれており、とても可愛らしいイラストを見る

ことができます。
ところどころにパロディー的なネタを多く含んでいて、わかる人にはクスリときますね。
　コレクションのために全力で武器持った相手と戦う主人公は見物です。

［そして君がいる史《ストーリア》］
＞ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ７３８６ｓ／＜

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

◆ごんたろう様より頂いたイラスト

＞ｉ２４１９１｜２００８４＜
『リーゼロット』
＞ｉ２４２３４｜２００８４＜
『レランジェ』
＞ｉ２４１８９｜２００８４＜
『ガンボウゥ～』

＝＝絵師様紹介＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

　ごんたろう様は『2代目勇者の災難』というファンタジー小説を書かれています。
　魔界に君臨する魔王ヴェルディルガ。いつまで経っても魔力の成長が止まらない彼は、部下の何気ない一言によってアホな危機感を覚え、アホな対策ばかりを考えては宰相に却下される日々を送る。
最終的に彼が提案した対策は、部下たちを使って勇者を仕立て上げ

ることだった。そんなお話。
携帯画面で一話二ページ未満で収めるという拘りがあり、読み易さに徹した文章を書かれています。
魔王と宰相の間に温度差があり、読んでいてニヤつく楽しさがあります。
勇者に選ばれた人間の災難っぷりというか、振り回されっぷりがもう……おっとそこはネタバレになりますね。
とにかくお茶を片手に気軽に読める小説です。少し時間が空いた時にでも読むといいかもしれません。

それとごんたろう様は『続きを書きましょう』というリレー小説を企画されています。企画内容は一言『自由』です。最新話まで読んでいただき、それまでの設定を反映したりしなかったりして続きを誰もが好きなように書くことができます。つまり、どこまでぶっ壊せてどんな無茶振りを次の方へ投げつけるかというドＳ歓迎なゲフンゲフン！　――掲載作品を読み、続きを想像して書き、その行方を読むという三段階の楽しみがある企画というわけです。是非とも、参加したいと思う方はごんたろう様宛てにメッセージを送ってください。

［2代目勇者の災難］
＞ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ７９５２ｐ／＜
［続きを書きましょう］
＞ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６９６２ｑ／＜
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

◆麒麟様より頂いたイラスト

＞ｉ２５０６２－２７１７＜
　　　『リーゼロッテＶＳセレスティナ』

＝＝絵師様紹介＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

麒麟様は『ウロボラズ外伝１　竜の仮面』というファンタジー小説を書かれています。

　温厚な性格の鳥・ガルダはある日、世界を建て直すと言う大蛇・ガルドと出会う。エレスチャルというドラゴンの言いつけにより、ガルダは狡猾だがどこか人間味のあるガルドと行動を共にすることとなる。　真実と偽りが混在する世界。自由を求め、様々な視点でそれぞれの戦いに挑んで行く。現実の知識とはちょっと違う、パラレルワールドでの冒険物語です。『外伝』とありますが、そういうタイトルなだけであって本編です。

　メインキャラクターが人間ではなく、幻獣や動物といった新感覚（？）な作品。彼らが独創的な世界観の中で動き回り、海外ファンタジー小説の日本語訳版を読んだことのある方はそれに近い雰囲気が味わえるそうです（夙は海外小説読んだことないのですｏｒｚ）。

　ともかく読み込めば読み込むほどその世界観に魅了されること間違いなし！

　ハマってしまうと、あらゆることに対し脳内でガルドが勝手に毒舌を吐いてくれます（私だけか；）。

［ウロボラズ外伝１　竜の仮面］
＞ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ５２０８ｒ／＜

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

◆鈴夜　音猫様から頂いたイラスト

＞ｉ２５３７４｜２７１７＜＞ｉ２５４０８｜２７１７＜
『リーゼ＆セレス（制服）』　『法界院誘波』
＞ｉ２５４２５｜２７１７＜＞ｉ２５６８５｜２７１７＜
『迫間漣＆四条瑠美奈』　『レランジェ』
＞ｉ２５７６２｜２７１７＜＞ｉ２６０７６｜２７１７＜
『稲葉レト』　『マルファ』
＞ｉ３２８９１｜２７１７＜
『郷野美鶴』

＝＝絵師様紹介＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

鈴夜　音猫様は『うさぎのお巡りさん』や『私と王子と嫌味なアイツ』などの恋愛小説を書かれていて、その二作品は既に完結しております。

現在は『砂時計』というタイトルのファンタジー小説を連載されております。

大和国の闇市で孤児として育った少年。彼に襲いかかった運命の悪戯は、否応なく彼を戦いへと引きずり込んでいった――（※あらすじ参照）

世界の均衡を保つべく、世界を創りし天帝が陰と陽それぞれ六名ずつ、計十二名の天将を遣わした。天将はそれぞれ一人ずつ人間に守護を与えて均衡を守っている。だが、その内の一人――朱雀の守護を得た者が世界を我が物にせんと策謀し始めた。という和風異世界ファンタジーです。

［砂時計］
＞ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４４３

１ｕ／＜

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝

◆ｍｉｃｋ様から頂いたイラスト

＞ｉ２６６９１｜２７１７＜

『セレスティナ（夏服＋武装）』

＝＝絵師様紹介＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝

ｍｉｃｋ様は『ＡＴＡＲＡＸＩＡ　Ｌａｓｔ　ｃａｌｌ　神様と管理人』などのファンタジー小説を書かれています。

事故で両親を亡くした神崎タスクが細々と経営するボロアパート東雲荘に入居希望者がやってきた。　新しい２０３号室の住居人は９９９と名乗る青年と二人の子供。　そして謎の青年は９９９はタスクに告げる。　私は、神様で貴方を救いに来ましたと……薄幸の少女と東雲荘の住人達が巻き起こすギャク＆シリアス小説（※あらすじ参照）。

ｍｉｃｋ様はイラストの方にも力を入れられていて、みてみんでも同名で活動されています。小説のイラストが欲しいという方はご連絡してみてください。引き受けてくれるかもしれませんよ。

「ＡＴＡＲＡＸＩＡ　Ｌａｓｔ　ｃａｌｌ　神様と管理人」

＞ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１２２４１／＜

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝

◆リュリュ様から頂いたイラスト

＞ｉ２８１００―２７１７＜

『四条瑠美奈』

＝＝絵師様紹介＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝

　このイラストは二人の絵師様の合作で、代表してリュリュ様の名前を使わせていただきました。ちょっと姉御的な感じがしますね。

　リュリュ様は絵師一本の方です。以下にリュリュ様のサイトを載せてますので、是非立ち寄ってくださいませ（一応ＵＲＬ載せる許可は下りてます＾＾；）。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＞ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐｉｘｉｖ．ｎｅｔ／ｍｅｍｂｅｒ．ｐｈｐ？ｉｄ＝４５０４２４＜

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝

◆山大様から頂いたイラスト

＞ｉ３０７４５―３８３７＜

『鷹羽畔彰』

＞ｉ３１３５２―３８３７＜

『第三巻二章（８）のワンシーン』

＝＝絵師様紹介＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

山大様は『ひゃくものがたり』というファンタジー小説を書かれています。

妖怪、幽霊、陰陽師、魔術師、霊媒体質者、たまーに神様。そんな個性豊かなキャラクターたちが集う月波市を舞台に、非日常な日常からちょっとした事件までを描くほのぼのとした伝奇小説です。

一話完結のため読み易く、そして読み応えも充分過ぎるほどありま

す。一話ごとに語り部も異なり、それぞれの構成力が半端ないです。
思わずクスリとしてしまうテンポよい掛け合いや、のほほんとした
和風の雰囲気に時間も忘れてハマってしまいますよ。妖怪や陰陽師
などが登場しますので、ただの日常系ではなくちょっとした異能バ
トルもあったり……。
　とにかく、オススメです。是非とも読んでみてください＾＾

［ひゃくものがたり］
＞ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１１６
８ｕ／＜
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

◆宮座頭数騎様から頂いたイラスト

＞ｉ３１６６９｜２７１７＜
　　　　『スヴェン・ベルティル』
＝＝絵師様紹介＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝
宮座頭数騎様は『妖狐玉藻伝ー幻惑の美狐ー』というファンタジ
ー小説を書かれています。
　伝説の妖狐と云われた玉藻美狐。彼女はある退魔組織の少年との
出会いをきっかけに、人の可能性に興味を持ち始める。妖怪に退魔
組織、とある都市伝説から物語が動き出す現代ファンタジー。
　一人称小説で主人公が明確に定まっており、周りを固めるキャラ
たちも個性的でとても魅力があります。なんといっても描写が丁寧
で、特に戦闘シーンは臨場感があって迫力に呑まれるまま先を読ん
でしまいます。妖怪好きやアクション好きの方はもちろん、そうで
ない方も是非ご一読あれ。美狐ちゃんカッコイイよ美狐ちゃん！
　あと宮座頭数騎様が書かれているもう一作品、『ディメイション

アドベンチャー！』も個人的にお気に入りです。ギャグが冴えていてノリもテンポもよく、さらに次元繋がりでシャッフルワールド！！の読者様ならきっと大好物な作品だと思います。こちらの方も読んでみてはいかがでしょうか？

［妖狐玉藻伝ー幻惑の美狐ー］
＞ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ００５５ｄ／＜
［ディメイション　アドベンチャー！］
＞ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ５６８５ｉ／＜
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

◆蒼衣様から頂いたイラスト
＞ｉ３１６５６—３７０９＜
『リーゼロッテ・ヴァレファール』
＝＝絵師様紹介＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝
蒼衣様は『名もなき戦線の物語』というファンタジー小説を書かれています。

人生に嫌気が差し、死にたいと思えど死ぬことに恐怖している少年は、無気力にただ毎日を生きていた。だがある日、少年は世間を騒がしている『人斬り事件』の被害者となる。死んだと思った彼だったが、気がつくと元の場所に無傷で立っていた。しかしそこは元の場所であって元の場所ではなく、得体の知れない『何か』が跋扈する『楽園』と呼ばれる世界だった。
『人斬り事件』の被害者たちと、異形の怪物たちが繰り広げる生き残るための死闘。謎に包まれた世界。そんな読めば読むほど先が気

になるダークバトルファンタジーです。キャラの心理も巧みに描かれています。興味を持たれた方は下のURLから！

〔名もなき戦線の物語〕

＞ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ９２３１ｔ／＜

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝

◆夙多史のイラスト

＞ｉ２１６８３｜２７１７＜

『シャッフルワールド！！ユニーク５０００記念イラスト』

＞ｉ２４２６７｜２７１７＜

『シャッフルワールド！！第一巻完結記念イラスト』

＞ｉ２５９０６｜２７１７＜

『シャッフルワールド！！第二巻完結記念イラスト』

＞ｉ３５７９３｜２７１７＜

『シャッフルワールド！！第三巻完結記念イラスト』

＝＝絵師様紹介＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝

自分ですね。紹介するまでもないですね。他の方に比べてなんとも言えないイラスト。トリがこんなのでなんかすんませんｏｒｚ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝

イラストコーナー（最新更新日：11月26日）（後書き）

イラストを描いていただける絵師様は随時募集しております。夙多史までメッセージください。ツイッターでもOKです。

作品紹介目的の方でも歓迎しますよ。ここで紹介して意味があるのかは知りませんけどw

イラストをいただき次第ここに展示していきたいと思います。あまり多くなると重くなるかな？　その時は別にまたページ作ります。（そんなに多くなることもないだろうけど）

ではでは～。

（公式絵の目途が未だに立たない……）

序章（前書き）

更新日は毎週火曜日と土曜日です。
（※都合により更新できない場合もあります）

序章

あなたは異世界を信じますか？

そう言われて「ＹＥＳ」と答えるやつが果たして地球上に何人いるだろう。

俺――白峰零児（しらみねれいじ）はその一人なのだが、信じているわけではない。

もう既に存在することを知っているんだ。

俺たちの世界は常にどこか別世界と繋がっている。

魔法が使える世界。科学が異常に発展した世界。はたまたなんの進歩もしていない原始的な世界。魔界や神界や精霊界って呼べそうな世界もあるだろうし、想像もできないような意味不明な世界があっても不思議はない。

とにかくそういった世界への扉が日替わり、いや、時間・分・秒替わりでカードを切るみたいにランダムに開いているんだ。

いつからか？　そんなことは知らない。宇宙が誕生してからか地球が誕生してからかなんてことは俺にはわからないからな。

神隠しってあるだろ。人がいなくなった時によく言うアレだ。全部が全部ってわけじゃないが、その一部は異世界への門をくぐっちまったと考えていい。そういう言葉が昔からあるってことは、やっぱ随分と前からなんだろうね。

まあ、こっちから行けるってことは向こうからも来れるってことになるわけで、いわゆる異世界人というやつが少なからず地球にいることになる。

なんてデンパな話だと思うだろう？　俺だって思う。地球的常識で考えれば笑い飛ばしたくなる話だ。いいぞ、笑っても。

だが、それが事実だということを俺は知っている。

なぜなら、俺の中には異世界人の血が半分ほど流れているからな。

おかげで地球人にはない能力が使えたりするわけだが、そこは置いといてもう一つぶっちゃけると、

俺は今、異世界に来ています。

ついでに言えば走ってます。そりゃもう全力で。

だって、俺の後ろから二足歩行する巨大トカゲが百匹くらい追って来てるんだぜ。

いくら俺が異能力者だとしても、流石に逃げるしかないだろ？

あれは遡ること数十分前のことだ。

「だりぃ……」

突然かかってきた携帯電話に俺は開口一番でそう呟いた。校庭の草むしりを炎天下中でやらされる小学生の気持ちで溜息を吐いてやると、携帯からおっとりとした若い女性の声が聞こえてくる。

『変わった挨拶をしますねぇ、レイちゃん。いつも通りの仕事ですから、もっとシャキッとしてください。そんなことだと彼女も見つかりませんよ』

優しいとか、柔らかいとか、そんな聞き手の心を和ませてくれるような声だった。もっとも、とうに聞き飽きてしまっている俺にそんな効果はない。

「余計なお世話だ、誘波（いざなみ）。つーか、今何時か言ってみろ」

『えーと、二時ですね』

「そう、二時だ。夜中のな。で、なんで健全なる男子高校生がそんな時間に登校せにゃならんのかを教えてほしい」

ここは学校――と言っても俺の通っている私立高校ではなく、同じ市内にある偏差値の高い公立高校だ。電話の女――誘波に強制召集された俺は、そこの中庭に『仕事』で来ているわけだが、これをだるいと言わなけりゃふざけるなと言ってやりたい。

「それとあだ名で呼ぶのやめろ。本名で呼べ本名で」
初めて聞く人がいたらどこの香港人ですかと思われる……いや、流石にないか。
『お名前なんでしたっけ？』
「白峰零児だ！　知ってんだろ！　ふざけてんなら刺し殺すぞ誘波！」
『あらあら、私はそのくらいじゃ死にませんよぅ。返り討ちです』
冗談のように聞こえるがそうじゃない。俺は自分の『能力』に自信はある方だが、こいつの場合は本当に刺しても死にそうにない。返り討ちにはあわないけどね。
まあそんなことより、俺が不満な理由は強制夜勤に加えもう一つある。
「おい白峰、いつになったら門ってのは開くんだ？」
声は上方から聞こえた。なんだかよくわからない半アーチ状のモニュメントに、癖っ毛の目立つ男子高校生が乗って胡坐をかいている。
なぜ高校生とわかるのか？　そいつの着ているブレザーが俺の知っている高校の制服だからだ。というか俺も同じ制服を纏っていたりするのだが、持ち物の点で一つだけ異なるものがある。
ビデオカメラ。そいつはモニュメントの上からアイドルのスキャンダルを追う記者みたいに忙しなくカメラを回している。変態にしか見えん。
この変態の名は桜居謙斗（さくらいけんと）。中学以来の悪友で、異世界の存在や俺らの『仕事』についてある程度理解している人間だ。俺としては理解してほしくなかったのだが、桜居謙斗という人間は異世界とかそういうものに対する興味が人十倍はある。学校で異世界研究部なる意味不明な部活を創設したくらいだ（非公認）。
「誘波、あいつは俺らとは違う普通の人間だろ。なんで同行を許可したんだ？」
『桜居ちゃんのことですかー？　う～ん、どうしても「次元の門（プレナーゲート）」

を見てみたいって私のところまでお願いしに来た熱意に負けちゃいました。まあ、レイちゃんがいれば大丈夫でしょう』

まるでなにかあったら俺が悪いみたいなことをおっとりとした口調で言う誘波。そしてまた背中が痒くなる愛称で呼ばれたが、もう今日の説得は諦めよう。面倒だし。

「おーい、白峰、まだ開かないのか？　ていうかオレの声届いてるか？」

「やかましい！　お前はまずそこから降りろ！　それと、『次元の門』ならもうとっくに開いてるよ」

俺が前方を顎でしゃくると、桜居は「なんだと！？」とドッキリを仕掛けられた芸人みたいに驚いてモニュメントから転落した。一瞬ヒヤっとしたが、「だぁあああオレの十五万がぁあああああっ！？」と破損したカメラを見て号泣しているから大丈夫だろう。

ちなみに『次元の門』というのは、その名の通り異世界に繋がる扉のことだ。どうやらこの世界は酷く不安定らしく、門は次空の歪みであるという考えが定説とされている。まあ、学者でも研究者でもない俺がその辺を考えても仕方ないけど。

問題はそれがそこにあるということだ。傍目には普段通りの景色にしか見えないから、桜居みたいな一般人がいくらカメラを回したところで見つかることはない。見つけるには、不自然や歪みを感じることのできる特殊な『勘』が必要となる。俺みたいにな。

そういった『勘』を持っている者、世界の事情を知っている者、または異世界人そのものが集まって創られたのが俺の職場――異界監査局ってわけだ。

表向きはいろんな社名を名乗っていろんな物を作っているグループ企業だが、裏の仕事（というと人聞きが悪くなるが）は主にいつどこに現れるかわからない『次元の門』の監視だ。

こちらからの行方不明者を出さないために、

あちらからの来訪者をお出迎えするために、

そして、異獣と呼ばれる怪物から人々を守るために、

俺たち異界監査官は人知れず戦っている。
で、今回はこの公立高校に門が開いたのだが――

「あー、悪い誘波。そろそろ電話切らしてもらうぞ」
『……来るようですね』
俺の声に真剣さを感じたのか、誘波のおっとり声も真剣味を帯びる。俺は後ろを振り返り、分解したカメラを必死に直そうとしている悪友に告げる。
「桜居、もう少し離れるかさっさと帰れ。俺としては後者をオススメする」
「な、なにを言うか白峰！」桜居は先生に不意に指名された生徒のように顔を上げ、「そこに異世界があるなら異界研部長として全てを観察する義務がある！　いや寧ろ今すぐ異世界へダイブしたいところだ！」
それだけはやめてくれ。俺の責任になる。
「まあ、とりあえず危なそうだったら逃げろよ」
「優秀な異界監査官様がいるんだ。宝船に乗ったつもりで見物してるさ」
宝なんてないだろうがな、と思いつつ俺は前に向き直った。
花壇や池が並ぶどこにでもあるような中庭だ。昼ならば遠くに桜並木も望めるようだが、学校の制服が夏用に衣替えを始めるこの時期まで頑張って咲いている桜はない。
そんな俺たち以外誰もいない物静かな夜の学校の風景が、唐突にぐにゃりと歪んだ。
なにかが『次元の門』を通ってこちらへ来る前触れだ。
『確認です、レイちゃん』と携帯からの声。『〈言意の調べ〉は持ちましたか？』
「ああ」
俺はズボンのポケットから緑色の透明な玉がついたペンダントを取り出し、それを首から提げた。製品名〈言意の調べ〉。昔どっか

の魔科学者が発明したアイテムで、二十二世紀のコンニャクみたいに言葉の通じない相手と意思疎通するための物だ。食えんけど。

『それとハンカチは持ちましたか？　ティッシュは？』

待て、それはなんの確認だ？

『お財布もちゃんとありますよね？　お弁当は忘れてませんか？』

「お前は俺のなんなんだ？」

『きゃ、レイちゃんってば恥ずかしいこと訊かないでください♪』

「ホントになんなんだ！？」

『冗談ですよー。レイちゃんの緊張を解いてあげたのです』

電話の向こうでクスクス笑う声が憎い。

『では、最後にもう一つ確認しますね。これから現れるものが？人？ならば対話。そうでなければ、わかってますね？』

当然。充分に承知している。

「そうでなければ、排除だ」

言うと同時に俺は通話を切り、携帯をブレザーのポケットに仕舞う。どうやら、誘波のくだらない冗談に付き合っているうちにお客様がいらっしゃったみたいだ。

「おお、おお、おおおおおっ！」

今にも興奮という燃料でロケットみたい飛んでいきそうな桜居は放っておいて、俺は歪んだ空間から現れたものをじっと見据える。

そいつは水牛のような角を生やした二足歩行するトカゲだった。人間と変わらない大きさに堅そうな黒い鱗と夜闇に鈍く光る赤い両眼。いかにもモンスターですよと言わんばかりの容姿だ。

だがここで軽率な判断をするのは素人のすることだ。角トカゲさんだって、あんな姿をしていてもしっかりとした知能を持っていて友好的かもしれない。二本足で立ってるし。異世界を相手にするのだから？人？という定義に姿形は関係な――

キシャァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！

角トカゲが夜空に向かって咆哮したかと思えば、チーターもビックリな瞬発力で俺に飛びかかってきた。意思疎通不可。うん、これはつまりアレだ。

「異世界の獣……異獣で決定だな」

俺はさっと体を左に開いて角トカゲの突進をかわした。そのまま桜居を襲わせるわけにはいかないので、すれ違う瞬間に側頭蹴りを放つ。

真横からの衝撃に角トカゲは細い植木と激突する。メキっと変な音がした植木は衝撃に耐えられずポッキリと折れてしまった。他校の物を破壊してしまったのは申し訳なく思う。でもまあそこは誘波が後でなんとかするはずだ。

「キャー白峰くんカッコイイ！」

「黙れそこの変態！」

気色悪い声でエールを送る桜居はいつの間にかモニュメントの上に戻っていた。お前そこ好きだな。いっそのこと転校して住んだらどうだ？

角トカゲが起き上がる。今の蹴りは全然効いてないようで残念だ。

「白峰、そいつ倒したらオレがお持ち帰りしてもいいか誘波さんに訊いてくれないか？」

「ダメに決まってんだろ！　俺はこのトカゲを倒すためにここにいるんじゃねえよ。黙って見てろ」

俺は右手を軽く前に伸ばす。と、右掌辺りの空間が陽炎のように揺らめいた。

次の瞬間、なにもなかったはずのそこに二メートルくらいの細長い物体が出現する。殺生を目的としない直線棒状の武器――棍だ。

「ひゅー♪　〈魔武具生成〉か。久し振りに見たぜ。なあ、今度オレにも教えてくれよ」

ウザったい声が降ってくるが黙殺する。これは俺を構成する要素にとある異世界人の血が含まれているから使える能力であり、魔力

も持たない一般人たる桜居が全裸で逆立ちしたところでやれはしない。てか、お前には何度も説明したはずだろ。

俺は再び襲いかかってきた角トカゲの噛みつきを、体を捻って避け、そのまま遠心力を乗せた棍を豪快にスイングする。

ドガッ！　と鈍い音を立てて角トカゲは面白いくらい吹き飛んだ。見た目よりも重量はないらしい。好都合だ。

棍を刺突に構える。石タイルの地面を勢いよく蹴り、また起き上がろうとする異獣との距離を数歩で縮める。

「さて、お帰り願おうか」

そして、疾駆の勢いを殺さないまま角トカゲの喉下に棍を突き刺した。

口から変な液体を吐き出して空中を砲弾のように飛んでいく角トカゲ。その行き先には歪んだ空間――『次元の門』が大口を開けて待っている。

「迷い込んだ異獣はなるべく殺さずに元の世界に戻してやる。それも異界監査官の仕事だ。キャッチ&リリースは釣り人だけのマナーじゃねえんだよ、桜居」

「いやはや、口は悪いくせに真面目だねえ、白峰は。お前みたいなんがいるから地球には魔法が発展しなかったんだ」

「いやそれ関係ねえだ――！？」

桜居のアホのせいで不覚にも余所見してしまった俺の体に、なんか粘々した生温かいものが巻きついた。一瞬なんなのかわからなかったがすぐに気づく。

――しまった！　角トカゲの舌か！

カメレオンみたいに伸びた舌でぐるぐる巻きされる俺。それだけなら断ち切ればいいが、当の舌の持ち主は現在進行形でぶっ飛び中。自然と俺も宙に浮いた。

「は？　いや、ちょっと待て……」

このまま引っ張られるのは非常に不味くないか？　行き先は当然『次元の門』だ。というか、角トカゲ自体はもう門の向こうにいて

姿が見えない。どんだけ伸びているんだこの舌は――ってくだらないこと考えてる場合じゃない！

まあ結論として、打開策なんて考えている暇はなかった。

身動きの取れない俺がなすすべなく異世界へと引きずり込まれてしまうのは、この時には既に決定事項となっていたのだから。

序章（後書き）

至らぬところが多い初投稿作品です。「続き早く！」とかの一言でもいいので感想書いてくれる人は神様として崇めますｗ
評価や質問、アドバイスとかも是非よろしくお願いします（一人称で書くのはこの作品が初です）。

それとキャラクター人気投票始めましたので、読み進めて好きなキャラができましたら是非お願いします♪

一章　滅んだ世界の魔帝様（1）

で、現在の俺、逃走中。

「だぁあああああああああああ畜生ぉおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

予期せず次元旅行してしまったことも不運であるが、到着した先が怪物の群れの中だったことも非常に不運だろう。一体なんの冗談だと言ってやりたい。誰にって？　俺の運命をこんな風に定めたやつだ。もしいるなら出て来い。とりあえず一発殴ってやる。

俺が走っているのは森の中だった。公立高校にあった植木が百本集まっても足りないような巨木が生え並び、他の植物も伸びたい放題で走りづらいことこの上ない。さらに夜なのか、辺りは真っ暗で視界もよろしくないときた。

後ろからは血色に輝く不気味な目が百鬼夜行並みの数で俺を追っている。一度戦ったからわかるが、やつら一体一体はそれほど強くない。はっきり言って雑魚だ。律儀に一匹ずつかかってくるのなら相手になってやらんこともない。

でもそうじゃないだろ。俺の力は多数相手には向かない。いくら相手が最弱モンスターであっても、百まで集まると逃げる以外の選択肢は存在しなくなる。

俺は右手に握った棍を見る。

俺の能力〈魔武具生成〉は、練り上げた魔力を右手に集めて武具の形に具現化するものだ。が、なんでもできるわけじゃない。俺の平凡な頭でイメージできるものに限りだ。加えて一度に一つの武器しか作れない。右手を離れると構成している魔力が分解して消えちまうからな。そんなわけで、バズーカとかミサイルで一掃したくても、遠距離系の武器を生成したところで全く役割を果たさないガラクタになる。

チラリと後ろを振り返ってみるが、数は減るどころかネズミみた

いに増加の一途を辿っている。
「畜生！　あいつらどんだけ飢えてんだよ！　そんなに食糧不足なのかこの世界は！？」
俺は再び前方を向く。と、横になにかの影が並んだ。
「のあっ！？」
ギョロリとしたまん丸の目が隣にあった。それは平たい円盤型の生物のもので、その生物は上下に突き出したヒレみたいなもので空中を泳いでいる。
「ま、マンボウ？」
空中に浮かぶマンボウが俺に並走、いや、並泳している。まあ、よく見ればマンボウとも言い難いが、この未確認飛行物体をぶん殴る前に確認しなければならない。
「やあ、俺の言葉わかりますか？」
気さくな感じで声をかけた俺にマンボウはなにも返さない。代わりに円らな目をギョロリと俺に向け――口から火を噴いた。
迷わず棍で殴ったね。そりゃもう悲鳴上げるくらいバチコーンって感じに。
「ガンボウゥ～」
「鳴き声それっ！？」
せめて『マンボウ』って鳴けよ！　なにを願っちゃったんだよ！
願い虚しく（？）地面に墜落したマンボウは後ろに流れて角トカゲの餌食となった。
そこで俺は気づく。
マンボウは一匹ではなかった。無数の平べったい魚影が森の中を遊泳している。わかっているさ。狙いは俺だろ。
そう考えて全てを敵に回す覚悟を決めたのだが、どうもこの世界のトカゲとマンボウは食物連鎖の上下が決まってないらしい。互いに食い合いを始めやがった。
トカゲとマンボウの熾烈な争いは見ようによっては滑稽だが、これがけっこうグロかったりする。血肉や臓器が飛び散って――これ

以上はグロすぎて表現したくない。
そのまま共倒れしてくれればいいものを、両軍ともこちらに攻め入ることを忘れていないようだ。両者で争いつつも俺を追って来ている。
「だーもう、しつこいな！」
異界監査官として体力には自信のある俺でも流石に息が上がってきた。どこか隠れる場所はないかと周囲の模索を開始する俺だったが、そこで予想外なことが起こった。

俺を生命活動の糧にしようとしていた異獣たちが、急に方向転換して逃げるように去って行ったのだ。

「なんだ？」
森の暗闇に消えていく異獣たちを呆然と眺める俺。状況はよくわからないがとにかく助かったらしい。この辺にはアンチモンスターフィールドでも展開しているのだろうか。
しかし安心してはいられない。一難が去れば次なる問題が発生するわけで、さて――
「ここはどこかな？」
帰り道である『次元の門』の場所を遁走しながら覚えていられるほど俺の記憶力はよい方じゃない。門が持つ独特の違和感を感じないから、もうとっくに閉ざされているのかもしれない。困った。
「携帯は……まあ、圏外だよなぁ」
異世界ナビ、なんて機能があったらいいのにな。
「朝を待つか。……朝、あるんだろうか、この世界」
とにかく今は動きたくない。ちょっと休ませてくれ。異世界人の血のおかげで常人より身体能力が高い俺でも、あんなに走れば息だって切れる。
俺は手ごろな巨木に凭れかかって座り、何気なく天を仰いだ。星一つない暗天。月が片手の指の数ほどあるように見えるけど驚きは

しない。だって異世界だし。
と、俺は視界の端に巨大な影を見つけた。
生物ではない。恐らく人工的に作られた建造物だ。シルエットだけでも圧倒的な存在感を醸し出しているそれは――
「城？」
だった。

一章　滅んだ世界の魔帝様（2）

よせばいいのに俺は怪しさ満点の城へと歩を進めた。だって城だぜ。？人？がいるかもしれないじゃないか。少なくとも森の中で野宿するよりはマシだ。

城門はご丁寧に観音開きだったので難なく侵入することができた。不用心すぎやしないかという疑問はこの際横に置いておく。

それにしてもでかい城だな。中世ヨーロッパ風とでも言うべきか、ノイシュヴァンシュタイン城みたいなその辺のゲームに出てきてもおかしくない造形だ。吸血鬼でも住んでいそうな寂れた雰囲気がたまらない。……ホントに？人？はいるのかね？

建物は古いけど整備は行き届いているっぽいから大丈夫だろう、そう考えて俺が一歩踏み出した時だった。

「――ッ！？」

異様に高まる魔力を感じ取る。俺はすぐさまその場から飛び退いた。

刹那、さっきまで立っていた地面から黒い炎が間欠泉のように噴き上がった。圧倒的な熱量。直撃していたら火傷するとかそんなレベルじゃない。そこにいたという痕跡すら消し去ってしまいそうだ。

異獣という可能性はない。あの天高く立ち昇る黒炎には意思を感じる。つまり、これは？人？の仕業だ。ちゃんといるんじゃないか。

だが、

「いきなり攻撃してくるとは、礼儀の『れ』の字もわかってねえな」

不法侵入している分際でなにを言うか、というツッコミはなしでお願いします。

俺は右手に魔力を集中させ、今の俺が一番扱い慣れている武器をイメージする。

〈魔武具生成〉――日本刀。

魔力が刀の形に構築されたのと同時、黒炎の間欠泉が打ち上げ花

火みたいに爆散した。
俺は襲撃者の次の攻撃に備えようとし――瞠目する。
弾けた黒炎の中から、一人の女の子が現れたからだ。
吸血鬼とも魔女とも取れるコスプレ紛いの黒衣が、目測百四十五センチくらいの体を包んでいる。腰より長い金髪ストレートに小振りで整った顔立ち。肌の色は漂白剤でも使ってるのかと思うほど白い。
どこからどう見ても人間の姿だ。それも街を歩けば誰もが振り向くような美少女……かわえぇ。
――ハッ！
困ったことに俺は一瞬だけ見惚れてしまっていたようだ。襲撃者はこいつだ。しっかりしろ俺。
「よう、誰だか知らねえが随分な挨拶だな」
声をかけた俺を、少女はなにやら自信に満ちた目でまっすぐ見据えてくる。瞳はルビーのように濃い赤色だった。
少女は警戒する俺の傍まで歩み寄ると、形のいい唇を動かし、
「お前、わたしと戦いなさい」
どこの戦闘民族だと言わんばかりの台詞を吐きやがった。
「……はい？」
「殺し合いよ、殺し合い。お前もそのつもりでここまで来たんでしょ？　今までのやつらより骨がありそうだから、？魔帝？で最強のわたし自ら相手してあげる」
こいつは可愛い顔してなんて物騒なことを言うんだ。殺し合い？　冗談じゃない。こちとらまずは情報収集がしたいわけで、異世界に飛ばされて最初に出会った？人？と争いたくないんだ。……いや待て、異世界？　あー、そうか。そういうことか。
「この世界は最初に戦いをするのが礼儀なんだな」
「はぁ？　なに言ってんのお前、馬鹿？」
オーケーオーケー、違ったけどなぜか安心した。
「えっと、勝手に城に入ったことは謝る。だからまずは話を聞いて

くれ」
「話し合い？　わたしを殺しに来た人間が面白いこと言うわね。でも残念、今更お前たちと話したところで、わたしは退屈なだけなのよっ！」
「殺しにって、一体誰と勘違いして――ッ！？」
俺は少女の魔力が爆発的に高まったのを感じた。その魔力が上空に集中している。見上げると、幾何学的な模様で描かれた円陣が黒い光を放っていた。
轟！　とその円陣から一条の黒炎柱が俺に向かって降りかかる。
「ちょ、ま、あ、危ねえだろっ！」
咄嗟に横に跳んでなければウェルダンを通り越して灰になっていただろうね。
「へえ、アレをかわすんだ」
黒衣の少女は興味のあるオモチャを見つけた子供みたいな笑顔を咲かせて右掌に魔法陣を展開。さっきよりも小さい魔法陣。その照準は当然ながら俺。
「あははっ！　お前凄くいい。もっともっとわたしを楽しませなさい！」
陣からスイカくらいの大きさの黒炎弾が無数に射出される。俺は魔力で構成された日本刀でそれらを捌きながら思った。こいつ、ただの戦闘狂だ。
そういうやつらを黙らせる方法は一つ。
「やるしかねえのかよ」
こっちが力で捻じ伏せるしかないだろう。だが、そう簡単にはいきそうにない。あの女、感じる魔力だけでも誘波すら越えるんじゃないかってくらいの化物級だ。
普通に戦えば俺の方が先に消耗するだろうな。せめて間合いに入らないと戦いにすらならん。そういうのは一方的な虐殺って言うんだ。
「逃げてばかりいないで反撃してきてよ。つまらないじゃない」

「そうかい。じゃ、お言葉に甘えまして」
単調な炎弾の攻撃に慣れてきた俺は隙を見て跳躍した。お遊びのつもりでいる少女に怯む様子は全くない。さらに射出する黒炎弾の数を増やして対抗してきた。
「無駄だっ！」
俺は疾走しながら必要最低限の炎弾だけを刀で薙払う。これが能力で作られた魔力の刀でなければとっくの昔に溶けてるだろう。
ついに俺は少女を間合いに捉えた。すかさず刀を横薙ぎに一閃する。もちろん、直前で峰打ちに変更することは忘れていないさ。
胴を強打してそのまま気絶――してくれると助かるのに、ピョンとかいう効果音がつきそうなジャンプでかわされた。さらに苛立たしいことに、マンガみたいに刀の上に乗ってやがる。ていうか、すげー軽いなこの女。
俺は刀を放した。その瞬間に刀は霧散して消える。構成していた魔力が分散したんだ。当然上に乗っていた少女も落下するのだが簡単に着地しやがったコノヤロウ！
突然消失した武器に少女が驚いている間に、俺は右手に棍を生成して斜め上から叩きつけた。が、浮遊する綿毛のごとくヒョイっと避けられる。
「ふふん、なるほど、武器が作れるのね。今のはなかなか面白かったわ」
蟻を潰すことが趣味の子供みたいな笑みを浮かべると、少女は空振って地面を抉った棍を踏み台に足から俺に跳びかかってきた。
「ぐがっ！？」
衝撃と共に視界が引っ繰り返る。手放してしまった棍が空気に溶ける。気づけば、俺の上に金髪少女が馬乗りになっていた。微妙にエロい。
「さぁて、こっからどうやって遊ぼうかしら？　指の先からじっくりと炙ってかろうじて死なない程度にした後に天高く打ち上げて肉の雨を降らすとかどう？」

怖いことを笑顔で言って立てた人差し指にシュボっと黒い炎をつける少女。
「いやぁ、まいったね。ははは」
俺は思わず笑った。いや別に気が狂ったわけじゃない。この一見すると絶体絶命な状況は、俺にとっては寧ろ好都合だからだ。
「いいことを教えてやる。俺は確かに魔力で武器を作ることができるが、その魔力を自分で生み出すことはできないんだ」
「？」と少女は怪訝そうに小首を傾げる。
「じゃあ俺の力の源はどこから来るのか？　簡単な話だ。『吸力（ドレイン）』っつってな。自分で作れないなら他から奪えばいい」
「なっ！？」
少女の顔色が変わる。気づいたようだ。そう、地球人が地熱や太陽光を利用するように、俺は他人のエネルギーを吸収し、自分の魔力に変換して貯蓄することができる。
「こうやってな！」
俺は俺に馬乗りしている少女へと左手を伸ばす。咄嗟に少女は飛び退こうとするが、残念、もう遅い。俺の左手は確実に彼女を捉え――
――発展途上的柔らかな膨らみを確認してしまった。
「……あっ」
上を見る。少女は目を大きく見開いてわなわなしていた。かあぁ、と白磁のように白かった顔がトマトみたいな色に染まっていく。俺は冷や汗が尋常じゃない。
「い、いや違うんだこれは事故っていうか故意ではあるんだがわざとではなくそこに触れるつもりは毛頭なゴフゥッ！？」
容赦のないパンチで俺の顔面を変形させた後、少女は自転車に驚いた野良猫みたいに飛び退いた。俺も顔を手で押さえて立ち上がる。
「ホント、今のは悪かった。……ったく、異世界まで来てなにやってんだろうな、俺は」
はは、と苦笑しながら謝罪する。と、少女はなぜかピクリと反応

し、神妙な顔をして俺に近づいてきた。そして、恐る恐るといった様子で口を開く。

「ね、ねえ、お前、今『異世界』って言った？」

俺を見上げる彼女は割と真剣な表情だった。だから俺も素直に答えることにする。

「ああ、言ったよ。俺はここことは違う世界から来たんだ。俺の意思じゃないけどな」

「へえ、そう、やっぱりね。なんか感じが違うなぁって思ってたのよ！」

なぜかな？　彼女の赤い目が本当のルビーみたいにキラキラと輝いているように見えるのは……。

疑いの眼差しではない。寧ろ裏切ったら殺されても文句言えないような信じきった瞳だった。

まあ、なんにしてもわかってくれたのならば話は早い。

「そんなわけで、俺はここに迷い込んだだけで別にお前と戦いに来たわけじゃないんだ。なんか外には変な生物がいるから今日だけでもここに――」

「そんなことはどうでもいいの」

俺のここぞとばかりの懇願を見事なまでに切り捨てやがった。彼女は踵を返して数歩距離を置くと、黒衣を翻して俺に振り返り――

「お前を歓迎する」

なぜか自信ありげな笑みを浮かべてそう言った。

一章　滅んだ世界の魔帝様（3）

とにかく、俺は彼女の歓迎を受けることにした。意味不明なことで襲ってきた危ないやつかもしれんが、ここは異世界だ。情報を得るためには躊躇うわけにはいかない。

「お前、名前ってある？」

無駄に広い城の庭を一番でかい建物に向かって歩いていると、隣を歩く小柄な金髪黒ずくめ美少女からなんとも失礼な質問が飛んできた。

「あるに決まってんだろ。白峰零児。零児で構わん」

「ふぅん、レージね。わたしはリーゼロッテ。？魔帝？リーゼロッテ・ヴァレファール」

リーゼロッテ。確かそんな名前の小惑星があったような気がする。で、？魔帝？って？

「この世界『イヴリア』を統べる者よ」リーゼロッテは誇らしげに胸を張り、「つまりわたしは？王？で最強なの。だから敬意を払ってリーゼロッテ様と呼びなさい」

「リーゼでいいか？」

「話聞いてた？　わたしは……いや待って、うん、寧ろそれがいいわね。そんな風に呼ばれるのは新鮮だから」

リーゼは一瞬どことなく寂しげな表情になった。俺を歓迎するというのは、異世界の話を聞きたいからしいのだが、この魔王様（？）には他に話し相手がいないのか？　まさか、この城に一人きりで住んでいるのだろうか？　俺は周囲の華やかさの欠片もない庭を見回しつつ、その疑問を口にしたところ――

「人間はいないわ」

という答えが返ってきた。『は』ということは人外のなにかはいるんだろう。頼むからトカゲやマンボウみたいなのだけはやめてもらいたい。

じゃあなにがいるんだ、と訊く前に、リーゼはなぜか俺から一歩離れた。
「あ、そこ危ないわよ」
「へ？　危ないってあぶはっ！？」
突然、何者かの飛び膝蹴りが俺の痛みの引いてきた顔に直撃した。俺、吹っ飛ぶ。この世界の住人は余程奇襲ってやつが好きらしいな！
「誰だっ！？」
なんとか受け身を取って起き上がる。鼻血が止まらん。誰かティッシュを貸してくれ。
「こちらのセリフです」
抑揚のない声でそう言ったのは、リーゼの横に立つ女だった。見た目の年齢は俺より少し年上くらいかな。髪はショートヘアで顔立ちは嘘みたいに端整。黒をベースに白のフリルをこれでもかってくらいつけたメイド服っぽいドレスを纏っている。ゴシックロリータっていうんだっけ？
「なんだ、ちゃんと人間がいるじゃ――」
「誰であろうと、マスターに近づくゴミ虫は排除安定です」
ゴスロリメイドがスラリとした細腕を伸ばしたかと思うと、腕の上下左右がパカリと開いた。その奥からは電子機器の内部みたいな構造が見え、変な駆動音が聞こえた。
「ああ、レランジェは人間じゃないわよ。？魔工機械？っていう人形で、？魔帝？で最強のわたしの僕（しもべ）よ」
リーゼが無駄に誇示するように説明する。なるほどレランジェっていう機体名のロボットか――って納得している暇は俺にはなかった。
バチバチィ！　とスタンガンみたいな音がレランジェの腕から鳴り、
四方に開いた部分に走った青白いプラズマがそのまま彼女の掌に集中し、
まるで電撃波みたいな光線が俺に向かって放射されどわぁあああ

あああああっ！？
「チ、外しましたか」
「心底残念そうに舌打ちしてんじゃねえよ！　マジで死ぬかと思ったじゃねえかっ！」
「死ねばよかったのです。死亡安定です」
「安定じゃねえ！？」
なんだこいつ。リーゼよりやばい。ロボットなだけに侵入者撃退のみをプログラムされてるのだろうか。
「次は外しません。迅速なる排除、安定です」
第二撃の準備にかかるレランジェ。落ち着け俺。さっきはかわせた。今度もかわせる。
「そこまでよ、レランジェ」
止めたのはリーゼだ。すると、キュウゥゥンと気の抜ける音を立ててレランジェの腕が元の人間っぽいものに戻った。
「はい、マスター」
レランジェは冷めたグレーの瞳をリーゼに向ける。ふう、どうやら命拾いしたらしい。
「レージを壊すのは後にしなさい。こいつは異世界人なのよ。だから今は大切なお客様なの」
「殺す気満々！？」
「冗談よ。まだ殺さないわ」
「だから殺す気満々じゃねえかっ！？」
ホントにこいつについて行くべきか再度検討する必要がありそうだ。
「そういうわけだからレランジェ、お持て成しの用意をしてちょうだい」
「了解です、マスター」
「……冗談だと信じていいんだな？」
最悪の事態になれば、俺だって簡単にやられる気はない。
「ふふ、レージがいれば当分は退屈しそうにないわね」

微笑みながらそう言って、リーゼはさっさと歩き出した。
リーゼの揺れる金髪を眺めながら逡巡している俺に、無感情ゴスロリメイド兵器が深々と頭を下げる。
「ご案内します。お食事をご用意しますので、それまでどうぞごゆっくりとお寛ぎくださいゴミ虫様」
語尾が失礼に聞こえたのは〈言意の調べ〉が不調なのだと信じよう。
それにしてもメシは助かる。激しく運動したせいか腹ペコだったんだ。
仕方ないな、と呟いて俺はレランジェの後に続いた。元の世界に戻るためにも、リーゼたちと共にいるのが得策だろう。

一章　滅んだ世界の魔帝様（4）

なんとも複雑な城だった。迷宮と言ってもいい。申し訳程度に置かれている松明の炎だけで薄暗く、石造りで冷たい感じのする内部にはどこに繋がるかわからない通路がそこかしこにあった。最悪なことに、トカゲやマンボウの上位種らしき異獣まで徘徊してやがる。……ＲＰＧをリアルプレイしている気分だ。

俺たちは螺旋階段を上に上にと登っていた。道中、俺はただついていくのもアレなので、二人から可能な限りこの世界の情報を聞き出すことにした。

「あなたと話すのは虫唾が走りますがお客様なのでは仕方ありません」

などと言っていたレランジェだが説明はナビゲーターのように丁寧だった。

「マスターのお父上――アルゴス・ヴァレファール様がイヴリアを統一されたのは今から百三十二年前のことです。しかし、アルゴス様には魔力はあっても支配者としての才はなく、マスターが出生される頃には既に世界は滅んでいました」

まさに魔王だな。勇者は現れなかったのだろうか。

「よって、マスターは？終わった？世界でこれまで生きてこられたのです。娯楽といえば魔獣狩りか――」

納得。そんなことしているから森の異獣が城に怯えて逃げ出したのだろう。

「――僅かに生き残っている人間が時々？魔帝討伐？を掲げて挑んでくる程度です」

「待て、それは娯楽なのか？」

つまるところ俺はそれと間違えられたってわけか。

「いえ、今となっては鬱陶しいだけで不安定ですね」

「お前ら、なんか悪いことしてんじゃねえのか？」

「してないわよ。なんにも」
と前を歩くリーゼが素っ気なく言い、
「我々はただこの城で静かに暮らす安定です」
機械的な声でレランジェが続ける。
「マスターが命を狙われている理由についてお尋ねているのでしたら、それは人間どもの勝手な妄想とお答えします。彼らはマスターを殺せば世界が救われると思っているのです。それは全く無意味なこと。不安定すぎます」
「ただ命を狙われてるだけ、か。気の毒だな」俺はリーゼを見、「でも、リーゼの親父はそれほどのことをやらかしたんだろ。そいつは今どうしてる？」
「死んだわよ。十年前に」
あっさりとリーゼは答えた。そうか、悪いことを聞いたかもしれない。
「食中毒で」
「格好悪いな魔王！？」
「あの時、このレランジェが腐った肉をお出ししなければ……」
「そして犯人はお前かっ！？」
レランジェは涙を拭う仕草で悔恨の念を表わそうとしているようだが、無表情が完璧に潰していた。
「いいのかよリーゼ。ここにお前の親父の敵がいるんだぞ」
「ん？　あー、いいのいいの。世界をこんなにつまらなくしたクズなんて死んで正解よ。レランジェが殺らなかったらわたしが殺ってたわ」
リーゼは確かに魔王、もとい、魔帝なんだなぁと俺は思った。俺の親は二人とも健在で、母親に至っては俺に力の使い方と戦い方を教えてくれた師匠と呼べる存在だ。だから死んで正解なんて理性が飛んでも言えそうにない。
そういえば、俺がいなくなったことで元の世界はどうなっているだろう。そんなことを考えていると、いつの間にか城内の雰囲気が

ガラリと変わっていた。
まず、明るい。魔法のライトかな。電球とは違う光の球が壁に多数設置されている。中の造りは豪奢だが殺風景であまり変化はないけど、異獣（この世界では魔獣と呼ぶらしい）の代わりにレランジェと同じようなゴスロリメイドが忙しなく動いていた。
彼女ら全員が魔工機械とかいう人形なのだろう。容姿はバラバラで、レランジェと違って彼女らの瞳に意思を感じない。本当に仕事をするだけの人形のようだ。
しかしゴスロリメイドしか見当たらないのは誰の趣味だ？　ああ、リーゼの親父か。
「ここです」
頑丈そうな鉄扉を開いて通された部屋は、謁見室ってやつだった。高い天井にあるシャンデリアのような器具に例の光球が環状に並べられて爛々と輝いている。疑問は、謁見室にしては似つかわしくない木製の長テーブルが中心に置いてあることか。
「謁見に来るやつなんていないからね。この部屋は食事する場所にしてるの」
「なんでまたこんなところで？」
「厨房に近いから」
とんでもなく単純な理由だった。
「レランジェはお食事の用意をしてきます」レランジェは俺を向き、「マスターになにかあれば縊り殺しますのでお気をつけてくださいゴミクズ様」
おかしいな？　また〈言意の調べ〉が不調を……。帰ったら修理に出さねば。
レランジェが扉の向こうに消え、俺はリーゼと二人きりになった。別にそれでなにかあるわけでもない。リーゼは上座の一番豪華な椅子に座り、俺もそれに倣って彼女の近くの椅子に腰を下ろす。ふわっとした、なんとも材質の良い椅子だった。
「さてと、まずはレージの世界ってのを教えてもらおうかしら」

リーゼはふんぞり返って腕を組む。相変わらず自信満々なご様子の魔王様、もとい魔帝様だが、その目は無邪気な子供のような光を宿している。俺は軽く息を吐く。

「俺の世界は地球って言ってな。ここみたいに滅んでないし、人間が多い」

「それってどのくらい多いわけ？」

「自然が悲鳴を上げるくらい」

俺の皮肉表現が通じなかったのか首を傾げるリーゼ。とりあえず世界人口（今は七十億くらいだっけ）を示すと、「そんなに！？」と驚いて瞳のカラット数を増加させた。

「他にはこんな城なんか比べ物にならんくらい高い建物とかあってだな。街に出れば目が回るくらいいろんな店もある。そうそう、月は一つで、魔獣とかいう化物はいない」

もっとも、地球のライオンやらヒグマやらが異世界へ行けば異獣扱いだろうけど。

「ふんふん、それで？」

「うーん、あとはまあ、俺がこっちに来たみたいに、いろんな異世界と毎日のように繋がってるんだ。一般には知られちゃいないけどな」

「へえ、それで？」

「あー、そうだな、えーと、俺は異界監査官っていう仕事をしてるんだ。異界監査官ってのは異世界と繋がる門――『次元の門』って言うんだが、それを監視する役割を担っている」

「それで？」

「ぐ……」

それでそれでと連発するリーゼに言葉が詰まる。リーゼの方が俺の世界に来てるわけじゃないから、監査官の対話マニュアルは通じないんだ。

仕方ないので異界監査官のことからまた世界情景に戻し、そこから俺の私生活や学生生活を織り込みつつ話した。そのほとんどが大

まかな感じだったが、リーゼは？自信満々な無邪気な子供？から？自信満々？だけを消したように身を乗り出して聞いていた。

そして――

「行きたいっ！」

リーゼの突然の叫びと、レランジェが料理を台車で運んできたのはほぼ同時だった。

「お出かけ安定ですか、マスター？」

無表情で小首を傾げるレランジェ。お出かけ安定ってなんだよ。

「うん、ちょっとレージの世界まで」

「待て待て」俺はすかさず止めた。「普通に旅行気分で世界渡ろうとしてますけど無理ですから。帰れるなら俺とっくに帰ってるから」

え？　そうなの？　といった様子でリーゼは目を瞬かせる。

「じゃあ、どうやったら行けるの？」

「『次元の門』が開くのを待つしかねえな」

「いつ開くの？」

「知らん」

ぷくぅと不機嫌そうに頬を膨らますリーゼ。可愛いな。でもそんな顔しても無理なもんは無理だ。

「それにな、たとえ門が開いたとしても、俺の世界に行けるという保証はねえぞ」

「それはそれで妥協するわ。少なくともここにいるよりは面白そうだから」

段々とわかってきた。リーゼは自分が面白いと思ったことにはなんでもいいから素直に突っ込んでいくようだ。

「失礼します」

レランジェが機械的に料理を並べていく。主食はパンらしき墨色の物体。前菜は怪しげな形状をした葉っぱのサラダに青色のスープ。メインディッシュは材料不明の骨付きステーキ。……なんだろう、見てるだけで腹いっぱいになってきた。

「腐っていたら謝りません」

「そこは謝れ」
　こいつはお客様に対して失礼すぎやしないか。ホントに腐ってないだろうな？
「食べないの？　レランジェの料理はおいしいわよ」
　リーゼは平気な顔して危色のスープを口に運んでいる。
「そうだよな。流石に主も食うような物になにかを仕込むようなことは毒針発見っ！！」
「チッ」
「聞こえたぞ！　今舌打ちが聞こえたぞ！」
「舌打ち安定です」
「なにがっ！？」
　ダメだ。リーゼはともかくこの人形は本気で俺を殺る気でいやがる。
「レランジェ」
　リーゼが食事の手を止め、鋭い目つきで従者を睨む。そうだ、ビシッと言ってやれ。
「レージを壊していいのはわたしだけよ。手を出したら許さないから」
　おや？　なんか思ってたのと違う……。
「……すみません、マスター」
　レランジェは、リーゼに対しては素直に反省するらしい。
「壊さない程度なら安定ですか？」
「あー、それならいいわ」
「よくねぇえええええっ！？」
　絶叫する俺の気持ちが伝わったかどうか知らんが、すぐにレランジェは料理を取り換えてくれた。うん、今度は大丈夫そうだ。
「ところでマスター、先程の話ですが」
　レランジェは改まった様子で主人に話しかける。それを横目で見ながら俺はスープを一口啜った。不味くはないが不思議な味だった。
「このクズ虫……失礼、ゴミカス様の世界へ行くことにレランジェ

は反対安定です」
「喧嘩売ってんのか貴様？」
認めよう、〈言意の調べ〉は絶好調だ。俺の視線とレランジェの視線が衝突して火花を散らす。
リーゼは不機嫌そうにしながらも落ち着いた口調で言う。
「理由を聞くわ」
「マスターはイヴリアの？魔帝？です」レランジェは俺から視線を外し、「なのでこの城を離れるのは不安定です。それと、マスターの定期的な魔力供給がなければ我々魔工機械は停止安定になります」
その話が本当なら、リーゼが城からいなくなることは、レランジェたち魔工機械にとって『死』を意味する。彼女は停止することに恐怖や不安があるのかもしれない。
だが、リーゼは呆れ顔で肩を竦める。
「理由にならないわね。わたしが？魔帝？で最強なのはいいとしても、正直この城はどうでもいいわ。魔工機械だって、レランジェ以外は自分の意思を持たないただの道具。止まったところでなんか問題ある？」
「城の管理ができなくなります」
「だからこんな城なんてどうでもいいんだって！」
リーゼは骨付きステーキを噛み千切ると、燃えるような赤い瞳を墨色パンと格闘している俺に向けてくる。
「レージは、元の世界に戻りたい？」
「ああ、全力で戻りたいな」
「だったら、このわたしが手伝ってあげるわ。その代わり、その時はわたしも連れて行ってもらうから」
俺にとっては願ったり叶ったりなことだが、さてどうしたものか。リーゼが俺の世界に来ること自体に賛成する気も反対する気もない。傍観を決め込むとしよう。
「マスター。このレランジェはマスターの身を案じて――」
と、レランジェが言葉を止め、扉の方向を睨むように見た。その

無表情に若干の険しさが浮かぶ。少し遅れたが、俺もそれに気づいた。

「――侵入者です」

瞬間、下層の方から発破みたいな破砕音が轟いた。

一章　滅んだ世界の魔帝様（5）

だからといって、俺たちがこの場を動くことはなかった。
リーゼはガン無視して食事を続け、レランジェは警戒こそすれ主の傍を離れるつもりはないらしい。俺は侵入者撃退に向かう理由がない。
侵入者は、たぶんレランジェが言ってた？魔帝討伐？を掲げるこの世界の勇者。
応戦しているのは、下にいた魔獣や意思を持たない機械人形たちだ。頑張っているようだが、侵入者は甘くなかった。
爆発音が徐々に近づいてくる。時折、低い男の叫び声とかも聞こえ始めた。
そいつ――否、そいつらは、なかなかのスピードでラスダンを突破してきた。
「？魔帝？リーゼロッテ・ヴァレファール！　キサマの首をもらいに来たぜ――あん？」
「今宵、我らは勇者となりイヴリアを救世することだろう――ん？」
食堂兼謁見の間に乗り込んできた勇者は、二人組の男だった。豪快な口調で啖呵を切った半裸の筋肉達磨と、鍔広の帽子を深々と被った骸骨のように痩せこけた男。凸凹コンビとはこのことを言うのだろう。勇者というよりはゴロツキだけど。
筋肉達磨は巨大なバトルアックスを、痩せ男は魔法使いみたいな長杖を構え――
――ポカンとしていた。
「キサマら、それはなんのつもりだ？」
「我々を無視して食事とは余裕だな、？魔帝？よ」
まあ、意気揚々と魔王を倒しに来たのに、当の魔王が暢気にメシ食ってたらそうなるわな。俺が向こう側だったとしても同じ反応をしない自信はない。

リーゼがゆっくりと立ち上がる。
「ふぅん、まだイヴリアにここまで来れる人間がいたのね。誉めてあげるわ」
「ガキは黙ってな！」
「んなっ！？」
筋肉達磨の言葉にリーゼは絶句した。俺も唖然とする。まさかこいつら、討伐しにきた魔王の顔を知らないのか？
「我々の用があるのはそこの？魔帝？のみ。おチビちゃんは引っ込んでいることだ」
と言って痩せ男が杖で指し示したのは……俺。
まあ、嫌な予感はしてましたよ。？魔帝？と聞いて男をイメージする気持ちもわかりますよ。でも――
「とんだ勘違いだ。お前らバカだろ？」
「バカだと期待できそうにないわね」
「バカ安定です」
俺たちが立て続けにバカバカと言うもんだから、二人組は沸点到達したみたいに顔を真っ赤に染めた。おっと、怒らせたみたいだ。
「ぜ、全っ員ぶっ殺してくれるわぁあああああああああああああっ！！」
ドゴォン！！　と激怒した筋肉達磨がバトルアックスでテーブルを叩き割った。
「消えてしまえっ！」
続けて痩せ男の振るった杖の先から水撃弾が飛び出す。
「やっぱり狙いは俺か！？　人違いだっつーのっ！」
咄嗟に俺は体を捻って避けた。紙一重。まともに食らえば痛いじゃ済まないだろうな。
「死ねやぁ！！」
さらにバトルアックスの大振り連打をどうにかかわしつつ、俺はリーゼたちの様子を確認する。二人とも少し離れた位置で悠々と見物していやがる。見せ物じゃねえぞ。ていうか、この勇者様御一行

はお前らを倒しに来てんだ。早く代わってくれ。
「排除を」
「待ってレランジェ」
戦闘態勢に入ろうとしたレランジェをなぜかリーゼが制した。なにやってんだ早くしろよ。大戦斧と水弾をかわし続けるのはけっこう辛いんだぞ。
「マスター？」
「わたしたちが出るまでもないわ。たまには見る側になるのもいいと思うの」
おい、なにを仰っているのかなあのガキは？
「さあ、レージ。そんなバカ共なんてチョイチョイって適当に殺っちゃいなさい！」
「なぜに俺が魔王の手下Ａみたいになってんだよっ！？」
「そのまま無残に死んでください」
「誰が死ぬかっ！？」
あの人形は後で壊す。
「くたばれ？魔帝？リーゼロッテ・ヴァレファール！！」
「だから違うつってんだろこのアホ達磨がっ！！」
大上段から振り下ろされる大戦斧をサイドステップでかわした俺は、そのまま筋肉達磨の懐に飛び込んで右拳を顔面に叩き込んだ。
「ぐべっ」と変な音を発して巨体が倒れる。
「相棒！？」
さてと、こいつらは頭に血が上っているみたいだし、リーゼたちは手伝う気ゼロ。対話する余裕はない。やらなきゃやられるってんなら、やってやるさ。
武具をイメージする。殺すつもりはないから『棍』がいい。それも筋肉野郎にも効くように先端に打撃部があるやつだ。
「てめえら、一応、ぶたれる覚悟だけはしとけよ」
イメージ通りの物が生成され……ようとしてすぐに霧散して消えてしまった。俺は驚愕に目を見開く。どういうことだ。右手から離

れていないのに、なぜ？
「……そうか、しまった。最近魔力を補充してないから尽きちまったのか」
リーゼからは奪い損ねたしな。
「よくも我が相棒を――水に呑まれろ！」
痩せ男が杖を振るう。すると無数の魔法陣が俺の周囲を取り囲むように出現し、その全てからとんでもない量の水流が噴き出した。
荒れ狂う水の奔流が部屋中を水浸しにしながら俺を襲撃する。まるで海上の嵐だ。その凄まじい光景にリーゼたちはというと――
「勝手に洗ってくれるなんて、掃除が楽になるわね」
「いえマスター、逆に掃除は大変になります。乾拭き安定です」
アホな会話をしていた。戦っているのは俺だから気が楽でいいな、お前らは。
水流の勢いは収まらない。全部を避けるのは流石に無理なので、俺は直撃だけはしないように気をつけながら術者の方へと近づいていく。
水流が左肩を掠る。やっぱ痛いが、骨さえ折れてなければ問題ない。
迫る俺に恐怖したのか、痩せ男はビクつきながら杖を振るって水を操る。右足に、左足に、脇腹に、水流は掠りこそすれ直撃はしない。
俺が避けているんじゃない。単にあいつがビビってるだけだ。
「おいおい、ラスボス倒しに来たのに、お前らレベル低すぎやしないか？」
「く、来るな――ぐがっ」
俺は痩せ男の頬骨の目立つ顔に、左手でアイアンクローをかました。
「悪いな、ちょっと力借りるぞ。返さんけど」
「ぬわっ、な、わ、が……」
左手を通じて、俺の中に相手の活力が流れ込んでくる。この感じ、

カラカラの喉に水を流し込む時のように何度味わっても心地がいい。
もう充分だな。俺は痩せ男を乱暴に放り捨てる。そいつは干乾びたイカのように床に倒れ伏した。
それから――後ろ。

ギィン！！

鈍い金属音。筋肉達磨が振り下ろしたバトルアックスを受け止めたのは、俺が右手に持つ打撃部つきの棍棒。
〈魔武具生成〉――戦棍（メイス）。
重量のある頭部の突起により、衝撃を集中させて敵を鎧ごと粉砕する棍棒の進化形だ。
「な、なんだそれは……どっから出した！？」
「さあな」
「あ、相棒になにしやがった！」
「魔力をもらっただけだ」
「な、に」
見る見るうちに顔を青くする筋肉達磨。驚愕、そして動揺。見てて面白いけど――
「てめえも、もういいから黙れ」
俺は斧と組み合っていた戦棍を唐突に引いた。
たたらを踏む巨漢。
俺はそのまま体を捻じり――
――筋肉質な横腹に渾身のフルスイングをぶち込んだ。
砲弾と化した筋肉達磨は、起き上がろうとしていた相棒を巻き込んで謁見室の鉄扉をバコンとひしゃげた。二人ともその場に崩れ落ちてピクピクと痙攣し始める。
「さっすがレージ！」リーゼが子供みたいに顔を喜ばせ、「ちょっと物足りないけど及第点の働きよ。面白い見せ物だったわ♪」
「けっこうやるのですね。見直しません」

「そこは見直せよ」
そうだ、この後こいつを壊す予定だったな。なんてハードなスケジュールなんだ。
「「ぅう……」」
第二次戦闘態勢を取ろうとした俺だが、呻き声が聞こえたので仕方なく矛先をそちらに向けることにした。
筋肉と骨の意識が戻ったようだ。なかなかお早いお目覚めで。
「まさか？魔帝？がここまでとは……」
「もう少しだと思ったのによ」
「まだ勘違いしてるみてえだが、てめえらが倒しに来た？魔帝？はあっちだ」
俺は向こうで腕を組んで威張るように屹立している金髪黒衣を指差す。
「バカな」
「あんなガキが」
「レージ、そいつら殺して」
赤い瞳に怒りを宿したリーゼを宥めるのに一分ほどかかった。
俺は魔王を討伐しに来て返り討ちに遭った二人の勇者に歩み寄る。
「お前らに言っとくが、リーゼを倒したとしてもこの世界はなにも変わらんらしいぞ」
「「そんなことはない！」」
同時にそう叫ばれた。どういうことだ？　まさかリーゼたちの方がデタラメを言ってたってことか？
「今の？魔帝？を倒せば、次は俺様が？魔帝？の座につくからな。このイヴリアは誰も俺様に逆らえない世界に生まれ変わるんだ」
「待て相棒、？魔帝？となるのは我だ。脳味噌まで筋肉のお前に務まるわけがない」
「なんだと！？」
「王者は我一人で充分だ。安心しろ、相棒は我に一番近い地位においてやる」

「キサマッ！」
「あー、お取り込み中すみません」
「「あんだ！」」
また同時に叫ばれたが、こいつらの本質を知った俺に怯む理由はない。
「お前らがバカでクズだってことはわかったんで、そろそろお帰り願いたいと思います」
「「へ……？」」
俺は戦棍を捨て、右手を真横に翳す。
〈魔武具生成〉――なんか適当にでっかいハンマーっぽい物。
「お帰りは――」
俺は思いっ切り自分の倍はあろうかという巨大ハンマーを振り被り、
「ま、待て」「話し合おう、な」とかいう声をすっぱり無視して、
「――あちらになっております！」
プロゴルファーさながらのフォームで二つのボールを扉ごと吹き飛ばした。我ながらナイスショット。
「「ぎゃぶふんっ！？」」
珍妙な絶叫を上げて失神するヘボ勇者たち。すぐさま魔工機械のメイド人形が群がり、彼らをどこかに運んで行った。ダストシュートでもあるのかな。
「はっ！　わ、悪い。扉壊しちまった」
「ん？　別にいいわよそのくらい。どうせ人形たちが勝手に直すからね」
リーゼは全く気にしていないようで安心した。なので俺は気になったことを訊ねてみる。
「なあ、いつもあんな奴らばっかなのか？」
「大体そうです」
答えたのはレランジェだった。難儀だな、この世界も。
「ねえねえ、レージ。わたしにも武器作るやり方教えてよ」

おーっとこのお嬢様。ついに桜居みたいなことを言うようになったか。

「たぶん無理だと思うぞ。これは術式とかじゃなくって、俺自身が持ってる特性みたいなもんだからな。他人に真似できるもんじゃない」

原料は魔力だが、魔法とかよりは超能力に近い感じだな。

「？魔帝？で最強のわたしでも？」

「？魔帝？で最強かもしれないお前でも、だ」

「ふぅーん、ならしょうがないわね」

「そういうわけだ――ん？」

その時、俺の感覚神経がある気配を感じ取った。つい最近感じたばかりなのに、妙に懐かしい、そんな感覚。

「これは……まさか……」

「マスター、もう一匹侵入者がいます」

いやそれだけじゃない。この世界自体が歪んでいるような違和感は――

「『次元の門』が、開いてやがる」

一章　滅んだ世界の魔帝様（6）

わかるやいなや、俺が行動を起こすのは早かった。
俺はなんとしてでも元の世界に帰りたいんだ。そこに帰り道の可能性があるならば、誰だって確かめることを禁じ得ないだろ？
魔獣の徘徊する薄暗い下層に来たところで、物凄く聞き覚えのある声が届いてきた。
「すっげぇ！　なんだここはなんだここは？　迷宮？　やっべ、マジで異世界だよオレはついに異世界へ来たんだヒャッホー！　おっとアレは、マンボウか？　うひゃーマンボウが宙を泳いでオレの頭にガブリってぎゃぁあああああああああああっ！？」
そこでは、俺と同じ高校の制服を着た男が頭をマンボウにかじられて悶えていた。
「桜居！」
「むむ、この声は白峰か？」
アホな悪友は、気ぐるみを脱ぐ時みたいな動作で簡単にマンボウを外して投げ捨てた。……こいつ、実はとんでもないやつかもしれん。
その桜居を襲っていた魔獣は、俺の後ろに続くリーゼを認めるなり「ガンボウゥ」と怯えたようにビクついて逃げ去って行った。
今は魔獣なんてどうでもいい。
「会いたかったぜ桜居ぃ～！」
「白峰ぇ～！　その笑顔はキモチワルイがとにかく無事でよかったぜ～」
アハハエヘヘ、とお互い笑顔で駆け寄る俺と桜居。異世界における親友との感動的（？）な再会シーン。を――
「だっしゃぁあああああああああっ！！」
「へぶぅううううううううっ！？」

俺の右ストレートが見事なまでにぶち壊した。
「なにしやがる白峰っ！？」
錐揉み状に吹っ飛んで置きながら無事とは流石俺の親友。頭からピューと赤い液体が吹き出しているけどアレは魔獣に噛まれた傷ですね。うん。
「あー、桜居謙斗」俺は指をポキポキ鳴らしつつ、「貴様は俺の職務を妨害し、異世界へ行くことになった原因を作った罪により、『俺に一発殴られる刑』を執行します」
「落ち着け白峰！　その刑は既に執行されている！」
「問答無用！」
「なぜぶるぁあああああああああっ！？」
ふう、こいつだけは次会った時に殴り倒すと決めていたからスッキリした。
「もう一匹の侵入者って、レージの知り合い？」
俺の後方五メートルくらいの位置からリーゼが怪訝そうに訊いてきた。
俺は親友だった物体を、ボロ雑巾を掴むように拾い上げる。
「ああ、こいつは桜居謙斗。俺と違ってなんの力もない人間で見ての通りのアホだ」
「ハッ！　オレの目の前に異世界人の美少女が二人も！？」
目覚めた桜居は、リーゼとレランジェを視界に入れるなり、一瞬で二人の下に到達して気障ったらしく癖毛を掻き上げる。まったく、こいつは……。
「どうも。オレの名前は桜居謙斗。遠い世界から来ました。まずは貴女方のお名前から訊いてもよろしいでしょうか？」
いいぞレランジェ、そいつぶっ飛ばしても。と思いつつ呆れた俺は様子を窺っていたのだが、リーゼとレランジェは顔を互いに見合して首を傾げている。
「この人間はなにを言っているのですか？」

そういや、桜居は〈言意の調べ〉を持ってないんだ。となると、リーゼたちには意味不明な言葉の羅列にしか聞こえていないことになる。通訳が必要か。また面倒な……。

「害はないと思うから無視していいぞ」

「了解です。排除安定ですね」

「いや、それはやめろ」

たった今命を救ってやったのに、桜居のアホは二人に向かって延々と喋り続けている。んでもって、リーゼは言葉がわからないくせに、いや、言葉がわからないからこそ一生懸命に聞こうとしている。放っとけよ、耳が腐るかもしれん。

ん？　そういえば……。

「なあ、桜居。お前がいるってことは、そこの『次元の門』はまさか……」

Ｐｒｒｒｒ！　Ｐｒｒｒｒ！　Ｐｒｒｒｒ！

俺のブレザーの胸ポケットが振動した。携帯だ。

早速取ると、聞き覚えのあるおっとり声が聞こえてきた。

『はぁ～い、レイちゃん元気ですかぁ～？』

「誘波！？　どういうことだ？　なんで携帯が」

『門の近くだと通じるみたいですね』

日本の技術って凄いね。

『要件だけを手短に言いますね。門がまた閉じる前に桜居ちゃんをつれて帰ってきてください。この期を逃したらもう二度と戻れなくなるかもしれませんよ』

それもそうだ。二度同じ世界と繋がるだけでも奇跡に等しいからな。三度目はあり得ないと思った方がいい。

『異界監査局の分析によると、門が開いている平均時間は約十分です。あまり時間はありません。急いでください』

元の世界に帰るチャンスは、今しかない。

「帰るぞ、桜居」
俺は通話を切り、まだ二人に謎な話を続けている桜居の首根っこを掴んだ。
「なぜだ白峰！　オレはもっとこの世界を調べたいんだ。それからでも遅くないだろ？」
「遅えんだよ」
俺はいやだいやだと駄々っ子みたいな桜居を引きずって、通路のちょっとした隙間に開いた『次元の門』へと向かう。変なところにあるなぁ。
「待って、レージ」
リーゼの声。そうだ、リーゼたちには一応世話になったからな。礼を言わないと。
「リーゼ、いろいろとありが――」
「わたしも連れて行きなさい。約束したでしょ？」
リーゼは俺の言葉を遮ってそんなことを言ってきた。話はしたけど約束をした覚えはないんだけど……。
さてどうしたもんかと悩む俺を、リーゼはじっと見据えてくる。その眼差しは真剣で、どこか不安げでもあった。
さっきは傍観するつもりだったが、できれば？人？を地球に連れ帰るマネはしたくない。そいつにはそいつの世界があって、一人でも心配してくれるやつがいるかもしれないんだ。それに、異界監査官としてもどうかと思う選択肢だし。
だが、リーゼの場合は少し違う。俺が連れていかなければ、滅んだ世界で永遠の退屈に縛られて生きていかなければならない。この世界に来て数時間の俺が言うのもなんだが、さっきの勇者を見る限りなにかしらの革命が起こる見込みはない。もし革命したとしても、その時リーゼは生きていないだろう。彼女は？魔帝？。世界の全てが敵と言っても過言ではないのだから。
だったら、？魔帝？なんて称号など関係ない世界で生きた方が幸せなんじゃないか。

となれば、彼女を救えるのは俺だけ……だな。
「来たきゃ、勝手に来いよ。俺は止めはせん」
少々ぶっきらぼうに言ってしまったが、リーゼは満面の笑顔を咲かせて「うん！」と返事をした。やっぱ素直に笑ってる方が可愛いと思うぞ、俺は。
「なんの話してんだ、白峰」
「お前はちょいと黙ってろ」
ぐきり、と軽くスリーパーホールドで桜居の意識を強制退場させておく。
「マスター」とレランジェ。「どうしてもマスターが行くと仰るのならば、このレランジェに止める権利はありません。レランジェはそのうち停止しますが、マスターはお体に気をつけてください」
「なに言ってんの？　レランジェも来るの。お前はわたし専属の侍女なんだから」
レランジェの目が、一瞬だけ大きく見開かれたのを俺は見逃さなかった。
「そう……ですね。それが安定です。わかりました。マスターの身はこのレランジェが命に代えても守る安定です」
どことなく躊躇いがあったように思えたが、どうやらレランジェは覚悟を決めたようだ。ていうか、機械人形に命なんてあるのか？
「決まったようなら、こいつをお前らに渡しとく」
俺はポケットから二個のペンダントを取り出し、二人に投げ渡した。予備として持っていた〈言意の調べ〉だ。
「そいつを身につけてりゃ、向こうでも言葉が通じるからよ」
「キレイ……。？魔帝？で最強のわたしには相応しいわね。ありがたく貰っとくわ」
いつもの自信に溢れた笑みを浮かべ、リーゼはペンダントを首にかけた。レランジェも同様にする。
「じゃ、帰るとしますか」
俺は最後にそれだけ言うと、気絶した桜居を担いで『次元の門』

をくぐった。

でもまさか、この時の判断が後々面倒なことになるなんて、俺は夢にも思っていなかった。

間章（1）

ここはどこだ？

自分は一体どうなったのだ？

濃い闇が支配する空間で、『その者』は自らが置かれた状況を理解できないでいた。

あまりにも意味不明すぎて体が慌てることを忘れている。妙に落ち着いた調子で、『その者』は天を仰いだ。

「おかしい……先程まで昼間だったのに」

上空には暗天が広がっていた。雲一つないのに星があまり見えないのも不思議だった。月はある。だが、二つ存在するはずのそれがなぜ一つしかないのだろうか。白色の月なんて初めて見た。

数分前に起こったことを思い出す。

突然、陽炎のように揺らめいた空間に呑みこまれた。それは覚えている。そして気がついたら見知らぬ場所だった。

夢……ではない。感覚的にもここが現実だということはわかる。ならば幻術の類だろうか？　自分を疎ましく思っている連中が罠を仕掛けたのだとしたら、そのような姑息な手に引っかかった自分が情けない。

少し感覚を研ぎ澄ませてみる。……違う。この風景は幻ではない。幻ならどこかにほつれのような違和感があるものだが、ここにそんなものは一切感じられない。

改めて周囲を見回す。左右は高い壁がそそり立っていて、闇の向こうから日光とは違う光が差し込んでいた。

光の方向から、人の気配を感じる。

その者は努めて慎重に光の下へ歩み寄り、暗がりに身を隠したま

まその先の様子を窺う。
「――ッ！？」
そして、絶句した。どうやら大通りみたいなのだが、夜なのに昼間のように明るかった。色鮮やかに発光する看板がそこかしこにあり、機械と思われる怪物が両目を光らせて物凄いスピードで行き交っている。
「なんだここは？　ラ・フェルデではないのか？」
他国にもこのような場所は存在しない。これまで読んだことのあるどんな本にも記されていない。これはそう、世界そのものが違っている。
と――。
「あん？　なんだぁお前その格好？」
「コスプレか？　こんなところで？　やべー、変態がいるぜ」
「いやいや、ダセーけどよくできてるぜ。けっこう金かかってんじゃねえの？」
「てことは金持ち？　ヒャッハー！　超ラッキーじゃん俺たち♪」
見たこともない服装をした男四人が取り囲んできた。なにかを言っているようだが、困ったことに言葉がわからない。ただ、態度でこちらを馬鹿にしていることだけは伝わってくる。
「貴様ら、私を愚弄するとただでは済まさないぞ」
その者は凄みを利かせ、腰に提げてある『剣』に手を伸ばしたのにも関わらず、男たちはキョトンとした様子で顔を見合わせている。
「今、なんつった？」
「さあ？　俺英語ダメだからわかんね」
「つか、今の英語か」
「どうでもいいじゃんそんなこと。――ん？　よく見たらこのカモさんなかなかの」
男の一人が手を伸ばしてくる。その者はすぐさまその手を掴み――
――グキリ、とありえない方向に捻じ曲げた。
「ぐあああああああああああああああああああああああ

あああああっ！？」
手を押さえて絶叫する男。それを見た残り三人が殺気立つ。
「てめえ！」
「なにしやがんだ！」
「ぶっ殺すぞああん！」
怒気を全身から溢れさせた男たちが嘗め回すように睨めつけてくる。
「立ち去るなら手は出さない。向かってくるなら仕方ない。相手になろう」
やはり言葉が通じないのは痛い。結局飛びかかってきた男たちを三秒で片づけ、その者は騒ぎにならないうちに暗闇の中を立ち去った。

――ここは異世界だ。

本来、自分はここにいない存在。だとすれば、下手に動けば騒ぎになる。まずは身を隠しつつ自分の置かれた状況の確認と理解、そしてこうなった原因を突き止めるべきだ。
もし何者かの陰謀だとすれば、討ち倒してでも元の世界に帰らなくてはならない。
とりあえず隠れる場所を探そう、そう考えて視線を彷徨わせ――
――見つけた。
視線の先には、地面に不自然に取りつけられた丸い蓋のようなものがある。
それは、地下（マンホール）への入口だった。

二章　風と学園と聖剣士（1）

学校の屋上に？彼女？はいた。
懐かしい記憶。すぐに俺はこれが夢なのだと気づいた。
記憶が曖昧なのか逆光のせいなのか、？彼女？の姿がよく見えないのは残念だ。
俺を屋上に呼び出したのは？彼女？である。中等部の制服を着た俺は、この時『愛の告白』なんじゃないかという期待が僅かながらにあったりしたもんだ。
「アタシは異界監査官になる。だからアンタもなりなさい。これは命令よ」
俺が異界監査官となるきっかけの記憶。懐かしいね。久々に見たよ、この夢。
「靴箱にそれらしい手紙を置いときながら言うことはそれかよ」
「あはっ♪　『あなたが好きです。付き合ってください』なんてアタシが言うと思った？」
「いいや」
底抜けに明るい声で笑う？彼女？に対し、俺は首を振って好きな番組が臨時ニュースで潰れた時のような様子で肩を落とした。
「寧ろ『世界から核をなくすために核兵器保有国に攻め込むから手伝って』と言われるんじゃないかと思ってヒヤヒヤ――」
「アタシってどんなキャラに思われてんの？」
「頑固と無鉄砲とお人好しが人間の皮を被って歩いてる感じ」
「誉めてるのか貶してるのかよくわかんないから、とりあえず一発殴る」
「なんでそうな――ほ、誉めてる！　誉めてるからその握った拳を下げてください！」
「じゃあこれは照れ隠しってことで♪」

楽しそうに言って、？彼女？は俺に飛びかかってきた。
「全然照れてねぐぶぼっ！？」仰向けに転倒する俺。
「アンタといると楽しいわ」俺の腹を土足で踏みつける？彼女？。
あれ？　これってこんな記憶だったっけぶっ！？　な、なんだ？
痛い？　夢なのに俺の腹が踏み抜かれたように痛がぁあああああああああっ！？

二章　風と学園と聖剣士（2）

「あ、やっと起きた」
目を開けると、金髪黒衣の美少女が立っていた。なぜか俺の腹の上に。
「……そこでなにをなされているのですか、お嬢様？」
「レージを起こしてたに決まってるじゃない」
「起こし方がおかしいっていうか痛いから早くそこをどけっ！」
俺が無理やり上体を起こそうとしたので、金髪少女――リーゼロッテ・ヴァレファールは「わっ」とか言って飛び退いた。
まったく、と呟きつつ俺は辺りを見回す。
フローリングの床にベージュのカーペット、その上に置かれた広めのテーブル。テレビにエアコンにデスクトップパソコン。俺が寝てるのはリクライニングソファー。カーテンの隙間からは陽光が差し込んでいる。デジタル時計は朝の八時を示していた。
毎日にように見ている部屋。そう、ここは俺ん家のリビングだ。
俺の両親は異世界関係の仕事で五年前から海外に行っている。だからこの庭つき一戸建て住宅は俺だけの城ってことになるわけだ。
仮にも高校生の独り暮しは大変なこともあるんだが、なによりも自由！　独り暮し最高！　独り暮し万歳！　……だったはずなんだがなぁ。
俺はすぐ傍でガキ大将のような余裕綽々とした笑みを浮かべる少女を見、溜息をつきたくなった。

昨夜、異世界イヴリアから元いた学校へと生還した俺は、なにはともあれ家に帰って寝たかった。
誘波にはメールで適当に報告し（リーゼたちのこともきちんと伝えた）、桜居はすぐ目覚めるだろうから置いて行った。
一つ驚いたことがあった。どうもイヴリアと地球では時間の流れ

が異なるようで、向こうで数時間は過ごしたはずなのに、こっちでは三十分しか経ってなかったのだ。
それはまあラッキーとして、問題も二つあった。
一つは、リーゼとレランジェの宿だ。
誘波から返信があればその辺りを手配してもらおうと考えていたのだが、なぜか彼女から電話の一本もなかった。仕方なくこちらからかけても一向に繋がらない。寝落ちたかと思って諦めた。
そんなわけで俺は自宅に女の子を連れ込むという、学校の誰かには絶対に見つかりたくないことをせにゃならなくなったわけだ。
ベッドがある二階の両親の部屋をリーゼたちに充て、俺は普段通り一階のリビングで寝た。自分の部屋もあるけどベッドはないし、こっちの方がなにかと便利なんだよ。
で、二つ目の問題は――

「レージ、さっさと起きてわたしにこの世界を案内しなさい」
こちらの世界のことをなんにも知らないリーゼたちそのものだ。
特に自分の世界が退屈だからって異世界に強い興味を抱いていたリーゼは、早速アレはなんだコレはなんだとはしゃぎまくったものだった。
「その前に、俺との約束は覚えてるか？」
だからこそ、俺は二人に一つだけ約束をさせた。
「覚えてるわよ。えっと、？この世界のルールを守ること？だっけ？」
「ああ、具体的には物を壊すな、人を殺すな、俺の言うことを聞け、だ」
「む、最後のだけは気が進まないけど、いいわ。多少？縛り？があった方が面白いからね」
うん、リーゼのいいところは素直なところだな。どこかのゴスロリメイドとは大違いだ。
「くれぐれも、この世界を征服してやろうとか、滅ぼそうとかすん

なよ」
「どうしてこのわたしが、自分から世界をつまらなくしなきゃならないのよ？」
「そりゃそうか」
リーゼはそうなった世界を経験してるんだ。念を押す必要はなかったかもしれない。
「時に、レランジェの姿が見えんが？」
「朝食の準備をしてるわ」
あいつが朝メシを？　若干心配だな。まあ、寝る前にキッチンを含めた家の基本的なことは教えたし、冷蔵庫にトリカブト的な毒物は入ってなかったから大丈夫か。
「ほら、そんなことはいいから早く起きて起きて！」
俺の腕を引っ張るリーゼは、もうワックワクが止まらないって感じに紅眼をキラキラさせている。？魔帝？なんて大層な異名がついてるとは思えない。

「あらあら、その子が例の魔王様ですかぁ？」

突然、どこからともなく間延びした女性の声がした。続いて、ガチャリ、と窓の鍵が開く音も聞こえる。
「！？」
バッと俺は振り返る。次の瞬間、ポルターガイストみたいに勢いよく窓が開き、ブオォ、と一陣の強風が部屋中に吹き荒れた。俺とリーゼが思わず顔を腕で庇ったほどだ。
風はすぐに緩んだ。俺はゆっくりと腕を下げ、視線をやや上に向ける。
「レイちゃんには勿体ないくらい可愛い女の子じゃないですかぁ」
そこに、天女がいた。
正確には、天女だと思った。
俺たちの前に現れたのは、風に靡く色鮮やかな十二単を纏った女

だった。背中まで伸ばした緩いウェーブのかかった髪は清流のごとく宙を流れ、端整な顔を舞台に踊る大きな蒼い瞳がニッコリと俺たちを見下ろしている。

つまり、そいつは空中に浮いていた。とんでもない美人だが、美人は三日で飽きるっていうのは本当らしい。俺がこいつを見て感じるのは面倒臭さだけだ。

「なにしに来やがった、誘波」

声のトーンを低くして、俺は威嚇するようにそう言った。

「レイちゃんが異世界から連れてきたガールフレンドを一目見に♪」

天女もどきはニコニコと微笑むと、ふんわりと床に足をつけた。見た目は十代半ばで、背丈はリーゼより五センチほど高いくらいである。

「レージ、こいつ誰？」

リーゼが不審げに言った。

「申し遅れました、異世界の女王様。私は法界院誘波（ほうかいいんいざなみ）。日本異界監査局の局長をしています」

法界院誘波。察しの通り、こいつも異世界人だ。出身は確か『アストラリア』とかいう世界だっけ。よく知らんけど。ちなみに名前は偽名だ。というのも、常に着物を纏っているほど日本大好きなもんだから、自分も日本名に名乗っているんだと。

「イザナミ？　きょくちょう？」

「一番偉い人のことです」

えっへん、と誘波は十二単の上からでもわかる豊満な胸を張る。

「ピッチピチの十八歳です♪」

「訊いてないし嘘を教えるな。軽く俺の百倍は生きてるくせごはっ！？」

俺の腹になにか鈍器的なもので殴られたような感覚が襲った。

「なにか言いました？」

「いや、別に……」

腹を押さえて蹲る俺に向けられる笑顔が怖い。こいつの力は本当

に厄介だ。
「風？」
リーゼが力の正体を看破する。
「大正解です。賞品はハワイ旅行とグアム旅行、好きな方を選んでくださいね♪」
「おい、ふざけるのはそのくらいにして、本当はなにしに来たのかを話せ」
「レイちゃん、敬語って知ってますか？」
「敬うべき相手に使う言葉だがお前にはあてはまらん」
だいたい、タメ口でいいと言ってきたのは他ならぬ誘波だ。
「わかりました。お話しします」誘波は表情を改め、「今から五時間ほど前――正確には午前二時四十七分に、『次元の門』が開きました」
「それがどうした？　いつものことだろ」
「百二十二箇所、同時に、同じ地域で開くことがいつものことですか？」
「なっ！？」
俺は絶句した。ありえない。『次元の門』は世界中で開いているけれど、その開く地域はだいたい決まっている。次元の壁が薄い、というのが異界監査局の変態研究者共の説だが、そういう地域でも同時に百を超える門が開いたことは過去一度もない。
間違いなく異常事態だ。だが――
「俺はなにも感知しなかったぞ？」
「ほんの数秒のことでしたし、その頃レイちゃんの傍には既に開いている門がありましたでしょ。気づかなくても仕方ありません」
そうか、リーゼの世界イヴリアに繋がった門か。近くにあった強烈な違和感に他の門の気配が重なってわからなかったんだ。
「……被害は？」
「夜中だったこともあり、今のところは一件もありません。ですが、向こうからの来訪者はいます。目下、局員が捜索していますが、来

訪者が？人？だとは限りません。なのでレイちゃんたち異界監査官には、いつでも戦闘ができるようにしておいてほしいのです」

あの時、誘波と連絡が取れなかったのは、この件の調査にてんてこ舞いだったからだと俺は納得した。

「ねえ、さっきからなんの話してんのよ？」

リーゼは話に全くついて行けず多少イラついてるようだった。

「お前、わたしのレージをどうする気？　生憎、レージはこれからわたしに街の案内をする用事があるの」

「きゃあ♪　『わたしの』なんて言われてますよ、レイちゃん」

なにを勘違いしたのか誘波は楽しそうにキャッキャ喚いた。なんともウザい。その言葉の意味はな、リーゼにとって俺はオモチャかよくて下僕程度ってことだ。

「わたしの邪魔をするって言うんなら、灰になってもらうわよ？」

リーゼの両掌に黒炎が点火される。やめてくれ！　ここでそんな力を使ったら俺の城が燃えちまう！

「あらあら、好戦的ですねぇ」

誘波は困ったように頬に手をあてているが、その顔は変わらずニコニコしている。

「誘波、用が済んだならもう帰れよ。つーか、それだけ伝えるなら電話でもメールでもよかったんじゃないのか？」

「先程言ったじゃないですかぁ。レイちゃんの彼女を見に来たってね。ああ、でも少し違いますね。正確には――」

誘波は笑顔のまま、ゆるりとした動作でリーゼを指差した。

「そこにいる、昨夜の異常の原因を捕縛しに来ました」

……はい？

誘波のやつ、今、なんと言った？

「お下がりくださいマスター！」

叫びながら凄い勢いで部屋に飛び込んできたのは、ゴスロリ風メ

イド服を着た女。リーゼの従者である魔工機械人形――レランジェだ。

彼女はまっすぐ誘波に突進してダイコンも真っ二つになりそうな手刀を振り下ろす。

が、それは誘波に触れる直前で弾かれた。風の防御壁だ。

「そういえば、もう一人いるのでしたね」

「お話を拝聴させていただきました。結論は排除安定です」

レランジェの手刀や蹴りが乱舞する。凄まじい猛攻。しかし、どの攻撃も誘波に触れることさえ叶わない。その誘波は、お茶があれば啜っていそうな涼しい顔をしていた。

やがてレランジェは弾かれたように吹き飛ばされた。テーブルを引っ繰り返して彼女は壁に激突する。

「――って、俺ん家で暴れんなっ！！」

「大丈夫ですよ。すぐに終わらせますので」

そういう問題じゃない！　と俺が言おうとしたところで、二つの黒い魔法陣が誘波を挟み込むように出現した。

「レランジェをぶっ飛ばすなんて、お前けっこうやるわね。でも、？魔帝？で最強のわたしは簡単にはいかないわよ」

「やめろリーゼ！　早速約束破ってんじゃねえ！」

俺はたまらず叫んだ。リーゼさん、あなたが本気で暴れたらこの家なんて一瞬でなくなっちまうんですよ。

約束のことを思い出したのか、リーゼは少し躊躇う素振りを見せて魔法陣を消した。

「……魔導電磁放射砲、発射安定です」

でも、あっちの粗悪人形は俺の言うことなんて聞かないんですよね。初見でいきなり俺にぶっ放してきた電磁レーザーを撃とうとしてやがる。

「あらあら」

「あらあら、じゃねえよ誘波！　どういうことか説明しやがれっ！」
「そうしたいところですが、彼女たちが待ってくれませんねぇ。だから少し静かになってもらいましょうか」
誘波がその場で手を横に振るう。同時にレランジェの魔導電磁放射砲が発射されたが、それは途中で不可視の力と衝突して相殺された。その際に発生した爆風で部屋がもう表現したくないくらいめっちゃくちゃに。俺の家……。
「――〈圧風（プレッシャー）〉」
誘波が唱えるように呟くと、バン！　とレランジェが床に突っ伏した。？上方から圧しかかる風？のせいで動くことができないようだ。悔しげな舌打ちが聞こえる。
「レランジェ！」
従者がやられて我慢できなくなったリーゼが、再び二つの魔法陣で誘波をサンドウィッチ状態にする。そして、今度は俺が止める間もなく、両陣から噴火した黒炎が誘波をプレスした。
床に、カーペットに、カーテンに、黒炎が引火していく。俺は即座に上着を脱いで消火活動開始。誘波の心配？　そんなもんするだけ無駄だ。それより消化器を！　誰か消化器を持ってきてくれ！
「大した魔力ですねぇ。でもまだまだ扱いが雑のようです」
おっとりとした声が聞こえた瞬間、黒炎は風船が弾けるように消し飛んだ。引火した炎も消してくれたのはありがたいけど、部屋は半焼、窓ガラスは見事に全部割れていた。
「うそっ！？　効いてない！？」
着物にすら焦げ目一つついていない状態の誘波を見てリーゼが瞠目する。
「――〈眠風（スリープ）〉」
そう誘波が呟くと、リーゼを包むように青色の風が優しく吹いた。
「なにこれ？　……ん……あぅ」
リーゼはしばし目を瞬かせていたが、やがて瞼が落ち、体が弛緩し、ソファーに覆いかぶさるように倒れた。すーすー、とリズミカ

ルな吐息が聞こえる。催眠効果が付加された風で強制的に眠らされたのだ。

「これで落ち着きましたね」

レランジェに〈圧風〉をかけつつ、一方でリーゼの相手をする。やはりこいつはバケモンだ。

「なんで昨夜の異常が彼女の仕業なのか、でしたね。仕業と言うと少々違ってきますが、原因は彼女の魔力です。レイちゃんも感じている通り、彼女の魔力は質・量共に尋常ではありません。彼女が次元を渡る折に、その膨大な魔力が影響してこの地域に瞬間的な？歪み？を発生させてしまった、というわけです」

淡々と説明した誘波は、リーゼの寝顔を見て「可愛いですねぇ」と楽しそうな呟きを漏らした。

「リーゼの魔力が原因、というのは置いといてだ」

俺は周囲の惨状を再確認する。

「俺の家、ちゃんと修理してくれるんだろうな？」

「あら？」

「あら？　じゃねえ！」

とぼけた声を出すこの天女もどきとは、そのうちきちんと話し合うべきだな。

「ともあれ、お二人は少しの間私の方で預からせてもらいます。大丈夫です。悪いようにはしません。よろしいですか？」

「ダメだと言っても連れて行くんだろ？　別に構わんが、まずは俺の家をーー」

「そうですかー♪　では、早速連れて行きますねー」

俺の言葉を嬉しそうに遮って誘波は風を繰る。ふわり、とリーゼとレランジェが宙に浮いた。レランジェはもがいていたけど、丘に上げられた魚のごとく無駄だった。

部屋の中に風が渦巻く。その中心部で、誘波はニコニコ顔を俺に向ける。

「そうそう、レイちゃんに質問です。今日は何曜日ですか？」

「は？　水曜日だろ？」
「早く準備しないと、学校に遅刻しちゃいますよぅ？」
「あ」
俺は急いで時刻を確認する。幸い無事だったデジタル時計は八時半を表示していた。てかもう朝のＨＲ始まってるんですけど……。
「ではでは、間に合うように頑張ってくださいねえ♪」
「頑張っても間に合わねえよっ！？」
俺の叫びは目も開けてられないほど強くなった風にもみ消された。
そして、その風が収まった時、誘波たちの姿は忽然と消えていた。

二章　風と学園と聖剣士（3）

忘れられそうだが、俺は異界監査官と高校生を兼任している。義務教育は卒業してんだから監査官の方だけやればいいじゃないか、と言われるかもしれん。でもな、この高校生も歴とした異界監査官の仕事なんだ。

私立伊海学園。それが俺の通っている学校の名称だ。初等部から大学までエスカレーター方式であり、山一つ丸ごと買い取って建てられたという敷地面積は『学園区』と称されるほど広い。設備の整っているよい学校なのだが、最大の難点は高地にあるため坂道が辛いというところだ。半分異世界人の俺でもキツイんだよ。特に夏！

『伊海』は当然『いかい』と読む。これは『異界』とかけたくだらないシャレになっているわけで、なぜそんな名前にしたのかなんてことは察しのいいやつならわかるだろう。

つまりこの学園は、こちらの世界に住まわざる得なくなった異世界人に、地球のアレコレを教えるために設立されたのだ。もちろんそのことは秘匿され、普通の地球人も大勢通っている。そうすることで地球人との交流を深められるっていう策略だ。

まあ、とても人間には見えない異世界人もいたりするんだが、そういうやつらには異界監査局から人化の魔導具が支給されるという具合でうまくいっている。

で、ここからが異界監査官の仕事内容になる。異世界人の中には異能力や魔法が使える者もいれば、能力的には地球人とほとんど変わらない者もいる。後者はいいのだけれど、前者がなにかしらの騒動を起こさないとも限らない。それを防ぐために、俺を含めた監査官が教員や生徒として学園生活を送っているってわけだ。

――俺は普通にその学園生活とやらをエンジョイしてるけどね。

「やい白峰！　昨日はよくもオレを置いていきやがったな！」

昼休み。高等部二年D組の教室。生徒がピラニアみたいに押し寄せる購買で入手したヤキソバパンを、俺は中央最後列にある自分の席で食していた。ヤキソバパンってうまいよね。炭水化物に炭水化物を混ぜてるだけと言って嫌う人間もいるけど。

「聞いてんのか白峰！　あの後オレは大変だったんだぞ！」

さっきから俺の耳を打ってくる不快極まりない雑音をなにごとかと思って見ると、癖っ毛の目立つ男子生徒が俺を睨んでいた。

「なんだ桜居か。相変わらず凄い癖毛だな。あと正確には今日だ」

「そんなことはどうでもいい！　オレは異世界にいたはずなのに、気づいたら元の公立高校でしかも朝。不審者扱いでさっきまで警察に呼ばれてたんだぞ！」

朝まで寝てたのか。なんでこんなアホと同じクラスになったんだ？　今年はおみくじを引いてないけど絶対に『大凶』だな。

「それは大変だったな。カツ丼はうまかったか？」

「お茶すら出されてねえよ！」

桜居がキャンキャンと負け犬みたいに喚くので、俺は耳にシャッターを下ろしてじっくりと購買戦争の戦利品に舌鼓を打つことにした。

この桜居謙斗はオカルトマニアならぬ異世界マニアである。中学時代、誤って『次元の門』をくぐろうとしたこいつを、俺が止めたことがきっかけの付き合いだ。おかげで桜居は異界監査局の表面的なことは知っているし、この学園の実態も理解している。それを知った当初は暴走して大変だったなぁ。ある意味、俺はこいつのお目つけ役だ。

「そうそう、さっき職員室で説教されてた時に聞いたんだけどな」

いつの間にか桜居の話題が変わっていた。しょうがなく俺はシャッターを上げる。

「このクラスに転入生が来るんだと」

「別に珍しくないだろ。まあ、昼からってのはそんなにないけどよ」

伊海学園には不定期でよく転入生や留学生がやってくる。その多

くが異世界人であることは言うまでもない。が――
「いやいやそれがな、女子でしかもとんでもない美少女らしいんだ」
嫌な予感が電流のように疾った。

二章　風と学園と聖剣士（４）

当たるよね、嫌な予感って。そういう第六感ってのは人間に備わった一種の予知能力だと思うんだ。ほらアレ、大災害の前にネズミとかの動物がなんらかしらのアクションを起こしたりするやつ。その劣化版って感じ。

いやね、どうりで俺の隣に席が一つ増えてたわけだよ。

「んなわけで、突然だけど、彼女は転入生のリーゼロッテさん。みんな仲良くねー」

担任の岩村先生（三十三歳独身・♀）が軽い口調で転校生を紹介し終えると同時、クラスの男子連中は火がついたように舞い上がった。

「すっげー美少女だ！」「金髪パねえ」「かわいすぎる」「リーゼロッテさん僕と付き合ってください！」「キサマ抜け駆けは許さん」「ちんちくりんだ」「ホントに高校生？」「俺のことは是非『おにいちゃん』と呼んでくれ！」「一目見た時から好きでした！」「先生ロリコンが大量発生しています！」

伊海学園高等部の制服を着た転入生が、三百六十度どこから見ても美少女なのだから気持ちはわからんでもない。でもな、死にたくなかったら手を出さない方がいいぞ。

「あれ？　昨日白峰と一緒にいた娘じゃないか」

桜居の一言で、クラス中のいろんな感情の籠った視線が俺に突き刺さった。

「桜居、ちょっと後で話があるんだがいいか？（余計なこと言ってると殺すからな）」

「変態的告白と暴力での会話以外なら受けて立とう（これは復讐なんだよ白峰君）」

斜め前の席にいる桜居との間で火花が散る。

「はいはい、彼女に質問があるやつは挙手してからにしろー」

担任の岩村先生（絶賛彼氏募集中）が適当に言うと、記者会見の時みたく挙手が殺到した。リーゼは一瞬戸惑った表情をしたが、すぐに自信満々な顔に戻る。

「リーゼロッテさんは、白峰くんと知り合いなんですか？」

おいそこの女子、他にもっと訊くことあるだろ。好きな食べ物とか。

「うん、知り合いって言えば知り合いね」

ナイスだリーゼ。そんな感じにボカしてくれ。

「はいはーい！　リーゼロッテちゃんは今どこに住んでるんだ？」

「ああ、それならレージ――」

「だあぁーっ！　あんなところに物理的に存在できない形容しがたい謎生物が空飛んでるーっ！」

「え？　どこ？　空飛ぶなんてレランジェでもできないわよ！」

危ない危ない。本人の口から俺ん家に住んでるなんて言われた日にゃクラス中の男どもと死闘を繰り広げることになる。なんかまたクラス中の視線――特に男子からは殺意の籠った――を浴びてしまったが、口笛でも吹いて誤魔化しとこう。

「ぶっちゃけ、リーゼロッテさんと白峰はどういう関係なの？　恋人？」

く、また危険な質問だ。頼むぞリーゼ、余計なことを言ってくれるな。

「こいびと？　よくわかんないけど、たぶんそれ」

「ダッシュ！！」

「「「逃がすかっ！！」」」

「な、てめえら、いつの間に俺の前に」

瞬間的にでも異界監査官たる俺のスピードを越えるとは……。

「さあ野郎ども、白峰を取り押さえろ！」

「「「イエッサー！！」」」

「なんでみんな桜居の指示にってどっから取り出したんだその縄は！？」

「はいはい、みんな静かにねー。特に男子」
先生の言葉なんて聞こえるわけがない。
「隊長、白峰を拘束しました！」「よーし、あることないこと全部吐いてもらうぞ」「ないことは吐けねえよ！」「彼女との関係を洗いざらい言え」「カツ丼食うか？」「静かにしなさーい」「どこまでやったんだ？」「キスか？」「まさかムフフなことまで！？」「白峰くんのケダモノ！　ボクというものがありながら」「誰だ今の！　俺にそっちの趣味はねえよ！」「あははっ！　レージ、その格好面白い♪」「リーゼは黙ろうね！」
「静かにしないと、この中から私の夫を選抜する」
――ピタリ。
男子どもがこの世の終わりを知らされたように静かになった。そして取り憑かれたように席へと戻って行く。俺も密かにナイフを生成して縄を切り、自分の椅子に座った。
「んじゃ、あなたの席は一番後ろのあそこね」
岩村先生は何事もなかったようにリーゼを促す。予想通り、リーゼは俺の右隣の席に座った。「白峰てめえ～」とかいう罵声は黙殺して俺は考察する。
普通なら、来たばかりの異世界人は学校のイロハを充分に教わってからクラスインするはずだ。留学生扱いなので大抵のことは文化の違いで誤魔化せるが、最低限のマナーは身につけてもらわないと困るからな。その過程を飛ばせるやつは一人しかいない。
「（誘波の仕業だな。いきなり学校デビューさせるなんてなに考えてんだあのアマは？）」
岩村先生が数学の授業を始めたのを確認し、俺はリーゼに小声で話しかけた。誘波は何気にこの学園の現理事長でもあるから、面倒な手続きをすっ飛ばすことくらい可能だ。
「イザナミはレージがいるから大丈夫って言ってたけど」
リーゼは普通の声で返した。また騒がしくなったからいいけど空気読めよ。それからあのアマ、リーゼたちをうまく言い包めたみた

いだが、全面的に俺に世話させる気だな。
「（そういや、レランジェはどうした？）」
「えっと、いかいぎじゅつなんとかってとこに連れてかれた」
異界技術研究開発部か。名称通り、他世界の技術の研究・開発を行っている部署だ。開発された物は最新技術として世間に出回ったりもしている。
レランジェは魔工機械人形。研究者にとってはダイヤモンドの原石に等しい。レランジェのやつ、そっちへ送られたか。ざまあみろ。
……おっとつい本音が。
「（つーか、いくら俺がいるからっていきなり高校のクラスに転入させるとか、なんか問題が起きたらどうすんだよ。時々あいつはアホなんじゃないかって思うぜ）」
と、ブルルルッと携帯が振動した。電話じゃなくメールのようだ。先生に見つからないように俺は携帯を開く。誘波からだ。
そこにはこう書かれてあった。
【後ろを見ろ】
「後ろ？」
ザシュッ！
「ぎゃあっ！？　目が、目がぁ！？」
振り向いた瞬間、計ったように鋭利なにかが左目に突き刺さって俺は悶えた。取って見ると、先端をこれ以上ないってくらい尖らせた紙ヒコーキだった。
「おーい、白峰、どうした？」
「いえ先生、なんでもないです。目にゴミが入っただけです」
俺は涙目で嘘をつく。岩村先生は何事もなかったかのように授業に戻った。隣を見ると、「あははは っ」とリーゼが遠慮なく笑っていた。そこ、笑うな！
俺は恐らく誘波の風に乗ってきたであろう紙ヒコーキを展開し――
――ふう、と息をついてまだクスクス笑っているリーゼに言う。
「（とにかく、授業が終わったらいろいろ案内してやるから、今は

大人しくしとけよ）」

目立つな、というのは既に無理なんで言わなかった。

二章　風と学園と聖剣士（5）

リーゼが学校でなにかをやらかすんじゃないか、という俺の心配は杞憂だった。

恋人の件は日本語がよくわからなかったということにして、関係は昨日道案内をしただけということで落ち着いた。クラスにいる数人の異世界人は事情を知っているし、桜居はまあ、適当な異世界の物品で釣っておけば心配ないだろう。

なんにしてもリーゼは授業にも興味を持って臨んでいたし、休み時間は俺がフォローしつつもクラスメイトと打ち解けていった。今まで友達なんてできたことなかっただろうから、人付き合いが楽しいのかもしれない。

俺はリーゼに対する認識を改めなければいけないな。

無垢だけど馬鹿じゃないし、好戦的だけど破壊衝動があるわけじゃない。自信満々で威張り気味ではあるが、他人を支配しようとは考えてもいない。

リーゼは、ただ退屈を嫌って本能のままに行動しているわけじゃなかったんだ。

放課後になると、俺は約束通りリーゼを連れて市街を練り歩くことにした。これでも俺はけっこう律儀な方なんだぜ。

というのはまあいいとして、街の散策は俺にも目的がある。

誘波が飛ばしてきた紙ヒコーキ。あれは指令書だ。なぜ紙ヒコーキかといえば、単純に誘波の悪戯心だろう。現に俺は絶妙なタイミングで目にダメージを受けたしな。

俺はもう一度紙ヒコーキだったものを広げて黙読する。

【レイちゃん、目は大丈夫ですか？】破ってやろうと思ったね。

【少々厄介なことになりました。リーゼちゃんの件でこちらに迷い込んできた者ですが、まだ見つかっていないのです。それどころか、

被害者がでちゃいました。まるで生気を抜かれたように衰弱した昏睡者が何人も病院に運ばれています。なので異界監査官の皆さんにも捜索に加わってもらうことにしました。放課後で構いませんので、レイちゃんは駅周辺を捜索してください。

ＰＳ　リーゼちゃんも連れて行くように】

異常の原因となったリーゼをこちらの世界に連れてきた手前、俺は少なからず責任を感じている。リーゼを連れていく理由はわからんが、来訪者が？人？でも異獣でも、俺がなんとかするべきだと思っていたところだった。

「レージ」

国道を駅方面に向かって歩いていると、リーゼが修学旅行中の小学生みたいなはしゃぎ声で俺を呼んだ。

「さっきから凄いスピードで行ったり来たりしてるのって魔獣？あの青とか赤とかに光ってる木はなに？　あ、アレ、わたしの城よりずっと高い建物の上に浮かんでるのってなんなの？　あわっ！あのでっかいのってレージの家にあった『てれび』とかいう箱と同じだったりする？　アレは？　コレはなに？」

「ちょっと落ち着こうな、リーゼ」

自動車や信号機やアドバルーンなどを見て大興奮するリーゼは、もう初めて都心を訪れた田舎者のレベルを遥かに超えていた。

放っといたらはぐれそうで危なっかしい。ここは県下でもそれなりに大きな都市だから、迷子の仔猫ちゃんを捜すとなると骨が折れそうだ。

「いやはや、リーゼちゃんは可愛いねえ」

「そんで、なんで桜居がいんだよ」

リーゼを撮影しながら歩く悪友を半眼で睨む。そのカメラは二代目か？　ていうかリーゼも変にポーズを決めるんじゃない（カメラの説明は既に受けたらしい）。

「異界研部長として異世界人のリーゼちゃんの行動記録を作成してるんじゃないか」
「変態にしか見えねえよ。まあ、リーゼも満更でもなさそうだからいいけどよ」
「それともう一つ。お前をリーゼちゃんとデートさせるわけにはいかないんでね」
「デートじゃねえよ」
まったくこいつときたら。でも、桜居がいることに利点はある。
「リーゼちゃん、アレは車って言って、人間が移動するために作った機械なんだよ。それからアレは信号機で――」
リーゼのマシンガンのような質問に嫌な顔一つせず答えているところだ。俺の代わりに存分に働いてくれ。おかげでこっちは捜索に集中できるってもんだ。
相手は異世界の住人。異獣はもちろん、？人？であれ十中八九地球人とはなにかしらが違っているはずだ。わかりやすいところで言えば、服装だ。リーゼがコスプレ紛いの黒衣だったようにな。
「そういやリーゼ、お前の前の服はどうした？　誘波にでも預けてんのか？」
ちょっと気になったんで訊いてみる。いや別に、変な意味はないからな。
「持ってるわよ」
「持ってるって、お前薄っぺらいカバンしか持ってな――！？」
いきなりリーゼの制服が黒く炎上した。だがそれは刹那のことで、黒炎が虚空に消えると、リーゼは前のどこか魔女っぽい黒衣に着替えが完了していた。
「わたしの炎はただ燃やすだけじゃないのよ。他にもいろいろできるんだから」
ふふん、と残念な胸を張るリーゼ。桜居が「すっげ！　リーゼちゃんすっげぇ！」と騒ぎ立てるもんだからさらに鼻を高くしてやがる。

「そりゃ便利な炎だが、実行するなら時と場所を考えろ。幸い誰も見てなかったからいいものを」
「レージが訊いてきたんじゃない」
ムッとしたリーゼが言い返してくる。
「突然やるなって言ってんだ。まずは一言断れ」
「なんで着替えるのにレージの許可がいるのよ？」
「着替えじゃなくて、力を使う許可をだな」
「そんなのわたしの勝手でしょ。ルールは守ってるからいいじゃない」
「ルール以前の問題だ。力を使うとみんながパニックになるかもしれねえんだよ。こっちの世界では異能力も魔法も使えないことが普通だからな」
「それはそれで面白そうだから見てみたいわね」
「おい」
そのまま「なによ」「なんだよ」の口論から喧嘩に発展しそうになったところで、桜居が諫めるように俺とリーゼの肩を叩いた。
「まあまあ、二人ともその辺で。白峰、リーゼちゃんはこっちに来たばかりなんだからもっと優しく言ってやれよ。そんで、リーゼちゃんは今度から気をつけるってことで」
……まさか桜居に仲裁されるとは、なんだか妙に腹が立つ。
「それよりリーゼちゃん、お腹減ってない？　そこで軽く食って行こうぜ」
そう言って桜居は俺たちの返答を待たず近くのファーストフード店に入って行った。

二章　風と学園と聖剣士（6）

店内は意外と空いていた。

異世界イヴリア出身のリーゼにとって、ハンバーガーとかフライドポテトなんてものは見たことも聞いたこともないんだろうね。「ナイフとフォークは？」って貴女はどこのお姫様ですか？　ああ、イヴリアの魔帝様だっけ。

「ご注文は以上でよろしかったですか？」

俺はカウンターで店員からテリヤキバーガーセットを受け取り、俺が最後だから適当に「はい」と言って頷いた。

桜居が陣取った窓際のテーブルを見る。リーゼはハンバーガーにかぶりついて酷く感激している様子だった。どことなく微笑ましい。そうやって少しずつこちらの世界に慣れてくれれば、無闇に力を使うこともなくなるだろう。たぶん。

「それでは、ごゆっくりしていってくださいゴミ虫様」

うん、ちょっと待とうか。

「なにやってんだ、レランジェ？」

俺は店員の顔を確認して言った。横縞の白い上着に緑のスカートとバイザーという格好をしているから最初は気づかなかったが、間違いなくリーゼ専属のメイドロボだ。

「あるばいと、というものです」

「見りゃわかる。つーか、なんでもうこっちの世界に馴染んでんだよ」

まだ一日も経ってないんだぞ。学校ならまだしも、アルバイトなんてできるのか？

「魔工機械安定です」

「それで納得しろと？」

いや、よく見たらレランジェを観察するようにチラ見している怪しい客がいる。あいつらは恐らく異界技術研究開発部の連中だ。と

なると、これもなんかの実験の一つなんだろう。順応性とか。
「レージ、なにして――あ、レランジェ」
なかなか戻って来ない俺をどう思ったのか知らないが、リーゼと桜居までやってきた。
「マスター、すみません。今はこのような恥ずかしい格好で不安定です」
もう言っている意味がわからないしゴスロリメイドの方が数百倍恥ずかしいだろ。
「それはいいけど、なにしてんの？」
「あるばいと、というものです。そこのゴミ虫様の世話になりっぱなしなのは癪でしたので、レランジェはレランジェで金銭を稼ぐ安定だと考えました」
「一ついいことを教えてやる、レランジェ。こういう場では俺みたいなのを『お客様』と呼ぶんだ」
「あなた以外はそう呼んでいますが？」
この木偶人形が。いつか壊してやる。
「あーあー、思い出した思い出した。リーゼちゃんと一緒にいたメイドさんだ。へえ、レランジェさんって名前かぁ。クールビューティーってやつ？」
ポン、と手を叩く桜居はアホだから無視しといて構わない。
「監視がついてるみたいだから大丈夫とは思うが、あまり変なことすんなよ」
「承知しております。それより、お客様が列を成して不安定ですので、早く席に戻ってくれると安定します」
俺は後ろを振り返って苛立ちを抑え込んでいる客たちを確認し、その場を離れた。レランジェはその客一人一人に接着剤ででも固めたような顔で機械的に対応していく。まったく、よくあの無表情で接客が務まるな。埴輪の方がまだ愛想いいぞ。
「それじゃあ、レランジェ頑張ってね」
リーゼはアルバイトに特に面白みを感じなかったのか、「わたし

もやってみたい」などと言い出さず、席へと戻ってハンバーガーにかじりついた。今はそっちに夢中らしい。

そんなリーゼをカメラ越しに見詰めながら、俺の横に座る桜居はニヤニヤと不気味な笑みを浮かべている。

「いやぁ、幸せそうな顔して食べてるねえ、リーゼちゃん。オレはその顔見るだけでお腹いっぱいさ」

「そう？　じゃあお前のも貰ってもいいわね」

「なぁーっ！？　オレのデラックス月見バーガーがぁあああああっ！？」

自業自得だ、と思いながら俺は適当に摘まんだポテトを口に放り込んだ。

塩加減が絶妙だった。

二章　風と学園と聖剣士（7）

小休止もほどほどに、俺たちは散策を続けた。
リーゼに対するQ&Aは相変わらず桜居に担当させ、俺は周囲に気を配る。
駅が近くになってきたため人通りも増えてきた。騒ぎが起こってないってことは、この辺にはいないか路地裏にでも隠れているのかもしれない。となると、ただ駅前通りを歩くだけじゃリーゼの目的は叶っても俺の目的は叶わない。
相手が気配を垂れ流しにしてりゃ探しやすいんだけど、それなら俺が捜索に加わるまでもなく見つかっているはずだ。
「レージ、さっきからなに探してんの？　もしかして、わたしのせいでこの世界に来たとかいう異世界人？」
「なんだ、知ってたのか」
「うん、イザナミが教えてくれた。全部レージの責任にして捜索させるから協力してあげるように、とも言われたわ。なんか面白そうだから手伝ってあげる」
えーと、携帯、携帯は……と。

Ｐｒｒｒ！　Ｐｒｒｒ！　Ｐｒｒｒ！　ガチャ！

『はいはーい、こちら日本異界監査局局長の誘波さんでぇーす。最近の趣味は不思議生物を特殊ボールでハンティングすることです♪』
「呪い殺すぞてめえ！」
『その声はレイちゃ――』

ピッ！

向こうからかけて来られないように電源も切っておこう。

「白峰、お前、誘波さんに殺されても知らねえぞ」
桜居が憐れむような目で俺を見てくる。こいつは異界監査局の局員ではないが、誘波に強引に告白しようとしてこっ酷くフラレた経験から彼女の強さをよく知っている。
「うるせえ」
確かに俺はリーゼを連れてきたことで責任を感じたちゃいるが、なんかこう、さらに重くさせられた上に丸投げされたようで衝動的にやっちまったんだ。
「レージ」とリーゼが珍しく真面目な顔で言う。「レージが困ってるのはわたしの魔力のせいなんでしょ？　だったらその責任、わたしが背負うわ。半分くらい」
「半分かよっ！」
まあ、リーゼは原因ではあるが、彼女に責任はない。彼女の膨大な魔力を感じていながら、世界に与える影響を全く考えてなかった俺が悪いんだ。気持ちだけでもありがたいと思うべきだな。
「ま、この？魔帝？で最強のリーゼロッテ・ヴァレファール様が力を貸すんだから、人探しなんて日が暮れる前に終わるわよ」
「全くこの街のこと知らねえくせに、どっから来るんだその自信は？」
「いやいや、そんなリーゼちゃんが可愛いんじゃないか」
無駄に自信満々な魔帝様と、そのプロモーションビデオでも作る気でいる悪友。やれやれ、こんなパーティーで果たして目的は達成できるのか凄く心配だ。
――と、思った矢先だった。
「マテイ……魔……魔帝……魔王！　……そうか、私をこの世界に召喚したのは貴様かっ！」
障害物越しに放ったようなぐぐもった声は、どこから聞こえたのかわからなかった。

パコンッ！！　と傍にあったマンホールの蓋が天高く打ち上げられるまでは。

「下かっ！？」

俺が叫んだのと同時に、マンホールの穴から白い影が飛び出す。

それは二本足で俺たちの前に立ちはだかった。

重力の影響を受けて降ってきたマンホールが、甲高い音を立ててそいつの足下に転がる。

通行人がなんだなんだと立ち止まる中、そいつは凛とした声で口火を切った。

「？魔帝？リーゼロッテと言ったな。貴様、どういうつもりで私を異世界に召喚した！」

俺とさして年の変わらない少女だった。肌は雪のように白く、絹糸のように細い白銀の長髪は後ろで結って……俗にいうポニーテールってやつで纏めている。相好は凛々しく整っており、プロポーションもそこらのグラビアなんかよりずっといい。

一言で表わすなら、美人だ。

ただ、身に纏っているものが現代日本ではあまりにも浮いていた。西洋風の軍服にも見える衣服の上に、肩当て・胸当て・ガントレット・レザーブーツ、極めつけは絵本に出てくる王子様がつけているような純白のマントを装着している。その騎士みたいな格好にも目を引く上、腰の剣帯に挿すには長すぎるだろと言いたくなる剣が異様な存在感を放っている。本人の身長より長そうだ。

そしてなんだろう、彼女から漂うこの妙に鼻を刺激する香りは？

人のセンスや異世界の流行を否定するわけじゃないが、えらく変わった香水だ。日本人、いや、地球人には絶対に好まれそうにないそんな――

――ドブの香り。

「お前、臭いんだけど」

リーゼが堪らず鼻を摘まんだ。俺はもちろん、「わお、本物の騎士だ！」と騒いでいた桜居や周りの野次馬まで同じ仕草をする。

「う、うるさい！　無礼なやつだ！　そ、そりゃちょっと臭うかもしれないけど……隠密行動を取るには地下道が一番だと相場が決まっているではないかっ！」

恥ずかしいのか、顔を真っ赤に染めて叫ぶ女騎士（？）。ずっと下水道にいたのなら、なかなか見つからんわけだ。そして臭いわけだ。

「レージ、こいつが捜してる異世界人？」

「ああ、たぶんそうだな」

俺は誘波の指令文にあった？昏睡者が何人も病院に運ばれている？という部分を思い出す。異獣じゃなかったのはよかったが、彼女は人を襲っている可能性が高い。

「気をつけろ、リーゼ。あいつ、なにをしてくるかわからんぞ」

「わかってる。ていうか、わたしに用があるみたいだけど？」

「コソコソとなにを話している！」

警戒するように女騎士は腰の超長剣に手を伸ばす。

「お前にはどうでもいい話よ。だいたい、お前はなんなのよ？」

臆することなくリーゼが言うと、女騎士は一旦剣から手を離した。

「そうだな、こちらも名乗るのが礼儀だ。私は、我が祖国ラ・フェルデに名を連ねし聖剣十二将が一人、セレスティナ・ラハイアン・フェンサリルだ」

「長い」

なんだか凄そうな名前をリーゼは簡単に一蹴した。えっと、聖剣なんとかのセレスティナ……セレスでいいか。

「その余裕、この私を馬鹿にしているのかっ！？」

セレスのエメラルドグリーンの瞳に、刃のような鋭い眼光が宿る。彼女の剣幕に、野次馬共がざわめく。警察を呼ばれたら面倒だ。

俺はビデオカメラで撮影を続けている桜居に耳打ちする。

「（桜居、周りの野次馬を適当に退けてくれ）」

「（なあ、あの銀髪の娘はなんて言ってんだ？　オレには言葉がわからないんだが）」

「（後で教える。いいからやってくれ）」
「（はいはい、了解っと）」
桜居は俺から離れ、人あたりのいい笑顔を周囲に向ける。
「いやぁ、お騒がせしてすいません。実はコレ、オレら異世界研究部が今度の学園際で発表するための映画を撮ってるんですよ。なので、できれば固まらないでください。ご協力をお願いします」
桜居が言うと、野次馬共は「なんだやっぱり映画か」「伊海学園の制服よね」「異世界研究部？」「だからあんな格好なのか」などと言いたいことを口にして流れて行った。
「ナイスだ桜居。あとの人払いもお前に任せる」
俺まで異界研の部員にされているとこは気に食わんが、ここは目を瞑っておこう。
「今度なんか奢れよ」
「考えとく」
ジュース一本でいいや、と適当に思いながら俺は睨み合う魔王と騎士に目を向ける。〈言意の調べ〉を持ってない以上、セレスにも桜居の言葉はわからなかっただろう。
「もう一度訊く。？魔帝？リーゼロッテ、貴様はなんのために私をこの世界に招いた」
「なんのためでもないわ。お前が勝手にこっちに来たんじゃない」
「とぼけるな！　貴様が？魔帝？というのはその禍々しいまでに強大な魔力を感じればわかる。そんなやつが、意味もなくこのようなことをするわけがない！」
「そんなこと言われてもね。わたしの魔力が最強なのは仕方ないことだけど」
「そもそも、他の人々には言葉が通じないのに、貴様には通じることも疑わしいところだ！」
それはリーゼが首から提げているペンダントの効果なんですけど、と言ってもいきなりなんで順を追って説明しますか。
「あー、ちょっといいか？」

「なんだ？　手下には用はない」
「いや、手下じゃないんだが……まあいいから聞け。あんたがこの世界に来たのは事故なんだ。『次元の門』っていう異世界を繋げる扉が、リーゼがこっちに来たことでたくさん開いちまった。で、あんたはそれに巻き込まれただけってわけだ」
　簡単にさらっと説明してみると、セレスは顎に手をやってふむとしばし考え込んだ。
「つまり、やはりそこの？魔帝？のせいで、そいつを倒せばラ・フェルデに戻れるということだな」
「後半は言ってねえ！？」
「戦るって言うなら相手になるわよ」
「リーゼもすぐ好戦的にならない！」
　でも向こうもやる気満々だから戦闘は避けられそうにない。場所を変えないと大変なことになる。この辺りであまり周りに迷惑をかけないような場所は――
「今すぐ貴様を倒したいのは山々だが、ここでは関係ない者も巻き込んでしまう。場所を変えたい」
　おや？　まさか彼女の方から申し出てくるとは……もしかして、彼女は無闇に人を襲うようなやつじゃないのか。
「どこでも同じよ。殺し合うならさっさとやりましょ」
　……少なくとも、ここにいる魔帝様よりは周りのことを考える善人だ。
「丁度いい場所が近くにある」俺はリーゼが余計なことをする前に言った。「近々取り壊しが決まったオフィスビルで、付近は立ち入り禁止になっているから人もいない」
「ふむ、ならばそこへ行こう」
「えー、どこでもいいじゃない」
「暴れる時は他人に迷惑のかからない場所でやる。それがこっちの？ルール？なんだ」
「む、だったら仕方ないわね」

とりあえずリーゼも説得したところで、俺は誘波に連絡しておこうと思って携帯を取り出した。さっきのこともあるから多少の勇気が必要だったが、現在の状況を報告して味方を集めておいた方がいい。

携帯を開くと画面は真っ暗だった。

あ、そうか、電源切ってたっけ。起動するまで多少時間がかか――

バチィン！！　と俺の手から携帯が弾き飛ばされた。

なにが起こったのかわからず、俺は自然とセレスを見る。彼女は抜き身の超長剣を俺に向けて睥睨していた。

いくら剣が長くても届くような距離じゃないはずだ。

「それが通信装置だというのは周りの者を見て知っている。仲間を呼ばせるわけにはいかない」

手が痺れてやがる。こいつ、今、なにをしたんだ？

「ふぅん、面白くなってきたじゃない」

リーゼが不敵に笑う。俺と人避けをしていた桜居はポカンとしたままだ。

「さあ、案内してもらおう」

凛とした口調で言って、セレスが剣を鞘に納めた。

二章　風と学園と聖剣士（8）

「私は盗賊狩りの任務の帰りだったのだ。早く報告に戻らねばならないというのに、まさか魔王退治までやることになるとは思いもしなかった」

「わたしを倒しに来た人間は山ほどいたけど、全部ザコだったわ。お前はどうかしら？」

そこら中に廃材が散らばっている廃ビルの前で、リーゼとセレスは西部劇の決闘シーンのように対峙していた。俺はビルの玄関口に腰掛けて待機。桜居は危ないんで置いてきた。俺の代わりに連絡を取ってもらいたかったしな（セレスは言葉の通じない桜居を無関係と思ってくれたらしい）。

俺はセレスの謎攻撃でオシャカになっちまった携帯を溜息と共にポケットに仕舞う。いろいろ試してみたけど蘇生させることは叶わなかった。明日にでも買い替えないと。

「なあ、お前ら、どうしてもやんのか？」

俺としてはできれば話し合いで済ませたいんだが。

「当然じゃない」と楽しそうにリーゼ。

「私は一刻も早く祖国に戻らねばならないのだ」至って真面目にセレス。

俺はここまでの道のりで何度目かの溜息を吐き、異世界の聖騎士様を見る。

「セレス」

「気安く呼ぶな！」

略称がお気に召さないらしい。でも俺は構わず続ける。

「仮にリーゼを倒せたところで、元の世界には戻れんぞ」

「フン、そんなこと、やってみなければわからない」

いや、やらなくてもわかるんだけどな――と言いかけて俺はやめた。諦めたのだ。セレスは平静を装っているが、突然知らない世界

に飛ばされて困惑していないはずがない。今の彼女になにを言っても無駄だろう。

「リーゼ、わかってると思うが、殺すんじゃねえぞ」

「あいつ次第ね」

リーゼはもう戦いたくてうずうずしている様子だった。ルビー色の瞳が久し振りの得物を見つけたハンターのようにセレスをロックオンして放さない。

「レージもわかってると思うけど、手出ししたら許さないわよ」

「それはお前次第だな」

似たような返答をすると、リーゼは少しムッとした顔で唇を尖らせた。

「私は構わんぞ。部下に手伝ってもらっても」

「そこ注意！　俺はリーゼの部下じゃありません！」

「ふふん、わたしは？魔帝？で最強なのよ。お前なんて一人で充分」

「そうか。ならば――」

セレスは流麗な動作で超長剣を鞘から抜く。

「陛下から賜りし我が聖剣、ラハイアンのサビとなれ！」

神秘的な輝きを放つ銀色の刃、普通の長剣や大剣よりも長く作られている刃根元、どことなくドイツのツヴァイ・ヘンデルにも似ている造形だ。それにあの鞘、ここからではわからないが、スムーズに抜剣できる仕掛けがあるようだな。

聖剣ラハイアンだっけ？　確かセレスのミドルネームもそんな名前だったな。剣から取ってるのか。

魔王と騎士の対決。セレスが勝てばエンドロールが流れそうだ。

両者ともが無言になり、つい息を呑みそうなほど重たい空気が場を支配し始める。

そして――

「行くぞ！」

最初に動いたのはセレスだった。

白マントをはためかせ、一鼓動のうちにリーゼとの距離を詰める。

速い！　あんなに長くて重そうな武器を持っているにもかかわらず、異界監査官の俺でもギリギリで追うのがやっとのスピードだ。
間合いに入ってからも速い。超長剣を横薙ぎに振るった動作が見えなかった。
だが、スピードでは身の軽いリーゼだって負けてはいない。
リーゼは瞬殺の一撃を飛んでかわしていた。そしてセレスの頭上で半回転し、右手の黒い魔法陣から黒炎弾を発射する。
セレスが聖剣で黒炎を弾く。その向こうでリーゼはすたっと軽やかに着地した。
「ふぅん、やるじゃない」
「今のはただの様子見だ」
セレスの剣が宙を突く。瞬間、剣が強く煌めき、眩いなにかが飛び出した。それはリーゼの横を掠り、背後にあった鉄骨をくの字に曲げる。俺の携帯を無き者にした力だ。
僅かに瞠目するリーゼ。その白磁のように白い頬から、つーと赤い液体が流れた。
「ほう、？魔帝？とやらの血も赤いのだな」
本気で感心したように言うセレスに対し、リーゼはニィと不敵に笑って自分の血を指で拭い、嘗めた。その動作がなんとなく艶めかしい。
「いいわ。凄くいい感じ。レージと会ってから面白いことが絶えないわね」
強がりでもなんでもない。リーゼは心の底から状況を楽しんでいるようだ。
「そう言っていられるのは今のうちだ。すぐになにも言えなくなるのだからな」
「お前がね」
リーゼが両掌に黒炎を灯し、その場で両手をクロスさせるように振るう。すると、両掌の炎が三日月状になって？の字を作りながら空中を走った。俺の知らない技だが、散乱している廃材がスッパリ

と焼き切れたのをこの目で見た。斬撃だ。
セレスの聖剣が神々しく輝く。
「甘い！」
声と共に剣を振るうと、光の渦のようなものが剣から飛び出して黒炎と衝突した。

ギギギギギギギギィン！！

チェーンソーをぶつけたような戟音が辺りに響く。
数秒の均衡。その後、二つの力は互いに混ざり合うように相殺した。
セレスは攻撃の手を休めない。相殺した力が空中に溶け切る前に、再び光の渦を飛ばしてリーゼを狙う。
あの光の渦も斬撃だ。充電カッターのように高速回転する光の刃。
リーゼはサイドステップでそれをかわそうとしたが——避けきれなかった。リーゼの纏っている黒衣が千切れ、脇腹から鮮血が吹き出す。
「痛っ……」
リーゼの相貌が苦渋に歪む。しかし、口元は笑っていた。
「あははっ！　こんなに自分の血を見たのは階段で転んで下敷きになった魔獣の角が刺さった時以来ね」
興奮し、高揚したリーゼはいやに高笑いしながら複数の炎弾を叩き込んだ。セレスは顔色一つ変えずに全ての炎弾を剣で捌いている。聖剣十二将とかいう四天王的な称号を名乗っていたが、確かにセレスの実力は本物だ。
と、セレスの方ばかり眺めていた俺は、リーゼの姿が消えていることに気づくのが遅れた。
「ど、どこに消えた？」
セレスも気づいて慎重に周囲を見回す。そんな彼女の背後から、突如黒炎の柱が噴き上がった。

「あはっ！　こっちこっち！」
黒炎柱から飛び出したリーゼがセレスの胴に蹴りを入れる。計ったのか、そこはリーゼが怪我した箇所と同じだった。
「く……転移だと……」
呻いてよろめくセレスに、リーゼは遠慮なく手刀や蹴りのコンボを繋げる。セレスは最初の何発かは食らっていたが、あとはガントレットや肩当てをうまく利用して凌いでいる。それにしても、リーゼの格闘術はレランジェのそれと似てるな。
「ちょ、調子に乗るなっ！」
ブォン！　と超長剣が一閃される。リーゼはヒラリと後ろに飛んだ。
「近接戦は苦手だった？」
「そんなことはない！」
セレスは地面を蹴って高く跳躍する。剣が光輝を放ち、兜割の要領でリーゼに叩きつける。リーゼがサイドステップでそれをかわすと、その動きに合わせてセレスはまた剣を振るう。
あれほどの大振りから即座に次へ繋げるとは、とんでもない身体能力だ。槍レベルのリーチがある剣だけに、リーゼは間合いから抜け切れていない。
「もらった！」
フ、と勝利の笑みを作るセレスだったが、リーゼは咄嗟に小さな黒炎の爆発を起こして剣閃を回避した。爆発の衝撃を利用したリーゼは大きく距離を取る。
セレスは舌打ちすると光の渦で追撃する。だが、リーゼは黒炎をシールドのように展開してそれを受け止めた。
「これってその剣の力かしら？　それともお前自身の力？」
炎に呑まれるように消えゆく光の渦を指してリーゼが問う。
「答える義理はない」
しかし、セレスはきっぱりと切って捨てた。そりゃそうだ。普通決着がついてないのに、自分の手の内をバラすやつはいない。俺だ

って……したことあったな。でもアレは勝利を確信した時だからノーカンで。

「わたしは自分の力よ」

バラすやついたよ。だが――

「この炎はわたしの魔力を燃やしたものだから、わたしの好きなように扱うことができるの。性質を変化させたり、炎を使って物を移動させたり、遠距離に魔力を飛ばして術を発動させることだって簡単にできるわ」

リーゼも、勝利を確信しているからだ。

「――ッ！？」

セレスは今気づいたみたいだが、傍観している俺は最初から知っていた。リーゼが転移する前くらいからだ。

セレスの上空にリーゼの魔力が集中していた。感づかれないように徐々に魔力を放っていたみたいだ。赤みを帯びてきた空のカンバスに、黒の魔法陣が大きく描かれている。

「ふふ、灰になりなさい！」

実に残虐な笑みを貼りつけたリーゼの弾んだ声が、合図となった。

轟！！　と。

凄絶に燃え盛る黒炎が、一条の柱となって呆然と天を見上げるセレスに落ちた。

二章　風と学園と聖剣士（9）

銀髪の剣士を呑み込んだ真っ黒い炎は、大地を串刺しにするように激しく燃え猛っている。

まるで天の裁き、いや悪魔の所業だ。あれだと骨も残らないんじゃないか――って！

「リーゼ！　殺すなって言っただろ！」

「大丈夫よ。加減してるから」

「加減してこれかよ！？　てかさっき灰になれとか言ってなかったか！？」

「だから大丈夫だって。ほら」

力の発動が終わり、黒炎の柱が風に流れるように消えていく。

俺は目を瞠った。セレスは、聖剣を天に掲げるようにしたポーズで生存していたのだ。彼女の周りに薄らと光の膜みたいなのが張ってある。防御陣ってやつか。

だが、無傷ってわけじゃなさそうだ。彼女はところどころに火傷を負っていて、息も微かに乱れている。

光の膜が消える。

「まだやる？」

「あ、当たり前だ！　私は、貴様を倒してラ・フェルデに帰るんだ！」

まだそんなことを。そろそろ落ち着いてくれてもいい頃合いだろうに。

セレスは剣を地面と平行に構え、俺の携帯を壊した光の弾丸を連射する。射出の間隔はマシンガンと大差ない。

「む！」

余裕をぶっこいていたリーゼは、割と深刻な顔になって光の弾丸を避けたり黒炎で防いだりする。しかし、体のあちこちに掠って次第に動きが鈍くなっていく。

これは、そろそろ俺も止めに動くべきか。
と思ったら、リーゼは超巨大な火炎流を放って弾幕ごとセレスを呑み込もうとしやがった。そのはちゃめちゃな攻撃に、セレスは舌打ちして俺と同時に横へ全力疾走した。
なぜ俺も走ったのか？
「リーゼてめえコラ俺まで殺す気かっ！？」
セレスが避けようが避けまいが、波濤と化した炎は間違いなく俺も丸呑みしていたんだ。避けなきゃ死んじゃうだろ。
黒炎が廃ビルに衝突する。二階部分までが一瞬で揺らめく黒一色に染め上がる。物理的衝撃も相当なものだったようで、心なしかピサの斜塔くらい傾いたように見える。倒壊しなかったのはリーゼの力加減のおかげと信じたい。
俺がビルの状態にハラハラしていた間に、セレスが接近戦に持ち込んだようだ。光纏う超長剣を振るう彼女に対し、リーゼは黒炎を四肢に纏って格闘している。
剣閃が煌めき、黒炎が踊る。
かわしたらかわされ、一撃入れられたら一撃入れる。その繰り返し。
「これ、終わるのか？」
二人の実力はほぼ互角に見えた。三日三晩戦いが続くと言われても否定できない。
さっさと終わってもらいたい俺としては、いい加減にドロー試合の判定を下したい。
『レイちゃん、聞こえますかー？』
止めに入るタイミングを見計らっていると、俺の耳におっとり声が飛び込んできた。
「誘波！？　なんで？　どこにいるんだ？」
こいつはどうしていつも唐突なんだ。
『あはは、もしかして私を捜してます？　ふふふ、無駄ですよぅ。私はそこにいませんし、レイちゃんの声は私には聞こえません。レ

イちゃんの携帯が繋がらないから、私の声だけを風に乗せてそこに届けているのですよ』

そんなこともできるのかよ。初めて知った。今まで携帯ばかりだったからな。まあ、会話ができないならそっちの方が便利か。

『桜居ちゃんから聞きました。昨夜の来訪者が見つかったみたいですね。リーゼちゃんと戦ってるのがわかります。それにしてもリーゼちゃん、やっぱり凄い魔力ですねぇ。相手の方もなかなかお強そうです。その辺りはどう思いますか、解説のレイちゃん』

誰が解説だ！　と思うが突っ込んだところで意味はないので閉口しておく。てか、いい加減そのあだ名で呼ぶのやめてもらいたい。

『私もそこへポップコーン持参で駆けつけたいところですが、残念ながら録り溜めたアニメの観賞で手が離せないのですよー』

ツッコミ待ちか？　こっちの声聞こえないくせにツッコミを待ってるのか？

「ったく、一体なんの用だよこのアマは」

『そろそろレイちゃんが「一体なんの用だよこの美少女は」と吐き捨てる頃合いなのでお話ししますね』

「……」

若干美化されてる部分があったけど、本当に俺の声は聞こえてないんだろうな？

『もうすぐみなさんが到着すると思います。それをお伝えしたかっただけです』

それ以後、誘波の声は聞こえなくなった。

リーゼとセレスはまだ熾烈な戦いを繰り広げている。両者ともボロボロだが、趨勢はどちらにも傾いていない。彼女たちよりも、戦闘の被害を受けた地面や廃材や建物なんかが悲惨な状態になっていた。

と――

ガガガガッ！！　という道路工事のような騒音がどこからともなく聞こえてきた。リーゼたちの仕業ではない。なにか巨大なもの

が、まっすぐにここへ接近している音だ。
リーゼとセレスは聞こえてないのか気にしてないのか、構わず戦い続けている。
炎の黒と、光の白が交差するモノクロバトル。
それをぶち壊しにするように、いくつもの小さなクレーターができている地面が、ごもり、と激しく隆起した。
「なに？」
「なんだ、これは！？」
流石の二人も戦いを一時中断し、申し合わせたかのように左右へ飛ぶ。
土や石やアスファルトを撒き散らしながら地上に現れたのは、全長五メートルはあろうかという機械仕掛けの巨人だった。
驚愕する少女二人とは対照的に、俺は随分と落ち着いた顔をしていたと思う。
「みなさんが到着する頃、ね。遅えよ」
俺は巨人の全体を見通す。全身鎧を纏った西洋騎士みたいな青いフォルムはバランスよく、槍の先端をドリルに変えたような武器を右手が掴んでいる。宇宙の激戦地帯でも転戦していそうな人型ロボットだ。
が、その機体には頭部がなかった。
代わりに、左掌の上に一人の青年が屹立している。まるでアイルランドの首なし妖精が自分の首を抱えているような絵である。
「どうやら、僕が一番のようだね」
燕尾のスーツを着た青年は、縁なし眼鏡を煌めかせてそう言った。
それを皮切りに、次々と誘波の告げた『みなさん』が機体の周囲に集い始めた。
一人は、空から降ってきた。
一人は、闇を纏って唐突に姿を現した。
一人は、廃ビルを囲む塀を破壊して飛び込んできた。

一人は、気配もなく現れ、リーゼの胸を揉んで殴られていた。

どいつもこいつも顔見知りだ。俺と誘波以外の異界監査官はまだ何人かいるが、基本的に単独行動を好む彼らが五人も集まるとは思いもしなかった。

到着順に、伊海学園の制服の上から黒いロングコートを羽織った少女と少年、薄汚れた作業服の男、上下ジャージ姿の少年――っぽい少女。異界監査官に決まった制服はないので服装はバラバラだ。

「ちょっと、なんで五人も来てるのよ……」

「俺ら、別に来なくてもよかったんじゃねえか？」

「俺的にどいつと戦えばいいんだ？」

「痛ったぁ～、ウチら女同士なんやからそんなに怒らんでもええやん」

それぞれ勝手に喋る彼らに、俺はまずなにより言いたいことがある。

「お前らもっと普通に登場できねえのかっ！　特にそこのメガネっ！」

メガネ野郎が連れてきたロボットのおかげで、地面に見事なトンネルができていた。後処理はお前がやるんだろうな？

スーツの青年がくいっと眼鏡の位置を直す。

「白峰零児、君には言われたくないな」

「俺がいつ面白い登場の仕方をした！？」

「あれは三年前、君が女の子に引きずられながら監査局へ来た時――」

「語るなっ！？」

こいつは俺の脳内人間分布では『嫌い』のカテゴリーに存在している。

「そうだね。今はそんな時じゃない」

メガネ野郎は人を馬鹿にしたように言うと、廃ビルの正門からスーツ姿の人間が十人くらい雪崩込んできた。

彼らは異界監査局の準戦闘員。つまり監査官ではない一般局員たちだ。

メガネ野郎はそれを確認してから、リーゼを、そしてセレスを見下ろす。

「争いはここまでにしてもらいます。僕は異界監査官のスヴェン・ベルティル。異世界の騎士殿とお見受けします。あなたには、我々と同行していただきたい」

努めて丁寧な口調で告げるメガネ、もとい、スヴェン。どうでもいいけど、言うなら言うでロボから降りろよ。失礼だろ。

「ちょっとスヴェン！　なんであんたが仕切ってるわけ！」

「噛みつくなって、面倒臭い。俺らはもう帰ろうぜ」

「俺的に、まずあのメガネからぶっ壊す」

「むむむ、あっちの騎士はんもこれはどうして魅力的やな！」

やかましい外野にスヴェンは眼鏡を押さえる。

「君たちじゃ話し合いにならないだろう？」

否定できん。この面子ではスヴェンが一番口でまとももそうだ。

セレスは額に汗を垂らし、周囲の面々を見回して奥歯をギリッと鳴らす。

「？魔帝？リーゼロッテ、いつの間に仲間を呼んだ？」

「わたしは知らないわよ。ていうか、あいつら誰？」

セレスが親の敵でも見るような目を俺に向ける。美人に睨まれるとなんかこう……気分悪くなるね。俺はそういう顔より、普通に笑った顔の方が好きだな。

「大人しく指示に従っとけよ、セレス。別に取って食われるわけじゃないさ。リーゼなんかと不毛に争うより、俺らについてきた方が元の世界に帰れる可能性は高いぜ」

俺は彼女を安心させるように柔らかく言ったが、セレスの焦燥の色に変化はない。そんな彼女をさらに追い詰めるように、局員と監査官が取り囲む。

俺はその輪には加わらず、戦いに水を差されて膨れっ面になって

いるリーゼの横に並んだ。リーゼは機嫌悪そうではあるが、チラチラとスヴェンの首なしロボを気にしている。興味あるのか？

「あなたを護送する前に、一つ訊きたいことがあります」

首なしロボから飛び降りたスヴェンが、輪に分け入って問いかける。

「何人もの罪のない一般人から生命力を奪い、昏睡状態にしたのはあなたですか？」

セレスはキョトンとした。

「なんのことだ？　確かに四人ほど昏倒させたことは認めるが、それは正当防衛で少し気絶させただけだ。生命力を奪うなどといった行為はやっていないし、私にはできない」

局員たちに動揺が広がる。スヴェンたち異界監査官は顔を見合わせ、非難めいた視線を俺に突き刺した。彼らの目が言っている。『確かめずに戦っていたのか？』と。

その時できた大きな隙を、セレスは見逃さなかった。

「私はラ・フェルデの聖剣十二将だ。異世界とはいえ、なんの理由もなく無関係の者に手を出すなど絶対にするものかっ！」

聖剣ラハイアンで掬い上げるように弧を描く。スヴェンの眼鏡が弾き飛んだ。

そして振り上げられた超長剣を、セレスは勢いよく地面に突き立てた。

瞬間、眼球を灼いてしまいそうな閃光が剣から放出された。

望遠鏡で太陽を見た時のように視界が真っ白に染まる。油断した。たぶん、誰もが目を開けていられなかったと思う。

視力が戻ってくる。セレスは、半壊した塀の上に飛び乗ったところだった。

「逃げられた！？　追うわよ！！」

「だったらお前一人で行けよめんどくさ痛だだだだだ腕がもげる

っ！？」

「ハッハーッ！　そう来なくっちゃ俺的に面白くねェな！」

「彼女を捕まえるんはウチに決まっとる。その後は……ムフフ」

「め、眼鏡……眼鏡はどこに……」

逃走したセレスを異界監査官の四人が追う。局員たちも逡巡した後に走り去った。

残りは俺とリーゼと首なしロボ、それと地面に這い蹲っているスヴェンだけである。

セレスはかなり体力を消耗しているはずだ。監査官四人相手に逃げ切れるとは思えない。捕まるのにそう時間はかからないだろう。

「正直、俺らはもう追わなくていいと思うが、どうするリーゼ？」

「わたしお腹減った」

お嬢様がすっかり興醒めしたようなので帰路につくことになった。

「眼鏡……眼鏡……」

ちなみに、スヴェンの眼鏡は局員たちに蹂躙されて粉々になっていた。

二章　風と学園と聖剣士（１０）

「全くもって意味がわかりません」
帰宅早々に俺が目を剥いたのは、完璧に修理されたリビングだった。すげえ、なにもかもが元通り。時間が巻き戻ったみたいだ。
「あの『テンチョー』という人間には呆れる安定です」
元通りは元通りでもこれら全部新品なわけで、俺は心躍ることを禁じ得なかった。パソコンとかそろそろ寿命だったしな。誘波、グッジョブ！
「生意気なお客様を殴り倒しただけで馘首とは、やはりあの人間は抹殺安定でした」
でもできれば最新機種にしてほしかったけど、まあそこはいいや。とにかく部屋が直ったことを喜ぼう。朝ぶっ壊れて、夕方に直る。うん、仕事が速くてけっこう。
「――って速すぎんだろっ！？」
「虫ケラ様、レランジェの愚痴を聞いていませんね」
なぜか理不尽にも殴られた。
「なんだ、いたのかよレランジェ」
てっきり学校の理科室にでもある夜中に走り出しそうな模型の類かと思った。
「レランジェ、お腹減ったから食事の用意をしてちょうだい」
「了解です、マスター。今日はハンバーガー安定です。ところで、なぜそのようにボロボロなのですか？　そこのゴミカス様になにかされたのであれば即刻樹海に埋める安定ですが」
やめろ。ホントに失礼だなこの木偶人形は。なんで帰ってきたんだ。研究者どもに分解でもされてりゃよかったのによ。……いかん、またつい本音が。
「ちょっと遊んできただけよ。服はそのうち再生するし、傷も明日には治るから気にしなくていいわ」

リーゼの黒衣には自然治癒力があるらしい。となれば洗濯もしなくていいのか？　なんて便利なんだ。あー、でも下着は流石に洗うよなぁ。

ん？　ちょっと待て、おかしいぞこの状況。

「よくよく考えたら、お前らわざわざ俺ん家に泊まり込む必要はねえだろ。誘波に言えば部屋の一つや二つくらい用意してくれるはずだからな」

「確かに誘波様はそのようなことを仰っていましたが、マスターがお断りしました」

「リーゼが？　なんでだ？」

俺はソファーにもふっと身を沈めたリーゼに訊く。彼女は『なに当たり前のことを』と言いたげな目を向けて答える。

「ここをわたしの城にするって決めたからよ。他に理由はないわ」

「ここは俺の城だ！」

「レージの城はわたしの城よ。文句は言わせないわ」

くそっ、なんてジャイアニズムだ。こうなってくるとなにを言っても無駄だろうから諦めるしかない。相手は常に変化を求めるリーゼだ。しばらくすれば、この家での生活にも飽きて他へ移ってくれると思う。きっと。

「ん？　レージ、どこ行くの？」

「風呂。イヴリアに行ってから入ってなかったからな。メシの前に入ることにする。俺はこれでも綺麗好きなんだ」

てことで、浴槽をお湯で満杯にするのに約十五分。

俺の個人的趣向として、シャワーは嫌いだ。別にシャワーを使わないわけじゃない。シャワーのみで風呂を済ますという行為を邪道と思っているだけだ。やっぱ日本人は肩までドップリ浸からないとな。俺は半分異世界人だけど、心は純然たる日本人なんだ。

俺が入ると湯船が一気に溢れて洪水を起こす。この瞬間がたまらなく爽快だ。水道代が勿体ないと言ったやつはそこに直れ。この感

動を三時間くらい語ってやる！
しかし風呂ってのはいいね。疲れが取れて行く感じ。俺、今回は戦ってないけど。
あと、じっくりと考え事ができる。

『私はラ・フェルデの聖剣十二将だ。異世界とはいえ、なんの理由もなく無関係の者に手を出すなど絶対にするものかっ！』

あの時、セレスはそう言った。その言葉が本当か嘘かはわからないが、異世界の者が関わったと思われる被害者がいる事実は確かだ。俺自身が確認しているわけじゃないけど、誘波は『仕事』に関して嘘はつかない。
もしセレスの言葉が嘘だとしたら、彼女はなんのために人を襲ったんだ？　被害者は全員生命力を吸われたように衰弱しているらしいから、セレスの力が俺みたいに他人からエネルギーを奪うことで使用できるとか、他人の生命力を吸って生きている種族とか、それとも別の理由があるのか……。
そこら辺は明日にでも監査局に行けばはっきりするだろうけど――
「俺個人としては、セレスは犯人じゃないと思うがな」
リーゼとの戦いだって、一般人に危害が加わらないように場所を変えたいと提案してきたのは彼女なんだ。
セレスが犯人でないなら、この世界で暮らしていた異世界人がなんらかの理由で人を襲い始めたか――
「異世界からの来訪者がセレスの他にまだいるってことになるな」
「へえ、じゃあもっともっと面白いことが起こりそうね」
「ああ、そうだな――って！？」
リーゼがなんの躊躇いもなく風呂場に侵入していた。
「待て待て待て待て！？　なに勝手に入ってんだてめえっ！？」
俺がいること知ってただろ？　しかもご丁寧に服は着たままとは。
そこはまあ、安心点であり残念点でもあるけど。

「フロってのに興味があったのよ。ふぅん、ここで体を清めてるのね。イヴリアの城じゃレランジェに体拭いてもらうだけだから、こういうのって初めてだわ」
「わかったならさっさと出ろ！」
「なんで？」
「理由その一、俺は男でお前は女。
理由その二、服着たまま入るのはマナー違反。
理由その三、俺が困る。ここ重要」
俺が狭い浴槽に身を隠しながら丁寧に指を立てて説明してやると、リーゼはなにかに気づいたように手を叩いた。
「服脱げばいいのね。どうりでベタベタして気持悪いと思った」
どうしてそうなる！
リーゼの黒衣が発火。
俺はタオルで前を隠しつつ出口に問答無用の猛ダッシュ。
注意すべきはここで転んでしまうラブコメ的ベタ展開。
サーチ開始。……よし、出口までのルートに障害物はなし。あとは俺が『実はドジっ子でした』でないことを祈――――足を引っかけられた。
盛大にすっ転ぶ俺。「ぶるはぁ！？」とかいう変な悲鳴を出したのも俺。
うつ伏せに倒れる俺の背中に、ずしっとなにやら生温かい足の裏的感触が伝わる。リーゼの姿は見えないが、たぶん今は生まれたままの格好なんだろうなぁ……。
んで、なにゆえ足蹴にされてんだ俺？
「なんで逃げるのよ？　レージがいないとフロの使い方がわかんないじゃない」
「それは俺とお前が共に服を着てないと教えられないことなんですよお嬢様」
なぜこのお嬢様は触れられるのを嫌がるくせに見られるのは平気なんだ！

「マスター、今実に愉快な音と悲鳴が――直ちにそこの変態を排除します」
「待てレランジェ！？　ここで魔導電磁放射砲はマズイ！！」
説得の末、俺はレランジェにボコられただけで命は取り留めた。
しかしこの暴力が理不尽だと思うことは俺の気のせいではないはずだ。

三章　異界監査官（1）

チチチ、という小鳥のさえずりが爽やかな朝を告げる。
時刻は七時十分前。学校がある日はだいたいこの時間に起床するようにしている。
独り暮しになってからリビングのソファーをベッド代わりにしている俺は、まず体を起こす前に大きく伸びをして深呼吸する。朝の澄んだ空気が頭を一気に覚醒してくれるからだ。
昨日はリーゼが奇怪な起こし方をしてくれたが、今日の目覚めは至って平和になりそうだ。

そこで包丁らしき凶器を思いっ切り振り翳しているメイドさんさえいなければ……。

「――ってあっぶねえっ！？」
「チッ、残念です。外しました」
ソファーに突き刺さる出刃包丁から深刻な命の危険を感じ取り、俺の意識の覚醒率は途中経過もなくカンストした。
「レランジェてめえ殺す気かっ！？」
「はい」
「肯定すんな！」
「冗談です。カス虫様をお起こししようとしただけですがなにか？」
「逆に永久に目覚められなくなるわっ！」
「このレランジェがいれば毎朝の起床は安定ですね」
「不安定だ！　恐怖に怯えながら一睡もできなくなったらどうする！」
今度から自分の部屋で厳重に鍵かけた上に刀を握って寝た方がよさそうだ。
「それはさておき、朝食を作ったのですが味見をしていただけませ

んか？」
「あん？　なんでだよ？」
「こちらの世界の料理を作ったことがないので、マスターのお口に入る前に見ていただきたいのです」
そういえば、昨日の朝は誘波が乱入してきて結局朝食抜きだったし、夕飯はバイト先から貰って来たらしい大量のハンバーガーだけだった（リーゼは喜んでいたけど）。
「あー、わかった。そういうことなら味見役になってやるよ。ただし、この前みたいに毒針とか入ってたら可燃ゴミの日に出すからな」
俺は洗顔とトイレを済ませてからリビングの隣にあるキッチンへと向かった。
食卓の上に料理が並べられているのを確認する。ほどよい半熟の目玉焼きは寸分違わず中央に黄身が鎮座し、その横にあるウインナーソーセージは皮が破れない程度の絶妙な焼き加減だった。一口齧ればパリッという爽快な音と共に芳醇な肉汁が口の中に溢れると予想される。それらメインディッシュの周りは新鮮で瑞々しいレタスのサラダが彩りを整え、茶碗に盛られた白米とアサリの味噌汁からは湯気が立ち上っている。
正直、驚いた。文句なんてない。寧ろ褒美を出してもいいくらいのできだ。
「すごいな。俺も料理はできる方だが、ここまで綺麗には作れねえよ」
まるで食卓が宝石のように輝いて見える。俺は素直に感心したが、疑問点もあった。
「こっちの料理知らねえのに、なんでこんなもんが作れたんだ？」
「昨日、誘波様にこの世界の家事雑事についてお訊ねしたところ、このような魔導書をいただきまして」
と言ってレランジェはどこに持っていたのか一冊の本を取り出した。『クッキングシーカー』とかいう題名の料理雑誌みたいだ。どこが魔導書だ。

「これで気になるあのヒトもイチコロ安定だと誘波様が仰っておりました」

なにかが間違っている気もするが、ともあれ初っ端から見本以上のものを作ってしまうところは流石魔工機械安定――っと口癖が感染っちまった。

「ま、問題は味だよな」

箸立てからマイ箸を摘まみ上げた俺は、まずウインナーからつついた。外は予想以上にパリパリで噛めば噛むほど口内に旨味が広がっていく。塩胡椒の加減も完璧だった。

次いで目玉焼き。割った黄身はトロリと崩れ、しかし絶対に白身から零れない。バターで焼いているのか、濃厚な風味が舌を満足させる。ちなみに俺は醤油派だ。

レタスはシャキシャキで、米はふわふわの炊き具合、味噌汁はアサリの出汁がよく出ている。これをその辺のスーパーで売られている食材で作っているとなると、なるほど、一流シェフも土下座して謝りそうなレベルだ。

「やべ、こんな朝食初めてだ」

「イチコロですか？　死にますか？」

「……いや、死にはしねえけど」

「チッ、まだまだ修行安定ですか」

料理人がコレじゃなけりゃ金一封だな。てか、こいつは俺にどんなリアクションを求めてんだ？

「で、肝心のマスターはなにやってんだ？」

かつてない朝食に舌鼓を打ちつつ、俺はレランジェの主であるお子様……もとい、魔帝様を捜す。

レランジェはパラパラと魔導書（？）を捲りながら上階を指差した。

「睡眠安定です」

「あー、まだ起きてねえのか。なんだかんだで、昨日の戦闘で疲れてんだな」

パタンとレランジェが本を閉じた。そしてなにやら灰色の瞳で俺を見据えてくる。

「レランジェはこれから異界技術研究開発部へ行ってきます。新たな『あるばいと』も探索安定です。ですので、レランジェがいない間はマスターのことをお頼みします」

「あ、ああ、そこら辺はよーく監視しとく」

いつリーゼが学園生活に飽きて暴れ出すかわかったもんじゃないからな。

「これは警告ですが、もしもマスターになにかあったら処刑安定です。本来なら片時も離れたくないところ、この世界で生活するために仕方なく守護役を譲っているのです」

「いやまあ、そこは無理にバイトする必要は……」

「あります」

「……そうですか」

伝えることを伝えたレランジェは速やかにキッチンから出て行った。数秒後、玄関のドアの閉まる音がする。

しかしなんだろうね、あの頑なな意志は。そんなに俺に生活費を養ってもらうのは嫌ですか。まあ、俺としては助かるからいいけれど。

「あ、そうか。そろそろリーゼも起こさねえと。また遅刻しちまう」

俺は食いかけの食事を一旦置き、二階の両親の部屋へと足を動かす。

ドアの前に立ち、一応大きめにノック。……返事がない。ただ熟睡しているようだ。

「リーゼ、入るぞ」

遠慮気味にドアを開いて中に入ると、案の定、ダブルベッドを一人で占領しているリーゼを発見。布団を跳ね除け、黒のネグリジェっぽい寝衣姿が露になっている。それも炎でコスチュームチェンジしたものだ。一体どこにそんな服を収納しているのか俺には皆目見当がつかない。

「起きろリーゼ、メシだ。メシの時間だぞ」
健やかな寝顔を悪いと思いながらペシペシと叩く。
「ぅん……あ……れーじ？」
二十回くらい叩いてやっと目覚めたリーゼが、体を起こして眠い目を擦りつつ俺を認識する。
「おはよう。学校に遅れるからさっさと起きろ」
「うん……おやすみ……」
瞼が落ちてパタンと倒れるリーゼ。繊細で可憐で悩みなんてなさそうな寝顔。穏やかな寝息も聞こえ始める。
「……」
俺は黙って小学生の時に貰った防犯ブザーのコードを引き抜いた。

三章　異界監査官（2）

デジャブ。
日本語で既視感。
誰もが微弱ながらそういった感覚を経験したことがあると思う。
俺なんかしょっちゅうだ。電源切った覚えがあるのに携帯が鳴るとか、頼んでもないのに異世界臭がプンプンする下手物料理が出前されるとか、目が覚めると実験室らしき部屋の寝台に固定されているとか……。
まあ、そのほとんどが糸を辿れば誘波に行きつく。
だから――

「白峰聞いたか？　今日もこのクラスに転校生が来るんだってよ」
桜居が朝のＨＲ前にこんなことを言い出し、俺の席の左側に見知らぬ机が置かれていれば、俺がなにを予想したのかは語らずとも知れるだろう。
「え～と、昨日の今日で驚いたと思うけどー、こちら転入生のセレスティナさん。みんな仲良くねー」
相も変わらず適当な紹介をする担任・岩村先生（彼氏いない歴三十三年）の横に、銀髪ポニテの美少女が学園の制服を着て兵隊のように直立している。彼女が背負っている白い布に包まれた棒状の物体はたぶん聖剣ラハイアンだ。物騒なモノ持ってくんな。
いくら？外人？の転入生や留学生が多いことに定評のある伊海学園でも、二日連続、それも同じクラスに来るなんてことは稀だ。よって、セレスを前にしたクラスメイトたちのざわめきには戸惑いが混じっている。
「あっ」
セレスが俺をエメラルド色の瞳に捉えた。
彼女は複雑な表情で俺を見詰め――

――天使のような微笑みを浮かべた。

「「「これより白峰零児の取り調べを行う！」」」

「なっ！　てめえらなんで俺の周りに集――だからその縄はどこから出してんだ！？」

クラスの連中の対応は災害救助をする自衛隊よりも迅速だった。

「隊長、白峰を縛り上げました！」

「うむ、広辞苑か六法全書を持ってこい。拷問に使う」

「なんでまたてめえが仕切ってんだ桜居っ！？」

今度は男子だけじゃなくなぜか女子も俺を尋問する輪に加わっている。「リーゼロッテさんと二股？」「修羅場よ修羅場♪」「キャー♪」「白峰くん本命はどっちなの？」とかいう黄色い声が聞こえるけど空耳と思いたい。

わいわいがやがやと昨日よりも騒然となった教室に、岩村先生が窓の外を眺めつつぼそっと一言。

「結婚したい」

男子が速やかに自分の席に避難した。だが、まだ女子部隊が俺を囲っている。なんて鬱陶しい。

「同性愛が認められるのはオランダだったかなー？」

女子も迅速なる対応を見せて着席した。俺も急いで縄を切る。

一瞬で静寂に包まれた教室。若干唖然としていたセレスが、気を取り直すようにゴホン、と咳払いをした。

「ああ、只今紹介に預かりました、セレスティナ・ラハイアン・フェンサリルです。この学校どころかこの国のこともまだよく知らない身ですので、皆さんに迷惑をかけてしまうこともあると思いますが、どうかよろしくお願い致します」

完璧な営業スマイルと自己紹介文だった。俺は彼女を固いイメー

ジで捉えていたけど、見直す必要がありそうだ（猫を被っているなんてことはないと思う。たぶん）。
セレスの自己紹介により、クラスの沈静が瓦解した。『戸惑い』も全て『好奇心』へと移行する。当然、そうなってくると昨日のように質疑応答タイムが始まるのだった。
お前ら元気だなと思っていると、斜め前から桜居が話しかけてきた。
「なあ、彼女って昨日の騎士だよな？　一体どうなってるんだ？」
「俺が知るか。てっきり今頃は監査局の個室にでも軟禁されてると思っていたが」
俺の『学校が終わり次第監査局に向かう計画』の意味が早々に砕かれてしまった。まあ、聞きたいことをずっと早く本人に訊ねられるので、結果オーライと言えばそうなる。
「どうせまた誘波の仕業だろうな」
「言葉が通じるのはどうしてだ？　昨日はわからなかったぞ」
「ほら、あいつ銀色の腕輪つけてるだろ。あれは〈言意の調べ〉の別バージョンだ」
ああ、と桜居は納得すると、疑問が全部晴れたような顔をしてセレスを熱い視線で嘗め回す作業に取りかかった。この変態が。
「あいつ、またわたしを狙ってきたのかな？　だったら昨日の決着をつけれるわ」
横からの声はリーゼだ。まだ眠そうだな。あと決着をつけるとしても別の場所でやってくれ。
「その辺はこの後訊いてみるさ。セレスがどういうつもりなのか、誘波がどういうつもりなのかをな」
聞き慣れたチャイムの音がＨＲ終了を告げる。

三章　異界監査官（3）

「いい景色だ」
高等部校舎の屋上で、落下防止用フェンスに手をかけたセレスが眼前に広がる街並みを眺めながら小さく呟いた。
「そりゃそうだろう。ここは学園内でも四番目に見晴らしがいいと評判だからな」
「微妙な順位じゃないか？」
セレスの銀髪が風に遊ばれるように靡いた。武装姿でもモデル顔負けのスタイルだとわかったけど、現在の制服姿だとその威力も倍増だ。そんな腕なんか組んだりしたら魅惑の双丘が強調されて実に……なに考えてんだ俺。
「そんで？　もう一戦わたしとやろうってことでいいのかしら？」
ベンチに座ってふんぞり返るリーゼが挑発的に言った。やっぱ連れてくるんじゃなかったかな。話がややこしくなりそうだ。桜居と一緒に屋上封鎖を頼んどきゃよかった。
「？魔帝？リーゼロッテ。貴様の首などその気になればいつでも取れる。だが、そうしたところでラ・フェルデに帰れないのならば戦う理由はない」
凛とした口調や仕草。制服のブレザーやスカートのおかげで随分と女の子に見えるけど、セレスはきっと男装しても似合うだろうね。
なんだつまんない、と不愉快そうに唇を尖らせるリーゼには隠し持っていたミルク味のアメでもあげて放置しておく。
「セレス、最初に訊くが、お前がここにこうしているってことは身の潔白は証明されたんだな？」
「白峰零児だったな。心配するな、人々の生命力を吸い回っているという疑いなら晴れている。私はなにもやっていないんだ。当然の結果だろう」
「そんじゃ、お前の力は他人から力を奪うことで使えるってわけで

もないんだな？」
「魔剣ならばそのような能力もありえるが、私のラハイアンは聖剣だ」
セレスは背負っている棒の布を解く。槍と見間違えそうな長さの長剣が、嫌味にならない程度に豪奢な鞘に収まった状態で現れた。なるほど、あの鞘は抜剣しやすいように僅かに開く仕様になっているようだな。
「聖剣の能力は装備者自身の精神力で制御する。他者から力を奪って使うようなものではない」
「精神力ねえ。その剣、異界技術研究開発部が泣いて欲しがるだろうな」
「それは駄目だ！　このラハイアンに限らず、聖剣と呼ばれるものは特別強い精神力の持ち主でなければ装備できないんだ。だから奪おうなどと考えるな。下手すれば零児、お前の精神は崩壊することになるぞ」
「そんなことしねえよ。形だけなら、俺は自分で作れるから」
俺の〈魔武具生成〉では武器に宿る能力までは再現できないところが残念だ。
「お前は鍛冶師なのか？」
「あー、まあ、近い感じ」
セレスは感心したような眼差しを俺に向けると、聖剣ラハイアンを再び白布で包む。
「とにかく、私はラ・フェルデの聖剣十二将。国王陛下に仕える最高の聖騎士だ。無関係の者を傷つけるほど腐ってはいない」
嘘を言っているようには思えない。だから誘波も彼女を解放したのだろう。
――さて、次の問題だ。
「それで、なんでいきなり転入してきたんだ？　なにか問題が起こったらどうすんだよ」
「それなら大丈夫だ。私はラ・フェルデ国防学院を主席で卒業した

ばかりで、学生生活には慣れている」
　こっちとそっちじゃ勝手が違うだろ、と言いたいところだが、セレスよりも問題児なのが後ろのベンチでアメ玉を嘗めていることを思い出した。
「なによ？　そんな面白みの欠片もない顔でこっち見て」
「……アメ、まだいるか？」
「いるっ！　これ甘くっておいしいからいくらでもいけるわ♪」
　リーゼの取り扱い方を一つ発見した気がする。
　頬をリスみたいにしてアメ玉を転がすリーゼに、セレスが怪訝そうに眉を顰めた。
「零児、彼女は本当に魔王の類なのか？」
「そうらしい。でも、こっちの世界じゃ？魔帝？なんて称号は関係ねえよ。今はただの好奇心旺盛な女の子にすぎん。セレス、お前だってそうだ」
「まあ、確かにそうだな。私はこちらの世界では聖剣十二将ではなく異界監査官なんだ。すぐには慣れないと思うが、意識していくことにする」
　セレスがさらっと口にした単語を、俺は聞き逃さなかったぞ。後ろからの「レージまだアメ持ってるなら渡しなさい」という声は空耳にカウントするけど。
「お前が異界監査官って、どういうことだ？」
「ん？　誘波殿から聞いていないのか？」
　セレスは腕を組み直して面倒そうに息をつく。
「ラ・フェルデに戻るには異界監査官になるのが一番だと彼女に言われたのだ。他の異界監査官も私と同じ目的の者が多いと聞くぞ」
　なるほど、誘波め、セレスほどの実力者を逃すまいと勧誘したな。抜け目のないやつだ。危険な任務を伴う監査官の人口は局全体の五分の一にも満たないから、彼女を抱え込みたい気持ちはわからんでもないが……。
「零児、お前はどうなんだ？」

「あ？　なにが？」
「監査官をやっている理由だ。やはり、お前も元の世界に帰りたいのか？」
「そもそも俺は異世界出身じゃねえよ。俺はハーフなんだ。俺が監査官やってんのは――」
その時、ぐいぐい、と暴力的に俺の制服の裾が引かれた。リーゼだ。
「なんか、わたしさっきから空気なんだけど？」
「おや？　今頃お気づきで？　でもお嬢様が会話に加わると面倒臭いことになりそうなんで大人しくアメでも嘗めてなさい」
紳士然と皮肉を言って俺はキャラメル味のアメを差し出す。が、不機嫌そうな顔をしたリーゼに叩き落された。
「いらない。飽きた」
先程いくらでもいけるって言ったように聞こえたのは幻聴か？
「わたしもこいつに訊きたいことがあるの」リーゼは唇を斜に構えてセレスを見、「お前、なんでガッコウにいるのよ？」
それはさっき俺が訊い――たけど明確な答えはまだ貰ってなかったっけ。なぜか話が脱線したから。なにが原因だ？　リーゼだった気がする。
「ここの学生として生活するのも異界監査官の仕事なのだろう？　今は研修期間らしく、わからないことは先輩が優しく教えてくれると誘波殿から聞いている」
その先輩が俺じゃないことを祈ろうか。
「だから、これからお前を零児先輩と呼ぶべきか激しく検討中なんだが……」
くっそ俺だったか！　にしても嫌そうな顔で検討しやがるな、こいつは。
「零児でいい。お前に先輩なんて呼ばれたら周りからどんな目で見られるかわかったもんじゃない」
確実に魔女裁判ならぬ変態裁判にかけられて有罪の判決が下され

るだろう。
　そうかわかった、とセレスは了承すると、数歩動いてリーゼの前に立つ。
「というわけで私は見習いだが異界監査官だ。？魔帝？リーゼロッテ、貴様が校内で不穏な動きをすれば即座に対応させてもらう」
「ふん、わたしも異界監査官だけど？」

……へ？

　数瞬の間、俺とセレスは目をパチクリとさせていた。
「ちょっと待てリーゼ！　そんなこと俺は訊いてないぞ！」
「言うの忘れてた。まあ、別にいいじゃない」
「よくねえよ！　すっげえ大事なことじゃねえか！」
　紙ヒコーキの指令文にリーゼも連れて行くように書かれていたわけがやっとわかった。よくよく考えればセレスを勧誘してリーゼを勧誘しない理由はない。なんで気づかなかったんだ。
　リーゼは自信たっぷりの赤い瞳にセレスを映し、腰に手をあてて宣戦布告するように言い放つ。
「お前は元の世界に帰るためになったみたいだけど、わたしは違うわ。わたしはね――」
　お？　リーゼにもなにか目的があったのか？　それは知らなかったな。
「――面白そうだからなったのよ！」
「誇らしげに言うことじゃない！」
　とそこで、授業開始三分前の予鈴が鳴った。しかし二人はお構いなしに睨み合う。
「……なにが言いたいんだ？」
「わたしの方がすごいってこと」
　ピク、とセレスの秀眉が僅かに跳ねた。聞き捨てならない、そんな顔をしている。

「……ならば、どちらが優れた異界監査官なのか勝負するか？」
「ちょ、セレス、なんてことを言い出すんだ！？」
「面白そうね。勝負の方法は？」
「リーゼも乗るな！」
「さっきも言ったが貴様と戦うつもりはない。学園での任務の成果を競う形でどうだ？」
あ、それならいいや。なにも起こらなければ任務っていうほどでもない普通の学生生活だからな。……よってこの悪寒は気のせいに違いない。
「ふふん、いいわ。受けて立つ。どうせ勝つのは？魔帝？で最強のわたしだけど」
「フ、今のうちにほざいておけ。審判は零児に任せる。公平に頼むぞ」
俺の返事も聞かないまま、二人は火花を散らして言い争いながら屋上を去って行った。

三章　異界監査官（4）

「あー、審査結果を発表します」

時刻は昼休み。普段ならば弁当持参の生徒たちでごった返すはずの屋上は現在、俺とリーゼとセレスの三人しかいない。

「結論から言おう――二人とも失格だ」

「ッ!?　なぜだ!?」

「わたしの勝ちじゃないの!?」

「高等部全生徒を緊急下校させておきながら面白いことをほざく口だな!!」

俺はふうと溜息をつき、一つ一つ説教してやることにした。とりあえず二人を正座させる。

「最初の世界史だが、お前らの世界を語るな。？フィラル派とガラル派の百年紛争？ってなんだよセレス。世界史の先生困ってたろ」

「う……だが、あれは陛下が御活躍された偉大なる――」

「俺が言ってるのは、軽々しく自分の世界のことを喋るなってことだ。本来、異界監査官はそれを止める側にいるんだぞ」

まあ、今の時代ならデンパなやつと思われる程度で済むかもしれんが。

「次に二時限目の体育だが……リーゼ、百メートル走世界記録更新おめでとう」

「当然よ。だってわたしは？魔帝？で最強だもの」

「誉め言葉だが皮肉だということに気づけ！　普通の人間は百メートルを五秒切って走らん。体育教師が異世界人だったから誤魔化せたものを、もう少し周りに合わせて加減しろ」

運動能力は変なやつ程度では済まない。異世界人のことを秘匿するのはお前らを守るためでもあるというのに、こいつらときたら。

あの日本かぶれの着物怪人がそこら辺の説明を省きやがったに違い

ない。
　しゅんと項垂れるセレスと、つんとそっぽを向くリーゼに、俺はこめかみを押さえながら最後の問題点を指摘する。
「そして三・四時限目、家庭科の調理実習。俺たちは『肉じゃが』を作るはずだった。なのに最終的に完成したのが『黒焦げの家庭科室』ってのはどういうことだ？　なにをすれば家庭科室が吹き飛ぶほどの爆発が生まれんだよ？　おかげさまで消防隊の方々にご足労いただいた上に、午後の授業も続行不能になったじゃねえか」
　軽い怪我人だけで済んだのは奇跡と言える。
「フン、そんな料理、食べたことも作ったこともないし」
「そ、そうだ。知らないものを作れと言われても困る！」
「その知らないものを丁寧に教えてくれるのが授業だろうがっ！　単純にお前らの料理スキルが残念を通り越した爆弾級なだけだろ！」
　カチン、となにかのスイッチを押したような音が聞こえた気がした。正座していた二人がゆらりと立ち上がる。
「ば、爆弾だと……料理自体はちゃんと完成しただろう！」
「わたしの料理に耐えられない教室が悪いのよ！」
　この二人に集中砲火されるかと思ってつい身構えた俺だったが、飛んできたのは怒気を含んだくだらない内容の言葉だった。
　俺はカバンからナイロン袋を取り出す。中身は紫色の瘴気を放つ漆黒の塊だった。
「これは俺が念のため回収しておいたお前らの『肉じゃが』だ。あくまで料理だと言い張るならこれを――」
「おーい、白峰、リーゼちゃん、セレスちゃん、こんなところにいたのか。もう授業ないんだからゲーセンにでも行こうぜ」
「――丁度いいから桜居に食わせてみる」
　屋上の入口からなにも知らずに駆け寄ってきた桜居に、俺はナイロン袋を差し出した。
「リーゼとセレスが『クッキー』を焼いてくれたんだが、多すぎるからお前に半分やるよ」

本当は『肉じゃが』になるはずだったものだけどね。
「なんだと!?　白峰だけいい思いをしようとしてたのか許せん寄こせっ!!　あむ……うん、色的にはチョコっぽいけどジャリジャリとしてて不思議な味ガフアッ!?　……しまった……毒か……」
盛大に吹いて卒倒し、ピクピクと痙攣を始めた桜居には黙祷を捧げておこう。
「わかったか？　これは『料理』じゃない、『兵器』だ」
自分たちが作った物の威力を前にして、流石のリーゼとセレスも体を震わせて強く頷いてくれた。これで少しは世界が平和になるだろう。

Ｔｒｒｒ！　Ｔｒｒｒ！　Ｔｒｒｒ！

とその時、桜居の制服から零れ落ちたらしい携帯電話が音を立てて振動した。
桜居は目覚める気配がない。無視してもよかったが、なんとなく嫌な予感がしたので俺はその携帯を取った。
『お楽しみ中申し訳ありません、桜居ちゃん。そこにいるはずのラジオネーム〈俺、女の子と同棲始めたぜヒャッホー〉さんに代わっていただけませんか？』
「はい只今代わりましたラジオネーム〈俺の独り暮しを返せ〉さんです」
頭の中で「やっぱり切れよ」と囁く天使と悪魔の両方を、自らの意思で追い払った俺に誰か表彰状をくれ。
『あらあら、早いですねぇ。まるで桜居ちゃんの携帯に最初から出ていたみたいな速度です』
「ああ、その通りだ誘波。危なくとんでもないことをバラされるとこだったぞ！」
俺ん家に魔帝様御一行が居候していることは決して漏れてはならない機密事項なんだ。

俺は昏倒した桜居に必死に呼びかけをしているセレスと、同じく無抵抗の桜居を楽しそうに蹴り起こそうとしているリーゼを見る。

「ともかく用件をさっさと言え。生憎とこっちは取り込み中なんだ」

『わかりました。では手短に言いますね。――今すぐ異界監査局へ来てください』

ふざけきっていた誘波の口調が一転し、深刻な色を帯びる。

『例の昏睡事件の犯人に、監査官が一人やられました』

三章　異界監査官（5）

日本異界監査局の本局は、なにを隠そう伊海学園の敷地内に存在する。

この学園は山一つを開拓して設立したので、内部は広い上に高低差も激しい。麓近くには初等部と中等部が、元々は山の中腹辺りだった丘に高等部と大学が構えている。

で、異界監査局は大学側にある。最も高い場所に聳えている白い建物がそれだ。造りは他の学舎と同じで、一号館を表わす『1』の文字がその存在を光らせている。

「にしても」

俺は一号館の建物を見上げる。

「ここに来るのも久し振りだな。何ヶ月振りだっけ？」

「仮にも平和を守る者が職務放棄していたとは、見損なったぞ零児」

「セレス、お前ホントに最小限の説明しか受けてないんだな」

俺たち異界監査官には監査局への出勤義務はない。『次元の門』の監視や異世界人のトラブル解決が仕事の異界監査官――つまり戦闘員は、出勤したところでやることはあまりないんだ。その代わり、ほぼ全員が生徒・教師・事務員などの学園関係者となっている。あのメガネ――スヴェン・ベルティルは伊海大学院の院生だったはずだ。

「なるほど、学生として通うことが、そのまま出勤したことと同義になるのだな」

どうやらセレスは納得したらしい。俺に向ける軽蔑の目を解除してくれた。

「なんでもいいけど早く行くわよ。このわたしを呼び出すくらいなんだから、よっぽど面白いことなんでしょうね」

いやもう、リーゼがいろんな意味で逞しく見える。

その時、入口の自動ドアが開いた。

「来たようだね、白峰零児」
眼鏡を煌めかせてそう言ったのは、スヴェン・ベルティルだった。
昨日と全く同じデザインの燕尾スーツを着込んでいる。ていうか、こいつがそれ以外の服装をしているところを俺は見たことがない。
「……お前に出迎えられると気分が悪くなる」
「それは新手のギャグと捉えていいかい？」
「その辺はご自由に」
今の俺はたぶんあからさまに嫌な顔をしていただろう。
スヴェンは出席を確認するように俺たちの顔を見回す。それに合わせてセレスは軽く会釈をし、リーゼは……なにかを探すように辺りをキョロキョロしていた。
「なにしてんだ、リーゼ？」
「ん？　ちょっとね」
言って、リーゼはスヴェンにズカズカと歩み寄って行く。そこはかとなく鬼気迫るようなものが感じられ、スヴェンはたじろいだ。
「ねえ」
「な、なんだい？」
「昨日のでっかい人形はどこ？　わたしもアレに乗ってみたいんだけど」
子供かお前はっ！　……って子供でしたね。見た目も中身も。
「ああ、『デュラハン』ならここにはないよ」スヴェンは額の汗を拭い、「それにアレは僕の思念で動かしているから、君が乗ったところで楽しくはないと思うよ」
「そう。じゃあいい」
楽しくないという言葉を聞いてリーゼは興味を失ったようだ。
「こんなところで立ち話をしていても仕方ない。局長のところまで案内しよう」
俺たちの返事を待たず、スヴェンは踵を返した。

三章　異界監査官（6）

一号館――異界監査局の屋上に法界院家の屋敷がある。
直通エレベーターの扉が開いた瞬間、初見の者は必ず目を見開くはずだ。
なぜなら、そこには壮麗な日本庭園が広がっているからだ。
数えるのも面倒なほどの錦鯉が泳ぐ池を中心に、築山に石庭、なぜか満開の桜並木には季節感を考えろと言いたくなる。並木道の奥にはこれまた立派な和風の屋敷が構えており、その後ろにはどうやっているのか滝まで落ちていた。
とてもコンクリートビルの屋上とは思えない、文字通り別世界な空間。
まあなんだ、何度も来ている俺が今更驚くことではないんだけど、リーゼやセレスは気持が高揚することを禁じ得ないようだ。
屋敷の一室に俺たちは招かれた。
そこには先客がいた。
「レランジェ！」
襖を開けた先に屹立していたゴスロリメイドを見て、リーゼが歓喜の声を上げる。
「お先に失礼しております、マスター」
リーゼの従者である彼女は確か、新しいバイト先を探すとか言っていたはずだが……。
「お前も呼ばれたのか？」
「チッ！」
「なんで舌打ち!?」
とことん俺に対しては失礼なやつだな！　そろそろ決闘の日時をスケジュール帳と相談して決めねば。
「零児、そちらの方は？」
「ん？　あー、こいつはレランジェっつって、リーゼの正真正銘の

部下だ。あと人間じゃなくて機械人形なんだが……気をつけろよセレス、こいつは主以外には牙を剥き出しにする狂犬だ」

セレスはリーゼと一戦交えた相手だからこの木偶人形が受け入れるはずがな――

「初めまして、リーゼロッテ様の侍女をしております レランジェと申します。マスター共々、よろしくしていただけたら安定です」

「これはご丁寧に。私はセレスティナ・ラハイアン・フェンサリルです」

……さて、次の土曜は予定空いてたかな？

「ところで」リーゼが部屋を見渡し、「イザナミはどこにいるのよ？」

「そういや、呼び出しておきながらいねえな」

俺も首を動かして辺りを見回す。十畳ほどの部屋には、無駄に高そうな座布団や机が潔癖症の人でも笑顔で頷くくらい綺麗に設置されている。しかし奥にある押し入れは半開きになっており、中にたった今慌てて片づけましたよ的にマンガ本やゲーム機が鮨詰め状態になっているのは見なかったことにする。

机の上では人数分のティーカップが湯気を立てている。中身の紅茶はダージリンか。なぜそこだけ洋風なんだろう。

左右には別の部屋に続く襖があるが、部屋を間違えたということはない。どこかに隠れているのか？　あの日本かぶれの天女もどきのことだ、天井部屋や掛け軸裏の隠し扉とかがあっても不思議はない。

「おいスヴェン、あいつが待っているはずなのになぜ俺らが待たにゃならんのだ」

凄んだ俺に、スヴェンは眼鏡をクイクイとさせて、

「待ちくたびれたのでは？　もしかしたらトイレにでも行っているのかもしれないね」

「トイレか。だったら長えだろうな。いっつもあんな格好してんだから」

「あんな格好とはなんですかぁ？」
「あ？　十二単だよ。絶対にいろいろと大変なのに馬鹿だよな。頭ん中お花畑なんじゃねえの？　そのうち『将来の夢は女神です』なんてアホなこと言い出しても不思議はな……コンニチハ局長、今日モ綺麗デスネ」
　後ろでニコニコしながら危険なオーラを放つ存在に気づいた俺は硬直した。
「誰が馬鹿でお花畑でアホですか、レイちゃん？　圧し殺しますよう？」
　この直後、俺が〈圧風〉で押し潰されたことは言うまでもない。
「私が空気と同化している間にレイちゃんグループが揃ったので、お話を始めますね」
　上座の座布団に腰かけた誘波は、優雅な仕草で紅茶を啜ってからそう言った。
「話の前に、どんな理由で空気と同化していたのかを聞かせろ」
「待ちくたびれたのでレイちゃんをからかお……コホンコホン、私の命を狙う刺客がいたので身を隠していました」
「無駄な咳払いと下手な嘘をどうもありがとう！」
　このアマは絶対にいつかぶっ飛ばしてやる！
「さて、まず皆さんに見ていただきたいものがあります」
　誘波は指をパチンと鳴らす。すると、左側の襖が勝手に開いた。風か。
　俺たちはぞろぞろとそちらの部屋へと移動する。部屋の中心に布団が敷いてあった。
「これは……」
　俺は思わず息を飲んだ。布団に寝かされていたのは、ボーイッシュな顔立ちをした少女だった。昨日、セレスを捕縛しに来ていた異界監査官の一人だ。
　名前は稲葉レト。俺より一つ下で、まだ監査官になって三ヶ月の新米だ。

彼女は、一週間ほど絶食したように酷く衰弱していた。顔色は血が通ってないのかと思うくらい悪く、呼吸も薄い。
「ご覧の通り、やられたのは彼女です」
ティーカップを机に置き、誘波は落ち着いた調子で言った。
「これは酷い。無差別にこのようなことをする者がいるとは……許せない」
セレスは持ち前の正義感がそう言わせているのだろう。
「フン、負けたってことはこいつが弱っちいってことよ」
「弱者は不安定です」
イヴリア組は労るという言葉を知らないらしい。俺はその辺のことを講義したい気持ちを抑えて、寝かされている少女の状態を再確認した。彼女の命の火は吹けば消えてしまいそうなほど弱っている。
「これ、生命力を吸われたってことか？」
「私も初めはそう思っていましたが、どうやら違うようです」
俺だけでなく、スヴェン以外のみんなが怪訝そうな顔を誘波に向ける。
「今回の被害者ですが、全員が異世界人――それも、魔力を持つ異世界人だということが判明しました。彼らが奪われたのは生命力ではありません。魔力です」
俺は感覚を研ぎ澄ませる。稲葉レトは魔力を持った異世界人だが、確かに彼女からはなにも感じない。傍にいるリーゼの魔力が強大すぎて、感覚が狂わされている、というわけでもなさそうだ。でも――
「魔力を失ったくらいで、こんなになるもんなのか？」
「白峰零児、君は僕たちの言う？魔力？の定義をわかっているかい？」
眼鏡のブリッジを押さえてスヴェンが試すように言ってくる。
と、セレスが首を傾げた。
「魔力の定義？　そこにいる？魔帝？に感じるような禍々しい気のことではないのか？」
「確かにリーゼのもそうだ。イヴリアでも？魔力？と呼んでるみた

いだしな」
リーゼとレランジェが頷くのを確認し、でも、と俺は続ける。
「俺ら異界監査局では、魔法とか超能力とか、この地球には元々存在しない、異能力を使うために消費するエネルギーのことを総じて？魔力？と呼んでるんだ」
ちなみに俺の『吸力』で奪える魔力もその定義である。
「ふむ、自分も使っている手前、一応は理解しているようだね」
「だからなんだってんだ？　魔力と生命力はまた別物だろうが。その証拠に、俺は魔力を完全に失ってもピンピンしてるぜ？　リーゼ、お前はどうだ？」
「さあね。そんな経験ないからわかんないけど、こんな風にはならないと思う」
リーゼは常に魔力を持て余していただろうから、経験がないのも当然か。
「レイちゃんとリーゼちゃんは少数派なのですよ」と、誘波。「世界には自分で魔力を生成できる者とできない者がいることは知っているでしょう？」
俺は頷く。俺が後者で、リーゼや誘波は前者のはずだ。
「ここで問題です。自分で魔力を生成できる人についてですが、その魔力はなにから作られていると思いますか？」
この問題、俺は答えを知っている。ていうか、今思い出した。自分とは無関係なことだから忘れていた。
「……生命力、か」
「正解です。賞品は一泊七日、徹夜だらけの温泉旅行にご招待♪」
その旅行だけは絶対行きたくない。
誘波は空になったティーカップに新しく紅茶を注ぎながら、
「魔力を持つ異世界人のほとんどが生命力を糧にしています。つまり、その二つはリンクしているのです。片方を急激に消費すれば、必ずもう片方にも影響が出ます」
それが、そこで寝ている稲葉レトの状態ということか。

「そもそも、生命力を吸われていたのなら彼女は生きていないだろう？」

眼鏡をクイッと持ち上げるスヴェン。どうでもいいけど、お前は眼鏡に触れてないと喋れないのか？

「一つ、いいだろうか？」

とそこで、セレスが控えめに挙手した。彼女は不安げな表情で稲葉を見る。

「私たちが話している間も彼女は苦しそうだ。どうにか楽にしてあげる方法はないのだろうか？」

「そんなの簡単よ」

どういうわけかリーゼが傲然とした様子で言ってきた。その『お前らそんなこともわかんないの？』的な笑みはやめてもらいたい。

「痛みや苦しみを感じないほど一瞬で息の根を止めてあげ――」

「はい却下」

「なんでよレージ！？」

「マスターの貴重なご意見を無下にするとは縛り首安定です」

「誰かこいつら締め出してくれ！」

俺とレランジェが肉弾戦を勃発し始めた横で、セレスは十二単を着て紅茶を飲むミスマッチな存在に問う。

「誘波殿、彼女を助ける方法は」

「ありますよぅ。リーゼちゃんの言った通り、簡単なことです」

「「「！？」」」

あまりにあっさりと誘波が口にしたので、俺たちは時間が止まったかのように停止して彼女の方を向いた。ちなみに俺とレランジェはクロスカウンターを決めた後の格好だ。

「まさか、誘波殿、本当に殺すと――」

「そんなわけありませんよぅ。魔力を失ったのだから、補充してあげればいいのです」

「お言葉ですが、局長。〈魔力譲渡〉のできる異能者はこの局にはいません」

スヴェンの言う通りだ。ここの異界監査局にそんな器用なマネができる者はいない。
が、誘波はニッコリと笑って――
「いるじゃないですかぁ、そこに」
――リーゼを指差した。
「へ？　わたし？」
ポカンとするリーゼ。誘波は俺と頬を抓り合っているレランジェに顔を向ける。
「レランジェちゃんは、リーゼちゃんの魔力を貰って動いているのでしょう？」
「はい。我々魔工機械人形の原動力はマスターの魔力です」
そういえば、イヴリアの城でレランジェがそんなことを言っていた気がする。誘波がそのことを知ったのは恐らく昨日、彼女たちを連れ去った時だろう。
「でも大丈夫なのか？」セレスが警戒するような口調で、「さっきの話を聞く限り、魔力と言っても様々なのだろう。体が拒絶して悪化するのではないか？　まして彼女は？魔帝？だ。その魔力が他人にとって毒になってもおかしくない」
「薬と同じですよ、セレスちゃん。渡す量さえ間違えなければ弱った体を活性化させることくらいはできるのです」
断言するということは、それも監査局の研究で判明していることなのだろう。
「リーゼ、やってくれるか？」
「うん、まあ、いいけど。簡単だし」
リーゼはあまり面白くなさそうで不満な顔をしていたが、了承してくれた。そういえば稲葉はリーゼにセクハラをしたやつだっけ。気は進まないかもしれんが頼む。
「では、私の指示で行ってください」
ふわりと飛んできた誘波がリーゼの小さな肩に手を置いた。リーゼは稲葉の手首を掴むと、集中するように軽い呼吸をする。すると、

次第に稲葉の血色がよくなってきた。呼吸も正常に近くなり、表情も柔らかくなる。

誘波がストップをかけ、リーゼは手を離した。

「成功のようだな」

ほう、と息をつく俺。セレスも同じように安堵した顔をする。セレスは苦しんでいる人を見捨てられない騎士の鑑のような性格だな。そんな彼女を一時期でも疑っていたとは、自分を殴りたい。

皆が安心した、その直後だった。

再び稲葉の相好が歪み、うなされた呻き声を漏らす。

「なっ！？　やっぱりリーゼの魔力じゃダメだったのか！？」

まずい。もしセレスの言った通り毒になったのだとしたら稲葉を助ける手立ては――

「う……あかん、白峰先輩……桜居先輩とくっついては……白峰先輩はスヴェン先輩とやないと……すぅすぅ」

俺は全力で皆を追い出して襖を閉めた。体が寒気を感じて反射的に動いたから変な寝言なんてなにも聞いてません！

「ぶ、無事のようだったね」

スヴェンは顔を隠すように眼鏡を押さえているが、その滝のような冷や汗は隠し切れていない。

「さて、レイちゃんのＢＬ疑惑が浮上したところで本題の方へ移りましょうか」

「待てコラ！」

せっかく俺がなかったことにしようとしたのにこのアマは！

「びーえるってなに？　面白い？」

「ふふふ、面白いですよぅ。主にこのようなものを言うのです」

誘波はリーゼたち女性陣を自分の周りに集めると、懐から怪しいマンガ本を取り出して三人に渡した。

「なんでそんなもん持ってんだ！？」

「あら？」

「あら？　じゃねえ！」

マンガ本のページを捲るにつれ、リーゼは頭に『？』を浮かべ、レランジェは無表情で食い入り、セレスは顔を真っ赤にして座布団に正座した。

「とりあえず、これは没収しておきますよ局長」

ページを進めていたレランジェから本を取り上げたのはスヴェンだ。ナイス。

「よし、それを俺に渡せスヴェン。このまま焼却炉へ直行する」

「酷いですレイちゃん！？」

「やかましい！　リーゼたちに変なこと吹き込みやがって！　てめえはさっさと次の話を進めろ！」

場がどうにか落ち着くまでに、十五分ほど時間を取られてしまった。

全員が適当に着席していることを認めてから、誘波は表情を改める（結局マンガ本は返すことになった）。

「わかっていると思いますが、今回の犯人は監査官がやられるほど強力です。このまま放っておくと被害がさらに拡大するでしょう」

ようやくの本題だ。俺はすっかり冷めてしまった紅茶を一気に飲み干し、

「俺らもその犯人の捜索に加われってことだろ」

「流石はレイちゃん、話が早くて助かります」

ニコッと微笑む誘波。こいつは真剣な表情を三分保つことができないらしい。

「んで、俺らはなにすればいいんだ？　昨日みたいに適当に街をぶらつくだけってわけじゃねえんだろ？」

「もちろん、適当にぶらついてもらいます」

「はぁ？」

なに言ってんだこの十二単は？　無策にもほどがあるだろ。

「その『こいつ頭大丈夫か』みたいな顔はなんですか？　別に闇雲に探すわけではありませんよ。向こうが魔力を求めているのならば誘き出せばいいのです。そのために利用するのは、質が高くて膨大

な魔力……ここには、丁度いい餌がありますから」
皆の視線がリーゼに集中した。
リーゼはフッと不敵に唇の端を釣り上げる。
「このわたしを、オトリに使うってわけね」

三章　異界監査官（7）

ずばり囮作戦。

昨日の捜索にリーゼを同行させたのもそういった狙いがあったようだ。それならそうと説明してもらいたい。こんなことで味方を欺く意味はないはずだろ。

いろいろと愚痴りたいことはあるが、与えられた仕事は嫌々ながらもきちんとこなすことが俺の流儀だ。それにやはり、今回のことに責任を感じてないと言えば嘘になる。

稲葉レトが被害に遭ったのは伊海学園の学生寮付近らしい。

まずはそこから始めて、俺たちは学園の周囲をぐるっと一周した。それだけでかなりの時間を費やすことになるとは、学園の広さを改めて実感したね。

「そいつは魔力を狙ってんだろ？　人がいない場所よりは、大勢集まるような場所を探した方がいいんじゃないか？」

という俺の案が採用され、現在は繁華街を散策している。ちなみにセレスは俺たちと別れてスヴェンと行動している。集団でいると狙われにくいからな。と言っても、なにかあればすぐに駆けつけられる距離にいるはずだ。

「それにしても、レランジェまで監査官になっていたとはな」

「なっていませんが」

「だよな。いや予想はしてたんだ。リーゼの付き人だから同じように……はい？」

「ですから、なっていません。ゴミ虫様についてある耳は飾り安定ですね」

「おいコラ、誰の耳が飾りだって？」

「……」

無言無表情で指を差された。そろそろ失礼レベルが三ケタに突入しそうだ。俺がうっかり人前で〈魔武具生成〉しちまう前に、誰か

鈍器になりそうな物を寄こせ。壺とか灰皿でいいから。
「初めはマスターがなるのならばこのレランジェも、と考えましたが、ゴミ虫様と同じ肩書きになるのでしたらスクラップにされた方が安定だと判断した次第です」
ごめん、やっぱ鉄バットがいいな。できれば先端の鋭い棘がついてそうなやつ。
「異界監査官とやらにならずとも、レランジェはマスターをお守りするので関係ありません」
「あっそう」
もうどうでもよくなったから俺は軽く流した。誘波のことだ。どうせ監査局の名簿を見れば『レランジェ』という文字列がちゃっかり載っているはずだ。
「レージレージ！　アレ！　あの白くてクルクルしてるのなに？」
と、リーゼがテンションの高い声を出した。また彼女の『アレなにコレなに病』が発症しましたよ。ここに来るまで何度あったかな。数えるのも面倒だ。桜居がいないのは本当に辛い。
リーゼの指は洋菓子店の前に置いてあるオブジェを示していた。
「ああ、ソフトクリームな。食ってみるか？」
「食べれるの！？」
というわけで、俺は店で購入したソフトクリーム（一個二百三十円）をリーゼとレランジェに手渡した。
「これが食べ物ならレランジェには不必要です。魔工機械ですので」
「じゃあマスターにでもやってくれ。あと、俺はちょっとやることがあるからそこで待ってろ」
俺はレランジェと至福の表情でソフトクリームを嘗めるリーゼを洋菓子店の前に待たせ、真正面に位置する携帯ショップへと入った。もともと今日中に買い替えるつもりで財布の中身を豊かにしておいたから丁度いい。
店内には当然ながら多種多様の携帯が綺麗に並んでいる。俺はその中から適当な物を選別しながら、これからの方針を考えることに

した。
　果たして、本当にこのまま歩いているだけで敵とエンカウントするのだろうか？　異世界人だろうが異獣だろうが、堂々と街中を闊歩しているとは思えない。犯人がなんのために魔力を奪っているのかは知らないが、俺なら人目を避ける。まさか、セレスみたいに下水道に潜んでたりしないだろうな。
『君かわいいねぇ』『よかったら俺たちとお茶しない？』
　俺たち以外の監査官や局員も捜査している。探知能力や魔術なんてものも駆使しているだろうし、異世界の技術を利用したりもしているはずだ。
『誰よお前たち』『あん？』『ガキにゃ用はねえよ』
　誘波から聞いたところによると、現在の被害者数は稲葉レトを含めて十二人。
　たった二日とはいえ、監査局の捜査網をくぐり抜けてこれだけの被害を出し続けているのだから、相手は相当なもんだ。
『俺らはこっちのネエちゃんを誘ってんだ』『ガキは帰ってゲームでもしてな。シッシッ』
　その辺を考慮すると、どうも異獣だとは考えにくい。異獣の知能は地球上の獣と大差ないからな。……稲葉さえ目覚めれば詳しいことを聞けるかもしれないけど、彼女はあの様子だ。当分目を覚ましそうにない。
『マスターに無礼とは削除安定です』『マスターって呼ばせてんの？』『ギャハハうける！』
　これからは人目につかないところも念入りに調べてみる必要があるだろう。もし戦闘が起こっても、そういう場所なら被害を最小限で抑えられる。
『殺しちゃダメってレージに言われてるから、お前たちは存在することを後悔する程度に痛めつけるだけで済ませてあげるわ。感謝しなさい』
　なんだろうね、さっきから俺の思考を阻害するように聞こえてく

る『ぎゃあああ!?』とかいう悲鳴みたいなものは？
『……すみません、生まれてきてホントすみません』『同じ空気を吸っちゃってごめんなさい』
俺は店員を呼んだ。
「あー、この携帯を買いたいんですけどちょっと預かっててもらえますか？　大丈夫です。すぐに戻ってきますから」
バッ！　とロケットスタートで店の外に出る。顔中ボッコボコに腫らしたチンピラたちを土下座させている悪魔二人を発見！　俺はやつらをふん捕まえて路地裏へと連れ込み、ゲンコツを一発ずつかましてから十分ほどきつーく説教した。

膨れっ面のリーゼと変化のないレランジェを率いて俺は携帯ショップ内に戻った。
躾というものは、時には厳しくしなければいけない。そこらの本屋で『凶犬の手懐け法』とか売ってないかな。
俺が購入手続きを行っている間、説教が効いたのか二人は大人しくしていた。と言ってもリーゼに関しては物欲しそうに並ぶ携帯を眺め回していたけど……。
「お前らがもっとこの世界に慣れたら携帯くらい買ってやるよ」
「ホント！　約束破ったら眼球から燃やしていくわよ」
リーゼは無邪気な子供のごとく目を輝かせる。異界監査官になったのだからそのうち彼女にも給料は出るだろうけど、激しく心配なんで俺が管理することにしよう。
「マスター、その通信機が欲しいのでしたらこのレランジェにお申しつけ安定です。あるばいとによりこの国の金銭は入手しております」
「即刻クビになったやつが買える値段じゃねえよ」
「チィッ！　使えないゴミ虫様は不安定ですね！」
「なんで俺!?」
「誰もあなたとは言っていませんが？」

落ち着け俺！　こいつをぶっ飛ばしたい気持ちを押し殺すんだ俺！
……とにもかくにも店を出よう。こんなところでいつまでも油売っていたらクソ真面目なメガネ野郎に嫌味を言われかねん。
俺が率先して店の自動ドアをくぐったその時――

買ったばかりの携帯電話が着信音という名の産声を発した。

「……」
俺は電話に出ることを躊躇った。だってそうだろ？　携帯を買い換えたことは俺とリーゼとレランジェしか知らないのだから。こんなタイミングでかかってくるはずがない。
――普通なら。
「レージ、それ鳴ってるけど放っといていいの？」
「無視するとは最低なゴミ虫様ですね」
最低な人形にもっともなことを言われたのが癪なんで、俺は電話に出た。間違いなく今の俺は迷惑そうな顔をしているだろうね。
「もしもし、この電話は間違いです」
『いえいえ、ちゃんとレイちゃんの携帯のはずで――』
ピッ！
俺ってなんかの病気なんだろうか？　誘波の声みたいな幻聴を聞いたような……。

Ｐｒｒｒｒ！　Ｐｒｒｒｒ！　Ｐｒｒｒｒ！

「――ッ！？」
再びかかってきたコールに肩がビクゥとなった。仕方なく取る前に、俺は潜水をする前みたいに思いっ切り息を吸い、脳内で「せーの」と唱え、
「なんで俺の携帯が復活したことを知ってんだてめえッ！？」
向こうの鼓膜を破る勢いで怒鳴り散らした。

『そこは天下の誘波ちゃんだからですよぅ』
くそっ、敵は全く動じていない！　てか自分をちゃんづけするとかキモイんですけど。
「まあいい。なんの用だ？　犯人でも見つかったのか？」
『いえ、それとは別件です』誘波は変わらぬおっとり声で、『レイちゃんは今繁華街にいるでしょう？　そこから北に五百メートルほど行った場所に強い？歪み？を観測しました。恐らく、門が開くと思われます』
「『次元の門』が？」
誘波がいつものようにボケなかったってことは、あまり時間がないのだろう。
繁華街から北と言えば、そこそこ大きな川が都市を割るように流れている。五百メートルだから、丁度そこの河川敷ってところだ。
『はい。一番近くにいるレイちゃんたちに向かってほしいと思います』
「わかった。とりあえず行ってみる」
『いい機会ですので、リーゼちゃんたちの指導もお願いしますね』
ああ、と適当に返事して俺は通話を切った。『次元の門』の監視及び異獣の対処などは監査官の基本業務だからな、あの二人にはしっかりと叩き込んでおく必要がある。特にリーゼ。門が開くだけでなにも起こらない可能性の方が高いから、退屈で暴れられちゃかなわん。
まずは二人にこのことを説明しなくては。時間がないっぽいから、移動しながら簡潔に仕事内容の話を――
「はぁはぁ、君たちかぁわいいねぇ……」
「あなたもマスターを侮辱するクズ野郎安定ですか？」
「やっちゃいなさいレランジェ。そいつのデブデブした体が骨と皮だけになるほどの地獄を見せてあげるのよっ！」
目的地まで、さっきより十倍きつめに説教しながら移動することになりそうだ……。

「つまんない」

　水のせせらぎが心地よく聞こえるほど静まり返った川辺に、苛立たしげな雑音が混じった。

「あーもう、退屈！　退屈そして暇っ！！」

　息が切れるまで喚き散らした雑音発生機ことリーゼロッテ・ヴァレファールさんに、俺は後一歩で頭痛を起こしそうな頭を掻いて面倒臭げに言ってやった。

「まだ『次元の門』が開いて三十秒も経ってねえだろうが」

「マスターがなにもしないでいられる時間は十秒が限界です」

「よくそれで生きてこられたなっ！」

「退屈凌ぎに山脈を焼き払ったこともあります」

「魔帝討伐の原因は絶対にそれだっ！？」

　俺、もしかしてイヴリアの救世主なんじゃね？　傍迷惑な？魔帝？を連れ去ったのだから。まだあの時のクズ勇者たちが治めた方が繁栄しそうだ。

「ねえ、そこ入っちゃダメなの？」

　リーゼがなにもない空間を指差す。彼女も門の気配を感じられるのだろう、かなり正確な位置を捉えている。

「別に構わんが、ここに戻って来れなくなっても知らねえぞ」

　俺は無責任に言ったが、本気でリーゼが飛び込むようなら全力で阻止するつもりだ。彼女がこちらに来た時の世界への影響は向こうでも発生する可能性があるし、知り合いが門を通って行方不明なるなんてことはあの時だけで充分だ。

「そ、それは困るわね。この世界、楽しいから」

　俺の忠告も聞かずに突っ込むかと思ったリーゼだが、意外にも踏み

止まった。よっぽどこの世界が気に入っているらしい。
しかし、このまま門が消えるまで喚かれるのも億劫だ。河原でできる適度な暇潰しと言えば……アレか。
「リーゼ、すぐ飽きるかもしれんが多少楽しめる遊びを教えてやる」
「！　なにそれ！　早く教えなさいよ！」
思った通り、入れ食い状態の魚みたいな食いつきだ。
「まず手ごろな石を探す。――こんな感じに平べったい方がいいな。で、これを川に投げると……」
俺がサイドスローで投げた石ころは水面で八バウンドしてから沈んでいった。
それを見たレランジェがやれやれと肩を竦める。
「まったく、アホ虫様が考える遊びはくだらない安定ですね」
「それが子供ウケすんだよ」
「？」
疑問符を浮かべるレランジェに俺は顎をしゃくる。リーゼは子供心に火がついたように懸命に石ころ探しをしていた。
「なんだろうと、暇さえ潰せればいいんだろ？」
「チッ！　段々とマスターの心の掴み方がうまくなっていますね。やはりここいらで事故に見せかけて溺死させるのが安定ではないかと思います。幸いなことに、我々以外誰もいませんし」
監査局の人払いが完璧なせいで迷宮入りの殺人事件が起きそうなんですけど！
「はぁあああああああああああ！！」
気づけば、リーゼが絶対にバウンドしそうにない巨石を掴んでデタラメなフォームで投擲ようとしていた。
小石　↓　ショボイ　↓　ならばでっかいので。
恐らくこんな思考が働いたんじゃないかと思う。
「――ていっ！！」
ボーリングの球くらいの石が隕石みたいな勢いで水面を打つ。予測通りバウンドはしない。その代わり、五階建てビルに匹敵する水

柱が昇った。
「お見事です、マスター」
「う～、なんで跳ねないのよ！　レージに勝つまで投げ続けるから！」
半ばヤケクソになったリーゼは、大きさも形も関係なく目についた石を手当たり次第拾っては投げ始めた。上から下へ落とすように投石してもバウンドしないぜ？
「さて、俺は大人しく『次元の門』の監視を続けるとしま――！？」
その時、俺の体が何者かに掴まれた。絡みつくようにして俺を捉えているのは、半透明な粘体状の触手。
門がある方向を振り向く。そこには、乗用車ほどあるピンク色のスライムが無数の触手を生やしてうねうねと蠢いていた。

三章　異界監査官（9）

スライム。異世界の生物。
俺がリーゼたちの相手をしている間に門を通ってきたようだ。
足が地面から離れる。そのままスライムの本体へと引き込まれる。
「くそっ、異獣か！」
〈魔武具生成〉――日本刀。
俺は右手に構築された刀で触手を斬り落とした。
「レージ！」
異獣の出現にリーゼたちも気づいた。
「リーゼ、レランジェ、遊びは終わりだ。こいつを片づけるぞ」
「は？　なに言ってんのよ。こっからが本番の遊びなんじゃない」
好戦的な笑みを浮かべて両掌に黒炎を宿すリーゼ。それだけで俺は理解した。異獣は元の世界に帰してあげるのがマナーだが、このお嬢様はキャッチ&リリースするつもりなんて考えてすらいない。
「リーゼ、あいつを『次元の門』に叩き込んだらお前の勝ちだ」
「わかった。適度に焼き殺してから投げ込めばいいのね」
わかってない！　この子ったら全然わかってない！
「さあレランジェ、まずは一発派手にぶち込んじゃって！」
「了解です、マスター」
レランジェの伸ばした腕が機械的な音を立てて展開する。青白い火花が弾けると共に、魔導電磁放射砲は咆哮した。
青白い電撃光線はピンク色の粘体に直撃。その体を一瞬で爆散させる――ことはできなかった。
不定形の異獣は、何事もなかったかのようにうねうねしていた。
「レランジェは手加減していません。なぜ効かないのですか？」
「絶縁体な上に衝撃吸収性能でもあるんだろ。どいてろ、次は俺が行く」
俺は日本刀を中段に構えて疾駆する。峰打ちなんて甘い真似はし

ない。あのようなスライム系統に打撃は通用しないことくらい知っている。

着実に距離を詰める俺に、対するスライムもただ待ってはくれない。そのイソギンチャクみたいな気色悪い触手を鞭でも振るうかのごとく伸ばしてくる。

だが、俺は止まらない。

襲ってくる触手を斬り捨て、かわし、かわし、かわし、斬り、斬り、かわし、薙ぎ払い、かわし、かわし、かわし、斬り、かわし、刀の間合いへと踏み込む。

一閃。

銀の刃が煌めき、スライムの上部三分の一ほどが綺麗にずれ落ちた。

――直後。

「ぐふっ！？」

新たに生えたスライムの触手が俺の腹を強打する。あまりの衝撃に吹き飛んだ俺はリーゼたちの足元まで転がった。

「あははっ！　レージ、かっこわるいわね。途中まではよかったけど」

「うるせえよ」

「なぜ今ので死んでくれなかったのですか？」

「このくらいで死んでたまるかっ！」

とは言ってもけっこう効いた。昼に食った物を戻しそうだ。それに――

「気をつけろ。あのスライム、ただプニプニしてるだけかと思ったらそうじゃない。俺に一撃入れる直前、自分の体を硬化させやがった」

「それがどうしたって言うの？　わたしの炎の前では関係ないわ！」

そう言ってリーゼは黒炎を纏う。瞬時に学校の制服からいつもの黒衣に入れ替わった。

「雑魚魔獣のくせにわたしのレージに手を出したこと、後悔する暇

も与えないわ！」
　恋人とかではなくオモチャという意味なのはわかっているけれど、やっぱり恥ずかしいぞ、その台詞。
「焼き尽くしてあげる。大丈夫、形だけは残してあげるから！」
　リーゼの前方に黒い魔法陣が出現する。凄まじい黒炎の奔流が光線のごとくまっすぐに放射される。
　バカッ！　と言う暇はなかった。あの何千度もありそうな熱量だと昨日の廃ビルは助かっても生物は確実に消えてなくなる。
　――そう思っていた。
「と、飛びやがった」
　スライムとは思えないほどの高い跳躍で黒炎は簡単にかわされてしまった。その挙動にリーゼは驚いていたが、顔は笑っていた。
「狙い撃ち安定ですね」
　レランジェの言う通り、自然落下が始まりかけたスライムを、リーゼは縁日で射的をする時のような笑顔で狙っている。
　しかし、そこを突かれてしまった。
　まさか斬り落としたはずの部分がまだ動くとは、俺たちは誰も思っていなかったんだ。
「「「！？」」」
　細い糸状に変形したスライムの塊に、俺たち三人は蜘蛛が獲物を食す時のように雁字搦めにされた。性質は粘着質な上にゴムみたいに伸びるため、引き千切ることも斬り裂くこともできない。
「畜生、動けねえし……このぬるぬる感が果てしなく気持悪い」
「これがあの魔獣の狩りのやり方で安定なのでしょう。本体を囮に使うとは、見事にしてやられました」
「分析している場合か！　リーゼ、どうにかこれ燃やせないか？」
　俺が一縷の希望を持ってリーゼを見ると、彼女は顔を青くし、脱力したようにペタンとへたり込んでいた。なんか「きゅぅ」とかいう小動物的呻き声を漏らしている。
「思い出しました」

「なんだ、レランジェ？」
「マスターはこのようなぬるぬるのネバネバが大の苦手不安定でした」
「あいつはホントに？魔帝？だよなっ！？」
と無表情メイド人形にツッコミを入れている場合でもない。降ってきたスライムの本体が弱ったリーゼに触手を伸ばし始めた。
「くそったれ！」
俺は日本刀を捨て、右手に魔力を集中させる。
〈魔武具生成〉――大薙刀。
生成した長柄武器をスライムの糸の隙間から突き出し、どうにか寸前で触手を切断した。だが、その反動でバランスを崩した俺は転倒してしまった。
次は、対処できない。
触手を一本斬ったくらいではスライムは止まらない。今度はさらに本数を増やして俺たち三人を同時に狙ってきた。はっきり言おう、ヤバイ。

「――光よ、撃ち抜け！」

凛とした声が響いた。次の瞬間、無数の光弾が雨のように降り注いで全触手を一瞬で薙ぎ払った。
「なんとも無様な格好だな、？魔帝？リーゼロッテ・ヴァレファール」
河川敷に下るための階段から俺たちを見下ろすように、槍のように長い剣を携えた銀髪ポニテの少女が立っていた。伊海学園高等部の制服を纏い、その上から肩当て・胸当て・ガントレット・白マントとフル装備。なかなかに珍妙な格好だが、なぜか様になっている。
援軍。なんて絶妙なタイミングなんだ。こいつはありがた――ん？
「セレス、お前ら近くにいたはずだろ。なんでこんなに遅く登場すんだよ！？」

「いや、それはその……す、すまない。その、ソフトクリームとやらを食べていたら、いつの間にか見失っていて……」
もしかして、俺らのせいだったりする？
セレスに遅れてスヴェンがやってくる。
「話は後にしよう。まず異獣を片づけるべきだ。セレスティナ、君はまず彼らの解放を」
「わかりました」
スヴェンの指示にセレスは頷くと、忍者のような俊敏さで俺たちの方へ跳躍する。
「――来るんだ、デュラハン！」
スヴェンが叫ぶ。すると、スライムの前方の地面が隆起、爆発する。
土埃を巻き上げて現れたのは、首のない機械仕掛けの巨人。スヴェンは素早く駆け寄ると、巨人の掌の上に飛び乗った。
右手に持つ槍のドリルが高速で回転を始める。
とりあえず、俺は一つだけ言っておきたいことがある。
「この街の地下はどうなってんだよ！　絶対穴だらけだろ！」
そのうち地盤沈下でも起こったらあいつの責任だ。間違いなく。
「零児、少し黙っていてくれ。お前を傷つけずに焼き切るのはけっこう神経使うんだ」
とか言いつつも、セレスは輝く聖剣で器用にスライムの糸だけを取り除いていく。俺が動けるようになるまでそう時間はかからなかった。続いてレランジェ、リーゼと解放していく。
「あんの雑魚魔獣っっっ！！　よ、よくも？魔帝？で最強のわたしにあ、あ、あんな気持悪い真似を……殺す」
ぬるぬるのネバネバが大っ嫌いなお嬢様は大変御立腹のようだ。
今後食卓に納豆を出すのは控えておこう。
で、リーゼが口から火を噴きそうなほど憤慨している間、スヴェンとスライムの戦闘はというと――――ドリルにスライムが絡まって停止していた。

見てなかったけど、たぶん、一突きした時に巻き取るようにして絡まったのだと思う。

「デュラハン、早く引き剥がすんだ！　もし故障でもしたら直すのに何ヶ月かかるかわからない！」

確か、あのデュラハンとかいう機械巨人はスヴェンの思念で動いていたはず。本人が慌てているもんだから巨人の動きもぎこちない。アレじゃもっと絡まるだけだ。

その時、スライムが体を変形させて自分からドリルを離れた。ここぞとばかりに、スヴェンはドリルを回転させないままスライムを薙ぎ払った。

そして、スライムの飛んでいく先にはセレスがいる。

「――はあっ！！」

裂帛の気合いと共に彼女は聖剣ラハイアンを一閃する。回転ノコギリみたいな光の渦が放たれ、スライムを真っ二つに両断した。

「よし」

「ダメだセレス！　斬ったくらいじゃやつは倒せない」

俺は地面を蹴り、武器を大薙刀からさらに変更させる。

〈魔武具生成〉――鉄槌。

これで俺の魔力はなくなったようだが、これからトドメだから関係ない。

「やつを『次元の門』へ送り返す」

「嫌々ながらお手伝いしましょう」

と、レランジェが横に並ぶ。俺は鉄槌をスイングし、レランジェは回し蹴りで二つに裂けたスライム破片を同時にシュートした。

まるで球技のような勢いで飛んでいくスライム。『次元の門』への狙いは二つの塊とも正確だ。

――だが、寸前で『次元の門』が消滅してしまった。

「なにっ！？」

スライムは土や石を引っつけて地面を転がると、千切れた体を全て戻して統合させた。縮んでいた大きさが元の乗用車くらいに戻る。

ダメージなんてこれっぽっちも受けてないようにプニプニと体を蠢かすスライム。

その背後に、修羅が立った。

「わたしにあんな嫌な思いをさせたお前は完全燃焼してもなお燃やしてあげるわ」

ビシリ、とただならぬ怒気に空気が軋む。

膨大な魔力が集中する。

スライムを中心に黒魔法陣が展開。

いや待て、これまでより魔力も陣もでかいんですけど。大丈夫か、これ？

「退避安定です」

「ですよねー」

レランジェに従い、俺たちは魔法陣からできるだけ離れるために走る。

直後、富士山が噴火した方が可愛いんじゃないかと思うほどの火柱が天を突いた。

三章　異界監査官（１０）

黒炎の火柱が消える。
そこで、俺は信じられない光景を目にした。
「あ、あいつまだ……」
自転車くらいの大きさになったスライムが、焦げた胡麻団子のような姿で動いていた。
「丁度いいわ」リーゼが非常に極悪な笑みを浮かべ、「まだやり足らなかったとこだったのよ」
ビクッ！　とスライムが焦ったように跳ねた。なんか恐怖という感情が芽生えたようだ。事実、俺も今のリーゼは恐ぇ……。
再びリーゼは魔法陣を展開する。もう一度アレをするみたいだ。今度こそスライムは跡形も残らないだろうな。
しかし、次の瞬間、スライムは大きく跳躍して川にダイブした。
「むっ！」
「あ、逃げやがった」
川の流れは穏やかだが、すぐにスライムの気配はなくなる。
「に、逃がさないわよっ！　わたしの炎が水くらいで消せると思ったら大間違いなんだから！」
未だに怒りの収まらないリーゼもスライムを追って川に飛び込んだ。そこまでするとは、相当に嫌だったんだな。今度から食卓に山芋も出さないように気をつけねば。
「あ、そういえば」
「ん？　どうした、レランジェ？」
「マスターは泳げません」
……はい？
「あっぷ！　こ、ここ足届かゴプッ！？」
「いいんだよな！？　アレ？魔帝？でいいんだよなっ！？」
バシャバシャと水飛沫を立てるリーゼは本気で溺れる子供にしか

見えない。果てしなく格好悪い。そういや、彼女の親父は食中毒で死んだのだったな。

「た、助け……あぷ……」

プクプクと泡だけを残して沈んでいくリーゼ。

「ちょ、早く助けねえとマズイんじゃないか！？」

俺はレランジェを見る。

「レランジェは魔工機械不安定ですので」

防水処置くらい施しとけ。

「自慢ではないが、私も泳げないんだ」

確かに自慢じゃねえよ、セレス。

スヴェンは距離が離れすぎていて間に合わない。つまり――

「結局俺が行くのかよ！」

素早く上着を脱いで俺は川に飛び込み、沈みゆくリーゼをキャッチする。彼女は意識を失っているらしく、ぐったりとしていた。

「ったく、泳げねえくせに飛び込むなよ」

俺は河原に引き上げたリーゼを優しく寝かせる。

「白峰零児、彼女、呼吸はしているかい？」

デュラハンの掌の上からスヴェンが問うてくる。俺は口元に手をあてた。

「ああ……して、ないな。よし、セレス、人工呼吸を頼む」

「な、なぜ私がっ！？　零児がすればいいだろう！」

「ぶっ！　お、俺がやれってのか！？」

「ゴミ虫様に任せるくらいならこのレランジェにお任せ安定です」

俺とセレスが躊躇っている間に、レランジェはリーゼの額を押さえ、顎を持ち上げて気道を確保し、続いて鼻を押さえると、柔らかそうな唇に自分の唇を重ねた。てか、なんで異世界のロボが地球の人工呼吸を完璧にこなせるんだ？

傍目には美少女同士のディープキス、なんて考える俺はきっと負け組だろう。

「げほっ！　ごほっ！」

何度目かの人工呼吸でリーゼは息を吹き返した。しかし、意識はまだ失ったままだ。

主の安否を確認したレランジェが珍しく俺に一礼する。

「マスターを助けていただき、このレランジェ、感謝の気持ちもありません」

「そこはあれよ」

まあ、結局助けたのはこいつだしな。俺は羞恥心のせいで人命救助を躊躇った愚か者だ。決して勿体なかったなどとは思ってません！

その時――

「ちょっと待て、？魔帝？の様子がおかしい！」

セレスが、焦燥の声を出した。

「リーゼ！？」

俺はリーゼの様子に驚愕とした。体中が赤黒くに染まり、発汗が酷い。手足が時々電気ショックでも受けたようにピクンと跳ねている。

そしてなにより驚いたのは、彼女の魔力が張り裂けそうなほど膨張しているところだ。

「あ、が、ぐがあああああああああああああああああああああああああ！！」

ついに、リーゼは意識のないまま叫び始めた。

溺れて風邪を引いたとかそんなレベルではないことは見ればわかる。

「一体、どうなってるんだ……？」

なにやらとんでもない事態が起こっている、と俺は直感した。

間章（2）

とある建物の屋内。明かりもついていない薄暗闇の中に、一つの影があった。

時計の針がそろそろ明日への境界を跨ごうとする夜更けに、影は熱心になにかの作業を行っていた。

カチャ。

カチャカチャ。

カチャカチャガチャ。

プラモデルでも組み立てるような音が倉庫のように広い空間に反響する。

「フ、フフフ」

不意に、影から笑い声が漏れた。

月明かりが手元を照らす。そこには数々の工具やガラクタが積み上げられており、影が作業を行っている中心には幾本もの管が走っていた。その中の数本は先端が注射針のように尖っており、全ての管が一様に小瓶らしき容器と繋がっている。

小瓶の中身は、透明色の液体。

「たったこれだけで十数人分か。だが、これだけでも十二分の働きを期待できる」

小瓶を少し揺らす。それだけで、中の液体は水よりも激しく波打った。

「凝縮すれば液体燃料のように使えるとは、まったく、魔力というものは素晴らしい。ラーゲルレイブには存在しない力、それをまさかこんな形で調達できるとは思わなかったな」

気分が高揚しているのか、影は悦に入ったように独り言を弾ませる。

「目途は立った。もう一押しだ。あとはアレを手に入れることさえできればだが……」

小瓶を台の上に置き、影は手を思案するように顎へと持っていった。

「あの？魔帝？とやらをものにすれば、目的の達成はもちろん、この忌々しい現状から抜け出すことだって容易だ。なんとしてでも手に入れなければならない。これまでは危険すぎて下手に動けなかったが、こちらは魔力を手に入れ、あちらはどういうわけか自由を失っている。今がチャンスだろう」

フフフフ、と影は聞く者がいたら底冷えしそうな笑いをする。

「実行は明日の夜。最後の準備を済ませてからになりそうだ」

最後に静かに呟いて、影はその場を立ち去った。

四章　壊滅的な死闘（1）

異界監査局の屋上には別世界のような日本庭園が広がっている。恐らく魔術的に作られた疑似空間なのだろう。明らかに屋上の総面積よりも広い。

その広大な敷地内に建つ和風な屋敷が法界院誘波の住処なのだが、俺はなぜか屋外で正座させられていた。初夏の直射日光のなんと眩しいことか。

目の前では十二単を纏った異国の少女が茶を点てている。俺は茶道には詳しくないが、こういう外で行われる茶会を野点というらしい。

「どうぞ」

誘波はおしとやかな動作で茶筅を置き、茶碗を回して俺に渡す。中の緑色の液体に妙な薬でも入ってんじゃねえだろうな？　俺は化学の実験でするみたいに手で仰ぐように臭いを嗅いでみた。これといった刺激臭はない。

仕方なく、俺は一気に飲み干した。

普通に抹茶だ。特有の渋みはきつすぎず、微妙な甘さもあって抵抗なく食道を流れていく。なぜか変にクリーミーだったが、不味くはなかった。寧ろ美味。

「……けっこうなお手前で」

言わなきゃいかんのかな、と思いながら茶碗を返す。

「しっかし、日本かぶれだとは知ってたがついに茶道まで始めやがったか。しかもなかなかにうまいじゃないか」

「あはっ♪　レイちゃんに誉められちゃいました。頑張って市販の抹茶オレを掻き混ぜた甲斐があったというものです」

「よし、俺の感想を返せこのエセ茶人」

どうりでミルクっぽかったわけだ。

「ところで」

誘波はネタが終了したように茶道具を雑にどける。
「レイちゃんの方から私を訪ねてくるなんて珍しいですね。リーゼちゃんの容体はどうですか？」
「ああ、そのことについて話しに来たんだ」
リーゼの体調がおかしくなってから既に丸一日が経過している。今も俺の家でレランジェが看病しているが、彼女が回復する兆しは一向に見えなかった。それどころか熱はどんどん上がり、六十度を越えている。普通の地球人ならとっくに死んでいる体温だ。

「マスターの魔力が許容量を超えたことが原因安定のようです」
今朝になって、レランジェはそう診断した。
「マスターは魔力を消費することができません。常に増加安定です」
「は？　なんで消費できねえんだよ。術とかバンバン使ってたじゃねえか」
「それは私にはわかりかねますが、今は亡きアルゴス様からそのような体質だと伺っております。魔力疾患とでも呼んでおきましょう」
アルゴスっていうのはリーゼの親父――前魔帝の名だ。
「このままではいずれ膨れ上がる魔力が破裂し、マスターは死亡確定です」
「俺になんかできることはないか？　そうだ、魔力が増えすぎたって言うなら俺が『吸力』で奪ってやろうか？」
「いえ、マスターの魔力は現在暴走寸前です。ゴミ虫様のような人間が受け止めることは不安定です。それに、このような事態に陥った時のために我々魔工機械がいるのです。ゴミ虫様の出る幕ではありません」
「いい加減名前で呼んでくれ」
「了解しました。ゴミ――ゴミ虫様」
「訂正できてないぞ」
「とにかく、マスターはこのレランジェが命に代えても守る安定です。ゴミ虫様は邪魔ですので、ガッコウにでも行く安定です」

という一連の流れから話すと、誘波は神妙な顔になって呟いた。
「なるほど、それで自分家を追い出されたわけですか、ゴミ虫ちゃん」
「絞め殺すぞコラ」
「寂しくなって私のところへ来たのですねぇ。可愛いじゃないですか。この寛大の化身たる誘波ちゃんは何日でも宿泊許可を出してあげますよぅ。あらあら、もしかして私と一緒に寝たいんですかぁ？」
「お前の部屋にある怪しげなマンガ本を全部資源ゴミに出す」
「それだけは勘弁してくださいレイちゃん！？」
涙目で縋りついてくる誘波を見るのは初めてだ。お、面白い。でも、俺はそんなことを言いに来たわけじゃないんだ。
「誘波、お前はリーゼが魔力を消費できない理由を知ってんじゃねえのか？」
「どうしてそう思うのです？」
話が変わった途端、回路を繋ぎ換えたように態度を改める誘波。
「魔力生成法の話をしてる時、俺とリーゼは少数派だとか言ってただろ。俺はわかるが、なんでリーゼも少数派なんだ？」
「存外、レイちゃんは記憶力がいいのですね」
誘波は普通に抹茶オレを作りながら「ふふ」と微笑んだ。存外は余計だ。
「一度戦って気づいたことですが、先程の話を聞いてほぼ確信しました。リーゼちゃんは――――魔力を消費していません！」
「だからその理由を聞いてんだよ！　マンガの衝撃的告白みたいな顔で言うな！　既に知ってんだから」
「ふふふ、レイちゃんってばなかなかいい感じのツッコミですねぇ。三十点」
「低っ！？」
だーもう、こいつとの会話は異様に疲れるから嫌いだ。
誘波は茶碗の抹茶オレを一口啜り、

「リーゼちゃんは自分の魔力を放出し、文字通り燃焼させて攻撃しています。これはレイちゃんも知っていますよね？」

ああ、と俺は頷く。セレス戦の時、そんな感じのことを自分から言っていた。

「では、リーゼちゃんが術を使う際に現れる魔法陣は、どういう役割をしていると思いますか？」

「魔力を飛ばす、いや、燃やすためか？」

深く考えずに答えた俺に、誘波はゆっくり首を振る。

「いいえ。あれはどうやら、リーゼちゃんの魔力を還元する術式のようです」

「！？」

還元って、つまり使っても元に戻るってことでいいんだよな。確かに、それだと消費はない。

「百パーセント還元するのかは詳しく検証しないとわかりませんが、彼女はどれだけ強力な術でもほぼ無限に使用できるというわけです。そして恐らく、リーゼちゃんは魔力還元術式を無意識に発動させています」

「自分の意思で魔力は消費できない、か。力を使う時に起動するのだとしたら、激しく他者の意図を感じるな」

その他者とは間違いなくリーゼと親父だろう。もしそうだとしても、もういないやつがなにを考えてリーゼに魔力還元術式を施したのかは、現状どうだっていい。

気にするべきは、今もリーゼを苦しめている魔力疾患の方だ。

「なあ、誘波。魔力がループするとぶっ倒れるもんなのか？」

「普通の人ならそうはならないと思います。魔力疾患とは体内の魔力が容量オーバーすることが原因なのでしょう？　充分に満たされていれば、生命力を削ってまで生成する必要はありませんから。ですが、リーゼちゃんの魔力生成法は少数派、いえ、希少種と呼べるものです」

「希少種？　どういうことだ？」

「一昨日に彼女を検査して判明したのですが、彼女の魔力は細胞分裂をするように増えていくのです。それも止まることなく常に、です。水道の蛇口を捻ったままだと湯船が溢れるのは必然でしょう」

マジか。流石にそういうのは俺も聞いたことがない。少数派ではなく、希少種。なるほど、そう言われた方が得心はいく。

それだと、今までに何度も魔力疾患を起こしているはずだ。リーゼにとってはただの風邪、もしくはインフルエンザ的な病気なのかもしれない。

ズズズ、と誘波は残った抹茶オレを飲み下す。それから俺によからぬことを考えていそうなニヤニヤ顔を向けてきた。

「レランジェちゃんがいれば大丈夫なのでしょう？　なのにこんなにも心配しているなんて。もしやレイちゃんはリーゼちゃんのことが好きになっちゃったのですかぁ？」

「ばっ、げふっ！　そ、そんなわけあるかっ！　あの木偶人形の説明が曖昧すぎてちょっと気になってただけだ。知的探究心！」

俺はロリコンじゃない！　大事だからもう一度言う。俺はロリコンじゃない！

「あらあら、耳まで真っ赤になってますよぅ？　キャー♪　私、妬いちゃってもいいですか？」

「そういや俺、魔力補充しねえといけないんだったな！」

怒りマークをふんだんに使用した顔で、俺は誘波に左手を伸ばす。〈吸力〉。？人？相手にあまりやりたくないんだが、この際だ。気絶するくらいてめえの魔力を奪ってやろうじゃね――――熱湯をぶっかけられた。

「ほあちゃぁあああああああああああっ！？　手がぁ手がぁあああああああっ！？」

絶叫して転がりまくる俺。気づいたら池に沈んでいた。錦鯉たちが群がって俺を突いてくる。餌じゃねえぞ。

「あらあらあら、早く乾かさないと風邪引いちゃいますよぅ？」

いけしゃあしゃあと、誘波。

あの天女もどきにはいつか十三階段を上らせてやる、という思いを胸に秘め、俺はびょしょ濡れのまま誘波邸を後にした。

四章　壊滅的な死闘（2）

「あの着物怪人め。危うく大火傷するとこだった」
異界監査局のシャワー室で俺は怨恨の呟きを吐き捨てた。シャワーは好きじゃないが、あのまま帰るわけにもいくまい。
それにしても、まさかリーゼがあれほど特殊な存在だとは思わなかった。全自動魔力生成に加えて魔力還元術式。どう考えても魔力疾患を引き起こす最大の要因は後者だ。
なんとかして術式を発動しないようにしてあげたいところだが、俺にはそんな方法はわからない。それにあのリーゼのことだから、魔力還元術式がなければぶっ倒れるまで遠慮なく力を使い続けるだろう。
リーゼの親父はそれを危惧して術式を施したのかもしれない。まあ、リーゼ本人の能力の可能性も否定できないけど……。
誘波の言うような意味はないが、俺は確かに心配しているようだ。気がついたらあいつのことばかり考えてやがる。いやホント、変な意味はないから。
でもなんだろうな、このハラハラした気持ちは？　危なっかしい妹に対する兄貴の心情……うん、きっとそれだ。
「レランジェがいるんだ。俺が心配したところで余計なお世話だろうな」
シャワーを止めて簡単に体を拭く。
「ま、一応は同じ屋根の下で生活してんだ。なんか甘い物でも買って帰ってやるか」
と独り言をぼやきながらシャワー室の扉を開けた時――
目の前に、バスタオル一枚の銀髪美少女が立っていた。
「……あれー？」目を点にする俺。

「な、な、な」耳まで赤面する銀髪少女。
さてここで問題です。まずこのシャワー室が男性用であることは室内光景的に考えても純然たる事実なのだがなぜそこに全裸の女性がいるのだろうか幻影幻覚幻想のどれでしょうって落ち着け俺！
ここは男性用で状況的にも俺が先に入っていたことを考慮すると相手が間違えたことになるわけでこれはつまり――
――俺の勝ち。
「はっはっはっ！　セレスお嬢様こちらは男性用にございまして女性用はお隣です」
紳士然と丁寧に状況説明すれば聡明な騎士殿はわかってくれるはずだ。
「い」
「い？」
「いやぁああああああああああああああああああああああああああっ！？」
結局、俺はぶたれた。最高に爽快な音を立てたビンタで……。

四章　壊滅的な死闘（3）

背中にモミジの刻印をつけられたやつはいても、頬に刻まれたやつはマンガのキャラでない限りそうはいないだろうね。きっちりとした手形で。

「先程はすまない。私としたことが、少々取り乱してしまった。忘れてくれ」

「いやいや、アレは少々どころじゃなかったような気もするんだが――」

「忘れてくれ」

鬼然とした形相で凄まれると「はい」としか答えられない。

俺とセレスは監査局のロビーで缶ジュースを飲んでいた。彼女は学校が終わった後、昨日逃がしたスライムの捜索隊に加わっていたらしい。昏睡事件の犯人探しもあるし、まったくもって面倒事が多い。

気づけば午後六時だ。誘波の無駄なお茶会がいかに長かったのかが窺える。

「昨日訊きそびれてしまったことなんだが、今訊いてもいいだろうか？」

オレンジジュースを片手に、高校の制服の上から武装したセレスが改まった様子で俺を見詰めてくる。シャワーを浴びた直後の湿った髪や火照った顔が艶めかしい。

「なんの話だっけ？」

「零児が異界監査官をやっている理由だ」

あーそれか、と俺は適当に頭を掻いて缶コーヒーを一口。やっぱ微糖が一番だ。

「人捜し、かな」

壁に背を預けて俺は憂い気味にそう言った。

「人捜し？」

「ああ、実は俺、昔相棒がいたんだ。紅楼悠里（くろうゆうり）っていう名前の幼馴染で、そいつも俺と同じハーフだった。天真爛漫で無茶で無鉄砲で、こうと決めたら大地震があっても考えを曲げない頑固者で、拾った一円玉を交番に届けるくらい正義感が強いくせに横暴で理不尽、それでいてウサギみたいに寂しがりやで、俺をしょっちゅう面倒事に巻き込みやがる女だったなぁ。――ああ、思い返すだけで殺意が湧く」

「その人相棒なのだろう！？」

「懐かしいなぁ。そういや嫌がる俺を監査局に無理矢理引き入れたのはあいつだったっけ。屋上での告白じみたシチュエーションから口にすることも億劫なほどの厄介事の果てに現状面倒臭い事態になってるっつうことは俺が異世界に飛ばされたことも独り暮しがさようならしたことも誘波にいいように弄ばれていることも元を辿れば全部あいつのせいだよな。フフフ、フフフ、フフフフフフフフフフフ」

「すまない零児！　私が悪かった！」

ハッ！　俺は一体なにを……。

目の前では怯えた瞳をしたセレスが必死になって俺を揺さぶっていた。どうしたんだ？　幽霊でも出たのか？

「んで、『伊海の紅白殺戮ショー』とまで呼ばれた仲睦まじい俺たちだったんだけどな」

「本当に仲睦まじいのか！？　私はたった今お前の心の内を覗いた気がするのだが」

「一年半前のことだ。ちょっとばかし強力な異獣と戦っていた時、あいつは俺を庇う形で『次元の門』をくぐっちまった。それっきり戻ってきていない」

あいつのことだから、たとえ未開のジャングルに放り出されていても問題なく生きているはずだ。それどころか自慢の正義感と趣味のお節介が働いて、人助けばかりやっているかもしれない。でも、けっこうな確率でやりすぎるんだよなぁ。喧嘩を止めに入ったら両

者とも病院送りにするとか。
　俺はあいつを信頼しているんでね、それほど心配はしていない。まあ、意外なほど寂しがりだったりするから、一人の時泣いてんじゃねえかと気がかりではあるけど。
「だから、俺はあいつを捜している。いつ戻ってきてもいいように、この地球の日本にあいつの居場所を残して」
　この前イヴリアに飛ばされた時はヒヤヒヤしたもんだ。にしても、知り合って間もないやつにここまで話したのは初めてだ。
「その人、無事だといいな」
「まあな。そういうセレスも向こうじゃ行方不明になってるはずだ。無事に元の世界に帰れるように、俺も手伝ってやるよ」
　言うと、セレスは凛と整った顔に柔らかい微笑みを浮かべた。
「存外、零児は優しいのだな」
「お前まで存外とか言うな。こんな虫も殺せないような少年を捕まえて」
「それは誰のことだ？」
　ぷ、とお互いに吹き出し、軽く笑い合った。
「時に、？魔帝？はどんな様子なのだ？」
　缶を屑入れに入れつつ、セレスが訊いてくる。何気に彼女も心配していたのだろう。俺は誘波との話も合わせて簡単に説明した。
「なるほど、？魔帝？も便利そうで面倒な体を持ったものだな」
　セレスは憐憫を瞳に宿して腕を組んだ。
「もしかすると、俺があいつをこの世界に連れて来なけりゃ、あんなことにはならなかったのかもな」
　あの時、俺は退屈な世界で命を狙われながら生きていくリーゼを不憫に思った。安全で楽しい世界も存在するのだと知ってもらいたかった。結局は彼女が自分の意思でついてきたわけだが、俺が次元を跨がせたことに変わりはない。
「魔力疾患。レランジェ殿は、どうやって治すつもりなのだろうか？」

「そりゃあ、魔力を削るんだろうよ。リーゼの暴走気味の魔力に人間は堪えられなくても、魔工機械なら大丈夫なんだろ。だから〈魔力譲渡〉とかで……！？」

言いかけて、俺はハッとした。なぜ今まで気づかなかったのだろう。リーゼは力を使っても魔力は消費しない。だからこそ〈魔力譲渡〉なんて能力を持っていたんだ。

魔工機械はリーゼの魔力で動く。彼女たちは本来、リーゼが魔力疾患を起こさないために存在していたのではないだろうか。

そして、あの城にいた魔工機械人形はレランジェ一体だけではない。

目測だが、百体は軽く超えていたと思う。つまり、それら全てに魔力を分け与えなければリーゼの魔力疾患は防げないってことだ。

『マスターはこのレランジェが命に代えても守る安定です』

レランジェの言葉が脳裏に蘇る。

「あの木偶人形、知っていながら――くそっ！」

俺は走った。今朝から相当な時間が経過している。間に合うかどうかはわからない。

俺の思いすごしならそれでいい。とにかく今は走るしかないだろ。

「零児！？」

血相を変えて飛び出した俺にセレスが驚きの声を上げるが、いちいち振り返っている暇はない。

説明している時間も惜しい。よって俺は一言だけで告げた。

「あいつらがやばい！」

四章　壊滅的な死闘（4）

学園から自宅までの距離は徒歩にして約二十分。俺たちはそこを五分で踏破した。

バチバチ！

バリリリッ！

シュゥウウウ！

玄関のドアを開け放った途端、家電がショートしたような音が耳に飛び込んできた。俺の不安を煽ぎ立てるには充分すぎる効果音だった。

「リーゼ！！　レランジェ！！」

どうも、最悪の予感が現実となったようだ。俺は階段を二段飛ばしで駆け上がると、リーゼを寝かせている両親の部屋のドアを開け放ち――

――高速で飛来したグーが顔面に減り込んでぐべらぁあああああ！？

「マスターの容体に響きます。黙れ安定です」

「だからっていきなり殴るやつがあるかぁっ！」

壁よ砕けろとばかりに打ちつけた後頭部が死ぬほど痛い。

「なんだ。無事じゃないか。どうやら、零児の思いすごしだったようだな」

後から追いかけてきたセレスが俺を殴ったゴスロリメイドを見て胸を撫で下ろす。いやはや、一時は討ち倒そうとしていた？魔帝？

と、その従者の安否を気にするとは、俺なんかの百倍は心優しいじゃないか。

俺は静かに立ち上がり、そんなセレスに言ってやった。

「無事？　どこがだ？」

俺は目を細め、レランジェを睥睨する。

「よく見ろ。こいつ、今にも倒れそうなくらいボロボロだ。それにさっきのパンチも大したことなかった。普段なら俺を殺すつもりで殴って来るくせに」

そう、レランジェはちょっとつつけば崩れそうなほど危うい状態だった。間接部分がバチバチと青い火花を散らし、怪しげな白煙を吐き出している。

「ほ、本当だ。早く手当てをした方がいい」セレスは一転して焦りの表情になり、「零児、治療道具はどこに置いてあるんだ？」

「極普通の民家に異世界のロボを修理する道具なんてあるわけねえよ」

あるとすれば異界監査局だ。

「リーゼのやつ、いくら自分が苦しいからって、従者がこんなになるまで〈魔力譲渡〉することねえだろ」

「このくらい問題ありません。自己修復安定です。それと、マスターの意識がない場合に限り、我々魔工機械は〈魔力譲渡〉を強制発動させることが可能です。この状態はマスターの責任ではありません」

人間だったら喋ることも困難だろうに、レランジェは極めて機械的な口調で言った。

「マスターに代わって、このレランジェがマスターの魔力を消費するしかないのです。マスターから魔力をいただき、魔導電磁放射砲を発射安定。それを繰り返していればマスターは助かります」

レランジェは二本足で立ったばかりの幼児のような足取りで部屋の奥、リーゼが寝ているダブルベッドへと歩み寄る。

「おい待て、レラ――」

「マスターは、レランジェがお助けする安定です！」
呼び止めようとした俺だったが、レランジェの主を想う底知れぬ気迫に気圧されてなにも言えなくなってしまった。
と、レランジェの両腕から触手のようなコードが何本も伸びた。あれがリーゼに〈魔力譲渡〉を強制させる装置なのだろう。その幾本ものコードは、今朝よりも苦しそうなリーゼの体にペタペタと吸盤みたく貼りついた。

刹那、爆発と共にレランジェの両腕が付け根ごと吹き飛んだ。

「「――ッ！？」」
起こったことを理解できずに棒立ちしていた俺とセレスはハッとすると、両腕を失って倒れ込むレランジェの体を左右から支えた。
「レランジェ殿の腕が……」
「馬鹿かお前は！　そのやり方に無理があるからそんなにボロボロなんじゃねえか！」
止められなかった俺にも非がある。力ずくでも黙らせるべきだった。黙らせて、もうこんな無茶をできないようにするべきだったんだ。それと――
「もう休んでろ。後は俺がリーゼの余分な魔力を奪ってやるからよ」
――最初から、こうすればよかった。
「暴走気味がなんだって言うんだ？　堪えてやるさ。俺は頑丈さには自信があるんでね」
「だと……しても、に、人間ごと……きに……受け切れ……るほど……マスターの魔……力は……少量ではあ……りません。……不安定、です」
機械であるレランジェは腕が飛んだぐらいで致命傷にはならないようだが、言語機能が少々やられたらしい。かなりノイズが混じって聞き取りにくい。
それでも〈言意の調べ〉のおかげか、言わんとしていることは理

解できる。
「便利な言葉教えてやるよ。そういうことはな、やってみなけりゃわからねえんだ！」
俺は左手でリーゼの手を握る。
〈吸力〉の発動により、リーゼの魔力が流れ込んでくる。
熱い。なんだこの暴力的な魔力は？　普通なら心地よいはずなのに、体の中で炎の嵐が吹き荒んでいるような感覚が意識を刈り取ろうとする。正直、キツイ。
けど、どうにか制御して俺の魔力に変換できれば落ち着くようだ。よし、イケる！
「れ、れーじ……」
その時、リーゼが薄らと目を開いて弱々しい声を漏らした。不安げに揺れるルビー色の瞳が俺を映す。が、すぐにまた意識を失ってしまった。
「もうちょい待ってろ。絶対に助けてやるからな」
もちろん、無茶はしない。けど、限界まで試みるつもりだ。そもそもこの少女が苦しんでいるのは、俺と出会ってしまったことが原因でもあるんだ。
誰も俺のせいだなんて言わないことはわかっている。でも、俺は彼女を救いたい。そう思って、この世界についてくるのを許したんじゃないか。
俺の体は焼け死にそうなほど悲鳴を上げているけれど、まだまだ大丈夫だ。量の方も問題ない。幸い、俺は過去一度も限界まで魔力を溜めたことはないんでね。
「魔力疾患なんてわけわからんことで、死ぬんじゃねえぞリーゼ！」

「その通り、彼女に死んでもらっては困る」

この場の誰のものでもない冷静な声が割り込んだ。
俺は〈吸力〉を続けながら後ろを振り返る。開け放たれたドアの

前に、眼鏡を押さえた燕尾スーツの男――スヴェン・ベルティルが立っていた。

四章　壊滅的な死闘（5）

『その通り、彼女に死んでもらっては困る』
俺の家に勝手に上り込んできたスヴェンは、開口一番にそう言った。どういう意味だ？

「でも、君が魔力を吸収することで？魔帝？が復活するのも困るんだよ」
スヴェンの声にえも知れぬ悍ましさを感じた俺は、リーゼの手を放して飛び退いた。
その瞬間、パンパァン！！　とこんな日本の住宅地ではそうそう聞かない乾いた音が響く。先程まで俺がいた場所の床が二回弾け、大きな穴が二つ開いた。
数瞬、室内が静謐な空気で満ちる。
硝煙を吐き出す黒い物体がスヴェンの両手に握られていた。拳銃だ。モデルは軍隊が使うような九ミリ口径の半自動拳銃だが、弾痕を見る限り対異獣用の特別製らしい。
「スヴェン……てめえ、なんのつもりだ」
「なんのつもり？　そうだね。？魔帝？リーゼロッテを引き取りに来たと言っておくよ」
スヴェンは口調こそ普段通りであるが、眼鏡の奥の瞳が奴隷を見下す傲慢貴族のような冷酷さを宿していた。様子が違う。
「一体どういうことだ？　誘波殿は彼女を救う確実な手でも見つけたと言うのか？」
「そう、僕たちは見つけたんだ」
警戒しつつ問いかけたセレスに、そう答えたスヴェンは大げさに両手を広げて部屋の中央まで来る。
「ただし、間違いが二点ある。この件には局長どころか監査局すら関与していないし、見つけたのは彼女を救う方法ではなく、彼女を

有効に利用する方法だ」
　俺がスヴェンの言葉を理解するのに、数秒のタイムロスが生じた。
「利用、だと？」
　心持ち低めに、凄みを利かせて問う。
「白峰零児。悪いけど、君と局長の話は聞かせてもらったよ。最高に興味深い話だったね。まさか、そこの？魔帝？が魔力の永久機関だなんて考えもしなかった。元々狙ってはいたけれど、これで喉から手が出るほどほしくなったわけだ」
「元々狙ってたって……まさかお前！？」
　その時、一陣の風が吹いた。
『ごきげんよう、レイちゃん。なぜか携帯が繋がらないので、風で音声のみをお送りしますね』
　空気を読んでいるのかいないのか、誘波が風による一方的な言葉を届けてきた。こののほほんとした声だと、こちらが今どんな状況なのか知らないらしい。
『先程、レトちゃんの意識が戻りました。彼女の話から、昏睡事件の犯人が判明したのでお伝えします。驚かずに聞いてください』
　一呼吸の間を開けて、誘波は深刻な口調になって告げる。
『スヴェン・ベルティル。そして彼に賛同する局員数名です。まさか身内に犯人がいたとは、灯台下暗しで非常に残念です。すぐに捜索を開始しますが、レイちゃんはリーゼちゃんの傍にいてあげてください。ではでは～』
「……もう遅いぜ、誘波」
　俺は額に汗を流して、眼前で拳銃を突きつけている男を睨む。
「ほう、姿を見られていない自信はあったのだけどね。稲葉レト、彼女も侮れない。新米とはいえ流石は異界監査官だ」
　スヴェンが完全に俺の方を向いた隙を狙い、セレスが聖剣の柄に手をかける。が――
「おっと、動かないでもらおうかセレスティナ。この距離なら、君が剣を抜くよりも早く僕の銃弾が額を貫通するよ。この警告、君の

世界でも通用するかい？」
「くっ……」
西部劇のガンマン顔負けの速度でスヴェンはセレスにも銃口を向けた。
「お前、一体何なんだ。リーゼをどうするつもりだ」
スヴェンは二丁の拳銃で俺とセレスを牽制したまま、薄らと笑う。
「そうだね。表立って監査局と敵対することになったわけだし、改めて自己紹介をしよう。――僕の出身は『ラーゲルレイブ』という地球より科学の発展した世界。そして僕は、マッドサイエンティストとして政府に追われていた。懸賞金までつけられてね」
マッドサイエンティスト？　スヴェンが研究者であることは知っていたが、そんな話は聞いたことがない。ずっと隠していたってことか。
「偶然とはいえ、異世界に渡ることができて助かったよ。この世界は僕の知らない技術がたくさんあるし、他世界との繋がりも多い。魔力なんてものにも非常に興味が湧いたね。だから僕は異界監査局に入ったんだ。でも、段々と監査局のやり方がつまらなくなってきた。異世界人や異獣を可能な限り元の世界に帰そうとする姿勢は最悪だよ。捕獲し、あらゆる情報を引き出して利用するべきだ。例えば、実験動物として飼い殺すとか、ね。なぜわざわざ発展の機会を見送るのか、僕には到底理解できない」
言葉を聞けば聞くほど、腹の底が煮えてくるのを感じる。こいつは俺の知るスヴェンではない。他人なんて道具かなにかとしか思ってない外道だ。元からいけすかない野郎だとは思っていたが、ここにきてこいつに対する俺の好感度は現在進行形で垂直落下している。
「まあ、監査局に不満を抱いていても、一個人で組織を改革することはほぼ不可能だった。だからこそ僕は僕に共感する仲間を集め、何年も水面下で動き続けた。そしてようやく時期が来たんだ。君が？魔帝？リーゼロッテを連れてきたことでね。それも偶然だったけれど、あの『次元の門』大量開門は実にいいカモフラージュになっ

たよ。今までなかなかチャンスのなかった魔力集めを、架空の犯人を仕立て上げることで円滑に行うことができたんだ。……さて、僕がどういう人間か理解できたかな？」

〈魔武具生成〉――スパイクド・クラブ。

先端部に何本もの棘が打ち込まれた棍棒を、俺はなんの躊躇いもなくスヴェンに叩きつけた。しかし、スヴェンはそれを最小限の動きだけでかわした。自分の家に大穴を穿ってしまったが、どうせもう二つ開いているから関係ない。

「ペラペラと御苦労様だな。お前そんなキャラだったっけ？」

「僕は基本的にコミュニケーションは好きだよ。人が情報を得る手段の一つだからね。それに苦労話ってものは喋ってて気持がいいだろう？」

窓の方まで下がったスヴェンは、余裕ぶったように自慢の眼鏡を煌めかせる。

「こっちとしては、お前が『敵』だとはっきりわかればそれでよかったんだがな」

「スヴェン。今の話が貴様の本心ならば、私はとても共感できそうにない」

俺はスパイクド・クラブを強く握って身構え、セレスは聖剣ラハイアンを鞘から抜く。レランジェも立ち上がろうとしているが、両腕を失っている彼女ではそれも難しい。

「？魔帝？と人形は使い物にならないようだから、実質二対一だね。いいだろう。もとより君たちが敵対することは予想していたことだ。少しだけ相手をしてあげようか」

途端、地震かと思うほどの揺れが発生した。床が抜けるようにして崩れ、代わりに首なしの巨大ロボが姿を現す。

天井が落ち、壁が砕け、柱が折れる。

一戸建て住宅が爆破テロを受けたように崩壊していく。

「俺の家がっ！？」

なんて嘆いている暇はない。俺はリーゼを、セレスはレランジェ

を抱えると、降り注ぐ瓦礫の間隙を縫うようにして退避した。

四章　壊滅的な死闘（6）

地中をモグラのように掘り進むことのできる巨大ドリルを一度でも食らえば、俺の体など瞬時にミンチと化して血の花火を上げることだろう。

「畜生が！」

ほとんど暗く塗り潰された夕空の下、俺は半壊した家屋の不安定な足場を移動しながら、機械仕掛けの首なし巨人が振るう回転式の槍をかわし続けていた。

「苦戦しているようだね、白峰零児。それもそうだろう。いくらあらゆる武器を扱うことができようとも、君の場合は近づかなければ意味がない」

まったくその通りなので腹が立つ。あの首なしロボ――デュラハンが持つ武器とは圧倒的にリーチが違う。巨大さ故の隙もあるが、そこを突いて懐に入ろうとしてもスヴェンの銃弾が襲いかかる。絶望的なまでに不利だ。

――俺だけなら。

「光と散れ！！」

渦巻く光の斬撃がデュラハンの掌に乗るスヴェンへと飛来する。セレスだ。

「フン」

回転する光の刃を、スヴェンはデュラハンの腕で庇うようにして防いだ。青色のフォルムには掠り傷程度しかついていない。なんて強度だ。

「セレス、リーゼたちは？」

俺は屋根の残骸の上で聖剣ラハイアンを構えるセレスに問いかける。彼女には、俺がスヴェンの相手をしている間に二人を安全な場所に運ぶよう頼んでいた。

「それが、どれだけ走ってもここへ戻ってきてしまうんだ。なにか

妙な力が働いているみたいで。だから二人は近くに隠れてもらっている」

妙な力？　そういえば、さっき携帯が繋がらないとか誘波が言っていたような……。

それと今気づいたけど、家が倒壊するほど暴れているのにまるで騒ぎになっていない。監査局の人払いが働いているのだろうか？　だが、それだけだと携帯が繋がらない理由にはならない。

「隔離結界だよ、白峰零児」スヴェンが俺の心を読んだように、「ここを中心とした四方三百メートル内には僕たち以外誰もいないし、中でなにをしようと外には漏れない」

なるほど、合点が行った。にしても、隔離結界か。単なる人払いの結界よりも高度なものだ。とてもスヴェン一人で行ったとは思えない。恐らく、何人かいるらしいやつの仲間がやっているのだろう。

「他人なんてどうだっていいやつだと思ったんだが？」

「まあ、ただ君たちと戦えば監査局に気づかれるからね。流石に僕だって、局長のような化物を相手にするほど馬鹿じゃない」

そういうことね。

「君たちにとっても戦いやすい環境だろう？　これは魔力回路を組み込んだ新型デュラハンのテストも兼ねているんだ。遠慮せずかかって来るといい」

「その言葉、死亡フラグにならねえように気をつけた方がいいぜ！」

俺はその辺に落ちていた瓦を投擲した。狙いは当然スヴェン本人だが、一発の銃声と共に瓦は空中で砕け散ってしまう。

「まったく、くだらない芸だね」

瓦礫の山を蹴っていた俺にドリルが襲い来る。

「どわっと――危ねえ」

間一髪、後ろに飛んでかわした。やつが瓦に気を取られている隙に近づく作戦だったが……流石に幼稚すぎるか。

「そういえば、まだ僕が？魔帝？をどうするのか答えてなかったね」

すました表情で、メガネ野郎。その『こちらが負けることなんて

ありえない』的な顔に泥、否、馬糞でも塗りたくってやりたい。レンガゴテで。

「彼女は魔力の永久機関だ。人工的に植物状態にでもして、これからの研究や僕たちの目的のために役立ってもらうつもりだよ」

スヴェンが言い終わる前、『植物状態』の後くらいから俺は動いていた。足のバネを全開にしてロボまでの距離を駆け抜ける。リーゼをどうするのか。予想通りすぎて真剣に気に食わない。

迫りくるドリルを限界の角度でかわし、右手の棘つき棍棒を振りかざ――そうとしたところで発砲された。このタイミングで銃弾二つは避けられない。

棍棒を防御に回す。銃弾が炸裂する。ただの銃ではありえない衝撃が発生し、俺はたまらず弾き飛んだ。

追撃とばかりに引き金に指をかけるスヴェン。それを牽制したのは、セレスの光弾だった。彼女は銃口を突きつけるように剣を構え、

「スヴェン。貴様、さっき目的と言ったな？」

「知りたいのかい？　なら教えてあげよう。君たちにとっても有益な話のはずだからね」

俺はスパイクド・クラブを杖代わりにして立ち上がり、放っておいたらいつまでも勿体ぶりそうなメガネ野郎を促す。

「さっさと言え！　眼鏡でも押さえながら！」

「次空の完全制御」スヴェンは本当に眼鏡を押さえて、「そう例えば、『次元の門』をいつでも好きな時に好きな世界へ行けるように開く、とか」

ピクン、とセレスが反応するのを俺は見逃さなかった。

「元の世界に帰りたいセレスティナ。幼馴染を捜したい白峰零児。一応聞くけど、君たちが仲間になってくれるのならこれ以上無駄な戦いをする必要はなくなる。どうかな？」

スヴェン側は監査局と違い、次空制御をビジョンに活動する。そのビジョンが実現するのであれば、これ以上に美味しい話はない。

だが、リーゼや他人を物扱いする考えにはついていけない。俺だ

って時には目的のために手段を選ばないこともあるが、人様に迷惑をかけるような後味の悪いことだけは絶対にしない。それにだいたい、俺は監査局にあいつの居場所を作ってるんだ。別の組織の引き抜きに応じる気はこれっぽっちもない。

つまり――

「却下だ。俺、お前嫌いだし」

「僕は割と君のこと気に入っていたのだけどね。残念だよ」

反吐が出る。

「セレスティナ、君はどうだい？」

「ふん。騎士である私が、無関係な人々を平気で利用するやつの仲間になると思っているのかっ！」

セレスの聖剣から光球がガトリングガンのごとく連射される。

彼女ならそう言うだろうと信じていた。どうやらスヴェンも本当に俺たちを懐柔できるとは考えていなかったようだ。表情を歪めることなくすました笑みのままデュラハンを操り、セレスの攻撃を完璧に防いでいる。

俺は右手の武器を捨てる。中空で霧散する棍棒に代わり、新たに日本刀を生成する。リーゼから吸収した限りある魔力を大切にしたいところだが、先の一撃でスパイクド・クラブがへし曲がったから仕方ない。

デュラハンはセレスが食い止めている。ドリルか拳銃、どちらか片方でも封じれば近づくことは容易い。

しかし、デュラハンの掌に乗るあいつを討つには飛び上がる必要性が出てくる。高さ的に地の利は相手。飛べば「どうぞ俺を撃ってください」と言っているようなものだ。

だから、狙いはデュラハンの足。

上から降り注ぐ連弾をどうにか避けつつも、俺は勢いを殺さぬままデュラハンの左足に魔力製の刃を一閃した。

バキィン！！

手が痺れるほどの衝撃と共に、日本刀の刃が折れた。振り向けば、

デュラハンの足は五分の一も斬り裂けていない。だが――
「くっ」
スヴェンが初めて顔を歪める。機械仕掛けの巨人は、確かによろけたのだ。
それは大きな隙。示し合わせたわけではないが、俺の作った好機をラ・フェルデの聖剣十二将が見逃すはずがない。
「零児、後は私に任せろ！」
期待に答え、セレスが高く跳躍する。銀髪が踊るように靡く。同じくスカートも大変なくらい靡いているけど、俺は紳士なので直視はしません。
「終わりだ、スヴェン！」
一度に五メートル近く飛躍したセレスは、デュラハンの肩に着地すると、本来は首がある場所に大上段から思いっ切り光の剣を突き立てた。
瞬間、機械仕掛けの巨人の内部から眩い光が爆散する。重要な部分にダメージを与えることができたのだろう、ガタン、と巨人は片膝をついて静止した。
「やったぞ！」
「それはどうだろうね」
セレスが勝利を確信したその時、冷然とした声と共に二発の銃声が轟いた。
一発は引き抜いた聖剣で弾いた。しかし――
「がっ！？」
二発目が、セレスの左肩を肩当てごと貫いた。
「セレス！？」
俺は彼女の名を叫んで大地を蹴る。だが、その時には既にスヴェンが燕尾スーツを翻して彼女の前にいた。
よろめきながらセレスは剣を振るう。
スヴェンは難なく拳銃で受け止めた。次いでもう片方の拳銃の引き金を引く。

直前、セレスはスヴェンの腕を蹴り上げて回避した。
が、怯まなかったスヴェンの回し蹴りを鳩尾に食らい、彼女は五メートルの高さから転落してしまった。
冷酷にもスヴェンは追撃ちをかける。
頑丈な肩当てすら貫通する銃弾が空中のセレスに迫る。

ガキィン！！　という金属音。

「ほう」
スヴェンが感嘆の声を上げる。俺が落ちてくるセレスを受け止め、さらに銃弾を防いだからだろう。
洒落にならん威力の銃弾を防ぎ切った物、それは西洋の凧にも似た、逆三角形を伸ばした形状の巨大な盾だった。

四章　壊滅的な死闘（7）

〈魔武具生成〉――カイトシールド。
十一世紀中期にノルマン人によって西欧にもたらされた盾である。裏側に盾を腕に止める革帯と吊り革紐があり、そう簡単に手から離れることはない。
「君は防具も作れるんだね。知らなかったよ」
「防具だって『武具』だからな。ま、滅多に作ったりしねえんだけど」
「それは貴重なものを見せてもらった。そうなると、こっちもお返ししないと失礼になるね」
スヴェンの二丁拳銃が火を噴く。俺はセレスを抱えたままカイトシールドの影に隠れ、銃弾が止むまでやりすごす。
あの拳銃、映画とかで見るベレッタＭ９２に似ている。その装弾数は確か十発くらいだったはずだが、スヴェンのアレは明らかにそれを上回っている。

「ぅ……」
と、気を失っていたセレスが意識を取り戻す。
「セレス、無事か？」
「ああ、すまない。なんとか、まだ戦えそうだ」
なるべく優しくセレスを抱き起こすと、肩からの夥しい出血が目に入った。生憎とハンカチやタオルは持ち合わせていないので、俺は制服の袖を半分ほど破いて彼女に差し出した。
「止血はしといた方がいい」
本来は俺が手当てするべきなんだろうが、左手だけでやれるほど器用じゃないんだ。
「あ、ありがとう」
受け取ったセレスは手慣れた風に左肩をきつく縛っていく。自分

ではやりにくいだろうと思ったけど、流石は騎士様だ。心なしか頬が赤らんで見えるのはきっと激しく動き回ったからだろう。

その時、パキン、という嫌な音を聞いた。魔力で構成された盾に罅が入った音だ。一度欠けた後は脆いもので、瞬く間に亀裂が広がり、カイトシールドは呆気なく砕け散ってしまった。

「ようやく破壊できるとは、なかなか頑丈だったね」

上方から届く気取った声。

「――な!?」

「そんな!?」

俺とセレスはほぼ同時に驚愕する。盾を破壊されて格好の的になったからではない。

ぶっ壊したはずのデュラハンが、再び動き出していたからだ。

「驚くことはない。ただあの程度で動かなくなるほど、僕のデュラハンはポンコツではないということだよ。まあ、再起動に少々調整が必要だったけどね」

そうか。弾幕を張っていたのは盾を壊すためじゃなく、デュラハンを再起動する時間を稼ぐため……。

「そういうことなので、こちらも面白いものを見せてあげよう」

デュラハンが回転式の槍を天高く振り上げる。超速で回るドリルに魔力が宿っていくを俺は感じた。

スヴェンは魔力で戦うような異世界人ではない。とするとアレは、関係のない人々から奪い取ったものだ。

もしリーゼを奪われたら、あんなくだらない物にも利用されることになる。

自由や、意思すらも文字通り奪われて。

永久に、肉体が滅んだとしても縛られるだろう。

――ふざけんな。

「あのデカブツ、今すぐガラクタにしねえとな」
俺はリーゼから吸い取った魔力の残りを右手に集中させる。
〈魔武具生成〉――斬馬刀。
異常なほど長大で肉厚な刀が誕生する。長いリーチで馬の足を潰す現実的な使用法の物ではなく、漫画やゲームであるような騎乗兵を馬ごとぶった斬るための大剣。
「その胴体、もう二度と立てないように真っ二つにしてやる！」
「よせ零児！　無闇に近づくな！」
セレスの制止の声を無視して俺は疾走する。斬馬刀みたいな巨大な得物を生成しても、元は俺の魔力だ。見た目ほどの重量は感じない。だからこそ全力で動けるってもんだ。
「迂闊すぎるね、白峰零児」
スヴェンがデュラハンに指示を出す。
どうせ魔力を得たことで強度や貫通力を大幅に増しただけだ。たとえビーム的なものが出たとしても、軌道さえ読めれば避けるくらい造作もない。

――――甘かった。

魔力を纏ったドリルが地面を貫き抉る。その瞬間、俺に向かって地面に一直線の亀裂が走った。
亀裂から魔力の光が漏れたかと思うと、爆発的な勢いで地面が隆起した。
気がついた時、俺は十メートル近く盛り上がった巨大な地塊にゴミのように突き飛ばされた。

四章　壊滅的な死闘（8）

下からの不意打ち。なすすべなんてあるわけなかった。大型トラックにでも撥ねられたような衝撃に意識が途切れそうになる。

根性でかろうじて意識を繋ぎ留めた俺が見たものは、全壊した家々が住宅街に直線を引いた光景と、デュラハンと熾烈な戦闘を繰り広げているセレスの姿。

それらが下に見えるということは、俺は随分と高く打ち上げられたらしい。もう消えてしまったが、咄嗟に斬馬刀を盾にしなかったら五体満足ではいられなかっただろう。

もっとも、こんな高さから地面に叩きつけられたらいくら普通の地球人より頑丈な俺でも無事じゃ済まない。悲鳴を上げる身体に鞭打って体勢を整えるも、どこから落ちたところで大差ない気がすると。

――ん？

「あれは？」

俺が落下すると予想される付近に、ピンク色の物体が蠢いていた。どう見ても昨日逃がした異獣――スライムだ。最終的に自転車サイズに縮んでいたはずなのに、なぜか元の自動車サイズにまで再生していた。

どうしてこんなところにいるのか謎だが、なんにしても、アレは実にいいクッションになる。

思い立つ日が吉日。これ、俺の座右の銘にしよう。

グシュアアアアアンッッッ！！

レランジェの魔道電磁放射砲すら凌ぎ切る衝撃吸収能力は偉大だった。俺は落下によって擦り傷一つついていない。この前は気持ち悪いなんて言ってごめんなさい。

グチャ。ベチャ。バチャン。惨たらしい殺人現場の返り血みたいにピンク色の粘体が散乱してるけど、きっとアレはゼリーだ。素行の悪い人間がイタズラで撒き散らしたに違いない。

「いえ、その魔獣を再生困難なレベルまで粉砕したのはゴミ虫様安定です」

誰だ俺の心の事実変換を否定するやつは！

破壊を免れた一軒家の影から、無腕のゴスロリメイドが現れた。

「レランジェ。お前もう動けるのか？」

「自己修復安定です」

どうやら言語能力もしっかり修復されたらしい。こいつは一生口利けなくてもいいのに。……しまった、ついつい本音が。

「それよりゴミ虫様が無駄に豪快に潰された魔獣ですが、マスターの膨張しすぎた魔力に惹かれて来たようです」

レランジェの後ろにリーゼが横たわっているのが見えた。相変わらず苦しそうだ。

「それが本当なら、リーゼに助けられたようなもんだな」

たぶん、スライムは隔離結界が張られる前に侵入していたのだろう。ていうか、ゴミ虫様に適応しそうな俺がいるんですけど……。

「マスターに感謝安定です」

「ああ、感謝するさ。感謝ついでに、もう一度〈吸力〉させてもらうぞ」

こうしている間も、セレスとスヴェンの戦闘が続いているのが音でわかる。実は気合いで立っているだけに近い俺が魔力のないまま駆けつけても足手纏いになるだけだ。

それに〈吸力〉はリーゼを魔力疾患の苦しみから解放できる。一石二鳥。

「そんな体で戦っても死亡安定です」

「ハッ、誰が死ぬか。俺は監査官の中でも頑丈さには定評があるんだ。さらに言えば、俺には勝算だってある。リーゼの魔力を借りればな」

あとは俺がリーゼの魔力にどれだけ堪えられるかだが、人間死ぬ気でやればどうとでもなる。たぶん。

俺はレランジェの横を素通りし、リーゼの熱を持った体を抱き上げる。

「リーゼ、できうる限り魔力もらうぞ。一緒に戦ってくれ」

身を引き裂きそうな魔力の暴力が、俺に流れ込む。

四章　壊滅的な死闘（9）

完全に夜の帳は下りた。
半月の僅かな明かりのみが頼り。スヴェン一味が展開している隔離結界の中では街灯なんてつかないからだ。ある意味人為的な停電状態。ていうか、そもそもこの辺の街灯は周囲ごと一本残らず伐採されているから結界関係ないけど。
魔力により高く高く聳え上がった地塊は虚空に消え、非常に見晴らしのよくなった住宅街。そこを俺はまっすぐに戦火の中心へと歩いて行く。
文字通り見る影もなくなった俺ん家で繰り広げられているのは、機械仕掛けの首なし巨人と聖剣を握る女騎士との戦い。
見るに、趨勢は前者に傾いているだろうことが推測される。
なぜか？　傷つき倒れ伏した女騎士を、機械仕掛けの巨人が回転槍でミンチにしようとしている場面を見れば猿だってわかるだろう。
俺は自らの体で暴れる熱く滾った魔力を制御し、右手に集中させる。
〈魔武具生成〉――カイトシールド・改。

ギギギギギギギギギギギギギギギギギン！！

セレスを貫くはずだったドリルが凧状の盾とぶつかり激しく火花を散らす。魔力量を調整して前よりも強度を上げていたから簡単には壊れない。『改』はその部分だ。
「よう、セレス。まだ死んでないよな」
「零児……よかった、無事だったか」
セレスが致命傷を負ってないことに安堵し、俺はスヴェンを睨みつける。そりゃもう、視線で殺せそうなほど。
正直言うと無事ではない。体中の血液がマグマに変わったように

熱い。リーゼの制御を離れた暴走状態の魔力は人体にとって毒だ。それをかつてないほど大量に摂取したのだから、体が絶叫するのは当たり前だろう。

でも、俺は堪えた。意思を強く保ち、荒れ狂う魔力を鎮静せんと努めている最中だ。

そんな俺を見たスヴェンは、驚愕と困惑に目を細めながらやっぱり眼鏡を触る。

「なぜあの高さから落ちて生きているんだい？　もはや化物の域だね」

「生き返る方法でもない限り、ヒーローってのは死なねえんだ」

ま、単純に運がよかっただけだけど。

「だったら、もう一度受けてみるかい？　今度は割とすぐぽっくり逝くかもしれないよ」

デュラハンが大きく跳び退り、そのドリルに再び魔力が纏い始める。あの威力だ。そう何度も撃てるとは思えない。スヴェンが人々から奪った魔力がどのくらいかはわからないが、一回、二回が限界だろう。

「デュラハンのテストはもう充分だ。これ以上長居すると監査局に気づかれるだろうから、さっさと君たちを消して？魔帝？を回収するよ」

正直、あと一回でもアレを食らうのはマズイ。直線とはいえあれほどの範囲攻撃をうまくかわせる自信はない。

あと少しで魔力の充填が完了する。動くなら今しかない。

俺はカイトシールドを捨て、セレスに呼びかける。

「セレス、なんでもいいから槍を受け止めてくれ。ほんの数秒でいい」

「怪我人に無茶をさせるな」

と言いつつも彼女は立ち上がり、聖剣を強く輝かせる。

「そいつはお互い様だろ」

俺は武器を生成することなく走った。別に血迷ったわけじゃない。

俺がやりたいことは、やつに限界まで接近する必要があるんだ。魔力も無駄にできないしな。

充填完了したデュラハンの回転槍が地面に振り下ろされる。と、そこにセレスの光の渦が割り込んだ。

数瞬の拮抗。

――充分だ。

「フン、時間稼ぎを。なにをする気が知らないけれど、近づけさせないよ」

スヴェンは拳銃を持った両手の袖口からさらに二丁の拳銃を暗器みたいに取り出す。四丁拳銃。なんて器用なマネしやがる。

「マスターを狙う者は惨殺安定です」

その時、スヴェンの背後から影が飛び上がった。

「なにっ!?」

反射的に振り返ったスヴェンの顔面に、ゴスロリメイドの飛び膝蹴りが炸裂する。「ぐべら」と変な音を吐き出してスヴェンは巨人の掌から落下した。

スヴェンを蹴り落とした無腕の魔工機械人形にグッジョブとサムズアップする俺。なぜか無表情で舌打ちされたのは気づかなかったことにして、俺は飛び上がった。

「はぁあああああああああああああああああっ!!」

リーゼから貰った尋常でない量の魔力。それを全て右手に持っていく。

〈魔武具生成〉――グングニル。

北欧神話の主神オーディンの持つ、一度投げれば必ず敵を屠るとされる神槍。

ただし、見てくれが同じだけで能力はない。大きさも、電信柱を

二回りほど大きくしたぐらいでいいのか俺は知らない。が――

「らぁあああああああああああああああっ！！」

そんな超大な槍だからこそ、生成されると同時に機械仕掛けの巨人を貫通した。最後まで御しきれなかったリーゼの魔力が黒炎となって燃え上がり、巨体を熱く抱擁する。

圧倒的なまでの魔力で構成された最大最強の武器による一撃。それが俺の勝算だ。流石にこんなでかい物は持てんので、ある程度近づく必要があった。

「なんなんだその力は。……そうか、さっきの間に？魔帝？の魔力を……」

絶望に顔を青くするスヴェン。ずれた眼鏡のレンズに罅が入っていた。

「さあ、もう終わりにしようぜ、スヴェン」

スヴェンは冷や汗をかきながら眼鏡の位置を直す。

「そうとも限らないよ。君たちはボロボロだ。白峰零児、君だって今ので魔力が尽きたんじゃないのかい？」

意外と冷静だったスヴェンに俺は呻く。悔しいがその通りだ。

デュラハンのようなロボを操って戦っているから目立たないが、スヴェン個人の戦闘能力も相当なものだ。襤褸にも等しい今の俺たちが勝てる可能性は限りなく低い。

「図星のようだね。さあ、ここからは僕が反撃するばぐふん！？」

かくなる上は眼鏡を狙って視力低下を図るか、と妙案を思いついた矢先、突然飛来した黒いなにかにスヴェンは何メートルもぶっ飛ばされた。

俺ん家の残骸の上で金細工のような金髪が靡いている。魔女みたいな漆黒の衣服を纏い、ルビーレッドの瞳を爛々と煌めかせる少女がそこにあった。

「？魔帝？で最強のこのわたしを差し置いて、楽しそうなことやってんじゃないわよ！」

とっても不機嫌そうに唇を尖らせている少女。皮肉でなく本気で

仲間外れにされたことを怒っているらしい。もう動いて大丈夫なのか知らないが、頼もしいかぎりだ。

「リーゼロッテ・ヴァレファール……？魔帝？が復活したのか」

魔王の封印が解けたことを知った村人みたいな反応をするスヴェン。とうとう余裕がなくなったようだ。

「レージレージ、こいつ殺っちゃっていいの？」

「お前ちょっとは状況を知ろうとしろよ。一応顔見知りだろうが。でもまあ、口が聞ける程度にボコってくれ」

「わかった。口だけ残ってればいいのね」

わかってない！　この子ったら真面目にわかってない！

「く……よく考えれば、白峰零児にかなりの魔力を奪われた？魔帝？などただの少女。僕にだって充分に対処は可能なは――」

スヴェンは絶句した。目の前の空間が、唐突に黒く炎上したからだ。

その黒炎からリーゼが姿を現す。炎による空間転移……らしい。

「ひっ」

咄嗟に全部の銃を構えるスヴェンだが、遅い。リーゼの両腕に例の魔力還元術式が絡まるように纏わりついたかと思うと、比喩ではなく燃える拳がスヴェンの顔面を殴打した。まったくもって、躊躇や遠慮の片鱗すら見あたらん。

無邪気な子供のようで加虐性愛者のそれを感じさせる狂笑を浮かべ、リーゼはいたぶるように殴る蹴るの暴行を続ける。スヴェンはもはや抵抗すらできないらしく、血反吐を吐くほどフルボッコ。段々と哀れに思えてきた。

「あはっ♪　ずっと動けなかったからなんだかすっごく気持ちがいいわ！　簡単には殺さないわよそれじゃわたしの鬱憤は晴れないからね！　あっははははぁーっ♪　愉快愉快。あっははははっはぁー♪」

悪魔だ。そこに悪魔がいる。いや、魔王か。

「れ、零児、そろそろ止めないと本当に死んでしまうぞ」

「あ、ああ」
そこは俺もわかっているのだが、恐ろしいほど楽しそうに哄笑するリーゼに近づきたくない。本能的に。
「ははははははっ……は？」
その時、リーゼの笑いが止まった。ついにスヴェンが逝ったか、と思ったがそうではなかった。
リーゼの体になにかが巻きついている。それはぬるぬるネバネバしたピンク色の触手に見えた。物凄く記憶に新しいのだが、はて、なんだったか。

ああ、さっき俺が潰したクッショ――スライムか。

ただのスライムかよ。脅かしやがって。

だたのスライム。

……！？

「どわっ！？　なんでこんなタイミングで出て来るんだ！？」
「こいつは昨日の……」
「空気読め安定です」
セレスとレランジェが身構える。それにしてもあのスライム、でかくなってないか？　なんか大型トラックくらいの大きさに見えるんだが。
いやそんな疑問点よりも重大なことがある。アレに捕まっているリーゼだ。
「ぬ、ぬるぬる……ネバ……ネベ……きゅぅ」
目を回して脱力していた。やっぱりダメだったか。「なんで魔王なのに下級モンスターに弱いんだよ！」と衝動的に叫びたくなったが、どうにか自制する。

と、まだ意識のあったスヴェンがゆらりと立ち上がった。
「く、くははっ！　どうやら僕にも運が向いてきー―」

グシャン。

いきなり、スライムが潰れた。
「へ？」
素っ頓狂な声を漏らすスヴェン。俺もなにが起こったのか全然わからない。理解できるのは、スライムは潰れたのに飛び散らず、ぺしゃんこになって地面に縫いつけられている視覚情報だけ。
いやー―
ヒュォオオオ、という音が聞こえた。
風だ。

「はぁい♪　全次空のアイドル誘波ちゃん優雅に参上でぇーす♪」

平たくなったスライムの上空から天女が舞い降りた。
「誘波！」
「どうですレイちゃん。絶妙なタイミングで颯爽と登場した私に惚れちゃいました？」
「誰がアイドルだ全然優雅じゃねえよっていうか絶対出るタイミング計ってたろ紅茶喉に詰まらせて死ねばいいのに！」
「さらりと最後に器用すぎる死に方を要求しませんでしたか？」
とりあえず突っ込みたいことは言えたからオッケー。
「遅れすぎだ。もっと早く来いよ」
「隔離結界の発見と解除に少々手間取ったのですよ。スヴェンちゃんのお仲間を全員捕まえなくちゃいけませんでしたから。まあ、タイミングは計ってましたけど」
「酸素喉に詰まらせて死ねばいいのに」
「もっと器用になりましたね」

誘波は恵比寿神みたいなニッコニコの笑顔をスヴェンに向ける。
「さて、あとはあなただけですよぅ、スヴェンちゃん」
「局長まで来てしまったのなら仕方ないね」
スヴェンはボロ切れになったスーツのポケットから予備の眼鏡を取り出してかけ直す。
「こういう事態に備えて切り札を用意しておいてよかったよ」
腫れ上がった顔に嫌らしい笑みが貼りついた。
――途端。
地球が悲鳴を上げるように地響きが鳴った。大地も地震の初期微動くらい揺れている。
ボコリ、ボコリ、と地面からなにかが這い上がって来た。
機械仕掛けの首なし巨人――デュラハンだ。
だが、数がおかしい。一体二体じゃない。十、二十……五十体は優に超えている。
「嘘だろ……」
ひしめく戦闘ロボの軍勢に、被害を免れていた住宅も次々に破壊されていく。まさに地獄絵図だった。
一体でもあれだけ手こずったデュラハンが軽く五十倍。悪夢だ。
ん？　待て、確かデュラハンって……。
「そうか、わかったぞ。これはハッタリだ。デュラハンはスヴェンの思念で動いている。これほどの数を一つの脳で操れるはずがないいいいいいいいいいいいっ！？」
一度に三本のドリルが殺到して俺は慌てて飛び退いた。おかしい、なぜ攻撃できる？
「白峰零児、君の言う通りこれらは僕の思念で動かしているし、全部を細かく動かそうと思ったら一秒と持たずに脳がパンクするだろう。けど、僕は？敵を殺せ？としか命令していない。言わばオートパイロットだ。それでも負担は大きし、監査局に見つかる危険性が増すため最初から使うことはできなかったのだけどね。もう関係ない」

長々と御苦労な説明をしてくれる。その間も俺たちはデュラハン軍団の攻撃をかわし続けているわけだから、ちゃんと聞いていたやつが果たして何人いるか。

うん、一人いた。無論、誘波だ。

その場を微動だにせず、近づくデュラハンを片っ端から風でスライスしてやがる。それでいて下ではスライムを抑えているわけだから、やっぱあいつはバケモンだ。

「レイちゃんたちはいいとして、この程度で私を殺せると思っているのですか？」

「いや、思っていないよ。僕が逃げる時間を稼げればそれでいいんだ」

それだけ言って、スヴェンは踵を返す。

「くそ、逃がすか！」

「どいて、レージ。わたしがやる」

やつを追おうとした俺を、ぬるネバ状態から解放されたリーゼが制する。彼女にしてはいつになく静かな口調だった。

「ぬるぬる嫌い……ネバネバ嫌い……こいつらわらわらウザイ……」

単純に不機嫌度が臨界点を突破していただけでした。

「全部、焼き払う」

ぼそっと呟くように言って、リーゼは片手を天に突き上げる。

「――ちょっ！？」

俺は自分の目を疑いたくなった。魔力還元の魔法陣が、この辺り一帯を一瞬でドーム状に覆った。つまり、リーゼはそれだけの魔力を展開しているのだ。

「しこたま吸収したと思ったのに……お前の魔力は底なしかっ！」

「零児、そんなところを突っ込んでいる場合ではないと思うのだが」

「退避安定……不可能です」

そうだ。よく考えなくてもドーム状ということは俺たちも範囲に入っているわけになる。死ぬんじゃない、コレ？

「あらあら、大変ですねぇ」

誘波だけ余裕そうなのが果てしなく腹が立つ。
「あはははははっ！　ウザったいのは全部消えちゃえばいいのよ！」
「やっぱりこいつ？魔帝？だぁあああああああああああっ！？」
チュドーン！！　擬音にするなら、そんな音。
魔法陣のドーム内で発生したビッグバンさながらの黒い爆発は、俺たちや逃げようとしていたスヴェンも含めてなにもかもを巻き込んで消し飛ばした。
異世界イヴリアの？魔帝？がちょっと本気を出せばこの有様だ。
薄れゆく意識の中、俺は思う。
――傍迷惑この上ねえ。

終章

「はい。というわけで皆さん無事でしたぁ！」
パチパチパチ、と演劇が終わったように拍手をするニッコニコの着物少女。俺はそんな彼女にアルプスの雪山くらい真っ白な視線を向ける。
「おいコラ、なにが『というわけで』だ。俺はたった今起きたばかりで説明なんて一切受けてねえぞ」
ていうか、ここは誘波の屋敷か？　全体的に和風の畳部屋だが、その辺にマンガや携帯ゲーム機が散乱しているから十中八九そうだろう。なんで目が覚めたらこいつん家なんだ？　俺の家は？　……ああ、そういえば跡形もなく消し飛んだんだっけ。
俺の家、もうない。
俺の家……。
俺の……。
泣いていいかな？
「レイちゃんの泣き顔は是非見てみたいです♪」
とりあえず腹いせに畳の上に転がっていたマンガ本を破り捨てた。
「あああああっ！？　なにするんですかレイちゃんそれ作家さんのサインが書いてある貴重なものなんですよ！？」
貴重なら無造作に放置しとくなよ。つーか心読むな。
俺は「うぅ、ネットオークションにまだあればいいのですが」と涙を流して紙片を拾い集めている誘波に問う。
「で、あの後はどうなったんだ？　なんで俺は助かったんだ？」
「ふんです。酷いことするレイちゃんには教えてあげません」
「おっとここにもう一冊」
「私が風の結界でリーゼちゃんの爆炎爆発から皆さんを守ったのです。そして気を失った皆さんをここまで運んだのです。レイちゃんは大体半日くらい寝ていました」

まあ、予想通りだな。それよりも後処理の方が聞きたいわけで。
「さあ、人質を解放してください」
伸びてくる誘波の手を跳ね除ける。
「まだ俺の質問は終わってない」
「うー、レイちゃんのターンはいつまで続くのでしょうか」
なんだよターンって。
「スヴェンはどうなった？」
「流石にスヴェンちゃんまでガードする余裕はありませんでした。恐らく爆発に巻き込まれてロボ軍団共々灰も残らず焼失したと思います」
「なんか曖昧だな」
「死体がありませんので」
まあ、アレで助かるのは神か誘波か人外のなにかくらいだ。あのスライムも今度こそ昇天したことだろう。
「そうそう、スヴェンちゃんのお仲間を拷問……ではなく取り調べた結果、彼らの隠れ研究所の場所が明らかになりました。どうやらそこで魔力吸引機やデュラハン等を開発・製造していたみたいですね。ああ、安心してください。残党と研究所の殲滅は他の監査官が終わらせてくれたので、レイちゃんに働けなんて酷なこと言いませんよぅ」
ひょいひょい、と両手を差し出す誘波。マンガ本を返せということだろう。仕方なく渡してやった。
「でも、まだまだ問題点はあります。スヴェンちゃんたちだけであれほどの設備を用意できるとは思えません。あの数のデュラハンもそうです。資金面や労働力的にも監査局に隠れて製造できるはずがありません」
「誰かがやつらに支援していた、と？」
誘波はこくりと頷く。言われてみれば、確かに疑問だ。
「それこそ捕まえたやつらを拷問すりゃいいだろ」
「いえ、それが彼らは本当に知らないようで。どうやらスヴェンち

ゃん一人で支援者と遣り取りしていたようです」
仲間を仲間と思わない、本性を曝け出したスヴェンはそんな男だった。文字通り蒸発してしまったのが非常に痛いところだ。
「監査局に敵対しているわけですからね。世界各地の監査局と協力して全力で調べるつもりです」
それなら判明するのも時間の問題だろう。そういうわけで、俺は話を変える。
「それはそれでいいとして。これが一番気になっていたんだが、俺ん家の周辺は今どんな状況になってるんだ？」
「もちろん、一面焼け野原です♪」
想像するだけで頭を抱えたくなった。
「でも問題はありません」
「は？　どういうことだ？」
「異界監査局が総力を挙げて修復しているので、遅くても一週間以内には元に戻してみせます。それまでは〈現の幻想〉でなんとか誤魔化せるでしょう」
〈現の幻想〉とは異界監査局が最近開発した？質量ある幻？を発生させる装置だ。限りなく本物に近いが、幻は幻だ。いつかは違和感に気づく。それにあれほど大規模だと長時間維持することはできない。一週間はそれらのリミットと言ったところか。
「ちなみに隔離結界のおかげで一般人の被害者ゼロです。安心しましたか？」
「まったく、無茶苦茶だな」
誤魔化し方が些か強引すぎると思うが、俺は安心していた。
「もうよろしいですか、レイちゃん？」
「ん？　ああ」
「じゃあ、行きましょう。皆さんきっと待ってはくれませんよ」
「は？　どこに？」
その疑問には答えず、誘波は無理矢理に俺の手を引っ張っていく。てか、昨日あれだけボロボロだったのに、体の痛みはほとんどない。

監査局の医療技術はたいしたもんだと感心する。
部屋の襖を開けて廊下に出る。そういえばリーゼたちの姿が見えない。これから連れて行かれるところに集まっているのだろうか？
靴に履き替えて玄関の戸をスライドする。と――

「あっ！　お前今わたしの肉盗ったでしょ！」
「え？　いやリーゼちゃん誤解だオレはそう、白峰の肉を盗ったんだ」
「レージの肉はわたしの肉なの！　焦がすわよ？」
「ええッ！？」
「なんや魔王ちゃん機嫌悪いなぁ。ウチが気持よくさせたるわ」
「ひぅッ！？　お、お前どこ触ってんのよっ！」
「俺的にそこの肉もらったぁーッ！！」
「ちょっとそれあたしが丹精込めて育てたやつ！」
「大事なら取られるようなとこに置いとくなよ。面倒なことするな」
「まったく、貴様らはもっと静かに食事できないのか？」

そうそうお目にかかれないほど立派な日本庭園でバーベキュー大会が繰り広げられていた。集っている面々は監査官や局員で、リーゼやセレスも自然な感じに溶け込んでいる。なぜか桜居がいるけどシカトの方向で。
「誘波、これは？」
「リーゼちゃんたちの新歓ですよぅ。レイちゃんたちの時もやりましたでしょう」
俺は思い出す。間違って酒に手を出した相棒に「ゆーきゃんふらい！」とか言われて屋上から突き落とされそうになった記憶を……。
「ともかく今日は無礼講です。あ、レイちゃんはいつも無礼でしたねぇ」
なんか心外なことをほざいてから、誘波はワイワイ騒いでいるグループに混ざっていった。

「ったく」
肉の焼ける芳ばしい匂いが鼻を刺激し、思い出したように胃が空腹を主張し始める。
「お目覚め安定ですか、ゴミ虫様」
とそこで、横から声をかけられた。ゴミ虫様で反応するようになった自分が悲しい。
「レランジェ、お前、その腕……」
昨日は間違いなく両腕がもげていたはずの魔工機械人形に、新しい腕が取りつけられていた。
「自己修復安定ってやつか？」
「流石に損失の大きい部分は修復不可能です。これは監査局につけていただきました。新たな機能を追加の上、魔道電磁放射砲もレベルアップ安定で健在です」
頑張ったな、異界技術研究開発部。
「あ、レージ！」
「ようやく起きたのか」
こちらに気づいたリーゼとセレスが駆け寄って来る。
「なかなか目を覚まさないから心配したぞ。体はもう大丈夫なのか？」
「まあな。心配かけて悪かったな、セレス」
微笑んでそう返すと、セレスは頬をほんのりと赤らめてそっぽを向いた。俺、なんか悪いことしたっけ？
「レージ、これあげる」
と言ってリーゼはスペアリブが一切れ乗っかった紙皿を差し出してくる。
「ああ、サンキュ」
「わたしを助けてくれたのってレージなんでしょ？　これは御褒美だからありがたく受け取りなさい」
なんともショボかった。落涙するほど大変だったのに……。
「ゴミ虫様に質問があります」

「もうゴミ虫様で安定してきたなお前！」
「魔工機械人形百体分のマスターの魔力を人間が受け切れるとは思いませんでした。ゴミ虫様は何者安定ですか？」
「それはレイちゃんがハーフだからですよぅ」
と答えたのは両手一杯に肉刺しを抱え込んできた誘波。
「異世界人と地球人とのハーフは、能力が劣化する代わりに最大魔力容量がずば抜けているのです。はむ……ほれはおひょらく、地ひゅう人にょは力りゅう量がひゃ世きゃい人りょりも、ごくん、高いからだと思われます」
「食いながら喋んな！」
こいつは上品なのか下品なのか時々わからなくなるから嫌だ。
「なんにしてもリーゼちゃんの体調管理はレイちゃんが行うべきですね。レランジェちゃんはどのくらいの周期で〈魔力譲渡〉を受けていたのですか？」
「週に一回で安定です」
「だそうです、レイちゃん」
マジで全部投げる気だこいつ！　まあ、スヴェンみたいにリーゼを利用しようとしないだけマシか。
「わかったよ」
それにたぶん、これは俺にしかできないと思う。
「なに？　レージって魔工機械だったの？」
「違わいっ！」
酷い誤解だ。謝れ、俺に。
「えー、ここで皆さんに新しいお友達を御紹介します」
なんか誘波がいきなり転入生を紹介する小学教師みたいなことを言い始めた。
「なんでまたこんなタイミングに――ッ！？」
どうぞ～、と誘波に促され、建物の影から現れたのは――ピンク色の不定形生物だった。
「うおあっ！？　こいつ、スライム」

「まだ生きていたのか。零児、下がるんだ」
「ぬるぬる……ネバネバ……はうぅ」
「マスター、お気を確かに」
「なんで異獣がここにいんだよ、誘波！」
「なに言っているのですか？　彼女は？人？ですよ？」
……。
……。
……。
「「「はぁ！？」」」
衝撃のカミングアウトに、俺たちどころかバーベキュー大会の参加者のほとんどが驚愕した。
「喋ることができないだけで異獣と決めつけるのはよくないと思いますよ、レイちゃん」
「いやいやいやいや、こいつ俺ら襲ってきたし！？」
「スキンシップだそうです」
「なんじゃそりゃ！？」
やっぱり異世界人、意味がわからん。つーかさっき？彼女？って言わなかったか？　性別あんのかよ。不定形のくせに。
俺は謎生物をじっと観察する。ぽっとピンク色の体が目に見えてわかるくらい朱に染まった。うわー、ホントに意思や感情があるよ……。
「それと、フフフ、どうやら彼女はリーゼちゃんを気に入っちゃってるみたいですねぇ」
「え？」
現在進行形で放心状態に移行しかけていたリーゼは、誘波の言葉でハッとした。みるみる顔色が悪くなっていく。相当に嫌らしい。

うねうねとゆっくりした速度でスライムはリーゼに触手を伸ばす。
あ、なんか傍から見ていると「お友達になってください」と言っているように見えなくもない。
「リーゼちゃん、仲良くしてくださいね？」
「無理」
ふるふると首を横に振って後じさるリーゼ。いつもなら嫌なことがあればすぐ燃やそうとするのにそうしない。どうも最大級のトラウマになったらしく、本能的に逃げに転じているようだ。
そんな彼女をスライムが触手をうねうねさせて追いかける。
「無理、無理、こんなの、絶対に無理ぃいいいいいいいいいいいいいいいいっ！！」
ついにリーゼは全速力で逃げ出した。スライムも負けじと追いかける。あの体でリーゼのスピードについて行けているのが不思議だ。
「ふふふ、鬼ごっこですか？　さっそく仲良しさんですねぇ」
「……鬼はお前だ」
さらにカオスになった現状に俺はうんざりする。たぶん、この場で一番問題山積みなのは俺なんじゃないかな。だって住む家が幻になってるんだぜ？
直る前に親が帰ってきたらなんて言おうか、と考えながら俺は騒がしいバーベキューに参加した。

「あ、なんだったらレイちゃん、幻覚の家でなく私の家に住みますか？　学校も近いですし、いつでも私とキャッキャウフフって戯れますよ？」
「うっさい黙れ刺し殺すぞいい加減に！」

終章（後書き）

戦闘シーンの緊張感が足りないと思いますので、新人賞用の執筆活動が終わり次第改稿して行こうかと考えています。

感想・評価・質問
お待ちしております！！

序章

暗黒が世界を覆う。

家も、道も、街灯の明かりさえも闇色に染まっていく。霧状だったり液状だったりと、形の定まらない混沌とした闇が這うように全てを喰らっていく。

まるで物質化した影だけになったような路地に、四つの悲鳴が重なった。それは広がる闇の発生地付近から響いてくる。

悲鳴を発したのは、二人の少年と二人の少女だった。どこかの中学校の制服を着ている彼らは、一様に表情を恐怖で引き攣らせている。四人が瞠目して凝視しているもの、それは陽炎のように歪んだ空間――その中心を縦に切り裂いたような楕円形の？穴？だった。？穴？の奥はドロドロの血液を思わせる闇が蠢いており、それが零れ落ちる度にこちら側の黒い侵蝕が進んでいく。

と、空間の？穴？を押し広げるようになにかが突き出してきた。それは全身真っ黒な、鬼のように太く筋肉質な両腕である。つけ根は見えない。突き出た腕は、足を竦ませる四人の内、手前にいた男女をそれぞれ掴み取った。

「広瀬（ひろせ）先輩！　望月（もちづき）先輩！」

捕まらなかった背の低い少女が二人の名を叫んだ。もう一人の少年が彼女の横を駆け抜けて二人を助け出そうとしたが、簡単に振り払われてしまう。

潰さない程度に握力を配慮した腕がゆっくりと？穴？へと引き上げ始めた。必死に救出を試みる二人に、腕に捕まった二人が悲鳴混じりに「逃げて！」と叫ぶ。だが、このような異常事態にも関らず助けようとする二人はもちろん、捕まった二人も他人を見捨てられるほど割り切りのいい性格はしていなかった。

しかし力は及ばない。助けようとした努力も虚しく、腕に捕まった少年と少女は蠢く闇の中へと消えていった。

残された二人は絶望感に脱力し、膝を折った。このままここに留まれば自分たちも周囲と同じように黒く染められてしまうのかと思ったが、生物には抵抗力でもあるのかそうなる気配は今のところない。

だからといって、自らあの？穴？へと飛び込む勇気も二人にはなかった。入ることは命を捨てることだと、本能が語りかけているからだ。

放心した二人がその場を動けないでいると、再びあの腕が？穴？から出現する。大切な友人たちを奪われた彼らは、抵抗の意思も見せないまま無残にも捕らわれてしまう――はずだった。

ザン！　と、唐突に両腕が手首から先を同時に斬り落とされた。ぼとりと地面に落ちた手首が空気に溶けるように霧散する。

「チッ。二人ほど持っていかれちまったか」

「あらあら、これは監査官として大きな失態ですねぇ」

なにが起こったのか理解できずにいた少年と少女の前に、一組の男女が現れた。

男は三十代半ば辺りと思われ、鍔広の黒い帽子を目深に被り、漆黒のマントのようなロングコートを羽織っている。女は少女と呼べる見た目で、色鮮やかな十二単を纏ってどういうわけか宙に浮かんでいた。

「とりあえず、次が出てくる前に早く？穴？を閉じちゃってください。これ以上異界の侵蝕を受けると元に戻せなくなっちゃいますし」

「俺に指図すんじゃねえよ」

黒ずくめの男はぶっきら棒に言うと、？穴？に向かって手を翳した。すると、幾本もの黒い糸が彼の掌から伸長し、絡み合うそれが？穴？を縫うようにして塞いでいく。

縫合作業が終了し、空間の歪みもなくなったことを確認した男が

少年たちに振り返る。
「立て、ガキ共。いつまでそうしているつもりだ」
先に正気づいたのは少年の方だった。
「な、なんなんだ、あんたらは？」
「それが知りたいなら黙ってついてこい。アレと遭遇しちまった以上、てめえらは既に一般人じゃねえんだ。断るっつうなら両手両足を圧し折ってでも連れていくぞ」
男の乱暴な言葉よりも、帽子の下から覗く刃のような鋭い目に二人は射竦められてしまった。男の横から邪のない笑顔を向けてくれる天女みたいな少女がいなければ、恐怖に震え上がって頷くことさえできなかっただろう。
「てことはクロちゃんが彼らを教育するんですか？　不良にならなければいいのですが」
「黙れ、面倒臭えことにそれが俺ら影魔導師のルールなんだ。あと妙なあだ名で呼ぶんじゃねえよ、気色悪い」
心底嫌そうな顔をする男を無視して、十二単の少女が二人を安心させるようにしゃがんで目線を合わせる。
「途中で気が狂って暴れられても困りますし、心を落ち着かせるためにも少し眠っていてくださいね。――〈眠風（スリープ）〉」
青色の風が、少年と少女を優しく包み込んだ。

序章（後書き）

なんか三人称でシリアスな始まり方になってしまいましたが、次からはちゃんと一人称に戻ります。序章というか間章的なノリですね。

現在はラノベ新人賞用の作品も並行して書いているため（寧ろそっちに本気モード）、第一巻の時みたいに一日一話以上のペースでやろうものなら流石に夙多史も過労死しちゃいます。なので下手するとクオリティが下がるかもしれませんし、推敲に割く時間も少なくなるのでミスが目立つかもしれませんが、どうか見捨てないでやってください。

親切な方、ミスとか矛盾とか見つけ次第教えてくださいね。

一章　二人の影魔導師（1）

〈言意の調べ〉というアイテムがある。そいつはどっかの天才魔科学者が開発した、使用言語の異なる相手と意思疎通できるという便利な品だ。どちらか片方が装備していれば、こちらの言わんとしていることが声に乗って相手に伝わり、相手の言わんとしていることがこちらの理解できる言語に変換されて脳へと届く。無限に存在する異世界を相手取る異界監査官は、たとえ風呂場であろうとも常時装備しておかなければならない。

だからその異界監査官たる俺――白峰零児（しらみねれいじ）にとって、『英語』という科目はいらないんじゃないかと思うわけだ。

その旨を懇切丁寧に監査局所属の英語教師に説明してみると、筒状に丸められた教科書で思いっ切り頭をしばかれた。なぜに？

「適当なこと言っても補習からは解放させんぞ、白峰。抜けたければ言われた通りに渡したプリントの英文を全訳しろ」

そう言って英語教師はまた俺の頭をしばくのだった。趣味が筋トレという、体育教師の方が向いてんじゃねえかと思うゴリラ似の男がすることなだけに、けっこう痛い。異世界人と日本人のハーフである俺だって痛いもんは痛い。

「まったく、お前といい迫間（はくま）といい、どうして日本育ちの監査官は他国語に心を開かんのだ」

英語教師が呆れを孕んだ溜息を漏らす。溜息をつきたいのはこっちだ。〈言意の調べ〉は？人？と意思疎通する道具であって、文字の意味を読み解く道具ではない。よってこの目が回りそうなほどびっしり書き記されたアルファベットの羅列を、俺は自分の力だけで打ち破らなければならないのだ。もっとも、それができないから俺は抜き打ちテストでミスって放課後の居残り補習に出席させられているわけだが……。

「こうなったら、今度異界技術研究開発部に行って、〈言意の調べ〉に文字も読めるような機能を追加するように申請するしかないな」
「そりゃ立派なカンニングだ。辞書は使っていいんだから、馬鹿なこと考えていないで英訳に集中しろ」
「へーい」
いやはや、なにが楽しくてこんな英国産ゴリラと密室でお勉強せにゃならんのか甚だ疑問だ。
まあ、幸いなことと言えば補習を受けてんのが俺一人じゃないってことくらいか。
ちらりと横目で右隣を見やる。そこには金髪紅眼の美少女が英文の書かれたプリントと睨めっこしていた。
この中学生と見間違えるほどちっこいお嬢様はリーゼロッテ・ヴァレファール（愛称はリーゼ）。当然、日本人じゃない。ていうか地球人でもない。イヴリアと呼ばれる異世界に君臨していた？魔帝？様だ。父親が滅ぼした世界に嫌気のさしていた彼女は、とある事故でイヴリアへと飛ばされた俺が元の世界に戻る際に引っついてきたのだった。
今度は左隣を見てみる。流れるような白銀のポニーテールがそこにあった。
凛然とした表情でまじめに補習に取り組んでいるこの銀髪美人は、セレスティナ・ラハイアン・フェンサリル（愛称はセレス）。異世界ラ・フェルデからこの世界に迷い込んできた聖剣十二将と称される騎士だとか。
片や可愛い系、片や綺麗系の美少女に挟まれている俺は、世の野郎共にとって夢のようなシチュエーションかもしれん。だけどな、『美少女』という要素をデクリメントすると残るのは『魔王』と『聖騎士』なんだ。補習が始まった時からお互いがお互いを威圧するようなオーラを放ってるもんだから、俺に降りかかってくるプレッシャーは実際に味わったことのないやつにはわかるまい。勝てそうにないボス戦で『逃げる』のコマンドを連打したくなるような気持

ちだ。
　さっきは幸いなことだと言ったが、訂正する。今は寧ろ一人の方がいい。いいが、彼女たちが先に終わることなんてまずありえない。
　スヴェン・ベルティルの事件から一週間が経っているとはいえ、この二人はこちらの世界に来たばかりなのだ。地球の共通言語、それも高校生レベルの文章を理解するなんて当分できるわけがな――
「できたわ。これでいいの？」
「こちらも終了しました」
　なんですと？
　二人が同時にペンを置いたのを見て、俺は冷や汗が噴き出すのを抑えきれなかった。
「ふむ、まあ、だいたい合ってるな」
　プリントを受け取った英語教師が満足げに頷いた。いやいやいや、そんなわけがないだろう。
「先生、女子だからって甘やかすのは教育上どうかと思いますよ？」
「こちらに来て一週間そこらでここまでやれれば上出来だろう」
　ピラリと英語教師が二人のプリントを見せてくれた。書き殴ったような文字はリーゼ、几帳面さが浮き出ている綺麗な文字がセレスだろう。ラッキー、今のうちに少しでも答えを記憶して……ってあれ？
「先生、なんか問題が違って見えるんですけど？」
「ん？　そうか、すまなかった。白峰も小学校レベルから復習した方がよかったか」
「なんすかそれっ！？」
　小学校レベルくらいなら俺だってわかる（たぶん）。なにこの差別？　――いや、よく考えれば当たり前か。こいつら日本語だってまだ平仮名くらいしか読み書きできないんだ。初歩の初歩から教えることこそ普通だ。
　それでも二人は天才なんだろうな。俺だったら絶対無理だ。本来ならある程度の知識を身につけてから異世界人を入学させる異界監

査局付属伊海学園に、その辺のカリキュラムを省略してリーゼとセレスを入れたのは彼女たちなら問題ないと判断したからかもしれない。

「さっきから聞いていれば零児、貴様は私がお情けで及第点を貰ったとでも言いたいのか？」

「そこの騎士崩れはどうかしんないけど、わたしはちゃんとできたわよ」

おっと、まさかの両サイドから反撃が飛んできた。セレスさん、布で包んでいるとはいえ聖剣ラハイアンを喉元に突きつけないでください。怖いんで。

「き、騎士崩れだと？　？魔帝？リーゼロッテ、末席とはいえ聖剣十二将の私を愚弄することは許さんぞ。今ここでこの前の決着をつけてもいいのだぞ？」

「フン、望むところよ。今度こそお前を灰にしてあげるわ」

「あー、喧嘩するなら余所でやれ」

「おいゴリラ止めろよ！　あんた教師で監査局員だろうがっ！」

「誰がゴリラだ白峰！」

結局、暴れ出しそうな二人をボコられながら諫めたのは俺だった。

一章　二人の影魔導師（2）

帰宅するやいなや、俺はカバンを放り捨ててリビングのベッドを兼任しているソファーへと身を投じた。

疲れた。今日はまた一段と疲れた。リーゼとセレスの喧嘩を止めてその隙に補習授業をお去らばしようかと算段していたんだが……まあ捕まったわけで。俺になんの恨みがあるのか、あのゴリラはその後たっぷり二時間もノンストップで補習を続けやがったんだ。しかも俺だけ。

時計を見ると午後七時を回ろうとしている。どおりで太陽が沈みかけているわけだ。

「それにしても、よくもまあ宣言通り一週間で直せたもんだな」

ソファーに仰向けに寝そべった俺は感嘆の呟きを漏らした。先週、スヴェンという眼鏡野郎がリーゼの魔力を狙って襲撃してきたのだ。それだけならまだ被害は少なかったが、スライムが乱入したり、五十体を越える機械仕掛けの首なし巨人が出現したりと、状況がかなりカオスになった。そこでブチ切れたリーゼが辺り一面を消し飛ばしちまったから、異界監査局が昨日まで総力を挙げてせっせと修復作業に取り掛かっていた次第だ。

多少の違和感はあったものの、〈現の幻想〉という?質量ある幻?を生み出す魔導具のおかげで一般には知られていない。そこは流石の異界監査局だ。気づきかけた一般人には記憶操作くらいしただろうけど。

「帰っていたのですか、ゴミ虫様。それならそうと死んでくれればよかったのですが」

リビングの扉付近から冷ややかな声で失礼な言葉が飛んできた。気だるく首を動かしてそちらを見やると、ゴスロリのメイド服を着た能面のように無表情な女が立っていた。灰色の瞳が鬱陶しそうに俺を見詰めてくる。

「今日はもう突っ込む気力もねえよ……」
　このメイドの名はレランジェ。リーゼがイヴリアから連れてきた専属の侍女であり、御主人様の魔力を充電して稼働する魔工機械人形とかいうやつだ。そう、言うなればロボット。見た目や仕草が人間とそう変わらないものだから、時々忘れそうになるけれど。
「本日は異界技術研究開発部からいただいたこの魔導書を基に夕食を作成してみました。毒味をお願いします」
「本当に毒とか入ってねえだろうな？」
　この人形には前科があるから警戒せねばならない。だが、彼女が持っている『クッキングシーカー』とかいう週刊料理雑誌を見てなにかを作る場合にはそういったことはなかった。だから今回はひとまず安心だろうね。
「……入っていない安定です。馬鹿な御主人様ですね」
「よーし毒味はしない！　理由はその間と、お前が俺をありえない代名詞で呼んだからだ」
　チッ！　とあからさまな舌打ちが人形らしい整った唇から聞こえた。そういえば、こいつはこの世界に来た初期頃から日本語や英語を読めていたな。どうせ異界技術研究開発部辺りがインプットでもしたんだろうと予測できるから追及しないけど。
「んで、リーゼはどこだ？　先に帰ってるはずだが？」
「いえ、マスターはまだお戻り安定ではありません。……ゴミ虫様が御一緒ではなかったのですか？」
「は？　だってあいつ、先に補習終わって――！？」
　そこで俺は自分の迂闊さに気がついた。リーゼを狙ったスヴェンには恐らくバックアップしていた仲間がいる。当然そいつらも魔力の永久機関であるリーゼを欲しがっているはずだ。いつ襲われてもおかしくない彼女を、俺は一人にしてしまったことになる。
　目新しいものに対して興味全開にするリーゼのことだから、寄り道しまくって迷子になっている可能性も充分考えられる。が、なんにしても一度最悪の事態を想像してしまうと一気に不安が込み上げ

くるってもんだ。

「畜生、疲れたなんて言ってられねえ。リーゼを捜さねえと！」

リーゼの強大な魔力はある程度近づけば感知できる。しかし、だからと言って闇雲に街を奔走するわけにもいかない。まずは誘波に連絡をつけるべきだ。そう考えて買い換えたばかりの携帯電話に手を伸ばしたその時――

「レージぃいっ！　レージぃいっ！　た、助けっ！？」

リーゼの悲痛な叫び声が耳に届いた。

一章　二人の影魔導師（3）

補習の疲れなどふっ消えた俺は玄関を飛び出して声のした方角へと駆けた。後ろからはレランジェが心なし焦燥とした面持ちでついてきている。

リーゼに魂を捧げているこのメイド人形は、たぶん俺なんかよりも深く主人の身を案じているに違いない。

夕闇の中、俺たちは住宅街の角を一つ二つ曲がり、今もなお聞こえ続ける悲鳴と魔力の気配を頼りに追っていく。追うってことは、向こうも移動しているってことだ。リーゼの魔力に圧倒されて気づきにくいが、確かに彼女とは違った力を俺は感じていた。

あの？魔帝？リーゼロッテが何者かから逃げている。

それがわかった時、俺は思うべきだったのかもしれない。ありえない、と。

何度目かの角を曲がったところで行き止まりに辿り着いた。そこに、学園の制服を着た小柄な金髪少女が追い詰められていた。

「アレは……？」

リーゼを追い詰めているやつは、彼女よりも小さな女の子だった。左右で結わえている桃色がかったブロンドの髪が、まるで生き物のようにゆらゆらとうねっている。

異獣か？　いや、異世界の生命体には違いないだろうが、そうと決めるのは早すぎる。そもそも異世界から来訪者があったなんて報告は受けていない。もしそうなら一人以上の監査官が動いているはずだ。リーゼも監査官として登録はされているが、見習いは担当する先輩と共に任務にあたることになっている。つまり、俺。

なんにしても、敵がスヴェンの仲間だった場合が最悪の展開だ。

「レージ！　レランジェ！」

こちらに気づいたリーゼが歓喜の声を上げる。彼女は眼尻に薄ら

と涙を浮かべていた。あいつ、泣いてんのか？
「マスターを泣かせるとは、処刑安定ですね」
レランジェの翳した細腕がパカリと四方に開く。バチィ！　と青白いスパークが弾けたかと思うと、光線状のプラズマが大気を引き裂くように射出された。
「――！？」
ピンク髪の女の子が攻撃に気がついた時には既に遅く、レランジェの右腕に内蔵された兵器――魔導電磁放射砲は小さな体に直撃し、大爆発を引き起こす。なんか威力上がってないか？　そういえばレベルアップしたとか言ってたな。
うん、感心している場合じゃないことくらいわかってるさ。
「いくらなんでもやり過ぎだレランジェ！　少しは状況を見極めてから行動しろよ！」
「マスターがピンチでした。判断を下す理由はそれだけで安定です」
「てめえは……」
淡々と答えるレランジェに俺は怒りを覚えずにはいられなかった。相手が？人？だろうが異獣だろうが、滅多矢鱈に殺していいわけがない。まったく、このポンコツ人形はマスターのことになると容赦の欠片もないから始末に負えない。
「レージ！」
爆煙を駆け抜けてきたリーゼがボディチャージで俺に抱き着いてきた。鳩尾に頭がクリティカルヒットして「ぐふぅ」と大ダメージを受ける俺だったが、か弱い少女のように顔を埋めてくるリーゼを見ると、そんな痛みなど忘れて思わず頭を撫でてやりたくなるな。
「マスター、そんなゴミ虫様と密着されては黴菌が移ってしまいます。不安定です」
「お前いい加減に壊すぞ！」
とか突っ込みながらも、俺は衝動に負けてリーゼの金細工のように細い金髪をしっかりと撫で下ろしていた。にしてもなんて手触りの素晴らしい髪だ。俺と同じシャンプーを使っているはずなのに匂

いもいい意味で全然違う。セレスもこんな感じなのだろうか？
髪を撫で続けていると、リーゼは落ち着いたのか自ら身を引いた。
なんか隣で「チッ！　やはりゴミ虫様はこの場で処理安定でしょうか」とかいう恐ろしい囁きが聞こえた気がする。
「マスター、レランジェは一つお聞きしたいことがあります。マスターはどうしてあの者から逃げていたのですか？　それほど驚異的な存在とは思えませんでしたが」
そうだ。レランジェの質問で頭の片隅で感じていた疑問が鮮明になった。暴虐的な強さを持った？魔帝？が、あんなひ弱そうな少女に一方的に追いやられるなんて俺にも考えられない。
リーゼは僅かに滲んでいた涙を制服の袖で拭き、いつもの絶対的な自信をルビーレッドの瞳に取り戻さないまま口を開く。
「わかんないわよ。あいつを見たら体が急に寒くなって、逃げなきゃいけないって思って」
抵抗する気力を奪われるほどの恐怖を、あの女の子に感じたってことか？　戦闘民族のように好戦的なこのリーゼが？
いや、思い当たる節はある。

「おねえさま、おねえさま、別にマルファから逃げる必要なんてないんだユゥ」

甘えた子供っぽい高めの声に俺たちは振り返った。
煙が尾を引きながら風に流されていく。
すると、ピンク色をしたゼリー状のドームがそこに出現した。半透明のそれの中に、例の少女が立っているのが見える。さらに注意して観察すると、ドームと化しているゼリー状の物体は、少女の髪の毛が変形して形成されているものだとわかった。
「わたしは、マルファは、ただおねえさまのことが大好きなだけユゥ。酷いことなんてしないユゥ」
ドームが質量を縮めて掃除機のコードを収納するように元のツイ

ンテールへと戻る。マルファと名乗った女の子は、満面の笑みを浮かべてリーゼに熱っぽい視線を向けた。リーゼはビクンと肩を震わせて小動物が怯えるように俺の背中に隠れる。

「まだ生きているようですね。今度こそ息の根を止める安定です」

「待て、レランジェ」

魔導電磁放射砲の第二撃を構えようとするレランジェを俺は手で制した。

あの女の子が首から提げているネックレスには見覚えがある。俺やリーゼ、レランジェも所持している異界監査局から支給された意思疎通アイテム――〈言意の調べ〉だ。となると、彼女の正体も自ずと知れるな。

「お前、あのスライムか？」

「そうだユゥ」

コクリとマルファは頷いた。やっぱりか。こいつは先日、異世界から迷い込んできた？人？だ。正体はスライムだけど、俺らの定義では一定以上の意思を持っていれば？人？になる。喋れないし、いきなり襲ってきたので初めは異獣かと思って一悶着あったりもした。

リーゼが逃げ出したくなるのも無理はない。この魔帝様はぬるネバしたものが大嫌いでいらっしゃる。人の形をしていても、刻まれたトラウマが拒否反応を示したんだ。

「お前たちのことも聞いてるユゥ。レイジに、レランジェだユゥ」

一人ずつ指を差しながらマルファは名前を言ってみせた。それにしても妙な語尾だな。

「なるほど、マスターを散々苦しめた例の不定形魔獣ですか。やはり排除安定ですね」

「お前はもう黙ってろよ！　どうせ戦ってもあいつにダメージなんて与えられねえんだから」

言うと、レランジェは理解してくれたらしく大きな舌打ちを残して一歩下がった。

俺は改めてスライム――マルファと向き合う。

「人型になってるってことは、人化の魔導具でも使ってんのか？」
「そんなもの必要ないユゥ。マルファは自由自在に姿を変えることができるユゥ。ようやくこの姿で言葉をうまく発せられるようになったから、まずはおねえさまに挨拶に来たユゥ」
「来なくていいわよ、お前なんか！」リーゼがひょこっと俺の背中から顔を出し、「そ、それに、わたしにお前みたいな妹なんていないわよっ！」
「まあ、リーゼが『お姉様』ってのもなんか変な響きだしな。もっと普通に呼んでやれよ」
俺が率直な意見を述べると、マルファはキョトンと首を傾げる。
「愛する同性はそう呼ぶものだと聞いたユゥ」
「いや間違ってるからそれ。ていうかなんでリーゼを慕ってんだ？」
「おねえさまに初めて会った時、全身が燃え上がるような感覚に襲われたユゥ。あんな感覚は初めてだったユゥ。そしてそれが『恋』というものだと――」
「実際に燃やされていたからな！　間違っても『恋』じゃない！」
「――イザナミが言っていたユゥ」
「あいつはもう絞め殺してもいいからなっ！？」
他人で遊ぶことが趣味の着物怪人とは今度腰を据えて話し合う必要がありそうだな。否、話し合いだけじゃやつは反省しない。いっそ監査局の総括に話を通して、トイレの清掃員くらいの地位まで降格させるしか……。

Ｐｒｒｒｒ！　Ｐｒｒｒｒ！　Ｐｒｒｒｒ！

その時、ポケットの中で微振動する携帯電話が着信を報せた。
『どもども～、巷で噂の誘波ちゃんですよぅ♪　絞殺なんて返り討ちです』
「てめえどこで聞き耳立ててやがった！？」
『なにを言っているんですか、レイちゃん。そんなことしてません

よぅ。私は今日一日中監査局にいたというアリバイがあります』
いきなり電話してきたおっとり口調の女は、法界院誘波。いつも天女みたいな十二単を纏っている変態で、日本異界監査局の局長でもある。つまり、悲しいことに俺の上司ってことだ。呼ばれる度に背中が痒くなるあだ名は何度抗議しても直してくれやしない。
『マルファちゃんの自己紹介も終わったようですし、要件を言いますね』
「おいコラ、やっぱり聞いてたんじゃねえか！」
『レイちゃんたちの近くに「次元の門」が開きました。場所は――言わなくてもわかりますね。その位置からだったら感知できるはずです』
見事にスルーされた。マルファのこともあって気づくのが遅れたが、確かに門の気配を感じる。それほど遠くないが、これ以上誘波のアホに付き合っている暇はなさそうだな。
「一般人の避難は？」
『それなら問題ありません。歪みを事前に観測していたので、既に人払いは完了しています』
納得。だからレランジェが魔導電磁放射砲をぶっ放しても騒ぎになっていないわけだ。
『どうやら今回は少々厄介そうです。なので念のために援軍を送りますね』
そう言うと誘波は通話を切った。なんか気になることを口にしていたが……俺は周囲を見回す。
俺、リーゼ、レランジェ、あと一応マルファもカウントしとくか。この面子なら大抵のことなら乗り切れるだろう。ただ、やり過ぎてしまうことだけが不安ではあるがな。

一章　二人の影魔導師（3）（後書き）

お知らせがあります。

明日から三日ほど更新できないと思います。

卒業旅行で九州行ってくるから！！ ε＝＝＝＝┓（　≧∇≦）┗

イエーイ　　―地獄巡り→―

一章　二人の影魔導師（4）

『次元の門（プレナーゲート）』ってのは、数多ある異世界の一つとランダムで繋がってしまう歪みのことだ。俺たち異界監査官の仕事の一つに、その『次元の門』の出現から消滅までを監視することがある。

というのも、こんな街中だと滅多にないことだが、監査局の対応が遅れる過疎地なんかでは人間や動物が知らずに門をくぐって異世界へ飛ばされることがあるからだ。一般には神隠しって呼ばれているやつだな。

そしてもう一つ。つまりはその逆だ。異世界からこちらの世界になにかが迷い込んでくることだってある。その辺の対応を現地で行うのが、戦闘能力の高い俺ら異界監査官ってわけだ。

今回の『次元の門』が開いた場所は、閑静な住宅街にぽっかり穿たれている空き地だった。広々としたその空間は整備が丁寧に行き届いており、無駄な雑草などはほとんどない。なんでも近々公園になるとか。

「あっ」

俺たちが現場に到着した時には、既に先客がいた。

リーゼが嫌そうな顔をする。先客は、学園の制服の上から肩当て・胸当て・ガントレット・白マントを装備している騎士然とした少女だった。武装していてもわかるグラビアアイドル顔負けのプロポーション。輝かんばかりの銀色のポニーテールをふさっと揺らし、彼女はこちらに振り返る。

「ようやく来たか。遅いぞ、零児」

腕を組み、女騎士――セレスは透き通るような声音で凛と言い放った。

「援軍ってのはやっぱりお前だったのか、セレス」

「なんだ、零児？　私だと不服なのか？」

「いや、そんなことはないさ。寧ろお前で安心したところだ。頼りにしてるぜ」

微笑んだ俺が本心からそう言うと、セレスはなぜか頬を紅潮させて視線を外した。「そうか、頼りにしてくれているのか」と小声で呟いている。きっと騎士として誰かに頼られるのは悪い気がしないのだろう。

「ところで」

とセレスが再び視線を合わせてくる。彼女の翠眼には呆れの色が混じっていた。

「？魔帝？たちは一体なにをやっているんだ？」

言われて俺は体ごと後ろを向いた。

「おねえさま、仕事なんてあの人たちに任せてマルファと楽しいことをするユゥ」

「ぬ、ぬるぬる……いやぁ……」

「マスターから離れなさい下等魔獣！　それ以上マスターに無礼を働くと焼殺安定です！」

「マルファの愛は何者にも妨げられないユゥ。こうしておねえさまにくっつくと力が漲ってくるように気持ちがいいユゥ。おねえさまもきっと同じ気持ちユゥ」

「……あうぅ……や……ぅ」

「！？　マスターの魔力が奪われています。魔導電磁放射砲は不安定ですし、こうなればこのレランジェが力づくにでも――」

髪の毛や手足を粘体化させてリーゼに絡みつくマルファを、レランジェが必死に引き剥がそうとしている光景が繰り広げられていた。ピンク色のスライムに絡みつかれ、涙目の顔を赤くして脱力しているリーゼはなんともエロい。このまま見ていたい――じゃなくて、放っておけば視聴年齢制限が跳ね上がりそうな行為を先輩監査官として見過ごすわけにはいかない。

「マルファ、そろそろやめてやれ。あんまりしつこいと嫌われるぞ？」

てかリーゼの理性が飛んだらまたこの辺り一帯が焼原と化してしまう。それだけは勘弁してもらいたい。

だがマルファは俺の言葉なんてガン無視。この脳味噌ドロドロのスライム女め。

そのままマルファは現状を維持し続けていたが、

「もう……やめて……」

リーゼが弱々しく、しかしはっきりと拒絶の意思を示したためにショックを受けた表情になる。

「……むう、わかったユゥ。マルファもおねえさまに嫌われたくはないユゥ」

渋々とマルファはリーゼから離れた。とっくに嫌われてるけどね。

完全に弛緩して息を切らしているリーゼをレランジェが優しく抱き留める。ホント、スライムに負ける魔王ってどうなんだろ？

と、一連の様子を窺っていたセレスが思案顔でぶつぶつとなにかを言っていた。

「なるほど。あの者が？魔帝？の弱点なのだな……これは使える」

「待てセレス！　お前なんか物騒なこと考えてないか？」

「いや、気にするな。それよりも気持ちを切り替えろ。来るぞ」

セレスが向きを変え、腰に提げた槍のように長い剣――聖剣ラハイアンの柄を握る。いろいろと言及したいこともあるが、後回しだ。俺もいつ戦闘になってもいいように身構える。

眼前の空間がはっきりと視認できるほどに歪んだ。その奥から生命の気配を感じる。

一つじゃない。多数の気配がこちら側へ迷いなく突き進んできている。

緊張が走る。こんなこと、今までになかった。

「おいおい」

冷や汗が滴る。誘波は少々厄介とか言っていたけど、これは少々

なんてものじゃないぜ。

武者のような鎧を纏った魑魅魍魎が、大群を成して現れたのだ。

さながら百鬼夜行を彷彿とさせる怪物たちで空き地が埋まる。

その中の、大群の将と思われる頭部に三本の角を生やした巨人が俺たちを見下して口を開く。

「我は魔王ダンタリアン。今よりこの世界を我が支配下とする」

はぁ？　と俺はついつい素っ頓狂な声を上げてしまった。

一章　二人の影魔導師（5）

俺たちの目の前に現れたのは魑魅魍魎の群れ。
そいつらが？人？であることはわかったけど、どうも不慮の事故で『次元の門』を越えてきた迷子さんじゃないらしい。
いやなんというか、こちらが言葉を紡ぐ前に勇ましく侵略宣言されたんですよ。ダンタリアンって名乗った厳つい魔王様に。
そりゃあ最初は聞き間違えかと思ったさ。〈言意の調べ〉が不調なんじゃねえかとも疑った。
だから俺はできうるかぎりの営業スマイルで応対したんだ。セレスなんかは魔王と聞くや問答無用で飛びかかりそうだったが、俺がコミュニケーションを図ろうとしたので踏み止まってくれた。
でも魔王ダンタリアンは聞く耳を持たなかった。やつは鈍く光る赤い三つ眼を不敵な笑みで歪めると、俺たちを指差してこう言ったんだ。
「我に逆らえばどうなるか、この世界の下等生物に教えてやろう。その『見せしめ』として貴様らを使ってやる。光栄に思え」
その後の展開はご想像通り。魔王の指示に従い、俺たちの何十倍はあろうかという数のモンスターが殺到してきたわけだ。

「あの、えっと、ホント、マジでごめん。『見せしめ』とか調子くれてました。……許ちて」
まあ、秒殺したけど。
自分の体を縄状に変形させたマルファに拘束されている魔王ダンタリアン。空き地のあちこちではフルボッコにされたモンスターたちが痛々しげに呻いている。こいつら、見た目だけは強そうなんだけど、感じる魔力はたいしたことなかったんだよな。
多数を相手取ることが苦手な俺一人だったら流石に無理だろうが、

こっちにだって魔王はいる。ダンタリアンなど比べ物にならんくらい強大な魔力を持つ？魔帝？が。

「レージ、こいつら消し炭にしてもいいのよね？」

掌に黒い炎を宿して凶悪な笑みを浮かべるリーゼ。いつの間にか？魔帝？のコスチュームである魔女っぽい黒衣にシフトチェンジしてやがる。彼女はマルファに纏わりつかれていたストレスをここぞとばかりに発散していた。その暴れ様と言ったらまさに鬼人のごとし。

「この者たちはここで処分しておいた方が世のためだと思うぞ、零児」

聖剣ラハイアンの長い刀身に白い光を纏わせてセレスが言う。光属性は魔族に効果抜群なのか、セレスの近くに転がっているモンスターたちが苦しそうに身を捩った。

魔王群は大方この二人によって制圧されたと言っても過言ではない。

「いや、できるかぎり殺生はさけるべき――リーゼ！？」

倒れたフリをしてたっぽいカエル似の怪物が、リーゼに向かってぴょーんと跳ねた。俺はすかさず前に出て、練り上げた魔力を右手に収束させる。

〈魔武具生成〉――戦棍。

俺が持っている能力のうちの一つ、己の魔力を近接武具として具現させる力により、先端に打撃部のついた棍棒を生成する。

それを両手で握り直し、全身の捻転力を武器に込め、一気にスイング。化けガエルへと叩きつける。装備していた武者鎧が砕け、吹っ飛んだ化けガエルは勢い余って隣家のブロック塀を崩壊させた。

……ある程度の破壊は想定の内。放っといても監査局が勝手に修繕してくれる。

「別に助けてくれなくても、わたしなら一瞬で焼き殺せたのに」

リーゼはぷくっとリスみたいに頬を膨らませた。その？魔帝？らしからぬ拗ねた顔がなんとも可愛らしいな。

「てか、だからですよお嬢様。俺は寧ろカエルの方を守ったんだ」
俺がフォローしてなかったらどんだけ尊い命が散ったと思ってるんだ。
「く、くそ、なんなんだ貴様らは！？」ダンタリアンが喚く。「これまで征服してきた異世界はこれほど強いやつらなどいなかったのに……」
「あ？」
ダンタリアンがなんか今ふざけたことをぬかした。どうやらこいつらは『次元の門』を通ってはその先の世界を侵略していたようだ。恐らく征服した世界の粗方を搾取したら次の世界へ移る、そんな風に旅をしていたに違いない。広い次元にはそういう屑もいるんだな。勉強になった。
「あー、てめえらのことはよーくわかった。わかったところで選択肢をやる。大人しく元いた世界に戻って二度と他世界に侵攻しないと誓うか、この場で命を落とすか、どっちか選べ」
俺としては前者をオススメしたい。こんな屑だろうと？人？を殺すことはしたくない。
「ゴミ虫様は偽善者安定ですね。反吐が出そうです」
レランジェが嘆息する。いやお前反吐なんて出ないだろ。機械だから。
「しかし零児、この者たちを門へ追い返しても誓いを守るとは限らないぞ。やはり、今ここで始末しておいた方がいい」
セレスの言うこともわかる。俺も馬鹿正直の善人ってわけじゃないからな。本音を言わせてもらうと、他の世界がどうなろうと知ったことじゃない。
リーゼが鼻息を鳴らす。
「フン。珍しくお前と意見が合ったわね。こいつら、なんかあいつに似ててムカつくもん」
「あいつって？」
「アルゴス・ヴァレファール様のことで安定です」

俺の疑問にはレランジェが答えてくれた。ああ、と俺は納得した。リーゼはただ暴れたいだけかと思っていたけど、ダンタリアンたちを自分の親父と重ねていたんだ。故郷イヴリアを滅亡させ、なんの発展も進歩もないただ荒廃していく退屈な世界にリーゼを残した親父と。だから同じような行為をしているダンタリアンたちに苛立ちを覚えているんだろう。

「ああもう、イライラする。ねえレージ、こいつらあのぬるぬると一緒に焼き殺してもいい？」

やっぱりただ暴れたいだけかもしれない。

「ああ、おねえさま！　おねえさまの愛の炎ならマルファはいつでも喜んで受け取るユゥ！」

それとあの変態スライムは早くなんとかした方がいいな。

俺は冷え切った目でダンタリアンを見やる。

「門が開いてるうちに帰った方がいいぞ？　聞いてて理解したと思うが、さっさとしないとあいつらが痺れを切らしちまう」

ぐぬぅ、と苦渋の表情でダンタリアンは唸る。スライムに雁字搦めにされた魔王、どっかで見たシチュエーションだな。

「んで、どうなんだ？」

「ぐ……わ、わかった――――と言うと思ったか？」

不意にダンタリアンがニヤリと笑った。三つの赤眼が不気味に煌めく。

「あ？　――ッ！？」

俺は驚愕した。というのも、周囲に転がっていたモンスターたちに異変が起こったからだ。夢か幻のように赤黒い霧へと変化したモンスターたちが、魔王ダンタリアンの体内へと吸い込まれていく。

「なっ、これは一体……」

呆気に取られた声がセレスから漏れる。正反対にリーゼは、ふぅん、と楽しくなってきたと言わんばかりにその光景を眺めている。

「フハハハハッ！　愚かな異世界人め。我を本気にさせたこと、後悔させてくれるわ！」

倍々に膨れ上がっていく魔王の魔力、それに伴い悪趣味に変形していく身体。かなりラスボス然としてきたが、どうしてそんなザコ臭しかしない台詞を堂々と吐けるのか謎だ。

「うぅ……もう、限界ユゥ……」

魔王ダンタリアンを拘束していたマルファが弾かれてしまった。飛び散ったスライムの破片が気持ち悪く蠢いて本体へ戻っているが、そっちに感想を抱いている場合じゃない。

「部下共は言わば我の分身。この本来の姿に戻ったのは久しいぞ」

元の三倍ほどに巨大化し、全体的に刺々しいフォルムへと変身したダンタリアン。なんというか、もうこいつ面倒臭いんですけど。

「リーゼ、セレス、好きなようにしてくれ。俺はもう知らん」

俺が全てを投げやりに言った直後――ダンタリアンがその巨大な拳を振るってきた。俺たちは咄嗟に適当な方向に散らばってかわす。

ドゴン！！　という轟音が炸裂し、空き地に隕石でも落ちたようなクレーターが形成される。なんという威力。あんなの喰らったら人間として原型も残らないぞ。

「みんな気をつけろ！　いろいろと冗談みたいなやつだがパワーは本物だ！」

あの魔王はどうあってもこの世界を征服したいらしい。考えてみればやつに元の世界に戻るって選択肢はないんだ。戻ったところでそこは既に搾取し尽した世界なのだから。

「あはは♪　いいわ！　すっごく面白くなってきた！」

黒衣をはためかせるリーゼが嬉々として魔王の腕を駆け昇った。掌を魔王の顔面に突き出し、そこに展開させた魔法陣からいくつもの黒炎弾を射出。的がでかいだけあって全弾命中し、爆発の衝撃に乗ってリーゼはその場を離脱する。

入れ替わるように、セレスの聖剣が強く輝く。

「なにを遊んでいる、？魔帝？リーゼロッテ！」

爆煙が晴れるのも待たずにセレスは大地を蹴った。そして風のように駆け抜ける瞬間に、仁王立ちするダンタリアンの胴体を光纏う

超長剣で斬りつける。ブシュアアッッッ！　と鮮血が噴き出したが、ダンタリアンは倒れない。

全く鈍らない動きで足払いをし、足下にいるセレスを遠ざけると、次は腕を振りかぶって二撃目のギガトンパンチを俺に向けて放ってくる。まさか俺が一番弱いと思われてんのか？　馬鹿にしやがって。俺は戦棍を手放す。

〈魔武具せ――

「邪魔安定です、ゴミ虫様」

反撃しようとしたところで、俺のケツをレランジェが感情のない表情のまま蹴り飛ばしやがった。盛大に前転しながら俺は誓う。アイツ後デ絶対ニ壊ス！

「ここはレランジェの新兵器をお見せする安定です」

そう言ってメイド人形は迫りくる巨拳にグーに握った左手を伸ばす。次の瞬間、俺は目を疑ったね。ガチャ、と変な音がしたと思ったら、レランジェの肘から先が推進エンジンでも積んでいるかのように勢いよく発射したからだ。

ロケットパンチ！？　なんて無駄な新機能！？

拳と拳（？）が衝突する。いくらなんでもあんな巨腕をレランジェの細腕でどうにかできるわけが――――はい、見事に弾きました。

「なにぃ！？」

魔王様もビックリだ。だから俺はその隙を突くことにした。どういう仕組みなのか自動的に戻っていくロケットパンチを横目に、魔力を右腕に練り上げる。

〈魔武具生成〉――ロンパイア。

長い片刃の刀身に同じくらい長い柄をした大剣だ。本来の用途は馬の脚を切断したり首を刺して掲げたりする武器だが、俺は巨人の腕を斬り落とすことに使った。普通のロンパイアではとてもできない所業だが、〈魔武具生成〉で作った武器なら可能だ。

「ぐぁあああああああああああああああああああああああああああああああッ！？」

絶叫。魔王の斬り離された片腕は赤黒い薄霧となって消滅する。

「よし！」

格好よく決まったと思ったのに、誰も俺のことなんて見ていなかった。リーゼに至っては瞳をキラッキラさせて従者の腕を見詰めている。

「レランジェすごい！　なにそれ！？　今のなに！？」

「はい、異界技術研究開発部の方に腕を修復する際に加えて頂いた新機能安定です。名前は確か、『オトコノロマン』と仰っていました」

遊び過ぎだろ異界技術研究開発部！　なにが『男のロマン』だ。男のロマン……くっそなぜ共感できる俺がいるんだ！

「貴様らぁあッ！　もう許さん！　許さんぞ！」

失った片腕の切断面を押さえ、魔王ダンタリアンが激昂した。その太く鋭い牙の並ぶ口に、なんかのエネルギーみたいなものが収斂し始めた。

「うわっ……」

直感で知る。あれはやばい！

やばいと感じたならさっさと対処すればいいじゃないか、と普通なら思うかもしれん。だがな、やつの『溜め』は想像以上に早く完了したんだ。

壮絶なまでに魔力の凝縮した波動が、俺たちごと周囲一帯を吹き飛ばさんと迫る。

一章　二人の影魔導師（6）

死んだと思った。
でも俺の意識ははっきりとしていた。
痛みもなにも感じなかった。一瞬で死んだ……にしては五感全てが現実的過ぎる刺激を神経に走らせている。
目を開けると、ピンク色のプヨプヨした壁が眼前を覆っていた。
「フン、いつまで呆けてるユゥ？」
俺たちを波動から救ってくれたのは言うまでもなくマルファだ。
ピンクのツインテールが元のスライムへと変わって巨大なシールドを成している。質量保存の法則を鼻で笑うかのごとく無視した変形だった。ていうか、なんであれほどの波動を受けてケロッとしてるんだ？　実はこいつ、弱点突かなけりゃ最強なんじゃないか？
「おねえさまの下僕だから仕方なくマルファが助けてやったユゥ。感謝するユゥ」
「ああ、サンキュ、マルファ」
髪を元に戻し、やたら偉そうに胸を張るマルファ。そういや、俺がスヴェンとの戦いで落下の衝撃を緩和するために利用した時は盛大に飛び散ってなかったか？　不意を突かれた場合はダメなのだろうか？
「マルファ殿、だったか？　助かった。感謝する」
「マスターの敵にレランジェはお礼を述べない安定です。無言で頭を僅かに下げておきます」
「……きゅぅ」
なんか一人戦闘不能になってますけど！　よく見るとマルファの髪の一房がリーゼに伸びて絡まっていた。なるほど、リーゼの無駄に有り余った魔力を借りたってわけか。マルファも俺と同じで他から魔力を奪うタイプなんだな。
とにかく全員無事のようでなによりだ。

「ぬぅ、我の攻撃に堪えるとは、しぶとい異世界人共だ。次こそは消滅させてくれる」
ダンタリアンが第二波を放つためにエネルギーの収束を開始する。さっきよりも『溜め』が長い。今度こそはマルファでも防げないかもしれない。
「――チッ！」
俺はロンパイアを構えて走った。間に合うかどうかは絶望的だ。それでもやるしかないだろ。

「滅びろ、異世界人」

間に合わなかった。収束したエネルギーが凄絶な波動となって俺たちを襲う。
その直前――

バサリ、という鳥の羽ばたきのような音を聞いた。

淡黒い空を舞う人間大のなにかが俺の目に映った。そいつは夜空に在ってもはっきりと認識できるほど黒い双翼を羽ばたかせ、高速で魔王に接近すると――
――その頭部を真横から乱暴に蹴りつけた。エネルギー放射の軌道が斜め上へとずれ、ほとんど星の見えない夜空の彼方へと消え去る。
「げふっ！？　な、なんだ？」
さらにそいつは手と思われる部分から影を帯状に物質化したような物体を放ち、困惑するダンタリアンの巨体を瞬く間に束縛する。絡みつく？影？の帯がぎしぎしとその巨体を力強く締め上げる。
「ぬおっ！？　なんだこれは！？　動けん……」
？影？を振り解けず魔王は悶えている。
そこで――

「今よ、漣！」
黒翼の存在が少女の声でそう叫んだ。
刹那、ダンタリアンの足下に闇を纏って黒いロングコートの少年が出現、身の丈ほどある漆黒の大剣で巨大な魔王を一刀両断した。

断末魔の叫びと共に魔王ダンタリアンが霧散消滅していく。しかし俺たちの注目はそんなことには集まっていなかった。

「なんであいつらが……？」

もはや魔王のことなんてどうだっていい。問題にすべきは、その魔王を倒したやつらのことだ。

「あの者たちは、確か」

心当たりがあるようにセレスが呟いた。そりゃそうだろうな。黒き翼で宙を舞う者と、一太刀で魔王を滅ぼした者。両者共、顔合わせくらいは済ませているはずだ。俺はよく知っている。

魔王を斬り捨てた少年が闇を纏い、消える。

「き、消えた！？」

セレスが驚きの声を上げると同時、そいつは同じように闇を纏って俺たちの目の前に現れた。一瞬で離れた空間を移動する――つまりアレも転移術の一つってわけだ。

「あー、なんつーか」

伊海学園の制服の上からマントに近い形状の黒コートを羽織ったそいつが、かったるそうにぼりぼりと頭を掻く。

「白峰、お前さぁ、なんでこんな面倒臭いことになる前に敵を討たないんだよ」

続けて、バサリという羽ばたき音と共に上空からの声。

「いつもいつも詰めが甘いのよ、アンタは」

鴉のような黒翼を背に生やし、天使のように降臨してきたのは、少年と同じ黒コートを着た少女だった。背はリーゼよりも高いが、それでも百五十センチはないだろう。やっぱりコートの下は学園の制服である。靡くスカートの中身が見えそうで見えなかった。

腰まで届く艶やかな黒髪を風に流し、彼女は割れ物に触れる時みたいな柔らかい挙動で地面に足をつける。すると、背中の双翼は夜

闇に溶けるように消えてしまった。
　俺はセレスたちみたいに驚くこともなく、挨拶の代わりに文句を投げかけてきた二人に言い返す。
「うっせーよ。仕方ないだろ？　まさかああなるとは思ってなかったんだ」
「見苦しい言い訳とか並べないでくれるかしら？　相手が悪意ある者だとわかってたんだから、始末するのに容赦なんてする必要なかったのよ」
　ぐ、と俺は押し黙ってしまった。それでも簡単に命は奪えない、なんて反論した日には偽善者呼ばわりされることが目に見えている。誘波とは違うベクトルで腹の立つちんちくりんだな。
「ゴミ虫様、彼らは一体何者安定ですか？」
　未だに目を回しているリーゼを介抱しながらレランジェが問う。すると、男の方がうっかりといった表情をしてまた頭を掻く。
「そういやぁ、きちんと自己紹介してなかったっけか？　あー、面倒だから瑠美奈、後はよろしぐきぃッ！？」
「人に任せないで！　自分の紹介くらい自分でしなさいよ、漣」
「だからって足踏みつけんなよ……」
　はあ、と休み明けに登校する学生みたいな億劫さの滲み出た溜息を吐き、少年は重たそうに口を開く。
「あー、えーと、俺は迫間漣（はくまれん）っつって、あんたらと同じ異界監査官なんだけど……あ、それはもう知ってるよなぁ」
「もっとちゃんと挨拶できないの？　あたしは四条瑠美奈（しじょうるみな）。監査官として漣とペアを組んでいて、今回は誘波に頼まれて仕方なく応援に来てあげたのよ。別に慣れ合う気はないけど、まあよろしくね」
「（お前のそれはちゃんと挨拶できてんのかよ……）」
「漣、なんか言った？」
「いやぁ、なんにも」
　四条瑠美奈に半眼で睨まれ、迫間漣はブンブンと手を振って後じさった。この二人は俺とほとんど同じ時期に監査官になったやつら

で、クラスは違えど学年は同じだ。だから他の監査官よりは接点があると言ってもいい。

「誘波のアホが言ってた援軍はセレスじゃなくて、つまりはお前らだったってことか」

「そうよ、悪い？」

「なんでいちいち突っかかるんだよ、面倒臭い」

黒ずくめの怪しい格好をしているが、基本的にいいやつらではある。喧嘩っ早い四条を迫間が諫める構図はいっそ微笑ましく思えたりもする。

「どうやら、敵ではないことで安定のようですね」

「そのようだな。この二人には？人？の温もりを感じる。スヴェンとは違う」

二人の遣り取りを見て、レランジェとセレスは共に警戒心を解いたようだ。

と、思い出したように四条がポンと手を叩く。

「ああ、そうそう、あたしたちは応援のついでにもう一つ仕事を押しつけられてるんだった」

「仕事？」

俺が怪訝に思って訊き返すと、四条は小さく頷いて肯定する。

「そう。この辺りをいつまでも人払いしてるわけにもいかないから、さっさと済ませるわよ、漣」

「へいへい」

迫間と四条の視線が一点に集中する。俺たちも釣られてそちらを見やる。

「ふぇ？　ま、マルファになんか用かユゥ？」

冷や汗を滝のごとく流して後方に下がっていくマルファがいた。引き攣った笑みを浮かべ、ツインテールが危険を感知したようにうねうねしている。あからさまに様子がおかしい。

「マルファ、お前、なんかしたのか？」
「な、なにもしてないユゥ」
マルファの両目は焦点が定まっていなかった。
「その子、勝手に監査局を抜け出したのよ。まだ人化とかいろんなことが不完全だから、誘波があたしたちに回収命令を出したの」
四条はやれやれと肩を竦める。すると――
「は、早くそのぬるぬるを連れて行って！　ていうか殺して！」
話を聞いていたらしいリーゼがそれはもう必死な形相で叫び訴えた。もう余程にぬるネバがトラウマになってるんだな。となれば冷蔵庫にあるナメコは俺が一人で食しておこう。
「マルファはこんなところで捕まるわけにはいかないユゥ！」
あ、逃げた。
「漣、逃がさないで！」
回れ右をしてダッシュするマルファを四条が追走しながら叫ぶ。
「あーあ、ホントに面倒だよなぁ」
と言いつつも噴き上がった闇に包まれた迫間漣は、一瞬でマルファの正面に出現する。転移って便利だよな。
「邪魔をするなユゥ！　マルファはもっとおねえさまと一緒にいたいんだユゥ！」
マルファはツインテールをスライムに戻し、さらに硬化させて二本の槍を作ると、それらを連続突きで迫間へと殺到させる。だが、そのことごとくを迫間は漆黒の大剣で捌いた。
「？夜？のあたしたちに勝てると思わないことね」
口元をニヤリと歪めた四条が手を仰ぐと、なにもない空間からドロリとした黒いなにかが掬い上げられた。それは彼女の手中でダンタリアンを絞めつけたのと同じ？影？の帯に変わる。
四条は最小限の動作で帯を投擲し、迫間と交戦中のマルファをいとも簡単に拘束してしまった。

「ふぎゃッ！？」
光すら吸い込むような？影？の帯がマルファを雁字搦めにする。
スライムの零れる隙間もない。
「出すユゥ！　ここから出すユゥ！」
黒いサナギっぽいものと化したマルファがぐぐもった悲鳴を上げた。やり方は少し可哀想な気がしないでもないが、こうでもしなければあの変態スライムは捕まらないだろうね。
「思い出した。私も今の技で捕らわれたんだ」
「そうか。セレスも逃走経験があるんだったな」
あれはセレスがこちらの世界に来て間もなく、勘違いでリーゼに決闘を挑んだ後の話だ。あの時もこの二人は文句言いながらも応援に来てくれていたな。
「ふぅん、なかなか面白いことするじゃない。あのぬるぬるを一瞬でやっちゃうなんて」
マルファの姿が見えなくなったからか、リーゼが普段の好戦的な笑みを取り戻していた。
「零児、やはり彼らも異世界人なのか？」
「ん？　ああ、あいつらは――」
「あたしたちは異世界人じゃないわよ」
俺の言葉を遮って四条が不愉快そうに言う。
「もちろん、そこの馬鹿みたいなハーフでもないわ。あたしたちは地球人だけど、ある異世界と関わったことで？影？を操る力を得た『影魔導師』っていう存在なのよ」
俺も詳しく知ってるわけじゃないが、影魔導師は周囲にある？影？を繰り、様々な力として利用する異能力者のことだ。その全てが地球人らしいのだが、俺はこの二人にしか会ったことがない。ところで馬鹿って俺のことか？
「別に差別するわけじゃないけど、異世界人と同じに考えないでもらいたいわね」
「す、すまない」

「いやセレス、別に謝らなくていいからな」
「ねえねえ、わたしの炎とどっちが凄いか勝負しない？」
「そしてリーゼは好戦的にならない！　その炎は仕舞いなさい！」
むぅ、と不満そうに唇を尖らせながらも、『この世界では俺の言うことを聞く』というルールを律儀に守ってリーゼは大人しくなった。
「あー、こいつうるせぇ。なあ瑠美奈、さっさと終わらせようぜ？」
ギャーギャーと喚き立てるマルファを迫間が面倒臭そうに肩に担ぐ。
「そうね。じゃあ、あたしたちはこの子を監査局まで連行するから」
「ああ、また学校でな」
「会うかどうかは、わかんねえけどな」
迫間の操る？影？が四条とマルファを包む。
それが夜闇へと消えた後、三人の姿は文字通り影も形もなかった。

一章　二人の影魔導師（8）

「フロ！　フロに入る！」
自宅に帰ると、いきなりリーゼが仕事疲れのサラリーマンみたいなことを言い出した。
「レージ、お湯溜めて。あのぬるぬるのせいで体中ベタベタ。気持ち悪くて死にそう」
げんなりとするリーゼを見て俺も同意する。そんなスライムの粘液まみれな体でいつまでも家を歩き回られては困るからな。風邪でも引かれたらもっと困る。
「はいはい、ちょっと待っててくださいね、お嬢様」
俺は浴室の方へ向かう。ついでにタオルも拾って少しでも体を拭いといてもらおう。
「マスター、浴槽の湯張りは既に完了安定です。すぐに入浴できます」
「は？　いつの間に溜めてたんだよ」
俺は足を止めてレランジェに振り返った。浴槽に湯を満たすには十五分ほどかかる。それが既に溜まっているということは、主人の帰宅時間に合わせて用意していたのか？　そういえばメシも作ってあったな。このメイドはどんだけ優秀なんだ？
「浴室はマスターがいつでもお好きな時間に使用できるように常時湯張り安定です」
「……水道代と光熱費はお前のバイト代で払うんだよな？」
「いえ、そこはゴミ虫様のお財布から」
「なんでだよ！？　自分たちの生活費は自分で稼ぐみたいなこと言ってたよな！？」
俺に生活費を工面してもらうのが嫌とかなんとか言ってバイトしてたんじゃないのかこの木偶人形は！
「あとでゴミ虫様から搾取できるだけ搾取した方が安定だと判断し

ました」
「なんて悪女!?　いや悪人形!?」
ダメだこいつ、早くスクラップにしないと……。
「わかりました。そう仰るのならそれぞれが使った分だけそれぞれで払うことで妥協安定です」
「当たり前だ。元はお前が言い出したんだからな」
「ではゴミ虫様が九割」
「九割使ってんのはお前らだっ!?」
言い争いの結果、支払いは半々という納得できない割合で納得しなければならなくなった。

いつの間にやらリーゼは風呂場の中へと消えており、時折ご機嫌な調子で下手糞な鼻歌がリビングまで届いてくる。なんの曲かはさっぱりわからない。たぶん故郷イヴリアの唄かなんかだと思う。
「それにしても」
ベッドと兼用しているソファーに寝っ転がってリーゼの鼻歌に耳を傾けつつ、俺は独りごちる。
「リーゼのやつ、相当に風呂が気に入ったみたいだな」
スライムに絡まれたからってだけじゃない。風呂の存在を教えてからというもの、彼女はいつも夕飯よりもそちらを優先する。朝風呂も欠かさない。イヴリアにいた頃はレランジェに体を拭いてもらうだけだったらしいから、湯船に浸かるという心地よさを知らなかったのだ。ちなみに体を洗う時はまだレランジェに手伝ってもらっているらしい。
一緒に暮らしてみて実感する。戦闘時以外の彼女は、？魔帝？なんて恐ろしい異名が嘘みたいに普通の女の子になるんだ。
「温泉にでも連れて行ったら驚くだろうなぁ」
「それは楽しそうですねぇ。レイちゃんにしてはいい提案です。早速手配しましょう」
リーゼの驚きはしゃぐ顔を見てみたい気もするけど、そんな理由

で女湯に突貫して処刑されたくはない。それに俺は紳士だしな。
「あらあら、レイちゃんがえっちぃことを考えてる顔しています」
「一つシンプルな質問をしたいんだが」
「なんでしょうか？」
「なぜいる？」
俺は向かいのソファーに腰掛けてのんびり茶を啜っている不法侵入者に真っ白い視線を投げた。なんかの行事でもないのに十二単を羽織り、おっとりとしたオーラを全身から放出している少女にだ。
法界院誘波。
日本異界監査局局長。
そして俺が知る中で最強の異界監査官。
こんなところでのほほんとしているはずのない人物は、ニコニコの笑顔を浮かべ、
「暇だったので、遊びに来ちゃいました♪」
「暇なわけないだろうが！　さっきだって迫間と四条がマルファを連れてったばかりなんだぞ！」
今ごろ命令を下した局長がいなくて右往左往してんじゃねえかあいつら？
「彼らに命令したのは私ですけど、連れて行くのは異世界人の教育機関ですから問題ありません。それよりも私はレイちゃんポイントが不足すると仕事に支障をきたすのですよ」
なんだその不愉快なポイントは。貯めたら商品と交換でもできるのか？
「要は仕事が面倒になって抜け出してきたんだろ。マルファに戻れって言う資格、お前にはねえな」
「相変わらず上司に向かって口が悪いですね、レイちゃんは」
ぷん、と唇を尖らせて端整な顔を怒らせる着物少女。このアマはいつどこで淹れたのか不明なお茶をずずずと啜る。湯呑は俺ん家に

はない柄のものだ。持参してきたのだろうか。
「そうだ、お前に訊きたいことがあったんだ」
「『誘波ちゃん』とフレンドリーに呼んでください」
「……イザナミチャンに訊きたいことがある」
「レイちゃん、ツッコミが面倒臭いからって諦めないでください。
それとその一言を口にするために物凄い心の葛藤があったように見えましたよ？」
実際、激しく葛藤した。それでも今日は普段より疲れているんだ。プライドなんて疲労の前には簡単に折れてしまう。
「今回あの魔王が攻めてくるって前もってわかってたみたいだけど、なんでだ？」
これまでは『次元の門』の出現は観測できても、そこから発生する事象については全て受け身だった。だからこそなにが起きても対処できるように異界監査官が派遣されていたんだ。
「ああ、そのことですか」
誘波は『なんだそんなことか』とでも言いたげにお茶で喉を潤し、
「『次元の門』から繋がる異世界へ無人探査機を飛ばしたのです。それから転送されてきた映像データに、こちらへ攻め込まんと意気込む彼の魔王軍が映っていたというわけです。想像を裏切るように貧弱だったみたいですが」
「無人探査機って、いつからそんなことしてたんだよ」
「つい最近ですよ？　言ってませんでしたか？　門の周辺であれば、極微量な電波が届くことをレイちゃんが確認してくれたじゃないですか」
俺がリーゼの世界に飛ばされた時のことだ。あの時は門の近くで携帯が繋がった。となれば確かに探査機を送ることも可能かもしれない。いや、可能だと判明した。
「異世界探索の実験は過去に何度も行っていましたが、当時は技術が追いついていなく失敗ばかりで半ば諦めていました。宇宙に機械を送れても、次元だと様々な法則が異なってきますからね」

〈言意の調べ〉や〈現の幻想〉などを開発できる現代の魔科学技術ならば実現できたってわけか。

「でもこれからは今まで以上に異世界のデータが取れます。セレスちゃんたちが元の世界に戻る日もそう遠くないかもしれませんね」

監査官の戦力が減ることは残念ですけど、と誘波はどこか寂しそうにつけ足した。まあ、帰ることを目的として異界監査局に所属している異世界人は全体の四割くらいいるからな。彼らが全員いなくなったとすれば、確かに物寂しい感がある。

と、誘波はなにやら辺りをキョロキョロと見回し始めた。

「どうしたんだ？」

怪訝に思った俺はつい訊ねてしまった。そしてすぐに訊くんじゃなかったと後悔することとなる。

「レイちゃん、テレビのリモコンはどこです？　そろそろ『魔法少女☆殲滅撲滅リリスちゃん‐人類は全て敵‐』が始まる時間なのですけど……」

「居座る気満々だなおい！　あとどうしてそんな物騒なタイトルのアニメがゴールデンタイムに放送されてるんだよ！」

「リリスちゃん見たら帰りますよぅ。私はこう見えても忙しいのです」

「それは知ってる」

その後、誘波はアニメを見終えても帰ろうとせず、タダ飯まで食らいやがった。

間章（1）

スライムのマルファを異界監査局の機関に引き渡した迫間漣と四条瑠美奈は、自分たちが住んでいる学生寮を目指して夜道を歩いていた。

異世界人のみが入居する寮は学園の敷地内にあるが、彼らは異世界人ではない。そのため学園の麓にある一般の寮に部屋を割り当てられている。

全寮制ではない伊海学園で寮に入っていることからわかる通り、彼らの出身地はここから遠く離れている。異能の力に目覚めていなければ、二人共今ごろは故郷で普通の高校生活を謳歌していたことだろう。

「なあ、瑠美奈」

登りなら冬でも汗を掻きそうな坂道を下りながら、漣は隣を歩く頭一個半ほど背の低い少女に声をかけた。

「なに？」

素っ気なく瑠美奈が答える。腰まで伸ばした綺麗な黒髪が足を動かすたびに左右に揺れている。

「なんか最近、俺たちに関係ない仕事ばっかりさせられてねえか？」

「異界監査官なんてそんなもんでしょ？　不幸にも誘波に気に入られた白峰零児なんてどんだけ無駄な仕事押しつけられてると思ってんのよ。行動に制限のあるあたしたちにも仕事があるだけマシと考えなさい」

白峰零児はどこかの異世界で行方不明になっている幼馴染を捜している。いや、捜しているというよりは、その幼馴染が帰ってくるのを待っているという感じだ。『次元の門』の監視に意味があるとはいえ、普通の監査官の倍は引き受けているように思える。加えて新人監査官の引率……漣であれば面倒臭くてやっていられない。

「でもまあ、確かに最近は『混沌の闇（ケイオス・ダーク）』関連の仕事がないわね。あ

の異界はあたしたち影魔導師にしか対処できないし、開かないってことはいいことよ」

「まあな、開けばそれだけ俺たちみたいな人間が増えるかもしれないもんな。？影？に侵蝕されるなんて面倒臭いことになるのは俺たちだけで充分だ。ましてや、先輩たちのように『混沌の闇』に喰われる人間は絶対に出しちゃいけない」

三年前、当時所属していた剣道部の打ち上げでカラオケに行った帰りのことだ。漣と瑠美奈の先輩である広瀬智治（ひろせともはる）と望月絵理香（もちづきえりか）が、忽如として開いた異世界に『喰われた』。助かった漣と瑠美奈もその異世界――『混沌の闇』と関わったことで異能者となってしまった。

――日影しか歩けない体と引き換えに。

影魔導師は、体内に侵蝕してきた『混沌の闇』の？影？を逆に制御下に置くことでなれる。その力を利用して周囲の影に干渉し、繰り、異能力として具象することができる。

一方で、強い光を浴びると意識を失ってしまうという弱点もある。特に日光などは長時間浴び続けると命を落としてしまうことだってざらじゃない。

よって、影魔導師が真価を発揮するのは影の満ちる？夜？なのだ。死んでいないゾンビ、血を吸わない吸血鬼、まさにそんな感じだろう。異世界人ではないが、人間とも言えるか怪しい存在だ。

ただ、異界監査局は一定以上の知能や意志力があればスライムだろうと？人？として扱ってくれる。漣たちのような体でも差別する者は一人たりともいない。そこは居心地よく思っている。

「まあ、異世界の脅威から人々を守るって点なら、今日の魔王討伐も俺たちの役割とは全くの無関係ってわけじゃないか」

「なにを今更言ってんのよ、漣。あたしたちが影魔導師連盟とは別に異界監査局にも所属しているのは、なにも『混沌の闇』の情報が

集まりやすいからって理由だけじゃないでしょ？」
「わかってるよ。だから面倒臭くてもしっかり仕事やってんじゃねえか」
異能を持ってしまったのだから一つの脅威以外にも力を振るいたい、そう言って異界監査官になった瑠美奈には漣も深く共感しているのだ。
「――ったく、ガキ臭くてめえらの決意を確認し合ってんじゃねえよ」
坂道を下り終えた時、そんな乱暴な声が漣たちの耳に刺さった。
二人は警戒心のレベルを跳ね上げて前方を睨む。そこには黒い鍔広の帽子を目深に被った男が夜闇に溶け込むように佇んでいた。漣や瑠美奈と同じ影魔導師のロングコートが長身痩躯の体を包んでいる。
知っている人物だ。漣と瑠美奈は同時に警戒を緩める。
「久しぶりですね、師匠。どうしてこんなところに？」
この人が関わると絶対面倒なことになるんだよなぁ、と思いつつ漣が訊いた。
師匠と呼ばれた帽子の男は、コートのポケットから煙草を取り出してライターで火をつける。燻らせた煙草で一服してから、師匠は億劫そうに口を開いた。
「てめえらに仕事だ。当然、影魔導師連盟の方な」

間章（1）（後書き）

初めて知りました。ルビの見え方が『Ｇｏｏｇｌｅ　Ｃｈｒｏｍｅ』では違って見え、『火狐』ではそもそもルビが反映されてないことに。

二章　温泉と異変（1）

俺の家に居候している？魔帝？ことリーゼロッテ・ヴァレファールは、常に魔力が増え続けるという体質を持っている。

いや、体質ってわけではないか。リーゼは自らの魔力を燃焼させた黒炎を武器に戦うのだが、その時に魔力は消費されず、彼女の体へと還元する仕組みになっている。そのような術式をリーゼは無意識に発動しているんだ。

術を使っても魔力は減らず、体内で生成される魔力を止めることもできない。そんな状態が長引くと、魔力の器である肉体が耐えられなくなる。要するに放っておけば死ぬってことだ。

仮に魔力疾患と名づけたその症状を防ぐために、彼女の世界――イヴリアでは百体を越える魔工機械人形が用意され、リーゼはそれらに定期的に魔力を供給していた。

だが、この世界にいる魔工機械人形はレランジェ一体だけ。膨れ上がった魔力をどうすることもできず、一度リーゼは魔力疾患を引き起こしてしまったんだ。

そこで活躍したのが、能力劣化の代わりに莫大な魔力許容量を持つハーフの俺。左手の能力――〈吸力（ドレイン）〉により、リーゼの魔力を奪って魔力疾患を抑えることに成功した。

おかげで俺は百体の魔工機械人形の代わりに、定期的にリーゼの魔力を抜かねばならなくなった。俺としても、自分の魔力が枯渇しなくなるってのはけっこう大きなメリットだと考えている。

「――てなわけで、これは別にやらしいことをしてるんじゃねえんだよ、桜居」

昼休み。伊海学園高等部の屋上で、俺はなにやら大層に憤慨していらっしゃる男子生徒に懇切丁寧な説明をしてやった。

この見るからにアホそうな面をしたやつの名は、桜居謙斗（さくらいけんと）。異世

界の存在や俺たちのことをある程度に承知している自称異世界探究家で、俺の中学時代からの悪友だ。それにしても、相変わらず立派な癖毛は健在だな。実は毎朝セットしてるんじゃないか？

「ほほう、じゃあなにか白峰」桜居は片眉をピクつかせて、「魔力を吸い取るには、そんな羨ましいことしなきゃならんわけか？」

羨ましい？　そうか、傍から見ればそんな風に思われるのか、と嘆息しながら俺は手を動かす。

「ん……レージ、もっと左。……うん、そこよそこ。あぅ、いいわ」

ベンチにうつ伏せで寝っ転がるリーゼの背中を、俺は両手の指でツボを突くように押さえていく。やらしいことしてると思ったらマッサージでした、なんてベタな展開に、ベッタベタに引っかかってくれたのがそこのアホってわけだ。

とは言っても、マッサージやサンオイル塗りなどはそれはそれでエロスだと俺は思う。そこに憧憬する男どもの気持ちはわからんでもない。俺だって男だからな。

でもこれ、リーゼの気紛れに半強制的に付き合わされている状態なんだよね。

今朝、レランジェから魔力疾患の警告を受けた俺は、昼食を終えてからリーゼにそれとなく伝えた。するとこの異世界のお嬢様はこう言ったんだ。

『わたしの魔力を分けてもいいけど、タダはやだ。だからレージにはわたしが退屈しないことをやってもらうわ』

で、俺はその流れで彼女のマッサージする破目になった。なんでも魔力疾患寸前まで魔力が溜まってくると、肩が凝ったりするのだそうだ。レランジェたち魔工機械人形に魔力を供給する際も、今の俺みたいに体を揉みほぐしてもらっていたらしい。

「レージってレランジェより上手。すっごく気持いい♪」

薄桃色に頬を染め、恍惚と目を細めるリーゼ。ほう、あの憎き機械メイドよりも評価が高いのか。レランジェざまあ。……いかん、どちらが下僕として優秀か競ってるみたいになってきた。

「まあ、こういうことは昔から散々やらされてたからなぁ」
人を良い意味でも悪い意味でも振り回してくれる幼馴染に、だ。
週に三回も四回もマッサージさせられては嫌でも上達するし、慣れる。だから俺はリーゼの柔らかい背中や太股を揉んだところで変な気持ちになったりはしないんだ。……うん、してない。大丈夫。きっと。
「レージ、今度は肩の方をやって。あともうちょっと強くして」
「はいはい」
言われるがままに俺は手を肩の方にやる。するとリーゼがまた「んんん～」と甘ったるい声を出すのだ。そんなに気持ちいいのか。
「リーゼちゃん、次、オレがマッサージしてあげようか？」
桜居、お前、鼻の下伸び過ぎだ。
「必要ない」
「いやでもほら、オレの方がこいつよりうま――」
「いらない。レージがいい」
あっさりと撃沈された桜居は両手両膝をついて負け組のポーズを取っていた。なんか「白峰コロス白峰コロス」と呪言のような声が聞こえるがきっと幻聴だろう。
「リーゼ、もうこのぐらいでやめていいか？」
そろそろ魔力の〈吸力〉が適量に達したので、俺はマッサージ終了の旨をリーゼに伝える。
「……」
が、返事はない。そういえば気持ちよさげな喘ぎ声も聞こえなくなっている。
訝しく思って彼女の顔を覗き込むと、
「すぴー」
最高に幸せそうな寝顔を見せていた。ぽかぽかの陽気の下でマッサージを受けていたのだから眠くなったのだろう。何度も言うけど、

あなた本当に？魔帝？なんですか？
なんにしてもあと少しで昼休みが終わる。むにゃむにゃと夢見ているところ悪いが、起こした方がいいだろうな。
と、いつ精神的ダメージから復帰したのか、桜居が気持ち悪い笑みでリーゼの寝顔を眺めていた。
「やっぱリーゼちゃんは可愛いなぁ。リーゼちゃんマジ天使」
いえ、どちらかと言えば悪魔に部類するかと。それとジロジロ見るな。なにかが減ったらどうする。
「ほら、起きてくださいお嬢様」
ぺしぺしと頬を叩いたくらいでは起きそうにない。だったら仕方ない。教室まで運ぶか。俺はまずは体勢を座った状態にするため彼女の両脇に手を入れ――
「……零児、そこでなにをしている？」
エベレストの山頂にも負けない冷ややかな声が俺に突き刺さった。振り向けば、銀髪ポニテのスレンダーな少女が屋上のドア前に立ち、エメラルドの底のように濃い翠眼から絶対零度的視線を送っていた。
「やあ、セレスさん、どうしたんですか？　こんな場所まで来て」
と空気を読めていない桜居が新たなる異世界美少女の登場に瞳を輝かせる。セレスの口調や仕草がお堅いからか、クラスの男共は彼女に敬語を使っているのだ。
セレスはそんな桜居を無視して、スタスタとこちらに歩み寄ってきた。そしてギン！　と睨み目で俺たちを見る。
俺は眠っているリーゼの両脇に両手を差し込んでいる状態。
やばい、アレはなにかを勘違いしている顔だ。
「貴様ら、？魔帝？とはいえ無防備な少女を強猥するなど、恥を知れ！」
やっぱりかっ！？　なにこの展開？　これなんてラブコメ？
しゅるるるっと背中にあった棒の布が解かれ、長々とした鞘がケースのようにパカリと開き、聖剣ラハイアンがその凶刃を露にする。

「よーし、落ち着こうセレス。こういう時はアレだ。お互いがきちんと会話のキャッチボールをすることで誤解は解ける。それができずに散っていった者たちを俺はマンガでよく知っているんだ」

セレスは俺の眉間にラハイアンの剣尖を置き、言う。

「では訊いてやる。なにをしていた？」

「リーゼをマッサージしてたんだ。そんでリーゼが寝ちまったから、教室に運ぼうとしていた。それだけだ」

言うと、セレスはこちらに突きつけていた超長剣を少し引く。しかしまだ殺気を解くことはなく、

「マッサージとはなんだ？」

セレスの世界――ラ・フェルデにはない言葉だったらしい。

「全身を嘗め回すように擦り、捏ね繰り回すように揉んで気持ちよくさせることです、セレスさん。オレは止めようとしたのですが、白峰は無理やりリーゼちゃんに……」

「桜居てめえ！　適当なことほざいてんじゃねえぞコラァ！？」

その癖毛を全部引っ張り抜いてやろうかと手を伸ばしたが、桜居のアホは既に俺とセレスから距離を取ってやがった。やつの目が語っている、『幸せ者への罰だ、死ね』と。

見るとセレスはその白磁の顔を、かああぁ、と真っ赤に染めて「な、嘗め回す？　擦る？　も、ももも揉む……？」とか呟いていた。直後の俺の叫びなんて耳に入っていないようだ。

頭から蒸気を噴出するほど赤面したセレスが、再び俺に剣を突きつけてくる。

「零児、き、貴様というやつは！」

「セレス、さっきの桜居の言葉は表現がおかしいんだ。――って、まだ俺の話を訊く気、ある？」

「問答無用！！」

――ですよねー。

リーゼから魔力をもらってなければ、俺は咄嗟に生成した盾ごと

破壊されていただろう。

二章　温泉と異変（2）

「本っっっ当にすまない！　まさか？魔帝？の魔力の吸収作業だなんて思っていなかった。冷静さを欠いて物事を見極められないとは……私は騎士失格だ！」

ようやく事情を理解したセレスは、屋上の床を砕いて減り込ませるくらいの勢いで土下座した。普段のセレスならそんな屈辱的な姿勢などプライドが許さないだろう。けれどこれは二度目、いや三度目なのだ。一回目はリーゼを誤解で殺そうとしたこと、二回目は間違って男子シャワー室に入ったことだ。

さらに自分の方がよからぬ妄想をしていたことも重畳しているのかもしれない。さっきから顔が郵便ポストよりも真っ赤だ。

「いや、そこまでして謝らなくてもいいって。けしかけたのは桜居なんだし」

当の桜居のボケは戦闘が始まってすぐに屋上から避難していた。あいつは後で縊り殺す。

「なんでお前がここにいるのよ？」

寝起きのリーゼが眠い目を擦りながら不機嫌さを滲ませた声で問うた。それは俺も気になったが、授業開始前の予鈴がなっている。手短に話してもらおう。

「ああ、そうだった」セレスは土下座から正座に移行し、「誘波殿からこれを預かっている。後で目を通しておいてほしいとのことだ」

セレスはスカートのポケットから四つ折りにしたＡ４用紙を取り出し、俺に手渡す。後でとは言わず俺はすぐにその紙を広げた。

そこにはタオルで大事な部分を隠しただけのデフォルメされた男女のイラストと共に、でっかくこう書かれていた。

【異界監査局主催・二泊三日の秘湯巡りツアー　　発案者：白峰零児】

そんなタイトルの下には日程や場所、持ち物などの細々した内容が書き綴られている。お問い合わせは法界院誘波まで――ってあの着物馬鹿は一体なにを考えているんだ？

しかもこの日程、今週末じゃないか。急だな。場所は秘密です当日発表しますとか、怪しさ満点だ。まったく誰だよこんな企画考えた白峰零児ってアホ野郎は……俺だ。

「あー、まさか昨日のアレか？」

リーゼを温泉に連れて行ったら喜ぶだろうなと呟いたのを、誘波が耳ざとく聞いてやがったんだ。そういえば早速手配するとか言ってたような気もする。

「セレス、お前はこれ読んだのか？」

「いや、漢字という文字が多くてまだ私には読めないんだ。よければ、なんと書いてあるのか教えてもらえないだろうか」

俺は少し逡巡する。読み聞かせるくらいならしてもいいが、誘波の提案に簡単に乗ってもいいのだろうか。激しく不安だ。

「レージレージ、それなんなの？　面白いこと？　退屈しない？」

楽しそうな匂いを嗅ぎつけたのか、リーゼが眠気など吹っ飛ばして赤い瞳の中でお星様をキラッキラさせていた。ぎゅっと握った両手を胸の前に持ってきたりなんかして、お子様のような上目遣いで俺を見上げてくる。

桜居の言葉じゃねえが、このお嬢様は？魔帝？とは思えないほど可愛いなチクショー。

「リーゼ、温泉って知ってるか？」

試しに訊いてみると、案の定、リーゼはふるふると首を横に振った。

「知らない。なにそれ？　楽しいの？」

「俺ん家の何倍も何十倍もでっかい風呂のことだ」

「！」

俺の言葉を聞いたリーゼはぴょんと五センチくらいその場で跳ね

た。そして大きな目をまん丸に見開き、少し興奮気味に頬を上気させて言う。

「入る！　オンセンってのに入ってみたい！　レージ、わたしをそこに連れて行きなさい！」

その瞬間、俺は折れた。乗ってやろうじゃないか、誘波。この風呂好きの？魔帝？様を温泉に連れて行ってやりたいと思ったのは俺の本心だからな。

それに日本かぶれの誘波が陳腐な温泉をチョイスするわけがない。たまには旅行なんかして羽根を伸ばすのも悪くないだろう。

「温泉……か。なるほど、それなら私もわかるぞ。ラ・フェルデにもあったからな。何度か湯治に行ったことがある。アレは気持ちのよいものだ」

故郷を懐かしむように目を閉じるセレス。どうやら、彼女の参加も確定のようだ。

「じゃ、みんなで行くか」

レランジェは誘いたくないけど、あいつがいないとリーゼが困る。仕方ない。

決定したところで俺たちは授業開始のチャイムが鳴っていることに気づき、慌てて教室に戻った。

放課後、発案者となっていた俺は、監査局に呼び出されてみっちり三時間ほど副局長の説教をくらった。

誘波のやつ、ちゃんと全体の許可を取ってからこういうことしろよ……。

二章　温泉と異変（3）

旅行出発日。時刻は授業を終えた放課後。
山一つを丸々開拓して建てられた伊海学園には、広すぎる敷地内に道路が迷路のごとく複雑に入り組んでいる。だからって俺が迷ったりするわけじゃないんだが、普段行かないような場所へ辿りつくには多少時間がかかったりするもんだ。
敷地内の道路は東西南北の四ヶ所にあるゲートへと続いている。大学の一号館――異界監査局のロッカーに預けておいた荷物を回収した俺たちは、その北口にある市営バスの停留所に集合していた。俺はいつも家と高校に近い南口を使っているため、反対側なんて滅多に行くことはない。
空はまだ明るい。でもあと数時間もすれば夜の帳が下りる。
二泊三日の旅行だけど、時間的に今日は着いたら即行で宿だな。行き先、知らねえけど。
なんにしても旅行ってのは久し振りだ。昨日「オンセン♪　オンセン♪」と嬉しそうに口遊さみながら家の中をスキップしていたリーゼほどではないにしろ、俺だってドキワクを隠せない。

――たとえ、出発前から荷物持ちをさせられようともな。

「お前らなぁ、少しは自分の荷物持てよ」
「レージが『ジャンケン』ってゲームに負けたんじゃない。文句言わない」
「ゴミ虫様はヘタレ安定ですね」
「お前どこで『ヘタレ』なんて言葉知った!?」
何度も言うが伊海学園は広い。そこを俺は三人分の大荷物を抱えて歩き回ったんだ。始まる前から疲労困憊ってどゆことよ？
ヒラリ、と視界の端でスカートが靡いた。

「零児、お前たちで最後だぞ」
そこには銀髪美少女――セレスティナ・ラハイアン・フェンサリルが腕を組んで屹立していた。
「悪いな、セレス。こっちの方はあまり来たことなくてな」
「いや、構わない。遅れたわけではないのだからな」
凛とした微笑みを返すセレスは、学園の制服を着ている。なんか知らんが、俺たち学生は私服禁止らしい。修学旅行気分にでも浸りたいのだろうか。
俺たちが最後ってことは、さて何人が参加してるんだ？
停留所にはマイクロバスが停まっている。そこの前に……おお、いるいる。見知った顔ばかりだ。俺らを含めて十余人ってところか。よくこんな突発的な企画に参加したなと誉めてやりたい。
だが、流石に監査官は少ないな。元々付き合いの悪いやつばかりだし、大勢が監査局を留守にするわけにもいかないから仕方ないけど。
と――
ぎゅむっ。
唐突にリーゼが俺の背に隠れるようにして裾を掴んできた。いつもの強気な目が小動物みたいに弱々しくなっている。人見知りするような性格じゃないのに、一体どうしたんだ？
「レージ、あいつ、いない？」
幼子のような口調で訊いてくる。
「あいつ？　なぜか局員でもないのに稲葉（いなば）レトと談笑している桜居ならあそこにいるぞ？」
てかホントになんであのアホがいるんだ？　俺は旅行のことなんて話してないぞ。
「違うわよ！　あいつ、あのぬるぬる女！」
「ああ、マルファか」
見る限りだと、いない。たぶんまだ教育機関に軟禁状態なのだと思う。あいつは能力的にも監査官候補だし、そっちの方も勉強させ

られているはずだ。気の毒に。
　マルファがいないことをリーゼに伝えると、このお嬢様は小動物から一変してぱあぁと輝かんばかりの笑顔になる。……この嫌われよう、マルファには憐憫の念を抱かずにいられない。まあ、自業自得だけれど。
「はぁい、アテンション・プリーズ。皆さん揃いましたねぇ？」
　泣く子も眠りそうなおっとり穏やかな口調に、参加者全員がそちらを振り向いた。
　すると、バスの中から緩いウェーブヘアーに蒼い瞳をした美少女が下りてくる。グリーン系のジャケットに半袖ブラウス、タイトスカート、頭の上にはちょこんと制帽が乗っかっている。
　おいおい、バスガイドさんまで雇ったのかよ。本格的なツアーだな。
　しかし、あのバスガイドさん、どっかで見たことあるような……。
「うっひゃー！　バスガイドの格好似合ってますよ！　誘波さん！」
　なぜか参加している桜居が鼻息を荒くする。わかりやすい反応するなよキモイぞ。
「待てよ桜居、どこにあの万年着物コスプレした変態がいるんだよ。あんなのと間違えるとかバスガイドさんに失礼だろ」
「あっ、馬鹿、白峰」
「あん――ハッ！？」
　全身に突き刺さる殺気という名の圧力を感じて俺は硬直した。見るとバスガイドさんがニッコニコの笑顔に影を落とし、ウェーブヘアーをメデューサのように蠢かしてどす黒いオーラを放っている。
……そういえば誘波に似てなくもない。
「えっと……誘波の双子の妹さん？」
　かろうじて、口が動く。頼む合っていてくれ。
「私にそんな設定はありませんよぅ、レイちゃん。上と下、どちらがお好みですかぁ？」
　くっそやっぱり本人だったか！

「わ、悪い、誘波。いつもの十二単じゃないから気づかなかった。えーと、凄く似合ってるぜ」
白い歯を見せてはにかみ、ぐっとサムズアップしてみる俺。
「レイちゃん、私は上か下かと訊いているのですよ？」
ダメでした。
「……じゃあ、下で」

ズゴガァンッッッ！！

俺は？上方から圧しかかる風？になんの抵抗もできず、アスファルトに人型のクレーターを作るのだった。周りの参加者は危険を察知して早々に避難しており、リーゼとレランジェに至ってはちゃっかり自分たちの荷物を俺から回収してやがった。
「私の本体は十二単だと思っていたのですね！　酷いです！　レイちゃんのバカ！」
子供のように頬を膨らまし、怒り目で俺を罵倒するバスガイド誘波。状態報告すると、俺、今その声が聞こえるのが不思議なくらい全身打撲中なんですけど。

その状態のまま出発時刻となり、俺はレランジェにボロ雑巾でも摘まむような運ばれ方でバスへと引っ張り込まれた。
車内前方、右手窓際の席に放り捨てられた俺。この旅行から無事に帰還できるのか激しく不安になってきた。
「れ、零児、その、なんだ、隣、座ってもよいだろうか？」
俺が遠い目をして窓の外を眺めていると、なんかセレスがもじもじと体をくねらせて噛み噛みにそう訊いてきた。心なしか顔も赤いし目も泳いでいる。彼女にとっては異世界で初めての旅行だ。緊張でもしているのだろう。
「俺は別にいいぞ。勝手に座ってくれ」
「本当か！　りょ、了解した。失礼する」

ぱっとセレスは表情に花を咲かせ――
「レージ！　そこ代わりなさい！」
――横から割り込んできたリーゼに突き飛ばされた。
「？魔帝？で最強のわたしは外が見える方がいいわ。レージはわたしの隣！」
窓際席と？魔帝？で最強はどんな風に繋がっているのか教えてくれ、リーゼよ。
「ま、？魔帝？リーゼロッテ、そこは私が予約した席だぞ。横取りは許さん！」
セレスは、キッ、と殺人視線でリーゼを睨む。対するリーゼはフンと鼻息を鳴らし、
「お前は床にでも座ってればいいんじゃない？」
「マスター、ゴミ虫様の隣に座るなどレランジェも反対安定です。ヘタレ菌に感染してしまいます。お外が見たいのでしたらレランジェの隣でも安定です」
「ああ、お前ならそう言ってくると思ったよ！　そしてヘタレ菌ってなんだ！」
まったくなんで俺はこの口悪メイド人形を誘っちまったんだ。どこかに電源のスイッチとかないかな？　永久に切っといてやるのに。
「零児の隣には私が座る。零児も許可をくれた。後からしゃしゃり出てくるとは、？魔帝？がそこまで卑怯者だとは知らなかったな」
「フフン、卑怯者？　なにそれ？　レージはわたしのものなんだから、わたしの傍にレージがいることは当然のことよ」
「ならば決闘だ、？魔帝？リーゼロッテ！　勝った方が零児の隣だ」
「望むところよ。灰にしてあげるわ」
「だからどうしてお前らは最終的にそうなるんだぁあッ！？」
頼むからくだらないことで騒がないでくれ。なにが原因でこうなるのかさっぱりわからん。そしてそこの誘波、なにが楽しくてニヤニヤとこっちを眺めてやがる。止めろよ。この二人に武力介入できるのはお前だけなんだぞ！

「はいはいはい、んじゃ、お邪魔しますよっと」
リーゼとセレスがバチバチと視線をぶつけ合っている間に、桜居がふてぶてしく俺の横に腰かけた。
「「なっ！？」」
同時に絶句する二人。そんな彼女たちに桜居は飄々とした笑みを浮かべて、言う。
「リーゼちゃん、せっかく楽しい旅行なんだから喧嘩なんてするべきじゃないだろ。セレスさんも、こんなことで争うのは時間の無駄だとは思いませんか？　というわけで、オレが白峰の隣に座るってことでこの話は決着。ほら、仲直り」
「「……」」
桜居に宥められたリーゼとセレスは興醒めしたらしく、渋々と別の席についた。リーゼはレランジェの隣、セレスは稲葉の隣である。
すると、桜居の口から怪しげな笑い声が零れる。
「ククク、白峰、地球人の美少女だったら目を瞑ってやるが、異世界美少女と相席するなんて羨ましいイベントはこのオレが潰させてもらうぜ」
「そんなこったろうと思った」
でも実際にあの二人の喧嘩を無傷で収めたお前は凄いと思うぞ。
俺はいつもボコボコになってるからな。
「ではでは、面白いものも見れたことですし、そろそろ出発しますねぇ♪」
誘波が穏やかにそう告げる。が――
「ちょっと待てよ、バスの運転手がいねえじゃねえか」
そうだ、出発するにも肝心の人物が見当たらない。トイレにでも行っているのだろうか？
「いえ、レイちゃん。運転するのは私ですよ」
「はい？」
局長自ら運転すると？　バスガイドのコスプレなんてしてるから、てっきりそっちの役をやるんだと思ったのだが……。

「大丈夫です。運転免許はちゃーんと持っていますよぅ。三日で取りました」
「絶対チートしてるよねそれ！？」
原付自転車じゃあるまいし、そんなに早く免許が取れるわけがない。
「あと一体どこへ行くんだよ。当日に教えるんじゃなかったのか？」
「それは到着してのお楽しみですよ」
俺の不安の声などどこ吹く風で、誘波はバスガイドコスプレのまま運転席に腰を下ろす。それから数秒後に、ブロロロロン！　と景気よくエンジンがかかった。
「皆さんシートベルトをしてくださいねぇ。発進時は揺れますので、大怪我しないようにちゃんと着用してください」
そんな大げさな、と思いながら俺は言われた通りシートベルトを着用する。
皆がシートベルトをしたことを認めると、誘波はやたら楽しげなルンルン声で、
「それじゃあ行きますよぅ……テイク・オーフ♪」
「テイク・オフ！？」

瞬間、ビュオオオン！！　という風音が爆発し、
ぐらっと車体が傾いたかと思えば、
ロケットを打ち上げたように、
バスが飛んだ。

「どわぁあああああああああああああああああああああああああッッッ！？」
そのまま戦闘機にも匹敵する速度で大空を翔るバス。どうなってんだと思いきや、すぐに誘波の？風？によって飛行しているのだと知る。
彼女のバケモノすら超越したような力に改めて恐怖を覚えながら

も、俺はこんな疑問を感じていた。

……エンジンつけた意味は？

二章　温泉と異変（４）

「む、無茶苦茶しやがって……」

一体どのくらいの距離を移動したのか知らないが、三十分ほどで俺たちを乗せたバスは目的地へと到着した。

バスとは地面を走る乗り物だ。それがこともあろうに空を飛んだのだから、世間がＵＦＯの飛来と勘違いして大パニックに陥っていないか激しく心配だった。

だがそこは日本異界監査局局長の法界院誘波だ。世間様に見つかるようなミスはしない。

なんでも大気を操って光を屈折させ、飛行中のマイクロバスを透明化していたらしい。光学迷彩ってやつだ。そういえばこの前も自分自身を消していたらしいな。本人は『空気と同化』とか言っていたが。

全員無事だったからいいものを、この三十分間は本気で死ぬ思いだったぞ。空を飛んだことにリーゼが大はしゃぎしたり、セレスが重度の乗り物酔いでダウンしたり、調子に乗った誘波がアクロバット飛行に挑戦したり……散々だった。

「――で、ここが目的地の温泉か」

率直な感想を言うと――でけえ。

雄大で緑豊かな自然の中に、日本風の荘厳な城が堂々と聳えていた。

均整が取れて美しく、新しいはずなのに築城してからの歳月まで感じさせるその城こそ、今日から俺たちが二泊することになる温泉旅館だ。なんとも日本大好きな誘波らしい趣味である。

チラっと空から見えた様子だと、城の奥には広大な森が広がっていて、ところどころから湯気が上がっていた。さらに城の手前には江戸時代の城下町みたいな建物がずらりと軒を連ねている。タイムスリップしたと言われても、俺は信じてしまうだろうね。

――祝ノ森（いわいのもり）リゾートガーデン。それがこの施設の名前らしい。こ

こまで和風にしてんだから横文字はやめろよ、と衝動的に突っ込みたくなったが、逆にその名前でここが現代だということを実感させられてしまう。まあ、俺にとってはどうでもいいけどな。

「レージ！　アレなに！　いい匂いがする！」

城下町風の道を駐車場からお城旅館に向けて歩いていると、最近はすっかり落ち着いていたリーゼの持病――『アレなにコレなに病』が発症しやがった。空を飛んでからというもの、リーゼのテンション上昇率が止まるところを知らない。はしゃぎ死にしなきゃいいが……。

「温泉まんじゅうだな。食いたけりゃ後で買ってやるよ」

「オンセン魔獣？　食べれるの？　今欲しい！」

まいどあり―。

温泉まんじゅう屋のおっちゃんが出す景気のいい声を背中に、俺はついつい奢ってしまった自分を情けなく感じた。ここは我慢を覚えさせる時だろ、俺。

「レイちゃんはリーゼちゃんに甘いですねぇ」

「どわっ！？」

団体の先頭にいたはずの誘波が横からひょっこり現れて蒼い瞳を向けてきた。未だにバスガイドの格好には目が慣れない。

「やっぱりラブなんですかぁ？」

「ぶっ！？　な、なんでそうなるんだよ！　リーゼは、ほら、アレだ」

唐突にアホなことを言い出す誘波に、俺は両手持ちした中華まん大の温泉まんじゅうをはむはむしているリーゼを横目で見ながら、

「――妹的な？」

「きゃー♪　レイちゃんがシスコンでロリコンのヘンタイちゃんになってますぅ！」

「源泉の熱湯に直接ぶち込むぞてめえッ！！」

「ふむふむ、ゴミ虫様はシスコンでロリコンでヘンタイ安定ですか」

「そこのガラクタ人形！　メモるように復唱すなっ！」

ダメだ……一人でも疲れるのに、こいつらが揃うと俺の精神力が持ちそうにない。俺の癒しの場はどこにあるんだ。

と、乗り物酔いでうまく歩けずレランジェの肩を借りていたセレスが、リーゼの温泉まんじゅうを物欲しげに見詰めていることに俺は気づいた。

「どうしたんだ、セレス？　お前も食べたいのか？」

訊くと、セレスはゆっくりと首を振った。銀色のポニテが力なく左右に揺れる。

「いや、なんでもない。今、食欲はないんだ」

そうだろうな。顔色も悪い。雪色の肌が不健康的な白さになっている。でも乗り物酔いなんてすぐ治るものだろ。俺はなったことないからよくわからんけど。

くだらないことで無駄に体力を浪費しているうちに、俺たち一行はお城旅館へと辿りついた。

城の中までまんま『城』なのかと思ったら、案外普通の旅館と大差なかった。エレベーターもちゃんとあるし、意味不明なグッズを売ってそうな土産屋もある。

それでも旅館の上に『高級』という文字がつくだろうね。趣ある和式構造のロビーには壊しでもしたら到底弁償できそうもない調度品がいくつも置いてあったりするし。

どうも誘波はここのお偉いさんとは顔見知りのようで、チェックインを済ませてからも社長っぽい貫禄を持つ初老の男とロビーで談笑を続けていた。

男の態度を見ていればわかる。誘波はただの常連ではなくビップ扱いだ。まあ、伊海学園を含めて表向きは様々な企業を束ねる実業家だからな、誘波は。

で、俺は桜居と同室になった。誘波にしては妥当な部屋割だ。女子や親しくもないやつと同室なんて疲労が溜まるだけだからな。

五〇二号室――つまり五階の二番目の部屋へと案内された。誘波は五階と六階を貸し切ったとかぬかしていたから、たぶん男性陣が五階で女性陣が六階という配分だろう。俺と一緒にエレベーターを下りようとしたリーゼとセレスを従業員さんが止めていたことからも窺える。

「ふはぁー」

荷物を置き、畳の床へと仰向けに倒れる俺。なんだろうね、この解放感。

そのまま部屋を見回してみる。

急須や湯呑が乗った足の短い木製テーブルに背凭れの角度を調整できる座椅子、薄型テレビに小型の冷蔵庫、押し入れの中には布団が綺麗に畳まれていることだろう。それらが軽く十畳以上はある和室に収まっている。どう考えても二人部屋にしちゃ広い。四人は余裕で入るぞ。

「白峰ぇ～、なにのんびり寛いでんだよ」

このまま眠ってもいいと思ってたところに、同室となった癖毛君が気持悪い声をかけてきた。

「なんだよ、別にいいだろ？　今の俺の疲労具合はお前にはわかんねえよ」

「んなことより聞いたか？　ここって混浴なんだと」

「はぁ？」

半身を起こして『お前頭大丈夫か』的な顔をしてやると、興奮気味の桜居は戸惑ったように妙な手振りをする。

「あ、いや、混浴は混浴なんだが、アレだ。なんて言うんだっけ？　水着を着て入るやつ」

「スパか？」

「そう！　それだ！」ビシっと桜居は俺を指差し、「リーゼちゃんやセレスさん、誘波さんの水着姿を拝められると思うと、部屋で茶なんか飲んでる暇はないぜ白峰！」

どこにでもいそうな女好きのキャラ的な言動をする桜居だが、こ

いつはこれでしっかりラインを引いている。というのも、この異世界オタクは地球人がどんだけ美女であっても全く興味を示さないんだ。

「誘波はどうか知らんが、リーゼたちは水着なんて持ってきてないぞ。だからなんの味気も色気もないレンタル水着になるだろうね」

秘湯巡りとだけ言われて水着を持ってくるやつがいたら、そいつは予知能力者だ。

「それはそれでオレ的にはオーケー。彼女たちならなに着たって似合うに決まってるさ」

「あっそ」

どうでもいいんで俺は素っ気なく返事した。が、内心ではちょっと楽しみにしてたりすることは秘密だ。もし俺の心の声を聞いたエスパーがいたなら……頼む、黙っていてくれ。

……あ、そうだ。

「そう言えば訊きそびれてたんだが、なんでお前がこの旅行に参加してんだよ？　誘波にでも誘われたのか？」

「んや、オレを誘ってくれたのはレトちゃんだぜ」

「はぁ？」

俺はこの部屋に入って二度目の素っ頓狂な声を上げた。

「レトって稲葉レトのことか？　お前らいつの間に知り合ったんだよ」

「ん？　ああ、言ってなかったか」桜居は自慢の癖毛を指で弄りつつ、「レトちゃんは異界研の副部長やってんだよ」

「！？」

危なく三度目の「はぁ？」を口にするところだった。異界研というのは桜居が非公認で創設した異世界研究部の略称だ。俺は今までこいつ一人でやっているんだと思っていたが、ちゃんと部員がいたのか。それも異界監査官の。正直、驚いた。

言われてみれば、桜居はバス停にいる時から稲葉レトと親しくお喋りしていた。旅館までの道中もオレに絡んで来ないと思ったら、

彼女と話してたのか。
「レトちゃんもお前みたいにハーフなんだろ？　この世界しか知らないから、他の世界に興味があるらしいんだよ」
　確かに稲葉レトはハーフだ。微妙な関西弁を喋っているのは祖母が関西出身だからとかで……どうでもいいか。桜居と稲葉がどこでどう繋がっていようが俺には関係のないことだ。

　Ｐｒｒｒｒ！　Ｐｒｒｒｒ！　Ｐｒｒｒｒ！

　俺がシラけたタイミングを狙ったかのように携帯が鳴った。
『レイちゃん、今からみんなでスパ行きますよぅ。現地集合です。場所は桜居ちゃんが知ってると思います。あっ、レイちゃんたちの水着は受付で貸してもらえますよ♪』
　――ガチャ。
　ボケもなにもなく、誘波は一方的にそれだけ告げて通話を切った。俺に有無を言わさぬ早業だった。絶対に来るようにと言外に言ってやがる。
　見ると、桜居は既に準備万端といった様子で急かすように部屋の出入口に立っていた。

二章　温泉と異変（4）（後書き）

今回からQ&A始めようと思います。
では早速。

Q：セレスの超長剣は、どうやって抜刀・納刀しているのですか？

A：鞘に仕掛けがありまして、抜刀する時には引っかからないようパカリと僅かに開く仕組みになってます。ケース状の鞘ですね。
（……大丈夫かな、この理屈？）

Q：超長剣を大振りしたら隙が馬鹿でかいと思うのですが、よく次の攻撃に繋げられましたね。

A：セレスの身体能力が凄いってことです。それと聖剣は適合者にとって見た目通りの重さじゃないらしいです。
（ちょっと強引だったかな？）

Q：ヘタレ菌ってあるんですか？

A：知りません。

一応、質問にあった矛盾点は本文中でも微妙に修正しました。

二章　温泉と異変（5）

祝ノ森リゾートガーデン。

なぜ『庭園（ガーデン）』なんて名称がついているのか、ここへ来て俺は嫌でも理解させられた。

城の裏手に広がっていた森――その一部が、この旅館の混浴スパリゾートになっていたんだ。

スパ内は植物園のように草木が繁っており、ほとんどが熱帯樹で構成されている。いわゆるジャングル風呂ってやつだ。見た感じ開閉式ドーム構造になっているようで、今日みたいに晴れている日などは屋根をオープンにしているらしい。

てか、広いな。東京ドームくらいあるんじゃないか？　行ったことないけど。

入口から見渡せるだけでもかなりの数の温泉が目につく。普通の岩風呂や檜風呂もあれば、運河のような回流式の浴槽に小規模な探検洞窟、人口の滝、おいおいスライダーなんてものもあるぞ。プールかよ。

よくこんな施設を維持できるなと思ったが、もしかしたら一般化されていない異界監査局の技術を用いているのかもしれない。誘波の鶴の一声があれば不可能じゃないしな。

「まだか……まだなのか……」

「あんまりそわそわするなよ、桜居。不審者に見えるぞ」

桜居はさっきからかけ湯の前を行ったり来たりしている。石鹸でも仕掛ければ盛大にすっ転びそうだ。

「なんでお前はそんなに落ち着いていられるんだ、白峰」

「期待するだけ損だからだ」

周りの一般客を見る限り、女性用のレンタル水着は無地のライトグリーンで、タイプは量産品と思われるビキニとワンピースの二種類しかない。あれでは俺たちのトランクスと同じでなんの面白みも

ないな。

「損するかどうかは実際に見てから決めてくださいねぇ、レイちゃん」

おっとり間延びした、独特の口調。

なにかを企んでいるようにあえて背後から近づいて来やがったそいつらに対し、果たして俺は振り返るべきなのだろうか？

とか頭で考えているにも関わらず、悲しいかな、俺の体は反射的に動いていた。

そして、俺は言葉を失った。

桜居なんかはガチで言語機能に支障をきたしたように、ポカンと口を開けたまま放心している。

そこにいる女性陣が、誰一人としてレンタル水着を着用していなかったからだ。

「レージ！　ここ凄い！　いろんなフロがあって面白そう！」

早く入りたくてうずうずしている様子のリーゼは、腰回りにフリルのついたツーピースの赤い水着だった。色白の瑞々しい肌に華奢な手足、発展途上の胸は寄せて上げているのかいつもより主張を強くしている。カナヅチだからだろう、オプションとして浮き輪を持っていて、それが見た目と相まって子供らしい可愛らしさを醸し出している。

「レージ？」

石化したように固まっていた俺を不審に思ったのか、リーゼはツーサイドアップに括った頭をきょとんと傾げてくる。

……。

……。

……かわえぇ。

――ハッ！　違う俺はロリコンじゃないっ！？

「ゴミ虫様、あまり汚らわしい視線をマスターに向けていると屠殺安定です」

俺の心を読んだかのようにレランジェが右手の殺人兵器を翳してきた。おかげで俺は金縛りから解放される。

「してねえよ！　というか、お前は水大丈夫なのか？」

「チッ！　この通り、レランジェの防水性はバージョンアップ安定です」

「その舌打ちの意味がわからない」

レランジェは両手を広げるようにして自分の体を見せてくるが、どこで防水性を判断したらいいのかさっぱり謎だった。ただそのとても人形とは思えない生き生きとした体には、いつものゴスロリメイド服ではなく、黄色いラインの入った濃紺のピッチリとした水着が……

「なんで競泳用？」

水泳大会でも行われるのだろうか？

「それはもちろん、レイちゃんのフェチを知るためにいろいろと用意したからです」

「やっぱりお前の仕業かっ！」

そんなくだらないことのためにわざわざ皆の水着を揃えるとは……誘波、お前の思考を俺が理解できる日は一生来ねえな。

「あらあら、その顔だと旧スクの方がよかったですか？　存外にベタな方がレイちゃん受けするのですね」

「やかましい！　違うわ！」

「それよりもレイちゃん的に私はどうですかぁ？」

俺の変態性を意図的に上げやがったくせに、それよりも……だと？　くそ、一般客がいなければ日本刀を生成してその首刎ねてやったのに！

ニコニコ笑顔を振り撒きながらその場でくるっとターンする誘波は、水色のセパレーツに色鮮やかなパレオを巻いていた。十二単を

纏っている時と比べてやたら胸が大きく見えるので、正直、お子様リーゼや競泳レランジェより目のやり場に困る。

まさか一日に二種類、こいつが着物じゃない格好をしている姿を見ることになるとは。人生、なにが起こるか本当にわからないもんだな。

「レイちゃん、感想を仰ってくださいな」

こちらを挑発するように腰に手の甲をあてて前屈みになる誘波。魅惑的な谷間が露になり、豊満な双丘がたぷんと揺れ――る瞬間、俺は決死の眼球運動でそれを目撃することを回避した。セーフ。

その視線の先で、鼻血を曲芸のように噴出させて大の字で倒れている桜居を発見。危ない。一歩間違えれば俺もダメージを喰らっていた。

「に、似合ってるんじゃねえの？　お前に悩殺された桜居があそこで伸びてるのが証拠だ」

俺はなにがなんでも誘波を見ないようにしながら適当にそう言った。このアホ波は俺をからかうためならば一肌でも二肌でも脱ぎそうな勢いだから厄介なんだよ。

「あはっ♪　普段ツンデレのレイちゃんに誉められると気持ちがいいですぅ」

誰がツンデレか！

とそこで、俺はこの場に女子が三人しかいないことに気づく。

「そういえば、セレスがいないぞ？」

当然のようにいるもんだと思っていたが、他のグループと行動しているのだろうか。

「ああ、セレスちゃんならあそこですよ」

ゆるりとした動作で誘波が指を差す。

俺がそちらに顔を向けると、そこには……なんだ、あれ？

「ほーらセレスはん、恥ずかしがってなんかないで、みんなんとこ行こや」

「こ、断る。こ、こここんな姿を殿方に見せるなど、あ、ありえない」
「ええからええから。寧ろ思いっ切り見せたり」
「む、無理だぁあっ！」

ショートタンクトップにショートパンツといったボーイッシュな水着の稲葉レトが、雪だるまみたいに白くて丸っこい物体を引きずっていたのだ。
その白くて丸い物体が、バスタオルで全身を何重にも包んで蹲っているセレスだと理解した時には既に、俺たちとの距離は五メートルほどまで縮まっていた。
「なにやってんだ、セレス？」
俺は白だんご状態のセレスを見下ろしつつ訊ねてみた。するとこちらの視線に気づいた彼女は、ぼふん！　と一瞬にして顔を真っ赤にさせる。
「れ、零児！？　み、見るな！　騎士の私がこのような羞恥を晒すわけにはいかないんだ。頼む、向こうへ行ってくれ」
現状の白だんご姿も楽しいくらい滑稽なのだが、この様子だと本人はそこまで気が回ってないな。放っておいたら俺らまで奇異の眼差しを向けられそうだ。
仕方ない、ちょっと言ってやるとするか。
「セレス、よく考えてみろ。そうやって丸くなってるよりは、誘波みたいに堂々と見せつけていた方が周囲の目としては変に映らないぞ？」
「う……そ、それはそうだが……しかし……」
なおも渋るセレスは、どうしてもバスタオルを脱皮することに抵抗があるらしい。彼女の世界では海水浴とかそういった娯楽はなかったのかもしれない。
「面白い格好してるわね、お前。なにそのまん丸？　この？魔帝？で最強のわたしに蹴り転がされたいの？」

ニィと唇を愉しげに歪めたリーゼが、その小さなあんよで、げしっ、とセレスの背を足蹴にする。なるほどセレスを挑発してタオルを取らせようという作戦か――と思いきや、違う。このお嬢様のガキ大将みたいに勝ち誇った表情、絶対に素で馬鹿にしているな。

だが、それはそれで効果ありだった。

「ふ、ふざけるな、？魔帝？リーゼロッテ」

セレスが翠眼に強い意志を取り戻し、バスタオルは巻いたままだが、立ち上がったのだ。こいつは大きな進歩だ。

「私だって本気を出せばこの程度の羞恥になど堪えられる。私の不甲斐ない姿を貴様に馬鹿にされるくらいなら、このような布切れなど……」

バスタオルに手をかけたセレスは、ちらりとなぜか目だけで俺の方を見る。

「このような、布切れなど……布切れ……など……」

ぐぐぐ、とタオルを掴む手が力み、

かぁあああ、と火が出そうな勢いで更に顔を赤熱させ、

「や、やっぱり無理だぁあああああああああああああっ！！」

ペタンとその場にへたり込んでしまった。

「こりゃ重症だ」

俺の呆れた声に、苦笑する稲葉が「せやね」と肩を竦めて同意する。これ以上はなんかイジメになりそうだ。セレスには悪いが、更衣室か部屋に戻ってもらった方がいいだろうな。

と――

「あらあら、見てられませんねぇ」

見かねたらしい誘波がクスクスと笑いながら優しくセレスに言いかける。

「こういうことは最初の一歩が肝心ですよ、セレスちゃん。私がお手伝いしてあげます」
ヒュッ。誘波が手で軽く空気を薙いだ。
瞬間、小さな竜巻がセレスを包み、ばさっと体に巻いていたバスタオルを器用に剥ぎ取った。
ひらひらと宙を舞っていくバスタオルが、俺にはなぜかスローモーションのように映る。
なにが起こったのか理解できていないセレスは、呆然。
理解している俺もセレスの姿を見て、唖然。
セレスは極めて布面積の薄い、白地のマイクロビキニを着用していたのだ。白磁の肌に豊かな胸、モデル顔負けのスレンダーなボディが相当な露出度で視界に飛び込んでくる。
周りの一般客から「おおっ！」なんて歓声が上がる。
高潔でプライドの高い彼女が自分からこんなものを着るわけがない。着せたのは、向こうでそそくさと退散してやがる人で遊ぶことが生き甲斐の変態だ。
あわわわ、とセレスは顔だけでなく全身が茹でダコみたいに赤くなる。なんかセレスの凹凸ある体型にショックを受けてポカンとしてらっしゃるリーゼお嬢様は置いといて、俺はとりあえず声をかけてやるべきなんだろうな。
「あ、えーと、セレスさん？」
「ひっ、み、見るなぁあああああああああああああああああああああ！？」
「ぶべらぁあっ！？」
俺の顔面に鉄拳を減り込ませたセレスは、「うわあああああん！？」と泣き叫びながら女子更衣室の方へとダッシュした。もはや騎士のプライドもあったもんじゃない。
それで俺はというと、殴られた衝撃で錐揉み状に吹っ飛んでたりするわけで……誰か止めてください。あと顔面が死ぬほど痛いです。
「なんだ？　なんの騒ぎ――ごがっ！？」

一般客の誰かにぶつかった俺は、その客ともみくちゃになりながら一際太い熱帯樹に激突し、停止する。

軽く十メートルは飛んだ。なんつう馬鹿力だ、セレスのやつ。そして俺、よく意識を保ってられたな。

――あっ。関係ない客を巻き込んだことを思い出した俺は即座に立ち上がって頭を下げる。

「す、すみません！　ちょっとこちらでトラブルがあって。大丈夫でした――ん？」

「いや、謝罪なんて面倒臭いことはしないでくれ。こっちもぼーっと突っ立ってたのが悪い――あ？」

俺と高校生くらいの男性客は、互いの顔を見た瞬間、ほぼ同時に変な声を上げた。

この億劫そうな表情と口調、そして温泉に入っているにも関わらずマントのような黒いロングコートを羽織った怪しい男を、俺は一人しか知らない。

「お前、迫間」

「白峰か？」

なにかしらの任務とかで旅行には参加していなかった影魔導師――迫間漣が、この場にいる。

瞬時に事態の異様さを判断した俺と迫間は、最大限の面倒臭そうな表情を作り、はぁぁ、と同時に大きな溜息を零した。

「こりゃまた――」

「――面倒臭そうなことになりそうだぜ」

二章　温泉と異変（6）

空は次第に暗くなってきている。
それに伴い、スパリゾート内にも影が広がり始めていた。
太い幹が複数複雑に絡みついた熱帯樹――『カジュマル』というらしい――の前で、俺は影魔導師の迫間漣と対峙していた。
「どういうことなんだ？　お前、一昨日辺りから学校にも来てなかったよな。任務ってのは温泉地で保養活動することだったのか？」
皮肉混じりに軽く問い詰めると、迫間はこれ以上ないくらい面倒そうに後頭部をガリガリと掻いた。どうでもいいが、コートの下が黒のトランクス水着一丁というのはスパ内だろうと変質者にしか見えん。
「保養活動ねぇ……面倒臭いからそれでいいや」
「よくないっ！」
バチィン！！　と迫間の背中から景気のよい音が鳴り響いた。背後から強烈な平手打ちを食らった迫間は弓反になって奇声を上げている。……アレは痛そうだ。
「る、瑠美奈、いちいち引っ叩くなよ。痛いじゃねえか」
「漣がテキトーなのが悪いんでしょ！」
迫間を張り倒したのは小柄で黒髪の少女――四条瑠美奈だ。迫間がいるならと思ったら案の定出てきやがった。ホント、光があれば影があるようにいつでもペアだな。この二人はどちらも影だけど。
四条は長く艶やかな黒髪を頭の上で団子状に纏めていた。どこぞのネズミのマスコットを彷彿とさせる髪型だな。それに迫間と同じくこんな場所でも黒コートを羽織っている。コートの下は無論水着で、お前ら色の趣味まで同じかよとツッコミたくなる黒いビキニだった。雪国の人ですかってくらい肌が白いから、そのコントラストが非情に目立つ。白黒テレビから抜け出してきたみたいだ。
いや、それにしても……

「なによ？　なに見てんのよ？」
俺の視線に気づいた四条がガンを飛ばしてくる。彼女の睥睨に気圧されたわけじゃないが、俺はついつい思ったことを口走ってしまった。
「四条、お前ってさ、意外と胸あるんだな」
「なッ！？」
背丈はリーゼとそう変わらないはずなのに、四条のそれはいっそアンバランスに思えるほど立派だった。まさかそんな言葉が返ってくるとは考えもしなかったのか、絶句した四条は自分自身を抱き締めるように腕をクロスさせて後じさる。心なし顔が赤い。
迫間がケラケラと笑う。
「だろ。こいつは隠れ巨乳なんだよ。ちっこいくせにな」
「だよなぁ。俺も前々から高校生とは思えんちっこさだと……」
迫間に釣られる形で本音を漏らしたことを、俺は言葉の途中で後悔した。

「ち、ちっこい言うな！　アンタら死刑よ死刑っ！！」

相貌を赤鬼へと変化させた四条に、俺と迫間はすぐそこにあった水風呂へ蹴り落された。つ、冷てえ！　準備もなしに突然冷水に叩き込まれた俺たちは慌てて這い上がろうとする。
が――
「誰が出てもいいって言った？」
額に青筋を浮かべ、引き攣った笑みでこちらを見下す四条瑠美奈さんが、両手に？影？の帯を構えて仁王立ちしていた。……勘弁してください。

簀巻きにされて水風呂に沈められた俺たちは危うく溺死するところだった。
「で？　なんでヘンタイ・ザ・白峰たちがここにいるのよ？」

猫のように大きく吊り上がった目に険を宿し、四条が床に伏す俺を睨んでくる。その質問は俺が先にしたはずなんだが。あとヘンタイ・ザ・白峰ってなんぞ？

「げほっ……旅行だよ。偶然、たまたま、ここへ来たんだ」

俺は少々むせ返りながらここにいる理由を掻い摘んで説明した。誘波の突発的な企画だと教えると、迫間と四条は妙に納得した表情になる。

「妙な偶然もあったものね」

「偶然だったらまだ面倒臭くはないんだがな」

水を吸ったコートを絞りながら迫間が意味深なことを呟いた。本当のところ、俺も迫間と同じ気分だ。また誘波に大事な部分を無意味に秘匿されているような気がしてならない。

「それはそうと、迫間先輩と四条先輩はデートなん？」

興味津々といった様子で稲葉レトが訊いた。ボーイッシュな顔にニヤニヤとした意地の悪い笑みが貼りついている。てかお前、いたんなら俺に代わって説明してくれてもよかったのに。

「で、デート！？　違うわよっ！　誰がこんな面倒臭がり屋なんかと！」

「そうだぜ稲葉。考えてもみろ、俺がそんな面倒臭いことすると思うか？　よりにもよってこんなちんちくりんとぐがはぁッ！？」

一言多い迫間は四条に向う脛――弁慶の泣き所を思いっ切り蹴られて蹲った。こいつらわざと夫婦漫才やってるんじゃないかと時々思う。

「ニヒヒ、そない照れんでええやん。先輩たちの仲はウチもよー知っとるで」

そりゃあ、学校でも公認のカップルみたいなもんだしな。本人たちは否定しているが。

「ほんならウチは邪魔んならんよう消えとくわ。せや、あそこで目ぇ回しとる部長も連れてかんとな。白峰先輩もほどほどにしときや」

「だから違うわよ！　――って、聞いてないし」

余計な空気を読んだ稲葉は、幸せそうに気絶している桜居を引きずりつつ駆け足で立ち去っていった。俺はなにをほどほどにすればいいんだ？

「デートじゃなければ、本当はなんなんだ？」

弁明くらい聞いてやろうかという気持ちで問うと、四条はなにやらムキになって振り返った。

「仕事よ！　言っとくけど、アンタたちみたいな保養目的じゃないんだからね！」

「仕事っつっても、影魔導師の方な」

迫間が微妙に捕捉説明する。それだけで俺は大体の事情を察した。異界監査局とは別に、影魔導師には影魔導師の組織があると聞いている。詳細は知らないが、俺たちとは関係のない仕事をこの二人は請け負っているのだろう。

なんだろうと、関係ないなら無理に関わる必要はない。昔から触らぬ神に祟りなしって言うだろ。

「そいつは御苦労様だな。んじゃ、俺はこれで」

踵を返して辞去しようとした俺の手首を、「待ちなさい」と四条が掴んできた。

「丁度いいから、アンタちょっと手伝いなさいよ」

「はい？」

思わぬ白刃の矢に、俺は目を点にして首だけ振り返った。え？なに？　俺ってもう神に触っちゃった感じ？

「おいおい、いいのかよ瑠美奈。白峰は影魔導師じゃねえんだぞ」

そうだ迫間言ってやれ。俺は影魔導師じゃなくて異界監査官、それも今は休暇中だ。

「大丈夫よ。〈封縅（スィール）〉の内部に入れなければいいし、やることは〈縫合（スティッチ）〉だけだから。それに師匠がどっか行っちゃったから誰かにやってもらわないと困るじゃない」

「師匠……ハハハ、あのクソ面倒臭えオヤジめ。俺たちを仕事に誘ったのは、俺たちに仕事投げつけて自分だけ遊ぶつもりだったんだ。

手伝ってくれたのは初日だけだったもんなぁ」
なんか迫間が死んだ魚のような目であらぬ虚空を見詰めている。
どうしたんだ？　師匠って誰だ？
「すまん、白峰！　今回だけでいい。簡単だから手伝ってくれ」
拝み倒すように両手を合わせて平身低頭する迫間。一体なにが彼をそこまでさせるのかと俺は少し狼狽する。そんなにされると突っ張れないじゃないか。
「手伝えって言われてもな。どうする、リーゼ？　あまり面白そうなことにはなりそうにな――あれ？」
振り向けど、そこに求める金髪赤眼の少女の姿はなかった。
「ああ、？魔帝？だっけ？　あの子とメイドならシビレを切らしたように回流の浴槽に飛び込んでたわよ」
静かだと思ったら、どうりで……。

二章　温泉と異変（7）

俺、迫間、四条は三人並んでスパの奥地を目指していた。
道の随所に案内板や全体マップがあるほど、この施設は広い。加えて視界を塞ぐように背の高い草木が生い茂っているもんだから、冗談抜きで迷子になりそうだ。少なくとも俺は迷ったやつを笑ったりはしないね。

《――からお越しの白峰零児ちゃん、温泉スライダーの前でお姉ちゃんが待っていますよ》

俺を勝手に迷子にしたやつは後で切り刻んでやるけれど。
「呼んでるわよ？」
「知らん。人違いだ」
今の放送のおかげで俄然戻る気が失せてきた。こうなったら影魔導師の仕事とやらにとことんまで付き合ってやる。
「つーか、今まで突っ込むの控えてたけど、お前らコート脱げよ。周りから変な目で見られるだろうが」
前の大きく開いたロングコートをマントみたいに羽織って、格好つけているつもりなのだろうか？　見てるこっちが恥ずかしいぞ。
「それができたら、最初から着てないわよ」
四条が露骨に嫌な顔をする。
「あん？　どういうことだ？」
「俺らも好きでこんな面倒臭いコートを羽織ってるわけじゃないってことだ」
と相変わらず億劫そうに、迫間。指摘すれば絶対に四条辺りからファンション自慢が飛んでくると踏んでいた俺は、予想外のシリアスな反応に少々戸惑った。
「えっと、カッコイイって思ってるんじゃないのか？」

「馬鹿言わないでよ！　寧ろダサいわよこんなの！」四条が犬歯を剥き出しにし、「別に隠す必要なんてないから教えてあげるわ。このコートはね、あたしたち影魔導師にとって命に関わる重要なアイテムなの」

『命に関わる』なんて重たい台詞に、俺はさらに混乱して迫間を見る。一日中寝て過ごしたいと訴えているような顔こそ普段通りだが、四条の言葉が嘘ではないと雰囲気が語っている。

四条が続ける。

「戦闘においては下手な鎧より頑丈な防具になるし、コートの内側にできる影は武器にもなる。でもそんなのは飾りで、コートの意味は光の影響を大幅に軽減してくれることにあるの」

「悪い、よく意味がわからんのだが？」

素直に言うと、四条の口からあからさまな舌打ちが聞こえた。やめてほしい。どこぞのメイド人形のせいで俺は舌打ちされるとけっこうイライラしちまうんだよ。今回は理解力のない俺が悪いから自制するけれど。

「アンタのマイクロ脳味噌でもわかるように言うとね」

その頭の団子刈り取ってくれようかこのチビ。……いかん、自制自制。

「あたしたち影魔導師は光に弱いの。コートなしで直射日光なんて浴びたら一秒で気絶、早ければ一分で死ぬわ。まあ、その辺の電灯くらいなら大したことはないんだけどね」

「……マジか」

初めて知ったその事実に、俺は先程の苛立ちなど吹っ飛んでいた。つまり迫間と四条は、コートなしでは日の下を歩けない体だってことだ。そのくらいの理解力は俺にだってある。

この二人は数年前に影魔導師になったと聞く。ということは、それ以前は普通の人間だったってことになる。

影魔導師の異能はどっかの異世界と関わることで発現する、みたいなことを前に話していたな。突然そんな体になったってことか？

だとしたら、悲しすぎるだろ。
「言っとくけど、同情なんてしたら殴るわよ」
「右に同じく」
俺の顔から感情を読み取ったようで、なにか言う前に二人に釘を刺されてしまった。どうやら俺はすぐに顔に出るタイプらしい。今度から気をつけなければ……。
強いな、俺はそれだけ思うことにした。

そうこうしているうちに、俺たちは関係者以外立ち入り禁止の表示テープが張られている場所へ辿りついた。
「この先よ」
四条が淡々と告げる。
俺たちは周辺に人がいないことを確認し、テープを飛び越えて立ち入り禁止区域内に侵入する。いいのかよ、と思ったが、俺はともかく迫間と四条は『関係者』なのだろう。
本来ならこの先もジャングル風呂が続いていたはずだ。木々の隙間から隠れ湯的な浴槽がちらほら見つかるけど、そこに水は溜まっていない。だが、手入れの滞り具合から判断して立ち入り禁止になったのは最近のようだ。
空はとっくに淡黒い。たぶんもうコートを取ってもいいのだろうけれど、二人はそれをしようとしなかった。夜だからといって安心はできないのだ。不意に強烈な光を浴びることだってあるからな。
と、俺はどことなく違和感を覚えて周囲を見回す。
「……なんか、暗くないか？」
夜になったのだから当然だ、というのはわかっている。でも、それだけではどこか不自然だ。施設内の照明が消えているわけでもないのに、進むにつれて本物の樹海のような薄ら寒い暗闇が広がってくる。
「アレのせいよ」
すっと四条が指し示したものを見て、俺は驚愕に目を瞠った。

「なんだアレは!?」

擂鉢状の岩風呂を中心に、施設の一部がまるで大量のペンキをぶっかけたかのように真っ黒に染まっていたのだ。

岩風呂の浴槽はヘドロのようなものが溜まっており、真上の空間は陽炎みたいに歪んでいる。

それは『次元の門』と酷似しているが、決定的に違うところは、歪みの中央に楕円形の?穴?が穿たれていることだ。?穴?の奥はドロドロの闇が蠢いており、こちら側へと少しずつ流れ込んできていた。

が、闇は広がる様子を見せない。岩風呂の周囲には幾本もの杭が打たれ、鎖で円形に囲われている。杭と鎖は四条が使う帯と同様に?影?で作られているようで、どうやらそれが闇の浸水を食い止めているらしい。

異常だ。俺はこんな『次元の門』を見たことがない。

いや、そもそも、これは『次元の門』なのか?

「『混沌(ケイオス・ダーク)の闇』。俺たち影魔導師は、この異界をそう呼んでる」

闇の吹き溜まりを眺めながら、迫間が呟くようにそう言った。俺は聞いたことすらない単語に眉を曇らす。

「けいお……なんだって?」

「『混沌の闇』よ。一回聞いたら覚えなさい。どんだけ脳味噌の容量少ないのよ。それとも耳が遠いのかしら?」

聞き返した俺に四条が侮蔑の眼差しを向けてきた。全く持って可愛げがないな、このチビ。

「待て待て、こんなところで喧嘩売るなよ面倒臭え。瑠美奈、お前が白峰に手伝い頼んだんだろ。ちゃんと説明してやれよ」

「拝み倒す感じに頭下げたのは漣じゃなかったかしら?」

言い返されて、ぐっ、と黙り込む迫間。「まあいいわ」と四条は小さく息をつくと、くりっとした黒真珠のような双眸で俺を見上げてくる。

「いい?　二度は言わないからしっかり頭に入れなさい。『混沌の

闇』は普通の異世界じゃないわ。異世界って普通は別の次元に在るけど、アレは同じ次元の別の空間に存在している異界。例えるなら？世界の影？ね。あたしたちは？裏世（りせ）？なんて呼ぶこともあるけど」

話を聞いた俺は慄かざるを得なかった。この世界の裏側にはあんなおぞましいものがあるってのか？

「そしてなんでか知らないけど、『混沌の闇』は表側――つまりあたしたちの世界を侵蝕しようとするの。？穴？の周りが真っ黒になってるでしょ。アレが侵蝕された状態で、放っておいたら闇に呑み込まれて消滅するわ。だからそうなる前に、あたしたちがあの？穴？を塞がなくちゃいけないの」

「それがこれから行う影魔導師の仕事ってわけか」

納得した調子で俺が言うと、四条は満足げに「そうよ」と頷いた。要はあの異世界を放置していたら、まずこのスパリゾートから喰われるってことだ。ここには大勢の一般人がいるから、早くなんとかしないと大変なことになる。

最初は関わりたくなかったが、どうやらそんなことを言える状況じゃないみたいだ。

「で、俺はなにを手伝えばいいんだ？」

俺は影魔導師じゃないが、異界監査官だ。異世界絡みでこれほどの危険を知ってしまったからには、おいそれと退くわけにはいかねえだろ。

迫間が頭を下げてまで頼んだんだ。きっと、俺の役割は異界の侵蝕を防ぐ上で相当に重要なポジションなんだろうね。やる気出てくるじゃねえか。

「アンタには見張りをやってもらうわ」

「ああ、任せろ……って、はい？」

今、四条はなんて言った？　聞き間違いじゃなければ物凄く微妙な仕事に聞こえたが……。

「時々いるのよね。探検気分で立ち入り禁止を越えてくる馬鹿とか、人気のないところでイチャイチャしようとするカップルとか。そう

いうのを、アンタに追い払ってもらいたいのよ」
「師匠がいれば、人払いの結界を張ってくれるんだけどな。面倒臭えだろうけど、頼むぜ白峰」
迫間にポンと肩を叩かれる。
「え？　なに？　本当にそれだけかよ？」
「それだけってなによ？　見張りは重要よ？　昨日なんてチャラチャラした不良があたしたちをカップルと間違えて絡んできて、危うく？穴？に呑まれそうになったんだから」
いやお前らもうカップルでいいんじゃないか？　とは口が裂けても言えなかった。
「昨日ってことは、？穴？を閉じる作業は何日もかかるもんなのか？」
空間修復なのだから、難しそうではあるけれど。
「作業自体はすぐ終わるわ。だけど、最近このスパ内で頻繁に？穴？が開いてるのよ。こんなこと今までなかったわ。異変としか思えない」
四条の口調と表情は深刻な色を孕んでいた。彼女の横顔を見てどれほどのイレギュラーが発生しているのか、俺はなんとなく察した。恐らく、リーゼをこの世界に連れてきた時と同等かそれ以上の異変だ。
数歩前に出た四条が首だけ動かして俺に振り返る。
「？穴？を〈縫合〉する前にアンタに忠告するけど、あの杭の中には絶対に入らないこと。いいわね？　アレは？影？の侵蝕を抑制する〈封緘〉って術式なの」
「入ったら、どうなるんだ？」
「一生この面倒臭えコートを着ることになるぜ」
「そりゃ大変だ」
皮肉っぽく自分のコートをピラピラする迫間に、俺は苦微笑を返して一歩下がった。好奇心猫をも殺すと言うが、これに関しては聞いといてよかったな。なにも知らなければ俺はあそこへ入っていた

かもしれん。
　迫間と四条が鎖を跨ぎ、杭の内部――闇溜りの岩風呂へと降り立つ。俺は遠目に二人を眺めつつ、侵入してくるアホがいないか気を配る。
「始めるわよ。いつも通りあたしが〈縫合〉するから、漣は侵蝕の払拭をお願い」
「了解っと」
　目配せをする影魔導師の二人。そこには何者にも割り込めない強い信頼関係がある気がした。なんかあいつらを見ていると俺も昔を思い出すなぁ……おっと、見張りに集中しねえと。
　四条は？穴？に向かって右手を伸ばし、迫間は両手を大きく広げる姿勢を取った。
　と、その時――

――ふふふっ。

　何者かの、嘲笑するような声が微かに俺の耳へ響いた。
「誰だ？」
　幻聴……ではない。そう思えるほどに小さな笑い声だったが、確かに聞こえた。
　早速どっかのアホが立ち入り禁止を越えてきたのかと考える。しかし、見渡せど誰もいない。その辺の樹木に隠れている可能性もあるが、少なくともこの近くに俺たち以外の気配は感じない。
　やっぱり気のせいか？　俺がそう思い直そうとした次の瞬間――
「な、なによこれっ！？」
　背後から、四条の悲鳴が聞こえた。
　即座に振り返る。
「なっ、嘘だろ？」
　俺は自分の目を疑いたくなった。背後にあった『混沌の闇』への？穴？が、謎の声に気を取られている隙に四つに増えていたのだ。

しかもそれだけではない。四つのうち後から開いたと思われる三つの？穴？を押し広げ、三体の異形が現れる。

それは幼稚園児が粘土細工でクマを作って失敗したような、酷く不細工な四足獣だった。

「異獣か！」

俺はすかさず右手に魔力を集め、武器を生成する――。

二章　温泉と異変（7）（後書き）

なんか今回説明ばっかりだなぁ。読みにくくなってないだろうか？

そして微妙な終わりになってる気がしますが、長くなったので二つに切ったと思ってください。

というわけでQ&A行きます。

Q：レランジェや誘波は心が読めるの？

A：表情から心情を読んでます。

Q：俺は思うんだが、もしこの作品が世に広く知れ渡ったら、RPGでその辺に出てくるスライム系雑魚モンスターが中ボス……いやラスボスぐらい強くなってしまうのでは！？

A：ないない。そんなことするゲーム制作者はアホですね。

二章　温泉と異変（8）

〈魔武具生成〉――日本刀。

普段なら殺傷力の低い棍棒系統を真っ先に生成する俺だが、あの異形を見た瞬間にそんな生温い考えは破棄した。

過去に様々な異獣を見てきたが、アレはなにかが違う。生命の息吹を感じないというか、とにかく倒さなければならないという恐怖にも似た感情が体中に駆け巡ったからだ。

「アンタは来ないで！」

加勢しようとした俺に四条が叫ぶ。その理由はすぐにわかった。開いた三つの？穴？から例の闇が徐々に広がってきている。あの闇に触れてしまうと俺まで影魔導師の仲間入りだ。流石にそれはちょっと遠慮させてもらいたい。

「漣！　早く〈封緘（スィール）〉を！」

「わかってるよ、瑠美奈。師匠ほどうまくできねえから期待はすんなよ」

言いながら迫間は左右の手で中空から？影？を掬った。半液体状に見えるそれを、両手の中で魔力を込める感じに練り、捏ねる。

ダメだ。隙が多い。そこを異獣たちは待ってはくれない。

ヴォオオオオオッ！

思わず竦み上がってしまいそうな咆哮を上げ、異形の四足獣は三方向から迫間へと殺到する。

前足の鋭い鉤爪、裂けた大口に並ぶ極太い牙、クマほどの巨体による突進、どれを食らっても常人なら即死は免れないぞ。

しかし、異獣たちは迫間に触れることもできなかった。

「ちょっと大人しくしてもらうわよ」

四条が？影？の帯で異形たちの動きを封じたからだ。俺ですら目で追うのがやっとの早業だったな。？影？の帯で雁字搦めにされた

異獣たちは、どうにかして振り解こうともがき暴れている。
「くっ、漣、あたしの〈束縛（チェイン）〉でも三体だとそんなに持たないわよ」
苦悶の表情を浮かべる四条。助けに行きたいが、残念ながら俺はあの戦場には入れない。
本当に俺は見てるだけしかできないのか？　なにかやれることがあるんじゃないのか？　こんな時に銃のような遠距離系の武具を生成できればいいんだが……くそっ、なんて歯痒いんだ。
「よし、術式が組めたぞ！」
迫間が？影？を纏った右手を天に翳す。
瞬間、迫間の集めた？影？が三百六十度四方に爆散して展開される。それは空中で杭と鎖の形を成すと、地面に深々と突き刺さって？影？の侵蝕を防ぐバリケードとなる。
「あ、危ねえ」
すぐそこまで侵蝕が近づいていたことに気づき、俺は肝を冷やした。迫間の術式があと数秒遅かったら、俺は文字通り日影者になっていただろうね。
と、目の前に霧状の闇が噴き上がる。
迫間が四条を抱えて転移してきたのだ。敵の方を見やると、クマ似の異獣たちは〈束縛〉とかいう？影？の帯を鉤爪で引き裂きながら威嚇するように睨み唸っている。
「白峰、お前、面倒臭いからもう少し離れてろ」
敵から決して目を離そうとしない迫間に注意された。口では面倒臭いとか言ってるけど、こいつは俺が初めて見る真剣な表情をしてやがる。マジだ。
「なあ、俺にできることはないのか？」
「ないわ。アンタは見張りを続けてなさい」
お団子頭の四条にきっぱりと切り捨てられた。……なんだよ、影魔導師の世界では俺は守られるだけの一般人ってわけなのかよ。まあ、考えなくてもそうだとはわかるさ。入ることのできないフィールド内の戦闘に、近接武具でしか戦えない俺になにができる。せい

ぜい、二人の無事と勝利を祈ることくらいだろうね。

――ああ、納得いかねえな！

チャ、と俺は日本刀を中段に構える。

日影者？

ハッ、上等だ。

「やめろよ、白峰」

一歩踏み出そうとした俺は、迫間に手で制された。

「もし〈封緘〉内に入ろうとしたら、俺はお前をぶん殴って止めるからな。頼むから、俺らの目の前で俺らと同じにはならないでくれ」

「……」

一瞬、迫間の声が悲しげに聞こえたのは気のせいか？　いや、この二人は頑なに俺を闇に触れさせまいとしていた。俺に見張りをやれと言ったのも、異界監査官や影魔導師の存在を知られたくないからというだけでなく、自分たちと同じ境遇の者を生み出さないためなんじゃないか？

二人の心情を悟った俺は、血の昇りかけた頭が一気に冷めちまった。……らしくなかったな。

「だが、相手は三体だぞ？　大丈夫か？」

「アンタってやっぱり馬鹿だわ」四条が嘆息し、「脳味噌も小さければ耳も飾り、あたしたちがピンチに見えるってことは目も節穴ね」

「なんだとコラ」

このチビはいちいち口が悪い。

「いいから、俺らを信じてお前はなにもするな。影魔導師の戦いってのを見せてやるよ。面倒だけどな」

こちらを一瞥して微笑した迫間は、地面に向かって手を突き出した。なにをする気だと怪訝に思っていると、完全に自由になった異獣の一体がその巨体からは想像できない跳躍で飛びかかってきた。

「来い――〈黒き滅剣（ニゲルカーシス）〉」

迫間が集中した声で唱えるように言う。すると、迫間の足下の？影？が不自然に隆起し、なにか縦長い物体がタケノコのように生えてきた。

迫間は右手でそいつを掴み、引き抜く。それはいつぞやに魔王ダンタリアンを一刀両断してみせた漆黒の両刃大剣だった。

後足で立ち上がったクマ似の異獣が鉤爪で迫間を引き裂かんと狙う。対する迫間は、剣尖から柄尻まで真っ黒なそれを掬い上げるように軽々と一閃。鉤爪の前足は清々しいくらいあっさりと切断され、クマ似の異獣は悶絶しながら後ろ向きに倒れ転がった。

異獣の切断面からは、血の代わりに？穴？から零れるものと同じドロドロの闇が流れている。下手に血を見るより気持ちが悪いぞ、アレ。

ヴォオオッ！

仲間がやられたのを見て、残りの二体も突撃してくる。怒ってる、って感じではないな。そういう感情は恐らくあの異獣にはない。

「瑠美奈！」

「任せて」

前に出た四条は開けたコートの内側に両手を突っ込んだ。そしてそこから？影？で構成されていると思われる黒いナイフを八本、指と指の間に挟んで取り出す。

好戦的に唇を歪め、黒コートをはためかして高々とジャンプした四条は、猛進してくるクマ似の異獣へ全てのナイフを同時に投擲した。なんて器用さだ。

一体につき四本のナイフが刺さり、さらにそのナイフからどういう仕組みなのか雷撃に似た黒いプラズマが迸った。

ヴルォオオオオオッ！？

絶叫し、もがき苦しみのた打ち回る異獣に勝ち誇った笑みを浮かべる四条。その背後、片前足を失った最初の異獣が彼女の小さな頭を噛み砕かんと迫る。

危ねえ！　と俺が叫ぶ前に、

「――存分に喰らえ」
クマ似の異獣は迫間の大剣で滅多切りにされた。俺も時折ヘビー級の武器を使うけど、一瞬であれほどの大剣を振り回す迫間の腕力と技術は驚嘆に値するな。
斬り刻まれた異獣は断末魔の叫びと共に闇の液体へと変化した。その液体は地面に落下することなく、迫間の大剣に吸い込まれる。
は？
なんだ、今の？
なにが起こったんだ？
「？影喰み？。それが漣の剣――〈黒き滅剣〉の能力よ」
四条が簡潔に説明する。
「かげはみ？」
頼むからもうこれ以上専門用語を出さないでくれ。わけがわからんなる。
「『混沌の闇』の？影？を吸収して力に変換することができるってこと」
「こんな風にな」
迫間が大上段に剣を構える。次の刹那、その剣身が何倍にも巨大化した。……いや違う。巨大化ではなく、オーラのように纏った？影？が刃の形を成しているみたいだ。
影纏う大剣を迫間はなんの躊躇いもなく振り下ろす。四条のナイフと黒雷撃に苦しむ異獣との距離は十メートルほど離れているが、？影？の刃は余裕で届く。たぶん魔王ダンタリアンもこの技で倒したのだろう。
しかし――
「ありゃ、外した」
距離が離れていると狙いも狂い易いようだ。？影？の刃は異獣たちの僅か脇を掠り、そこにあった複数の熱帯樹を纏めて薙ぎ倒した。
すると、異獣たちはナイフが刺さったまま身を返して逃走しやがった。もしかして、恐怖の感情はあったりするのか。

「なにやってんのよ漣！　追うわよ！」
「わかってるから手ぇ放せよ面倒臭え」
咄嗟に駆け出した四条に引っ張られる形で迫間も足を動かす。すぐに二人の姿は奥の闇へと消えていった。
一人残された俺は……さてどうしたもんか。
『いいから、俺らを信じてお前はなにもするな』
迫間の台詞が脳内にフラッシュバックされる。まさか他の異界監査官から『信じろ』なんて言われる日がくるとは思わなかったな。
「信じる、か。いい言葉だ。俺は好きだね」
俺はあいつらの実力を知っていたはずだ。あんな異獣なんかに後れを取るわけがない。『混沌の闇』なんていうやばいもんを見せられて、恥ずかしいことに俺はそんなこともわからないくらい混乱していたのだろう。
「ん？」
その時、後方から人の気配。話し声が聞こえる。
見れば、立ち入り禁止の表示を越えてきたらしい若い男女が肌を寄せ合うように歩いていた。四条の言う通りだな。本当にアホがいたよ。
任されたからには、俺は俺の仕事をきちんとやらないとな。後で四条に殴られる。
適当に関係者を装って、適当に毒蛇が出るとか理由付けしてお引き取り願おう。そう考えてバカップルの下へ駆け寄ろうとした俺の視界に、そいつは映った。
「――なっ！？」
迫間たちが追っていった異獣の一体が戻ってきていた。しかもカップルへ向かって突進してやがる。俺はてっきり、あの異獣は〈封縅〉とかいう術式の外には出られないと思っていた。どうやらその認識は間違っていたらしい。
迷いなく俺は地面を蹴ったね。杭の外だったら俺は存分に暴れられる。生成した日本刀を消してなくてよかった。

異獣が立てる重たい足音にカップルも気づいたようだ。そして茂みの中から飛び出した異形にこの世の終わりを見たような顔で悲鳴を上げる。

クマ似の異獣が岩をも抉り取りそうな鉤爪を振るい――

――ガキィン！　と金属音を響かせ、間一髪で俺が日本刀で受け止めた。

「ぐ……」

凄まじい衝撃に吹っ飛びそうになるが、俺は歯を食い縛って堪える。

「あんたら早く逃げろっ！」

俺の叫びで正気づいたカップルは、転びそうになりながらも一目散に逃げ出した。「クマだぁーっ!?」とか喚いていたから、こいつが異世界の生物だとは気づいていないみたいだな。

鉤爪を弾き、俺はバックステップで距離を取る。改めて見ると本当におぞましい異形だ。全身真っ黒けの体は溶けかけの粘土のようで、唯一目だけが赤く爛々と輝いている。

異獣は飛びかかるタイミングを計っているのか、じりじりと距離と詰めてくる。右前足の付け根と額、それから胴体に四条のナイフが突き刺ささっていたが、雷撃は収まっている。

ヴォオオオオオオオオオオオオオッ!!

咆哮し、猛然と四足で大地を叩いて襲来する異獣。その鉤爪の一撃を、俺は体を横に一歩分ずらしてかわす。大振りをスカしてよろめく巨体、そこに日本刀の刃を袈裟斬に叩き込む。

半液体状の闇が血の代わりに噴き出す。少し返り血――もとい返り闇を浴びてしまったのですぐに払い落す。大丈夫とは思うが、あまり触れない方がいい気がするからな。

異獣はまだ死んでいない。流石に致命傷は与えられなかった。

圧し掛かる勢いのクマパンチが飛んでくる。俺は横っ跳びで避け、

背後に回り込む。クマパンチを受けた極太の熱帯樹がメキメキと音を立てて倒れる。

俺は異獣の背中を蹴って高く跳躍する。日本刀を逆さに持ち直し、重力の力も上乗せして思いっ切り異獣の頭部を刺し貫いてやった。

ヴグォオオオオオオオオオオオオッ!?

絶叫。

異獣が激しく暴れたことで俺は振り落とされる。日本刀は俺の手から離れたために魔力が分散して消失してしまった。

ドロッ。

異獣の巨体が液状化したかと思えば、すぐに夜闇に溶けて消え去った。どうやら倒したみたいだ。

ほっと息をつき、俺は念のため周囲を見回す。残りの一体はこちらには来ていない。となると、後は放っておいても迫間と四条が倒してしまうだろう。

あとはあいつらが戻ってきて?穴?の修復作業を行えば万事解決だな。

でもその前に――

「で?　てめえは誰だ?」

俺は再び日本刀を生成し、背後を振り向きざまに一閃する。そこにあったカジュマルの樹に斜めの線が入り、居合の達人がダイコンを切ったように綺麗にスライドして倒れた。

樹の裏側だった場所から人影が忍者みたいな動きで飛び退く。俺は警戒心のレベルを跳ね上げ、別の熱帯樹に凭れかかったそいつに刀の切っ先を突きつける。

「気配を消すのがうまいようだが、あの異獣を倒した瞬間に微かに驚きが漏れていたぞ」

と言う俺に対し、

「ふふっ。意外と鼻が利くのね、監査局のわんこさんは」

高校の制服と思われるセーラー服を身につけた少女が、不敵に笑っていた。

二章　温泉と異変（8）（後書き）

Q：温泉スライダーのところにいるお姉さんは誘波ですか？

A：他に誰が？　レランジェ？　いやありえん……。

二章　温泉と異変（9）

「もう一度訊くぞ。てめえは誰だ？」
俺は声のトーンを落として凄み、睨めつける視線の鋭さを割増して問いかける。
「それってさ、答えないと私、どうされちゃうのかなぁ？」
日本刀の刃を向けられているにも関わらず、熱帯樹に凭れかかった少女は俺を舐め切った口調で返してきた。サラサラの長髪にオレンジ色のヘアバンド、初夏だというのに着ているセーラー服は冬服、色は濃紺――かと思ったが、アレは黒だな。
対称的に肌は嘘みたいに色白で、パッチリとした大きな双眸が整った輪郭の中に収まっている。カモシカのようにスラリとした綺麗で長い両足が丈の短いスカートから覗き、背は女子高生にしては高い方だと思う。
一言で表すなら……まあ、美人だよな。
こんな場所でなければ、ついつい見惚れてしまいそうなほどの。
「その場合は拘束して監査局に連行だな」
どう考えてもこの女は一般客ではない。迷い込んできた一般客なら水着姿のはずだ。先程見せた身のこなしも地球人離れしているし、『監査局』という単語を俺が言う前に口にしている。
それに、こいつの声はあの異獣が現れる直前に聞こえた嘲笑と同じだ。
警戒しなければならない要素は充分すぎるほど揃ってんだよ。
黒セーラー服の女は腕を組むと、表情を愉楽に歪めて嗤う。
「ふふふっ。拘束はやだなぁ。だけど、あなたに私を捕まえられるのかしら？」
「やってみればわかるさ」
相手に名乗る気がないことを悟った俺は足のバネを全開にして跳躍、女までの数メートルを一鼓動で縮める。

あらかじめ峰に構えていた日本刀で左から右に一閃。胴を打って昏倒させるつもりだったが、それは空気を薙ぐだけで終わる。

「こっちこっち」

俺の一撃を右に飛んで避け、撹乱するように熱帯樹の間隙を疾駆する黒セーラー服の女。『鬼さんこちら』とでも言うように手招きなんかをするそいつに、俺は少々ムカッときたね。

追いかけながら俺は女の進路を予測し、手近にあった背の高い熱帯樹を斬り倒すことでその足を数瞬だけ止める。

数瞬あれば充分だ。俺は進路を塞がれた女に切迫し、周囲の状況を見て逃げ道のない軌道で再び胴を狙う。しかし女は、ふふふっ、と嗤いながら体操選手のように軽やかに飛んで俺の頭上を越えやがった。

背後を取られた！　俺はすぐさま体を捻って遠心力を乗せた刃を振るう。

だが――

キィン！！

なにか硬い物で防がれた。

見ると、女は右手に握った真っ黒い刀で俺の日本刀を受け止めていた。あの黒い刀、四条が？影？で作ったナイフにそっくりだ。

「てめえも影魔導師か」

「ふふふっ、正解。ついでにもう一つだけはっきりしとくとね、私はあなたたちの敵よ」

キン！　影刀で俺の日本刀が上向きに弾かれる。瞬間、女は左手に？影？を集めて二本目の影刀を生成した。

――やばい！

左手の影刀が俺の腹を突く――その直前、俺はかろうじて身を捩って串刺しを避けた。横腹が浅く斬られ、痛撃が駆け巡り、血が流れる。

「そんな防具を全部剥いだ格好なんてしてると、死んじゃうよ？」

右影刀の袈裟斬。俺は体を反らして回避する。

女は即座に影刀を反し、逆袈裟斬に振るってきた。それを日本刀で捌く。

間髪いれず左影刀の刺突が来る。が、左手を刃に添えるようにして外させる。

一瞬の隙が女に生じる。無論、俺は逃さない。日本刀を握る手に力を込め、横薙ぎに振るう。今度は峰打ちじゃないぞ。影魔導師とわかった以上、恐らくあのセーラー服は迫間たちのコートと同じ鎧だろうからな。

「ふふっ」

女は後ろに飛んで俺の刃をかわした。だがそいつは想定内だ。俺は日本刀を捨て、改めて右手に魔力を集中させる。

〈魔武具生成〉――オウル・パイク。

直訳すると？突き錐槍？と呼ばれる、極めて長い四角錐の穂先を備えた槍だ。高い貫通力を持ち、金属鎧を纏った相手にも隙間からの攻撃で効果を発揮する。その全長は三メートル強。生成と同時に槍の切っ先は女の喉元を捉えていた。

「ひゅー♪　やっぱり武器を作り出す力って影魔導師（わたしたち）の〈構築（ビルド）〉に似てるわね」

影刀を手離し、諸手を挙げる女。でもその口笛なんて吹いている余裕は癪に障るな。状況わかってんのか？

「さて、今度こそ答えてもらうぞ。てめえは何者だ？」

「ふふっ、問い詰められる状況だと思ってるの？」

女が三歩下がる。

「待て、逃げる気――！？」

追おうとして俺はそれに気づいた。俺があと一歩でも前進すればそこは杭の中――つまり侵蝕する闇に触れないギリギリのラインに立っていたのだ。

俺はここから進めない。しかし、影魔導師である女は自由に行動できる。

迫間と四条が戻ってくる気配はないとなると……詰んだな。俺は

あいつを追えない。畜生、状況がわかってないのは俺の方だったってわけか。

「生憎と私はまだやることがあるの。だから監査局のわんこさんに構ってる暇はないの」

女は人差し指と中指だけ立てた右手でシュッと空を切る。すると彼女の周囲の空間がぐにゃりと歪み、パックリと縦一メートルほどの楕円形の？穴？が三つ開いた。……嘘だろ？　こいつ、人為的に異世界の門を開けることができるのか？

「ふふふっ。あなたの相手は私の可愛いペットたちがしてあげるわ」

艶めかしく髪を擦りながら女が言うと、三つの？穴？から先程と同じクマ似の異獣が姿を現した。

「まさか、異獣を手懐けてんのかよ」

「異獣じゃないわ。この子たちは影霊（レイス）。『混沌の闇』を漂う思念の塊よ。まあ、監査局にとっては同じことなんでしょうね」

だから新しい専門用語を出さないでくれ。影霊だかなんだか知らんが、俺はもう異獣で通すぞ。『混沌の闇』がこの次元の別空間にある世界だとしても、異世界は異世界だ。だからそこから現れる獣を異獣と呼んでも問題ないだろ。

問題があるのは、アレを俺が三体同時に相手できるかどうかだ。三体とは微妙な数字だな。なんとかできそうで、できないかもしれない。

「それじゃあみんな、後はよろしくね」

窮屈な？穴？から出て来ようとしている異獣を女は愛おしそうに見詰め――

その異獣たちが、四発の銃声と共に？穴？の奥へと押し返された。

「「――ッ！？」」

続いて？影？の糸みたいな物体が地面を這い、空間に穿たれている合計七つの？穴？を一辺に縫い合わせる。

「あらら、もう追いついてきたんだ」
意外そうに女が呟いた。どうやら四発の内一発が当たったらしく、左の太股を抑えて引き攣った笑みを浮かべている。
「あのおじさんと戦って勝てないわけじゃないけど、こっちも無事じゃ済まないかな。ふふっ、退散退散と」
「ま、待て！」
と俺が叫んでいる間に女は闇を纏い、消えた。影魔導師の転移術だ。何度見ても便利すぎるな、アレ。
俺は悔しげに奥歯を噛み、黒セーラー服の女がいた虚空を見詰める。と――
「チッ、逃げ足の速えガキだぜ」
何者かがガサガサっと茂みから飛び出してきた。そいつは鍔広の帽子とマントみたいなコートを羽織った黒ずくめの男だった。見た感じ三十代くらいか。手に持っている銀色の拳銃はＳ＆ａｍｐ;ＷＭ３６――アメリカ製の警察用回転式拳銃とよく似ている。俺は遠距離武器に関しては専門外だから、詳しいことはわからねえけどな。
「おい監査局のガキ！　てめえがもっとうまく引きつけておかねえからだろうが」
「なっ！？」
いきなりなんなんだこの男は。怪しすぎる。敵か？　……いや、あの暑苦しいコートには非常に見覚えがあるぞ。
「つーか、俺の馬鹿弟子どもはいつまで影霊との鬼ごっこに夢中になってやがんだ。師匠に後始末させてんじゃねえよ」
どうもイライラしている様子の男にとって、もはや俺は眼中にないらしい。適当に周囲を見回して舌打ちすると、杭の内部――『混沌の闇』の侵蝕を受けている場所へなんの躊躇もなくズカズカと踏み込んでいく。やっぱりこいつも影魔導師か。
黒帽子の男は銃を握っていない左手を天に翳す。と、周囲の不自然な闇がまるで超重力に引き寄せられるように剥がれ、一瞬にして

男の掌上に収斂された。
　ソフトボールくらいの大きさまで凝縮された闇を、ぐっ、と男は豆腐かなにかのように楽々と握り潰す。それからコートの内に拳銃を仕舞い、仕事終わりに一服、とでも言うように取り出した煙草にライターで火をつける。
　俺は呆然とするしかなかった。？影？に侵蝕されなにもかもが真っ黒に染められていた箇所は、元通りのスパの姿を取り戻している。
　どゆこと？　一体なにが起こったんだ？　誰か説め……あーいや待て、説明しなくていい。ここで突っ込むとまた謎の専門用語が飛び交いそうな気がする。
　とその時、一陣の風が舞った。
「あらあら、レイちゃんってば私のルートフラグを圧し折ったかと思えば、こんなところで遊んでいたのですねぇ」
「「誘波っ！？」」
　おや？　俺と男の声がハモったぞ。風を纏って現れた緩いウェーブヘアーの少女を見る男は、これ以上ないってくらい嫌そうな表情をしている。たぶん、今の俺も似たような顔なんだろうね。
「あはっ♪　お久し振りですねぇ、クロちゃん」
　誘波は男の姿を認めると、パッとその笑顔の照度レベルを一段階上げた。なんだなんだ？　お前ら知り合いなのか？
「……」
　クロちゃんと呼ばれた男はむず痒そうに煙草を燻らし、決して誘波に視線を合わせようとしない。――やばい。俺はあの男とオトモダチになれそうな気がするぜ。
「白峰！　今こっちから銃声がしたけど大丈……面倒臭え」
「アンタ、まさか〈封緘〉内に入ってないでしょうね！　うげっ、師匠に、誘波までいるし……」
　今更になって戻ってきた迫間漣と四条瑠美奈は、それぞれがこの状況を見てまた微妙な表情をするのだった。

二章　温泉と異変（9）（後書き）

やっと二章終わりました。次回から三章です。しばらくヒロインたちが出てなくてごめんなさいｍ（＿　＿）ｍ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

Q：影魔導師は日光を浴びないから肌が白いんですか？

A：はい、そうです。なにげに迫間漣や師匠も色白なんです。コート着てれば全く浴びないってわけでもないですけどね。

Q：漣と瑠美奈はもうカップルでよくね？

A：そうね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

三章　過去への執着（1）

何事にも『程度』ってもんがある。

例えば運動はやりすぎると体に悪いし、選挙カーでの演説は騒音になるほど続けると法を無視することになる。人類の自然破壊だっていい加減にしないと地球的に大問題だ。

そんなわけで、旅館の五階と六階を貸し切るところまではいい。この金持ちめ！　ってだけで終わる。

だがな、突然この広大なジャングルスパを買い取って一般客を追い出すなんて行為は金持ちの『程度』を逸脱していると思うわけだ。そんな無茶苦茶をやらかした張本人は後で返すとほざいていたが、追い出された客から苦情が殺到したらどうする？　俺は知らんぞ。

まあ、それが一般人の安全に繋がるのだから文句はないけど。

で、俺たちはスパ内に設けられた自販機や足湯のある簡易休憩所に集合をかけられていた。いちいち水着に着替えないといけないから、旅館の方にいたやつらにとっては学校の移動教室よりも面倒だろう。ちなみに局員じゃない桜居はいない。どこにいるのか想像してみると……適当な場所に放置されて幸せな夢を見ている姿が浮かんでくるな。

「零児!?　どうしたんだその傷は!?」

と、俺の横腹の傷を見るやいなや、セレスが銀髪ポニテを振り乱して駆け寄ってきた。どことなく慌てた調子だ。

俺は腹の傷の辺りを優しく擦り、

「大したことねえよ。もう血も止まってるし。心配しなくていいさ」

「べ、別に心配したわけではない。だが、きちんと手当しておかないと化膿するかもしれないぞ」

セレスはどこか安心したような様子で俺から視線を反らした。どうやら着替えたらしく、件の際どいマイクロビキニじゃなくて布面積の多い地味なレンタルビキニになっているところが残念な……

…俺の心を読んだエスパーよ、今の戯言は聞かなかったことにしてくれ。

「あらあら、レイちゃんがさっきのセレスちゃんの水着姿を妄想してニヤニヤしてますぅ」

聞かなかったことにしてくれっ！　そんなに顔に出てたのかよ俺！

「な、な、わ、わ」

コンマ二秒で全身を真っ赤に染めたセレスが、バシャッと風呂桶で足湯のお湯を掬い取って俺にぶっかけてきた。消防車かお前は。

「レージ！」

「ごふっ！？」

唐突に背後からドロップキックをくらった俺は顔面から足湯に突っ込んだ。起き上がろうとしたところを小さな足の裏で踏みのめされる。このミニレッグはリーゼだな。てか息が、息がし辛い。あとお湯が傷に染みるんですけど。

「レージ！　この？魔帝？で最強のわたしに内緒でまた楽しいことやってたんでしょ！　なんでわたしも誘ってくれなかったのよ！」

「痛い！？　痛いから俺の上で地団太踏まないでもらえますかお嬢様！？　楽しいことなんてなにもなかったからっ！！」

「そうです、マスター。ゴミ虫様が苦しんでいます。もっと踏み抜くと安定です」

「止めろぉおッ！？」

絶叫虚しく、リーゼは猛り狂った獣のごとく気が済むまで俺の背中で暴れまくった。背骨が折れそうだ。そしてあの暴言メイド人形はいつか海底に沈めてやる。

「悪ぃな、俺たちが白峰を連れ回しちまって」

迫間が済まなさそうに後頭部を掻く。こいつはよく頭を掻いてるけど、癖なのか。

「ちょっと漣、謝る必要なんてどこにあったのよ」

「いやあるだろ」今の台詞は聞き捨てならなかったね。「そもそも俺に手伝えって最初に言ってきたのはお前だ、四条」

手伝った挙句、俺はヘンテコな異獣と戦う破目になり、変な影魔導師の女に横腹を斬られたんだぞ。ごめんの一言くらいあってもいいだろうが。

「そうだったわね。わかったわよ。じゃあ後で反省文を原稿用紙一文字分書いてアンタん家に送っとくわ」

「反省の色がこれっぽっちも見えない！？」

一文字って『謝』とでも書く気だろうか？　逆に気になる。

と――

「お前たちがわたしのレージを持ってったのね」

ご機嫌斜めなリーゼお嬢様が四条にメンチを切ってきた。迫間を睨まないのは、たぶん四条の方が身長的に大体同じだから目線を合わせやすいのだろう。

「『わたしのレージ』って……ロリコン？」

「なぜこっちを見る」

軽蔑の眼差しを俺に向ける四条。とりあえずハンマーでぶん殴ってやりたい衝動を俺は気合いで抑える。ムキになるってことは認めてるようなもんだからな。俺は至ってノーマルだ。

「ふん、レージを貸してあげるのはいいけど、一言わたしに断ってからにしてほし……」

腰に手をあてて偉そうにふんぞり返るリーゼだったが、なぜか言葉の途中で停止ボタンでも押されたように固まった。それから自分と四条の胸元を何度か交互に見やった後、両手で自分の控え目なバストをゆさゆさ。なにやってんだ、リーゼのやつ？

四条もリーゼの行動が理解できないのか、小首を傾げてお団子頭の上に『？』を浮かべている。

「……お前、何歳？」

より一層不機嫌そうにムッとしたリーゼが問う。四条はわけがわからないといった顔のまま「じゅ、十六だけど？」と答えた。まあ高二だしな。

するとリーゼはなにやらショックを受けたようで、「わたしだっ

てこれからよ！」と意味不明なことをヤケクソ気味に吐き捨てて駆け去った。ツーサイドアップに括った髪がぴょこぴょこ揺れていた。

「一体なんだってんだ？　変なやつ」

「リーゼちゃんも女の子ってことですよ」

誘波がレランジェに抱き留められるリーゼを面白可笑しそうに眺めつつコメントしてきた。

「こっちに来てその辺りの自覚が芽生えたのでしょう。特にルミちゃんは背丈が似たり寄ったりなので余計に意識するみたいですねぇ。喜ばしい成長だと思いませんか、レイちゃん？」

「悪い、なんのことかさっぱりわからん」

ルミちゃんなるものが四条のことだとはよくわかったけれど。

「もう、鈍感なのはマンガの主人公だけにしてほしいものですね。まあ、その話はまた後程ゆっくりするとして――」

誘波は軽く周囲を見回して監査局組が集まっていることを確認すると、隅っこのベンチに腰掛けて煙草を吸っている黒帽子の男へと歩み寄る。

「全員揃ったので本題に入りましょうか、クロちゃん」

クロちゃんと呼ばれてやたら嫌そうな顔をする男は、しばらく逡巡する様子を見せてからだるそうに立ち上がる。それにしても、こいつも骨みたいに色白だ。無精髭を生やした顔は痩せこけているわけじゃないが、あの帽子と相まってリーゼの世界で戦った魔法使いっぽい勇者（？）を彷彿とさせる。まあ、あんな小物とは放っている威厳が天地の差ほどもあるけどな。

男は帽子の下の眼光に大木をも斬れそうな鋭さを宿し、

「俺は鷹羽畔彰（たかばくろあき）だ。この脳味噌つむじ風女みたいに『クロちゃん』なんて呼びやがったクソは冗談抜きで死なすから気ぃつけろよ」

静まり返る場。誰もがその言葉を本気だと感じ取ったからだ。あの男――鷹羽畔彰を知る迫間と四条は苦笑しているようだが、皆が息を呑んで次に紡がれる言葉を待っている。

――鷹羽を苛立たせている本人以外は。

「脳味噌つむじ風とは酷いですねぇ、クロちゃん」

パァン！！

乾いた銃声が轟く。銀の拳銃を抜いた鷹羽が容赦なく誘波を射撃したのだ。い、いつ抜いたんだ？　全く目視できなかったぞ。

だが銃弾は誘波を貫通することなく、眉間のギリギリ手前で静止していた。風の防御壁はあれほど近距離から撃たれた銃弾にも対応できるのかよ。それからあの銃弾、真っ黒だ。もしかしなくとも？影？で作られているのだろう。薬莢も転がってないし。

忌々しげに舌打ちする鷹羽に、誘波は相変わらずおっとりニッコニコの笑顔を向けている。あの男でも誘波を殺れないのか……。

「いつまで経っても乱暴ですねぇ。ではでは、状況を理解してない人もいますので簡単にこのスパで起こった事件を説明しますね」

今しがた銃撃されたとは思えない涼しげな顔の誘波は、緊急招集されて困惑している監査局員たちに『お前どっかで見てたんじゃねえのか』って突っ込みたくなるほど詳細な説明を始めた。

影魔導師のことや『混沌（ケイオス）の闇（ダーク）』のこと、このスパ付近で毎日のように？穴？が開く異変、迫間と四条が監査局に所属しているだけに皆の呑み込みは早い。『混沌の闇』についても、一部の局員はそれなりに予備知識を持っていたようだ。

「――というわけでレイちゃんが見知らぬ女の子とイチャイチャしていたというお話です」

「違うよな！？　そんなピンク色の話じゃないよな！？　お前もっと場の空気読めよ風使いだろうが！？」

せっかくみんなシリアスな雰囲気で話聞いてたのに、この自覚あるムードブレイカーめ。ほら向こうでセレスとレランジェがケダモノを見るような目で俺を睨んでるじゃないか。やめてもらいたい。

「その小娘がここいら一帯に異変を起こしてやがる犯人だ」

崩れかけた場の空気を、鷹羽の苛立たしげな低い声が元に戻した。

「そして、そいつは俺が追ってるはぐれ影魔導師でもある」
はぐれ影魔導師？
組織に属していない影魔導師ってことでいいのだろうか？　それとも抜け忍よろしく組織のはみ出し者か？　どっちだろうと俺にとっては同じことだな。
「師匠」と迫間が億劫そうに挙手する。「俺たちはそんな話、全然聞いてなかったんですけど？　ただこの辺に頻繁に？穴？が開くから片っ端から閉じていけって言われただけで」
すると鷹羽はフンと鼻息を吹き、
「小娘一人をふん捕まえるのに馬鹿弟子の手なんざ借りねえよ。てめえらは雑用のためだけに呼んだんだ。他に期待することもねえ」
全くオブラートに包まず言い切った。悪びれる様子もなく紫煙を吐き出す鷹羽。ここは怒ってもいい場面なんじゃないか？　そう思って俺は迫間たちに視線をやる。二人はやっぱりかと言うように諦めた表情をしていた。察するに、どうやらこの男はいつもこうらしい。
逃げられたくせに、なんて言った日には脳天に風穴を開けられそうなんで黙っておく。
「あの小娘がなにをしてえのか知らねえが、『混沌の闇』の？穴？を開くことでここいらの空間や次元にでけえ？歪み？を与えてんだ。てめえらはそいつを感知してのこのこやってきたようだが、影魔導師でもないやつらなんぞ足手纏い以下だ。帰れ」
「そう言われて素直に帰るわけにはいきませんよ。この地域は私たちの管轄です。それに私のお気に入りの温泉地をめちゃくちゃにしようなんて子にはお仕置きが必要ですから」
「ほぼ私情じゃねえか。クソが。てめえらは邪魔だから帰れっつってんだ」
鷹羽には協力するという考えが微塵もないようだ。いやそれはなんとなくこの男の性格から想像はついていたが――
「おいコラ誘波、少なくとも俺はそういった話を米粒ほども聞かさ

れていなかったんだが？」
——このアホ波が情報を秘匿していた意図については全く持って掴めない。
「今日は仕事なんて忘れて皆さんには羽根を伸ばしてもらいたい、という局長からの心遣いがレイちゃんにはわかりませんか？」
わからない。休みと思っていたら実は仕事でした、と曝露された時の絶望感しかわからない。
ついでに言うと俺、ここに来て早々に迫間たちに絡まれて戦闘までやったんだぞ。どこで羽根を伸ばした？　アレか？　部屋に案内された後の寝っ転がった数分間だけか？　ありがたすぎて泣きそうだぜ。
「どうしても帰らねえってんなら仕方ねえ。勝手にしろ」
鷹羽は盛大に溜息をつき、何本目かの煙草に火をつけた。そしてその火のついた煙草を誘波へ突きつける。
「ただし、夜は動くなよ。『混沌の闇』は夜にしか開かねえが、その対処は影魔（おれら）導師の仕事だ。てめえらの誰かが間違って侵蝕されても俺ぁ面倒見ねえからな」
それだけ言い残すと、鷹羽はもう話すことなんてなにもないオーラを全身から放って踵を返した。迫間と四条が慌てて後を追っていく。
「あはっ。昔からなんだかんだで私たちを気遣っているんですよねぇ、クロちゃんは」
三人を見送りながら、誘波が嬉しそうに笑う。
「誘波殿は、その、あの者とどういった関係なのだ？」
セレスの疑問は、恐らくここに集った監査局組全員の疑問だろう。セレスが訊かなければ俺が訊いていた。
「クロちゃんは影魔導師連盟の幹部でして、その関係の腐れ縁とでも言えばいいのでしょうか。私はクロちゃんが幹部になる前、それはもう彼がこぉーんなに小さな頃から知っているのです。うふ、あの頃は可愛かったんですよぅ♪」

「自分の年齢が見た目を遥かに越えてることを思いっ切りバラしたぞ、今」

「なにか言いましたか、レイちゃん？」

口は災いの元。

その言葉の意味を、風の砲弾で絶賛ぶっ飛び中の俺は嫌と言うほど味わった。

三章　過去への執着（1）（後書き）

なんか帰ってきた感じが……。
コメディパートは筆が進みます♪

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝

Q：リーゼちゃんは”魔帝”ということですが、それはつまり何人もの魔王を従えているという背景があるということでしょうか？
ローマ帝国の皇帝とか秦の始皇帝的な。

A：そんな背景なんてこれっぽっちも考えてなΣ（゜∀´（「」、（・∀・）ノ
えっと、先代が従えていたって感じですね。今はもう謀反起こして返り討ちにあったとかでいませんが、?魔帝?という称号だけ継がれたのでしょうね。

Q：魔王のダンタリアンが出てきたとき、?魔帝?と聞けば何かしらの反応をするのでは？

A：ダンタリアンさんはまあ、聞こえなかったのでしょう。リーゼの炎弾を顔面に食らった直後にセレスがぼそっと言っただけですから。戦闘中に「?魔帝?で最強」とか言いそうですけど名乗ってはないんです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝

三章　過去への執着（2）

影魔導師には影魔導師をぶつければいいじゃないか。

というわけで夜の犯人捜索で俺たちにできることは正直言うと、ない。無闇にうろちょろして鷹羽に撃たれるのは嫌すぎるし、夜という時間帯は？影？を操る影魔導師にとって魔力が無限にあるのと同義だ。下手に接触すると俺たちの方が危険になる。

そもそも、犯人の顔を知ってるのは俺と鷹羽だけだ。監査局組は？歪み？の観測や簡単な調査を少数の局員たちが行うくらいしかやることはない。

たとえあったとしても、俺は今日はもう働かないからな。

「休むのは結構ですけど、なにかあったら真っ先に叩き起こしますよ、レイちゃん」

そんな誘波の天使と思わせといて悪魔な微笑みに見送られ、俺は旅館の部屋に戻った。

部屋には既に桜居がいたが、二三どうでもいい会話をしただけで俺は泥のように眠ってしまった。かなり密度が高かった上に緊張しっぱなしな一日だったからだろう。

そのまま何事もなく朝を迎えたことは、俺の不幸を流石に憐れんでくれた神様からの細やかなプレゼントだと信じよう。うん。

カーテンと窓を開けると、朝の日差しが部屋に差し込んでくる。

「う……」

部屋が暗かったからだろう、くらっと目眩がした。だがそれも数秒のことで、すぐに五階からの見渡しのいい景色が視界に飛び込んでくる。

見上げれば雲一つない澄み切った青空がどこまでも広がっていた。周囲が自然に囲まれているだけあって、都会なんかとは比べ物にならんくらい空気が美味い。一呼吸するだけで最近の疲労が浄化され

ていくような気分になる。あと十回はおかわりしておこう。
浴衣に着替え、爆睡していた桜居を蹴り起こし、朝食の場へ向かう。
二階にある殿様との謁見に使いそうな大広間が朝食の会場だった。何十畳もある畳の床に長机が整列し、芸術性を感じる色取り取りの和食が綺麗に並べられている。今思えば俺、昨日の昼からなにも食ってねえや。どうりで腹が減るわけだ。
――って、ほとんどのやつが勝手に食ってるじゃないか。いただきますくらい揃えようぜ。
「おはようございます、ゴミ虫様」
俺が監査局員たちの協調性のなさを憂いでいると、いつものゴスロリメイド服を着たレランジェが機械的な無感情で挨拶してきた。
「ああ、おはよう。いい加減その呼び名はマンネリ化して笑えないと思うぞ」
「そうですか。でしたら新しい呼び名を考える安定ですね」
「いや、普通に『零児』と呼んでくれ」
「ではレジ虫様で」
引出しを開ければ金が入ってそうな名前になった。こいつも誘波と同じで俺をまともに呼ぶ気がさらさらないからぶっ壊したい……。
……落ち着け俺、朝からヒステリーはみっともないぞ。
食事を必要としない魔工機械のレランジェは、「やはりゴミ虫様の方が安定します」などと俺のストレスメーターを刺激することを呟きながら、食器を下げる仲居さんの手伝いをし始めた。メイドの性ってやつなのか？
「白峰先輩、桜居先輩、こっちやこっち」
席を確保してくれていたらしい稲葉に手招きされ、俺と桜居は適当に腰を下ろす。桜居が稲葉の隣で、俺がその向かい側だ。
「あははは！　桜居先輩なんやそれ？　癖毛が寝癖でウニみたいになってはるやん！　めっちゃウケるわ」
「そういうレトちゃんだってなんでジャージなんだよ！　旅館って

言えば普通浴衣だろ！　部長として命じる。すぐに着替えてきなさいっ！」

「あー、アレ動きにくいねん」

ウニ頭を指してケラケラと笑う稲葉に、色気皆無なジャージにご立腹の桜居。お前らが仲好し小好しなのはわかったけど、どうして朝っぱらからそんなにテンション上げられるんだ？

と呆れていた俺の両脇に誰かが座った。

リーゼとセレスだ。

二人共旅館の浴衣姿をしている。右隣のリーゼはサイズが合う物がなかったのか、ぶかぶかで鬱陶しそうだな。逆にセレスは誰に習ったのかきっちりと着こなしており、開けた胸元からナイスな谷間が覗いている。なんというか、目のやり場に困るな。俺は料理に視線を移すことにした。

いや待て、なんか変だぞ。リーゼはともかく、セレスだったら座る前に俺に一言断ってきそうなもんだが――

「……」

「……」

う、なんだこの重っ苦しい空気は？　なぜ二人はさっきから無言で睨み合ってんだ？　お願いします俺を挟むな。

「お前ら、なに朝から険悪なオーラを全開にしてんだよ」

これはもう訊かざるを得ないだろう。中間にいる俺が。どうにかして幾分か空気を穏やかにしないとせっかくのメシが不味くなる。

「聞いてくれ零児！　私はこの？魔帝？と一晩同じ部屋で過ごしたんだ。嫌な気分にもなる」

「それはわたしの台詞よ！　なんでお前なんかと一緒に寝なきゃいけなかったのよ！」

その絶対的に間違ってる部屋割を決めたのはどこのどいつだ！

「う～ん、リーゼちゃんとセレスちゃんの仲を良好にするつもりで後から部屋割を変えたのですが、逆効果でしたねぇ」

「言うまでもないくらい犯人はお前だったな、誘波っ！」

魔王と聖騎士を一緒に置くな。混ぜるな危険。

全ての元凶――法界院誘波は、稲葉の隣に静かに腰を下ろしてふわふわの笑みを浮かべている。暢気に局長へ挨拶する稲葉や桜居は意識の端に遠ざけておいて、俺はギロっと普段の十二単に戻っている誘波を睨んだ。

「なんて無謀なマネしてんだよ。何事もなかったからいいものを、下手すりゃこの城旅館が敵軍に攻め落とされるより大惨事になってたんだぞ」

「そこは大丈夫ですよぅ。私も一緒でしたので」

なんとも説得力のある一言だった。

とにもかくにも、リーゼとセレスを仲直りさせるなんて端から不可能だ。寧ろ今の状態こそが仲を直したデフォルトの状態だからな。

そうとわかれば――さっさとメシを食って退散するに限る。

とりあえず手を合わせ、いただきます。割り箸を割って焼き鮭の身をほぐす。脂が乗っていて非常にうまそうなのに、両脇からの圧力が消えてくれない。俺は緩衝材か。

「ん？　セレス、食べないのか？」

俺はさっきから瞑目するばかりで料理に手を出さないセレスを不思議に思い、問う。

「話しかけないでくれ、零児。私は今、女神セフィロアに祈りを捧げているところだ。私の国では食事の前後にそうする決まりがある」

「へえ。そりゃ結構なことだな。俺たちにまで押しつけてくんなよ？」

とは言っても、その宗教的なにかは俺たちの世界にも似たようなものがある。『いただきます』『ごちそうさま』が一つの例だろう。

他人の世界のことを訊く趣味はないが、もしかすると、セレスの世界って実は地球にけっこう近いところがあるのかもしれない。でなけりゃこれほど早く彼女が順応することもないだろう。世界観が根本的に違うと、マルファみたいに教育機関に軟禁されるしな。

「リーゼはん、箸の持ち方間違うてるで。ぐーで握るんやなくて、こう親指の付け根と人差し指で摘まむように――」

右隣では稲葉がリーゼに箸の正しい持ち方を講義していた。しかしリーゼはそんなのお構いなしに、ぐーで握った割り箸を白米にぶっ挿して掻き込むように食っている。なんかコワッ。一体昨晩なにがあったんだ？　恐ろしいから訊かねえけど。

俺はみそ汁を啜りながら、逃避のためにもう一度セレスの方に視線を向ける。彼女は黙祷を終えていた。綺麗に割った割り箸を見よう見まねといった様子で握り、ぎこちない動作で煮豆を摘まもうとするが、

……ぽろっ。

……ぽろっ。ぽろっ。

一向に摘まむことができず「うぬぬぬ」と唸っていた。面白いからしばらく黙って見守ろう。

「ではでは、皆さん食事しながら聞いてくださいねぇ」

そうこうしていると、誘波が立ち上がってパンパンと手を叩いた。

「クロちゃんが『影魔導師が昼間に動けるわけねえだろアホか。俺は寝る』なんて言っていたので、昼間の捜査は私たちが本格的に行うことにします」

無理やり声を低くして喋ったのは鷹羽のマネか？　滑稽過ぎるくらい似てないぞ。

「主にやることは昨夜から引き続く次空の監査ですけど、監査官の方には犯人の捜索を行ってもらいます。犯人の特徴は、レイちゃんの証言によると『黒いセーラー服を着た少女』です。目立つので町にいればすぐ見つかると思いますが、恐らくそんなところに堂々と現れたりはしませんね」

当然だろう。指名手配犯が写真や似顔絵の顔のまま街中を闊歩するわけない。ましてや相手は影魔導師だ。顔は隠せても、日光を遮るための特徴的な防護服を外すことはできない。下手すりゃ死ぬからな。

あの女も鷹羽同様に夜――影が満ちるまで隠れ家的な場所に潜んでいるに違いない。俺たちのミッションは、夜というタイムリミットまでに居場所を発見し敵を確保することだ。

そのためにはまず、こちらで仲間割れなんてしている場合じゃないよな。セレスは既に切り替えができているみたいだからいいとして――

「なあ、リーゼ」

「なに？」

「あとでいろんな温泉巡ってみるか？　昨日ここへ来る時に何軒か見かけたし、なんか森の奥に秘湯もあるらしいぞ」

「行く！　そのヒトウってのも面白そう！」

一瞬で機嫌が直ったようだ。なんとも扱いやすいお嬢様だ。これで少しはメシが美味くなるだろうね。

三章　過去への執着（２）（後書き）

今回のQ&Aはお休みします。

次回の更新日は４月１９日（火）です。

三章　過去への執着（3）

捜査の基本は聞き込みだ。

俺は警察関係者じゃないから実際どうなのかは知らないが、恐らく間違ってはいまい。いつぞやに見た刑事ドラマでもそんなことを言っていた気がするし。

そんなわけで学園の制服に着替えた俺は、城旅館下の温泉街へ行き、客をよく見ている店の人中心に聞き込みを開始した。

「すみません、人を捜してるんですけど、黒い服を着て、背が大体このくらいで――」

と俺は温泉まんじゅう屋のおっちゃんに手で捜し人の身長を示す。

「――長い金髪をした女の子を見ませんでしたか？」

ああ、そうさ。俺が今捜してるのは影魔導師の女じゃない。リーゼだ。でなけりゃこんな人の往来が激しい大通りで人捜しなんかしていない。裏を掻かれる可能性がないとも言えないが、それでも影魔導師の女にとってはリスクが高いはずだからな。

温泉街の郊外を捜索中に、気づいたらリーゼがいなくなっていたんだ。たぶん興味を惹かれるものを見つけて蝶々を追いかけるように逸れたのだろうが……いろんな意味で子供すぎるな、リーゼは。そこが可愛いところでもあり、面倒臭いところでもあるんだけど。

首を横に振る温泉まんじゅう屋のおっちゃんに礼を言い、とりあえず温泉まんじゅうを一個だけ買って店を立ち去る。

「ゴミ虫様、マスターは見つかりましたか？」

「まったくこんな時に迷子とは、足手纏いにもほどがあるぞ、？魔帝？リーゼロッテ」

店を出たところでレランジェとセレスが合流してきた。一応手分けして捜していたのだが、二人とも手掛かりなしのようだ。どちら

の捜索も。
「いや、どうもこの辺には来てないみたいだな。リーゼは目立つから、来ていれば誰かが絶対に覚えてるはずなんだけど……」
誘拐なんて単語が脳裏を過ったが、リーゼを攫えるやつなんてそうそういない。スヴェンの仲間がリーゼを狙ってるとしても、わざわざこんなところまで追いかけてきたとは思えないし。
「ゴミ虫様がきちんと見ていないからマスターが迷子不安定になられたのです。責任取って斬首安定です」
「こんな時だけ責任転嫁すんじゃねえよ！　本来のリーゼのお守役はお前だろうが！」
「チッ」
「舌打ちして目を反らすな！？」
お前が迷子になればよかったのに。……やば、迷子のレランジェを想像したら笑ってしまいそうだ。
「とにかく、もう一回分かれるぞ。いいか、さっきも言ったけど、お前らはなるべく人のいないところを捜すんだ。止めるやつがいないからってあまり騒ぎを起こさないでくれよ」
「そこなんだが零児」とセレス。「あの？魔帝？のことだ。騒がしい場所を捜せば見つかるのではないか？」
「ああ、だから俺が人の多い場所を捜索する。こんな場所だと、お前らはいるだけで騒ぎになりそうだからな」
ゴスロリメイド服のレランジェと、制服の上から武装したセレスはリーゼ以上に目立つ。そんな二人が揃えば、なんかのイベントと勘違いされて人が大勢集まってきてしまう。身動きが取れなくなる前にさっさと散開すべきだ。
「じゃ、俺は向こうを捜してみるから。――おっと、そうだ」
踵を返そうとして、俺は手に持っているものを思い出してセレスを向く。
「セレス、これやるよ。俺はいらねえから」
そう言って俺は温泉まんじゅうの袋をセレスに手渡した。自分で

食ってもよかったけど、セレスは昨日なんとなく物欲しそうにしてたからな。

「い、いいのか？　もらったからには、返せと言われても返さないぞ？」

「いいよ。返せって言うくらいならもう一個買うさ」

俺に確認を取ったセレスは、ぱあぁぁ、とその整った顔に向日葵のような笑顔を輝かせた。なんとも嬉しそうだ。余程食べたかったのだろう。

そんなこんなで、俺はいいことした気分に浸りつつ二人と別れた。こうして迷子のリーゼを捜すの、前にもやったような気がする。デジャブか？　いや違うな。

あの一件以来、リーゼは自分の魔力が敵（マルファ）を惹きつけると学習したようで、俺が言わなくても自然に魔力の気配を抑えるようになった。普段であれば素晴らしいことなんだが、こういう場合にはちょっと困る。どうせリーゼ本人は自分が迷子だなんて自覚はないんだろうね。

俺が今歩いている場所は様々な食事処や和菓子店が並ぶ美食街道。美味そうな香りに誘われてリーゼが来てるかなって思ったんだが、それらしい気配はない。ハズレか。

と――

Ｐｒｒｒｒｎ！　Ｐｒｒｒｒｎ！　Ｐｒｒｒｒｎ！

ブレザーのポケットに入れていた携帯が鳴る。いつものように誘波かと思ったが、着信音が違う。訝しく思った俺はとりあえず携帯を開くと、画面には相手の番号だけが表示されていた。誰だ？

「もしもし？」

『あー、白峰か？』

寝起きの低血圧人間よろしく言葉の端々からだるさを滲ませた声

が聞こえてきた。
「その声は迫間だな。てか、俺の携帯番号教えたっけ？」
『誘波から聞いた』
あの着物バカは詐欺師にも俺のプライバシーを売りそうだから怖い。
「んで、なんの用だよ？」
『ああ、なんつーか、今非常に面倒臭いことになってんだ。だから白峰、すぐに来てくれないか？』
「なんでだよ、また俺を巻き込む気か？」
『あーいや、巻き込まれてるのはどちらかと言えば俺の方なんだが……』
「はい？」
『とにかく、面倒臭えだろうけど、第三駐車場近くの遊技場にいるから来てくれ』
――プツッ。
一方的に切りやがった。
携帯を仕舞い、天を仰ぎ、俺は深く長く溜息を吐く。
このまま無視するわけにもいくまい。俺はポケットに乱雑に突っ込んでいたパンフレットを開いて現在位置を確認する。
第三駐車場は……そう遠くない。
リーゼ捜しのついでに行ってみるだけ行ってみるか。我ながら随分とお人好しだと思う。目の前の困っている人を放っておけない幼馴染――紅楼悠里の影響なのかもしれん。本当にあいつ、どこの異世界をほっつき歩いてんだろうね。さっさと帰って来い。
などと余計なことを考えているうちに遊技場に到着した。
都市にあるようなゲームセンターとは違い、学校の体育館を少し小さくしたような二階建て施設には、卓球やダーツやビリヤードといった体を動かす室内遊戯が中心に置かれているようだ。小規模な

温泉も付属しており、汗を掻いてもすぐに洗い流せる仕組みになっているらしい。

「もう充分わかったでしょ？　アンタの負けよ」

「これまでのは練習よ！　だからもう一回勝負しなさい！　ようやくコツを掴んできたわ。この？魔帝？で最強のわたしがいつまでもお前なんかに負け続けるなんてありえないんだから！」

「ちょっと、まだやる気？　いい加減にしてよ。あたし眠いんだから」

なにやら卓球場の方が騒がしい。というか、聞き覚えのありすぎる声が二つほど耳を打ってくるんですけど。気のせいじゃないよな。

あー、いるいる。黒コートを羽織った黒髪ロングのチビと、魔女のコスプレみたいな黒衣を纏った金髪ロングのチビが。ついでに両者共好戦的な性格ときた。今更かもしれんが、けっこう似た者同士だよなぁ――って！

「リーゼ！　お前こんなところでなにやってんだよ！　捜したんだぞ。心配かけんな」

注意。この場合の心配はリーゼ本人よりも、リーゼの被害に遭うだろう人々のことを指す。間違えないように。

「あ、レージ」

こちらから見て卓球台の奥側にいるリーゼが俺に気づき、親に迎えに来てもらった幼稚園児みたいな無邪気な笑顔を咲かせる。くっ、そんな可愛い顔されると怒りづらいじゃないか。卑怯だ。訴えてやる。勝てないと思うけど。

「ちょっとアンタ！　さっさとこの子引き取りなさいよ！　こっちは徹夜明けに五回も試合やらされて……ふあぁ」

怒り口調で捲し立ててきた四条は言葉の途中で大きな欠伸を掻いた。咄嗟に卓球のラケットで口元を隠す四条だが、だらしない顔はもろ見えだった。その様子からして徹夜明けというのは本当らしい。

となると、四条たちは今までずっと犯人捜索をやってたってことになる。ご苦労なことだ。

「そんで、一体なにがどうなってこの二人が卓球なんてやってんだ？」

俺は壁に凭れて半開きの目で様子を見守っている迫間に訊ねた。リーゼや四条より、こいつの方が会話は成り立つんだよ。面倒臭がり屋なことを含めても。

「あー、要点を纏めて言うとだな。俺たちはここの向かいにある安宿に泊ってて、そこには風呂がないからここへ入りに来て、面倒臭いことにここの温泉狭い割に人いたんだよ。ん？　これ関係ねえや。それで温泉から出て帰ろうとしたところで瑠美奈がその子とぶつかって、口喧嘩になってホント面倒臭かったぜ。えーと、それからどうしたっけ？　ああ、そうそう、喧嘩に拳が出そうだったんで、決着はなんかのゲームでつけようぜって俺が言ったんだ」

「よし、要点を纏めろ」

説明がぐだぐだすぎた。どの辺りが纏められてるのか誰か教えてくれ。俺にはわからん。

迫間の評価につけ加えよう。会話は成り立つ。しかし説明は下手糞だ。四条に訊けばよかったと今更ながら後悔する俺。

まあいい。得られた情報から適当に整理する。偶然リーゼと四条が肉体的に衝突し、昔の不良みたくイチャモンなんかつけて喧嘩に発展しそうになった。そこで迫間が卓球で決着をつけるように促した。ざっとこんなとこだろう。

リーゼも四条も猛犬のように凶暴だから、ブレーキ役の迫間がいてくれて助かった。そこは感謝してやる。卓球に関して全くの無知なリーゼにフェアじゃない提案を持ちかけた部分はいただけないけどな。

「もう一回勝負しなさいよ！」

「嫌よ。パパが迎えに来たんだからアンタは帰りなさい」

誰がパパか！

「白峰零児！　アンタ保護者なんだから早くどうにかしてよ！　う、ダメ……くらくらしてきた」

試合では勝っている四条だが、精神面では参っているようだ。室内が明るすぎるために影魔導師の力も使えないのだろう。もし使えるなら空飛ぶなり転移なりで楽々と逃げられるからな、こいつらは。

仕方ない。こういうことは桜居の方が得意そうなんだけど――

「四条、すまないがあと一回勝負してやってくれ。リーゼも、勝っても負けても次で終わりだぞ」

四条がわざと負けてくれれば話は速いのだが、まあ、こいつの性格上それは無理な相談だ。

二人とも俺の提案に不満そうにむくれながらも了承してくれた。

両者が卓球台の位置につき、視線を交差させる。

速やかに試合が終わるように、勝負は一点先取のサドンデスだ。

サーブは四条がリーゼに譲った。余裕の顕れだろう。

球を受け取ったリーゼは舐められるのが面白くないのか、キッと四条を睨む。

空気が張り詰める。ガンマンの早打ち勝負を見守るような緊迫感が俺にも伝わってくる。

リーゼが球を宙に放った。

そして、シェークハンドで握ったラケットを大振りに振り切った。

バチィン！！

「きゃうっ！？」

弾丸のように空を裂いた球は四条のオデコにクリティカルヒット。

どんだけ威力があったのか、背中から引っ繰り返るように転倒した四条は額を抑えて「う～」と唸っている。大丈夫か？

「やった倒した！　ねえレージ、わたしの勝ちでしょ？」

「倒したって……射的ゲームじゃないんだから。お前の負けだよ、リーゼ」

「なんでよ？」

「卓球台に触れてすらいないからな。ルール的に負けなんだよ」

この試合にサーブミスなんてルールは適用されない。リーゼは納

得できないと言うように頬を膨らませた。ハムスターみたいだ。
「ちょっとアンタたち、勝ち負けよりも先にあたしに謝りなさいよっ！」
迫間に支えられながら四条が犬歯を剥いて怒鳴ってきた。額に球の痕がくっきりと赤く残っている。
「悪い悪い。つか、五回も試合やっといてちゃんとルールを教えてなかったお前らにも非があるんじゃないか？」
言ってやると、迫間は苦笑し、四条はバツが悪そうにそっぽを向いた。
「まあ、なんにしてもこれでこの騒動は終わりだ。俺らだってまだ捜索が――」
俺の言葉は、最後まで続かなかった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

「「「――ッ！？」」」
突如、隕石でも落下したような凄まじい振動が俺たちを襲ったのだ。
地震とはなにかが違う。大地がというよりも、空間全体が激しく揺れ動いているような、そんな違和感を覚える。
揺れは十秒程度で収まったが、俺にとっては一分以上揺れていた感覚だった。
「まさか今の、歪震（わいしん）か！？」
歪震ってのは、次空が大きく歪んだ際に？元へ戻ろうとする力？が働くことで生じる空間振動のことだ。一般人には地震との区別はつかないだろうが、俺たち監査官には感覚的にわかる。俺は知らないが、リーゼがこの世界に渡ってきた瞬間にも歪震は起こっていたらしい。
原因は間違いない。あの女だ。
「こりゃ、寝てる暇はなさそうだな。面倒臭え」

「そのようね。行くわよ、漣。薄暗い森の方ならあたしたちも力は使えるわ」
「どうせ誘波から連絡が来るだろうが、それを待ってからじゃ遅い。リーゼ、俺らも行くぞ」
「え？　なに？　なんなの？」
困惑するリーゼの手を引き、俺は迫間と四条に続いて遊技場を飛び出した。

歪震の二次災害。それは津波や土砂崩れではなく――『次元の門』の大量発生なんだ。

三章　過去への執着（３）（後書き）

避けるつもりだったけれど、使ってしまいました。地震系のネタ。
もしご気分を悪くされた方がいらっしゃったならば、謝罪安定です。

「大　変　申　し　訳　あ　り　ま　せ　ん　で　し　た　ッ　！
！」

ではQ&A行きます。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

Q：影魔導師たちは夜になると力が無限になるということでしたが、月明かりやライトなんかで影ができた場合はその限りではないのでしょうか？

A：夜というか、辺りが暗ければいいんです。その暗さを利用するので、昼でも光を遮った室内とか洞窟の中とかだったら存分に力を使えますし、夜でも都市部みたいに明るすぎると力は弱まりますね（答えになってるかな？）。

Q：最近リーゼの影薄くね？

A：キノセイ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

||
||

三章　過去への執着（4）

『確認された「次元の門」の数は十七です』

俺は左手に持った携帯から誘波の連絡を聞きつつ、右手でリーゼの手を握って走っていた。

『数だけ見れば中規模ですが、歪震の範囲が極端に狭かったことを考慮すると馬鹿にはできません。門の出現時間もリーゼちゃんの時と比べて長いです』

普通、大発生する『次元の門』の数は歪震の範囲に、出現時間は歪震の大きさに比例する。リーゼがこちらの世界へ来た時の歪震は、地震でいうところの震度1程度だったという。それが過去最大規模に広がったことで、一瞬でも百二十二箇所という異常な数の門を開く結果となった。

だが今回は大きさはともかく、範囲は祝ノ森リゾートガーデン周辺のみと非常に狭い。この程度なら開いても一桁台のはずだ。十七は多い。

なぜ歪震で『次元の門』が開くのか？　例によって異界監査局の変態研究者の見解では、歪んだ次空が元に戻る際、引力のようなものが働いて異世界を引っ張ってしまうとのことだ。アレだ。マラソンとかで人の後ろを走ると、気圧や空気抵抗の低下により体が吸引されて楽に走れるってやつに似ている。スリップストリームって言うんだっけ？

「で、俺たちは一体どこへ向かわされてんだ？」

俺とリーゼが走っている場所、それは温泉街ではなく森の中にある渓流沿いの獣道だった。街よりも優先させるってことは、余程のモノがこの先にあるんだろう。

『歪震源です。そこに最も巨大な門が開いています』

察しの通り、歪震源とは空間における歪震の起点となる場所のことだ。が――

「待て、それってスパじゃないのか？」
あの影魔導師の女が活動していたのはジャングルスパ内だったはずだ。起点もそこにならなければおかしい。
『いえ、今クロちゃんに確認を取ったところ、スパは犯人である少女の活動範囲の一部だったようです。一般人のいるスパをレンちゃんとルミちゃんに任せ、クロちゃんは一人で少女を追いかけていたそうです。ヘンタイですね』
迫間と四条が一つの？穴？を閉じるのに二人がかりで集中しなければならなかったところを、鷹羽は一瞬で、それも同時に七つの？穴？を閉じてみせたのだ。ヘンタイかどうかはさておき、あの男なら他の活動範囲をカバーすることくらい容易そうだな。
弟子たちに全てを任せて遊んでいたわけじゃない。寧ろ一番大変な仕事を鷹羽は請け負っていたことになる。いい上司じゃないか。
どっかの誰かと違って。
「ああ、誘波、ナビはもういいぞ。門の気配を感知した」
『そうですか。では、気をつけてくださいね、レイちゃん。無事に帰ってこられたら今夜は牛鍋にしましょう』
「妙な死亡フラグ立てんな！」
――プツッ。
通話を切り、携帯をポケットに仕舞う。
街の方が心配だ。向こうからの来訪者は現時点ではないらしいが、突然だったから何人かの一般人が異世界に飛ばされたかもしれない。だが、俺が心配したところでなにか変わるわけでもないだろう。そこは他のみんなに任せて俺は自分の任務に専念すべきだな。
昨日の疲れが残ってんのか知らねえが、なんか今日は微妙にくらくらして気分がよろしくないんだ。特に気にするほどのことでもないが、風邪の前兆かもしれん。パパッと終わらせてしまおう。
「ねえレージ、一体なんなの？　意味わかんない。どこに行くの？」
と、俺に引っ張られながらリーゼが眉を寄せて説明を求めてきた。
夜逃げに付き合わされる子供みたいな顔だな。……いや、そこまで

不安げではないか。
「この先に面白いものがあるかもしれないんだと」
それだけ言っておけば、このお嬢様にぐだった説明なんて必要ないだろう。
「む、それは楽しみね。急ぐわよレージ！　早くしないと誰かに取られるかもしれない！」
ほらな。

轟々と流れ落ちる双子滝の前、河原の開けた場所に俺たちは到達した。左は急流、右は剥き出しの山肌。獣道の最奥部だ。
「ここだな」
俺は首を少し後ろへ傾けて、落差二十メートルはあろうかという双子滝を見上げる。幅はどちらも五メートルほどだが、片方は水流が滝壺まで落下することなく半分辺りで途切れていた。
これなら一般人にだって視認できる。つまり『次元の門』はそこに開いていて、水が異世界へと流れ込んでいるんだ。なんとも摩訶不思議な光景だな。写メでも撮っておこうか。
「レージレージ！　ここにもフロがある！」
リーゼのはしゃぎまくった声。俺の服の袖をくいくい引っ張って前方を指差している。
視線を落とすと、確かに湯気が昇っていた。渓流に付随するように大き目の岩で仕切られた箇所がある。そのすぐ傍には掘建て小屋が今にも崩れそうな姿で鎮座しており、ボロボロの立て札には達筆な字で『双竜の湯』と書かれていた。
「ああ、なるほど、ここが例の秘湯ってやつか」
「ヒトウ！　わたし入る！　すぐに！」
「そうだな――ってだぁーっ！？　待て待て待てリーゼ！　炎のコスチュームチェンジは待ったストーップ！」
黒衣の端にシュボッと黒炎が灯ったのを見て俺は慌ててリーゼを止めた。このお嬢様は見られることに関してはなんの羞恥心もない

から世話が焼ける。
「なんでよ？　わたしは早く入りたいの。別にいいじゃない」
「よくない。頼むから俺の目のやり場を困らせるな」
まさかとは思いたいが、この遣り取りも誘波にバレている可能性がある。たぶん？風の噂？とかで。だからまたヘンタイ扱いされないためにも、リーゼには大人しくしておいてもらいたい。
「それに、アレを見ろ」
俺は顎をしゃくって湯気立ち上る秘湯を示す。そこに、ゆらりと人影が映った。
「先客がいる」
サルなんかじゃない。アレは、間違いなく人間だ。
山風が吹く。湯気が流され、秘湯の全容が鮮明になっていく。
ザバァ！　と湯を堪能した人影が立ち上がる。
「あら？」
「あっ、てめえ」
しっとり濡れた艶やかな長髪を肌に絡ませた、色白で背の高いモデル顔負けの美少女がそこにいた。言うまでもない、俺たちが必死こいて捜していた影魔導師の女だ。こんなところに隠れてやがったのか。
「誰よ、お前。なんで？魔帝？で最強のわたしより先にフロに入ってんのよ？」
先を越されていたためか、リーゼのご機嫌が緩い角度で傾斜しているようだ。凄むと同時に抑えていた魔力を解放する。
「今朝から俺たちが捜していた『敵』ってのがこいつだよ、リーゼ」
俺は警戒しながら簡単に教えると、睨みを利かせて女に警告する。
「ここで会ったが百年目、だっけ？　大人しく投降した方が利口だと思うぜ。森の中で微妙に暗いとはいえ、昼間なら俺らの方に分があるからな」
すると女はたじろぐように一歩下がり、パッチリと見開いた大きな双眸に涙を滲ませ――

「……きゃ」
「あ？」
「きゃあああああああああああああああああああああああああッ！！」
堰を切ったような悲鳴で、俺の耳を劈いた。
ばっ、としゃがみ込む女に、俺は彼女が一糸纏わぬ姿だということをようやく認識した。
「どわっ！？　すまん！！」
反射的に回れ右してカカシのように直立する俺。見えてない。見えてないぞ。距離があったし、不自然に濃い湯気が都合よく仕事してくれたから体のしなやかなラインくらいしか見えてない！　くどいけどもう一度言う。俺には見えてないっ！
「ふふっ、ダメだなぁ。いくら裸を見たからって敵に背中向けちゃあ」
だから見えてないって言っ――――ッ！？
女の声が、異様に近くから聞こえた。テンパっていた精神が急激に冷却され、
――やべ、死んだ。
そう思いながら、振り返る。
「一人だったら、死んでたぞ」
漫画だったら語尾に『☆』がついていそうな口調で、女は左手の人差し指をチッチッチと振ってウィンクを一つ。俺との距離は一メートルを切っており、右手には？影？ではない普通のサバイバルナイフが握られている。
その右手首を、がしっ、とリーゼが鷲掴みにしていた。
俺は助けられたんだ。リーゼがいなければ確実に刺されていた。
そう思うとゾッとする。
「なにしてんのよ、お前。レージを壊していいのはわたしだけよ」

でも何故に主人公のライバル的ポジションにいる噛ませ犬みたいな台詞を言うんですか？

「ふふっ、愛されてるわね」

女の体に音もなく僅かな？影？が纏った。

「「――！？」」

俺とリーゼは同時に飛び退くが、攻撃が飛んできたり転移されたりなどはなかった。ハッタリか！

？影？で大事な部分を隠した女は、ふんふん、と鼻歌を刻みながら日向を避けて秘湯の方へと歩いていく。

一体どこにそんな余裕があるんだ？　攻撃や転移をしなかったってことは、ここではそれができるほどの？影？を操れないってことだ。俺を刺そうとしたナイフも金属製だったし。

女は岩の上に丁寧に畳んであった黒セーラー服を着込むと、屈託のない笑顔を俺たちに向けた。

「ふふふっ、ちょっとお話しない？　お茶でも飲みながらね」

三章　過去への執着（４）（後書き）

今回はＱ＆Ａお休みです（別に誰も楽しみにしてないか）。

しかも特に語ることもない。なんてつまらない後書き。

とりあえず感想評価質問待ってます！

三章　過去への執着（5）

なんだって？
ちょっとお話……だと？
それってつまり――
「ついに観念したってことか？　余裕ぶってるように見えて、実はお手上げだったんだな」
ひとまず安心する俺だったが、油断はできない。影魔導師の力を満足に使える状態でなくとも、さっきみたく普通のナイフで刺される可能性だってあるんだ。
警戒を解かない俺に、女はくすっと笑う。
「そうね。今の私じゃあなたたちには敵わないわ。でも、捕まるつもりなんてこれっぽっちもないんだけどなぁ」
「は？　転移もできないくせに逃げられると思ってんのか？」
「ふふっ、転移ならできるわよ？」
「どうせハッタリ――」
瞬間、女が足下から噴き上がった濃い闇に包まれて消えた。そして三メートルほど離れた岩の上に現れる。
「マジか……」
転移が可能ならとてもじゃないが追えないぞ。リーゼも炎による転移術を使えるが、あれは自分の魔力を飛ばして点火した場所に移動するものだ。視界内に限定される。そもそも、転移術同士の鬼ごっこは相手がどこへ出るかわからないから成り立たない。
「ふふっ、驚いたかしら？　と言っても、影魔導師の転移は『影が繋がっている範囲』でしかできないのよ。だからそれほど遠くには逃げられないわね」
それでも、ここは山間に位置する森の中だ。繋がった影などいくらでもある。俺たちはやつが本気で逃げに転じる前に完全に取り押さえなければならない。正直、キツイな。

「フン、なに悩んでるのよ、レージ」
リーゼがその紅眼にいつもの自信満々な耀きを宿している。なにかやつを逃がさない手でもあるのか？
「要は影をなくせばいいんでしょ？　そんなの、この森を跡形もなく焼き払えば済むじゃない」
なんともリーゼらしい豪快な提案だった。森全体でなくとも、この周囲だけ消し飛ばせば確かに繋がった影は生まれない。リーゼにしては冴えてるじゃないか。俺と森の生物たちの危険を考えてくれていたらもっとベストだったけどな。
「それ採用だ、リーゼ。でもまだやるなよ。自然破壊は最終手段だ」
あの女の転移速度よりも、リーゼの炎の方がたぶん速い。
さぞかし苦い顔をしてるだろうな、と思って俺は女を見やるが――その愉快そうな表情にはなんの変化も見受けられなかった。あいつはリーゼの力を知らないから、ハッタリだと思ってるのかもしれん。なら、今はそう思わせとけばいいさ。
「う～ん、どうもお茶しながらお喋りって雰囲気にはなってくれそうにないわね」
ぴょん、と女は岩から飛び降りる。俺は身内にすら毒を盛られる環境にいるんだぞ。敵とお茶なんて恐ろし過ぎてやってられるか。
「まあいいわ。その代わりに面白いものが見れそうだから」
ふふっと笑って女は背後を、双子滝の方に視線を向ける。
なんか知らんけど隙だらけだ！　俺は即座に棍を生成しようとし――止まる。
滝の半分を呑み込むほど巨大な『次元の門』が、水面に石を落したような波紋を広げていた。
「ちょっと待て、どんだけでかいのが来るんだよ」
向こう側の景色が原型を留めてないほど歪む。直後、にゅっ、と黒光りするなにかが滝の水を被って突き出してきた。

恐らく、生物ではない。宇宙をたゆたう小惑星を思わせる鉱物の塊に見える。全長百メートルはあるだろうそれが、激しく水飛沫と土煙を上げ、地形を変えてしまう勢いで渓流を押し潰す。

ゴツゴツとした漆黒の壁が俺たちの眼前に聳える。やはり生物ではなく、異世界の物質のようだ。生物以外の来訪者なんて滅多にないことだぞ。

「わっ！　わっ！　なんかすっごいの来た！　ねえレージ、アレ壊していいの？」

こんな状況ではしゃげるリーゼの精神を分けてもらいたい。すぐに壊す方向へ直結する思考回路はいらないけど。

パキン。

氷に熱湯をかけたような音がした。

次の瞬間――

「――なッ！？」

硬度の高そうな異世界の物質に罅が走ったかと思えば、破裂するように一瞬で瓦解したのだ。しかも瓦礫が残ることなく青白い光の粒子となって霧散している。

「……リーゼ、お前、なんかやったのか？」

「ううん、まだなんにもやってないわよ」

リーゼもなにが起こったのか理解できていないようだ。となると、あの謎物質は自然消滅したことになる。既に『次元の門』も消えていて次が来ることはないみたいだが、こんなことは初めてだ。アレがなんだったのかまるでわからない。

「あっちゃー」と影魔導師の女の声。「せっかく面白い物を回収できると思ったのに、地球の環境では存在できない物質だったみたいね。残念残念」

両掌を上に向けてアメリカ人風に肩を竦める女に、俺は問い詰める。

「次空を歪めて、歪震を起こして、『次元の門』から出現するなにかを得る。それがてめえの目的なのか？」
「ふふっ、ハズレよ。監査局のわんこさんは鼻が利いても頭はよくないのかな？　なにが出てくるかわからないのに、そんなことを目的とするはずないでしょう？」
「じゃあ、なんだってんだ？」
「どうしよっかなぁ？　別に教えちゃってもいいんだけどね」
茶化すように勿体ぶる女に、俺はそろそろ苛立ちの限界を迎える。
「今話さなくたっていいぜ。どうせ、監査局でじっくりと尋問されることになるからな！」
〈魔武具生成〉――フレイル。
柄となる長い棒と『穀物』と呼ばれる打撃部分を鎖で接合した、柔軟性と防御しづらい高い攻撃力で鎧の上からでもダメージを期待できる棍だ。ただの棍より扱いは難しいが、俺は近接武具に関しては専門家だ。間違って自分を打つようなマネはしないさ。
「リーゼ、俺に続け！」
「戦っていいのね。じゃあ思いっ切り楽しむわよ！」
リーゼの手前に魔力還元術式の魔法陣が展開し、轟！　と凄まじい黒炎流を影魔導師の女に向かって放射される。俺に続けって言ったのに、戦いたくて相当うずうずしていたらしいな。
直線に飛ぶ黒炎放射は簡単に避けられたが、そこに俺がフレイルを振り回して叩き込む。鎖を軸として打撃部が加速され、岩をも砕く攻撃力を発生させる。
が、実際に砕いたのも岩だった。女は軽業師よろしく岩から岩へピョンピョン飛び跳ねて俺との距離を取る。日向の方へ追い詰めたいのに、やつは周到に日影が多い方へと逃げてやがる。
「あはは！　黒焦げになりなさい！」
リーゼが女の上空から黒炎柱を落とす。しかし寸前で見切られ、そこから転移で俺の後ろへと回り込まれた。
「くっ」

回転の勢いをフレイルに乗せて振り向こうとしたが、女に武器を蹴り上げられて失敗する。なっつうタイミングの合わせ方だ。影魔導師の力を存分に使えないのに、こいつ、ただの人間としても異常に強いぞ。

「ふふっ、昨日より動きが鈍ってるぞ？」

独特の笑いを漏らす女は、スッ、と俺の懐に一気に入り込んできた。綺麗で整った顔を下から俺の顔に近づけてくる。その距離、少し動けばオデコがぶつかりそうだ。

俺がいるからか、リーゼも炎を使うことを躊躇っている。

「私はね、過去を取り戻したいの」

女は囁くようにそう告げて、俺の眼前数センチから闇を纏って転移した。今度は川の中央、先程の異世界物質が落下した影響でポッカリと露になった川底に現れる。

「この、ちょこまかと鬱陶しいわ！」

「待てリーゼ」

俺は黒炎弾を射出しようとするリーゼを手で制した。そして女に向き直り、問う。

「過去をって……記憶喪失なのか？」

「ふふっ、今の言い方じゃそう捉えちゃうか。――ハズレよ」

女はそこで一拍置き、今までの飄々とした態度を一変させる。

「私は過去の、過去に失った大切な人を取り戻したい。そのためならなんだってするわ。次元がどれだけ歪もうとも、誰がどうなろうとも関係ない」

なんだ？　表情が、まるで悪魔にでも取り憑かれたみたいに変貌しているぞ。

「三年前のあの日、私と一緒に『混沌の闇』に喰われた彼を見つけ出す。それが私の目的。異界監査局や影魔導師連盟なんかに邪魔はさせないわ」

ゾワッ。

憎悪にも似た執念が影魔導師の女から感じられ、俺は体中の毛が逆立つ感覚に襲われた。リアルに霧状の？影？が女に纏わりついてどす黒いオーラを形成している。はっきり言って、怖い。

「なによ、あいつ……凄く、嫌な感じがする」

リーゼも俺と同じものを感じているのか、珍しく怯えた顔で女を見ていた。

と、その時――

「う、そ」

俺たち三人以外の声が、背後から聞こえた。

影魔導師の女から目を反らす機会を得たとばかりに、俺は後ろを振り返る。この秘湯へと続く獣道に、マントに近い形状の黒いコートを羽織った少年と少女――迫間漣と四条瑠美奈が立っていた。

「なんで？　なんでよ？」

どさっ、と四条が地面に両膝をつく。迫間もよろけそうになる体を必死に持ち堪えて「どう……なってんだ？」と呟いている。

二人とも瞳の焦点が合っていない。ありえないもの――幽霊でも見たような顔だ。

四条が叫ぶ。

「なんで、望月先輩がここにいるのよッ！！」

三章　過去への執着（5）（後書き）

こっから先終章までコメディパートがない予感。
でもどっぷりシリアスに浸かるようなことはないので安心（？）してください。そこまでシリアスにする技量は私にはない！（威張るな）

さて恒例Q&Aは……あれ？　質問がない……だと？

じゃあ代わりに女性キャラの身長比較でもします。

キャラ名	身長
リーゼロッテ	145cm
レランジェ	165cm
法界院誘波	151cm
セレスティナ	160cm
四条瑠美奈	147cm
マルファ	139cm
稲葉レト	156cm

キャラ多いなぁ＾＾；

三章　過去への執着（6）

「……先輩って、どういうことだ？」

双子滝の落水音しか聞こえないほど静まり返った場に、俺の呟いた疑問だけが響いて消える。

応援に駆けつけてくれたのだろう異界監査局所属の影魔導師たちは――茫然自失といった様子だ。二人とも敵影魔導師の女に視線を釘づけにしたまま凍りついている。てかちょっと待て、なんで四条は涙まで流してんだよ。

「ねえ、レージ、あの黒いやつらどうしたの？　なんで固まってるの？」

黒いやつらって……リーゼの認識はそんなもんか。あいつらがどうしたのかって？　だからそれは俺が訊きたい。

「さあ？　よくわかんねえけど、迫間たちとあの女は顔見知りみたいだな」

俺が予想で答えると、望月と呼ばれた影魔導師の女が「ふふっ」と笑う。

「やっほー、漣くんに瑠美奈ちゃん。久し振りね。三年振りかしら？」

女――望月は爽やかな笑顔を迫間たちに向け、街で偶然見かけた友人にするように手を振った。こいつ、元の軽薄な調子に戻ってやがる。先程のおぞましさはなんだったんだ？

「漣くんは大きくなったなぁ。瑠美奈ちゃんはあんまり変わんないかな？　あ、でも横方向に著しい成長が見られるわね。先輩嫉妬しちゃうぞ？」

久々に会った親戚のおばさんみたいなことを言う望月に、迫間がようやく口を開く。

「その姿、その声、その口調……本物の望月先輩だ」

「なに当たり前のこと言ってるの、漣くん？　私は私。正真正銘、

あなたたちの先輩の望月絵理香よ♪」
「嘘よっ！」と間髪入れずに、四条。「だって、望月先輩はあの時『混沌の闇』に喰われたじゃないっ！？　生きてこの世界にいるはずがないわ！！」
――ッ！？
なんだって？　『混沌の闇』に喰われた？
それは要するにあのドロドロの闇が蠢く世界へ引きずり込まれたってことか？　冗談じゃないぞ。あんな世界で人間が生きていけるわけがない。少なくとも地球人には不可能だ。
「助けてくれた人がいたのよ、瑠美奈ちゃん」
「ふざけないで！　そんなこと誰にもできないわ！」
「それができちゃうんだなぁ。王国（レグヌム）の？王様（レクス）？ならね」
余裕綽々とした望月の口からわけのわからん単語が出た。また影魔導師だけに通じる専門用語かと思ったが、迫間たちも疑問符を浮かべている。違うらしい。
迫間と四条は怪訝そうに顔を見合わせる。まだあの女が本当に自分たちの知っている人物なのか計り兼ねているのだろう。
「ところで物は相談なんだけど、二人とも私を手伝ってくれないかな？」
おいおい、唐突になにを言い出すんだあのアマは。先輩後輩の関係だかなんだか知らないが、迫間と四条はお前を追っている敵だぞ。
「二人にとっても悪くない話よ。うまくいけば智くんに会えるわ」
「「――ッ！？」」
望月が「智くん」と言った瞬間、迫間と四条の顔色が明らかに変化した。俺はすっかり蚊帳の外で話の内容をあまりわかっちゃいないが、この流れが非常にまずいことだけはわかる。
「てめえ、昨日は俺たちに異獣を嗾けて殺そうとしていたくせに、今になって勧誘とはどういう風の吹き回しだ？」
「ふふっ、ごめんね。もう監査局のわんこさんとじゃれ合ってる気分じゃなくなったの。だから――少し黙れ」

刹那、望月の雰囲気がマイナスでも掛けたかのように百八十度変わった。畏怖すら覚えるほど低くなった声に、俺は冷や汗がどっと噴き出すのを自覚する。

……いや違う。この冷や汗は望月に恐怖したからじゃない。

「うっ」

くらっ、と目眩がした。

なんだ？　体が、おかしい……！？

「ぐ、がぁあああああああああああああッ！？」

突如、なにかに体を内側から食われるような激痛が押し寄せた。悲鳴が独りでに口から飛び出し、俺は堪らず地面に突っ伏してしまった。土の味が口内に広がる。

「レージ！？」

悶えのたうつ俺にリーゼが悲愴な面持ちで駆け寄ってくる。迫間も四条も突然のことに目を見開いている。大丈夫だと言ってやりたいが、気を抜けば意識を刈り取られそうな痛みにそんな余裕はない。

くそっ、気持ち悪い。全身が痛い。それにたぶん熱も出ているな。リーゼの暴走した魔力を〈吸力〉した時でもこれほどの苦しみはなかったぞ。

――俺の体に、一体なにが起こってるんだ？

「望月先輩！　白峰零児になにをしたの！」

四条が剥き出した犬歯を望月に向ける。痛みに呻く俺だが、その声は鮮明に耳に届いていた。

「そのわんこさん、少しだけど影霊の返り血を浴びてたのよ。あれも立派な『混沌の闇』の？影？。通常なら徐々に侵蝕されていくところを、私が干渉して一気に活性化させたの」

「馬鹿な。そんな芸当、俺らはもちろん師匠でもできねえぞ」

「ふふっ、漣くん、私は『混沌の闇』の深部に全身を晒して生還した影魔導師なんだよ？　ただの影魔導師と一緒にしないでほしいな。まだ知らないのなら覚えておくといいよ。より深く強い侵蝕に打ち勝った影魔導師ほど、？影？への干渉力が高いってことをね」

教師のような物言いで言葉を紡ぐ望月。その鼻先を、黒い炎が掠った。

リーゼだ。

「よくもわたしのレージをやってくれたわね！　許さない。絶対絶対許さないっ！」

リーゼは二つの魔法陣で望月をサンドウィッチにすると、それぞれの陣から内側へ向けて押し潰すように灼熱の黒い火炎を噴射した。望月は悠々とかわして反対岸に渡るが、そんなことよりもリーゼが感情的になっていることに俺は驚いていた。だけどその驚きも、全身を巡る痛みと熱によってすぐに掻き消される。

望月は不敵な笑みを顔に貼りつけ――

「あなたと遊ぶのは私の目的が済んでからにしましょう？　？魔帝？リーゼロッテ・ヴァレファールさん」

「！？」

今の台詞に俺は強い違和感を覚えた。なんであいつ、リーゼのフルネームを知ってるんだ？

「う～ん、今は漣くんたちも混乱してるだろうから、落ち着いた頃にもう一度会いましょう。私もちょっとお昼寝したいしね」

そう言い残して望月は足下から噴き上がる闇を纏った。「待ちなさい！」とリーゼが叫んだ時には既に転移は完了し、望月の姿は影も形もなかった。

「漣、追える？」

「いや、無理だ。転移で追うより瑠美奈が空から探した方が面倒臭くないぜ」

「馬鹿言わないで。真っ昼間っから空なんて飛べないわよ。追えないなら仕方ないわ。それよりも今は――」

迫間と四条が同時にこちらへ視線を向ける。

「レージ！？　レージ！？」

俺は不安そうに表情を歪めたリーゼに激しく揺す振られていた。

リーゼの長い金髪は乱れ、純度の高い宝石のような紅眼から涙が溢

れている。
　どうしたんだ、リーゼ？　らしくないぞ。お前は俺みたいな下僕が傷ついたところで楽しげに笑い飛ばす？魔帝？だろ？　普通の女の子みたいに泣いてんじゃねえよ。
　そう言ったつもりだったが、俺の口はうまく言葉を発音できていなかった。リーゼが俺の名前を連呼することをやめてくれない。
「レージ！？　勝手に死ぬなんて許さないわよ！　レージはわたしにもっともっと面白いものを見せてくれなきゃダメなの！」
　無茶苦茶言うな、と俺は心で苦笑した。なんだかわからんが、精神と肉体が切り離されたように意識はあるのに痛みを感じなくなっている。果たしてこれが侵蝕というものなのか、それともただ死にかけているだけなのか……。
「どきなさい！」
　四条が乱暴にリーゼを押し退けた。
「な、なにすんのよ！？」
「泣き叫んでどうにかなるもんじゃないの！　こいつのことはあたしたちに任せてアンタはその辺で無事でも祈ってなさい！」
　リーゼに一喝し、四条は医者が聴診器でするように俺の体をペタペタと触ってくる。そして――
「漣、白峰をあっちの日向に運んで」
「日向って、大丈夫なのか？」
「まだ侵蝕は始まったばかりで爪の先が黒くなってる程度よ。体は普通の人間。日光を浴びせればとりあえずこいつの中の？影？は引っ込むわ」
「……わかった」
　真剣な目つきで頷いた迫間に担がれ、俺は日溜まりの中へと移動させられる。
「瑠美奈、こっからはどうするんだ？」
「あたしが白峰から？影？を追い出すわ。そしたら漣は〈黒き滅剣（ニゲルカーシス）〉でそれを処理して」

「できるのか？」
「やってみせるわ」
迫間が影から漆黒の大剣を取り出したのを認めると、四条は心臓マッサージをする感じに俺の胸部に両手を重ねて添える。
直後、日差しを浴びて収まっていたはずの？影？が再び俺の中で暴走を始める。しかしそれは侵蝕とは違い、なにかに抵抗するために暴れているような感覚だった――って！
「ぐあぁああぁあぁあああぁああぁぁあああぁあッッッ！？」
痛覚が、戻ってやがった。
絶叫し、まな板の上で跳ねる魚のように悶える俺。
「お、大人しくしなさい！」
四条が必死に抑えてくれている。コートを羽織っているとはいえ、お前も日差しの下だと辛いはずなのに……スマン。
……あっ、やべ、意識が……。
「レージ！？」
「白峰！　しっかりしなさい！」
リーゼと四条の声も遠い。
……悪い。
もう、限界みたい……だ……。

よーし、久々のＱ＆ａｍｐ；Ａコーナーです！　張り切っていきます！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝

Ｑ：影と？影？の表現の違いを教えてください。

Ａ：影は自然な状態の影を、？影？はそうでない状態——『混沌の闇』のものや影魔導師が物質化した——の影を意味します。

Ｑ：零児の〈魔武具生成〉はどのくらい魔力を消費するのですか？

Ａ：物によって違います。小さくてシンプルな武具ほど消費量は少なくて済みますし、大きくて複雑な武具ほど消費量も多いです。棍みたいに小さくはないけどシンプルな武具は中間くらいでしょうか。ちなみに、小さな武具でも込める魔力量を多くすれば強度が増したりします。

Ｑ：質問自分で考えてない？

Ａ：まさかｗ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝

いやホント、アホな質問も投げかけてくれる方はちゃんといますので。

次回の更新日は5月3日（火）です。

三章　過去への執着（7）

なんだろう……温かい。
この温かさは、人肌のそれに近い。
――ドクン。――ドクン。
安定したリズムの鼓動が聞こえる。
活力が全身に流れ込んでくる。
暗闇だった視界が白い光に覆われ、小さな手が俺に差し伸べられる。
俺はなにも考えないままその手を取り――

「……」
瞼を開くと、見慣れない木造の天上があった。
目が、覚めた？
俺は、生きているのか？
どうなったんだっけ？　ああ、確かあの時、俺は影魔導師の女――望月絵理香に影霊とかいう異獣の返り血から受けていた？影？の侵蝕を活性化させられて昏倒したんだった。その後望月は逃走し、迫間と四条が俺の中で暴れる？影？を取り除こうとしてくれた……ところまでは覚えている。
俺がこうして生きているってことは、手術成功ってことらしい。
あいつらにはまた借りを作っちまったな。感謝するだけじゃ埋め合わせできないぞ。
時にここは……俺たちが泊まっている城旅館の一室みたいだ。俺と桜居に割り当てられた部屋とは違い、洋風な趣が強い。俺も布団ではなくベッドに寝かされているし。
どうやらけっこうな時間意識を失っていたようだ。窓の外の景色は夕焼け色に染まっている。
「？」

ふと、俺は腹辺りに重みを感じて首を持ち上げた。
ふわっと甘酸っぱい香りが鼻腔をくすぐったかと思えば、そこには絹糸のような金髪があった。
「り、リーゼ……？」
彼女は人形のように整った顔をこちらに向けているが、瞼は閉じられ、呼吸も規則正しい。俺の体を枕にして眠っているようだな。
「マスターに感謝安定です、ゴミ虫様」
声がした方に視線を動かすと、部屋の入口付近にゴスロリメイド服を着たレランジェが立っていた。
「リーゼに感謝？」
「マスターはご自身の生命力をゴミ虫様に分け与えて体力の回復を促したのです」
「そんなこともできるのか？」
「魔力譲渡の応用安定です」
そうか、だからリーゼは疲れて眠っちまったんだな。でもそこで眠られると俺が起きるに起きられないんだが……。
リーゼがそこまでして俺を助けてくれたのは、なんか嬉しい。リーゼの中で俺はただの所有物や下僕からランクアップしてるってことだ。家族とまではいかなくても、仲間や友達くらいには想ってくれているのかもしれない。
「ありがとな、リーゼ」
俺は年下の家族にするように優しく礼を言い、リーゼの細い金髪を梳くように撫でた。
と――
「ん……」
リーゼの瞼が痙攣し、ゆっくりと開かれた。
ぼんやりと虚空を見詰めていたルビーレッドの瞳の焦点が、俺に合う。
「レー……ジ？」
小さくて可愛らしい唇が俺の名を紡ぐ。

「!?　レージ!?」
　ピョンと跳ね起きたリーゼは元々大きなお目々を更に見開き――ドカッ!　俺が上半身を起こす前になぜか飛びかかって馬乗りになってきた。
「勝手に死にかけるなんてレージの馬鹿っ!　馬鹿馬鹿馬鹿っ!　許さない!　この?魔帝?で最強のわたしをこんなもやもやした楽しくない気分にさせたレージなんて許さない!」
「ぐえぇ!?　がっ!?」
　ゆ、許さないのはわかったからなんで両手で俺の首絞めてトドメさそうとしてんですかお嬢様!?　それからそこのアホメイドは『そうだ殺れ殺れもっと殺れ』的なジェスチャーをやめれ!
「こんな気持ちは嫌!　退屈より嫌!　レージの馬鹿っ!」
　ごめんなさい謝るから許してマジで!?　俺死んじゃうよ?　今度こそ死んじゃうよ?　――あっ、綺麗なお花畑が……っていかん、ヤバいヤバい!
　俺は朦朧とし始めた意識の中で技をかけられた格闘家がギブアップする時のようにペシペシとリーゼをタップする。
「――いう!?」
　するとリーゼが変な反応を示した。仰け反った彼女は珍しく顔を真っ赤に染め上げている。おかげで首絞めからは解放されたが……あー、なるほど、俺はリーゼのオシリを叩いてたのか。
　リーゼは見られることは平気でも、触られることは基本的な女の子並に嫌がるんだ。要するになにが言いたいかというと――
「～～～～～～～ッ!!」
　声にならない悲鳴を上げるリーゼの乙女パンチが顔面を陥没させて、俺終了のお知らせ。打ち切り漫画でもこれほど酷い終わり方はないだろうね。……いや別に死なねえけれども。
「レージが死んだら困るのはわたしなのよ。だからわたしの許しなく勝手に死んじゃダメ」
　完全にノックアウトした俺に、馬乗りをやめたリーゼは頬を膨ら

ませて拗ねたようにそう言った。俺は痛む顔を擦りながら上体を起こし、そんなリーゼの頭を柔らかく微笑みながらくしゃくしゃと撫でる。

「お前の許可があってもなくても俺に死ぬ気なんてねえよ。どんなことがあっても今回みたいに意地でも生きてやるさ」

されるがままに頭を撫でられるリーゼは、気持ちよさげに目を細めている。

「チッ、だからゴミ虫様はしぶとい安定なのですね」

向こうから聞こえる舌打ちさえなければ、きっとドラマ的にいい場面なんだろうなぁ。

とその時、入口のドアがガチャリと開き、肩当て・胸当て・ガントレット・白マントを学園の制服の上から装備した銀髪美人が顔を覗かせてきた。

「もう少し静かにしろ、？魔帝？リーゼロッテ。零児の容体に響いてはどうす……零児!？　気がついたのか!？」

バン！　と勢いよくドアを開け放ち、銀髪美人――セレスがレギンス型の脚絆のまま部屋に上がり込んでくる。洋風な部屋だけど土足はオーケーなのか？　リーゼとレランジェは靴を脱いでいるように見えるが……。

「心配したぞ、零児。もう起きても大丈夫なのか？」

「まあな。なんか今日一日で一番調子がいいくらいだ」

今朝から目眩がしたりだるかったりしたのは、恐らく俺が？影？の侵蝕を受けていたからだと思う。それが取り除かれたのだから、体調はすこぶる良好だ。

「お前の声の方がうるさい。レージの傷に障る」

頭撫で撫でをやめられたことが気にくわなかったのか、リーゼがムッとした様子でセレスを睨んだ。いや、障るような傷はないんだけどね。

「零児は大丈夫と言っているのだから問題ないだろう、？魔帝？リーゼロッテ。それよりも貴様が病み上がりの零児に負荷をかけるよ

うなことなどしていないだろうな？」
「フン、そんなことしてないわよ」
あれ？　ちょっとお嬢様、俺、絞殺されかけた上に顔面減り込みパンチを食らった気がするんですけどアレは夢か？
セレスは取り調べをする刑事みたくリーゼを睥睨し、やがてわかったように目を反らした。
「まあいいだろう」よくないぞセレス。「それよりも、零児、なにか欲しい物はないか？　言ってくれれば持ってくるぞ？」
欲しい物か、そうだな……
「喉が渇いたな。あと小腹も空いてるから適当に食べ物を持ってきてくれるとありがたい」
「食べ物、か」セレスは思案するように手を口元に持っていき、「そうだ、私が厨房を借りて消化によいものでも作って――」
「だぁーっ！　なんか急に昼間お前にあげた温泉まんじゅうと同じものが食いたい気分になった！」
言葉を遮ってまでそう主張すると、セレスは「そうか」と心なし残念そうに俯いた。悪いけど、お前やリーゼは必殺料理人の称号を取れるくらい料理スキルが壊滅的なんだよ。逆に俺が消化されそうなものを作られたら処分に困る。
「了解した。零児の意識が戻ったことを誘波殿に伝えた後で買ってこよう」
「一人で買い物できるのか？」
「ば、馬鹿にするな！　我が祖国でも貨幣による取引は一般的だ。この国の通貨も誘波殿から支給されているし、問題などない」
つん、と踵を返して背中を向けるセレス。流石に馬鹿にしすぎだったか。
「ではすぐに戻る」
辞去するセレスを見送り、次に俺はまだ少し不機嫌そうな顔のリーゼを見る。
「リーゼ、お前も風呂にでも入ってこいよ。軽く山登りしたからか

なり汚れてるぜ？」
「む、そうね。レージも元気になったし。そうするわ」
「ではマスター、大浴場ならば現在貸し切り安定です。向かいましょう」
レランジェに連れられてリーゼも部屋を出ていった。
一気に静かになり、俺は窓の外の景色を眺める。この静けさはどこか安堵するものがあるけれど、今の俺からしたら寂しいもんだな。最近の騒がしい毎日に慣れてしまったせいだ。
「――さて、もういいだろ」
俺は入口のドアを向く。
「入れよ。いるんだろ？」
促すと、少し逡巡するような間を空けてからドアが控え目に開かれた。
「まったく、面倒臭え勘の良さだな」
「ホントよ。入るタイミングくらいこっちで決めさせてほしいわね」
呆れた調子の二人組――迫間漣と四条瑠美奈が部屋へと足を踏み入れてきた。いつも通り二人ともマントっぽい黒ロングコートを羽織っている。てか前から思ってたけど、四条はせっかくの綺麗な黒髪がすっかり保護色になってるぞ。
二人は靴のまま俺のベッドへと歩み寄ってくると、真剣な顔つきになってこう切り出した。
「話がある」
「望月先輩についてよ」

三章　過去への執着（７）（後書き）

どうも夙は定期的にコメディリウム（↑謎）を摂取しないと死んでしまうらしいです。
三章はこの話で終わるつもりだったのですが、長くなりそうなので分割しました。

ではではＱ＆ａｍｐ；Ａ行きます。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

Ｑ：レージ死んでバッドエンド？

Ａ：生きてますから；

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

おや？　これだけしかない……。

次回の更新は５月７日（土）です。

三章　過去への執着（8）

鷹羽畔彰が追っているはぐれ影魔導師――望月絵理香。そいつはどうやら鷹羽の弟子である迫間漣と四条瑠美奈の二人と深い関係があるらしい。『先輩』とつけるくらいだから影魔導師の先輩かと思ったが、俺の記憶に残っている会話から察するに、あの二人が一般人だった頃の知り合いだろうな。

「話の前にまずは礼を言わせてくれ、助けてくれてありがとな」

この二人がいなければ俺は？影？の侵蝕をくらって今頃どうなっていたかわからない。命の恩人たちに心から感謝の言葉を述べなければバチがあたるってもんだ。

すると四条がなにに驚いたのかきょとんと目を見開いた。

「凄いわ、ちゃんとお礼言える知能があったのね」

人が素直に感謝して頭まで下げたってのにこのチビは……。

「てめえコラ四条、俺をチンパンジーかなんかと勘違いしてねえか？」

「まさか、それはないわよ。だってチンパンジーに失礼じゃない」

「よーし迫間、こいつぶん殴っていいか？」

五センチほど身長縮む勢いで頭からゴツンと。

視殺合戦を勃発させる俺と四条を見て、迫間は面倒臭そうに後頭部をボリボリ掻く。

「その辺にしようぜ、瑠美奈。俺らは喧嘩しに来たんじゃねえんだから」

「わかってるわよ」

迫間に宥められた四条は、フン、と鼻息を鳴らしてそっぽを向いた。よっしゃ、俺の勝ち。

「あの影魔導師の女についての話だったよな。聞かせてくれ、お前らとどういう関係なんだ？」

あんな場面を見せられて気ならないと言えば嘘だ。蚊帳の外のま

までいたくないってのもあるが、そこを知っておけば俺は二人の助けになれるかもしれない。

「えーと、あー、なにから話せばいいんだっけ？　俺たちと望月先輩は幼馴染みたいな感じっつうか……ダメだ。瑠美奈、パス」

やっぱり説明が苦手そうな迫間は四条にバトンタッチしつつ、なぜか部屋の照明を消した。この程度の明るさでも気分悪くなるのだろうか？　こんなこと思っちゃ悪いから口には出さないけど……不便だな、影魔導師は。

外も夜の帳が下りたため、部屋の中は明かりがないとなかなかに暗い。迫間に説明を丸投げされた四条は少し不満そうに溜息を吐き、語り始める。

「アンタが戦ってた影魔導師――望月絵理香先輩とあたしたちとの関係は漣が言った通り幼馴染に近いわ。あたしたちは小四の時に望月先輩の家が経営している剣道場で知り合ったの」

そんな昔から知り合いなのに苗字でしかも『先輩』をつけて呼ぶんだな。どうでもいいけど。

「あたしと漣と望月先輩、それからもう一人、広瀬智治って男子の先輩がいてね。なんだかんだで意気投合して、あたしたち四人はよく一緒に遊んだりしてたわ。同じになった中学でもみんな剣道部に入ったりして、あの頃は毎日が本当に楽しかった」

昔を懐かしむように言った四条はそこで一拍の間を置き、より表情に深刻さを増して続ける。

「でも三年前のあの日、あたしたちは『混沌の闇』と関わってしまった。望月先輩と広瀬先輩は巨大な影霊の腕に捕まって？穴？に引きずり込まれ、あたしと漣は？影？の侵蝕を受けた。師匠と誘波が来なければあたしたちはそこで終わってたわ」

「誘波が？」

「ええ。今思えば誘波は『混沌の闇』の？影？に触れても侵蝕を受けてなかったわね。どうやってるのかはなんとなく想像つくけど」

二人が影魔導師としての人生を歩むようになった日にはもう誘波

と会っていたのか。だから二人は異界監査官もやっているのだろう。
「てか待て、情報を整理する」俺は額に人差し指をあてて目を瞑り、
「つまり『混沌の闇』に呑み込まれたと思っていた望月が生存していて、はぐれ影魔導師となってこの地になにやら異変を起こしている。目的は過去に失った人を取り戻すためとか言ってたけど、その取り戻したい人ってのが――」
「そう、広瀬先輩よ。特徴を挙げるなら『普通すぎるところ』と答えられるくらい冴えない先輩だったけど、あの人は望月先輩の恋人だったの」
恋人。本当に大切な人のためなら、人は恐らくなんだってやるだろう。あの時望月が見せた萎縮してしまいそうなほどの執念がそれを物語っている。人間を百人殺せば恋人が生き返るとしたら、あいつは本気でやるだろうな。
「だが、あいつはこの辺の次空を歪めてどうするつもりなんだ？　それだけで恋人が返ってくるわけがないだろ？」
歪震のエネルギーを利用する蘇生術とか装置とかがあったりするのか？　それとも世界を人質に神様を脅迫して生き返らせてもらうとか？　どちらにしろありえない。特に後者。
「そりゃアレだ。強い歪みは影霊を惹き寄せるんだ」
「悪い、迫間。意味が全くわからん」
影霊とかいう異獣の中には人の願いをなんでも叶えてくれるやつでもいるのか？　そんなどこぞの神の龍的な存在がいるんなら納得だけどな。
四条が腕を組む。
「どうも広瀬先輩は二人を『混沌の闇』に引きずり込んだ影霊に捕まってるらしいのよ。望月先輩はその影霊をおびき寄せようとしてる」
「そいつを倒して恋人を助けるってことか？　てか捕まったのって三年前の話だろ？　この際だから言葉は選ばねえけどよ、とっくに死んでるんじゃないのか？」

あの闇の世界でただの人間が三年も生きられるはずがない。時間の流れが違うと言われれば反論できないが、『混沌の闇』が俺たちの世界と同じ次元に存在するなら大差はない気がする。

「あたしたちも俄かには信じられないわ。でも、現に望月先輩は生きていた。先輩は最近影魔導師になったって言ってたし、可能性はあるわ」

「もしも本当に広瀬先輩が生きているんだとしたら、俺らの気持ちは望月先輩と一緒だ。絶対に助け出したい。たとえ、監査局や連盟を敵に回そうともな」

瞬間――

二人の雰囲気が、険呑なものに変わった。

なんだ？　お前ら、一体なにをするつもりだ？

迫間と四条は俺のベッドから一歩下がると、少し躊躇うようにお互いの顔を見合わせ――

「だから悪いけど、あたしたちは望月先輩につくわ」

「裏切り者なんて面倒臭せえから嫌だが、形的にはそうなっちまうな」

そう、はっきりと宣言した。

「な……ん……」

突然すぎて理解が追いつかず、俺の口はうまく言葉を紡げなかった。

裏切る？　こいつらが、俺たちを……？

「俺と瑠美奈は、もう俺たちみたいな人を出さないために影魔導師や異界監査官をやっていた。その考えは今だって変わらないが、広瀬先輩は俺らにとっても大事な仲間なんだ。救える可能性があるならそれに賭けてみたいと思う」

「引き止めても無駄よ。あたしたちは既に望月先輩に協力してしまった。もう、戻れないわ」

そうか、望月本人から直接話を聞いていたから、目的や手段を詳しく知っていたのか。

「もうすぐこの辺りにとんでもないことが起こるわ。だからアンタたちは一般人を連れて逃げなさい。できるだけ遠くにね。それを言いに来たの」

「……お前ら」

ようやく開いた口で言いかけたその時――

「ふふっ。漣くん、瑠美奈ちゃん、そろそろ面会時間は終了よ」

部屋の中心から霧状の闇が噴き上がり、黒セーラー服を纏った女が嫌味ったらしく笑いながら出現した。

「お別れの挨拶はできたかな？」

モデルのように腰に片手をあて、オレンジ色のヘアバンドで留めたサラサラの長髪をふさぁと掻き揚げるそいつは――

「望月、絵理香……」

「あら、名前覚えられてるのね。ふふっ、物覚えのいいわんこさんは嫌いじゃないわよ」

「てめえ！」

くすり、と笑う望月を俺はベッドから起き上がって捕えようとするが――バシッ！

四条が？影？で構築した〈束縛（チェイン）〉とかいう黒い帯で、俺を一瞬にして簀巻き状態しやがった。

「くそっ！　四条！　放せ！」

首から上だけは縛られなかったが、畜生、どんなにもがいても解けねえぞこれ。〈魔武具生成〉でナイフを作って切断……は無理だ。『気をつけ』の姿勢のまま固定されてたんじゃ生成した瞬間に自分を刺しちまう。

部屋を暗くしたのは影魔導師の力を使うためだったのか。味方だと信じてたからなんの警戒もしてなかったぜ。……やられた。

「アンタはもうあたしたちと関わらない方がいいわ」

「白峰、師匠によろしく言っといてくれ。あー、面倒だったら別に

いいぞ」
　無様にベッドに転がされる俺を、迫間と四条は冷たく見下ろしてそう告げた。
　と、望月が二人の肩を両手で抱くような形で間に割り込んでくる。
「そういうわけだから、じゃあね、監査局のわんこさん」
　ぶわっと闇が噴出して三人を包む。影魔導師の転移術だ。
　逃がすか！　と思ったところで、縛られた状態の俺には成す術なんてなかった。
　転移完了と同時に？影？の帯が消滅する。
「ああくそっ！　なんだってんだよ！」
　俺はすぐさま立ち上がり、この非常事態を皆に伝えるために部屋から飛び出した。
　直後――

　ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

　空間が、大きく揺れた。
「なっ！？　また歪震が！？」
　俺は壁に手をついて振動に堪える。今回は昼間のよりもでかいぞ。
　これが四条の言っていた『とんでもないこと』ってやつか？
　……いや、これはまだ前兆だ。

　Ｐｒｒｒｒ！　Ｐｒｒｒｒ！　Ｐｒｒｒｒ！

　三十秒ほど続いた揺れの後、すぐに誘波から電話がかかった。
『レイちゃん大変です。すぐに三階にある屋外レストランまで来てください』
　誘波の口調は落ち着いてはいたが、いつものボケがないことから切羽詰まった状況だということが伝わってくる。

『「混沌の闇」の侵蝕が、物凄い勢いで広がっています』

三章　過去への執着（8）（後書き）

これにて三章は終了です♪　次回は間章になると思います。

本日のQ&Aはお休みします。

次回の更新は5月10日（火）です。

間章（2）

目に見える速度で森が暗黒色に塗り潰されていく。

夜が来たからではない。『混沌の闇（ケイオス・ダーク）』の侵蝕を受けているのだ。

森の随所に穿たれた異空間の？穴？から漏れ出る闇が、留まることなくその支配圏を広げている。木が、草が、土が、有機物とも無機物とも判断できない純黒の物質へと変えられていく。

森の中は地面から三十センチほどの高さまで薄い黒霧が立ち込め、ドライアイスをお湯に投入した舞台の特殊効果を彷彿とさせる。白煙ではないが。

そんなとてもこの世の光景とは思えない森の中を進みながら、迫（は）間漣（くまれん）がルンルンと上機嫌に前を歩く望月絵理香（もちづきえりか）に問いかけた。

「望月先輩、これ本当に大丈夫なのか？」

漣や瑠美奈は彼女のことを『先輩』と呼んでいるが、特に敬語を使ったりはしない。というのも、小学校の頃から四人で通っていた望月道場――望月家が経営している剣道場――は目上の門下生を苗字でしかも『先輩』をつけて呼ぶ習わしがあったのだ。それ以外はどう言葉が砕けようともお咎めなし。漣も瑠美奈もその規則の意味をついに理解できないまま道場を去ったが、未だに『望月先輩』『広瀬先輩』と呼んでいるのは当時の名残のせいである。

望月は流れるようなサラサラの長髪を揺らして首だけで振り返る。

「ふふっ。大丈夫大丈夫。漣くんも立派な影魔導師なんだから、心配しなくても侵蝕なんて受けないわよ」

「あーいや、そうじゃなくて。なんつうかその――」

「この状況、広瀬先輩を助けた後に元に戻せるのかってことよ」

説明下手な漣の後を、隣を歩く四条瑠美奈（しじょうるみな）が引き継いだ。黒真珠のような彼女の大きな瞳が眼前にいる先輩を睥睨している。

流石に二人も黙ってはいられないのだ。これほどの規模の侵蝕を放っておいたら次第に被害が拡大し、いずれ誰も止められなくなっ

て世界が終わってしまう。たとえ広瀬智治（ひろせともはる）を救えなかったとしても、それだけは絶対に防がなければならない。

「こうなる前に言ったよね？」望月は余裕の笑みを貼りつけ、「私は世界で唯一『混沌の闇』に喰われて生還し、影魔導師となった人間よ。言わば世界最高の影魔導師。この程度の侵蝕ならパパパッて修復できるわ」

望月があまりにも軽く言うので、果たしてそれが真実なのかどうか判然としない。漣も瑠美奈も望月に手を貸したことに今さら後悔などするつもりはないが、もしも侵蝕の修復に失敗した場合を想像すると背筋が寒くなった。

「それと一般人の心配もしなくっていいわ。人を巻き込まないために歪震源を森の奥にしたんだし、侵蝕が森を越える前にあのおじさんならなんとか食い止められるでしょ？　ついでにそろそろ異界監査局も動いて一般人を避難させてる頃でしょうね。ふふっ、どうだろうと彼らに私たちの邪魔はできないわ」

不敵に笑う望月。彼女は悪戯的ななにかを企んでる時によくこうした笑いをしていた。だが、これは悪戯というレベルを遥かに超えている。漣たちの知る昔の望月は正義感が強く人情味のある人だった。だからこそ、ここでそう笑う彼女に違和感を覚える。

「俺たちもだけど、三年会わない間に変わっちまったな、望月先輩」

「そうね」

漣も昔から面倒臭がり屋だったわけではないし、瑠美奈も今ほど好戦的ではなかった。どちらも師匠――鷹羽畔彰（たかばくろあき）の思い出したくもないスパルタ教育が影響していたりする。

「望月先輩」と瑠美奈。「一般人のことを考えてるのなら、なんでもっと人のいない場所を選ばなかったのよ？」

「わかってないわね、瑠美奈ちゃん。ここじゃないといけない理由があったってことよ」

「理由ってなによ？」

「ふふっ、内緒♪」

人差し指を桃色の唇の前で立ててウィンクを飛ばす望月。どの角度から見ても美人なだけに、その仕草だけで世の男どもが魅了されるくらいの破壊力がある。現にポケーっとしていた漣は脛を瑠美奈に蹴られて蹲っていた。

「まあ、そのうち話してあげるわね。私は二人にとーっても感謝してるのよ。歪みが規定値に達するまでもう数日ほどかかると思ってたけど、二人のおかげでこんなにも早く強大な歪震を引き起こすことができたんだから。これなら絶対に？彼？も惹き寄せられてるわ」

「手伝ったって言っても、変な機械を言われた場所に設置しただけだけどな。面倒だったけど」

「あれが次空を歪ませる装置なんでしょ？　そんな物どこで手に入れたのよ」

「ふふふっ、それも今は内緒よ」

詮索はするな、ということだろう。そのうち話すと言っているのだから、今無理に訊き出すこともない。漣と瑠美奈は口を噤み、これ以上余計な会話は慎むことにした。

「そろそろ到着ね」

と望月が嬉しそうに口元を弛ませる。三人が目指している場所は歪みの中心――つまり歪震源だ。望月曰く、そこに広瀬を捕まえている影霊（レイス）が現れるのだという。

「今さらだけど、転移した方が早くなかったか？」

「いいじゃない。闇の森をお散歩がてら、久し振りに漣くんたちとお話したかったし」

こんな場所を歩くことを『お散歩』だなんて暢気に言える感覚は漣にはなかった。

「待って」

その時、瑠美奈が警戒心を高めた声で二人の歩行を制した。

「影霊がいるわ。それもたくさん」

一面闇色の世界の中に、ポツポツと赤い光点が現れる。それらはみるみる数を増して漣、瑠美奈、望月の三人を包囲した。

これら爛々と輝く赤い点は、全て影霊の眼である。
「おいおい面倒臭えぞ！　何体いるんだよこれ！」
「漣、喋ってないで戦闘態勢を取りなさい！」
バサッ、と背中から巨大な黒翼を生やす瑠美奈。反重力効果のある？影？の翼が、瑠美奈の小さな体をふわりと宙に持ち上げる。
「……戦るしかねえか」
漣も足下の影から漆黒の大剣――〈黒き滅剣（ニゲルカーシス）〉を引き抜き、構えた。
と――
「ふふっ」
軽く嘲笑する望月が、両手に影刀を構築する。
「私の道を阻むって言うのかな、雑魚さんたち？　ペットにしちゃってもいいんだけど、雑魚さんは雑魚だからいらないわ」
望月は先発で飛びかかってきた狼似の影霊をいとも簡単に斬り捨て、
「私の邪魔をするのなら――みんな消えてもらうわね」
ゾワッ、と底冷えするような口調でそう宣告した。

間章（２）（後書き）

今回は間章なので短めです。

Q&Aは質問がないためお休みですが、キャラクター人気投票を始めました。下のリンクから飛べますので、よければ投票してください（キャラを選んだ理由とかありますが、必須じゃないので書きたくなければ無視してくれて構いません）。

読者様が投票してくだされば夙のモチベーションが上昇しますし、人気キャラにはスポットライト当てます（短編とか外伝とか書いたりするかも）。

ではでは、投票に限らず感想・評価・質問待ってます♪

次回の更新は5月１４日（土）です。

四章　暗黒の深部（1）

森が死んでいく。
ジャングルスパへ続く渡り廊下の上に設けられた屋外レストラン。そこから一望できる景色は、現在時刻が夜だとしてもこんなに黒いわけがない。
暗いじゃなく、黒い。
まるで黒の絵具だけで描かれたなんの味気もない絵画みたいな光景を、俺は一度だけ見ている。だが、あの時とはスケールが違いすぎるぞ。
誰が見ても非常事態なのは明白だけれど、ここで焦ってはダメだ。まずは落ち着いて状況の確認をするべきだろう。俺は局員たちが集まっている屋外レストランの中で、ド派手な十二単を纏っているウェーブヘアーの女を見つける。
「誘波、さっきの歪震の被害はどれくらいだ？」
「ご覧の通りですよ、レイちゃん。今回はアレだけで、『次元の門』は開いていません」
誘波は徐々に侵蝕を広めていく闇を指しながら答えた。
「『次元の門』が開いてない……？」
それはおかしいだろ。あれだけでかい歪震だったんだ。一つも開かないなんてありえない。
「恐らく犯人の影魔導師が繰り返し行っていた実験は、このように歪震で『混沌の闇』だけを大量に開くためのものだったのでしょう。そうなると、昼間の歪震は犯人の意図とは無関係だったと考えられますね」
「そんな確証のない想像なんてどうだっていいだろ。一般人の避難は？」
「順調です。桜居ちゃんとレトちゃんがパニックを最小限に抑えて誘導しています」

桜居はそういうの巧みそうだからな。誘波もあいつがいて助かったって顔してやがる。

「しかし誘波殿、一般人の避難ができても、アレを止めなければいずれ呑まれてしまうのでは？」

セレスが率直に意見を述べる。彼女は努めて冷静でいようとしているが、初めて見る『混沌の闇』の侵蝕を前に恐怖心を隠し切れていないな。さっきから聖剣の抜き差しを繰り返して忙しない。

「それはクロちゃんがなんとかするはずですよ」

言って、誘波は屋外レストランの先端に佇む男に視線を向けた。黒コートに黒帽子の男――鷹羽畔彰は、煙草を吹かしながら右手を天に翳している。その掌の真上には光すら吸い込んでしまいそうな真っ黒い塊が浮遊し、今もなお周囲から？影？を集めて膨れ上がっていく。……でかい。気球くらいあるぞ。

「――ったく、ギリギリじゃねえか。クソがっ」

鷹羽はぼやくと、ぐぐぐっと右手を後ろに引き絞り、逆に狙いを定めるように左手を前へ突き出す。

そして――

「フン！」

気球大の？影？の塊を、ぶん投げた。

砲撃でもしたかのような速度で飛ぶそれに向けて、鷹羽は即座に抜いた銀色の拳銃を発砲。すると？影？の塊は夜闇と混ざり合って目視できなくなる直前に爆音を上げて破裂し、千々と散った破片が四方八方へと落ちていく。

一度見ているからか、俺にはその破片が鎖と杭の形をしていることがわかった。〈封縅〉とかいう侵蝕を食い止めるための術式だ。

「あのガキめ。やりやがったな」

鷹羽は吐き捨てるように言うと、ドサッとその場に胡坐を掻いた。

「どうしたんですか、クロちゃん？」

「どうしたもこうしたもねえ。これほどの〈封縅〉を展開すりゃあ、そいつの維持に手一杯になって俺は動けねえんだ。あの小娘、そこ

まで計算した規模で仕掛けてきやがった」
　鷹羽の態度からして動けないってのは嘘じゃないだろう。この場にいる影魔導師がこいつだけと考えると――
　まずい。
　非常にまずいぞ、これは。
「クソッ！　俺の馬鹿弟子どもはこの緊急事態にどこほっつき歩いてやがんだ」
　鷹羽は、いや、俺以外の全員が迫間漣と四条瑠美奈の裏切りを知らないんだ。
「そのことで、話がある」
「ああ？」
　威圧感剥き出しの鷹羽に睨まれるが、尻込みなんてしている場合じゃない。俺が言わなきゃ誰も言っちゃくれないからな。
　粗方説明すると、鷹羽は苛立たしげに舌打ちした。レランジェ並のキレだったが、俺に向けられたものではないので立腹はしないさ。
　セレスや他の局員たちは二人の裏切りに愕然とし、誘波だけは「あらあら」って暢気に苦笑なんかしている。……ん？　そういやリーゼとレランジェがいないな。マジで大浴場に行ったのかもしれん。あいつらの方が暢気だ。
「馬鹿弟子どもが、まんまと口車に乗せられやがって。クソッたれ」
　煙草を燻らし、見本のような悪態をつく鷹羽。
「口車ってことは、あいつらの言ってた広瀬ってやつは助からないのか？」
「助かるわけねえだろアホか。『混沌の闇』に喰われて三年生きられるなんてありえねえ。俺らでも三日でお陀仏だ。仮にも影魔導師なら少し考えりゃそんくらいわかるだろうに、弟子どもは希望を植えつけられて馬鹿になってんだよ」
「ちょっと待てよ、望月は影魔導師に最近なったって言ってたらしいぞ」
「はぁ？　いいかよく聞け、監査局のガキ。俺はあの小娘を二年追

ってんだ。なにが言いてえかわかるか？　アレと馬鹿弟子どもが影魔導師になった時期は同じっつうことだ。最近じゃねえ」

「嘘ってことかよ」

じゃあ、一体なんなんだ？　望月の本当の狙いは。

「人を騙し、心を弄ぶとは、その望月という者を私は許せそうにないぞ」

セレスが望月の非道な行為に怒りを滾らせている。今にも剣を抜いて闇へ飛び込みそうな勢いだったが、セレスも侵蝕のことは説明を受けて知っている。歯痒そうに拳を握るだけで止めた。

「気が合うわね、騎士崩れ。わたしもあいつ嫌いよ」

自信満々な声が背後から聞こえた。

振り返ると、やっぱり魔女みたいな黒衣を纏った少女が立っていた。腰よりも長い金髪はしっとりと濡れていて、頬は桃色に火照っている。どう見てもお前風呂行ってただろ！　行け言うたの俺だけど！

「マスター、まだ髪が濡れていて不安定です。動かないでください」

そう言いながらレランジェがバスタオルでリーゼの頭をふきふき。頼むからお前ら、もう少し緊張感を持ってくれ。

「貴様と気など合いたくもないし私は騎士崩れなどではない！　今すぐにその首を刎ねてやりたいところだが、生憎と貴様を咎めている場合ではないからな」

「ふん、わたしは今すぐ決闘してもいいわよ？」

「とりあえず面倒臭いからお前らもう黙っとけよ！」

俺は迫間みたいなことを言いつつ、鷹羽に向き直る。

「なあ、このまま待ってたら侵蝕は収まったりするのか？」

「ああ？」鷹羽はだるそうに俺を睨み上げ、「日が昇りゃあ収まるが、同時に侵蝕された箇所は消滅するぞ。それでまた夜になれば侵蝕も再開する。ついでに言やぁ、俺の〈封縅〉が持つのはせいぜい

三時間ってとこだ」

三時間。その間にアレをどうにかしないといけないってことか。厳しいな。

そのどうにかする方法なんだが、俺が今思いつくものはたった一つしかない。

ぶん殴ってでも、迫間と四条の目を覚まさせてやることだ。

「一応保険はかけていますが、レンちゃんとルミちゃんを連れ戻さないと間に合いませんね」

誘波も俺と同じ考えのようだ（その『保険』ってのは気になるが）。しかし師匠である鷹羽が動けない以上、監査局の誰かがあいつらを説得するしかない。

そしてその役目は、俺が引き受けたい。いや、俺じゃないとダメだ。

あいつらが俺にだけ裏切りを告げた真意を考えろ。誘波や鷹羽だと簡単に捕まってしまうし、他のやつらじゃ話にならない。消去法で俺、という理由もあるかもしれないが――

『俺と瑠美奈は、もう俺たちみたいな人を出さないために影魔導師や異界監査官をやっていた』

その影魔導師や異界監査官としての意志を、俺に託したんじゃないだろうか。そうでなければわざわざ裏切りを告げる意味がない。

でも悪いが、勝手に託されても困る。迷惑だ。だからこの意志は俺が直接本人たちへ突き返してやるよ。あの二人には他にも返さないといけないでかい借りだってあるしな。

「誘波、迫間たちの居場所ってわかるか？」

「私の風で探っていますが、既に彼らの移動した痕跡は見つけました。恐らく歪震源――森の奥地です」

やはりな。そんな気がしていた。
「なあ、誘波、影魔導師じゃない俺たちでもあの中に入れる方法があるんじゃないのか？」
「どうしてそう思うのです？」
「お前が平気な面して『混沌の闇』の？影？に触れてたって四条から聞いたんだ」
もしかしたらあの会話は四条がくれたヒントだったのかもしれないな。……考えすぎか。
「う～ん、ここで『実は私は影魔導師だったのですよ』と冗談を言いたいところですが、そんな雰囲気ではありませんね。空気を読みます」
その発言が既に空気を読んでいないことに気づけ。
「私だからできることですが、風で侵蝕を押し返していました」
四条の言葉じゃねえが、想像通りだな。
「そうなると、あの闇の森に突入できるのはお前だけってことか」
「いえいえ、そんなことはありませんよ」
いつものおっとり口調で言うと、誘波は両手を胸の前に出して掌を上に向けた。
瞬間、それぞれの掌上に小さな竜巻が発生する。埃くらいしか舞い上がりそうにない弱い風に、誘波の波打つ髪がハタハタと靡く。
竜巻はすぐに止んだ。すると、誘波の両掌に透き通った青色の宝玉が二つ乗っていた。ビー玉に似ている。
「これは私の魔力を結晶化させたお守りです。これを持っていれば、一時的にレイちゃんたちにも風の加護を与えることができます」
「つまり、侵蝕を受けないと？」
「そうです。あはっ、レイちゃん、覚悟の決まった顔をしていますねぇ。カッコイイですよ。――行ってくれますか？」
「ああ、このメンツの中で迫間たちを説得できるのは俺くらいだろ」
俺がやる気になっている理由を話すのは少々恥ずかしいので、それだけ言っておく。

誘波から二つの宝玉を受け取る。鷹羽が文句言ってこないということは、作戦に賛成ってことだろう。同時に宝玉の効果も保証された気分だ。

と、誘波が珍しく深刻な表情になる。

「いいですか、レイちゃん。このお守りは同時に二つまでしか生成できません。一人一つです。パートナーはレイちゃんが選んでください。あっ、私はダメですよ」

「突入組は最大で二人ってわけか。で、お前はなんでダメなんだ？」

「私と二人っきりでデートしたい気持ちはわかりますが、残念ながら私も動けそうにないのですよ」

チラッ、と流し目をする誘波。「誰がデートしたいかっ！」とツッコミつつ俺も釣られてその方向に視線をやると――なっ！？

空と地上の両方から、様々な姿をした異獣が〈封縅〉を越えて進攻していたのだ。

昨夜のクマ似の異獣と同じで、真っ黒な全身と赤く光る眼をした異獣たち――影魔導師風に言うと影霊ってやつだ。パッと見だけでも百体以上。どんどん増えてやがる。

「アレは私じゃないと捌き切れないと思いますので」

確かに、ここで誘波を選んだ場合、迫間たちを説得する前にこちらが攻め落とされちまう。ていうか、これじゃあいつらのところに辿り着けるかも怪しくなったんじゃないか？

「レンちゃんとルミちゃんがいる場所の近くまでは私が転移で送ります」大丈夫そうだ。「なのでレイちゃん、早く決めてください。ただし、一人は許可しませんよ」

釘を刺された。お見通しかよ。

さて、パートナーか……どうしたもんか。

「零児、私が行こう。話を聞いた限り、私の聖剣は役に立つはずだ」

チャキ、とセレスが自分の背丈よりも長い超長剣――聖剣ラハイ

アンを示す。光属性を持つその剣の力は間違いなく？影？には有効的だ。

うん、セレスがいいかもしれな――

「レージ、わたしを連れて行きなさい！」

――いと思った矢先、リーゼに宝玉を横から掠め取られた。

「？魔帝？リーゼロッテ、これは遊びではないんだ。それを渡せ」

セレスが対抗心からではなく騎士としての顔で凄むが、リーゼは怯まない。まったく困ったお嬢様だな。どうせまたその顔には好戦的で楽しそうな笑みが……浮かんでない。

「そんなことわかってるわ」

あのリーゼが、遊びじゃないことをわかっている……だと？

「わたしはまだあの真っ黒女と決着をつけてない。だからわたしが引っ捕まえるの。それからレージを苦しめたあいつも燃やしてやるわ」

真っ黒女ってのはたぶん四条だ。俺を苦しめたあいつってのが望月だな。

「どっちも許さない。わたしが？魔帝？で最強ってことを思い知らせてやるわ」

リーゼはこれまで見たことのない真剣な光を紅い瞳に宿していた。唇が笑みの形を作っていない。……ガチだぞ、これ。逆にセレスが怯んでやがる。

本気でリーゼは自分の楽しみ以外の理由で行動を起こそうとしてるんだ。この進歩はでかいんじゃないか？

「……わかった。セレス、悪いがリーゼを連れて行く」

動機はまだまだ自己中に聞こえるけど、解釈を変えると『ライバルを助けたい。友を傷つけた敵を討ちたい』ってことだろ。

「なっ！？　だが、しかし、零児……」

「本当に悪いな、セレス。よく考えたら、お前の光は強烈すぎるんだ。間違って迫間と四条を殺しかねん。気持ちはわかるが、俺に同行するより誘波が討ち漏らした異獣を片づけてくれ」

諭すように言うと、セレスは少し渋った後に「了解した」と引き下がってくれた。
「ほらレージ！　早く行くわよ！」
「マスターが行くならこのレランジェもお供安定です」
「いやお前話聞いてたか？　行けるのは二人までだ。いくら魔工機械だろうと侵蝕されるぞ」
「チッ！　ではゴミ虫様のお守りをレランジェに渡してください」
「却下だ！」
腹の立つ舌打ち魔め。おかげで緊張が解れて怒りのパワーが漲ってきたじゃないか。
「レイちゃん、異獣の進攻が防衛ラインギリギリまで迫っています。決まりましたか？」
おっとりしているようで切迫した誘波の声に、俺は首肯する。
「ああ、俺とリーゼを転移してくれ」

四章　暗黒の深部（1）（後書き）

リーゼルート入りましたぁ。セレスファンの方すみません。三巻では必ずや……。

さて、Q&Aは未だにゴールデンウィークから抜けません（笑）

だって質問がないんですもんＴＴ

でも最近便利なもの始めたから質問なくてもネタに困らないのです！

人気投票の現在結果を発表するという、実は誰でもいつでも見れるものをここで書く卑怯技です。

やる意味がない？　いや知りません。やります。

==========

1位　3票　レランジェ
1位　3票　セレスティナ・ラハイアン・フェンサリル
3位　2票　スヴェン・ベルティル
4位　1票　リーゼロッテ・ヴァレファール
4位　1票　法界院誘波
4位　1票　マルファ

（計１１票）

==========

＝＝

……。

メガネに2票も入っとる！？Σ（ ゜Д ゜；）

誰か知りませんがあの人に投票してくださってありがとうございます♪

あれ？　主人公？　あれ？

次回の更新日は5月17日（火）です。

【宣伝】新人賞用の新作を試し投稿してみました。よろしければそちらの方も読んでみてください♪

四章　暗黒の深部（2）

……誤算だった。
いや、普通に考えればわかったことか。
なにがって？　簡単なことだ。
「……見えねえな」
真っ暗なんだよ、視界が。
ライトアップされていた場所からいきなりこんな暗闇に飛び込んだんだ。加えて周り全てが黒一色に染まっちまってるもんだから、どこになにがあるのかすぐには把握できそうもないぞ。
とにかく、まずは点呼を取ろうと思う。
「リーゼ、いるか？」
「ここにいるけど？」
返事はすぐにあったが……どこだ？　わからん。
とりあえず声のした方に手を伸ばすと――むにっ。
「にぅ！？」
ん？　なんか奇妙な悲鳴が聞こえたな。あと小振りだけど柔らかくて弾力ある感触が布越しに伝わってゴブハァッ！？
「レージの馬鹿レージの馬鹿レージの馬鹿レージの馬鹿レージの馬鹿レージの馬鹿ぁッ！！」
「ぐふっ！？　がふっ！？　ま、待てリーゼ！　謝るから！　なんか知らんけど謝るから連続顔面減り込みパンチはちょっと待ぶべはっ！？」
これから敵と戦うかもしれんのに、なにゆえ俺味方に私刑（リンチ）されてんの？
「こ、今度やったら、も、燃やすわ」
震えた声で言って、リーゼは俺を殴るのをやめてくれた。どうも俺は変なところを触ってしまったらしい。けど仕方ないだろ。リーゼも黒衣を纏ってるからかなり見えにくいんだよ。

まあでも、その明るい金髪のおかげでまだマシだと思う。これから相手するだろうやつらなんて保護色もいいところだぜ。できれば、戦いたくないね。

幸いなことと言えば、今日が快晴で満月に近いということだ。月明かりと星明かりのおかげで、目さえ暗闇に慣れれば戦えないこともない。

「いいか、リーゼ、少し時間を置いてから移動するぞ」

「なんで？」

「いやなんでって、お前も暗くて見えないだろ？　目が慣れるまで待つんだ」

「わたしは普通に見えるけど？　レージは見えないの？」

シルエットの動きでリーゼが小首を傾げたのがわかる。

「マジか。こんな暗闇の中で普通に見えるってどんだけ夜目が利くんだよ」

そういや違うことなく俺の顔面を殴ってたな。まだ痛えし。

「ふふん、だってわたしは？魔帝？で最強よ？」

あっ、今度は偉そうに控え目な胸を張ったぞ。俺もだいぶ暗さに慣れてきたようだな。

どうやらリーゼを連れてきたのは人選ミスじゃなかったみたいだ。このお嬢様がなんの障害もなく暴れられるのなら、これほど頼もしい存在はそうはいない。

……ああ、わかってるさ。頼もしいのは間違いないが、リーゼの危険度はセレスよりも高い。だから釘を刺しておかないとな。

「リーゼ、これまで何度も言ってきたが、間違ってあいつらを殺したりするなよ？」

「それが？ルール？なんでしょ？　わかってるわ」

「望月もだぞ。あいつには事情を全部吐かせてから迷惑かけた人たち全員に頭下げさせにゃならんからな」

「だからわかってるって。首から上を持って帰ればいいんでしょ？」

「晒し首！？」

そこまでの謝罪は求めてねえよ！　そしてお嬢様、あなたホントにわかってらっしゃいますよね？　今のはリーゼなりの冗談だと信じていいんですよね？

とか思っている間にも、俺の目は順調に暗闇に適応していった。もう既にリーゼの表情がわかるくらいにはなっている。そろそろ動いてもよさそうだな。

あいつらがいるのはこの奥――歪震源だ。俺とリーゼはより大きな歪みの気配を頼りに闇の森を突き進んでいく。

今さらだが、誘波の風の加護は効果絶大だ。足下に立ち込める煙のような闇は俺とリーゼにだけ纏わりついてこない。それどころか闇の方から避けているようにすら見える。これなら俺たちが侵蝕されることもなさそうだ。

「……変だな」

周囲に気を払いながら歩いているうちに、俺はある違和感を覚えた。

あれだけいた異獣が、この辺りには一匹も見当たらないんだよ。

ＲＰＧのダンジョンよろしく十歩くらい歩けばエンカウントするかと思っていたのに、なんか拍子抜けだな。全部城旅館の方へ流れたのだろうか？　なんにしても余計な戦闘をしなくて済んだのはありがたい。

だがその代わりに――――来るぞ！

「リーゼ！」

「うん！」

俺とリーゼは目配せを交わしてバッと左右に飛び退いた。

直後――ズシャァアアンッ！！

今まで俺たちがいた場所に、巨大な黒い壁が降ってきた。いや、直線状に木々を薙ぎ倒し、大地を抉ったそれは壁じゃない。？影？の刃だ。

そして俺は、この技を知っている。
?影?の刃が闇に溶けるように先端から消えていく。風景と同色だから激しく見づらいが、それを目で追っていくと……おでました。
「よう、迫間に四条。お迎えの時間だぜ」
あの一撃でずいぶんと良好になった視界の先に、マントに近い形状の黒ロングコートを羽織った男女が立っていた。
迫間漣と四条瑠美奈。俺たちが必ず連れ戻さなければならないやつらだ。
諸悪の根源の望月絵理香はいない。ということは、俺たちに後輩をぶつけてあいつは高みの見物と洒落込むつもりだな。気に食わねえ。
「白峰零児、やっぱり来たわね」
リーゼ並にちっこい方――四条瑠美奈が預言者か探偵のような口調でそう言ってきた。
「その言い草だと、俺の予想もあながち間違いじゃなかったってわけか」
「どんな予想したのか知らないけど、アンタに言えばあたしたちを止めにくると思ってたわ」
「お前が侵蝕を恐れずに突入してくるかは賭けだったけどな。その侵蝕を防いでる力は誘波だろ?」
漆黒の大剣を担ぐ迫間からはやる気のなさを感じない。大マジってことか。
「ったく、止めてほしかったんなら最初っから裏切ったりすんじゃねえよ。いい迷惑だ」
向こうにその気があるのなら、こいつらの説得は案外簡単そうだ。あとは望月絵理香をどうにかしょっ引いて、この大規模侵蝕を終わらせればめでたしめでたし――
「止めてほしいとは思ってないわ。止められるなら止めてみなさいって意味よ」

――ってわけにはいかねえよな。やっぱり。
「くだくだとわけわかんないこと言ってないでわたしと戦いなさいよ！」
ああ、挨拶代わりの一撃のせいか、いつものリーゼに戻ってやがる。瞳をあんなに好戦的に輝かせちゃってもう……ややこしくなる。
「ちょっと黙っててくださいねお嬢様。つまらないと思うが、まずはぐだぐだ話をさせてくれ」
俺はムッとするリーゼを蚊帳の外に締め出しておいて、改めて迫間と四条を見やる。
「お前らの師匠が言ってたぞ。広瀬ってやつはもう助からないってな。過去の幻想に捕らわれてないで、さっさと諦めてくれると俺も苦労しなくて済むんだが？」
俺はストレートに言葉をぶつける。オブラートに包んでいる余裕なんてないんだ。
「フン、そんなこと、あたしたちが理解してないとでも思ったの？」
「なんだと？」
四条の意外な言葉に俺は困惑する。裏切りを告白された時はめちゃくちゃ希望を抱いてなかったか？
「広瀬先輩はもういない。望月先輩が生きてたから百パーセントそうとは信じたくはねえが、一応俺らだってわかってるつもりだ」
迫間がどこか寂しげにそう告げた。ますますわけがわからん。
「じゃあ、お前らが望月に協力する理由ってなんなんだ！」
詰問すると、迫間は言葉を纏めるように数秒瞑目し、そして口を開く。
「望月先輩が信じてるからだ。信じて、諦めてないから俺らは先輩に協力したいと思った」
「たとえ残酷な結果を叩きつけられても、それを先輩が受け入れられるようにあたしたちは傍にいてあげたいのよ」
それがお前らの本心ってやつか。なるほど、先輩想いのいいやつらじゃないか。

だが――
「あいつが嘘をついてるとしても、本当に協力できるのか？」
「どういうことよ？」
四条が怪訝そうに訊いてくる。あの嘘までは知らないらしいな。
俺は鷹羽が二年前から望月を追っていたことを告げる。すると、迫間と四条から息を呑む気配を感じた。それから二人は互いの顔を見合わし、すぐになにか思い当たる節を見つけたように俺へ向き直る。
「だとしても、俺らはあの人を手伝うぜ」
「その嘘は、きっとあたしたちに協力してほしい気持ちから出た方便だと思うから」
都合よく解釈しやがって。
この二人はどうしても望月＝悪だとは考えたくないらしいな。まったく面倒極まりない。少しは疑問くらい持てよと言いたいね、俺は。
「あーくそっ、もう回りくどい問答はやめだ。単刀直入に訊く。お前らを改心させるにはどうすりゃいい？」
「レージ、なに言ってんのよ。そんなの倒せばいいだけじゃない」
「俺はなるべく穏便に済ませたいんだよ、リーゼ」
そりゃあ、ぶん殴って引きずり帰って鷹羽の前にでも放り出せば後は勝手になんとかしてくれるかもしれん。だがな、ここはあいつらの土俵だ。そう易々と勝てるなんて言えないんだよ。
「その子の言う通りよ、白峰」
四条がリーゼを肯定した。
「あたしたちを止めたければ、アンタたちが戦って勝つことね」
「悪ぃな、白峰。過去か現在（いま）かの二択だったんだ。どちらも捨てられない想いだ。だから俺らは過去を選び、現在をお前に預けた。今さらなにもなくそっちに鞍替えはできない」
「つーか勝手に預けるな。俺はそれを突き返しに来たんだよ」
「だったら面倒でも戦ってくれ。これは俺たちの今後を決める戦い

でもあるんだ」
ダメだ。こいつらはもうなにを言っても聞く耳を持たない。
戦るしかねえってことかよ。仕方ねえな。
「わかったよ。俺に喧嘩売ったこと、あとで後悔しても知らねえぞ？」
元より戦う覚悟はできていた。でないとわざわざこんな場所へ飛び込んだりはしないさ。
「やっていいのね、レージ」
身構える俺を見て、リーゼも掌に黒炎を宿して臨戦態勢を取った。
対する迫間は大剣を中段に構え、四条はその小さな背中に巨大な黒翼を出現させる。二人の殺気がここまで伝わってくる。
「言っとくけど、殺すつもりで来なさい。じゃないとアンタたちが死ぬわよ」
「俺らも、手加減するつもりはねえからな」

四章　暗黒の深部（2）（後書き）

さていよいよVS影魔導師です。
暗闇でそんなに見えるわけねえよ、というツッコミは心の中に仕舞ってくれるとありがたブフッ∵（´ε（○＝（゜∀゜）
零児は異世界人の血のおかげということでなんとか……。

さて、Q&Aタイムですw

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

Q：誘波さんはなぜ桜居だけ『桜居ちゃん』と苗字で呼んでるんですか？

A：桜居は局員じゃないからです。局員になれば『ケンちゃん』と呼ぶことになるでしょうね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

続いて人気投票の現在結果公開は……前と全く変化ないのでやりません。
次回の更新は5月21日（土）です。
しかし新作の方はしばらく毎日更新が続くと思います。

四章　暗黒の深部（3）

迫間の大剣に？影？が纏う。
くそっ！　またさっきのやつか！
？影喰み？の剣――〈黒き滅剣（ニゲルカーシス）〉。『混沌の闇』の？影？を喰らって力に変換するとかなんとか言ってたな。魔王ダンタリアンの巨体を一刀両断してみせた力だ。まともに喰らうと痛えじゃ済まないぜ。
誰を狙う？　俺か？　リーゼか？
迫間は影纏う大剣を――
――横薙ぎに振るった。
両方かよっ！
「リーゼ！　思いっ切り飛べ！」
俺はリーゼに指示を出しながらも足のバネを全開にして大地を蹴った。身軽なリーゼは俺よりずっと高く飛んでいるが、俺はこのままだと？影？の刃の餌食となってしまう。
だから、俺はそこにあった木を踏み台にした。三角飛びの要領で回避圏内を確保する。
？影？の刃が木々を雑草のように刈り取っていく。圧倒的だな。視界がさらに良好になるが、マジでコエーぞあの技。
すると――
「上に逃げるなんて身の程知らずね」
バサリ。黒翼を羽ばたかせる四条が月をバックに浮かんでいた。
四条は翼を大きく広げ、その場で身を捻る。
――やばい！
と思った直後、回転する四条から無数の？影？のナイフが雨霰と降り注いできた。無論、俺たちの方だけに。
「あーくそっ！」
〈魔武具生成〉――ライオットシールド。
警察の機動隊とかに配備されている投擲物や危険物から身を守る

ための盾だ。高度の透明度と耐衝撃性を兼ね備えているため、飛来物に素早く反応でき、防ぎながら相手の動きを観察することもできる。俺は魔力を過剰に込め、強度と大きさを割り増しで生成した。

キン！　キン！　キン！
　キン！　キン！　キン！
　　キン！　キン！　キン！

やむことのない金属音。空中にいる俺は盾に隠れて影ナイフの雨を防ぐことしかできない。それはリーゼも同様で、黒炎のシールドを展開したまま落下している。

着地と同時に影ナイフの雨が収まる。四条が攻撃を止めた理由は俺の背後、噴き出す闇から迫間が現れたからだ。

大上段から振り下ろされる大剣を、咄嗟にライオットシールドで受ける。

が――バキン！

シールドを……砕かれた。

「ちっ」

直感的に飛び退いて正解だったな。四条の影ナイフを受け流してお釣りがくるほどの強度だったのに、こいつ、〈魔武具生成〉で生み出した盾を一撃で砕きやがった。生身で受けたら骨ごとスッパリやられちまう。

「レージ！」

子供っぽい高い声で俺の名を叫ぶリーゼが、黒炎の転移術で迫間との距離を一瞬で詰めた。いいぞ、リーゼ。リーチのある武器相手なら懐に入ってしまえ。そうすれば転移もされん。

手足に黒炎を纏ったリーゼが手刀を振り下ろす。かわされたところに突き上げるような蹴りを放つ。体格差なんて物ともしてないな。迫間は鎧代わりのコートを使って蹴りを受けたが、黒炎の熱のせいで苦い表情をしている。

無論、俺も見てるだけじゃない。
〈魔武具生成〉――日本刀。
俺は生成したそれで、迫間と近接戦を繰り広げるリーゼに迫る？影？の帯を叩き切った。
四条の〈束縛〉だ。
「流石にやるわね。じゃあ、これはどうかしら？」
言うと、四条は上空から何本かの影ナイフをばら撒く。だが、それらは全て明後日の方向へと落ちていった。
「どこ狙ってんだノーコン！」
挑発的に空へ向けて吠える俺だったが、すぐに異変に気づく。
影ナイフが俺たちを囲むように落ちたってことはつまり……
――バチリッ！
なにかが弾ける音を聞いた直後、周囲から黒い雷撃が俺とリーゼに襲いかかってきた。その数は四条がばら撒いた影ナイフと同じだ。
やっぱりか！
指向性を持つ？影？の雷は俺とリーゼだけを正確に狙ってくる。
俺はどうにか日本刀で捌いたが、そのうちの一本が迫間によって組合いに持ち込まれていたリーゼを直撃した。
「あきゃぅ！？」
「リーゼ！？」
背中を焼かれて突っ伏すリーゼに俺は駆け寄ろうとするが、？影？の転移をしてきた迫間に阻まれる。
大剣と日本刀が打ち合い、火花を散らす。
「どけよ、迫間」
「力づくでどかせてみろ、白峰」
能力で作った日本刀だが、迫間の大剣もただの剣じゃない。どちらも普通じゃないから重量差で俺が押し負ける。一旦退くか、と思ったその時――シュルッ！　バシッ！
俺の日本刀が、？影？の帯に掠め取られた。四条め。
手元を離れた日本刀は当然消滅するが、迫間の大剣は健在だ。今

がチャンスとばかりに俺に斬りかかってきやがった。容赦ねえな。
武具の生成は間に合わない。かわす余裕すらない。
絶体絶命だ。けど、もう一つも手がないってわけじゃない。一か八かの賭けだが、最終手段を使わせてもらうぜ！
「へえ」
四条が感心した声を漏らす。
俺は斬られてなんかいなかった。迫間の大剣を両手で挟み込むようにして受け止めたんだ。ギリギリでな。白刃取りってやつだ。いや、この場合は黒刃取りか。どうでもいいけど。
「無茶苦茶するなよ、白峰。それでも動けねえことにはピンチのままじゃないのか？」
「まあ、そうだな」
迫間の言う通りだ。さっきから力任せに刃を横へ逸らそうとしているが、迫間がそれをさせてくれない。このままじゃ……
「格好の的よ、白峰」
四条に狙い撃ちされちまう。
上空にいる四条は？影？で長剣を構築し、それを俺目がけて投擲してきた。御丁寧に黒い雷まで付加してやがる。急所を外しても致命傷を与えるつもりだ。
かといって黒刃取りしている手を放せばその瞬間にぶった斬られる。あー、やばい、終わる。

轟ッ！！

刹那、黒炎の奔流が俺目がけて飛んでくる長剣を空中で焼き尽くした。
見ると、リーゼがふらつきながら立ち上がっていた。
「リーゼ、無事なのか？」
「当たり前よ。ちょっと痺れてただけ。それよりもお前たち、よくもやってくれたわね！」

お怒りの様子のリーゼは、俺と迫間を囲むように四つの魔法陣を展開する。魔法陣は斜め四十五度の角度で内側を向いており、それぞれから焦熱の黒炎流が凄まじい勢いで射出された。

組み合っている場合じゃないと判断した俺と迫間は即座に互いから離れる。俺はすぐさまその場にしゃがみ込んだが、迫間は間に合わなかった。黒炎に包まれて跡形もなく焼失する。

……いや、違うな。

黒炎流が収まると、俺は背後を振り向いた。そこに大剣を担いだ迫間が闇を纏って出現する。黒炎に呑まれたかのように見えたが、寸前で転移をしていたんだ。どっちも黒いから紛らわしいな。

ただ、完全に回避はできていなかったようだ。影魔導師自慢のコートは焼け焦げ、迫間自身も転移完了と同時に大剣を杖代わりにしている。

「漣！？」

四条の焦った声。翼を広げ、滑空で迫間の下へ向かおうとする彼女だったが、その進路を塞ぐように無数の中規模魔法陣が展開される。

「なっ！？」

急停止から急上昇。魔法陣から噴き上げるリーゼの黒炎を、四条は飛燕のような動きでかわしていく。

リーゼには言いたい文句があるが後回しだ。俺は上空の四条をリーゼが砲撃している間に動く。

〈魔武具生成〉――クレイモア。

飾り気のない十字型ヒルト、刃先に向かって緩やかに傾斜した護拳、その先端に取り付けられた複数の輪が特徴的な大剣だ。剣身の幅は広くシンプルな形状をしていて、まさに両手剣の代名詞とも言える武器だろう。

もちろん、こいつは迫間の大剣に対抗するために生成したのさ。

目には目をってやつだ。

「はあああああああああッッッ！！」

気合い一閃。上段からの斬り込みを、迫間は〈黒き滅剣〉の腹で受け止める。
甲高い金属音。
今度は、互角だ。
だが、競り合いに持ち込む気は毛頭ないぜ。
「らぁあッ！！」
俺は斬りかかる角度を変えながら幾度となくクレイモアを叩き込む。迫間も俺の攻撃の間隙を突いて漆黒の大剣を捻じ込んでくる。
互いにかわし、受け流すため、なかなか決定打を与えられない。
俺も迫間も掠り傷ばかり作りながら剣戟を繰り返す。が、俺は徐々に迫間を押していた。
リーゼから受けたダメージが効いているみたいだな。
「やっぱ、単純な肉薄戦じゃお前には勝てそうにねえな」
迫間がぼやく。瞬間、周囲の？影？が〈黒き滅剣〉に集った。
大剣に纏った？影？が炎のように揺らめく。肌を焼き焦がしかねん熱が伝わってくる。
「！？」
身の危険を感じて俺は大きくバックステップした。一瞬遅れて迫間が一閃した場所の空間が、『次元の門』よりもぐちゃぐちゃに歪んでいた。なんて熱量だ。
「距離を取っても無駄だぜ、白峰」
続いて迫間は大剣をその場で地面に叩きつけた。すると、大剣に纏っていた？揺らめく影？が地を走ってまっすぐ俺に迫ってくる。
俺は咄嗟にクレイモアを盾にし、一瞬の時間を稼いで横へ飛んだ。
焦土の臭いが後を引く。
？影？の炎ってやつか。
「黒炎使うなんてリーゼと被ってるぜ」
「そう言うなよ。性質はたぶん違うはずだ」
迫間は？影？を放ち終わった大剣を担ぐと、ぶわっと闇に包まれ転移する。

どこに現れるかと警戒していると――
「きゃう！　こ、この真っ黒男！　放しなさいよ！」
リーゼが迫間に黒衣の襟首を掴まれて仔猫みたいに持ち上げられていた。く、そっちか。
「暴れんなよ、面倒臭い」
手足をじたばたさせて子供っぽくもがくリーゼを、迫間は億劫そうにしながら俺へと投げつけた。体重の軽いリーゼはボールのようによく飛んでるな――ってくだらないこと考えるな俺！
リーゼの小柄な体を片手で抱き留めるようにキャッチ。大丈夫か、と話しかけたかったが、そんな場合じゃない。
無限黒炎放射地獄から解放された四条が、再び影ナイフの豪雨を放ってきたんだ。
盾は生成できそうにない。ならばと俺はクレイモアを地面に突き刺し、その陰にリーゼと共に隠れた。これで急所にはあたらない。
だが、やむまで待てばいい、なんて生温い考えは通用しなかった。

全ての影ナイフに黒い雷が付加されていたことに、俺は気づくのが遅れてしまったのだ。

バチバチバリリリッ！！　と地面に突き刺さった影ナイフから凄まじい放電現象が発生する。荒れ狂う電撃が俺とリーゼに容赦なく襲いかかる。
「がはぁあッ！？」「きゃあぁあっ！？」
全身が盛大に痺れ、俺とリーゼはその場に倒れ伏した。
意識はある。人を殺すほどの電力はなかったらしい。四条が補助タイプだからだろうか。
「リーゼ、大丈夫か？」
「このくらい、なんともないわ。このビリビリは嫌だけど」
ビリビリか。確かにきついな。体中が痺れて動けねえ。
「終わりかしら？」

四条が迫間の隣に舞い降りる。
「降参して帰るって言うんなら、俺らは命まで奪うつもりはないぜ？」
大剣を肩に担いで、迫間が言う。畜生、見下しやがって……。
「馬鹿言うなよ。ここで帰ったら、俺が誘波か鷹羽にぶっ殺されるだろ」
「？魔帝？で最強のわたしが降参なんてありえないわ。今のは、レージが悪い」
むっとしたリーゼが俺を睨んでくる。はいそうですね。俺が足引っ張りましたよ。
俺もリーゼも余裕ありげに喋っているが、正直言うとこの状況、詰みに近くないか？
迫間と四条はやれやれと聞き分けのない子供を見るような目をしている。聞き分けないのはお前らも同じだろうが。
でも……
こいつら、やっぱ強え。
どうする？
どうすれば、勝てる？

四章　暗黒の深部（3）（後書き）

あれ？　戦闘終わってない……？
君たち頑張りすぎだろ。

そしてこちらは質問がないので頑張れない。Q&A お休みします。

でも人気投票には変動がありました。
主人公に1票入りました。
現在の1位は暴言メイドさんが主人を差し置いて爆走中です。
投票は何度でもできる仕様にしています。なので投票したいキャラが一人に決められない人でも無問題です♪
そろそろくどくなってきたので人気投票の宣伝は今回で最後にしましょうか。
では、読者様の清き一票をお待ちしております！！

次回の更新は5月24日（火）です。

四章　暗黒の深部（4）

「面倒臭え、帰れないならずっとそこに貼りついてろ。――瑠美奈」
「ええ」
迫間に応え、巨大な？影？の翼を折り畳むようにしている四条が一歩前に出る。
「悪く思わないことね」
そう言って四条はその場を蹴って高く飛翔し、翼を大きく広げてホバリング。そして片翼ごとに四本ずつ、計八本の長剣を？影？から作り出し、羽ばたきと共に目下にいる俺とリーゼに向けて一斉投射した。
――殺られる！？
と思っても体が言うことを聞かねえ。転がって避けることすらままならないとは、四条の黒い電撃は最初から麻痺効果のみを目的とした攻撃みたいだな。殺傷力が低いわけだ。
小回りが利いて敵の動きを封じることに長けた四条に、隙は多いが広範囲高威力の技を持つ迫間。悔しいが、ベストチームって感じだな。お前ら。

ザクッ！　ザクッ！　ザクッ！　ザクッ！
ザクッ！　ザクッ！　ザクッ！　ザクッ！

八本の？影？の長剣が突き刺さる。
だが、痛くねえ……？
疑問に思って見ると、長剣は確かに四本ずつ俺とリーゼに刺さっていた。
ただし、衣服を地面に縫いつけるような形で、だ。
人体を傷つけることなく服のみを狙ったってか？　なんつう精密さだよ。リーゼのだぼだぼな黒衣はともかく、俺なんかそこまで余

裕のないブレザーとズボンだぞ？
「なんの真似だ？」
俺は地面に突っ伏したまま迫間を睨み上げる。
「言ったじゃねえか。そこに貼りついてろって。面倒臭いだろうが、望月先輩が本当に広瀬先輩を救い出すか、現実を知って諦めるまで辛抱してくれ」
「殺すつもりはないってことか？」
「殺す気で戦ったが、俺らだって本当に殺したいと思ってるわけじゃねえしな」
……甘いぜ、迫間。こんな程度の拘束、体さえ動けば簡単に解けるぞ。リーゼなんかは炎のコスチュームチェンジまでやれるしな。本気で縛りつけたけりゃ、四条に？影？の帯を使わせるべきだったんだ。
まあ、たぶんわざとそうしたんだろうけど。
なにかあった時、俺らが逃げやすいように。
「白峰、別にお前らがやらなくてもこの状況は俺らでなんとかする。命に代えてもな」
踵を返す迫間。ボロボロになったコートが翻える。
「アンタたちは無様に地面に這い蹲ったまま見てるといいわ」
舞い降りてきた四条も、黒翼を影に戻すようにして消した。
終わりか？
このままじゃ、俺らの負けだぞ？
「待ちなさいよ！」
その時、リーゼが怒りの感情を込めた声で叫んだ。
「逃げるなんて許さないわ。わたしはお前たちを引っ捕まえるって決めてるの」
「だから、なによ？」
四条が苛立たしげに振り返る。
「逃がさないって言ってるの！　この？魔帝？で最強のわたしから逃げられるなんて思わないことね！」

黒炎がリーゼの黒衣に灯り、一瞬にして燃やし尽くす。長剣の縛りから解放されたリーゼは、まだ痺れているだろう体を懸命に動かして堂々と立ち上がった。その時にはもう改めて黒衣を纏っていたが、少しだけ全裸だったってことだよな？　あーいや、俺には暗くてヨクワカンナカッタケド。

しゅぼっ、と俺を縫いつけていた四本の影剣が黒炎に包まれて焼失する。

「レージ、まだ立てるでしょ？」

真剣な顔のリーゼ。……ああそうだ。忘れるとこだったが、俺はこのリーゼを連れて来たんだ。自分が楽しむためじゃないことで行動を起こそうとした、このリーゼを。

心の深層でライバルと認めた四条を連れ戻すことが、このお嬢様の目的なんだったな（あとついでに迫間も）。

俺はフッと微笑する。

「……当たり前だ」

実はもう動けるくらいには痺れが取れている。クレイモアは消えちまったから杖代わりになる物は生成しないとないが、俺はあえてそのまま立ち上がった。杖をついてたら強がってるようにしか見えないからだ。

「まだやるわけ？　白峰、アンタもその子並に諦めが悪いわね」

勝手に言ってろよ、四条。なにを言われようが俺は諦めない。負けたらお前たちに作った借りが返せないからな。

とは言ったものの……どうするか。

最終兵器ならある。横の？魔帝？様に全力で力を解放してもらうことだ。スヴェンの時みたいにな。だがそうすると、俺もあいつらも助からねえぞ。今回は誘波がいないんだ。

そう思ったところで、狙ったかのように一陣の風が吹いた。すると俺の耳元で小さく声が響く。

『（レイちゃん、苦戦してますね）』

誘波だ。声を風に乗せて送ってきたんだ。こちらからの音声は伝

わらないため、俺は迫間たちに気取られないよう注意して耳を傾けるだけにする。幸い四条とリーゼが「なによ」「なんなのよ」って幼稚な舌戦を繰り広げているからな。少しなら大丈夫だ。

『（戦っている様子はここからでも微かに視認できました。影魔導師のフィールドで二人相手によく頑張ったと思います）』

おい、なんだよその台詞。諦めろって言いたいのか？

いや……

『（ですが、もう少しだけ頑張ってください。できればその辺りをもっと見通しよくしてくれると助かります）』

やはりな。この誘波がそんな部下に優しい考えなんて持っているはずがない。

『（そうすれば、私たちが？光？を届けます。ではでは、頑張ってくださいねぇ）』

それっきり誘波の声は聞こえなくなった。

要は周りに残ってる木々を伐採しながら時間を稼げってことか。なにをする気かわからんが、了解だ。

「リーゼ、ちょっと伏せてろ」

「？」

きょとりと小首を傾げるリーゼは、とりあえずといった様子で頭を抱えてしゃがんでくれた。聞き分けのいいお嬢様だ。どこぞの暴言メイドにも見習わせたいぜ。

「迫間！　四条！　死にたくなかったらお前らも避けろよ！」

「なにする気よ、白峰」

警戒の色を濃くする四条に、俺は一言で告げる。

「こうする気だ！」

〈魔武具生成〉――〈黒き滅剣〉剣身拡張バージョン。

「「なっ！？」」

驚愕する迫間と四条。そりゃそうだ。俺は残っていた全魔力を消

費し、迫間が大剣を？影？の刃で巨大化させた状態を再現したんだからな。

無論、俺はあいつの剣のことなんてこれっぽっちも理解していない。だからこいつはなんの能力もない見た目だけの超巨大な剣ってわけだ。

そう、見た目だけ。こいつの重量は俺感覚で日本刀と変わらない。しかし強度と切れ味は込めた魔力量が物を言わせる。俺は普通に戦ってりゃそう底なんて尽かない量の魔力をリーゼから貰ってるからな。そこんとこはとんでもないぜ。

身を捻る。

両腕にありったけの力を込める。

片足を軸として回転する。

常人なら絶対に振れない三十メートルはある超巨大剣が、俺を中心に黒く染まった木々を薙ぎ倒していく。

迫間たちは転移でかわしたようだ。それでいい。こいつを食らったら、いくらあいつらでもただでは済まないだろうから。

「要望通り、見晴らしを良くしてやったぜ、誘波」

俺がそう独りごちた時、再び風が舞う。

『では行きます！　レイちゃんたちは目を閉じてください！』

なにをする気だと疑問に思ってる暇はなさそうだ。俺はニセ〈黒き滅剣〉を捨て、突然響いた誘波の声にキョロキョロしているリーゼの目を手で覆う。

「な、なにすんのよレージ！？」

「いいから、大人しくしてくれ」

リーゼを宥めながら俺も目を閉じようとしたその時――

太陽が瞬間移動でもしてきたような強烈な白光が、城旅館の方角から広がった。

この光はまさか――セレスか？　それと目を閉じる前に一瞬見え

たが、レランジェの魔導電磁放射砲みたいなやつも混ざっていた気がする。

なるほど、？光？を届けるってそのままじゃないか。なんかの比喩かと思ったぞ、俺は。

「ぐぁあああああああッ！？」「きゃぁあああああああッ！？」

迫間と四条の絶叫が聞こえる。てか、目を閉じても視界が真っ白になるレベルの光だぞ？　あいつら大丈夫か？　影魔導師は吸血鬼みたいに強い光に弱いんだ。

この辺りの木を伐採させたのは、あいつらが隠れられる影をなくすためだろうが……やりすぎてないことを祈るしかない。

光が止んだようなので目を開く。

迫間たちは……無事のようだな。いや、死んではいないが無事ではなさそうだ。二人とも目を押さえて悶えている。

『レイちゃん、今です！』

風に乗った誘波の声。なんか真剣勝負に水を差された感じで納得いかないが、確かにチャンスは今しかない。

といっても、俺はもう魔力が尽きている。ついでに今の光で若干夜目が利かなくなってしまった。となれば――

「リーゼ、頼む」

「わかった」

リーゼが駆ける。一鼓動の内に距離を詰め、右手を四条に、左手を迫間へと翳す。

そして――

「燃えなさいっ！」

両掌の前に小さな魔法陣を展開。射出された黒炎弾が迫間と四条を火達磨に変えて吹っ飛ばした。

悲鳴も上げることなく転がった迫間と四条は、倒れた巨木に衝突して呻いた後、ピクリとも動かなくなる。

心配になって駆け寄ってみると――二人とも気絶しているだけのようだ。リーゼが丁度いい具合に加減してくれたんだな。焼け焦げ

たコートは雑巾として再利用することすらできそうにないけれど……。

とりあえずほっとし、俺は聞こえないと知りつつ二人に話しかける。

「悪いな、迫間、四条。俺たちの……現在の勝ちだ。ちょっと反則っぽかったが、元からルールなんてないしな。それに、ここにいない連中だって俺たちの仲間なんだ。大目に見てくれ」

そこでまた、風が吹く。

『レイちゃん……意識のない人に話しかけるなんて恥ずかしいことがよくできますねぇ。台詞も臭いですし、私尊敬しちゃってもいいですか？』

「お前ホントは聞こえてるだろ！？　こっちの音声も風で拾えるんだろ！？」

だいたいおかしいと思ってたんだ。怪物・誘波の〈風話〉が一方通行だなんて中途半端すぎるってな。

『それはさておき、すぐに歪震源へ向かってください。望月絵理香ちゃんが不穏な動きを見せています』

望月絵理香……そうだった、まだ終わりじゃないんだ。ラスボスが残ってやがる。にしても誘波、お前は敵にも『ちゃん』づけするんだな。緊張感失くすぞ。

『忠告しておきますと、これから先、私たちは今のような手助けはできません。もうわかっていると思いますが、さっきの光はセレスちゃんとレランジェちゃんが全力で放ってくれたものです。レランジェちゃんは魔力が枯渇寸前になっていますし、セレスちゃんは精神力を使い切って気を失っています。しばらく目覚めることはないでしょう』

やっぱりセレスとレランジェだったか。帰ったら礼を言っとかないとな。

『ただ、そのおかげで侵蝕を少し押し返すことに成功しました。クロちゃんの負担も軽くなったので、時間的にも余裕が生じています。

なのでレイちゃん、必ず彼女を止めてください』
「言われんでもわかっている」
俺は気絶した四条を乱暴に揺り動かして起こそうとしているリーゼを見る。
「リーゼ、そいつらは後回しでいい。先にあの女をぶっ飛ばしに行くぞ」
「ん、わかった。あいつはわたしのレージを壊そうとしたから燃やさないと気がすまない！」
再び赤い瞳に闘志を宿すリーゼ。手離された四条がゴチン！　と巨木に後頭部をぶつけている。痛そうだ。そしていい加減に『わたしの』はやめてほしいなぁ。
『最後にお二人から伝言を預かっています』
森の奥へ向かって進み始めた俺たちに、誘波がそう言ってくる。
『「マスターになにかあれば処刑安定です」とレランジェちゃん』
あのポンコツはそれしか言えんのか？
『「零児、必ず勝って戻ってこい」とセレスちゃんが気を失う直前に呟いてました』
それはたぶん伝言のつもりじゃないぞ！　本人に聞かれたら恥ずかしいことなんじゃないのか！
……でもまあ、どんな言葉であれ応援されると力が漲ってくるってもんだ。
もうさっきのような反則は期待できない。俺らだけで始末をつけないとな。
だけどその前に、やることがある。
「リーゼ、後でなんでも言うこと聞いてやるから魔力を分けてくれないか？」
「む、仕方ないわね。じゃあ帰ったらオンセン魔獣をお腹いっぱい食べさせてくれる？」
「温泉まんじゅうな」
俺は苦笑しつつ、左手で隣を歩くリーゼの右手を握った。

四章　暗黒の深部（４）（後書き）

すみません。まともな勝ち手段を思いつきませんでしたｏｒｚ
居残り組もなんか活躍させたいなと思ってましたし。

人気投票、エセ関西弁少女に入れてくださったお方、ありがとうございます！　まさかあの子に票が入るとは思いませんでした。全然活躍してないのに……。

次回の更新は５月２８日（土）です。

ん？　Ｑ＆ａｍｐ；Ａ？
いやもうお休み宣言はしなくてもいいかと＾＾；

四章　暗黒の深部（5）

割とすぐに目的地へ辿り着いてしまった。
リーゼから充分に魔力を供給されてないが、着いてしまったものは仕方ない。今ある魔力なら五回は日本刀を生成できるし、このままやるしかないだろう。
「さっきのはビックリしたなぁ。やっぱり漣くんと瑠美奈ちゃんは負けちゃったのね」
周りと一線を画するほど巨大な木、その太い枝に腰掛けていた黒セーラー服の女――ラスボス・望月絵理香に速攻で見つかっちまったしな。
ここが歪震源か。望月が登っている巨大木を中心にドーナツ状に開けた広い空間だ。天気のいい日は弁当持参してピクニックに来ると最高なんだろうが、今はどこよりも濃い闇に支配されている。冥界という世界があるならこんな感じなのかもしれん。
闇の源泉――『混沌の闇』の？穴？は望月のすぐ傍に開いている。複数に分かれた木の枝に包まれている感じだ。
やはり、でかい。昼間見た『次元の門』には及ばないが、特徴的な楕円形の縦穴は五メートルくらいあるぞ。
「後輩惑わせて遊んでんじゃねえよ。てめえの本当の目的はなんだ？」
すぐに動こうとしたリーゼに待ったをかけ、俺は単刀直入に訊ねた。迫間たちは望月のことを信じたいみたいだが、俺は端から疑ってかかるぜ。
「ふふっ。おっかしいなぁ。私、言ったと思うんだけどなぁ」
こちらの神経を逆撫でするような声と態度。昼間に一瞬見せた顔が素顔なのだとしたら、こいつ一体何匹猫被ってんだ？
「広瀬とかいう恋人を助けるんだったか？　それが嘘だってことはわかってんだよ。とっくに死んでるんだ、そいつは」

「死んでなんかないわ。だって、彼とコンタクト取れたもの。もうすぐこっちに来てくれるって。その時は監査局のわんこさんにも紹介してあげるわね」
「適当なことを」
くえない態度の望月に、俺はいい加減嫌気が差していた。
と、リーゼが俺のブレザーの袖を引っ張る。
「レージ、あんなやつもうやっちゃえばいいのよ」
「いや、リーゼ、それは気が早いぞ」
「それにここ、なんか気持悪い。わたしは早くあいつ燃やして帰りたいの」
気持悪い。それは俺も感じていたことだ。
歪みに?穴?に漏れ出す闇、どれもこれも吐き気がする。
リーゼの言う通りだろう。時間に余裕ができたとはいえ、無限じゃないんだ。こいつは迫間たちみたいに口で説得したいわけじゃない。問答無用でぶん殴って、それから監査局で尋問すればいいんだ。
「ああ、わかったよ。さっさとあいつを捕まえるとしますか」
「ふふっ。じゃあ、私も彼が到着するまで退屈だから、少し遊んであげるわね」
声は背後から聞こえた。
「「――ッ!?」」
俺とリーゼは同時に飛び退きながら振り返る。?影?の転移をしてきた望月絵理香は、両の手にそれぞれ影刀を握っていた。
望月は両腕を広げて身を捻り、片足を軸として回転。俺とリーゼの両方を斬りつける腹だ。
リーゼは横に飛んでかわし、俺は即座に生成した日本刀で回転斬を受け止める。が――
「ふふっ」
「!?」

影刀が、俺の日本刀を擦り抜けてきやがった。
咄嗟に体を反らして回避するも、影刀の切っ先が俺の頬を掠った。
血が滴る。すっぱりと横一文字に斬られたようだ。痛え。
「ちっ！」
体を反らした勢いに任せ、俺は転がって望月から距離を取った。
今の擦り抜け……一瞬見えたが、たぶん一度影刀の刃を？影？に戻して再構築したんだと思う。最初に俺と斬り合った時は手加減してたってことか。いや、今も本気とは思えない。まったく気にくわねえ女だ。
「お前はわたしが燃やすんだから！」
上天にでかい黒魔法陣が展開した。
轟！！　とそこから一条の黒炎柱が落ちる。天の裁き、もといリーゼの裁きだ。
かわせるほどの小さな範囲じゃない。転移なんてしている時間も当然ない。もらった！　と思いたかったが、降りかかる黒炎を見上げる望月の表情から余裕は失われていなかった。
望月は片方の影刀を天に翳し、輪を描く。すると空中に円盤状の黒い物体が出現し、リーゼの黒炎柱を受け止めた。負担を軽減するためか？影？の円盤は少し傾いており、黒炎は飛散せずに軌道を変えられている。
「こんな見切りやすい単調な技じゃ、私を捉えられないぞ」
望月はもう片方の影刀の先をリーゼに向ける。瞬間、その影刀の刀身がぎゅうんと伸びた。
「！？」
リーゼは紙一重でかわしたようだが、右肩を掠めたらしい。傷を手で押さえて望月を睨んでいる。
伸びた刀身はそのまま消え去り、気づけば元の長さに戻っていた。望月は長さを戻した影刀とリーゼの黒炎を防ぎ切った影刀をクロスさせ、その場で振り払う。
ゾクッとした悪寒。

「！　リーゼ！　横に飛べ！」
気づいた俺はリーゼにそう指示し、自分も大きくサイドステップした。すると俺とリーゼがそれぞれさっきまで立っていた場所に、正面からだと見えないくらい平べったい三日月状の？影？が凄まじい勢いで通り過ぎた。？影？の斬撃波ってとこか。
なんて変幻自在なんだ。迫間や四条よりも？影？の操り方が断然うまい。これが本来の影魔導師の戦い方なのかもしれん。望月を見ていると迫間と四条は二人で一人前って気がしてならないぞ。
だが――
「まだあいつらの方が強かったぜ！」
俺は日本刀を居合風に構えて望月との距離を詰める。たとえ個人の戦闘力では望月の方が強くても、所詮は一人だ。息の合った二人組を相手にする方がよっぽど怖い。
「はっ！」
一閃。横薙ぎに振るわれた日本刀が立ち込める闇を吹き払う。
「ふふっ、速い速い。でも遅い」
バック転でかわした望月が意味のわからんことを言う。でもな、かわされるのは計算の内だ。
「今だリーゼ！」
俺の合図でリーゼが黒炎の転移をして望月の眼前に出現する。そして目を剥く望月の顔面目がけて黒炎纏う拳を叩き込んだ。なかなか息が合うようになってきたな、俺とリーゼも。
顔面の一撃は影刀で防がれたようだが、望月は衝撃に堪え切れず吹き飛んだ。そこへリーゼが追い打ちをかける。黒炎弾を容赦の欠片もなく撃ち込む。
撃ち込む。撃ち込む。撃ち込む。まだ撃ち込む。
「り、リーゼ、そろそろやめような」
いくら魔力還元術式で無制限に力を使えるからって、エネルギー弾の連射は相手の生存フラグだ。漫画だと。
「まだよ。こんなんじゃまだわたしの気がすまない！　ぐちゃぐち

ゃにしてやるんだから！」
「いやいや、お嬢様の気がすんだら相手生きてないですか――ッ！？」
リーゼの背後に闇が噴き上がるのを俺は見た。やっぱお約束通りかよ！
「後ろだリーゼ！」
「！」
俺の声に気づいてリーゼが振り返る。それと同時に、間欠泉のように噴き上がる転移の闇から望月が現れ――なかった。
「残念ハズレ。後ろは後ろでもわんこさんの後ろでした♪」
ザシュッ！
生々しい音と共に、俺の背中に激痛が走った。生温かい液体が迸る。これは、俺の血か？
「レージ！？」
リーゼの悲鳴。そうか、あっちの闇はフェイクだったんだ。本物は俺の背後かよ。油断した。
くそう、痛い。痛いが……まだ倒れるわけにはいかねえ！
「あら？　まだ動けるんだ。浅かったかしら？」
振り向き様の一閃を望月は難なくかわしやがった。そのままいずこへと転移する。
背中が半端なく痛い。そして熱い。浅いだと？　とんでもない。バッサリ行きやがって。反射的に体を前にずらしてなければバラバラ死体ができてたぞ。俺の。
ダメだ。出血が止まるどころか溢れてやがる。体が弛緩してくる。倒れそうだ。
「レージ！？」
リーゼが駆け寄ってくる。まだ覚悟はできてないけど、意識があるうちに言っとくか。死にたくねえし。
「リーゼ、黒炎で俺の背中の傷を焼いてくれ」
「え？　いいの？」

そこは少しくらい躊躇ってくれよ。まあリーゼらしいけど。
「ああ、そのくらいなら後から監査局の医療技術で治せるだろうから」
「うん、わかった」
「あ、でも、できれば優しくぎゃあああああああああああああああッ！？」
傷を塞がないと死んでしまうとはいえ、早まった真似をしたかもしれない。途切れ途切れの意識の中で、俺は何度もそう後悔した。
「ふふっ、応急処置は終わったかしら？」
いつの間にか突っ伏していた俺は見上げると、望月が再び巨大木の枝に腰掛けて楽しそうにこちらを見下していた。足をブラブラさせて……そんなに俺の悲鳴が面白かったか？
「はぁ、はぁ……どうして、邪魔しなかったんだ？　俺らを殺るチャンスだったろ？」
立ち上がりながら、俺は望月に疑問をぶつける。
「わんこさんに智くんを紹介するって約束しちゃったでしょう。だからまだ死んでもらっちゃ困るんだよね」
こっちとしては約束なんかした覚えないんだが、結果としては助かったってことだ。あの女のいつでも殺せるぞって態度はムカつくけどな。
「お前、降りてきなさいよ！　それともそこで焼き殺されたいの？」
黒炎を両手に構えたリーゼが吼える。が、望月はそんなリーゼを鼻で笑った。
「暇潰しは終わったのよ、チビっこい？魔帝？さん。ふふっ、じゃあ、着いたようだから約束通り紹介するわね」
望月がそう言った次の瞬間、彼女の隣にある『混沌の闇』の？穴？に異変が起こった。
「なっ！？」
俺は絶句した。突然、？穴？から丸太のように太い腕が二本生えてきたからだ。

腕で？穴？の縁の空間をガシッと掴み、押し広げるようにして本体が出てくる。

「へえ」

リーゼは感嘆の声を上げているが、俺はそんな好戦的な感情は抱けないぞ。

ぶっとい二本の腕に、さらにぶっとい二本の足。全体的に筋肉質で凸凹した巨体は五メートルを優に超えてやがる。ワニのような頭部からはこれまたぶっとい角が前向きに突き出していて、目は爛々と輝く血色、口には鋭い牙がノコギリのように並んでいる。

極めつけは、背中から生えた蝙蝠のような巨大な双翼と、ドラゴンのような長い尻尾だ。

その姿はまさに、悪魔そのものじゃないか。

望月は恍惚とした表情で言う。

「彼が、智くんよ。私の恋人。ステキでしょ？」

……嘘だろ？

四章　暗黒の深部（5）（後書き）

ラスボス（？）戦始まりました。
あ、第二巻のラスボス（？）です。シャッフルワールド！！の完結は作者にも見えてません。
（傷を焼く場面、ちょっと軽過ぎたか……）

セレスに投票してくださった方、ありがとうございます。現在1位です（メイドと並んで）。

次回の更新日は5月31日（火）です。

ドシン！　と大地を揺るがすような音を立てて飛び降りてきたこの異形が、広瀬智治？

どんな角度から見ても、地球人じゃないぞ？

と――

「るぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

もはや衝撃波とも言えそうな大音量の咆哮が異形の口から発せられた。ビリビリと静電気でも帯びたような嫌な感覚が体中に走る。

あまりの衝撃的事柄に俺は背中の痛みを忘れそうになりながら、望月に言う。

「ふざけんなよ。コレが地球人なわけねえだろうが！　それともなにか？　広瀬智治ってのは名前だけ日本風の異世界人だったってことか？」

身近にそういう例がいるので可能性はゼロじゃない。もっとも、あの着物怪人の場合は偽名だけどよ。

「酷いこと言うわ、監査局のわんこさん。私はふざけてなんかないのに」

望月は、ピョン、と悪魔のような姿をした巨体の肩に飛び乗り、愛おしそうにそのワニ顔を撫でながら口を開く。

「彼は歴とした人間で地球人で日本人よ。本来の肉体はとっくに滅んでいるけれど、魂はこの影霊の中にちゃんと残ってるの」

「魂……だって？」

『どうも広瀬先輩は二人を『混沌の闇』に引きずり込んだ影霊に捕まってるらしいのよ』

四条の言葉を思い出す。本当に広瀬智治の魂とやらがあの異獣の中にあるとしたら、まあ、嘘はついてないな。無限に存在する異世界には『霊界』ってのがあっても不思議はないだろうから、俺は魂の存在を否定しない。だが、それがアレの中にあるってことは俄かには信じられねえぞ。

「ふふっ。わんこさんは知ってるかしら？　この『混沌の闇』がどうして侵蝕をするのか」

「いいや」

いきなりなんだ？　俺が知るわけないだろ。迫間や四条だってそこまでは知らない雰囲気だったしよ。

「偽物が本物と入れ替わりたいって話はよくあるけどな」

適当に言ってみる。

「凄い凄い。それ近いわ」

キャハキャハと耳やかましく望月は笑った。そのやかましい声を間近で聞いているだろう悪魔異獣は……置物のように微動だにしてないな。望月のやつ、こんなバケモノをもう手懐けたっていうのか？

「レージ、どうするの？　あれ燃やしていいの？」

「待ってくれ、リーゼ。俺が動けるようになるまでもう少し時間を稼がせてくれ」

正直言うと、背中の痛みで立っているのがやっとという状態だ。痛みに慣れれば、少しは動けるようになる。

「で？　模範解答を教えてくれよ」

言うと、こちらの狙いを理解しているのかいないのか、望月は不敵に微笑む。

「ほとんどの影魔導師は勘違いしてるけど、『混沌の闇』はね、言わば『世界の種』なの。神様が混沌から世界を作ったって神話があったりするじゃない？　それもあながち間違ってない創世の一つで、『混沌の闇』はその原型よ。混沌は自分の世界を構築するために、既に存在する世界に寄生して情報を得ようとする。それが侵蝕」

……マジか？

流石に創世の話になるなんて思ってもいなかったぞ。

「侵蝕され、消滅した世界の物質は、その情報を『混沌の闇』に持っていかれて不完全に再構成されるの。その動物版が影霊ってわけ。影霊も完全になるために情報を得ようとして、生き物を襲う。そして様々な生物情報が混在して生まれたのがこの子。この中には智くんの情報も含まれているわ」

ワニ顔を愛撫しながら、望月は語る。美女と野獣とはこのことだ。

ていうか、魂ってのはつまりそういうことだったのか。はいそうですかと納得はできないけど、魂がどうのこうの言うよりは理解できる。

だったら、ますますこのバケモノが広瀬智治だとは言えなくならないか？　もう全く別の存在だ。でも、望月の目には恋人に映ってるんだろうな。どんだけ捻じ曲がった愛なんだ。

「ついでに教えるわね。影魔導師は？影？を繰ってるっていうけど、実際は影を通して『混沌の闇』に干渉し、混沌を抽出して形や術式となる情報を与えて使役しているのよ。暗ければ暗いほど干渉しやすいし、影の範囲がほぼ全域に広がる夜は私たちが活動するにはベストの時間帯ってわけ。光に弱いのは、光が混沌を破壊してしまう性質を持っているから。わかったかな？」

「ああ、てめえの趣味がよくわからないことがよーくわかった。それと背中の痛みもだいぶ感じなくなってきたぜ！」

〈魔武具生成〉――青龍偃月刀。

幅広の刃が龍の口から生えているように見える長柄の大刀だ。三国志の関羽が使っていたという話は有名だろう。日本刀三本分の魔力を消費しちまったが、あのバケモノと戦り合うにはこのくらいの武器がないと辛い。

「いけるのね、レージ」

リーゼも掌に宿した黒炎を構え直す。
「ああ、もう充分だ」
「あはっ、ぐっちゃぐちゃの粉々にしてやりましょ」
ぐちゃぐちゃか粉々かどっちかにしてくれ。
戦闘態勢を取る俺たちを、望月は悪魔の肩から余裕の表情で見下している。
「智くんに会えたから私の願いは成就されたんだけど、どうしよっか？」
望月は広瀬智治――悪魔異獣に話しかけるように呟いた。悪魔異獣は彼女に答えるように「るおん」と唸る。
「ん～。私は興味ないからどうだっていいんだけど……そこの？魔帝？さんをお持ち帰りして、スヴェンの研究のお手伝いでもしてあげよっかな？」
――ッ！？
な、に？
今、望月はなんて言いやがった？
スヴェン……俺の耳には確かにその人物名が聞こえたぞ。俺が知る中でその名を持つやつは一人しかいない。
「てめえ、あの眼鏡野郎とどんな関係なんだ！」
「どんな？　そうね……お友達、はありえない。仲間、かもしれないけどなんか違う。――あっ、あまり喋ったことないけどクラスが同じ人って感じの関係かな」
凄む俺に怯みもせず、望月は自分がピッタリと思う言葉を見つけたことで華やかな笑顔を見せた。
「レージ、スヴェンって？」
「ほら、この前お前が吹き飛ばした首なしの人形に乗ってたやつだ」
「ああ、あいつね。あの時は鬱陶しかったわ」
リーゼにとってはその程度の認識らしいな。渦の中心に自分がいることくらい自覚してほしいものだ。
「――ってちょっと待て！　スヴェンはまだ生きてるのか！？」

「死にかけだったけど、王国（レグヌム）で治療したおかげで無事よ」
王国……『混沌の闇』に喰われた望月を助けたっていうそれが、スヴェンをバックアップしていた組織だったってことか。これは、なんとしてでも望月を捕まえねえといけなくなったな。
「リーゼ、戦闘再開だ！」
「うん！」
子供っぽく返事し、リーゼは両手の黒炎を弾丸にして投擲する。黒炎弾は寸分の狂いもなく望月と悪魔異獣の顔面目がけて飛んでいく。
「ふふっ」
悪魔異獣の肩から飛び降りた望月が影刀二刀流でリーゼの黒炎弾を斬り裂き、軽やかに着地を決める。裂かれた黒炎弾は明後日の方向に飛んでいって虚しく破裂した。
「私一人にすら勝てないのに、私と智くんの二人を相手に戦えるって思ってるの？」
パチン！　と望月は指を鳴らした。するとそれを合図に智くん――悪魔異獣が動き出す。
ワニのような大口を開け、そこへ？影？が収斂していく。
アレは……ダンタリアンが使った魔力の波動のモーションに似ている。たぶん、光線状の？影？を噴射するぞ。
「リーゼ！　あの怪物の口を狙え！」
マヌケな魔王が思わぬ予習になったな。あの時のような失敗は二度とするかよ。
「口ね。面倒臭いから顔ごと吹っ飛ばすわ！」
リーゼが大魔法陣から黒炎の奔流を放射する。しかし――
「智くんには指一本触れさせないわ」
望月が？影？の円盤を構築して炎の流れを変えやがった。だったら俺が顎下から突き上げてや――
「なっ……体が、動かねえ……」
走ろうとした俺だったが、まるで縛りつけられたかのように体が

言うことを聞かない。
「！　〈束縛〉か」
よく見れば、体のあちこちに？影？の糸が絡みついていた。糸の先は地面へと続いており、文字通り俺は地面に縫いつけられている形だ。この？影？……ピアノ線みたいに頑丈だな。
「あぐっ！　なんなのよこれ！」
悲鳴に視線をやると、リーゼも同じように動きを封じられていた。やられるまで気づかないとか、俺らって相当にアホだな。
「わんこさんはいらないから殺してもいいわ。でも？魔帝？さんは瀕死。できるわね？」
悪魔異獣に優しく言い聞かせる望月。やばいぞこれ。本気で動けない。
「リーゼ！　炎で糸を切れ！」
「わかった」
「もう遅いわ」
望月の残酷な一言。
悪魔異獣の大口から放たれた？影？の波動砲が、怒涛となって迫りくる。位置からしてリーゼは掠る程度だが、俺は直撃を免れそうにない。
畜生っ！　終わってたまるかよ！
「それが広瀬先輩だって？　望月先輩、ふざけないでくれよ面倒臭え」
「話は大方聞かせてもらったわ。悪いけど、あたしたちは元の枠に戻らせてもらうから」
声がした。
瞬間、？影？の波動砲に巨大な？影？の刃が衝突し、真っ二つに引き裂いた。
割られた？影？の波動砲がそれぞれ俺とリーゼの脇を掠って遠ざ

かる。あ、危ねえ。
「アンタたち馬鹿でしょ？　影魔導師のフィールドで影魔導師と戦えるのは影魔導師だけなんだから」
上空から投擲された複数本の影ナイフが、俺とリーゼを拘束していた糸だけを斬る。
自由になった俺が声のした方を見ると――頼もしいやつらがそこにいた。
漆黒の大剣を肩に担いだ迫間漣と、その横に黒翼を羽ばたかせて舞い降りた四条瑠美奈だ。
「漣くんに瑠美奈ちゃん、まさか先輩を敵に回すのかな？」
酷薄な笑みを貼りつけて後輩を脅そうとする望月に、迫間と四条ははっきりと告げる。
「その通りよ、望月先輩」
「今の先輩は、どうやら俺らの知ってる先輩とは全然違うみたいだからな」
あんな決着でも、迫間たちは自分たちの負けを認めたってことだ。過去に縛られた自分たちを、多勢とはいえ現在を預けた俺たちが討ち破ったのだから。
なんだろうと、こいつらが味方についてくれるんなら百人力だ。
「ふふっ。あはははははははははっ！」
と、望月は堰を切ったように笑い出した。どこに笑いのツボがあったんだ？
「まあ、こうなるだろうとは思ってたのよねぇ。その通りよ。今の私は昔の――人間だった頃の私じゃないわ。ふふっ。そういうわけで、改めて私たちの敵さんに御挨拶をしてあげるわ」
悪魔異獣の前に立った望月の雰囲気が、薄ら寒いものに変わる。
いや、変わったのは雰囲気だけじゃないぞ。
「えっ！？」
「望月先輩の目が、赤く……」
迫間と四条が驚きの声を上げる。それもそのはずだ。なんせ瞬き

をした望月の両目が、影霊のそれと同じ血色に爛々と輝き始めたのだからな。

俺とリーゼだって目を瞠っている。声も出ない。

望月は一つ礼をし、いつもよりトーンを低くした口調で言う。

「はじめまして。私は王国（レグヌム）の執行騎士（エクエス）が一人、？影霊女帝？望月絵理香よ」

四章　暗黒の深部（6）（後書き）

青龍偃月刀が活躍してない気がするけどきっとキノセイですね。
次回振り回せばおk。
リーゼも若干空気な気がしてならない。でもあの子が会話に加わるとややこしい方向へぶっ飛んで修正できなくなりそうで怖い。
なぜリーゼルートを選んだし……。

次回の更新は6月4日（土）です。
もう6月か……新人賞の締切がヤバイＴＴ

四章　暗黒の深部（7）

後ろの悪魔と同じ血色の瞳を、文字通り爛々と輝かせる望月に、俺は異様なおぞましさを覚えていた。

王国の執行騎士ってのも気になるが、それは置いとくとして問題はもう一つの肩書きの方だ。

影霊女帝。

なんだそれ？　？魔帝？の仲間か？

「説明が欲しい。そういう顔をしているわね」

ぶわっと闇を纏った望月が、迫間と四条の間に転移した。

「「！？」」

は、速い！　やつの今までの転移とは発動速度が全然違うぞ。

「その名の通り、私は影霊。だけど、完全な影霊」

ブワン！　二本の影刀が横向きに開くように振るわれる。迫間は大剣で、四条は？影？の翼で防ごうとするが――ダメだ受けるな！

「ぐあっ！？」「きゃあっ！？」

一度？影？に戻して瞬時に再構築できる望月の影刀は、物理的に防御できないんだ。

望月から飛び離れる迫間と四条は、どうやらうまく回避行動を取れていたらしい。どちらも腹部を浅く斬られているだけのようだ。

「『混沌の闇』に引きずり込まれた私は、智くんと一緒に食べられる前に分解したの。そして別の場所で再構成されたんだけど、私の情報はこの通り欠ける箇所なく完璧に作られていた。『混沌の闇』の外じゃなくて、中で分解されたからだと思うわ。ふふっ、安心して。私は完全だから生き物を襲いたいっていうつまらない欲求はないの。でも影霊であることに変わりはないから、こうやって――」

身の上話をしながら望月は疾走し、逆袈裟斬の影刀を迫間に振るう。一度の攻防で受けられないと理解したらしい迫間はかわすも、その脇腹に強烈なミドルキックが減り込んだ。吹っ飛んだ迫間を尻

目に、望月は一瞬で四条に切迫する。四条は飛翔して逃げようとするが、望月の影刀で翼をもがれ転落。その顔を足蹴にされる。
「――人間の漣くんや瑠美奈ちゃんを傷つけても、なんにも感じない」
悔しそうに呻く四条を見下し、望月は加虐性愛者のような笑みを浮かべている。やばいぞアイツ、かなり狂ってやがる。
それに、強い。いや強いのはわかってはいたが、あの二人が手も足もでないほどとは思っていなかった。俺らと戦闘した後だということを考慮しても、一方的だなんてどんな悪夢だよ。
「ああ、加勢はさせないわ」
密かに青龍偃月刀を構えていた俺に、望月は振り向くことなく言う。と――
「――ッ！？」
巨腕の剛拳が俺をプレスせんと迫っていたことに気づく。咄嗟に横へ飛んで避け、俺はその腕を切り落とすため幅広い刃を振り抜いた。だが――
「硬っ」
能力で生成した、鉄をも斬れる自信のある武器だったが、悪魔異獣の皮膚を少し裂いただけで終わっていた。反動で腕が痺れている。
「ありえんだろ！」
俺は再び振り被ってきた悪魔の拳をバックステップでかわし、繋げてきた尻尾のぶん回しも高く飛んでやり過ごす。
くそっ！　ケチって日本刀一本分の余力を残さなければよかった。といっても、それを継ぎ込んだところで肉に届くか怪しいがな。
「完全な私は影霊の頂点。どんな影霊も傅くの。智くんみたいな最上級の影霊だって例外じゃない。というか、そんなことよりも――」
四条の顔から足を外した望月は後ろに飛んだ。次の瞬間、彼女がさっきまでいた空間をリーゼの燃える拳が通過する。
「外した。すばしっこいわね」
と愚痴を零すリーゼが攻撃したから、望月は四条から離れたわけ

じゃない。
「わんこさん、今、智くんに傷をつけたわね」
底冷えする怨念の声と共に、俺の眼前に望月の整った顔が迫った。
もっと平和的な状況だったらドキドキしそうなほど綺麗な相貌だが、今は鬼の形相というやつだった。
影刀が空気を裂いて襲ってくる。俺の首を刎ねるために。
ダメだ。こんな間合いまで迫られたら長物では不利になる。
てか、防ぐことはそもそもできねえし、避ける暇もないぞ。
「白峰っ！」
「レージ！」
その時、望月の斜め左右後方から黒い炎が疾った。リーゼの黒炎と、迫間の？影？の炎だ。
「邪魔しないでくれるかしら？」
望月は俺への攻撃を器用に中断して、迫りくる二種類の黒炎を斬り払った。
そこに生じる、一瞬の隙。無論、見逃さないさ！
「余所見厳禁だ！」
俺はこちらに向き直ろうとする望月の顎を爪先で蹴り上げる。受け身を取って流されたが、距離が空けば武器が使える。
青龍偃月刀を上段から叩きつける。かわされて地面を抉るが、すぐさま持ち上げて横薙ぎに一閃。影刀二本で受けられる。でもそんなことは構わず、俺は勢いのまま青龍偃月刀を振り切った。
「く……智くん！」
吹っ飛びながら望月は悪魔異獣の名を叫ぶ。
と、月明かりが遮られた。
――上か！
見上げると、翼竜のような巨翼を大きく広げた悪魔異獣が天空で？影？を集めていた。さっきのビームが来るぞ。
「撃たせないわ！」
黒翼を羽ばたかせ、背後に回り込んだ四条が？影？の帯で悪魔異

獣のワニ顔を捉えた。そのまま急上昇して照準を無理やり変え、？影？の波動砲を空の彼方へと発射させる。ナイスだ。
「そこどきなさい！　真っ黒女！」
リーゼの声。空中に五つの巨大魔法陣が悪魔異獣を囲むように展開する。即行で離脱する四条に代わって、それぞれの魔法陣から放出された灼熱の黒い業火が悪魔異獣を容赦なく呑み込んだ。
「智くん！？」
迫間の？影？の刃をかわしながら望月が悲鳴を上げた。なるほど、あの悪魔異獣は望月の怒りのトリガーと同時に、隙を生ませる弱点にもなりそうだ。
俺は天を見上げる望月に接近し、青龍偃月刀で刺突する。僅かに対応の遅れた望月は右肩を掠めて一瞬で転移。――俺と迫間から離れた位置に現れる。
「るぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん！！」
天空からの雄叫びが空気を激しく振動させる。リーゼの黒炎地獄から悪魔異獣が這い出てきたんだ。ダメージはあるようだが、耐刃性だけでなく耐熱性もかなり優れてやがるな。
「許さない……許さないわ。よくも智くんを火炙りにしてくれたわね！」
ゾワッ。
望月の赤い瞳が、一層おぞましく輝いた。
すると周囲に立ち込めていた闇の靄が流動し、望月を中心とした特大の渦を形成する。
「白峰、防御を固めろ。面倒臭いのが来そうだ」
「言われんでもわかっている」
防衛体制を取る俺たちを見て、望月が酷薄に嗤う。
「ふふっ。斬り刻んであげるわ」
そわり。なにかが、肌を撫でた気がした。

刹那、無数の影刃が凄まじい暴風と化して辺り一帯に吹き荒れた。

「――がぁあッ！？」

影刃のハリケーンに俺は体中を斬り裂かれながら吹き飛ばされる。

リーゼや迫間たちを気にかけている余裕なんてない。急所を守るので精一杯だった。

四章　暗黒の深部（7）（後書き）

今話は長くなったので分割しました。
切りが悪いので間を空けず二話連続投稿です。
第二巻、最終回前スペシャルだと思ってくださいｗ

四章　暗黒の深部（8）

気がついた時、俺は地面に突っ伏していた。俺、今回の戦いではけっこう倒れてるな。侵蝕されないと言っても、やっぱ不利なんだよ。ここでは。

リーゼは？　迫間と四条は？

わからねえ。今の暴風のせいで闇の靄が巻き上がって視界が悪い。しかし望月のやつ、なんつう力だ。背中に加えて体中が痛え。けっこうな量の血も流しちまったな。くらくらする。

だが、こんな風、誘波に比べりゃそよ風みたいなもんだ。もし敵があの着物怪人だったら、俺は五体満足ではいられなかっただろうね。

立ち上がる。青龍偃月刀は……ない。知らない内に手離してしまったらしい。仕方なく、俺は最後の日本刀を生成する。ないよりはあった方がマシだ。

闇の靄が沈殿していく。

視界が、晴れる。

「――ッ！？」

迫間が、望月に斬られて鮮血を噴き上げていた。

「れ、漣ッ！？」

上空に回避していたと思われる四条が、必死の形相で崩れ落ちる迫間の下に急降下する。

「るぉおおおおおおッ！！」

そこに、横から悪魔異獣が突っ込んできた。

「四条！　横だ！」

「なッ！？」

気づいた時にはもう遅い。悪魔異獣の即死級の巨拳が四条に襲いかかる。

すると――ボワッ。

巨拳と四条の間に、黒炎が灯った。
「レージを助けてくれた借りはこれで返したわ」
黒炎から現れたリーゼはそう言うと、瞠目する四条を蹴り飛ばした。直後、悪魔異獣の巨拳が四条よりも僅かに体の小さいリーゼを撥ね飛ばす。まるで大型トラックと衝突したような軌道を描いて、リーゼは俺のすぐ近くへと落下した。
あのリーゼが、他人を庇った。
「リーゼ!?」
俺は即座に駆け寄り、リーゼの小さな体を抱き寄せる。幸い息はあったし、頑丈な?魔帝?様は骨も折れていないようだが……もう、動けそうにない。息はあっても虫の息。ダメージは深刻だ。
「しっかりしろ、リーゼ!」
俺は呼びかけるが、意識を失っているリーゼに反応はない。
と、背後に?影?の転移。望月か!　と思ったが、現れたのは迫間だった。
「白峰、俺らが時間を稼ぐ。お前らは……もう逃げろ」
喋るのもやっとという状態で、迫間はそう告げてきた。
「なんだと?　ふざけんな!　お前らを置いていけるか!　俺のお人好し舐めんなよ!」
吠える俺を、舞い降りてきた四条が睨む。
「今の望月先輩が狙ってるのはその子よ。ここに残ってたら確実に連れ攫われるわ。だから安全なところに運ぶの。その役目はアンタ」
俺はもう一度リーゼを見る。四条の言うことはもっともだ。それが一番合理的だということは俺にだってわかっている。だが、納得は死んでもいかないだろうな。
「安心しろ。望月先輩は俺らが刺し違えてでもなんとかしてやる」
「少なくとも、アンタが誘波や師匠の下に辿り着くまでの時間は稼いであげるわ」
二人はそう言い残し、俺に反論の余地も与えず望月と悪魔異獣に飛びかかっていった。

戦闘音と絶叫が飛び交う。
逃げろだと？
そんなことした日には、またお前らにでかい借りを作っちまうじゃないか。たぶん、二度と返せない借りをな。
悪いが、俺は逃げないぞ。日本刀一本でも戦ってやる。
と、その時――
「レー……ジ」
擦れそうな声に、俺はリーゼを振り向いた。意識を取り戻した彼女は、瞼を少し開き、ルビー色の瞳で俺を力なく見据えている。
「レージ……わたしは……あいつを燃やしたい」
指一本動かせないにも関らず、リーゼの闘志はこれっぽっちも揺らいでいなかった。
これでもしリーゼが『帰りたい』とか『助けて』とか言ったら、俺の決心は見事に瓦解していただろうな。
そうだ。俺だって、望月をぶん殴りたい。ぶん殴って、まず迫間と四条を利用したことを謝罪させてやる。
「リーゼ、一緒に戦うぞ。だから、お前の魔力を俺に預けてくれ」
弱々しく頷くリーゼの手を左手で握り、俺は〈吸力〉を開始する。
リーゼの底なしの魔力が俺へと流れ込んでくる。
だが……なんだ？　いつもと、少し違う。
魔力を通じて、リーゼの『勝ちたい』という強い意思が伝わってくる。俺の中で、気持ちが一つに混ざり合う。
普通の武器じゃダメだ。そんなんではこの想いを乗せられそうにない。
母さんに叩き込まれた能力の使い方を思い出す。俺は今まで基本的なことしかやってこなかったが、ここらで応用編に手を出してみるか。
イメージする。ナマクラの日本刀を捨て、俺の武具の知識を総動員し、リーゼの意思を込めた全く新しい武器を創造する。

〈魔武具生成〉――魔帝剣ヴァレファール。

長く広い剣身はフランベルジェのように波打ち、突き刺した相手の肉を抉る。その色は赤く、リーゼの瞳の色を模している。鍔は攻撃的に刺々しく前方に突き出し、柄は両手持ち用に長めに設えた。命名は言わずもがな。リーゼのファミリーネームだ。

スヴェンの時に生成したグングニルや、ニセ〈黒き滅剣〉とはわけが違う。アレらはただの想像で作られたでかいだけのレプリカだったが、今回は細部まで綿密に計算した俺オリジナルの武器だ。ただ知っている武具を生み出すのが〈魔武具生成〉じゃない。あらゆる武具の要素を組み合わせ、設計し、この世には存在しない実現不能な武具を生成することが真骨頂なんだ。

既存の武具を作る方が楽だからやったことなかったけど、どうやらうまくできたらしいな。母さんほどじゃないけどよ。

それからもう一つ、俺は試したいことがある。

「リーゼ、悪いけどお前の炎、使わせてもらうぞ」

炎のごとく波打つ刃に、本物の黒炎が纏った。

これはスヴェン戦で気づいたことだ。取り込んだリーゼの魔力を、俺の魔力に昇華してしまう前に武具に込めれば黒炎を灯せる。制御はかなり難しいが、リーゼの意思がそのやり方を直接教えてくれる。

一撃だ。

一撃で決めなければ、後がない。

「迫間！　四条！　ちょっとどいてろ！」

「「「――ッ！？」」」

黒炎纏う波状剣を持つ俺に、迫間たちが気づく。だが当然、望月にも知られてしまう。こんな派手な武器だ。隠せるわけがないだろう。だったら最初からバラしていた方が対処された時に対処し返せるってもんだ。

「ふふっ」

望月が転移する。闇が俺の後方に噴き上がる。が――

「そんな手に二度も引っかかるかよ！」
人の気配を感じない後ろの闇はフェイク。本物は――なっ！？
噴き上がる闇が、何箇所にもあるだと？
驚愕する俺は、どこに刃を向けていいのかわからなくなる。
「上だ！」
迫間に言われて見上げると、四条と似たような巨翼を背に生やした望月が、遥か上空から俺を狙っていた。？影？の斬撃波が飛んでくる。
やばい――っていうと思ったか？
「いいのかそんなところにいて？　それならそれで、俺はまずはあの異獣から焼き殺すぞ！」
斬撃波をかわしながら、俺は咆哮する悪魔に向かって走る。
「！　智くんには触れさせないわ！」
案の定、望月は転移で俺と悪魔異獣の間に割り込んで――
「二度と引っかからないんじゃなかったの？」
「なにっ！？」
後ろ……だった。
また、俺は油断した。
やられる！？
と――
「まったく、詰めが甘いっていつか言わなかったかしら？」
振り翳された望月の腕を、四条の？影？の帯が絡め取った。四条は黒翼を広げ、一本釣りの要領で望月を宙に持っていく。しかし、その帯はすぐに切断された。
「無駄よ。瑠美奈ちゃん程度の〈束縛〉じゃ、私を捕えることはできないわ」
「知ってるわ。捕えることが目的じゃないから」
宙にいる望月の後ろに回り込んだ迫間が、〈黒き滅剣〉を大上段

から叩きつける。望月は影刀を立てて漆黒の刃を受け止めたが、武器の重みの差で吹っ飛んだ。
空中で体勢を立て直す望月を、悪魔異獣が優しく受け止める。
――そこだ！
「リーゼ、存分に焼き尽くしてやれ！」
俺は黒く燃える魔帝剣を振り翳し――
「らぁあッ！！」
気合いと共にリーゼの黒炎を解き放った。
轟ォオオオオオオオッ！！
激烈な爆撃音が轟き渡り、怒涛と化した黒き業火が驚愕する望月と悪魔異獣を周囲の景色諸共津波のごとく呑み込んだ。
俺の〈魔武具生成〉では武器が持つ特殊能力までは再現できない。なんせその辺の構造を理解できないからな。でも、理解している能力をオリジナル武器に付加させることは可能だ。
この魔帝剣は、リーゼの黒炎を何倍にも増長させる力を宿している。リーゼの意思から感じ取り、俺が一から設計した力だ。波打つフォルムもそのための要素だったりする。
結果――――やり過ぎたな。
俺の前方、いっそ天晴れなくらい燎原となっているぞ。そりゃあ、まだ慣れてないから制御できなかったってのもあるけど。
「白峰、まだ終わってないわ」
四条の緊張感ある口調に俺は改めて前方を見やり、愕然とする。
元々黒いから焦げてるのかどうかわからないが、とにかく悪魔異獣の巨体がむっくと起き上がったんだ。
「ははっ、姿通りのバケモノめ」
アレをくらって生きてるだと？　もう苦笑しか出ないな。
と思ったら、悪魔異獣はガクンと膝をついた。
「智くん！？　智くん！？　そんな、私を庇ったりするから……」
悪魔異獣の陰から、黒セーラー服が焼け落ちてほとんど下着姿となった望月が出てくる。悪魔異獣が庇ったらしいから生きているよ

うだが、彼女自身、もうフラフラだ。
しかし、フラフラ度で言えば俺らだって負けてない。ここから再戦して勝てるかどうかは怪しいな。やるけど。
武器を構え直す俺たちを、望月はキッと恋人の仇を見る目で睨む。
「あなただけは許さないわ、監査局のわんこさん。智くんが大怪我したから今日は見逃すけど、そのうち絶対に私の手で首を刎ねてあげる」
「なっ、てめえ！　逃げる気か！」
叫ぶ俺に、望月は完全にやる気を失った声で答える。
「元々、私が残って戦う理由はないの。スヴェンの研究には興味ないし、私個人の目的も執行騎士としての目的も達成されたから」
「執行騎士の目的だと？」
「ええ。歪みを用いて、この辺りにある『次元の柱』を圧し折ったの」
次元の柱？　なんだそれは？　聞いたことがないぞ。
「それは、なんのためにだ？」
「さあ？　私は？王様（レクス）？の指示に従っただけよ」
本当に知らないのか、知っていてあえて言わないのか、望月は掴めない笑みを浮かべている。
「じゃあね、漣くんに瑠美奈ちゃん。またどこかで会いましょう」
「「望月先輩！？」」
「待てコラ！」
捕えようと走る俺たちに向かって、望月は右手で空気を薙いだ。
「止まれ白峰！」
俺は迫間に腕を掴まれる。
「なにしやがんだ迫間！　今あいつを捕まえないでいつ――ッ！？」
迫間が止めた理由に気づいた俺は、驚きのあまり言葉を失った。
俺たちと望月の間に、高さ二十メートルほどもある楕円形の？穴？が空いたのだ。それはもう、メスで切ったようにスッパリと。

『混沌の闇』の？穴？だ。あのまま突っ込んでいたら間違いなく呑まれていた。誘波の風の加護があるといっても、あの中に入ったらまず助からない。助かったとしても、望月みたいな影霊に生まれ変わってしまう。

「さようなら。次に会う時まで死なないでね、わんこさん」

俺に言い残し、望月は悪魔異獣の肩に乗って『混沌の闇』の中へと飛び込んだ。それも大概に驚愕物だったが、影霊だから大丈夫なのだろう。

数瞬後、？穴？が勝手に閉じられる。

「逃げ……られた……？」

帰ったら誘波か鷹羽に殺されるな、俺。

いや、その前にレランジェに殺されそうだ。早くリーゼを治療してやらねえと……。

すると――ドサッ。ドサッ。

なにかが倒れる音を聞いた。見ると、迫間と四条が気を失って地面に転がっていた。緊張が解けたのだろうな――って！

「おいおい、ちょっと待て。お前らまで俺一人で運べってのか？無茶言うな……よ……」

あ、やばい。力入んねえ。

どうやら、俺も意識が飛ぶらしいな。

悪い、お前ら運ぶのは、ちょっと休んでからにするぜ……。

四章　暗黒の深部（8）（後書き）

ちょっとスッキリしないところがあるかもしれませんが、これにて四章終わりです！

そして残すは終章のみ！（第二巻は）

どうか最後までお付き合いくださいまし（終わりませんよ～。三巻以上続きますよ～）。

次回の更新は6月7日（火）です。

終章

「……ハッ！」

目が覚めると、自宅の見慣れた光景が広がっていた。

いつものベッド代わりのソファーで、いつものように毛布を被って寝ていたようだ。

おかしい。俺は闇の森で倒れたはずなんだが……。

とりあえず体を調べてみる。痛みはないし、どこにも傷はない。

背中を擦ってみるが、リーゼに燃やしてもらった太刀傷も消えている。

「レージ」

いつの間にか、リーゼが傍に立っていた。腰より長い綺麗な金髪に紅い瞳、ちっこい体にはやはり傷跡なんて見当たらない。

「リーゼ、お前、傷は大丈夫なのか？」

「傷？　なんのこと？」

きょとん、と小鳥のように首を傾げるリーゼ。

え？　まさか、夢オチ？

どっから？

「それよりも、レージ、早く行きましょ」

リーゼが俺の手を引っ張る。

「行くって、どこにだよ？」

「あそこ、あの川の向こう。なんかすっごく楽しそう」

「川？」

前を見ると、確かに大きな川が流れていた。その向こうには楽園のようなお花畑が広がっている。――ってあれ？　俺、家の中にいなかったっけ？

つーか、家の近くにこんな川あったっけ？　いやあったような……あった気がする……あったな。うん、あった。

よし、行くか。

いやにリアルで痛々しい変な夢を見ちまったからな、あそこで思いっ切り遊んでスッパリ忘れよう。
アハハハハ。
エヘヘヘヘ。
『その気持悪い幻想が夢安定です、ゴミ虫様』
うおっ！？　なんかレランジェっぽい声が天から聞こえたようガビリゴハァッ！？

「――殺す気かッ！？　……ハッ！」
目が覚めると、見慣れない部屋に寝かされていた。白い壁に白い天井。なにやら点滴器具と思われる物が俺の腕に繋がっていて、部屋全体が妙に薬臭い。
「なんだ夢か」
「いえ、現実安定です、ゴミ虫様」
今度は天からではなく横から腹の立つ声が聞こえてきた。
振り向くと、世界無愛想選手権で金メダルを取れそうなゴスロリメイドさんが屹立していた。他に人はいない。今思い出したが、どうやらここは異界監査局の医療施設のようだ。入院経験は一度しかないから普通覚えてないって。
「俺は……無事なのか？」
「はい、残念ながら。ゴミ虫様は三日ほど睡眠安定でした」
三日も寝てたのかよ、俺。そして残念ってなんだよ壊すぞコラ！
「で？　お前、俺になにかしたか？」
嫌な予感がしたので、俺は半眼で訊ねてみる。するとゴスロリメイドさん――レランジェは首を横に振り、
「いえ、なにもしていない安定です。ただゴミ虫様をこっそり殺そうと思って魔導電磁放射砲弱を放ったところ、なぜか生き返ってしまった程度です」
「ＡＥＤかお前はッ！」
ていうか、さっきの夢を思い起こせば俺まっすぐ死にに行ってた

な。危ない危ない。こいつに感謝したくねえけど、仕方なく心の奥底を更に十キロほど掘り進めた位置で感謝してやろう。
「あまり大声を上げない方が安定ですよ？」
「痛ッ……」
今更だが、俺は全身に痛みを覚える。よく見たら、体中包帯でぐるぐる巻きじゃないか。ホラー映画にミイラ男として出演できそうだ。
「ところでゴミ虫様に質問安定です」
「なんだよ？」
ぶっきら棒に応答すると、レランジェは点滴器具を指差し、
「これを引っこ抜くと死にますか？」
「死なねえよッ！　――痛い！？　き、傷口が開く……」
「傷口を開いて死亡安定です」
「お前さっき大声出すなって忠告してくれたよな！　――がふっ！？　くそっ、これがこいつの作戦か……」
もうツッコミはしない。もうしないぞ。やるとしても脳内。俺は学習する生き物なんだ。

Ｔｒｒｒｎ！　Ｔｒｒｒｎ！　Ｔｒｒｒｎ！

その時、どこからか携帯の着信音が聞こえてきた。俺のか？　と思ったが、どうやら音の発信源はレランジェの……左手？
「そうでした。異界技術研究開発部に通話機能を設置していただいたのでした」
どういう理屈なのかさっぱりわからん。あの変態集団のやることだから、こいつの左手が電話になっていても俺は驚かないね。
「ちなみに取り外し可能です」
そりゃロケットパンチだからな、左腕が。
「取り外してみせんでいいから、さっさと出ろよやかましい」
「了解です。新しいあるばいと先のテンチョーから安定です」

レランジェは握った左手の親指と小指だけを立てて耳にあてる。
そう使うんだ……。
「どうやら電波が不安定のようですね」
するとレランジェは逆の耳の裏を弄り、すっすっとアンテナらしきものを立て始めたぞ。こいつ、どこまで魔改造されるんだ？
「つーか、病室で電話すんな。廊下でしろ」
「ではこれを抜いてレランジェは退散安定です」
「抜くなッ！　――ガッ！？　お、俺は馬鹿か……？」
呻き悶える俺にレランジェは「いい気味安定です」とほざきながら病室を出ていった。あのガラクタ人形はいつかスクラップ置き場に捨ててやる。
「てか、あいつは一体なにしに来てたんだ？」
そんなの決まってるか。俺を殺りに来たんだ。
と――ガチャッ。
ドアの開く音がした。もう戻ってきたのかと思ってそちらを見ると、
「はぁい♪　呼ばれて飛び出る誘波ちゃんでーす」
「チェンジで」
ドアの前でふんわりニコニコな笑顔を咲かせる十二単の少女を視界に入れた俺は、とてつもなくげんなりした顔をしているだろうね。
「クーリングオフは利きませんよぅ」
「なんて悪徳……危ない、また叫ぶところだった」
メイドと着物のコンボとは、誰だよ俺に大声出させて殺そうと企んでるやつは。出て来い。刺してやるから。
「事後報告をしに来たんだろ。さっさと言え」
「あらあら、レイちゃんがそんな態度をしていると点滴に炭酸飲料を混ぜたくなります」
やめろ！　なぜにあいつもこいつも俺の点滴を弄りたがるんだ！
「……俺はどうやって助かったんデスカ？」
「むぅ、最後の方が若干引っかかりますけど、まあいいでしょう」

誘波はパイプ椅子を引っ張り出して腰掛け、十二単の袖からどうやってるのかキンキンに冷えたペットボトルの緑茶を取り出した。長居する気満々だな。てか俺の分も寄こせ。

「気絶したレイちゃんたちを森の奥から助け出したのは、クロちゃんです」

「鷹羽が？」

「転移でパッパッて感じでした」

誘波は豊満な胸の前で両手をサッサッと車のワイパーみたいに動かす。それは転移のジェスチャーかなんかか？

「ていうか、あいつ動けたのかよ」

「いえ、『動けるようになった』が正解です。望月ちゃんが逃げた後、私が呼んでおいた影魔導師連盟の応援が到着したのですよ。『混沌の闇』の侵蝕は彼らのおかげでなんとかなりました。ただ、しばらくあの地域には一般人を近づけない方がよさそうです」

「どういうことだ？」

訝しげに訊くと、誘波は少し深刻な色を青い瞳に宿して口を開く。

「『次元の柱』が砕かれたからです」

次元の柱。……確か望月もそんな単語を口にしていたな。そしてそれを、自分が圧し折ったのだと。

「すると、どうなるんだ？」

「『次元の柱』は世界を構築する大黒柱だと思ってください。それが砕かれると、次元の壁が崩壊して様々な世界が逆流し、混ざり合います。この現象はそのまま英語で『混合する世界（シャッフルワールド）』と呼んでいまして、当然、それが発生するとどの世界も無事では済みません」

「望月は、わざとそいつを引き起こそうとしてたってことか？」

「望月ちゃんというより、王国、ですね。シャッフルワールドを企てている組織は。スヴェンちゃんもそこにいるようですし」

「なんのために？」

「それは直接？王様？って人に訊いてみないとわかりませんねぇ」

「王国については？」

「目下、調査中です」
　わからないことだらけだ。やはりなんとしてでも望月はふん捕まえておくべきだった。
　誘波は一度ペットボトルに口をつけ、
「今は他の柱のおかげで安定していますが、柱が自己修復するまであの地域は頻繁に門が発生すると思われます。監査の強化をするべきでしょうね」
「俺に飛べと？」
「いいえ、そんなことすると私が楽しくありません。レイちゃんはいつも通り、ここで働いていてくださいね♪」
　今激しく左遷を歓迎したくなってきた。
「レンちゃんとルミちゃんは自分たちの責任から強く希望していましたが、却下しました。夜しか動けない二人が行っても制限多々ですし、二人を補うための人員を派遣するとどこかが監査官不足になってしまいますので」
「そうか。迫間と四条も無事みたいだな」
「はい。それぞれの病室でレイちゃんみたいにベッドに縛られています。容体はレイちゃんとレンちゃんが同等、ルミちゃんはまだ軽い方ですね」
　まあ、俺と迫間はバッサリいかれたからなぁ。
「そう言えば、二人からレイちゃんに言伝があります」
「ちゃんとしたものだろうな？」
　このアマが持ってくる言伝がまともなわけがない。俺は少々疑っていたが――
「『ありがとう』――だそうです」
「……」
　割と、まともだったな。
　つい口元が緩んじまうじゃないか。
「『自分たちで言いに来い』って伝えといてくれ」
「あはっ、わかりましたぁ」

なにが楽しいのかふわふわな笑みを浮かべる誘波。気色悪いからやめてもらいたい。
「ん？　そういや、リーゼは？　あいつも相当な重傷だったはずだろ？」
「ああ、リーゼちゃんなら――」
ドバン！　病室のドアが慌ただしく開いた。
「どけ！　？魔帝？リーゼロッテ！　私の見舞いが先だ！」
「フン！　レージはわたしのものだからわたしが先よ！」
魔王と聖騎士のコンビが二人三脚をするようにピッタリくっついて登場しやがった。相変わらずお前ら仲いいな。頼むからうるさくしないでくれ。傷に障る。
「零児、傷は大丈夫なのか？」
「さっき殺されそうになってたけどな」
言うと、セレスは銀髪ポニテを揺らして頭上に『？』を浮かべた。
「レージ！」
ピョン！　リーゼが勢いよく俺に飛び乗って痛ったぁあああああっ！？
「り、リーゼお嬢様、なんであなたそんなに元気なんですか？」
「ふふん、だってわたしは？魔帝？で最強よ？」
偉そうに小さな胸を張るリーゼ。あー、はいはい。治癒能力が凡人の俺たちとは全然違うってことか。？魔帝？だから。
「？魔帝？リーゼロッテ！　そんなことをすればレージの容体が悪くなるだろう！　降りるんだ！」
「問題ないわ。わたしのレージはこのくらいじゃ壊れない」
「いえ壊れそうです。降りてください。お願いします」
懇願すると、リーゼは子供みたいに渋々と降りてくれた。俺はお前の特等席か。
「レージ、なんかよくわかんないけど、わたしすっごくスッキリし

た。レージがわたしの炎であいつ焼いてくれて、なんかよくわかんないけどスッキリしたの」
　よくわかんないなら伝えようとしなくていいぞ。いやでもそんな嬉しそうに大きな紅眼を光らせる顔は可愛いからいいけどよ。うん、俺はロリコンじゃないぞ間違えるな。
「もういいだろ、？魔帝？。次は私が話す番だ」
「お前最初に話したじゃない」
「アレは挨拶のようなものだ」
「ふぅん、じゃあもういいわね」
「よくないと言っている！」
「じゃあ勝負する？」
「いいだろう」
「だからどうしてそうなるんだ！　ていうかうるさいから黙ってくれないかなお前ら！」
　俺はもう傷に響くことも構わず叫んでいた。レランジェや誘波も大概だが、こいつらが揃う方が俺にとって最大の死亡フラグだ。
「あらあら、モテモテですねぇ、レイちゃん。私も加わってもいいですか？」
「お前はどっか飛んで行けよ風らしく！」
「ではゴミ虫様を毒殺安定ですね」
「思い出したように戻ってくんなポンコツメイド！　そしてその怪しい瓶はどこから調達してきやがった返してきなさいッ！」
　その後、俺の入院期間が延びたことは言うまでもない。

終章（後書き）

メイドさんが人気あるから出番多めにしたわけじゃないんだからね！

……いえなんでもないです忘れてください。

えーと、シャッフルワールド！！第二巻終了しました♪

ここまで読んでくださった読者様、ありがとうございます（＞Д＜）ゝ

感想、評価、質問、あとついで人気投票も絶賛受付中です♪

で、夙はしばらく三巻作成の旅に出ます。少なくとも新人賞用の作品を投稿するまで更新は停止するでしょう（〆切は６月末だから割とすぐ再開するかも）

その間に積み小説も消費せねば……。何冊あるんだ？　軽く３０冊以上ありそうだ。読みまくってレベルアップしてきます！

ではでは、これからもご贔屓にｍ（＿　＿）ｍ

序章

二つの青い月が淡く優しい光を持って地上を照らしている。満天の星々は小さな煌めきを瞬かせ、暗い夜の空を芸術的なまでの美しさで彩っている。

そんな星空を鏡のように映す大きな湖があった。湖面は波打つことなく穏やかで、星月の輝きを反射した絢爛たるその様は、遠くから眺めるだけでも人々の心に安らぎと感動をもらたすことだろう。

湖のほぼ中心には浮島があり、石造りの巨大な橋が架かっている。浮島と、岸辺で栄えた都市とを繋げる橋だ。荘厳な雰囲気を纏った大橋からは、建築されてから幾千の歳月を重ねていることが窺える。

だが、それを渡った先には、そんな大橋など霞んで見えるほど壮麗で立派な王城が天高く超然と聳えていた。

その王城の最上階。広い窓ガラスを設えた展望台として一般にも開放されているこの場所で、一人の青年が物静かに星空を見上げていた。

腰まで届く美しいブロンドの長髪に宝石のような赤紫色の瞳。顔立ちは嘘のように端整で、法衣に似た豪奢な衣服を長身に羽織っている。年齢は二十代半ばだろう。しかしそこに立っているだけにも関らず、彼の全身からは王者の風格とも言える圧倒的な存在感が滲み出ていた。

彼の傍らには、どういうわけか一振りの長剣が浮遊している。星空をそのまま剣の形に切り取って貼りつけたような刀身の、神秘的な輝きを放つ両刃剣である。

「世界は無限に存在する。その中からたった一人を見つけ出すなど、印をつけた砂粒を砂漠から探し出すよりも難儀なことだな」

青年は剣に語りかけるようにそう言って、苦笑する。

「もっとも、私なら時間をかければ可能なことだが」

自信に満ちた彼の言葉に応えるように、剣が明滅する。

と、展望台の入口の方から人の気配。
「陛下、やはりここにおられましたか」
気配の主は、鮮やかな翠色の長髪をした若い男性だった。彼は褐色のマントを靡かせて陛下と呼んだ青年の下に歩み寄り、恭しく片膝をつく。
「アレインか。なんの用だ？」
陛下と呼ばれた青年が振り返らずに答える。
「フェンサリル第十二席の件です」
「ああ、そのことか」
陛下は納得と呆れを滲ませてそう呟いた。
セレスティナ・ラハイアン・フェンサリル。この国――ラ・フェルデが誇る聖剣十二将の一角を担う若き女性騎士のことだ。彼女は約一ヶ月半前に突然失踪し、現在までなんの手掛かりも見つかっていない。
ただ、どこへ消えたのかだけはわかっている。
異世界だ。
「あいつの部下の証言から『門』をくぐったことは判明している。私が見つけてやるまでは帰って来られないと、前に言ったはずだ」
「ですが、そう仰られてから時間が経ち過ぎています。下手な異世界に飛んでとっくに命を落としている可能性も考えられるでしょう。そろそろ、彼女が抜けたことで空いた聖剣の席を埋める準備を進めた方がよいかと思われます」
彼――アレイン・グラリペル・キャクストンは聖剣十二将のリーダーを任されている。その責任から今回の提案をしてきたのだろう。
「悪いが、私はまだ諦めていない。セレスは私がこの目で選び抜いた聖剣十二将だ。聖剣の第十二席に座れる猛者を新たに見つける方が大変だと思うが？」
「確かにそうかもしれませんが、準備を進めない理由にはなりません。聖剣は十二本揃ってこそ真の意味を成すことは陛下が一番ご存知のはず。早々に取りかかるべきです」

そうだな、と陛下の唇が弛緩する。アレインは直接政治に関わっているせいか、他の聖剣十二将たちと違って大臣たちのように頭が硬い。もっとも、それは国を思ってのことだ。強く否定はできない。

そもそも、彼の提案を却下するつもりなどない。

聖剣ラハイアンを失ったことで、この世界は新たなる聖剣の素を生み出そうとしている。それに合わせてこちらも聖剣を扱える者を見つけ出す必要があるのだ。世界は待ってくれない。

「わかった。そちらは全てお前に任せる」

「陛下はどうなさるおつもりで？」

「私は継続してセレスのやつを探す。あいつが戻ってくることこそ最善だからな。……そうだ。どちらが先に見つけるか勝負してみるか、アレイン？」

「またそのようなお戯れを」

はぁ、とアレインが溜息をつく。どうやら了承はしてくれたようだ。

「それにしても困ったものですね。先代の第十二席も就任して間もなく外れましたし、なにか悪いものでも憑いているのでしょうか？」

用件が済んだためか、アレインが雑談をする感覚で言の葉を紡いだ。口調は硬いが、彼とは幼馴染の関係にある。だからこうして二人きりの時は他愛のない雑談をすることも多い。

「アレとコレとは話が違うだろう？　セレスは騎士の鑑のようなやつだ。先代のようにはならんさ」

「いえ、話の趣旨はそこではなく、第十二席がすぐ空席なるということに対してであって……」

「ああ、そうだったな。だが、今回はどうせ一時的なものになる。あいつは必ず帰ってくるからだ。世界が新たな聖剣を創造する前に、この私が連れ帰ってみせるさ」

絶対的な自信を含んだ声に、アレインが深刻に言う。

「……本当のところを申しますと、私も彼女が適任だとは思っています。しかし希望が薄いことも事実。お言葉ですが陛下、本当に彼

女を見つけることは可能なのですか？」
「おい、アレイン。お前は私を誰だと思っている？」
疑念に眉を寄せるアレインだったが、陛下は微塵も揺るがない。
強い意思を声に乗せてはっきりとこう告げる。

「王だ。次空を統べる神剣の継承者、クロウディクス・ユーヴィレード・ラ・フェルデだ」

陛下――クロウディクスはようやくアレインを振り返った。その顔には決して折れることのない自信満々な笑みが貼りついていた。
「なに、すぐに見つけてやろう」

序章（後書き）

お久し振りです。

就職が決まったり引っ越ししたりでめっさ忙しい最近でしたが、無事に第三巻を始動させることができました。

ネットが7月1日からでないと使えないみたいなことを聞いていたのですが、どういうわけか使えるみたいなので更新再開の日程を早めました。

三巻もこれまで以上に盛り上げていきたいと思いますので、感想や評価や投票など、よろしくお願い致します。

仕事が始まるので更新は不定期になると予想されます。他に同時執筆している作品がないので、うまくいけば週二回以上の更新スピードになるかもしれません。まあ、週二回更新できるかどうかも怪しいですが……。

一章　来る学園祭に向けて（1）

期末テストを終え、夏休みも間近に迫ったこの時期は伊海学園全体が騒々しくなる。

そう、全体だ。山一つ丸ごと買い取って建てられた無駄にクソ広い学園内が、どこもかしこも活気に満ち溢れてくる。

なぜか？　それはな、この時期に伊海学園の学園祭が開催されるからだ。初等部のチビどもから大学の兄ちゃんたちまで、全ての学生が三日三晩休む暇もなく騒ぎ倒す大イベント。これが盛り上がらないわけがない。……あ、もちろん良い子のみんなは夜中の祭には参加できませんよ。注意しろ。

それと期末テストで一教科でも赤点を叩き出したやつは祭自体に参加できないからな。学園祭で皆がキャーキャー楽しそうに騒いでいる間、そいつには問答無用の補習地獄が待っている。さらに言えば、夏休みの半分を献上して冷房すらない拷問のような熱気を孕んだ教室でやっぱり補習三昧フルコース。これは死ねる。

補習免除を受けている異世界人たちは羨ましいな。俺――白峰零児は半分異世界人の血が流れてるんだから、その恩恵に預かってもいいと思うんだ。まあ、生まれも日本、育ちも日本だから申請したとしても笑顔で「あはは、帰れ」と言われるだけだが……。

なんかこんなことを言ってると、俺が赤点取ったみたいに聞こえるな。悪いがその期待は裏切らせてもらう。俺はそんなヘマはやらかさない。苦手科目は英語だけだし、そいつも抜き打ちで奇襲されなければ平均点くらいは取れるんだ。

それにほら、俺ってこの前大怪我して入院してただろ？　暇で暇で仕方なかったから勉強してたんだよ。そしたら平均八十点って自分でもビックリだ。普段は六十前後なのに。こんなに記憶力よかったっけ、俺？

とにかく、テストのことはいい。終わったことだ。

問題は学園祭――そして、今この二年D組の教室で勃発している二大勢力による争いだ。

「執事喫茶よ！」

「いいや！　メイド喫茶だ！」

俺のクラスは中央に置かれた机を仕切りに、窓側を男子、廊下側を女子で真っ二つに割れていた。理由は先程の主張でわかる通り、学園祭の出し物について男女がもめているんだ。

学園祭実行委員の一人――癖毛でアホ面の桜居謙斗（さくらいけんと）率いる男勢力は、メイド喫茶を提案。邪な欲望がこれでもかってくらい滲み出ているな。俺を巻き込まないでもらいたい。

対する女勢力は張り合うように執事喫茶を提案。フリフリの可愛い服を着たがってメイド喫茶に賛同する女子もいるかと思いきや、女性陣は満場一致で俺たちにウェイターの仕事をさせる気でいやがる。しかもなにやら男子のそれと大差ない欲望の眼差しまで向けているときたもんだ。このクラスの冴えない男子どもに執事の格好させてなにが嬉しいのかさっぱりわからん。

ダン！　と机の上に誰かが勢いよく飛び乗った。下手すりゃ小学生とも見間違えそうな小柄な女子生徒だ。

「お前たち、ヒツジキッサにするのよ。わたしがそうするって決めたんだからそうするの！」

女王様のように男子たちを力強く威圧的に指差すそいつは、リーゼロッテ・ヴァレファール。通称リーゼ。腰よりも長い絹糸のような金髪に健康的な白肌、子供らしい愛嬌のある端整な顔をしていて、両の紅瞳はキラキラと興が乗って楽しそうに輝いているな。

こいつは元々イヴリアって異世界に君臨していた？魔帝？なんだが、なんやかんやあって現在はこの学園の男子ロリコン率をオートで上げ続けている困り者だ。あっ、俺は毒されてないからな。勘違いするなよ。

「ヒツジキッサって楽しそうでしょ。お前たち私のために潔く諦めなさい。さもないと燃やすわよ？」

やめとけよ、リーゼ。そんな傲慢で自分勝手な台詞をぶつけても、ウチのヘンタイどもが気持悪く喜ぶだけだぜ？　あとお前絶対意味わかってないだろ。執事が『ヒツジ』になってたぞ。

「悪いけど、リーゼちゃん、今回ばかりはオレたちも譲れないんだ。他の女子はどうでもいい。だが！　俺たちはリーゼちゃんとセレスさんのメイド服姿を一目見なければ死んでも死にきれないんだぁあっ！」

血の涙を流しそうな桜居の猛烈な喝破に、後ろに控える男子どもが「そうだそうだ！」と鬨の声を上げる。なんて欲望に忠実なんだ。お前ら、少しは女子を丸め込む努力をしろよ。めちゃくちゃ引かれてるぞ？

「メイド服とはアレのことだろう？　その、レランジェ殿が普段着ている王族や貴族に使える侍女の制服。だが騎士の私がそんな可愛い――じゃなくて、従者の服などき、き、着られるわけが……」

女性陣営の隅っこで赤面してぼそぼそと呟いている生徒がいる。セレスだ。本名はセレスティナ・ラハイアン・フェンサリル。銀細工のような輝かしい長髪をポニーテールに結い、整った顔立ちに翠色の凛々しい瞳をした綺麗系美少女だ。スレンダーながらも出るところは出たプロポーションは、外国人モデルとも引けを取らないな。

彼女は異世界ラ・フェルデからこの世界に迷い込んできた聖剣十二将とかいう騎士様らしい。元の世界に帰りたい一心で俺と同じ異界監査官をしているのだが、これまで一度も不安や弱音を吐いたことがない。学園では布を巻いて背中に背負っている超長剣――聖剣ラハイアンを制御するには常人離れした精神力が必要とか言っていただけに、セレスはメンタル面で強いんだ。

「とにかく！　学園祭と言えばメイド喫茶と相場が決まってるだろう！」「そんなベタなことやっても新鮮味に欠けるわ！」「ベタすなわち王道だ！　なにが悪い！」「私たちがメイド服なんて着たらあんたら見惚れて働かなくなるでしょ！」「そうよそうよ！」「いやそれはない」「リーゼたんとセレスたんなら話は別ですが」「あ

んですって！」「わたしの言うこと聞かないと燃やすわよ！」「ボクは白峰くんのメイド服姿が見たいんだ！」「ちょっと待て今おかしいやついたぞ！」

一体誰だ。巧みに声変えやがって。この二年D組には変装上手な怪盗でも住んでんのか？　まったく、自分で自分のメイド服姿を想像して吐き気を催しちまったじゃないか。

まあ、そいつはいつか見つけ出してシメるとして……この纏まり感皆無なクラスメイトたちは放っておいたら老衰するまで口論を繰り広げそうだ。だから俺から提案してみようと思う。さっさと終わらせて帰りたいしな。

「どっちも喫茶なんだから一緒にすればいいんじゃないか？」

よし、我ながら完璧な提案だ。これで万事解決。さてと、帰り支度でもするかな。

「わかってないなぁ、白峰君は。そんな稚拙な案を採用するくらいなら最初からもめてなどいないサ。どちらか片方だからこそ意味があり、面白みがあるんだゾ？　混ぜるな普通」

全否定された。

女子側の一人が前に出て、机とドッキングしたように屹立するリーゼの横に並んだ。肩辺りまで伸ばした髪に小振りの整った輪郭、しかし身長は百七十五センチある俺と差ほど変わらず、腕を組んで持ち上がった胸は……でかい。同年代の女子と比べても成長著しいぞ。こいつを初めて見た時なんか教育実習の大学生かと思ったくらいだ。

だって白衣着てるんだぜ？　制服ならともかく、あの体つきでそんなの纏っていたら化学かなにかの先生だと思うだろ。

俺は白衣の女子生徒を呆れ目で睨む。

「もう普通でいいじゃねえか、郷野」

こいつは郷野美鶴（こうのみつる）。「なんで白衣着てるんだ？」と問うたら「保健委員長だからだ」と真顔で答える変人だ。頭沸いてんじゃないのか？　なんで誰も注意しないんだと思ったが、よくよく考えれば別

のクラスに常時黒衣を羽織った変人が二人もいる。制服さえ着ていればあとはなにを追加してもいいのか？　涙が出るほど自由な校風だなここは。

「白峰君、今なにか私に対して無礼なことを考えているだろ？　保健室にしょっ引くゾ？」

「エスパーかお前はっ！」

てかやめてほしい。こいつは『悪魔の保健委員長』とかいう絶対に関わりたくない謎の異名を学園内に轟かせてるんだよ。俺は普段異界監査局の医務室を利用するから知らないが、なんでも郷野の治療を受けるとなにかしらのトラウマを植えつけられるらしい。一応、郷野は地球人で一般人なんだけどな。たぶん。

「私にはクラス代表の実行委員として学園祭を盛り上げる義務があるんだ。それは桜居君も同じ。普通のことではこの戦争、勝ち残れないゾ？」

「そうだ白峰！　オレらは実行委員の矜持に懸けてつまらないことはできないっ！　全力でぶつかって叩き潰すんだ！」

「お前らはなにと戦ってるんだ？」

伊海学園の学園祭に順位を競うようなイベントなんてなかったはずだぞ？

「さあ、余計な横槍が入ったが談義の続きと行こうか、桜居君」

「望むところだ。絶対にメイド服を着せてやる」

ダメだこいつら。もうなんとかする気力も失せるぜ。俺は諦念の吐息を漏らして窓から外を眺め、我関せずを決め込むことにした。

「メイド喫茶やコスプレ喫茶といったものは誰もが思いつき誰かが実行している。ダブりは避けるべきだと私は思うよ」

「ふん。例えダブろうが、リーゼちゃんとセレスさんがいる我がクラスは質の上で並ぶ者なんていない！　執事喫茶なんてピンポイント過ぎるものでは満足に集客できないことを知れ！」

桜居も郷野も元気だなぁ。リーダーに合わせて相槌を打つように「そうだそうだ」「そうよそうよ」と喚くクラス全体がやる気に満

ち満ちていやがる。他のほとんどのクラスは俺が退院する前にテキトーに催し物を決め終わっているというのに。俺らもテキトーでいいじゃねえか。

「メイド喫茶!!」

「執事喫茶!!」

どうでもいいけど、なぜ喫茶に拘るし。他の選択肢はなかったのか？　まあ、俺はもう発言しないけどね。このまま決まらずに学園祭を終えても一向に構わん。

そうなると青春を謳歌してないみたいで少々残念ではあるが、生憎と俺は学園祭の間は暇じゃないんだ。あの恒例行事が今年もあるのだとしたら、俺はそっちに参加させられると思うからな。

「メイド喫茶だと言っている！」「執事喫茶に決まっているわ！」「メイドだ！」「執事よ！」「メイド！」「執事！」「メイド！」「執事！」「メイド！」「執事！」「メイド！」「執事！」「メイド！」「執事！」

もはや論述の欠片も見当たらないただの押しつけ合いになってないかコレ。学園祭の時期じゃなければ変態クラスだ。そしてリーゼ、面白がって一緒に騒いでるんじゃない。また『ヒツジ』になってるぞ。

「では、勝負で決めてはいかがでしょう？」

ん？　どっかで聞いた、しかしクラスメイトではないおっとり声がした気がする。

俺が窓の外から教室内に視線を戻すと……一瞬でその異物を発見できた。

「こういうのはどうですかぁ？　一日目のみ男子は女装喫茶、女子は男装喫茶を開いてその収入で勝敗を競うのです。勝った方が二日目以降の主導権を握れますよぅ」

教壇に立つ、平安時代からタイムスリップしてきたような鮮やかな十二単を纏った少女がにこやかに生徒たちを見回していた。薄い緑色のウェーブヘアーに青い瞳の異世界人――日本異界監査局局長

の法界院誘波（偽名）だ。

「え？　どうして理事長がこのようなところに？」

郷野が目を丸くして呟く。ああ、そうだ。あの着物女はあろうことか学園の理事長でもあらせられる。トップがこんなのだから郷野が白衣着ても文句言われないんだろうね。

どうしてやつがいるのか？　そんなこと――俺が知るか。どうせ面白全部で首突っ込んできたんだろ。無視だ無視。

「衣装や大道具などはこちらで用意しますので、どちらが勝っても『準備できてない』という状況にはしませんよ。どうですか？　面白い提案だと思いますが、乗ってみませんか？」

教室内がざわめく。唐突な理事長の登場にも困惑している上に、そんな提案を持ちかけられたのだから当然だろう。ていうか、ずっと思ってたけどウチの担任どこ行った？

「勝負なら受けて立つわ」

騒然とする教室内に、リーゼの声が凛と響く。このお嬢様は楽しげなことには一切迷いがないな。あとセレス、困ったように俺を見るな。別の問題が発生するかもしれんだろ。

すると、誘波は表情を一層にこやかにさせた。

「リーゼちゃんならそう言うと思ってましたぁ♪　他の方はどうです？」

男子と女子はそれぞれの陣営で仲間たちと顔を見合わせ、続いて中央の机に偉そうに立っているリーゼを見、それから対面する敵勢力とアイコンタクトを取って力強く頷く。

「「乗った！」」

桜居と郷野が代表して同時にそう叫んだ。

とても正気の沙汰とは思えん。

女子が男装喫茶をするのはいいとしても、俺らが女装喫茶やるとか誰特だ？　自慢じゃないが、ウチのクラスには女装の似合う中性的な顔をした男子なんていないんだぞ。対する向こうにはセレスや郷野といった男装の似合いそうなやつらがいる。勝敗は火を見るよりも明らかだ。

だのに桜居のあの自信はなんだ？　あいつはあの後「案ずるな、全てオレに任せておけ」と頼もしいことを言い放ってどこかに走り去って行ったんだ。去り際に白い歯をキランと光らせたりなんかして、今月で一番ウザかった。

おかげで解散になって帰宅できたことには文句ないが……今年の学園祭は激しく不安だな。仮病でも使おうか。

「それでね、『ダンソウキッサ』っていう楽しそうなことやることになったの！」

「それはよかったですね、マスター」

リビングのソファーに寝転がった俺のすぐ傍では、リーゼが従者のゴスロリメイド――レランジェに学園祭のことを嬉しそうに語っていた。この無表情極まるメイドさんは魔工機械人形っていう要するにロボットなんだが、心なしか微笑ましく主と会話のキャッチボールをしているな。まるで実の親子みたいだ。

「うん！　いろんな服着れるってミツルが言ってた。楽しみ♪」

「それは素晴らしいことですね。では、レランジェもお手伝い安定です」

「あ、ダメ。これはクラスのみんなだけでやる『ルール』だから、レランジェは手伝っちゃダメよ」

「そ、そんな、マスターがレランジェを拒絶なさるとは……」

レランジェは頭上に『ガーン』という文字が浮かんできそうなほ

ど仰け反り、
「これはどういうことでしょう？　いえ、そんなの決まっています。ゴミ虫様のせいですね。射殺安定です」
ガシャリ。
レランジェが対面のソファーの裏からライフルの銃口を俺に向けた。
「ラハティＬ－３９！？　対戦車ライフルじゃねえかそんなもんこっち向けんな危ねえじゃ済まねえよっ！？　つーかどっから取り出したんだその重火器は！？」
「いえ、レランジェは魔工機械安定ですので」
「だからなに！？　それが全ての答えに繋がると思うなよ！」
「武装侍女レランジェ安定です。『戦うメイドさんは萌えの境地』だと異界技術研究開発部で拝聴しました。これよりゴミ虫様抹殺任務を遂行します」
「寧ろ俺より先に開発部の変態どもを抹消して来いよっ！？」
「レランジェなにそれカッコイイ！」
「了解です、マスター。頭ですね」
「言ってねえよっ！？」
ドォン！！　凄まじい轟音を響かせてラハティＬ－３９が火を噴いた。
が、扱い慣れていないレランジェはその反動で尻餅をついてしまった。結果、弾丸は俺の側面ギリギリを通り過ぎて後ろの壁を貫通、瓦解させた。
……血の気が引いたぞ。
家が崩れなかったのは幸いか。……いや、そもそもこの暴言暴力メイドが事あるごとに俺の命を狙わなければ被害なんて出ないはずなんだ。幸いもなにもあったもんじゃない。誰が出すんだよ、壁の修理費。
「凄い凄い！　レランジェ、それわたしにもやらせて！」
はしゃいだ声にそちらを見ると、リーゼが対戦車ライフルの威力

に感心したように瞳をキラッキラさせていた。巨大ロボ（デュラハン）やロケットパンチにも反応を示していたところを鑑みるに、リーゼは少年みたいな心を持ってるんだな。

「少々お待ち下さい、マスター。これは予想以上の衝撃です。先程の構えでは不安定でしょう。まずレランジェがコツを発見する安定です。次こそはゴミ虫様の頭を――」

ピンポーン！

「おっと誰か来たみたいだな。俺は出迎えてくるからお前らそれ仕舞っとけよ」

俺は神の助けとばかりに玄関へと駆け込んだ。なんか背後から「チッ！」と盛大な舌打ちが聞こえたけど、まあ気のせいさ。

しかし絶好のタイミングの救いだった。今日は誰かが来る予定なんてないから、訪問販売の営業マンとかかな？　なんにしても命の恩人だ。感極まってなにか買っちまうかもしれん。

ピンポンピンポンピンポン！

ん？　鳴らし方が雑になったぞ？　常識ある社会人はそんなことはしないと思うが……。

「はいはい、どちら様です……か？」

玄関の扉を開けると――伊海学園高等部の制服を着た二人組がそこにいた。一人はかったるそうな顔をして頭を掻く少年、もう一人はリーゼと張り合えるくらいちんちくりんだが、とある一点の膨らみが圧倒的に勝っている少女だ。二人とも夏場だというのに真っ黒なロングコートをマントみたいに羽織っている。

「よっ、白峰」

と少年が気さくに挨拶する横で、

「遅いのよアンタ！　チャイム鳴らしたら五秒で出なさいよ！」

チビ女が無茶苦茶言って大きな黒い瞳で俺を上目遣いに睨んできた。さてはチャイム鳴らしてたのはこいつだな。

俺はどっと押し寄せてきたなんとも言えない倦怠感に嘆息しつつ、

「呼んだ覚えはないぞ、迫間、四条」

こいつらは迫間漣（はくまれん）と四条瑠美奈（しじょうるみな）。影魔導師とかいう地球人の異能力者であり、俺と同じ異界監査官でもある二人だ。激しく面倒事の予感がする。

「なによその『また影魔導師の事件に巻き込むつもりか』っていう疑いの目は？」

「違うのか？」

「違うわよ」

四条がちゅくんと唇を尖らせた。

「ああ、アレだ。今回は影魔導師連盟が今後どうするかとか、その他諸々をお前に伝えに来たって感じだ。前の件があって、いろいろ面倒臭いことになってたからな」

迫間が頭をガリガリ掻きながら面倒そうに説明してくれた。前の件ってのは、あの温泉リゾートでのことだ。迫間と四条の先輩にあたる望月絵理香（もちづきえりか）が、過去の恋人を取り戻すためにいろいろ画策していた事件。だがその裏には『王国（レグヌム）』とかいう組織が関わっていて、望月の行動で彼の地に存在していた『次元の柱』が圧し折られちまったんだ。『次元の柱』ってのは、世界を構築する大黒柱みたいなもんらしい。

まあ、それは横に置いとくとして――

「なんでまた俺に？」

そういう報告は誘波にだけしてれば後は勝手に伝わるはずだ。日本本局所属の監査官がそれを知らないわけがない。

「お前言っただろ？　礼は自分たちで言いに来いって。そのついでだと思ってくれ」

確かに俺は入院したばかりの頃に誘波にそんな伝言を頼んだ。でもあれは冗談のつもりだったんだがな。まあいいか。

「そういうことだから、お邪魔するわよ」
「お、おい」
四条が俺の許可もなくズカズカと中へ入り込んできた。かと思えばリビングの扉の前で立ち止まり、長い黒髪を揺らして俺に振り返る。
「あたしはミルクティーね。冷たいの。大至急」
「ここは喫茶店じゃねえよ」
相変わらずムカつくチビだった。
「おい迫間、あいつはお前の連れなんだからなんとか言ってくれ」
「ん？　ああ、そうだな。じゃあ俺はアイスコーヒーをブラックで頼む」
「お前もかっ！　ホントに礼を言いに来たんだよな！」
ミルクティーもコーヒーも偶然ストックがあったので、俺は渋々とそれらを作って盆に乗せてリビングに向かう。なにこれ？　学園祭の予行演習かなんか？
「まだまだね。そんな実力であたしに勝てると思ってんの？」
「むむむぅ～。おかしいわ。？魔帝？で最強のわたしがこんなやつに……」
「マスター、頑張ってください。そこです。そこでＢ技を発動安定です」
「……」
リビングでは……リーゼと四条が対戦格闘ゲームに興じていた。レランジェは最近ＴＶゲームのやり方を覚えたリーゼの後ろでエールを送っており、迫間は俺愛用のソファーに寝そべって漫画雑誌を読み耽っている。
……ナンデオ前ラ全力デ寛イデンノ？
どうしよう？　今から飲み物をホットに変えてこようかな？　百

度くらいの。
「お？　悪いな、白峰。助かったぜ。面倒臭いことに喉がカラカラだったんだ」
「そのまま脱水死すればいいのに」
「は？」
「いやなんでもない。ただの心の声だ」
「本音じゃないか」
億劫そうにツッコミながらも、迫間はしっかりアイスコーヒーを引っ手繰って一気に飲み干した。
ふと視線を盆に落とすと、いつの間にかミルクティーが消えていた。俺はリーゼとの対戦で盛り上がっている四条を見る。彼女の脇に空になったティーカップがあった。行動が瞬速過ぎるだろ！　どんだけ喉乾いてたんだ！
絶対にその黒コートが暑さの原因だよ。よく熱射病にならないな。
「白峰、おかわりを持って来てちょうだい」
「その前に話をしろ！」
こいつらの態度からわかる。俺に礼を言う気なんてさらさらねえな。まあ、誘波を仲介して一度は伝えられたから改めてしなくてもいいけどね。
俺が怒鳴ったからか、四条が不服そうに体ごとこちらに向き直る。てか、仮にも女なんだから床に胡坐掻くなのはやめてもらいたい。微妙に目のやり場に困る。
仕方ないわね、と四条が腹の立つ前置きをし、説明を始める。
「影魔導師連盟は、『王国』に対して異界監査局を全面的にバックアップする。そう決まったのよ。向こうには望月先輩――？影霊女帝？がいるからね。連盟も無視できないってわけ」
「具体的にどうするかはまだ決まってないようだが、背中を預けて共闘するってことはなさそうだぜ。そんなことができるほど俺ら影魔導師の時間的縛りは緩くないんだ。面倒臭えだろ」
影魔導師はその能力の特性上、夜もしくは暗闇の中でしか満足に

戦えない。共闘するにしても、条件が限られてるんだ。
それでも協力してくれるのならありがたい。異界監査局と影魔導師連盟は、元々は協力関係と言うよりは不可侵関係だったようだし。どちらにも繋がりのある迫間や四条や誘波が異例なんだろうね。
「なるほどな。なんだろうと頼もしいぜ。それから？」
「ん？　これだけよ」
「なんですと？」
俺が続きを促すと、四条の口から淡泊な答えが返ってきた。
「ぶっちゃけるとたまたま近くを通ったから涼みに来たのよね。漣、冷房の温度二度下げて」
「へいへい」
「いや帰れよお前らふざけんな！」
なんで居座る気満々なんだ。そんなことするやつはどっかの着物女だけで間に合ってんだよ。
「リベンジよ真っ黒女！　今度こそコテンパンのぐちょぐちょにしてやるわ！」
「望むところよ！　吠え面掻きなさい」
「マスター、ファイト安定です」
「ほどほどにしとけよ、瑠美奈。面倒臭えから」
「あたしの辞書に手加減って文字はないわ」
「もう勝手にしてください……」
うんざりしてげんなりした俺は、この空間にいても疲れるだけなので近くのコンビニまで避難することにした。

その後――
ゲームに勝てず癇癪を起したリーゼがリビングを全焼させたと知り、俺は諸手を地につけて出かけたことを後悔するのだった。

一章　来る学園祭に向けて（2）（後書き）

更新スピード上がってないかって？
キノセイです！
昔は一日数話ってやってましたからね（ストックあったからですが＾＾；）
まあ、こんなペースで続けられたらいいなとは思ってます。その分推敲が雑になりそうですが……。
でも、読者的にはどうなんでしょうかね？
あまり速いと読むのが大変だって仰る方がいれば（自分がそうですし）、メッセでも感想でもいいので言ってくださいねw

一章　来る学園祭に向けて（3）

最近、俺は思うんだ。

監査局印の胃腸薬の減りが尋常じゃない、と。

ＲＰＧとかに出てくる状態異常回復アイテムばりに効果抜群で副作用もないから便利なんだけど、これをしょっちゅう使わにゃならん状況がまずおかしいだろと言いたい。

また監査局の医療機関に胃腸薬を処方してもらうように頼まないと、そう内心で呟きながら俺は繁華街の大通りを一人で歩いていた。

うだるような炎天下の中、買い物リストが書かれたメモ用紙を片手にな。

これは先日こんがり焼けてしまった俺ん家のリビングを修繕するための買い物だ。

……というのは冗談で、本当は学園祭の女装喫茶で使う小物類の調達だ。俺にはリビングを修繕する金も技術もないからな。まったくもって泣きたくなる。そして太陽、暑いからお前は早く沈んでくれ。

「くっそ、あちぃ～。あいつら後で覚えてろよ」

衣装など特殊な物品は発案者の誘波が用意してくれるそうだから（激しく不安だが）、俺は皿とかコップとかテーブルクロスとかを購入するために出陣させられたんだ。ジャンケンに負けたせいでね。

「あーもう、暑い。これが夕方とかならまだマシだったんだろうけどよ」

無意識に暑さを主張してしまうが、愚痴ったって仕方ないことはわかっている。学園祭の準備期間に入ったから授業は午前中で終わりなんだ。そういう期間を設けるくらいだから学園側も気合い入ってるなぁ、としみじみ思う。

と――

「ん？　あれは……セレスか？」

前方の交差点で戸惑ったようにキョロキョロしている銀髪の女子生徒を発見。俺は速足で彼女に歩み寄った。
「セレス、こんなところでなにしてんだ？」
背後から声をかけると、セレスはビクッと反応して背負っている布を巻いた長い棒――聖剣ラハイアンを振り向き様に突きつけてきた。眉を凛々しく吊り上げ、エメラルドグリーンの瞳に警戒の色を宿している。
「おわっ！？　ま、待てセレス！　俺だ！　俺！」
「ん？　なんだ、零児か」
両手を上げて敵意がないことを示すと、セレスはほっとしたように聖剣ラハイアンを背負い直した。
「あまり私の後ろに立たない方がいい」
「お前はどこの謎のスナイパーだ」
名前の後に『1』と『3』がつきそうだな。
「いや、すまない。こうやって一人で街を歩いていると、よく不埒な族に絡まれるんだ」
「あー」
わかる。セレスは目が覚めるような美人だからな。ナンパ男とのエンカウント率は高そうだ。
「それはそうと、察するにセレスも学園祭の買い出しか？」
「よくわかったな」
「その左手に持ってんのは買い出しのメモだろ？　俺と被ってんだよ」
俺も自分の買い出しリストをヒラヒラさせてセレスに見せる。男子も女子も一日目は二年Ｄ組の教室ではなく、別の空き教室を借りることになっている。準備や会議も男女別々にそれぞれの使用する教室で行ってるから、お互いの動きはわからないんだ。
セレスは納得したように腕を組んだ。
「そうか。では零児もジャンケンとやらに負けたのだな」
「なんだよ、そっちもジャンケンで決めたのかよ」

しかも買い出し役を留学生ってことになっているセレスに任せるとか、女子グループは薄情なやつらばっかりだな。せめて誰かが付き添うくらいの優しさがあってもいいと思うぞ。

そう考えたところで、俺は天を仰いだ。眩い太陽が人類を滅ぼさんとばかりに灼熱の日光を照射している。買い出しなんて罰ゲームに進んで立候補するやつはいないだろうね。俺らもそうだったし。

「まあアレだ。こんなところでずっと喋ってたら暑さでぶっ倒れちまう。どうせ目的地は同じだろ。一緒に行くか？」

勝負をする上での取り決めで、フェアになるように買い物をする場所はこの繁華街にある百円ショップで固定されている。今時の百均は大概の物が揃ってるから便利だよな。

「そうだ、な。別れる理由もないし、一緒がいいな」セレスはなぜかもじもじしながら、「というか、そうしてもらえると助かる」

「迷ってたのか？」

「うっ……」

図星らしい。セレスは片頬を引き攣らせて俯いてしまった。

「いや、迷って当然だろ。俺がセレスの世界に行ったとしても短期間で地理を覚える自信はない」

「だが、私は美鶴殿に地図を描いてもらった上で迷ってしまったんだ」

「ちょっとその地図見せてみろ」

俺はセレスからメモ用紙を受け取り、ずらっと調達品のリストが書き並べられている紙面の裏を見る。

大きな十字路が描かれていて、その南西に青ペンで『学園』という文字、北東に赤ペンで『たぶんこのへん』と丸囲みされて直線が引かれている。なんだこの方程式のグラフは？　よくここまで辿り着けたな、セレス。

「うん、後で郷野に文句言ってもいいぞ」

笑顔でそう言って俺はメモをセレスに返した。セレスは「いいのだろうか？」と言いたげな表情をしていたが、俺が横断歩道を渡り

始めたので慌てた様子で後をついてくる。
　にしても暑い。何度も言うが暑い。暑いって言うから余計暑いんだってよく聞くが、嫌な気持ちを吐き出すことで精神的に少し楽になったりするだろ？
「零児、一つ訊いてもいいだろうか？」
　ちょっとコンビニで涼もうかと思った矢先、俺の隣に並んで歩くセレスが唐突に訊ねてきた。セレスは平気な顔してるが、額が少し湿っているな。やっぱ暑いんだ。
「なんだ？」
「ジャンケンについてなんだが」
「ジャンケン？」
　どうしたセレス？　なんでいきなりそんなどうでもよさげな話を？　暑さで思考が狂ったのか？
　思案顔のセレスは中指と人差し指を立てて、
「このチョキという手は刃物を象徴するのだと聞いた。なのになぜグー……石ごときに敗れるのか納得がいかない。私ならその辺の石ころなど包丁で微塵切りできるぞ？」
「お前を基準にするなら相手も石じゃなくて鉄にしないとな。それにチョキは刃物だけど具体的にはハサミだ」
「なんだと？　私は剣だと言われたぞ。だから最も強い手だと思って出したら、負けた」
「……実は苛められてないか、お前？」
「そんなわけないだろう。おかしなことを言うな、零児は」
　ははは、と爽やかに笑われた。まあ見たところうちのクラスに苛めの様子はないし、セレスもリーゼもクラスメイトたちと仲良くやっている。苛めじゃないけど、たぶんセレスはハメられたんだと思う。
「それとパーは紙らしいじゃないか。薄っぺらく脆い紙が石にどうやって勝ると言うんだ？」
「あー、それはアレだ。紙は石を包み込むとかで――」

そんななんの得にもなりそうにない談笑を続けていると、俺は暑さのことなんて忘れてしまっていた。気を紛らわすためにセレスは雑談を持ちかけてきたのかもしれない。こうやって話したり笑い合ったりしてると、俺らもすっかり『友達』って感じだな。

間もなくして俺たちは繁華街の一画に構える大型百円ショップに到着した。

文房具や工具、食品に衣類、果てはなにを目的に作られたのか謎過ぎる物体まで豊かな品揃えを誇っている店舗だ。用途別にコーナーが設けられていて、この五階建てのビルにある商品全てが百円均一……なはずもなく、中には百円以上するブービートラップも混ざってるから気をつけろ。

それにしても店内は冷房が効いて涼しいな。買い物が済めばまた学園の坂道を上るんだと考えたら……もう帰りたくないぜ。

で、俺とセレスは別れてそれぞれの買い物をすることになったんだが――

「店員さん、二つほど質問よろしいでしょうか？」

「なんですか？　冥土の土産に聞いて差し上げます」

「うん、この場合冥土に行くのはそのトンカチで頭かち割られそうな俺だと思うんだ」

俺の眼前では、赤い地味なエプロンをかけた無愛想な店員――胸元に『研修生』というプレートをつけたレランジェが商品と思われる工具を高々と振り上げていた。

「質問その一、なんでお前がいるんだよ？」

「あるばいと安定です」

ここはまあ、予想通り。このメイドさんは俺やリーゼが学校に行っている間にちゃんと働いてるんだ。理由は俺に養われるのが嫌だから。

「質問その二、なんでお客様を撲殺しようとしてらっしゃるので？」

「害虫を発見しましたので、他のお客様に気づかれないうちに駆除

安定かと思いました」
「相手が人間じゃなければ正解だがこの場合はアウトだろっ！」
「え？　人、間……？」
「首を傾げるなっ！？」
やっぱり機械人形なだけに俺には理解できない思考回路をしてやがる。
「今度開発部のやつらに土下座してでも俺を襲わなくなるプログラムを組んでもらわねえと」
「甘いですね。そのようなものがこのレランジェに効くとでも」
「くっそ人工知能の勝利か！」
そのうち人類を滅ぼして地球を乗っ取ろうとか考え出さないか心配になった。
「他のお客様にご迷惑ですので早く死んでくれませんか？」
「俺をここで殺した方が絶対迷惑かかるからな！　とにかくどいてくれよ。俺はここに書かれてある物を買って帰らなきゃならん使命があるんだ」
俺はビッ！　とメモ用紙を突きつけるが、レランジェは微動だにしない。いやホント、表情も指先も振り被った腕すら動かそうとしない。だからといって背を向けるとその瞬間に殺られる。
どうする、俺？
「零児、ここにいたのか。探したぞ。私の方は済んだから……レランジェ殿？」
俺の背後からレジ袋を提げてやってきたセレスがレランジェを見て僅かに瞠目する。どうやらセレスも一人で買い物できるくらいにはこの世界に慣れたみたいだな。いいことだ。
第三者が登場したからか、レランジェは振り上げていた腕を下した。
「これはセレスティナ様。いつもマスターがお世話になっております」
人が、いや人形が変わったかのように頭を低くするレランジェ。

俺との態度の差は歴然だった。？魔帝？の部下が聖騎士に頭下げるとかどういう了見なんだろうね。

釣られて丁寧に挨拶を返すセレスを見ながら、俺はちょっと感心していた。

「セレス、よくこんな短時間で品を集められたな。俺はまだこれからだぞ」

主に素行の悪い店員のせいだが……。

「ああ、私には読めない字もあったから、メモを店員に渡して集めてもらったのだ」

「なるほど、その発想はなかった。セレスは頭いいな」

軽く誉めると、セレスは面食らったようにぷいっとそっぽを向いた。俺、変なこと言ったか？

「じゃあ、俺も店員に頼むとするか」

と踵を返した俺から、レランジェが買い物リストのメモ用紙を引っ手繰った。

「――ってなにすんだよ！」

「店員ならここにいます、ゴミ虫様。このレランジェに任せればセレスティナ様の所望品を集めた者よりも迅速安定です。ゴミ虫様はあちらの休憩所で待っていてください」

ビュン！　と俺になにか言う暇を与えずレランジェは店内を駆けていった。

「なんだあれ？　店員同士で競争でもしてんのか？」

よくわからんレランジェの行動を考察しても得はないだろう。俺とセレスは顔を見合わせる。

「言われた通り休憩所に行っとくか。ジュースでも奢ってやるよ」

「本当か！　それはありがたい。丁度なにか飲みたいと思っていたところなんだ」

ぱあぁっとセレスがひまわりのように顔を輝かせた。俺もだが、あの炎天下を歩いて喉が乾かないわけがないからな。水分補給は重要だ。

俺はグレープ味の炭酸飲料を、セレスは炭酸は飲めないらしいので無難にスポーツドリンクを選んで二人ベンチに腰を下ろす。
「未だに思うのだが」
スポーツドリンクに三回ほど口をつけたところで、セレスがそう話しかけてきた。彼女の表情はどこか哀愁の色を含んでいる気がする。
「この世界は素晴らしいな。私のいた世界にはない技術や環境は非常に便利だと感じている。こちらに来て一ヶ月と少しだが、まだまだ驚くことばかりだ」
「そりゃな。ここで生まれ育った俺だって技術の進歩にビックリするんだ。まあ、ここより発展した世界から来たやつらにとっては大したことないかもしれんが」
「だとしてもこの世界は飢えもなく平和で、皆が笑っているじゃないか。いい世界だと私は思うぞ。いい世界と言うならラ・フェルデも負けないがな」
セレスは瞑目した。きっと故郷のことを思い浮かべているのだろう。
飢えがなく平和、か。この国が豊かなだけで、そうでもない国もあるんだけどな。その辺はたぶん、セレスもわかっている。
「……正直な気持ちを言うと、この世界は居心地がいい」
そっと瞼を持ち上げて、セレスは呟くように言った。そしてスポーツドリンクを口に含み、静かに喉を鳴らして嚥下する。なんか微妙に艶めかしい……。
「だったら永住するか？」
炭酸飲料を一口飲んでから冗談を言ってみると、セレスはゆっくりと首を横に振った。銀色のポニーテールがふさぁと揺れる。
「いや、それはできない。私はラ・フェルデの聖剣十二将。あまり長く国を空けるわけにはいかないのだ。だから、一刻も早く帰りたいと思う気持ちは変わらない」
それがセレスの願いだ。その願いを叶えるためにセレスは異界監

査官をやっている。でも、確実に元の世界に帰れるという保証はない。前例はいくつかあるが、それらも偶然が重なってのことなんだ。

だけど……少し意外だったな。

「珍しいな、セレスが『帰りたい』とか言うなんて」

セレスは自分からそういうことはあまり口にしないと思ってたんだが。

フッ、とセレスが苦微笑して俺を見る。

「私とて人間だ。これでも一人の時は焦ったり不安になったりもするんだぞ」

「ごめん、想像できない」

「酷いな、零児は」

お互いに笑みを交わし、ジュースが温くならないうちに飲み干すことにした。

その時――

「お待たせしましたゴミ虫様」

キキイィィィ、とカートからありえないブレーキ音を轟かせてレランジェが戻ってきた。

「ご所望のアジ・ダハーカです」

「誰が暗黒神の最強の配下たる邪竜なんて頼んだんだよ!?　てかどこで捕まえてきたんだよくカゴに入ったな!?　百均に売ってんのかよそれ!?」

「人形安定ですが？」

「そうだよね！　本物だったら異獣だぞそれ！　でも問題はそこじゃねぇえっ！」

こいつに頼んだのが馬鹿だったと後悔した俺は、監査局印の胃腸薬を残りの炭酸飲料と一緒に飲んでから自分で集めることにした。

一章　来る学園祭に向けて（3）（後書き）

人気投票、零児に2票入ってました。ありがとうございます♪

さて、なんか二日に一度の更新ペースになってますが、恐らくここまででしょう。理由は土日が休みだったから。

とか言ってまた裏切るかもしれませんのでこういう話はやめておきます＾＾；

とにかく、『書けたら更新』です。

そしてイラストコーナーにステキなイラストを追加しております。まだ見ていない人は是非見に行ってくださいませ♪

一章　来る学園祭に向けて（4）

「零児、やはり私はこのようなことはよくないと思う」
生真面目なセレスが生真面目な顔をしてそう咎めてきた。俺をまっすぐに見詰める瞳は吸い込まれそうな翠色をしている。いつも思うけど……綺麗だよなぁ。
「我々はまだ学校を終えたわけではない。なのに、このような不要な店に立ち寄ることは規則に反するのではないか？」
「いや、大した理由もない奇抜な格好を黙認する緩い学園だぞ？それに俺らは嫌な役目を押しつけられたんだ。喫茶店とかで冷たい物でも飲まんことには割に合わん」
俺とセレスは百円ショップを出た後、学園との丁度中間地点にある喫茶店で道草を食っていた。店名は『オストリッチ』……なんで和訳すると『ダチョウ』なのかは謎だが、店内はレトロで物静かな雰囲気に包まれていて俺はけっこう気に入っている。滅多に来ないけどな。
「しかし……」
「真面目に考え過ぎだ、セレス。これはサボりじゃない。帰り道でぶっ倒れないための休憩なんだ。途中で熱射病とかになってみろ、学園に帰れないどころか病院様のお世話になっていろんな人に迷惑がかかる」
「そ、そういうものなのか？　私の通っていた騎士学校では『どのような辛い環境だろうと這ってでも目的地に辿り着け』と教わったが……これが世界観の違いというものなのだな」
いやそれは単に学校の教育方針が根本的に違うだけだと思うが……まあ、とりあえず納得してくれたならいいや。
セレスはまだ不満げな様子でストローを咥え、注文したまま手をつけてなかったオレンジジュースをちゅるちゅると上品に飲み始めた。これで俺もようやく手元にあったアイスカフェオレで喉を潤す

ことができる。まったく、『待て』を指示される犬の気持ちがよくわかるぜ。

俺たちはたっぷり三十分ほど休憩を取って店を後にした。セレスは最初に頼んだオレンジジュースのみで過ごしていたけれど、罪悪感が抜け切れなかったんだろうね。

と――

「へい、彼女たち。今もしかして暇？」

「俺たちと楽しいことしねえか？」

「なんならお友達も誘ってみんなで遊ぼうぜ？」

「そりゃいい。四対四って感じにしようや。ヒャッハー！」

店を出てすぐのところで、不良然としたチャラい服装の男たちが女子大生っぽい二人をナンパしている光景が目に入った。頭の悪いセリフが通りによく響いているな。今時「へい、彼女」はないと思うのは俺だけじゃないはずだ。

見たところ女子大生二人は完全に萎縮しているようだ。二人揃って「や、やめてください」「助けて」と怯え切ったか弱い悲鳴を漏らしている。そんな女子大生の様子に、不良たちは表情を愉悦に歪めたりなんかして……あいつら屑だなぁ。

正直あんまり関わりたくないが、助けられるのに見過ごすってのは後味が悪い。仕方ない、他の誰もが見て見ぬフリをするってんなら、最近スキルレベル上昇中の俺の『ＯＨＩＴＯＹＯＳＩ』を発動させるとするか。

そうなると……両手一杯の荷物が邪魔だな。

「なあ、セレス――」

「零児、すまないが少しの間これを持っていてくれ」

騎士の顔になったセレスに先にレジ袋二つを押しつけられてしまった。セレスは凛とした表情でナンパ男四人に近寄っていく。あーそうか、俺が出る幕なんてないんだ。正義感の強いセレスの方が、俺なんかよりもずっと不届き者の愚行を見過ごすなんてできないだ

ろうからな。
「やめないか貴様ら。彼女たちが困っていることもわからないのか？」
セレスははっきり強く言い放った。すると、不良たちは興が覚めたといった様子で一斉に振り向く。
「あん？　なんだぁ？　誰だよ邪魔すん――なっ！？」
一番がたいのでかいスポーツ刈りの男がセレスを見てぎょっとする。他の三人もそれぞれ驚愕した面持ちで顔を引き攣らせていた。その隙に女子大生たちが逃げていくのを確認。よし、もう安全だろう。
「て、てめーはこの前のコスプレ女！？」
茶髪をツンツンに逆立てたやつがセレスを指差してそう言った。なんだなんだ知り合いか？　それとも人違いか？
「なんの話だ？　私は貴様らなど知らんぞ」
セレスが眉根を寄せる。やっぱ人違いみたいだな。が――
「ざけんな！　あんときゃよくもやってくれたな！」
「ここであったがなんとやらってか？　あの時の借りを返してやるぜヒャッハー！」
異常な数のピアスを片耳につけた男と、語尾のテンションがやけに高い最も小柄な男がセレスに殴りかかってきた。おいおい、暴力沙汰になるの早えぞ。どんだけ沸点低いんだよあいつら。
「あっ、思い出した。私がこちらに来た時に懲らしめた愚か者どもか。どうやら少しも反省していないようだな」
ひょいひょいとセレスは二人のパンチをかわし、カウンターで足を引っ掛けて転倒させる。セレスなら俺が加勢しなくても大丈夫だと思うが……この不良どもと一悶着あったことは確かみたいだ。
「てんめぇ！　――べぶぅ！？」
顔を狙ってきたツンツン茶髪野郎の拳をセレスは首だけの動きで避け、そのまま腕を取って背負い投げの要領で地面に叩きつけた。およそ剣士らしからぬ戦い方だが、それはセレスなりにちゃんと加

滅しているってことだ。
だが――
「もらったぁ！　その大事そうに背負ってるやつをいただくぜ！」
「むっ」
スポーツ刈り野郎がセレスの背後から襲いかかり、聖剣ラハイアンを奪おうと手を伸ばす。セレスは即座に反応して振り返ろうとするが――がしっ。
「なにっ」
足と両手を他の三人に掴まれてしまった。その隙にラハイアンを剥ぎ盗られる。
「くっ、不覚……」
「こいつは前に俺たちをボコった武器なんだろ？　――ってかなり重ぇな。まあいいか。とにかく今度は俺たちがこいつでてめぇをぶちのめしてやらぁよぐぶらずべあぅ！？」
「おっと足が滑った」
得意げな顔をしてセレスから奪った聖剣の布を外そうとしたスポーツ刈り野郎を、俺は背中から思いっきり蹴飛ばしてやった。その際に手放された超長剣を俺はなんとか腕に引っ掛けてキャッチする。レジ袋がかなり邪魔だ。その辺に置いとけばよかった。
「「「兄貴っ！？」」」
セレスに引き剥がされた不良三人が電信柱に顔面をぶつけたスポーツ刈り野郎に駆け寄った。兄貴ってことは、あいつが一応リーダーなんだな。
「ほれ、セレス。もう盗られんなよ」
「すまない、零児。私が油断していた」
セレスは俺から聖剣ラハイアンを受け取ると、手慣れた仕草で背中に担ぎ直した。
「自分の命よりも大切な剣を奪われるなどと、騎士としてあるまじき失態だ」
「いや、別にそんな自虐的にならんでもいいだろ。お前なら俺が手

を、いや足を出さなくてもすぐに取り返せただろうし」
　悔しそうに唇を噛んでいたセレスは、「確かにそうだが……」ともごもご口を動かし、
「やはり、礼は言わせてもらう。ありがとう」
　若干頬を朱に染めて、優しげに微笑んだ。
　うっ……その笑顔は反則だろ！　破壊力抜群だ。こっちも照れ臭くなって思わず目をそむけちまったじゃないか。
　と、そむけた視線の先には憐れな不良たちの姿が……。
「オラこのゴミ虫野郎見せつけてんじゃねえよぶっ殺すぞあああん！」
「まさかそこのゴミ虫みてえな野郎と付き合ってんのか？　腕っ節はいいのに見る目ねえな姉ちゃん！」
「そんなゴミ虫っぽい顔したやつなんて捨てちまえよ！」
「そんで俺らと仲良くするってこと？　ヒャッフー！　そりゃいい！　ゴミ虫野郎は燃えるゴミの日に出してやんよ」
「あー、セレス、ちょっと荷物持っててくれ」
　俺はセレスにレジ袋を渡してから、ポキポキと指の骨を鳴らしつつ満面の笑顔で不良たちの傍まで歩み寄った。
「いいか、教えておく。耳の穴を五センチほど広げてよーく聞け糞野郎ども。俺を『ゴミ虫』と呼んでいいやつはこの世に一人一体一匹たりともいねえんだ」
「「「「ひっ」」」」
　俺からなにか得体のしれない危険オーラでも感じ取ったのか、不良たちは滝のような冷や汗をかいてビクビクと痙攣し始めた。
　お構いなしに、俺は続ける。たぶん今の俺は笑顔だけど目はハンターのそれだろうね。
「まあ、つまり、なにが言いたいかっていうとアレだ……キサマラヲコロス」
――しばらくお待ちください――

「あー、やべえ。めっちゃスッキリした」
俺は顔中ボコボコに腫らして積み上げられている不良たちを背に、パンパンと手をはたく。なんというか、日頃の鬱憤が晴れたように気持ちいいな。
「れ、零児、少々やり過ぎだと思うんだが……？」
「いやぁ、体がもう勝手に動いちゃってハッハッハ」
「零児がいつになくご機嫌だ！？」
セレスが俺の顔を見て瞠目した。失敬な。俺だって機嫌のいい時くらいある。この前だって……あれ？　思い出せない。
「て、てめえら、俺たちに手ぇ出してタダで済むと思うなよゲフッ」
「俺たちゃこの辺で恐れられてる『ヴァイパー』って組織の一員なんだぜガフッ」
「組織っつってもただの不良集団だけどなブフッ」
「でもその辺のヤクザなんかじゃ太刀打ちできねえんだヒャハッ」
見るも無残な姿となった不良たちがなんか言ってるな。こういうのを負け犬の遠吠えって言うんだろう。あと最後のやつ、咳なのか笑い声なのかはっきりしろ。
「知らねえよ。そんな不良集団とかどうでもいいし」
ぶっちゃけ異界監査官の職務対象外だしな。単なる街の不良なんて。
兄貴と呼ばれているスポーツ刈り野郎が鼻血を拭いて立ち上がる。
「後悔しろよ。今日の俺たちには大兄貴がついてんだ！　大兄貴は強ぇぞ。てめえらなんて一瞬で大気圏の外まで吹っ飛ばしちまうくれえ強ぇんだ」
大兄貴？　まだこいつらみたいなアホがいるのかよ。しかしよくそんな三流悪役みたいなセリフを往来の真ん中で堂々と叫べるよな。誤って尊敬しそうだ。
俺は嘆息してセレスを見る。

「なんか知らんが無視して帰ろうぜ、セレス。誰かに警察呼ばれてたら面倒だ」
「そうだな。被害者の二人は逃げたようだし、私たちがこれ以上彼らと騒動を起こす理由はない」
「んじゃ、決定」
「「「待てやコラァ！」」」
踵を返した俺たちを、四人が同時に呼び止めた。
「んだよ？　もうてめえらと関わる気はねえっての」
しまった。なに返事してんだ俺。
「うっせぇ！　こっちにはあんだよ！」スポーツ刈り野郎が喚き、
「――というわけでして大兄貴、ちょっとボコってほしいやつらがいるんです。はい。よろしくお願いします」
ピッ、とそいつは耳にあてていた携帯電話の通話を切ってズボンのポケットにしまうと、再度俺たちを睥睨してきた。
「もうちょい待ってろや！」
「今呼んだのかよ！　最初っから近くにいたんじゃねえのかよ！」
ダメだこいつら。本当にどうしようもねえ。そう思って俺が今度こそ立ち去ろうとした次の瞬間――

「俺的に、割と近くにいたと思うんだが」

トン、と。
俺とセレスの背後で軽やかな着地音が聞こえた。
……この声、まさか。
「俺様の子分に手ェ出したやつがいるっつうから来てみれば、俺的になかなか面白れェことになってんじゃねェかよ――なァ、白峰零児」
振り向くと、狂戦的な笑みを浮かべた作業着姿の青年がそこに立っていた。

一章　来る学園祭に向けて（４）（後書き）

不良たちのセリフがどうしても拙くなってしまう。
まあ、彼らアホですから（笑）
よく大気圏って言葉知ってたなってくらいアホですから（笑）

というわけで、仕事というか研修始まって一週間が経つ夙多史です。
やっぱり執筆時間が極端に減りますね。仕方ないし覚悟はしてましたけど。それでも週二ペースで更新できそうだってことはわかりました。

新キャラがバンバン登場しちゃって混乱しないかが心配です＾＾；

一章　来る学園祭に向けて（5）

「「「「大兄貴ぃ～！！」」」」
不良たちが情けない声を上げて俺たちの横を通り過ぎ、現れた作業着の青年の後ろに隠れるように集った。
「おゥ、お前ら的によく無事だったな。こいつら相手によ」
作業着のポケットに両手を突っ込んだ青年が俺とセレスに笑みを向ける。その笑みには狂気めいたものを感じるが、どこか友人に向けるフレンドリーさも含んでいた。
歳は二十歳くらい。マロンクリームみたいな色をした髪は、前髪で右目を隠すように伸ばされている。それ鬱陶しくないのか？
「大兄貴、空から降ってきたように見えたんスけど」
「どこにいたんですかい？」
「あァ、俺的にそこのスポジムの四階だ」
「そっから飛び降りたんスかっ！？」
「大兄貴マジぱねぇッス！」
なんか物凄く慕われてるな。それはともかく、俺と作業着男が知り合いだということは間違いないんだ。
「……なんでお前が出てくるんだよ、グレアム」
こいつはグレアム・ザトペック。スタンディアとかいう世界からやってきた異世界人で……俺やセレスと同じ異界監査官だ。
問うと、作業着男――グレアムは大げさに首を振った。
「悲しいねェ。つれないこと言うんじゃねェよ、零児。俺様とお前の仲じゃねェか」
「気持ち悪い発言は控えろ」
「ん？　あァ、確かにそうだ。俺様とお前の間に音声的なもんは必要ねェ。言葉なら拳から聞いてやるぜ」
「俺に肉体言語での会話を求めるな！」
「さっきから先輩に向ける言葉にしちゃあなってねェな。だがまァ、

俺的にお前なら許す」
　困ったことに、俺はこいつに気に入られているみたいなんだ。理由は、戦闘では基本的に武器を使った接近戦しかできない俺と自分が似ているから。なんで俺って変なやつばっかりに好かれるんだろうね。勘弁してくれ。
　セレスが戸惑った様子で俺を見る。
「零児、この者は確か、監査官ではなかったか？」
「ああ、よく覚えてたな、セレス。こいつはあんまり監査局に顔出さないんだけど、何度か会ったことあるっけ？」
「いや、一度だけだ。私がこちらの世界に来たばかりの頃、？魔帝？との戦闘に割り込んできた者の中にいたと記憶している」
　やっぱりあの時だけか。グレアムは一応校務員として仕事してるはずなんだが、俺も学園では数えるほどしか目撃したことがない。
「それよりも、なぜ監査官のあなたが不良たちのリーダーをしているのか聞かせてもらいたい」
　セレスは探るような眼光でグレアムを射る。いつでも剣を抜ける構えまでしてるぞ。セレスは監査官を正義の味方かなにかだと思い込んでるようだから、小悪党に『大兄貴』と慕われているグレアムのことを信用できないってことか。返答によっては、たぶんセレスは迷いなくグレアムを斬る。
　そんなセレスにグレアムは全く臆することもなく、ククッ、と忍び笑いを漏らしてから言の葉を紡ぐ。
「いいねェ、その目。その殺気。ここは俺的にお前を怒らせて戦り合いてェところだが、残念なことに俺的にそういう頭で考えることは苦手なんだ。――ん？　いや待て、それだと俺的にバカだということになるのか？　バカと天才は紙一重なんてこの世界じゃあ言われてるみてェだがよ、俺的に自分が天才だとは思っちゃいねェわけよ。つまり天才じゃねェってこたァバカからも遠いってことになるんじゃねェかと思うんだ。となると俺的には――」
「長い長い長い！　お前はどこに話を持っていこうとしてんだ！」

俺が止めなければ延々と意味不明な独り言が続くところだった。
迫間がいたら「面倒臭え」って絶対言ってるだろうな。
「おいそこのお前」グレアムは振り返ってスポーツ刈り野郎を指差し、「……えーとお前的に誰だっけ？　まあいいや。俺様はバカなのか？　天才なのか？　答えろ」
「あ、はい。大兄貴はもちろん天才です」
「つーことは俺的にバカってことにもなんのか？　ぶっ倒すぞてめェ！」
「えーっ！？」
絶望に顔を青くするスポーツ刈り野郎の胸座を掴み、グレアムはその百九十センチはあろうかという巨体を片手で軽々と漫画みたいに投げ飛ばした。り、理不尽だ……。
「悪ィな、嬢ちゃん。なんつうか、俺様もどうしてこいつらが俺様の子分になってんのかよくわかんねェんだ」
何事もなかったかのようにこちらに向き直るグレアム。なんか背後であんたの子分たちが「大兄貴ぃ～」と嘆き声を上げてるけど、いいのか放っといて？
「どういう意味だ？」
セレスがさらに険のある視線を向ける。
「よくわかんねェもんはよくわかんねェ。気づいたらこうなってたんだよ。俺的にはそれしか言えねェなァ。んなことより一戦交えようぜ？　この前は瑠美奈のチビ助がさっさと捕縛しちまって戦えなかったからよ」
「なるほど、痛い目を見ないと口は割らないか。零児、すまないが私の独断でこの者に制裁を加えさせてもらう」
さらっ。セレスが背中の超長剣――聖剣ラハイアンの布を解き、鞘から抜いて中段に構える。それを認めてグレアムは愉快そうに表情を歪めた。
「待てよお前ら！　監査官がこんなところで騒動なんて起こすなよ！　俺らはそれを止める側だぞ！」

あと後ろの不良ども、お前らも「大兄貴やっちまってくだせぇ！」とかって煽ってんじゃねえよ！　もう一回タコ殴りにすっぞコラ！」
「だったら零児、お前的にも参戦しろ。俺様たちを止めるためにな」
「だぁーもうこの戦闘狂がっ！」
戦闘を数ある娯楽の一つとカウントするリーゼと違い、このグレアムは生粋の戦闘マニアなんだ。戦闘鬼と言ってもいい。『どんな問題も殴って解決！』ってキャッチコピーがつきそうな異界監査官だから、誘波も滅多にやつを呼ぶことはしないんだとか。
ていうか、俺らが騒いでるせいで周りから人が消えている。セレスはそれを見越して剣を抜いたのか。好都合っちゃ好都合だが、遠くからパトカーのサイレンが聞こえ始めるのも時間の問題だな。
「行くぞ！」
「やめとけセレス！　そいつはマズい！」
俺の静止の声など聞いちゃいない。セレスは超長剣に光を纏わせ、ポケットに手を入れたまま余裕に構えるグレアムへと突進する。
――が。
勝負は、一瞬で決まった。
セレスの左から右へ流す光の剣閃を、グレアムは作業着の背中に仕込んでいた二つ一組の銃みたいな握り部分がついた打撃武器――トンファーの片方で易々と弾いた。そのままほぼゼロ距離まで肉薄し、抵抗する間も与えずセレスを押し倒す。左手で握られたトンファーがセレスの首を強く圧迫し、「あうっ」と苦しそうな呻き声が漏れた。
「ハッハァーッ！　嬢ちゃん的にこんなもんか？　そうじゃねェよなァ？　そうだとしたら悲しくて虚しいだけだもんなァ。聖剣なんちゃらって言うくれェだ。もっと俺様を楽しませろよ！」
「う……く、こいつ、なんて力……」
「俺的には別にいいんだぜ？　特殊能力とかバンバン使ってもよ。

嬢ちゃん的にはなにが使えんだ？　魔法か？　超能力か？　その光ってる剣はどっちでもないとかか？　時に魔法と超能力の違いってなんだ？　俺的にはさっぱり区別がつかんわけなんだが、やっぱ魔力的ななんかが関係してんだと俺様は思ってんだよな。まあ、俺的にはどうでもいい疑問ではあるんだが――ん？」

狂喜的に独り語りを続けるグレアムの首筋に――チャキリ。俺が〈魔武具生成〉という近接武具を生み出す能力で作った日本刀の刃を添えた。

「そこまでにしろ、グレアム。もう決着はついただろ。セレスの負けだ」

言うと、グレアムはフッと口元を微笑で緩めてセレスからトンファーを離し、作業着の背中に仕舞う。それから三歩下がって俺に問うてきた。

「そんじゃ次は、零児的に俺様の相手をしてくれるってか？」

「冗談じゃない。誘波に素手で一撃入れるような怪物と喧嘩する気なんてねえよ」

「――ッ」

セレスの息を呑む気配が伝わる。昔、グレアムは誘波と試合ったことがある。たった一撃入れただけで結局は負けたんだが、それでもあの着物怪人相手だと偉業だ。セレスが驚くのもわかるな。

「そう言うなって。俺的にお前となら楽しく戦れると思ってんだぜ？　せっかくそれを生成したんだから使わねェと魔力ってやつの損だろ？」

「嫌だね。お前には俺が戦闘を楽しむような人間に見えるのか？」

「俺的に見える」

「マジで！？」

どんだけ節穴なんだあいつの目は！

「それでしたら、公式の場で戦えばいいのではないですかぁ？」

「まあ、そういう『試合』だったら考えなくもないが……って」
やばい、俺の嫌な予感センサーが『ピンポンパンポン！　カトリーナもビックリな大型ハリケーンが接近してますよ！』って勢いで警報を鳴らしている。よし、総員退避！　どこでもいいからとにかくこの場を離れるんだ！　死ぬぞ！
と、一陣の風が舞う。
「どこへ行こうとしているのですかぁ、レイちゃん？　そっちは学園の方向ではありませんよ？」
くっそ逃げ遅れたか。俺の目の前に鮮やかな十二単を纏った少女――ハリケーン・イザナミーが上陸。……もとい、日本異界監査局局長様がお見えになられやがった。
派手な少女の派手な登場に不良たちがびっくらこいているが、構ってなどいられない。
「なにしに来たんだよ、誘波」
「あらあら、レイちゃんたちの喧嘩を止めにきたに決まってるじゃないですかぁ」
胡散臭い。こいつが現れたら毎回碌なことにならないのは経験上確実なんだよ。
グレアムが嬉しそうに言う。
「おう、誘波。公式っつうこたァ、今年もアレやんのか？」
「ええ、もちろんです。恒例行事ですから」
おっとりと微笑み返す誘波も実に楽しそうに声が弾んでやがる。
「公式？　なんの話をしているのだ、誘波殿」
セレスがまだ痛むらしい喉を擦りながら立ち上がった。ちょっと心配だったが、攻撃らしい攻撃は受けてないから大丈夫そうだな。
「あら、セレスちゃんは初めてでしたね。これのことです」
誘波は掌の上に小さなつむじ風を発生させ、そこからどういう仕組みなのかＡ４サイズのビラを二枚取り出した。そして駅前のチラシ配りの人よろしく一枚をグレアムに、もう一枚をセレスに手渡した。

ビラに視線を落とす二人。するとグレアムはニィと悪魔的に表情を嬉々とさせたが、セレスは困惑顔で俺を見てきた。なんか上目遣いで瞳を縋るように潤ませて頬を染め、バツが悪そうにもじもじとしている。いやまあセレスがなにを言いたいのかはわかってるけど……か、可愛いな。綺麗じゃなくて可愛いぞ。

「その、零児、なんというか、言いづらいんだが……」

「はいはい、読んでやるよ」

「うっ……す、すまない」

セレスは申し訳なさそうに目を伏せた。彼女はまだこの世界の――というか日本語をあまり読むことができないんだ。英語は母国の言語と似ているとかで割と得意らしいのだが、漢字はからっきし。この前の期末テストでも現国と古文はリーゼにすら負けてたからなぁ。

俺はセレスから紙を受け取ると、トップにある表題を読んで「やっぱりか」と呟きを漏らす。

「零児、なんと書いてあるんだ？」

セレスが俺に密着して紙を覗き込む。いやお前、読めないんだから覗いてもしょうがないだろ。柔らかそうな膨らみがあたりそうであたらないっ！

あと近くにある銀髪から汗とは違うレモンのようないい香りがするなぁ……いかんいかん！　変な気分になる前に俺は自分から離れ、紙に書いてあることをさっさと口にした。

「『監査官対抗戦のお知らせ』――だとさ」

一章　来る学園祭に向けて（5）（後書き）

なんか火曜・土曜で行けそうです。頑張れば。
人気投票で零児に入れてくれた方ありがとうございます。なんか二回入って今トップです（笑）

一章　来る学園祭に向けて（6）

「監査官対抗戦？」

セレスが訝しげに柳眉を寄せ、小鳥のようにきょとりと首を傾けた。

「ああ。毎年、学園祭と同時期に裏で開催されてる闘技大会のことだ。まあ、こういうことやってんのは日本だけなんだが、開催時には各支局からの代表者が集まってけっこう賑やかなんだぜ」

ちなみに本局所属の監査官は局長の誘波以外全員に漏れなく出場権が与えられている。出るかないかは自由だが、最低でも一人は参加しなければならない。そんなわけで去年は俺が強制的に出場させられたわけなんだが、結果は惨敗だったなぁ。……いや、やる気なかったから適当に負けたとかそんなんじゃないぞ！

「なるほど。ラ・フェルデでも聖剣十二将の互角試合が見世物として催されることがある。それと似たようなものなのだな」

「んまあ、そんな感じだと思ってくれて構わん。趣味の悪い催しじゃないし、一つの祭りとして楽しんでいればいいさ」

見てる分には、だがな。

「そうと決まればレイちゃんには今年も出場してもらいますね♪」

「オイ待て、誘波。なにがそうと決まったのか詳しく説明してみろ」

「今年もレイちゃんが快く出場してくれて助かりますぅ」

「俺の心を捏造すんな！　だいたいグレアムが毎年出てんだろうがっ！　なんでわざわざ俺を強制する！」

「お砂糖が甘いから？」

「よーし、意味がわからんからとりあえずそこに正座しろ」

「嫌ですよぅ。そんなことしたら熱いじゃないですか」

ふわふわとした笑顔で俺の言葉をそよ風のごとく受け流す誘波。

去年もそうだったが、どうあってもこいつは俺を戦わせたいらしいな。こうなるだろうとは予想していただけに、あー、一発ぶん殴り

てぇ。

「レイちゃん、そんな暴力魔みたいな顔してないでよく要項を読んでみてください。今年はいつもとは違うのですよ」

誰が暴力魔かっ！　とツッコム気力を暑さに奪われた俺は、不承不承とビラに視線を落とす。

そして――気づいた。

「は？　チーム戦？　それも二人一組？　おいおい、正気かよ」

去年は、というか俺が知ってる対抗戦はどの年も例外なく個人戦だった。というのも、監査官は基本的に一匹狼が多いからだ。そこのグレアムがいい例だろうね。子分は引き連れていても、グレアムが誰かと肩を並べて戦うなんて想像できん。

当のグレアムはというと……

「なんだと？　チーム戦……だと？　やばいな。俺的にやばい。なにがやばいのかって？　簡単だ。俺的に組んだやつまで叩き潰さない自信がねェからだ。だが思いっ切り暴れられる対抗戦には出たいわけなんだが、困ったことにどうすればいいのか俺様の頭は思いついてくれない。なぜだ？　俺様は俺的にバカではないはずだ。となると全ての元凶はこの暑さ……そうか、暑さだ！　そしてその暑さを振り撒いている太陽！　俺的に貴様をぶっ壊す！」

「大兄貴落ち着いてくださいっ！」「太陽壊したら凍え死にますって！」「その前に流石の大兄貴でも太陽には敵いませんて！」「一発入れる前に消滅するッスよ！」

頭のネジが飛んだように太陽に向かって吠えているところを、子分たちに諫められていた。あいつはもうバカでいいだろ。

「そうだ、俺的に一つ妙案を思い浮かんだぞ。おいそこの子分Ａ。お前的に俺様と組め。そして俺様の戦いの邪魔にならねェところで頭抱えて引っ込んでろ」

「ええ！？　俺ですかい！？　む、むむむ無理っすよ！？」

スポーツ刈り野郎が凶器を向けられたように狼狽する。

「ダメですよぅ、グレアムちゃん。監査官ではない人は出場できま

せん」

「なに？　それは困った話だ。友達の少ない俺様は零児と組む以外ないってことじゃねェか。だがそれは俺的にできない。なぜなら俺様は零児と戦いたいわけで、零児と組んでしまうとそれは叶わぬ夢となってしまう。だから俺的に別のやつを探すことにしようと思う」

どうやら俺が「お断りだ！」と叫ぶ前に自己完結してしまったらしいな。ていうか、俺はお前の数少ない友達としてカウントされてんのか？

「そうなるとアレだ。俺的にこんなところで暢気にだべってる場合じゃあねェな。ハッハァーッ！　いいねェいいねェ、なんか俺的に楽しくなってきたァ！」

テンションを跳ね上げて踵を返すグレアム。これから相棒探しをするんだろうね。あいつと組む物好きがいることを願ってやるか。

「あ、ちょっと待ってください、グレアムちゃん」

立ち去ろうとしたグレアムをなぜか誘波が呼び止めた。「あん？」と振り返ったグレアムの下まで誘波はてくてくと歩み寄り、背伸びして耳元でなにかを囁いている。なにやってんだ？

すると、グレアムのテンションの上がった笑みが急激に醒めていった。グレアムはすっと目を細め――

「おい、てめェら」

――普段よりトーンを落とした畏怖すら感じさせる声を、子分の不良たちに向けて放った。不良たちの肩がビクゥ！　と跳ねる。

「俺的に、弱いもんをイジメて喜ぶやつは大嫌いなんだが、まさか俺様の子分がその大嫌いカテゴリーに入ってるなんて悲しいと思わねェか？　ああ？」

不良たちの顔が一気に青ざめる。お怒りの大兄貴を前に、いきなり雪山の天辺にテレポートさせられたみたいにブルブルと激しく震えているな。

なるほど、誘波は俺たちがもめていた原因をグレアムに話したってことか。

「大変だ。俺的に実に忙しくなる。俺様を大兄貴と呼ぶってんなら、俺的にお前らを町の清掃活動にでも励むよう調教しねェといけなくなったわけだよなァ」

「「「「ひっ！？」」」」

凶悪な笑みを浮かべたグレアムは不良たちの襟首を片手に二人ずつ掴むと、そのままゴミ袋のように彼らを引きずり去って行った。

……不憫な。

泣き喚いて許しを請う不良たちの声が聞こえなくなった頃、セレスが感心したように口を開く。

「意外と、彼は善人だったのだな」

「まあな。あいつはいろいろと狂ってるけど悪人ってわけじゃねえよ」

という感じでセレスがグレアムの評価を改めたところで、俺はだいぶ逸れてしまった話題を元に戻すことにした。

「そんで？　どうしてチーム戦にしたんだよ？」

誘波のことだ。どうせまたどっかのバトル漫画にでも影響されたんだろうね。

「これから『王国』と戦うにあたって、異界監査官も結束する必要があると考えたからですよ、レイちゃん。個々人がこれまで通り勝手気ままに動いていたのでは、恐らく『王国』には勝てません。スヴェンちゃんや望月ちゃんを相手にしてみて、レイちゃんも充分にわかったはずです」

……。

か、かなりまともな理由じゃないか。誘波にしては珍しい。

確かにその通りだ。スヴェンも望月絵理香も冗談みたいに強かった。もしも俺一人で相手をしていたら、ほぼ間違いなく死んでるだろうね。

「いきなり大人数戦は難しいので、まずは二人組（ツーマンセル）からチームワークを培ってもらおうと考えたのが今回の企画です」

「うむ。仲間と手を取り合い、背中を預け合って戦う。私も素晴らしい考えだと思うぞ。流石は誘波殿だ」
「わかっていただけましたか、セレスちゃん。その通りです。最近読んだバトル漫画でもチームの絆が大切だと言っていました♪」
「やっぱり漫画の影響もあったのかよ！」
……おかしい。今、急激にこの企画がまともじゃなく思えてきた。
「そこで今回はいつにも増して奮発しました。なのでチーム戦だとしても例年通り参加者は募ると思われます」
言われて俺はもう一度ビラに目を通す。下の方にある赤枠の中に、各順位の賞金と賞品が記されていた。
「なっ！？　優勝賞金三百万！？」
「あはっ、驚いたようですね。例年だと優勝賞金は五十万ゼニーですから」
「ゼニー言うな」
三百万あったら香ばしく焼けたリビングを改装してお釣りがくる。対抗戦に出る気なんてミジンコほどもなかったが俺だが、これは少々検討する必要が出てきたぞ。
差しあたっては誰と組めば優勝できるかと考えていると――バッ。
「零児、ちょっと貸してくれ！」
なにやら血相を変えたセレスが俺から監査官対抗戦のビラを奪い取った。あまり字を読めないのにどうしたんだ？
「やはり……これは……」
セレスは優勝賞金ではなく、プリントされてある賞品の写真を見て低く唸った。対抗戦の賞品は順位で決まるのではなく、優勝者から順に何種類もある賞品の中から選べる形式になっている。賞品は監査局が表向きに製作している近未来型洗濯機や、ユーラシア大陸横断旅行とかいう謎プラン、果てに呪い的な力が込められてそうな指輪まで様々だ。
「どうかしたのか、セレス？」
その中でセレスが見詰めていたのは……剣だった。誰が振れるん

だって言いたくなりそうな二メートルを優に超える大きさに、両手で扱うための長い柄。銀色の剣身はどうなっているのか光を紅に反射し、どこの世界のものとも知れない奇妙な文字が彫られている。

珍しい剣だとは思うけど、セレスには武器を集める趣味でもあるのか？　俺なら迷わずこのウォーターベッドならぬウォーターソファーにするけどな。

「誘波殿、この剣は一体どこで？」

「あらあら、お目が高いですねぇ、セレスちゃん。これはこの間『次元の門』から出てきたものを監査局が回収した物です。とても強力な力を秘めているようですので、対抗戦の賞品にピッタリだと思いました♪」

今年の賞品はどれも良質ですよ、とニッコニコの笑顔で語る誘波。お前はどこの商人だ。

セレスはなにかを逡巡している風にビラと誘波を交互に見ている。そして意を決したようにまっすぐ真摯に誘波を見て、

「……誘波殿、この剣は大会の賞品になどするべきじゃない。私に譲ってはもらえないだろうか？」

そう頼み込んだ。その口調からして単に剣が欲しいっていう願望じゃなさそうだ。俺の気のせいだといいが、どこか危機感めいたものを感じる。

「それはできませんよ、セレスちゃん。もう発表してしまいましたし、この剣の競争率はそこそこ高いのです。たとえ呪われた剣だとしても今さら取り消すつもりはありません。手に入れたければ、対抗戦に参加して勝つことですね」

……見ろよ、誘波のあの無邪気なようで腹黒さを孕んだ企み顔を。こいつ、絶対にセレスを参加させたいがために今の話を断ったに違いない。

「そうか。なら、仕方がないな」

「いやセレス、なんか知らんが大事なことなんだろ？　もっと食いつけよ」

「構わない。私は正当な手段で目的を達成させてみせる」
俺に向けられる瞳の純粋さが眩しい！　てか素直に引き下がり過ぎだ。少しは誘波の悪意を感じ取れるようになった方がいいぞ？
「ではではぁ～、暑いので私は冷房の効いた部屋に帰ります。レイちゃんたちも熱射病にはお気をつけてくださいねぇ♪」
ヒュオッ。一陣の風が誘波を包んだかと思えば、一瞬にしてその姿を跡形もなく消し去った。風使いの誘波が用いる風の転移術だ。
「あのアマ、いろいろあって忘れかけてた暑さを思い出させやがって……」
いかん、太陽の容赦ない攻撃がギラギラと俺に突き刺さってくる。こうなってくるとグレアムみたいにバカになりそうだ。つまり、太陽ぶっ壊してぇ。
「零児」
俺が敬礼のポーズのように手を額にあてて憎たらしげに上空を見上げていると、セレスが凛と響く真剣な声をかけてきた。
俺は太陽を睨むのをやめてそちらを向く。
すると、セレスは仰々しく俺に頭を下げた。
「その、訳は後で話す。だから私と、私とチームを組んでくれ！　頼む！　こんなことを頼めるのは零児しかいないんだ！」

一章　来る学園祭に向けて（6）　（後書き）

そろそろ一章も終わりです。
二章からは本格的に学園祭&対抗戦に入りたいと思います。

ほんと最近時間がなくてなかなか推敲できないんです。他にも様々な要因（暑さとか疲れとか）でクオリティ下がってるかもしれませんが、どうか見捨てないでやってください。

一章　来る学園祭に向けて（7）

俺はつくづく頼まれると断れない性分なんだと思う。
特に誠意の籠った必死の懇願には首を横に振れない。誘波のアホみたく冗談にしか聞こえない頼みだったら容赦なく「却下だボケ」と言えるんだがな（結局はやらされる羽目になるんだけど）。
よって今回のセレスの要求に、俺は二つ返事でＯＫしてしまったんだ。
学園祭と同時に開催される監査官対抗戦。そのパートナーとして、俺はセレスを選んだ。セレスが欲しがっていた剣がなんなのかはまだ教えられてないが、そこにはとても深刻な事情があるに違いない。だったら、手伝わないわけにはいかねえだろ？
「――てことでリーゼ、悪いけど今回ばかりはお前と組むことはできないんだ」
「なんでよ？　レージは？魔帝？で最強のわたしのものなのよ？」
「この際だからはっきり言っとくけど、俺はリーゼのおもちゃになった覚えはないからね」
えんやこらと汗だくになりながら上り坂を突破して学園に戻った俺たちは、それぞれが学際の準備を始めている教室に行く前に廊下でリーゼと鉢合わせた。リーゼも誘波から対抗戦のことを聞かされていたらしく、真っ先に俺をパートナーにするために待ち構えていたのだ。
リーゼとなら俺の現段階での最強生成武器――魔帝剣ヴァレファールが使える。そいつがあれば優勝の可能性も大きくなる。
だけどな、俺には先約がある。グレアムと同じく楽しむためだけに対抗戦に参加するリーゼとは組めないんだよ。
「零児は私のパートナーとなることを選んだのだ。？魔帝？リーゼロッテ、貴様がなにを言おうと無駄だ。零児は一度交わした約束を破るような者ではない」

「そんなの関係ないわ。零児はわたしと一緒にいればいいの」
「零児は貴様の奴隷ではない。少しは我がままを自粛するのだな。そんなのでは、いつまで経っても子供と変わらないぞ？」
「わたしは子供じゃないわよ！　この騎士崩れ！」
「なんとでも言うといい。今回は決闘をするまでもなく結果が出ているからな」
　気のせいか？　セレスがなんか勝ち誇ったようにリーゼを見下してるぞ。そんなに敵視する？魔帝？の悔しがる顔を見るのが嬉しいのかね？
「悪いな、リーゼ。今回は諦めてくれ」
「むぅ、むむむぅ」
　ぷるぷると握った両拳を震わせ、悔しさで赤く染めたほっぺを河豚みたいに膨らますリーゼ。心なしか上目遣いで睨んでくる紅瞳が潤んでいるな。くそぅ、ちょっとかわえぇ。
　やがてリーゼは癇癪を起したようにダン！　と床を踏み鳴らした。
「いいわよ！　だったらお前たちはわたしの敵！　敵よ！　けちょんけちょんに燃やしてあげるから覚悟しておくことね！」
　リーゼは憤然と叫び放って全力疾走でどこかに去って行った。どうでもいいけど、『けちょんけちょん』と『燃やす』は日本語的に繋げてもいいのか？　まあ、意思疎通アイテム――〈言意の調べ〉の変換ミスかもしれんけど。
　あと、マズイな。リーゼを敵に回すと優勝が遠退く恐れがある。リーゼはどうせレランジェと組むだろう。他にいないからな。レランジェ本人は異界監査官になってないと言っているが、メンバー登録は勝手にされてるから出場しても問題ないし。
「零児、共に？魔帝？を討ち取ろう」
「それは目的に入れなくていいと思うぞ」
　セレスの瞳は期待とやる気と俺にはよくわからない嬉楽に満ち満ちていた。

「やあ、お二人さん。今お帰りかな？」

唐突に背後から声をかけられた。振り返ると、そこには学園の制服の上から白衣を纏った背の高い変態女子――もとい郷野美鶴がお気楽な微笑みを浮かべて手を振っていた。

「まあ、そんなところだ」

俺は適当に答える。クラスメイトとはいえ、一応今は敵同士ってことになってるからな。あ、それを言うとセレスもか。

「どうだい、白峰君？　男子の女装喫茶は順調かい？」

「ぼちぼちな」

どんだけ頑張っても女子の男装喫茶に負けることは目に見えてるけどね。

「で、女子代表の郷野様はこんなところでなにをされてるんですか？」

「ん？　白峰君、なぜか少し距離を置かれているように聞こえるゾ？」

「実際に置いてる」

「ははは、それは寂しいなぁ。……白峰君のアルコール漬け」

「なんかさらっと怖いこと呟かなかったか！」

「いやいや、安心するといいサ。アルコールは医療用を使うから」

「どこに安心する要素があるんだろうね！」

あまりこういう変なやつとは関わり合いになりたくないのが俺の正直な心情だ。いろいろ手遅れだというツッコミはなしでお願いします。

「美鶴殿、頼まれていた物は全て調達してきた。確認を」

セレスが両手のレジ袋を示す。

「おお、暑い中お疲れ様、セレスティナ君。後で見るよ。それよりもリーゼロッテ君を見なかったかい？　途中で抜け出したまま戻ってこないんだ」

なるほどね、郷野はリーゼを探してこんなところを彷徨っていた

のか。郷野は意外と面倒見がいいんだよな。
「リーゼなら、さっきあっちの方に走って行ったよ」
「そうか。となると教室に戻ったかな？　教えてくれてありがとう、白峰君」
ニッコリ、と。
俺とほぼ同じ目線の高さから、郷野は屈託のない笑顔を向けてきた。俺はどう反応していいのかわからず視線を壁にやる。礼を言われるのは慣れてないんだ。
セレスが嘆息する。
「それにしてもリーゼロッテには困ったものだ。いつもいつも零児に迷惑をかけようとする」
「実際に俺に迷惑をかけてんのは着物とかメイドとかだけどな」
あいつらと比べたらリーゼの我がままなんて可愛いもんだ。
「……」
ん？　郷野が思案顔で俺たちを見てるけどどうしたんだ？
「そうだ。教えてくれたお礼と言ってはなんだが、白峰君」
と、怪訝にしていた俺の手を取った郷野が顔を近づけてくる。な、何事だ一体？　オレイ？　オレイってなんのことだよ？　てか、こうして見るとこいつはこいつで美人だよなぁ……いやいやそんなことはどうだっていいぞ俺！
「……白峰君」
艶めかしく俺の名を呼ぶ郷野。じーっと、下手をすればお互いの唇が振れそうな距離で見詰めてきやがる。俺はわけがわからず硬直して動けない。
「み、美鶴殿！　なにをしているんだ！」
セレスが慌てたように俺と郷野の間に割って入って引き裂いた。なんか知らんが助かったぜ、セレス。
奇行で俺を困らせた郷野はそんなセレスを見てニマァ、と人の悪い笑みを浮かべている。
「なるほどねぇ。そうかそうか」

なにやら一人で納得しているぞ。本気で意味わからんな、こいつ。
一度精神科にでも行けばいいのに。
「お前は一体なにがしたかったんだ？」
「うむ、少々心理学的実験をね」
唐突に俺で実験しないでもらいたい。
「そういうわけだから、白峰君。学際中にどこか怪我をしたら保険委員長として私が手当てしてあげるゾ」
「それがお礼ってやつか？」
「そ。もちろん無料だゾ」
「え？　なに？　普段は金取ってんのお前？」
「さあ？」
両掌を上に向けて郷野はあからさまに言葉を濁した。絶対こいつの前で怪我してるところを見せるわけにはいかない、と俺は決意する。対抗戦があるんだ。無傷ってのはたぶん無理だから。
「さて、私も教室に戻ることにしよう」
白衣のポケットに手を入れて研究者っぽく歩き始める保険委員長。だがその途中で立ち止まり、思い出したように俺たちを振り返った。
「あー、そうそう。もう一つ訊きたいことがあったんだ。白峰君とセレスティナ君はどこで合流したんだい？　示し合わせて一緒に学園を出たわけではないんだろう？」
好奇心を微笑みに含ませた郷野の質問に、俺とセレスは顔を見合わせる。
「美鶴殿が描いてくれた地図の丁度交差点の辺りだが……？」
セレスが答えると、郷野はさらに顔をニヤニヤさせる。
「ということは、お二人さんはそこからデートしてきたってわけかい？」
……。
でぇと？

俺と、セレスが？
いやまあ、確かに喫茶店とかに二人で入ったりしたけど……もしかして傍から見たら俺らってカップルと思われてたりするのか？
ちゃうねん、ありえへんて。
……よし、落ち着こう。取り乱すな俺。思わず関西弁を使ってるぞ。これは言い方の問題だ。一緒に行動したことを郷野は『デート』と表現したに過ぎない。向きになって反応することこそ郷野の思惑だ。平常心平常心。
ぷしゅーっ。
機関車が蒸気を噴き上げたような音が聞こえた。恐る恐るそちらを見ると――セレスが赤のペンキを頭から被ったように全身を紅潮させて目を渦巻にしていた。
「でぇと……私が……零児と……でぇと……？」
かあぁぁぁ。
なんか譫言のように呟いてまた一層赤面しているぞ。セレス、壊れてないか？
「あははははははははははっ！　やっぱり面白いな、セレスティナ君は」
郷野は腹を抱えて大爆笑。しまった、やつの狙いは端からセレスだったんだ。セレスがなんでここまで狼狽してるのかは知らないが、早く現実に引き戻してやらないとぶっ倒れて悪魔の保険委員長の生贄になっちまう。
「セレス、落ち着け。深呼吸だ。デートじゃない。デートじゃない」
俺はセレスを宥めようと肩を揺さぶるが――
「れ、零児……い、いやぁあああああああああっ！？」
――絶賛取り乱し中のセレスに頭を掴まれて顔面を壁に叩きつけられた。
そのまま乙女のように駆け去っていくセレス。ずるずると顔を壁で擦って廊下に倒れこむ俺。……もう、おうち帰りたい。
「おやおや、白峰君。早速怪我をしたかい？」

「いえ全然！　これっぽっちも！　めっちゃピンピンしてます！」
俺は光速で立ち上がって元気なことをジェスチャーで郷野に示す。
幸い、鼻血も出てなかった。
「そうかい？　う～ん、久々に執刀できると思ったのに残念だよ」
「執刀する意味は絶対ないよねっ！？」
こいつが悪魔と呼ばれる所以の末端を見た気がした。この諸悪の根源、どうしてくれようか。
「さてと、今度こそ私は教室に戻るよ。桜居君がとんでもないことをやらかすみたいだからね。こちらもうかうかしていられないのサ」
そう意味深なことを言い残して、郷野も廊下の奥に消えていった。
白衣が完全に見えなくなってから、俺は呟く。
「桜居が、なんだって？」

一章　来る学園祭に向けて（7）（後書き）

人気投票、セレスと稲葉レトに入れてくださって方ありがとうございます。

セレスはもちろんですが、レトも今回多少は活躍するかもしれません。

これからもよろしくお願いしますｗ

Q&Aやってた頃が懐かしい……。

【宣伝】

シャッフルワールドとは別に『天井裏のウロボロス』という作品も連載しております。ＭＦ文庫Ｊライトノベル新人賞で二次を通った作品です。シャッフル同様にハイテンションなコメディ成分が多い王道バトル物。是非とも暇なときにでも読んでみてくださいましｍ（＿＿）ｍ

＞ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ７２７９ｕ／＜

間章（1）

――……レス――

――……セ……レス――

――応えろ、セレス――

「うぅ……」

力強く尊大な、それでいてとても懐かしい声がセレスティナの脳に直接響いた。激しい眠気と『起きなければ』という気持ちが衝突し合い、微睡の中で呻く。

――聞こえるだろう、セレス。いつまで寝ている？　早く目を開けろ――

さらに頭に突き刺さってくる威厳ある？声？が、セレスの意識を一気に覚醒させた。

「ハッ！　も、申し訳ありません陛下！　私としたことがうたた寝を……？」

瞼を開くと、辺り一面に無光の闇が広がっていた。上も下も前も後ろも右も左もない。長時間過ごすと感覚が狂って気持ち悪くなりそうな世界。

「な、なんだここは？　私は、自室のベッドで寝ていたはずだ」

学園祭の準備を終えて監査局の女子寮に戻り、いつも通り授業の予習復習をしてシャワーを浴びてから消灯したところまでは覚えている。

まさか眠っている間に『次元の門』に呑み込まれてしまったのだろうか。そう考える。

いやーー

変だ。このような暗闇なのに自分の姿がはっきりと見える。

肩当て、胸当て、ガントレット、純白のマント、その下は学園の制服ではなくラ・フェルデの軍衣。就寝中に門をくぐってしまったのなら、自分は寝間着姿のままでないとおかしい。

それにこのような虚無の世界で普通に呼吸ができることも不自然だ。声だって響いている。つまり空気があるということになる。そういう異世界なのかもしれないが、やはりここは『世界』として矛盾している気がする。

と、ポゥ。

唐突に、背後から淡い黄金色の光が差した。

同時に感じ取った人の気配にセレスはバッと飛び退く。黄金の輝きが人の形をしてそこに佇んでいる。

「ようやく繋がったか」

黄金色の光が言の葉を紡いだ。それも、セレスティナのよく知っている声だった。

「まさか……まさか、陛下……なのですか？」

「なにを当たり前のことを言っている？　おかしなセレスだ」

セレスティナは驚きに目を丸くする。この黄金色の光は、セレスティナの祖国ラ・フェルデの現国王――クロウディクス・ユーヴィレード・ラ・フェルデだというのだ。

疑うのも一瞬。黄金色の光からひしひしと感じられる圧倒的な存在感は、紛うことなく自分が仕える主君のものだ。

「ですが、なぜ陛下が？　それに、ここは一体……？」

「夢だ」

「ゆ、夢？」

突拍子もない言葉にセレスティナの混乱が増大する。

「夢は門以外で世界間を繋げることのできる方法の一つだ。私の力は知っているだろう？　今は私の意識をお前の夢に潜り込ませた状態だと思え」

「はい、わかりました」
「む？　存外に素直だな。もっと戸惑うかと思ったが？」
「だって陛下ですから」
とても信じられないことではあるが、この陛下ならこのくらいやって除けても不思議はないとセレスティナは思っている。セレスティナが知る中で誰よりも強く規格外なこの陛下ならば……。
「とにかく、こうしていられるのも限りがあるから手短に言うぞ。セレス、お前の夢を見つけられたことで三つわかったことがある」
黄金色の光のシルエットが、セレスティナに突きつけるように三本の指を立てた。
「一つは、お前が無事だということ」
陛下は立てた指を一本折る。
「ひとまずは安心した。よく無事だったな」
「はい、私の今いる世界の人々によくしていただきましたので。――ご心配をおかけしました」
セレスティナは膝をつこうとするが、陛下はそれを手で制した。そのまま聞けということらしい。
立てた指が一本に減る。

「二つ目は、この夢を通じてお前のいる世界を特定できたことだ」

「――ッ！？」
セレスティナは声を失った。先程よりも強く驚駭したからだ。
「少し時間はかかるが、私が必ずお前を迎えに行く。それまでその世界で待機していろ」
「私を、迎えに……陛下自ら……？」
衝撃的な台詞にセレスティナは狼狽する。全身に緊張が走り、動悸が高まる。
「……本当、ですか？」
「嘘だと思うか？」

思わない。他の誰でもない、陛下の言葉を疑うなどありえない。

ごくり、と息を呑む。

飛び上がりたいほどに嬉しい。しかし、この胸の奥で渦巻く寂しさに似た感情はなんなのだろうか？

この世界で出会った友と別れることになるから？　そう考えることが自然だろうけれど、なぜかそれだけが原因ではないような気がしてならない。

……。

考察したところで、その疑問は晴れそうにない。だからセレスティナは一旦疑問を保留にし、先を促すことにした。

「それで陛下、三つ目は？」

「ん？　ああ、これでアレインとの勝負に勝ったということだ」

「は？」

意味がわからずセレスティナは素っ頓狂な声を漏らした。アレインとはセレスティナも在席している聖剣十二将の長だが、ここで彼の名が出てくる理由がさっぱりだった。

黄金色の光――クロウディクスのシルエットが首を振る。

「いや、なんでもない。こちらの話だ。それよりも時間だ。いいか、間違っても別の世界に飛ぶな。これ以上私に面倒をかけることは許さん」

打ちつけるように言い残すと、黄金色の光は弾けて霧散した。

瞬間、セレスティナの意識も真っ黒な闇から真っ白な闇へとシフトし――

――現実で目を覚ませた時には、夢の中での遣り取りは薄ぼんやりとしか記憶に残っていなかった。

間章（1）（後書き）

なかなか学園祭始まらなくて申し訳ないです。
二章からはちゃんと始まってますのでお楽しみにｗ

二章　監査官対抗戦・予選（1）

俺がセレスと監査官対抗戦に出ると決めた日から数日が経ち、ついに伊海学園学園際の幕が切って落とされた。

ガヤガヤ。ガヤガヤ。

開門と同時に数多くの一般人が学園内に殺到する。それは高等部の話なんだが、経験上、初等部や中等部も似たような感じだろうね。大学の方になったらたぶんもっとやばい。なんにしてもこのクソ暑い中、あの心臓破りの坂を徒歩やチャリで登ってきたやつらは称賛に値するな。

どこもかしこも賑々としている。外は生徒たちが切り盛りする多種雑多な出店が軒を連ね、簡易ライブステージでは飽くことなく歌声や演奏が響いている。屋内だと教室を定番の喫茶店やなにかの展示会場、はたまたお化け屋敷等に改造したりと、普段学生が勉学に励む空間とは思えないほどの変貌ぶりだ。

果たしてこの中にどれだけ外部の異界監査官が混ざっているのか見当もつかない。今年の参加人数を俺は知らないから、ちょっとすれ違ったやつと後で顔合わせて戦う、なんてことにもなりそうだ。

監査官対抗戦には予選と本線がある。一日目は予選で、開始は午後一時からだ。それまで参加者には表側の学園祭を楽しんでもらおうという魂胆だろう。

予選開始までまだ時間のある午前現在、俺は様々な衣装でその身を彩った美少女たちが忙しなく動き回るコスプレ喫茶にいた。

これはライバルクラスがやってる喫茶の視察……ってわけじゃない。

俺は客として店のテーブルに腰を据えているのではなく、教室に設置した即席の厨房にてオムライスを作っているからだ。

料理ができる俺の役目はキッチンスタッフなんだよ。……ん？

なんで別クラスの助っ人をしているのかって？　悪いけど、その質問は見当違いだ。
今もホールで忙しそうにしてる美少女たちがいるだろ？
あれ、我らが二年D組の男子なんだ。全員。
金髪ツインテールにメイド服を着た少女。
黒い長髪と紅白巫女服をはためかす少女。
青を基調とした婦警の制服を纏った少女。
全部、男。
いや、どっかから借りてきた女の子じゃないからな。正真正銘クラスの男子だ。しつこいようだが何度も言うぞ。ホールにいるどこからどう見ても女の子にしか見えないやつらは、漏れなく野郎だ。
「白峰、オムライスはまだか？」
「はいよ、今できた。ほれ」
俺は皿に盛りつけたトロトロたまごのオムライスを、ファンタジー世界の貴族令嬢みたいな衣装で身を飾った桜居に手渡す。地声で話しかけられなければ、俺がこいつを『桜居』だと認識するのに数秒のラグが発生するだろうね。それほどまでに、そこの桜居は『美少女』だった。
いつもの癖毛を青い髪のカツラで封じた桜居は、睫毛の長いパッチリとした目を瞬かせ、桃色の唇で言葉を紡ぐ。
「なんだよ白峰、そんなにオレを見詰めて？　……ハッ！　まさかオレに見惚れたのか！？　これからはここでも女ボイスで喋った方がいいか！？」
「もし俺が一瞬でもお前に見惚れたならその時点で腹切って死んでやる」
どうしてこうなったのか？　それは数日前に遡る。

「えー、率直に言う。我が軍が普通に女装喫茶を行ったところで敵軍の女子どもに勝てないことは自明だ」
教壇に立った桜居がそう断言した。なぜ司令官口調なのかは謎だ。
「隊長、でしたらどうするというのです？」
「女子どもに勝てなくば我らが悲願は成就しませぬ」
「始まる前からミンション失敗ということなのでしょうか？」
男子たちから不満の声が上がる。誰もがそのことには気づいていただろうが、桜居のあまりの自信満々さに希望を抱いていたのだ。
「ええい、鎮まれい！　このオレが無策で無謀な賭けをするわけがなかろう？」
工作に使ったトンカチで裁判官のように教壇を叩き、男子たちのざわつきを瞬時に収める桜居。こういうカリスマ性はホントに凄えよ、お前。
「普通にやっても女子には勝てない。そこでだ、協力者を得ることにした」
ニヤリ、と桜居は悪の組織の幹部がなにかを企てたような笑みを貼りつける。協力者という言葉に、皆が再びざわつく。
「どうぞ、入ってください監督」
監督？
胡散臭げに教室の扉に注目すると、そこから黒い髭をふんだんに蓄えたクマのような大男が入ってきた。赤い帽子を被ってサングラスをかけ、ジャンプ力に定評のある配管工みたいなつなぎを着ている。
なんぞこいつ？
「この人はオレのちょっとした知り合いで、映画とかの特殊メイクを手掛けてる自称超一流のメイクアップアーティストなんだ」
自称かよ。
「名前は土井――」
と、紹介しようとした桜居を大男が丸太のような腕で制した。ど

うやら名乗りは自分でするつもりらしい。
大男はウォホン！　と力強く咳払いをし、
「ワターシノ名前ハ、D・W・グリフィスデース。『監督』ト呼ンデクダサーイ」
ソプラノ歌手のような高い声でそう言った。
「――って嘘つくなよ！　さっき土井って言いかけてただろ！　メイクアップアーティストは監督じゃねえよ！　そしてアメリカ映画の父に謝れ！」
「ノンノン、ドイー・ウォーク・グリフィスデスヨ、ボーイ」
「ややこしいわ！　結局偽名じゃねえか！」
「十七歳ノ火星人デース。地球ニハ混沌（クトゥルー）ヲプレゼントスルタメニ来マーシタ」
「年齢詐称すんな火星に帰れ見た目相応の声出せよお前の存在だけで既に混沌だ！」
「オー、ミスター・桜居。コノボーイ、ナンナンデスカ？」
「あー、チミたち、ドイーさんが困ってるからとりあえず白峰を追放しろ」
「「了解であります、隊長！」」
「いや待てお前らその投げ縄はどこから出したんだぎゃあああああ！？」
四方から投げ縄で締め上げられた俺は、そのまま会議が終わるまで廊下に転がされていたわけだ。手首もガッチリ縛られてたからナイフを生成しても切れなかったんだよ。
で、そのドイーさんはメイクの腕だけは神業で、クラスの冴えない男子どもをどんな魔法を使ったのか煌びやかな美少女に変身させちまったんだ。女装喫茶ってのは隠してるから、お陰様で物凄く繁

盛している。こりゃあ、バレたら日には集団リンチされても文句は言えないな。

そうそう、当然、女装喫茶だから俺も女装させられているわけで。……うん、逃げようとしたんだけど、やつらめ俺の行動を見越してスタンガンを所持した連隊を編成してやがったんだ。気絶してる隙にやられた。

俺がどんなメイクをしているのかは、自分も知らない。鏡を見てないからな。だからわかるのは服装だけだ。カメの化け物に頻繁に攫われるお姫様みたいなピンク色のワンピースドレス……楽し過ぎて涙が出るね。

俺は厨房からホールの様子を覗いてみた。男の娘たちが口に近い位置に装飾されたボイスチェンジャーで高い声を出している。客には無線と言っているらしい。

そのホール全体が見渡せる奥の席にて、例のドイーさんが満足げに微笑んでいる。「オー、皆サントッテモ可愛イデース」とサムズアップなんかして……張り倒していいかな？

「なかなか似合っているじゃないか、白峰君」

呼ばれたので横を見ると、厨房に一番近いテーブルで白衣を着た長身の少女が興味深げに喫茶内を眺めていた。

「郷野、なんでお前がここにいるんだ？」

「無論、敵情視察サ。それより白峰君、その格好で地の声を出すと気持ち悪いゾ？」

俺は現在進行形で『美少女』をやってることを思い出し――たけど女声を出すつもりなど毛頭ない。自分自身が気持ち悪くなるからな。他の男子が楽しんでそれをやってることは尊敬すべきかもしれん。

「てか、よく俺だとわかったな」

「私はエスパーなのサ」

なるほど、デンパか。

「いや、デンパではないよ」

読心術!?
「本当は厨房の声が聞こえていたんだ。気をつけないと男だとバレるかもしれないゾ？」
「ご忠告どうも」
俺はバレてもいいんだけどね。女装をやめれるなら。
「それはそうと、お前はいつも通りなんだな。男装しなくていいのか？」
「ん？　おかしなことを言う。私は立派に男装しているじゃないか。医者の」
「普段となにが違うか一言で述べよ」
「白衣のボタンを留めている」
絶対的な自信のある口調で答えられた。俺の脳裏に『手抜き』の三文字が浮かんだが、これ以上の問答はやめよう。疲れるから。
するとそこでオムライスを運び終えた桜居がやってきた。テーブルで優雅に紅茶を飲む郷野に勝ち誇った顔を向けている。
「フハハ、見たか郷野。この繁盛ぶりを。オレが本気を出せばこんなもんだ」
「いやいや、敵ながらあっぱれだよ、桜居君」
郷野は素直に称賛したが、
「でも、こちらだって負けてないサ」
余裕な態度は一切乱さなかった。
「私たちは君たちと違って男装だと公開しているが、なかなかに繁盛しているよ。特にリーゼロッテ君とセレスティナ君が人気かな」
「セレスはわかるが、リーゼも人気なのか？　意外だな」
「年下の可愛い美少年が大好きなお姉さんたちにモテモテなんだ」
ロリコンに加えてショタコンまで大発生させてるのかよ。リーゼ、恐ろしい子……。
郷野は紅茶を飲み終えると、机上に代金を置いて椅子を引いた。
「さてさて、そろそろ視察はやめて戻らないとね。どういうわけか、リーゼロッテ君とセレスティナ君は午後から参加できないらしいん

だ。白峰君、なにか聞いてないかい？」
「いいや。あいつらの事情なんて知らねえよ」
と言ってはぐらかしつつ、俺は壁に掛けられている時計を確認する。もうじき正午だ。対抗戦前にセレスと合流して昼食を取ることになっているから、急がないとまずい。
「さっさと帰れ帰れ」桜居がしっしっと手を振り、「人気の二人がいなけりゃオレたちの勝ちは確定だな、郷野」
そんな桜居の態度に郷野は少しムッとした表情をする。しかしすぐに澄ました顔に戻ると、踵を返して去っていく。
その途中――
「重大発表。ここは実は女装喫茶だゾー」
棒読みの爆弾発言を置き土産として残しやがった。客たちに動揺が伝播する。
「郷野てめえっ！」
桜居が激昂するが、郷野はそそくさと立ち去った後だった。
おいおい、と俺は嘆息する。美少女の姿をしている桜居から男の怒鳴り声が出たせいで、郷野の呟いた『女装』という言葉を裏づけちまったぞ。
騒ぎ出す客。慌てて対応に追われる女装したクラスメイトの男子。
そして、いつの間にか消えているドイーさん。
「……終わったな」
俺は全てを悟って呟くと、迅速にこの場から退避することを選んだ。セレスを待たせるのも悪いし、桜居は俺の事情を知ってるからいちいち報告しなくてもいいだろう。
「おっと、その前に着替えないとな」
このまま外に出られるほど俺はヘンタイじゃないんだ。

二章　監査官対抗戦・予選（1）（後書き）

次回の更新は7月30日（土）です。
久しぶりに書けたこのセリフ。

……いえ、余裕があるわけではないです。寧ろないから休みのうちに二話分を終わらせたって感じです。

あとイラストコーナーも更新してますので是非お立ち寄りをw

二章　監査官対抗戦・予選（2）

高等部の校舎を出て大学の方へと歩いていると、途中でいくつかの分かれ道にぶつかる。どこをどう曲がったらなにがあるなんてのは、俺だって把握し切れていない。それほど複雑な分岐点が多々あるんだ、この学園は。人間は誰しも完全記憶能力を持ってるわけじゃないんだぞと言いたいね。

だがまあ、今回は迷う必要はない。校舎を出て最初の分かれ道を左に曲がれば済むからだ。

学生たちが営む出店を眺めながら進むと、すぐに大きく開けた場所に出る。地面に敷かれたタイルなどは全体的に白く清潔感があり、各所に設置されたベンチからは街や空の風景を遠く広く存分に望めるため人も多い。

当学園自慢の大人気スポット――スカイテラスだ。

そして、セレスとの待ち合わせ場所でもある。

ここならわかりやすいし、高等部の校舎からも近い。ついでにテラス付近には出店も多くあるからな、昼食にも困らないってわけだ。

女装を解いてスカイテラスまでやってきた俺は、すぐに目印となる銀髪ポニーテールを発見した。

テラスに立つセレスは、どこか物憂げに景色を見下ろしていたのだが……あれ？　なんか雰囲気がいつもと違う。

「む？　零児、来たか」

セレスがこちらを振り返る。彼女は髪型こそそのままだったが、黒のジャケットにズボンにバックレスベスト、ウインザーノットで締めたネクタイに白い手袋といった格好をしていたのだ。

どこからどう見ても執事服。男装だ。

なんというか、わかってたけど着こなし抜群で異様に似合っているな。セレスに黒はどうかと思っていた俺だが、これは考えを改める必要があるかもしれん。

俺がなにも言えず見惚れていると、セレスは居心地悪そうにもじもじと身を捩って白い頬に朱を差した。
「そ、そんなにじろじろと見ないでくれ。き、着替える暇がなかったのだ」
「あ、悪い」
いつもの凛としたセレスは男らしくてカッコイイが、こうして恥じらうところ見るとやっぱり女の子だなって思ってしまう。
「わ、笑いたければ笑え。このような格好、私にはどうせ似合ってなどいない」
「いや、普通を通り越したレベルで似合ってるぞ」
「に、にに似合ってるだとッ！？」
瞠目して絵に描いたように狼狽えるセレス。温度計みたいに首から頭にかけて紅潮していく。……しまった。男の格好を誉めても女の子的に嬉しくないよな。あんなに真っ赤になるほど怒らせてしまったようだ。
……ふう。
鉄拳制裁は必然、か。覚悟した俺は目をきつく閉じて歯を食い縛った。
――が、一向にその時はやってこなかった。
恐る恐る目を開けると、セレスはなにやら両手を頬にあてて「似合ってる、似合ってる」と呪文のように繰り返し呟いていた。そ、そんなにショックだったのか？　もう土下座するしかねえよ！
「？　零児、なにをしているんだ？」
両膝を折り、日光で熱された白タイルに額を押しつける俺にセレスが訝しげな声をかけてきた。
「怒らせたみたいだから謝罪を」
「怒らせた？　誰を？」
おや？　セレスは怒ってないのか？　俺の思い過ごしだったってことか？
「その、すまないが着替えてきてもいいだろうか？　やはり、この

格好だと恥ずかしい」
　最後の方の声は萎んでいてよく聞き取れなかった。
「あ、ああ、待ってるよ」

　それから約十分後、セレスは学園の制服の上から武装した姿となって戻ってきた。肩当て、胸当て、ガントレット、純白のマント、聖剣ラハイアンもしっかりと背中に担いでいる。思うに、執事服よりそっちの方が俄然恥ずかしいだろ。周りは学園祭の仮装だと思って気にしてないようだけど。
「やはり、この姿の方が落ち着くな」
「元から着てた軍服みたいなのはどうなったんだ？」
「あれは？魔帝？との戦闘でダメになってしまったのだ」
「ああ……」
　最初に着ていた軍服を見ないなと思っていたら、あの時から制服＋武装がセレスのデフォルトになったってわけか。
「じゃ、とりあえずメシにしようぜ。あんまり時間ないから見て回ることはできないけど、セレスはなにか食いたいもんあるか？」
「そうだな、私にはよくわからないから零児が食べたいもので構わないが……」
　セレスは顎を人差し指で持ち上げて考えている。テラス付近の出店で見たものでも思い出しているのだろうか。
　と、その時――
「よっ、白峰。お前らも昼飯か？」
「早く済ませないと、一時からの対抗戦に間に合わなくなるわよ？」
　日光熱をたらふく吸収しそうな黒ロングコートを羽織った迫間漣と四条瑠美奈が、俺たちを見つけて歩み寄ってきた。光に弱い影魔導師の二人はあのコートがないと日の下を歩けないのだ。
「なんだ、お前らも対抗戦に出るのか？」
　意外に思って言うと、長い黒髪をストレートに下したちっこい方――四条がむっと唇を尖らせる。

「なによ？　あたしたちが参加しちゃ悪いの？」
「子供みたいに絡むなよ、瑠美奈。面倒臭い」
いつものように迫間が頭を掻きながら諌める。この二人とは一度ガチで戦ったことがあるんだが、息ぴったりのコンビネーションに相当苦戦させられたもんだ。
だけど――
「お前ら、出たとしてちゃんと戦えるのか？」
影魔導師は周囲が暗ければ暗いほど力を増す。逆を言えば明るければ明るいほど一般人以下になるとても億劫な能力者なんだ。予選がどんな形式のものかは知らないが、真っ昼間から強力な影魔導術は使えないだろう。
「まあ、面倒臭いことに運がよくないと瞬殺されるな、俺らは」と、迫間。
「でも、お金が必要なのよ。纏まったのが」むすっと、四条。
金、か。一般的な理由だと思う。俺も出場する動機の半分はそれだし。
四条はともかくとして、面倒臭がりの迫間まで参加するとなると余程に欲しいものがあるんだろうね。例えば……
「結婚資金とか？」
「ふざけてると殺すわよ？」
違ったか。
「では、二人はなにが欲しいのだ？」
セレスが問いかけるも、四条は言いづらそうに口籠った。迫間は苦笑している。人には言えないことなのか？　となると――
「やっぱり結婚資き「コロス！」急所にあたったぁあああああッ！？」
お股の大事なところを蹴られて悶え転がる俺。痛い。めっさ痛い。もうお婿に行けない……。
そんな俺を四条は冷め切った視線で見下す。
「（なんで、こんなやつのためにあたしたちが……）」

「？」

四条がなんか囁いたような気がしたが、お股から来る激しい痛みのせいでよく聞き取れなかった。

と、セレスが興味深げに四条を――正確には四条が持っている経木の舟皿を見詰めていることに気がついた。俺の心配もしてほしいものだが、自業自得だとか言われそうだ。

「瑠美奈殿、その、手に持っているものはなんなのだ？」

「アンタ、たこ焼き知らないの？」

四条は爪楊枝をキツネ色に焼けた一口サイズの丸っこい物体に突き刺し、顔の前まで持ち上げた。セレスはそれを翠色の瞳でまじまじと観察している。

「いい香りだ。これは食べ物なのか？」

「そうよ。――はむっ」

四条は食べ物であることを示すためか、セレスに見せつけるようにたこ焼きを口に含んだ。

「あっふあっふ。もぐもぐ」

出来立てだったのだろう、四条は口の中でたこ焼きを転がしながらも美味しそうに咀嚼しているな。熱々なのは八個入りのたこ焼きに塗された鰹節が踊っていることからも窺える。

「んん～　やっぱり奢ってもらったたこ焼きは美味しいわね♪」

満足そうに片頬に手を添える四条。その後ろで迫間が財布を開いてさめざめと泣いていたことは見なかったことにしよう。絶対にたこ焼きだけに止まってないだろうから。

で、セレスはというと……羨ましそうだ。是非とも食べてみたいと顔に書いてある。

昼飯はたこ焼きで決定だな。

「四条、そのたこ焼きどこで売ってたんだ？」

痛みから回復した俺が訊くと、四条はすぐそこの出店が並んでいる場所を指差した。

「あそこよ」

「そうか、サンキュー。そんじゃあ、また対抗戦で会おうぜ」
「フン。アンタたち、予選落ちなんかしたら承知しないわよ」
「うむ。対抗戦、共に頑張ろう」
「面倒臭えが、お互いにな」
簡単に励ましの言葉を交わして迫間たちと別れ、俺とセレスは出店群の方へ向かった。

「この世界には面白い料理がまだまだあるのだな」
「俺らにとってはセレスの世界の料理の方が珍しいだろうね」
すぐに見つかったたこ焼き屋で八個入りを二皿買い（もちろん俺の奢りです）、俺たちはベンチを求めてスカイテラスに戻る道を歩いていた。
「そうか？　ならば今度は私が故郷の料理をご馳走しよう」
「ごめん、遠慮する」
「なぜだ？　食材はこの世界とそう変わらないぞ？」
「セレス、この前の調理実習の件は覚えているか？」
「あ、あの時と今では違う！　それに故郷の料理なら私にだってちゃんと作れるんだ！」
「俺に食わす前に、味見だけはしてくれよ頼むから」
ただでさえ俺は毒杯を手にし兼ねない毎日を過ごしてるんだ。どこかのメイドのせいでな。これ以上料理で冒険はしたくない。
「あっ」
「むっ」
出店群を抜けたところで、見覚えある金髪紅眼のちびっ娘と、ゴスロリのメイド服を着た女性と遭遇した。
リーゼとレランジェだ。
噂をすればなんとやらってやつか？　心の中だったのに。
というか、リーゼもまだ男装したままだ。あの長い金髪をどうやっているのか頭の後ろで纏めていて、服装もセレスが着ていたのと同じ執事服。パッと見、美少年にしか見えない。年下の可愛い美少

年好きのお姉さんが寄って集るわけだ。
「そこをどけ、？魔帝？リーゼロッテ」
こちらが避ければ済む話なのに、セレスは威圧的にそう言い放った。当然、リーゼが従うわけがない。
「フン、お前がどきなさいよ」
「なに？」
バチバチと両者の間でスパークが迸る。通行人に迷惑だから他でやってもらいたいね。
「むむ？　レージ、なに食べてるの？」
俺が持っているたこ焼きに気づいたリーゼが問い詰めてきた。
「たこ焼きだ。食べるか？」
俺が爪楊枝に刺して一個差し出すと、リーゼの紅眼にお星様が浮かんだ。
「食べる！　……あっ、い、いらない！　レージは敵！　敵からはなにも貰っちゃダメなの！」
「いつまで拗ねてんだよ」
家では割と普通だったのに……セレスがいるからか？
「マスター、レランジェは感激安定です。ついにこのゴミ虫様を敵と認識されたのですね。すぐに排除安定です」
レランジェが俺に右手の魔導電磁放射砲を翳してくる。
「やめろ！　敵っつってもそういう意味の敵じゃねえよ！」
「どういう意味だろうとマスターの敵はレランジェの敵です。敵ならば排除安定です」
「レランジェ、やめなさい」
今にも右腕を開いて電磁レーザーをぶっ放そうとしていた侍女を、リーゼが強く諫めた。
「レージと騎士崩れを燃やすのは『たいこうせん』ってのが始まってから」
「……了解です、マスター」
凄い。

リーゼが、ちょっと大人に見えたぞ。これまでも何回かレランジェの暴挙を抑えてくれたことがあるが、その時とは違う。リーゼは対抗戦の意味を知った上でそう言ったんだ。成長してるんだな。

きゅるるるぅ。

感心したところで、リーゼのお腹から可愛らしい音が鳴った。

「やっぱり食べるか？」

「～～～～～～っ」

俺がたこ焼きを再び差し出すと、リーゼはハムスターみたいに膨れっ面になってしばし逡巡し――パクッ。手に取ることなく口でたこ焼きを引っ手繰った。うん、お行儀が悪いぞ。

「なっ！？」

なぜかセレスが絶句している。敵、というか？魔帝？に塩を送ることがそんなに嫌だったのだろうか？

下手すりゃ火傷の危険がある出来立てあっつあつのたこ焼きを、リーゼはなんともないようにもぐもぐごっくん。流石は？魔帝？だな。

「……おいしい。レランジェ、これ買って！」

「了解です、マスター」

リーゼの頭にはもうたこ焼きしかないのか、自分からセレスを避けて出店群の奥へダッシュしていった。レランジェも主の後に続く。あいつらも馴染んできたなぁ。

「――よ――慈しみ――感謝して――祝福を――」

ふと横を見ると、セレスが瞑目してよくわからない言葉を唱えていた。精神を落ち着ける文言かと思ったが、それはセレスの世界で食事の前に行う祈りだと俺は思い出す。なんで今やってるんだ？我慢できなくなったのか？

やがて祈りも終わり、セレスはカッ！　と目を開いた。

「零児、その、えっと、わ、私にもたこ焼きを貰えないだろうか？」

「は？　なに言ってんだよ。自分のがあるだろうが」

「そ、そうだったな。でも、だけど、？魔帝？が、その、なんだ…

…」セレスはなぜかしゅんと項垂れ、「やっぱりいい。忘れてくれ。ううぅ」

「あ、ああ」

よくわからないセレスだった。

そして時は流れ、午後一時。

監査官対抗戦の予選が、開始される。

二章　監査官対抗戦・予選（2）（後書き）

今回は時間の都合上ほとんど推敲してません（そうなることを想定してさっさと書くだけ書いてたので更新はできましたが）。
なので変なところとか、描写が足りないところとかがあったと思います。その辺は後で時間のあるときに直すつもりです。

二章　監査官対抗戦・予選（3）

俺とセレスは校舎と校舎の間にある人の気配のない――というか本来かくれんぼでもやってなければ来ることのない隙間にいた。

大人一人が微妙な余裕を持って入れる程度のそこは、緑色の淡い光で満たされている。その光の源泉は俺の目の前にあった。

転移用の魔法円。魔法陣と呼ぶにはシンプル過ぎる模様をしたそれが、こんな誰も迷い込んですら来ないような学園の各所に仕掛けられてるんだ。前もって誘波から渡されていた転移場所の地図に従い、俺たちは一番近いここへとやってきたってわけさ。

この魔法円は模様が複雑でないせいか一度使えば消滅する仕様になっている。つまり、ここには俺たち以外誰も来ていないってことだ。

「ここから対抗戦の会場に行けるのか？」

セレスが表情を引き締めて言う。

「ああ、どこへ繋がってるのかは俺も知らないけどな。わかることは、こいつで転移した瞬間から予選が始まるってことだ」

去年はプロレスのリングに似た闘技台がいくつも設置されたどっかのスタジアムだったなぁ……。そんなことを思い出しながら、俺は後ろに立つセレスに訊ねる。

「じゃあ、行くぞ。覚悟は……まあ、俺よりもできてるよな」

「当然だ。私はなんとしてもあの剣のことを確かめねばならない」

「それなんだが、まだ話してくれないのか？」

「私の勘違いの可能性もある。予選を通過すれば現物を見られるのだろう？　話すのはその後でも構わないか？」

予選通過者は予選終了後に顔合わせをする。その時に賞品も見せてもらえることになっているんだ。

「予選に勝つことが前提だな。まあ、セレスの好きなタイミングで話してくれればいいよ」

俺とセレスは頷き合うと、緑色に輝く転移魔法円の中へと足を踏み入れた。

瞬間、転移魔法円の輝きが増し、視界が明るい緑一色に染まる。続いて無重力空間にでも投げ出されたかのような浮遊感に襲われ……うっ、ちょっと酔いそうになった。

そんな決して気持ちのいいとは言えない感覚も一瞬だった。足の裏から地面の感触が伝わってくると、俺は閉じていた瞼をゆっくりと持ち上げる。

まず視界に飛び込んできたのは、いくら見上げても天井の見えない断崖絶壁だった。周りには同じく岩肌の壁が高く高く聳えていたり、樹海と言えそうな薄暗い森が鬱蒼と広がっていたりして道らしき道はない。

「零児、ここはどこだ？」

「いや、俺に訊かれても……自然に存在する空間じゃないってことくらいしかわからねえよ」

「どういうことだ？」

眉を顰めるセレスに、俺は上を指差した。

「空が黒いんだ」

星がないから夜空ってわけでもない。まるで底の見えない谷底のような闇がどこまでも広がっている。天地が逆さになったみたいで気味が悪いな。

加えて星も月も太陽も人工照明もないのに周囲は昼間のように明るい。その辺も十二分におかしいが、だいたい察しがついた。

「魔術的に作った空間だろうな。これほどの規模、今回は冗談抜きで気合入ってんなぁ」

『正解ですぅ、レイちゃん。だからといって予選のアドバイスはしてあげませんよぅ』

風が舞い、誘波のおっとり声が聞こえてきた。流石にこの唐突さに慣れた俺はもう動じないね。

「誘波、こっちの声は聞こえないって設定はやっぱり嘘か？」

『私も日々精進してるってことですよ、レイちゃん。次の目標は視覚情報の送受信です』

こいつはもう風の力でなんだってできそうな勢いだな。

「誘波殿、ここがどういう場所で、我々はこれからどうすればよいのかだけでも教えてもらえないだろうか？」

『大丈夫ですよ、セレスちゃん。ルールの説明はちゃんと行いますよ。――あら？　丁度、参加者が全員この空間内に転移してきたようですね。では、全体音声に切り替えます』

それからパッタリと誘波の声が聞こえなくなったかと思えば、今度は天空の暗闇からキュイィィィンと耳障りなノイズが降ってきた。

俺たちは黙って闇空を見上げる。

そこに、鮮やかな十二単を纏った巨大な少女が出現した。

立体映像だ。毎度思うけど監査局の技術って凄えよ。まあ、今さら立体映像くらいじゃあ驚きは少ないけど。

「い、誘波殿は巨大化もできるのか！」

「違うからな、セレス。騙されるな」

俺がセレスに立体映像のなんたるかを知ったかで説明していると、巨大な誘波はニッコリと微笑み、マイクを口元に持っていく。

『あーあー、テステス。レイちゃんはヘンタイなり、レイちゃんはヘンタイなり』

「ははははは、なに不特定多数の監査官たちに俺の悪評を植えつけようとしてんのかなあのアマは？」

後であいつの大事な怪しい漫画本とかを焼却炉にでも持っていこうか。それが一番やつに効果的なダメージを与えられるからな。

『えーと、まずは皆さん、今年度の対抗戦に参加していただき誠にありがとうございます。今年は例年と異なり二人一組のペアで競って――面倒なので前置きは省略しますね』

ありがたい。偉い人の長話で無意味に参加者を疲れさせることもないだろう。

『いきなりこんな場所に転移して戸惑っている方もおられるでしょ

うが、安心してください。ここは学園の地下を魔術的に開拓した異空間です』

学園の地下。てことは、この上では普通に学園祭が行われてるってことだ。そんな場所で予選なんかして大丈夫なのか？　……いや待て、誘波は『異空間』と言った。つまり、ここでなにをやらかそうとも外には響かないってことか。

『なお、この空間にある風景やオブジェクトは全て〈現の幻想〉により作り出された幻です。と言っても、ご存じの通り質量があるので触れられますし、壊せます。木の実やキノコとかは食べちゃっても平気ですよ。栄養にはなりませんが』

いくら〈現の幻想〉が本物に限りなく近い幻を生む魔導具だとしても、幻を食うようなマヌケはいねえよ。

『それで、予選の内容ですが……』誘波は勿体ぶるように間を空け、『この広大な異空間のどこかに存在するたった二つしかないゴールを目指してもらいます。こちらをご覧ください』

誘波がそう言うと――ブゥン。彼女の両脇でスクリーンに映し出したような映像が流れ始めた。

左が、煌びやかな美少女たちによるどっかで見たコスプレ喫茶の映像。

右も、どっかで見た顔ばかりの男装した女子たちによる喫茶店の映像。

「な！？」

「は！？」

俺とセレスは同時に絶句した。これ二年Ｄ組を隠し撮りした映像じゃねえか！　しかもご丁寧に俺がホールを手伝ってた時のものだ。右もお姉さんたちに囲まれてちやほやされてるリーゼとか、下級生と思われる女子生徒から告白されてるセレスとか映ってるぞ。

『あっ、間違いました。これは私が個人的に楽しむためのものです』

てへっ。舌をちょろりと出して自分の頭を軽く小突く巨大誘波。
間違いとか言ってるが、あいつのことだ、わざと流したに違いない。
やばい、俺の殺意メーターが振り切れそうだ。
「あの映像は予選終わったら絶対に処分しねえとな」
「同感だ。私も手伝おう」
セレスとの結束が一段と固くなったところで、本当の映像が空中に表示される。どことも知れない場所で輝く青色の魔法陣――色は違うが、この空間へ来る時に使った転移魔法円の持続版だろうな。
『これがゴールです。全五十組のうち、先に辿り着いた八組が予選通過となります。また、今日中に八組にならなかった場合も打ち切りです。なので皆さん頑張ってくださいねぇ』
本線に出場できるのは八組か。全体が五十組となるとけっこう狭き門だ。下手すりゃなにもできずに負けるぞ。でも裏を返せば実力とは関係なしに運だけで予選を通過するかもしれない。迫間と四条にとっては願ったり叶ったりって感じか。
『私からゴールの場所についてのヒントは一切出しません。情報を得たければ、他の参加者を見つけて打ち破ることです。そうすれば、勝者には〈現の幻想〉がゴールまでの地図の断片を見せてくれます。敗者は強制的にログアウトしますので、一度負ければそこで終わりですよ。戦闘では基本的にどのような手段を用いても構いません。ただし、監査官同士の戦闘で『逃走』は敗北を意味します。その場合もやはり強制ログアウトです。そしてもしも相手を殺しちゃった場合も敗北です。退場した後に私からきっつーい罰を与えますのでそのつもりでいてくださいね』
要するに、殺さずに相手を下して地図の欠片を集めていき、今日中にゴールへと到着すればいいんだ。このどんだけ広いかわからないフィールドでな。……辛くね？
『最後に、この異空間には監査官の皆さん以外にも「エネミー」と呼ばれる敵役がいます。「エネミー」は倒してもいいですし、逃げても問題ありません。ですが殺すのだけは監査官相手と同様に控え

てくださいね』

エネミー？　まさか異獣でも捕まえて放ってるのか？　馬鹿な。異世界の生物は可能な限り返してやるが異界監査局のモットーだぞ。そんなことするとは思えないが……。

『では、予選を始めてください！』

とか考えてるうちに開始の宣言をされちまった。巨大誘波は霧消し、ゴールの映像も切れる。エネミーのことは一旦脇に置いておこう。遭遇してから考えればいいさ。

「とりあえず、最初は闇雲に歩くしかねえってことか」

俺が適当な方向に歩き出すと、セレスがいきなり手を掴んできた。綺麗なエメラルドグリーンの瞳でまっすぐに見詰められる。な、なんだ？

「零児、さっきのことなんだが」

「さっき？　え？　俺なんかやらかしたっけ？」

「そうじゃなくて、私が下級生に求愛されていたことでその……」

「なんだそれか。大丈夫だ。女の子から告白されたなんて言いふらしたりはしねえよ。ちゃんと断ったんだろ？」

「あ、ああ、もちろんだ！　私には同性と恋人になるような趣味は持ち合わせていないからな！　いないからな！　勘違いされると困る！」

セレスの主張からは必死さが窺えた。大事なのか二回も言ったしな。誰もセレスに同性愛者の気があるなんて思ってないんだけど……ん？

「いいか、零児。本当に勘違いするんじゃないぞ。私は――」

「セレス、わかったからその話はもう置いておこうな。それよりも……」

俺はセレスの言葉を手で遮って薄暗い森を睨む。繰り返されるレランジェの奇襲によって強化された俺の気配感知能力が、それらの接近を告げる。

「早速、敵チームのお出ましだ」

二章　監査官対抗戦・予選（3）（後書き）

次回、土曜日に更新はできると思います。たぶんきっと。
しかしあれですね。せめて推敲する時間が欲しい。

二章　監査官対抗戦・予選（4）

「見ろよレヴィア！　俺たちはなんてついてるんだ！」
「そうだねクライン！　こんなに早くゴールの情報を手に入れられるんだからね！」

茂みの奥から姿を現したそいつらは、二十代半ばくらいの男女のペアだった。ありえないくらい前方に跳ねた揉み上げに割れた顎をしているクラインと呼ばれた男と、エルフのように長く尖った耳に腰辺りまである新緑色の髪をしたレヴィアと呼ばれた女だ。

二人ともカウボーイハットを被り、ウェスタンシャツを着てスカーフ巻き、腰にはガンベルトといった格好をしている。ガンマンのペアルックって……上でやってる学園祭をなんかと勘違いしてないか？

「おうおう、そこのチーム。ここでいきなり俺たちに会ったが……会ったが、なんだっけ？」
「百年目だよ、クライン」
「そうそう、ここで俺たちに会ったが百年目！　大人しく降参するなら俺のラム・ダオが火を噴くぜ！」
「キャー♪　クラインかっくいい！」
……。

なんだこのバカップル？　どこから突っ込めばいいんだ？　百年目じゃなくて運の尽きだろ、とか。降参しても撃たれるってお前は悪魔か、とか。そもそもそのラム・ダオ――先端側の刀身の両脇に『目』に似た文様が食刻された鉈を巨大化させたような儀式用片刃剣――でどうやって火を噴くんだ、とか。なんでガンマンの格好してんのに剣なんだ、とか。

「この者たちが最初の相手というわけだな」
「そうだな。気をつけろよ、セレス。アホそうに見えても監査官だ」

「わかっている」
セレスは背中の聖剣を抜きながら力強く答えた。俺も右手に魔力を凝集させる。望月絵理香との戦闘で一度尽きた俺の魔力だが、期末試験が終わった後にリーゼから〈吸力〉したので今はほぼ万全だ。
〈魔武具生成〉――ハルベルト。
槍状の頭部に斧のような形をした広い刃があり、その反対側にも小さな鉤状の突起がついている長柄武器だ。この複雑な形状により、『斬撃』『打撃』『刺突』『引っかける』といった四つの機能を備えている。そんな多用途な使用法から、この武器は中世ヨーロッパの終わり頃に歩兵たちの間で全盛したとか。
「見た見たクライン！　あっちの男の子、武器作ったよ。すっごいね！」
「見たともレヴィア。それに女の子の方だって、あんなに長い剣を持ってすっごいぞ」
「本当だね！　私なら絶対持てないよ。でもでも、私たちの方がずっっっとすっごいってこと見せてあげようよ！」
「おうともさ！」
一メートルほどの長さをしたラム・ダオを無意味に振り回すクライン。その横でレヴィアが右手に引き金つきの弓――クロスボウを構える。それもただのクロスボウじゃない。連射や同射ができるように改造してやがる。それはそうと、だからなんで銃じゃないんだよ！　腰のガンベルトは飾りか？
互いが身構え、いつでも戦闘が開始できるようになった――その時だった。

バシィイイイイッ！！

鼓膜を突き破りそうな派手なスパーク音と共に、俺たちとバカップルとの間で青色の炎が弾けた。
「な、なんだ！？」

第三者か！？　と思って警戒する俺だったが、すぐにそうではないと知る。炎が空中で不自然に燃え広がり、【ＳＴＡＮＤ　ＵＰ】の文字を描いたからだ。

「は、ははは……洒落たマネをするじゃないか、誘波。これも〈現の幻想〉がやってんのか？　ゲームの世界にいるみたいだ」

見ると、「すっごいすっごい」とはしゃいでいるニセガンマン二人組の頭上にも別の文字が浮かんでいる。

【日本異界監査局第三支局代表　クライン・アーベント＆レヴィア・フリーゲン】

白くはっきりとした光でそう書かれていた。てことは俺らの方も……やっぱりな。紅い光でちゃんと自己紹介されている。

【日本異界監査局本局所属　白峰零児＆セレスティナ・ラハイアン・フェンサリル】

今年の手の込みようはいよいよもって半端なくなったな。

「クラインクライン！　あの子たち本局所属だって！」

「そうみたいだな、レヴィア。だけど、本局所属だからって強いとは限らないんだぞ。なあ、そうだろう？」

クラインはいわゆるどや顔で俺たちに同意を求めてきた。ムカつくな、あの顔。

「まあ、否定はしない」

淡白にそう返すと、セレスがムッと唇を尖らせて俺を睨んできた。

「零児、我々は馬鹿にされたのだぞ。なぜ言い返さないのだ？」

「本当だからだよ。支局にだって強いやつはたくさんいるんだ」

だからこそ、油断はできない。そんな支局からの代表者が何十組と集まってるんだ。一回一回の戦闘は本気で臨まないと痛い目を見る。

中央の火文字が一度消え、大迫力の爆発を起こして新たな文字――【ＢＡＴＴＬＥ　ＳＴＡＲＴ】を表示させた。
開戦だ！
「話は終わりだ。やるぞ、セレス！」
「了解した、零児！」
俺とセレスは頷きを交わして左右に散開した。コンビネーションの練習をしたわけでもなければ、この場で示し合わせたわけでもない。俺は幼馴染のあいつとずっとタッグを組んで戦っていたし、セレスも元の世界では軍人だったんだ。チーム戦には慣れている。
だが、相手のバカップルはこれっぽっちも怯んでいない。
「さあて、レヴィア。本局のやつらに俺たち第三支局の力ってもんを見せてやろうぜ！」
「そうだねクライン！　じゃあ、私から行っくよぅ！」
長く尖った耳をピコピコと動かし、レヴィアが天に向けてクロスボウの引き金を引いた。
ピュンと空に昇る一本の矢。それが周囲の木々よりも高い位置に達した時――パァン！
矢が破裂し、無数に飛び散った破片同士が光の線を連結させて巨大な魔法陣を描いた。
「蜂の巣だよ！　〈吹雪の矢（シュネーシュトゥルム）〉！」
レヴィアが溌剌と叫んだ刹那、魔法陣から氷でできた矢が射出されて雨あられと降り注ぐ。
俺たちだけに。
「くっ！」
俺はかわそうと横に飛んだが、無数の氷矢は地面に突き刺さる寸前で起動を直角に変え、改めて俺に狙いを定めやがった。
「ホーミング！？」
なんて厄介な技なんだ。だが、追尾されるとわかったなら避ける必要はない。
俺はハルベルトを振り回して襲い来る全ての氷矢を叩き砕いた。

反対側ではセレスも同じように超長剣で氷矢を捌いている。
「こんなの、四条の影ナイフの雨に比べたら大したことねえよ」
でも侮れない。四条の時もそうだったが、あれを連発されると防戦一方になる。俺は次を撃たれる前にレヴィアから昏倒させることにした。
数歩で距離を詰め、ハルベルトを振り被る。が――
――ガキィン！
金属音を響かせ、割り込んできたクラインのラム・ダオが俺のハルベルトの刃を受け止めた。
「おっと、このクライン様がレヴィアには指一本……指一本、なんだっけ？」
「折らせないだよ、クライン」
「そうだった。このクライン様がレヴィアには指一本折らせないぜ！」
「きゃう～♪　クラインかっくいい！」
アホだ。こいつら真正のアホだ。
別々の世界の？人？が好き合うことなんて珍しくないが（俺の両親がそうだし）、たぶんこの二人は周波数が合うんだろうね。アホ同士。
「本局の監査官だかなんだか知らないが、この俺の力を見てビビんなよ？」
俺と組み合いながらクラインが力む。すると次の瞬間、彼の両手両足の服が破け飛び、現れた毛深い人肌がトカゲ、いや恐竜のようなごつごつと無骨なフォルムへと変化する。
「――ッ！？」
途端に凄まじい力で俺は薙ぎ飛ばされた。異世界人だろうからどんなやつがいても不思議じゃないが、あの鋭い刺と緑色の鱗に覆われた腕と脚……こいつは口だけじゃない！
俺はすぐさま体勢を立て直し、余裕の笑みを浮かべるクラインとレヴィアを睨む。こいつらはアホだが、やはり油断ならない。

「クラインすっごーい！　だったら私も負けてられないね！」
レヴィアが再び天にクロスボウを向けるが――こちらにも相棒がいることを忘れちゃいけないな。
「――光よ」
俺の期待通り、セレスが聖剣から放った光弾でレヴィアのクロスボウを弾いた。
「あれ？　あれれ？」
空っぽになった両手を見詰めて戸惑うレヴィアに、セレスが一気に切迫する。そこを人外の手足をしたクラインがラム・ダオで牽制。儀式で捧げる生贄の動物を一刀両断するための重い刃がセレスの聖剣と火花を散らす。
「うぐ……なんて力だ……」
竜人に似た腕を持つクラインにセレスが押されている。俺はすかさず走った。レヴィアがクロスボウを取りに行っている今なら邪魔は入らない。
「セレス、退け！」
俺の掛け声にセレスは頷くこともなく瞬時に反応した。力の均衡が崩れてたたらを踏んだクライン。やつの間合いに一歩踏み込んだ俺のハルベルトが偃月を描く。
「おわっとっと！？」
器用にもラム・ダオで俺の一撃を防いだクラインは、その勢いにあえて乗って身軽なバック宙返りで後方に下がった。そこにクロスボウを回収したレヴィアが普通の矢を連射しながら横に並ぶ。俺も矢を避けつつセレスと合流した。
「零児、怪我はないか？」
「今んところはな。そっちは？」
「私も掠り傷一つ負ってなどいない」
安否を確認し合い、仕切り直しだ。
あいつらはバカップルだが支局の代表に選ばれるくらいだ。わかっていたことだが、そうそう簡単には倒されちゃくれない。

「あーっ！」
と突然叫んだクラインが、長く鋭く伸びた人差し指の爪で俺を指してきた。今度はどんな天然ボケをかます気だ、あいつ。なにが来ても絶対に突っ込まないからな。
「思い出した！　思い出したぞレヴィア！」
「え？　なにを思い出したの？　クライン？」
「あっちの男の方、去年の対抗戦の予選で呆気なく負けたやつだよ！」
なんだそのことか。そりゃまあ、覚えてるやつがいたところで不思議はないか。去年はあの後なにしてたっけな俺？　あー、確かオストリッチで敗戦祝いの一服をしてたな。
「えーっ！？　ということは、あの子って実は弱いの？」
「ああ、弱いとも、レヴィア。少なくとも俺たちよりは弱いさ。なぜならあいつを負かした相手に俺は勝ってるからだ」
「すっごーい！　クライン強ぉーい！」
「本当になんで本局にいるのかわからないくらい弱かったんだぜ！　ザコもザコ、超ザコだ！」
「私たちは超楽勝ってことだね！」
去年の対抗戦を知ってるやつらにはそう思われてんのか、俺。……こいつはいい、好都合だ。完全に嘗め切ってもらえれば油断も隙も生まれやす――
「貴様らぁあッ！！」
「「「！？」」」
本物の森なら鳥たちが一斉に飛び去ってしまいそうなセレスの怒声に、バカップルはもちろん俺も驚きで心臓が止まるかと思った。
え？　なに？　なんでセレスさんはブチ切れていらっしゃるんですか？
「貴様ら、これ以上私のパートナーを愚弄すると許さんぞ！」

「もしもし、セレスさん？　なにを仰ってるんですか？　別に言わせたいやつには言わせとけばこっちとしても都合が――」
「零児は黙っていろ！」
「はい」
強い怒りの意志を宿した翠眼で威圧され、俺は反射的にその場に正座しそうになった。こえぇ……。
セレスは改めて彼女の圧倒的な剣幕にビビっているバカップルに向き直る。
「零児は弱くなどない！　それは私が保証する！　確かに去年は弱かったかもしれない。その辺の子供に泣かされるほど弱かったかもしれない」
いやいや俺そんなに弱くなかったよ？　誰もそこまで言ってないよ？　てか今も昔も弱くないよ？　一年半前まで俺が『伊海の紅白殺戮ショー』の片割れとして恐れられてたことはセレスには言ったはずだよね……？
「だが、今ここにいる零児は強い！　他人を平気で馬鹿にする貴様らなどよりずっと！　去年までの弱い彼とは違う！　人は成長するんだ！」
うん、まあ、成長はしてると思うよ。去年よりは断然強くなってると思うよ俺も。セレスが俺のために怒ってくれてるのは嬉しいんだけど、でもね、だからといって去年の俺がカスみたいな言い方はやめてもらえないでしょうか。
「……」
「……」
バカップルは最初こそ震えていたが、今は落ち着きを取り戻してセレスの言葉を真摯に聞いているようだ。
そして――
「ごめんな、お嬢ちゃん。俺たち、いや全面的に俺が悪かった。俺もレヴィアのことを馬鹿にされると、馬鹿にしたやつをぶん殴りたくなる。本当に悪かった！」

「ごめんなさい！」
ペコリ、と。
意外にもバカップルが素直に謝ってきたので、俺もセレスも鳩が豆鉄砲を食らったように呆気に取られていた。あいつら、アホだけど案外いいやつなのかもしれん。
「あ、ああ、わかってくれたのならもういい。頭を上げてくれ」
セレスの許しが出たので、バカップルは同時に低頭を解除した。なんだかよくわからないが、俺も清々しい気分になっている。やっぱりアレか？　こちらの実力に嘘をついて戦うことが気持ちのいいもんじゃないからか？　俺の中にもそんな騎士道精神があったんだな。
「仕切り直しにしようぜ。お互い、手加減なしだ」
微笑んで戦闘再開を宣言する俺に、バカップルもいい笑顔を見せてそれぞれの武器を構え直す。
「おう、そうだそうだ。こんなところでもたもたしてられないからな！　レヴィア、やるぞ！」
「任せてクライン！」
レヴィアが斜め上空にクロスボウの矢を放った。同時に五本もだ。それらは最初と同じように空中で弾けて破片の連結魔法陣を描く。
「きっついの行くよ！　〈落雷の矢（ブリッツシュラーク）〉！」
中二病患者みたいなネーミングセンスの技名を叫んだ刹那、各魔法陣から巨大な雷撃の矢が飛び出し、俺とセレスにその照準を向けて迸る。たぶん、あれも追尾機能つきだ。
「零児、ここは私が」
セレスがその場で聖剣を瞬時に五度振り、五つの光の渦を飛ばす。あれはセレスの聖剣技の一つ――チェーンソーのごとく高速回転する斬撃の光渦だ。
五つの光の渦は雷矢とそれぞれ衝突し、激しい閃光を放って爆散、相殺させた。
爆風が吹き荒れ、土煙が巻き上がる。飛来する石礫が体を打って

痛いが、これくらいなら我慢できる。
視界を奪う土煙が晴れる前に、セレスは大地を蹴った。だが、俺は動かない。
「このクライン様には目眩ましなんて通じないんだぜ！」
クラインが土煙を突き破ってラム・ダオを振り下ろしてくることがわかっていたからだ。俺は最小限の動きで体をずらしてその一撃を避ける。
「残念、ハズレだ」
「おお！？」
間髪入れず振り下ろしたハルベルトの斧部分が、クラインのラム・ダオの背を打った。思いっ切り地面へと叩き落とす。
「よくもやったな、こいつ！」
クラインが一本取られたという顔をして俺に人外の手を伸ばしてくる。あの手に掴まれたら俺の頭なんて豆腐みたいに握り潰されるだろうね。それは嫌だから後ろに飛んでかわした。
「？　お嬢ちゃんの方がいない……てことは、レヴィア！」
セレスが不在なことに気がついたクラインが俺に背を向ける。武器も拾わずに。
彼女が心配なのはわかるが……
「余所見は禁物だとママに習わなかったのか？」
ちなみに、俺は習った。
「くそっ！？」
クラインが鋭い爪を立てて振り返る。
だが、遅い。
俺はその爪を掻いくぐってクラインの懐に飛び込むと、ハルベルトの柄尻で鳩尾を強く刺突した。
「がはっ！？」
くの字に折れ、その場に両膝をつくクライン。
「あのお嬢ちゃんの言う通りだった。強い、じゃないか。……レヴィア、ごめんな」

そのままクラインは白目を剥いて倒れ、動かなくなる。気絶したようだ。

土煙が風に流される。

すると、丁度セレスがレヴィアのクロスボウをラハイアンで弾き飛ばしたところだった。

「すまない。少し眠ってもらう」

「あう！？」

レヴィアが倒れたクラインに気づく前に小突いて意識を奪ったのは、セレスなりの優しさだろうね。

その後に現れた火文字が俺とセレスの勝利を告げると、気絶したバカップルはどこかへと転送された。

まずは俺たちの一勝だ。

二章　監査官対抗戦・予選（４）（後書き）

今回６０００文字を超えてしまった。
別に自分に制約なんてつけてないですけど、いつもは長くて５００文字だったのでｗ
今週の土日は忙しいです。
なので火曜の更新間に合うか激しく心配……いや、間に合わせます！

二章　監査官対抗戦・予選（5）

【ＷＩＮＮＥＲ！！　白峰零児＆セレスティナ・ラハイアン・フェンサリル】

実は触ると冷たいんじゃないかと思うほどの青色をした炎のエフェクトが、空中にその文字列を表示させた。本物の炎のように宙で揺らめく火文字は、この空間全てのオブジェクトを構築している魔導具――〈現の幻想〉が見せている幻だ。

そして、俺たちがこの文字を見るのは三度目だった。

「なんでボクの言った通りに動かなかったんだ！」

「うっせえ！　てめえがいちいちオレに指図するからやられたんだろうが！　耳障りなんだよ！　オレ一人だったら勝ってたのによ！」

「はん。ボクだって君がいない方が戦い易かったさ」

「てめえ、帰ったら覚えとけよ」

「君こそ。君のせいで負けたとしっかり報告させてもらうよ」

そこで仰向けに倒れ、お互いを罵倒し合いながら転送されていく男二人――第十八支局の代表チームだったか――を眺めつつ、俺は異界監査官の実状を改めて痛感していた。

チームワークがまるでなっちゃいないんだ。

確かに一人一人の力はかなりことやばかった。今の相手だって、一対一で戦って勝てるかと訊かれたら正直怪しい。勝ったとしても無事では済まないだろう。

でも、お互いがお互いを一欠片たりとも信頼してないから、それぞれが暴走して結局足を引っ張り合ってしまう。一つ前に戦ったチームなんて、こちらがトドメを刺す前に仲間割れして自滅したほどだ。最初に戦ったバカップルが一番強かったぞ。

なんにしてもこれで、個人個人で勝手に戦おうとするチームは運がよくなければ生き残れないことがわかったな。

「零児、次の地図が出たぞ」
呼ばれて俺はそちらに視線をやった。銀細工のように輝く銀髪ポニーテールをふさぁと風に靡かせるセレスが、空中に表示された長方形の枠を見詰めている。
枠の中には、これまで俺たちが通ってきたと思われる部分がマッピングされ、現在位置と、次に目指すべき方向が赤い矢印で示されている。これから先の未踏の地も細やかながら描かれているが、未だ全体の十分の一程度で他は真っ黒。この地図を全て埋めようと思ったら、最低でも十組は倒さないと無理だろう。
こうやって勝ち進んでいるチームには行き先を示されるんだ。だから、全く戦うことなくゴールに辿り着くやつは恐らく出てこないだろうな。そういったところも、上がちゃんと調整してるみたいだ。
「思うんだが、この空間って絶対に学園の地下以上に面積あるよな。二時間歩いてまだ森を抜けねえし」
ルール説明の時に見たゴールの風景は二箇所とも森じゃなかった。グランドキャニオンみたいな乾いた峡谷と、サバンナのような草原だったと俺は記憶している。
異空間だからと言えばそれで終わりだが、もしかして俺らは同じ場所をひたすら歩かされているだけかもしれない。景色を作ってるものが〈現の幻想〉による幻だから、気づかれないようにいくらでも変化できそうだし。
「……気が滅入る」
「だとしても歩くしかないだろう。それより見ろ、零児。この先に湖があるらしいぞ」
「湖？」
セレスが指差した地図の一点は青色の円形をしていた。川と思われる同じ色をした蛇行線がいくつも合流していることから、湖であることは確かなようだな。
「んじゃあ、そこで休憩にしようぜ。いい加減に疲れたし、喉もカラカラだ」

幻の水でも、喉を潤した気分にはなれるさ。

休憩所ってもんはどんなことをするにも必須だと思う。ぶっ通しで走らなきゃいけない長距離マラソンにだって給水所があるだろ？この対抗戦の予選も、適度な場所に休憩できるような環境が配置されていなけりゃおかしい。

で、今俺の目の前にある湖がそれだったらしい。視界内に収まる程度の小さな湖だが、岸辺に立てられた木製の看板にこう書かれてたんだ。

『ここの水は本物です。ご自由にお使いください』

水面は一体なんの光を反射しているのかキラキラと煌めき、水は透き通っていて冷たい。看板の横に紙コップが箱詰めされて積まれていることから、どうやら飲み水にもなるらしいな。助かったぜ。

「ほら、セレス」

俺は早速二人分の紙コップに水を汲んで片方をセレスに手渡す。

セレスは恭しくそれを受け取った。

「ありがとう。休める時にしっかり休むことは大切だな」

「そうだな。特にこういうサバイバル的な状況だとなおさらだ」

もう三回も監査官のチームを相手にしたんだ、疲れてないと言えば嘘になる。ゴールに近づくにつれて鉢合わせる敵チームも強力になっていくだろうし、これからは体力を計算に入れて慎重に進む必要がありそうだ。

コップ三杯の水分を補給し終えると、俺は「ぷはぁー」とビールを飲み干したサラリーマンみたいな息を吐いた。なんか無性に『生き返る』って言葉を口にしたい気分だ。

「もう少しここで休んでいこうぜ」

「あ、ああ、そ、それがいいな」

――ん？

どこか挙動不審な返事に振り向くと、セレスはなにやらしきりに

袖の臭いを嗅いだり、汚れを気にしたりしていた。
「なにやってんだ、セレス？」
「そ、その、ずいぶんと汗を掻いたし、汚れたなと思って」
そういえば、あまり気にしてなかったが俺も汗だくでボロボロだな。強い敵が徘徊するダンジョンを攻略してるようなもんだから当然だ。……一度気にしたら制服のべたつきが激しく気持ち悪い。替えがあったら着替えたい。武装してるセレスなんか特にそうだろうね。
「零児、私は汗臭くないか？」
「そうか？　気にならないけど」
「う、気にならないってことは、やはり少しは臭うのだな……」
あれ？　なんでそんなマイナス思考なんだ？　全然臭くなんてないのに。寧ろいい匂いだと思うが……それを口にしたらヘンタイ扱いされそうなんで黙ってるけど。
「こんな時にどうかと思うのだが、少々、水浴びがしたい。零児、悪いんだが――」
「み、水浴び！？　わ、わかった。俺はその辺に隠れてじゃなくて見えないところで敵が来ないか見張りをしてるよ」
「――気絶していてもらえないか？」
チャキ。
セレスが、聖剣の柄に手をかけた。
「俺ってそんなに信用ないの！？」
心外だ！　俺は紳士なのに！　ヘンタイという名はついてない紳士なのに！　そりゃあセレスの裸に興味がないと言えば嘘になるゲフンゲフン！　俺は紳士。俺は紳士。
「絶対に覗くんじゃないぞ。私はこんなことで予選敗退になるのは御免だ」
「つまり覗いたら俺が死ぬんですね」
デュエットがソロになって反則負けなんですね。うん、落ち着こう俺。言ってる意味がわかりません。

俺はそそくさと森の中へ逆戻りし、適当な木の陰で凭れ座る。直後に耳に届く、ガシャガシャという武装を解除する音。流石に衣擦れの音までは聞こえてこない、そんな距離。

……。

……。

……。

やばい、そわそわする。

なにこの状況？　どうしてこうなった？

まだ予選は終わってないんだぞ。今水浴びをしたところで、どうせすぐに汚れてしまうことはセレスもわかってるはずなのに……これはたぶん、男にはわからんタイプのアレだろうね。

バシャバシャ、と水が跳ねる音。

セレス、泳いでるのか？　――いや、いつぞやにカナヅチだと言っていたからそれはない――って危ない！　意識がそっちに持って行かれる！　よし、こういう時は九九を詠唱して魔神が召喚できるかチャレンジだ。

「いんいちがいち、いんにがに……」

・

・

・

「はちいちがはち、はちにじゅうろく……」

三ループ目の八の段に突入。そろそろ魔神出てくんじゃねコレ？

と、その時――

ビュオォオオオオオオオオオン！！

雄叫びのような唸りを発し、気を抜くと飛ばされそうな突風が空間全体に浸透する勢いで吹き荒れた。巻き上がる砂や石に俺は思わず目を閉じ、腕で顔を庇う。

敵襲か！？　くそっ、セレスが無装備の今はマズイぞ！

というか、セレスは大丈夫なのか？　心配になった俺は強風の中を懸命に立ち上がる。
瞬間――ピタリ、と嘘だったかのように風が止んだ。
「え？」
目を開けてみて俺は絶句した。
深く薄暗い森の中だった周囲の景色が、小麦畑のような黄金色の原っぱに変わっていたからだ。腰の辺りまで背のある小麦だかススキだかよくわからない植物が、さらさらと微風にその穂を揺らしている。
「どういうことだ？　まさか、どっかに転移したのか？」
戸惑いながら周囲を見渡す俺は、十数メートルほど離れた場所に立つセレスと目があった。
――全裸の。
雪のような白い肌にしなやかな曲線美。出るところは出て、引っ込んでいるところは引っ込んだモデル体型の彼女は、いつもはポニーテールに結った銀髪を下ろし、腕をクロスさせるようにして女子特有の柔らかな膨らみを隠していブハッ!?
「あ、あわ、あわわ……」
かぁあああああああああああああっ。
タコが茹でられたように白かった全身を真っ赤に染め上げるセレス。そのまま涙ぐんだ表情で落ちていた聖剣を拾い、幽鬼のようなゆらりとした動きで俺との距離を詰めてくる。
「セレス、ちょっと待て！　不可抗力！　これどう考えても不可抗力！」
「わ、わわわ」
「わわわ？」
「忘れろぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッッ!?」
裂帛の絶叫と共に、ゴチィイン!!　と俺は脳天に聖剣をぶち込まれて昏倒した。聖剣が鞘に入ってなければ死んでたぞ。

『あー、言い忘れていましたが、この空間内の風景は一定時間ごとに変動する設定になっています。なので最初に見せたゴールの周囲の景色を頼りに探しても無駄ですよぅ』

天から降ってくるおっとり声が沈みゆく意識の中に届く。

最初に、言って……。

二章　監査官対抗戦・予選（5）（後書き）

唐突ですが、久々に人気投票の中間報告でもしたいと思います（久々、だよね？）

現在合計で23票入っておりまして、このような状態です←

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

1位　7票
セレスティナ・ラハイアン・フェンサリル

2位　5票
白峰零児

3位　4票
レランジェ

4位　2票
スヴェン・ベルティル
稲葉レト

6位　1票
リーゼロッテ・ヴァレファール

法界院誘波
マルファ

以下　０票

桜居謙斗
迫間漣
四条瑠美奈
鷹羽畔彰
望月絵理香

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

……。

二巻キャラはほぼ全滅ですね（笑）
そしてセレス、君がもうヒロインだ。
三巻完結時点で第一回人気投票の最終結果発表をしようと思うのですが、三巻がこんなだから大目に見積もっても４位以下に勝ち目はないですね。どうしたファーストヒロイン？

デスクトップにパソを変えたのが運の尽き、誤ってコンセントを引っこ抜いてしまって今話と次話のデータがぶっ飛んだのですが、なんとか今回の分は修復しました。

そしてお知らせなのですが、夙は現在『原作交換会』なる企画に参加しておりまして、その作品の締切が一応今月末だと通知を受けました。なので申し訳ないのですが、今月はシャッフルワールド！！の更新を週一（土曜）にさせていただきたいと思います。本当に申し訳ございません。

二章　監査官対抗戦・予選（6）

なんだろう？
柔らかくて、優しくて、温かい。
そんな心地よい感覚が頭の裏から伝わってくる。
「うっ……」
「零児、気がついたか」
俺の視界いっぱいにセレスの安堵した表情が映った。学園の制服の上から武装した戦闘モードだ。……ああ、そうか。俺はセレスと監査官対抗戦に出てたんだっけ。
「あれ？　俺どうして寝てたんだ？」
「そ、それはアレだ。この空間はどうやら定期的に地形というか、風景が変わるらしいのだ。零児はその変動時に、なんというか、頭を打ってだな」
わたわたと慌てたように手振り素振りで俺の現状を説明するセレス。あー、誘波がそういうことを追加で言ってたような言ってなかったような……なんだか記憶が曖昧だな。頭打ったせいか？
「なんか俺、意識を失う直前に大変なものを見てしまったような気が――」
「気のせいだ！　絶対に気のせいだ！　だから気にするな！」
「え？　どうしてそこまで強く否定なさるんですかセレスさん？」
若干顔も赤いぞ。熱中症になりかけてなきゃいいが。
「とにかく、零児はもう少しそのまま横になっていた方がいい」
少し恥ずかしそうに、セレスは俺から視線を逸らした。
「！」
そこで俺は気づいた。セレスの顔が上に見えるってことは、頭の後ろにあたってる人肌のやーらかい物体はまさか――膝的な枕！？
「わっごめん！　すぐ退くから！」
「いいからそのまま寝ていろ！」

押し返された。
ありえんくらい夢のシチュエーションなんじゃねえかこれ？　こんなとこをクラスの誰かに見られたら戦争が勃発するぞ。俺ＶＳ世界で。
だが、ここは監査官対抗戦の予選会場。クラスのやつと遭遇するとしたらリーゼだけだ。それはそれで別の意味の頂上決戦に発展しそうな気がするけど。
天は相も変わらず吸い込まれそうな真っ暗闇で不気味なのに、後頭部から伝わる柔らかい感触はなんとも言えないほど心地がいい。周囲は森から景色が変わった黄金色の原っぱ。目の前には幻じゃないから変わらなかった小さな湖。天国と地獄の境目かここは？
「……」
「……」
き、気まずい！　会話が途切れると恥ずかしさしか残らねえぞ！
「その、零児、少し話しておきたいことがある」
と、沈黙に堪え切れなくなったのかセレスが口火を切ってきた。しかし視線は俺じゃなく前方の湖に向けられている。その瞳が、スカイテラスで一瞬見たのと同じ憂いの色を帯びていることに俺は気づいた。……ただの世間話ってわけではなさそうだ。
俺は静かに深呼吸して心を落ち着かせ、膝枕されていることを一旦頭の外に放り投げた。
「賞品の剣の話とか？」
「いや、それとはまた別件だ」
別件？　あの剣以外でセレスがこれほど真剣でどこか寂しそうな目をすることなんてあったっけ？
「言おうか言うまいか迷っていたのだが、この際だから言うことにした」
セレスは覚悟を決めるように一泊の間を空け、
「もうすぐ、私は自分の世界――ラ・フェルデに帰ることになるか

もしれない」

重大な内容を言の葉として紡いだ。

「……」

……俺は馬鹿か？

あったじゃないか。セレスがそんな顔をする話が。

普段あまり彼女の方から言わないから、失念しかけていた。

セレスの一番の願いは帰郷だ。嬉しいはずなのに、なんでそんな悲しげな顔してるんだよ。

「夢を見たんだ」

俺が黙っていると、セレスの方から続きを語り始めた。

「はっきりとは覚えていないが、陛下が私の夢に現れて、迎えに来ると仰られた」

「えっと、夢オチ？」

「真面目に聞いてくれ」

俺は額に軽くチョップを食らった。軽くと言っても金属製のガントレットでやられたから普通に痛い。

「だけどな、夢に現れた王様が迎えに来るって言っただけで、現実でそうなるとは思えねえよ。正夢や予知夢って言葉もあるが、相手は次元の向こうなんだぞ。どうやって迎えに来るって言うんだ？」

まさかこの世界に繋がる『次元の門』の出現を予測できるとも考えられんし。

「零児には信じられないかもしれないが、陛下は次元を渡る術を持っておられるのだ」

「なに？」

次元を渡る術、だと？　それって……

「ラ・フェルデもこの世界と同じで、異世界との繋がりが強いのだ。だからこそ、私はあの時、自分が異世界に飛ばされたのだとすぐに悟れた。？魔帝？と決闘したのも、陛下と同じ力を持つ悪意ある者が私を招いたのだと思ったからだ」

割と常識人なセレスがすぐにこの世界に適応していった理由はそういうことだったのか。いや、そんなことよりも――

「その陛下ってやつは、本当に？次元渡り？ができるんだな？」

「私は何度も次元を渡られる陛下のお姿を拝見している」

「そうか、？次元渡り？の能力者がいるなら納得だ」

「零児、こんな突拍子もない話を信じるのか？」

「ん？　ああ、昔ちょっといろいろあってな。そういう能力者がいることは知ってんだ」

俺ははぐらかすように曖昧に答えた。？次元渡り？は俺にとっても、相棒だったあいつにとっても思うところがあるんだよ。

幸いセレスは追及してこなかった。こちらの想いや事情を汲み取って、空気を読んでくれたんだ。

「とにかく、近いうちに陛下がこの世界に来られるはずだ。もしかしたら別れの挨拶もできぬまま私は国に帰ることになるかもしれない。だから、今、零児にこのことを伝えておきたかった」

「そっか……寂しくなるな」

この監査官対抗戦が、セレスが異界監査官でいられる最後の時間なのだろう。剣のこともあるが、セレスは『今』の一瞬一瞬を大切な思い出として心に刻んでおきたいんだ。きっと。

だとしたら、俺が腑抜けてちゃいけない。この対抗戦、絶対に勝ち上がってやる。

俺は上体を起こす。今度ばかりはセレスも押し戻したりはしなかった。

「でもよかったな、セレス。帰れる可能性が生まれて」

「あ、ああ……そうだな」

「俺、手伝ってやるって言っときながらなにもできなかったな」

「そ、そんなことはない！　私は零児と出会えてよかったと思っている。……あっ、無論、他の皆もだぞ！」

「リーゼもか？」

「？魔帝？は別だ」

そこはやっぱり嫌ってるんだな。時々仲よさそうに見えるんだけど、あれは俺の目の錯覚なんだろうか。

「おねえさまが、なんだってユゥ？」

「「――ッ！？」」

闘気を孕んだ幼い声。直後、黄金色の草叢の中から二本のピンク色をした触手が飛び出した。

「アレは」

「零児、避けるんだ！」

俺とセレスは同時に左右に転がってそれを避ける。さっきまで俺たちがいた場所にピンク色の触手が深々と突き刺さった。

チッ。俺は唐突な敵の登場に舌打ちする。まったく、空気を読み過ぎだぜ。

セレスと真面目な会話をしていたせいか、それとも膝枕で気が動転していたせいか、はたまた意識が完全覚醒してなかったせいか、とにかく俺は敵の接近に気づかなかった。腑抜けてる場合じゃないって決めたばかりなのに、なんて様だ。

あのピンク色の物体に、独特の語尾をつけた喋り方をするやつを俺は一人しか知らない。

「マルファだな」

「よくわかったユゥ」

ピンク色の触手が黄金色の草叢に引っ込む。そこから、ピンクブロンドの長いツインテールをした十歳くらいの女の子が立ち上がった。暖色系のワンピースに、紫に近い桃色のくりっとした大きな瞳をしている。彼女はセレスとほぼ同時期にこの世界へと迷い込んできた異世界人で、こんな愛らしい姿をしているが、正体は？魔帝？をも恐怖させるスライムという摩訶不思議な存在なんだ。

「お前、準監査官として教習中のはずだろ？　なんで対抗戦の予選会場にいるんだよ？」

見習いはいくら実力があっても参加できないのに。
それに、マルファは一人だ。相方は隠れてるのかもしれんが、少なくとも他に気配は感じない。
マルファは膨らんでるのかどうかもわからない胸を偉そうに張り、言う。

「マルファは、『えねみー』とかいう役なんだユゥ」

二章　監査官対抗戦・予選（６）（後書き）

めっちゃ久々の登場ですね、あのスライム。
彼女の一人称は『マルファ』と『わたし』の二つを使い分けてるのですが、統一した方がよさそうですね。ちょっと二巻直してきます！

次回の更新は８月２０日（土）です。
原作交換会の方は順調だと思いますが、出だしが既に遅れてますから中間までしか書けそうにないです＾＾；

二章　監査官対抗戦・予選（7）

【野生のマルファが現れた】

空中に表示された炎のエフェクトによる文字が『エネミー』との遭遇を告げる。しかしなんだこの文？　突っ込んでほしいのか？

「お前が『エネミー』だって？」

「そうだと言ったユゥ。お前たちを狩るのがマルファの役目ユゥ」

エネミー。

それはゴールを目指す監査官たちの妨害を行うために解き放たれた存在だ。

最初は捕獲しておいた異獣かなんかと考えたりもしたが、やはり異界監査局は理念に反するような真似はしなかったみたいだな。

『エネミー』は、対抗戦の参加資格のない準監査官たちだ。

「マルファはもう三組もチームを撃退したユゥ」

自慢げに三本の指を立てるマルファ。準監査官だからと言って、その実力が正規監査官に劣っているわけじゃないんだ。目の前にいるマルファがいい例だろう。このスライムはその特性上、打撃・斬撃・電撃・衝撃がほぼ無効化される。有効打となり得る攻撃が非常に限られる上に、向こうは変幻自在に体を変質させて襲ってくるもんだから厄介極まりない。１＋１がマイナスになるチームが多いとはいえ、現に三組も狩られたことからもわかるだろう。

ただ、実力はあっても正規監査官として送り出すには問題がある。準監査官ってのはそういったやつらなんだよ。じゃあなんで戦闘鬼ことグレアムが正規監査官なのかと言うと、あいつはあれでも自分をコントロールできるからだ。俺としてはリーゼが正規というのが

大いなる謎なんだけど。
「お前たちで四組目だユゥ。大人しく倒されろユゥ」
マルファのツインテールが一度半透明な粘体に戻って幾本にも別れ、その全てが先端の鋭い槍と化して俺に殺到する。俺はそれらをかわしたり、なんとか生成できた日本刀で斬り落としたりして防ぐ。
だがこれは単調な同射攻撃じゃない。マルファの意思で動いているから変化球がある。全てを捌き切れず、俺はいくつもの切り傷を作りながらセレスの下へと駆けた。
「セレス！」
「任せておけ、零児。私の聖剣でアレを焼き払えばいいのだな」
「逃げるぞ！」
「は？」
身の丈以上の長さを誇る聖剣ラハイアンを構えたセレスの腕を取り、俺は方角なんて考慮せず一目散に遁走した。
「零児、なぜ逃げる！」
「あいつと戦り合ってる暇なんてねえよ！」
あのスライム相手だと俺は限りなく無力だ。打撃はもちろん効かないし、さっきみたく斬ったとしてもすぐに再生するから時間稼ぎにもならない。セレス一人がマルファと戦ったとして、すぐに決着がつくとも思えない。だとすれば残る選択肢は一つ。『逃げる』コマンドを使うしかないだろう。『エネミー』からは逃げてもいいルールだしな。

【レイちゃんチームは逃げ出した】

「これ絶対手動で操作してるだろ！？」
「逃がさないユゥ！」
マルファがアーチ状に伸ばしたピンクの触手を俺たちの手前に突き刺した。それからその短縮機能で本体の方を持ち上げ、俺たちの頭上を越え、進行方向に着地する。くぅ、どこまでも質量保存の法

則を無視しやがって……。

【うまく逃げられなかった】

「鬱陶しいなこれ！？」

おかしい、予選が始まってからというもの主催者にしか殺意が沸かない……。

「さあ、観念するユゥ」

マルファが勝ち誇った顔でじりじりと迫る。しかしこいつ、なんでこんなにやる気満々なんだ？

「零児、やはりここは私が」

「いや、ちょっと待ってくれ」

超長剣に光を灯すセレスに待ったをかけ、俺はマルファに問いかける。

「お前、なんでそんなに熱心に俺らを狙うんだよ？」

「たくさん倒したらおねえさまを一日好きにしていいっていってイザナミが言ったからユゥ」

それは絶対に本人の関与していないところで交わされた契約だ。

だがこれでわかったな。マルファたち準監査官が無償で敵役を引き受けるわけがないんだ。俺ら参加者に賞品があるように、働きに見合った対価を支払われることになってるんだ。

そんでもってマルファはわかり易いし、扱い易い。

「なあ、マルファ、今度リーゼがいる時に俺んちに遊びに来てもいいぞ」

リーゼには悪いが、勝手にエサに使わせてもらうぜ。俺はどうしてもこの場を乗り切らねばならんのだ。

「ふん、そんなこと言っても見逃してなんかやらないユゥ」

ですよね。俺は端から説得できるかどうかは五分五分だと思ってる。もしも無理だった場合はそうだな……俺たちの背後から息を顰めて近づいて来てるチームにでも押しつけるとするか。

「一日と言わず、好きな時に好きなだけ来てもいいぞ」
「ユゥ？　ホントにいいのかユゥ？」
お？　よし、揺らいだ。構えられていたツインテールがだらりと垂れる。
ここでトドメだ。
「もちろん、リーゼと好きなだけ遊んでもいいぞ」
倫理が許す範囲内でな。
まあ、どうせまだしばらくは監査局の教育機関から抜け出せないはずだ。それにマルファが正規監査官として認められるようになる頃には、リーゼとの過剰なスキンシップも和らぐと思うし。
と――ガサッ。
遠くから、草叢を踏みつける音がした。

「れ、れれれレージ！　な、ななんてこと言ったのよ！」

震え切った怒号に振り向くと、紅い瞳を涙で潤ませた金髪のちっこい美少女が、無表情なゴスロリメイドを従えて俺を指差していた。
「うわっ！　り、リーゼ……お前だったのかよ」
どことなく知ってる気配だと思ったらどうりで……。
「マスター、これではこっそり背後から近づいて叩き潰す作戦が台無し不安定です」
そんなこと考えてたのかよ。？魔帝？のくせにやることがせこくないか？　どうせ常日頃と俺を奇襲してくるどっかの暴力暴言メイドの入れ知恵だろうけど。
「そんなこともうどうだっていいわ！　みんな燃やしてやるんだから！」
「では、レランジェがゴミ虫様の首をもぎ取ってもよろしいでしょうか？」
「殺したら失格なのわかってるよね！？」
「ゴミ虫様を抹殺安定できるのでしたら、レランジェは喜んで自ら

を犠牲にします」
「え？　なに自分だけが失格になるって思ってんの？」
臨戦態勢を取るリーゼチームだが、まだ接触判定の範囲外なのか【ＢＡＴＴＬＥ　ＳＴＡＲＴ】の火文字は発生していない。
「……？魔帝？リーゼロッテ」
セレスは明確な敵意を表して聖剣を持ち上げている。俺はというと、どうやってあのメイドロボを『破壊』以外の方法で排除するかということと、実現しないだろう提案とはいえリーゼを売ってしまったことに対する誰もが納得できる言い訳を思案中だった。……うむ、どっちも思いつかん。
「おねえさま！　おねえさまの方からマルファに会いに来てくれるなんて感激ユゥ！」
都合よく解釈する思考回路を持ったマルファが、ツインテを嬉しそうにうねうねさせつつリーゼに向かって跳躍した。
「ひっ！？」
頬を引き攣らせたリーゼは反射的に？魔帝？の黒炎を掌に宿して放つ。鉄すら溶かしそうな灼熱の黒炎弾に――マルファは自分から飛び込んだ。
へ？
なにやってんの、あのスライム？
火達磨になって撃ち落とされるマルファ。リーゼの火属性攻撃は有効打となり得るが、あのスライムはもっとやばい範囲攻撃術を受けても焼滅しなかった。このくらいでは死なないだろう。
案の定、むっくと起き上がったマルファは――とろけるような至福の表情をしていた。
「これだユゥ！　この感覚が最高に気持ちいいんだユゥ！」
大変だ……ドＭがいる。
俺もセレスもドン引きだった。

「おねえさま！　もっと、もっとマルファを燃やしてほしいユゥ！」
ゆらりくらりとリーゼに這い寄るマルファのツインテールが、スライムの触手となって催促するかのごとくリーゼに伸びる。
対するリーゼは――
「ぬ、ぬるぬる……ひやぁあああああああああああああああああああッ！？」
顔を真っ青にして絶叫。そのまま飛び退くように身を翻して全力疾走。
「ああっ！　なんで逃げるんだユゥ？　おねえさま！　おねえさまぁあっ！」
当然のように追いかけるマルファに、リーゼは？魔帝？という肩書きには似合わない女の子らしい悲鳴を上げ続けるのだった。
「チッ。レランジェはマスターをお助けしなければなりません。命拾い安定ですね」
忌々しい舌打ちを残してレランジェも颯爽と駆け去った。リーゼたちの敵前逃亡ではあるが、どうやら判定的には『エネミー』からの逃走となったようだ。
「零児！」
一難去ったことで安堵の息を漏らしていると、セレスが切羽詰まった口調で俺を呼んだ。どうしたんだ？　と思いそちらを向くと、セレスは空を見上げて瞠目していた。
俺も倣って天を仰ぐと――
「――なッ！？」
さっきまで純黒の闇だけが展開していた天空に、はっきりとした薄黄色の光が爛々と輝いていた。

【現在の予選通過チーム数：4】

という文字の形で。
「おいおい嘘だろ？　もう枠の半数が埋まっちまったのかよ」

これは相当にまずくないか？　俺たちはまだゴールに辿り着く目途すら立ってないんだ。

「やはり、あの数字はそういう意味なのだな」

セレスが深刻に呟く。日本語は読めなくとも、わかる数字だけで事態の緊急さを悟ってくれたようだ。

こいつは、マジでもたもたしてらんねえぞ。

二章　監査官対抗戦・予選（7）（後書き）

あれ？　予定ではそろそろ二章終わってる頃なのにまだ終わらない……？

あと三話以内でどうにか終わらしたいものですね。

次回の更新は8月27日（土）です。

週一更新も次週で終わり……になるんだろうか。激しく不安；

で、結論から言うと。

マルファの追撃を逃れてから約二時間、俺たちは幾度かの戦闘を重ねてズタボロになりながらもようやくゴールを発見したんだ。

フィールドの景色変更のタイミングがよかった。今、俺たちは真っ暗闇の中にいる。障害物もなにもない深海の底のような闇が全方向に広がり、光源と言えば天空に表示された光文字しかない。

突然こんな暗闇になったもんだから俺は内心酷く焦った。セレスの聖剣で照らしてもらってもよかったが、そうすると敵チームや『エネミー』に俺らの居場所を教えるようなもんだしな。おかげさまで目がある程度慣れてから進むというデジャブを体験することとなったわけだ。

もっとも、この暗闇のおかげでゴールとなる転移魔法陣の光を発見することができたんだけどな。ラッキーとしか言いようがない。

転移魔法陣の青色の光まで目測で十メートルちょっとってところか。

俺は上空を見上げる。

【現在の予選通過チーム数：6】

「なんとか間に合ったな」

「そのようだな。一時はどうなるかと思ったが」

隣からセレスのほっとした声が届いた。上の光文字のおかげで彼女の姿はぼんやりと認識できる。暗闇での戦闘は経験があるとはいえ、こんな時に影魔導師のような夜目の利く敵とエンカウントするのはマズイ。さっさとゴールしてしまおう。

俺とセレスは目配せを交わすと、一歩、また一歩と慎重にゴールに向けて歩を進めた。

「零児、暗闇だからといって少し慎重過ぎではないか？」
「そうでもないぞ。安心したところになにかしらのトラップを仕掛けてくるようなやつが主催者だからな。注意し過ぎて損することはな――」
俺の爪先がなにかの障害物を蹴った。
段差？　いやそれにしては感触が生々しかったぞ。
まさか――
「セレス、聖剣で辺りを照らしてくれ」
「いいのか？」
「ゴールは目の前だ。敵に見つかっても駆け込める」
「了解した」
セレスが聖剣ラハイアンを鞘から抜く気配が伝わってくる。数秒後、目を灼かない程度に照度を抑えられた白光が周囲の闇を払い除けた。
「――なっ！？」
「こ、これは……」
足下に転がっていた物体は、黒いロングコートを羽織った俺の見知った人間だった。
「迫間！？　四条！？」
二人とも意識を失っているのか、ピクリとも動かない。コートも体も襤褸のようにボロボロだ。恐らくゴール目前にして戦闘があり、敗れたのだろう。まだ強制退場の転移が始まっていないことから、二人がやられたのはついさっきということがわかる。
ついさっき――つまり迫間と四条は、影魔導師の力が最大に増すこの暗闇の中で敗北したってことだ。
「……ぐっ」
迫間が呻いた。瞼が痙攣し、ゆっくりと見開かれる。
「……白峰、か？」
「迫間、お前らなんて様だよ」
俺は迫間の背中を支えて上体を起こすのを手伝った。セレスが揺

り動かしている四条は目覚める気配がない。
「はは……影魔導師のフィールドで負けたなんて……格好悪いな。頼むから……師匠にはチクらないでくれ……よ」
師匠とは影魔導師連盟の幹部――鷹羽畔彰のことだ。
「気をつけろ、白峰。あのチームは……面倒臭いことに、ただもんじゃない」
「監査官の時点でただもんとはかけ離れちゃいるが、お前らがやられるほどの相手ってどんなだよ？」
迫間と四条は個人の実力はもちろん、チームワークも抜群で互いの相性もいい。しかも暗闇という最高の条件が整っていた場で勝てるとしたら、同じ影魔導師か誘波のような化け物くらいなもんだろう。
「あいつらは――」
いいかけたところで、迫間は光の粒子となって天に昇った。まるで成仏してしまったかのようだが、強制転移でこの空間から退場させられたんだ。見ると、四条も同じく消えていた。
「セレス、さっさとゴールするぞ」
「ああ、漣殿と瑠美奈殿の仇、私たちで取ろう」
「試合で当たることになれば、だけどな」
対抗戦の本選は毎年決まって異界監査局がどっかの僻地に所有している大闘技場で行われる。今回の予選は物凄く力を入れていたけど、本選に関しては今年も変わらんだろうね。例年通りならスタンダードなトーナメント形式になるはずだ。
「これはゲームみたいなもんだし、仇っつってもガチになることはないって」
そう言う俺だったが、心の奥からなにか得体の知れない嫌な予感が膨れ上がってきていた。迫間たちをやったのがどこのどいつらかはまだわからんが、そのチームを特定して警戒しておいた方がいいかもしれない。

転移魔法陣で移動した先は、大学部の敷地内にある一号館――異界監査局本局のことだ――の一室だった。

染み一つない白い壁で囲まれ、ポツンと出入口となるドアがあるだけで他になにもない寂しい部屋だ。強いて他にあるものを述べるとすれば、俺たちがくぐってきた転移魔法陣と、ここがどこなのかを示した張り紙と――

――先にゴールした六組の監査官チームだけだ。

「……」

俺はざっと他のチームを見回した。いるいる。見た目からしてやばそうなのが。

胸元に薔薇の紋章が入った中世の貴族風な衣装と真紅のマントを纏った優男に、カールスタイルの金髪に豪奢で毒々しい紫色をしたドレスを着た三つ目の美女。男の方は波打つ長剣――フランベルジェを佩いて悠然と屹立しており、女の方は両目を閉じて額にある第三の目だけで他のチームを観察している。

漆黒の西洋鎧でガチガチに身を固めた仮面の騎士と、一反木綿でも巻きついてるんじゃないかと思ってしまいそうな白い長布のみで裸体を隠す白髪の少女。仮面の騎士は長身で、少女は割と小柄。身に纏ってるものからしてもあべこべ過ぎるが、どちらも威風堂々といった佇まいだ。

深いスリットの入った赤いチャイナドレスを着た双子の少女。艶やかな黒髪を三つ編みのポニーテールとツインテールに結って互いを区別できるようにしているようだ。頭にちょこんと乗った狐耳がピコピコ動いて周囲の様子を探っている。

グレアムと稲葉レト。

闘牛のようなぶっとい角を頭に生やした六本腕の巨漢と、マジシャンっぽい格好の包帯で右目以外を隠した恐らくは男。六本腕の巨漢は仏像のごとく不動の姿勢を崩さず、包帯マジシャンはシルクハットからハト――ではなく煙管を取り出して吹かし始めた。

全長五メートルはあろうどこぞの機動戦士を彷彿とさせるようなロボットと、くすんだ赤毛を雑に後ろで縛っている黒いロングコートを羽織った目つきの鋭い女。天井すれすれのロボットの胸部に見えるコックピットには驚くべきことに赤ん坊が乗っており、その足下に立つ赤毛の女は血色の刃をした大鎌を軽々と肩に担いでいる。

一同を見渡して、セレスが唸った。

「空気が張り詰めている。皆、相当な強者なのだろう」

「そうだな」

確かに、どいつもこいつもとんでもねえ気迫を放ってやがる。ついでに言えば、ほとんどのやつらが初めて見る顔だ。チーム戦だからこそ今回の大会で生き残れた猛者ってとこだな。

中でも俺が目をつけたのは、赤毛の女だ。あのコートからして、やつは恐らく影魔導師だろう。迫間と四条を倒したやつかもしれん。気をつけねえと。

「俺的に、今、軽くスルーされた気がするんだが？」

マロンクリームのような色をした髪で右目を隠した作業着姿の青年が、とても心外そうな顔をして歩み寄ってきた。

グレアム・ザトペック。

やはりこいつは予選通過してたか。しかもほぼ無傷ってどういうことだよ？

「お前、稲葉と組んでたのか」

「ああ、あいつ的にも丁度相手がいなかったらしいからよ。しゃあねェから俺様の相棒にしてやったんだ」

「ちょ、なに言っとるんやグレアム先輩。ウチは別に出る気なんてなかったんやで。桜居先輩がクラスの方で忙しいから、ウチが異界研の方を任されとったのに。まあ、撮った映像を上映するだけやしお客さんなんて全然来てへんかったけど」

赤いジャージ姿のボーイッシュな少女――稲葉レトが疲れたように嘆息した。微妙な関西弁を喋る彼女は異界監査官のルーキーだ。ていうか異界研――桜居が非公認で創設した異世界研究部の略称――が撮って編集した映像を俺も前に見せてもらったが、アレの上映会をするくらいならこっちに参加した方が絶対に有意義だと思うぞ。

「俺的に心配したぜ。もしてめェらが勝ち上がってこなけりゃどうしようかってな。ここにいるやつらも壊し甲斐のあるやつらばっかりだが、俺的に零児と戦えなけりゃあ対抗戦に参加した意味が……ないのか？」

「俺に訊くなよ。お前のことだろうが」

「ふむ、それもそうだ。しかし俺様はどういった信念を持って対抗戦に参加してるのか自分でもわからねェ。金か？　賞品か？　いや違う。そんなものに興味はねェ。単純に強ェやつらと戦り合いたいからって理由しか思いつかねェんだよ。なんてつまらねェ話だ。俺様は俺的にもっとなんかいい感じの『戦う理由』ってのが欲しいわけで――」

ぶつぶつと独り言をエンドレスに呟き始め、見事に周囲の変人たちの輪に溶け込んだグレアム。もう放っておこう。

「レト殿とグレアム殿は何番目にゴールしたのだ？」

セレスが重たい空気に堪えられなくなったように口を開いた。質問を投げかけられた稲葉は、頭の後ろで腕を組んでニヤリと人の悪い笑みを浮かべる。

「一番や。予選が始まって一時間ほどやったかな」

俺とセレスは驚愕に目を剥いた。速い。開始してから一時間といえばまだ景色の変動も起こっていない時間帯だぞ。

「グレアム先輩の突貫にはホンマに魂消たわ。敵も障害物もあっち

ゅう間にぶっ飛ばしてまうんやもん。おかげでウチは一回も戦ってへんから面白なかったわ」

「……稲葉も、楽なようで大変だったみたいだな」

トンファーを振り回してひたすら真っ直ぐ突き進むグレアムと、その背中を必死に追っている稲葉の姿が鮮明に想像できてしまうから嫌だ。

「ところで稲葉、聞きたいことがあるんだが」

「なんや、白峰先輩？」

「俺らの一つ前にゴールしたチームってどれだ？」

「？　そんなん聞いてどうするんや、白峰先輩？」

きょとんと小首を傾げる稲葉に、俺は迫間と四条がゴール寸前でどこかのチームにやられていたことを説明した。二人の強制転移が始まってなかったから、あいつらをやったチームは俺たちの直前にゴールしているはずなんだ。

「なるほどなぁ、でもウチは知らへんよ」

「む？　レト殿はずっとここにいたのではないのか？」

セレスが訊くと、稲葉をすまなさそうに苦笑して頭を掻いた。

「ウチとグレアム先輩は一番にゴールして暇やって、さっきまで学園祭の方に行ってたんや。そんで戻った時には白峰先輩たちが丁度ゴールしたとこで」

「そうか……」

他のチームに訊けばわかるかもしれんが、面識のない上に一応敵である俺と会話してくれそうなやつはいない。狐耳の双子はなんとなく人懐っこそうだけど、あいつらが迫間たちの仇という可能性もある。本選は明日からだし、後で迫間か四条に訊きに行った方が確実か。

「あ、そのことはグレアム先輩には言わんといてな。これ以上張り切られたらウチが暇になるだけや」

「はは、わかったよ。でも、流石に本選は稲葉にも出番があるんじゃないか？」

当のグレアムはというと……おいおい、まだ独り言が続いてるよ。誰か止めてやれ。聞いてない間に火星探査機がどうのこうの言ってるぞ。どうしてそうなった。すぐ傍に立つ六本腕のオッサンなんか非常に迷惑そうな顔してるし。

稲葉も唯我独尊な相方に苦笑いを隠せない。

「せやなぁ。もしかしたら白峰先輩たちと戦うかもしれへんし。そん時はウチも手加減はせえへんよ。――やや？」

稲葉は体を傾けて俺の後方を覗き込み――

「白峰先輩、最後の一組がゴールしたみたいやで」

そう言って転移魔法陣を指差した。振り向くと、俺たちも転移してきた陣の青色の輝きが、段々と強烈になっていくところだった。眩い輝きに思わず目を細める。

青色の光はやがて部屋全体を包み込むと、唐突にフッと消え去った。

そして、そこに現れた最後のチームは……

「皆様お集まり安定ですね」

「……きゅぅ」

完全に目を回した金髪黒衣の少女を抱えたゴスロリメイドさんだった。

そのゴスロリメイドさん――レランジェと俺の目が合う。

「「チッ！」」

どちらからともなく相手に聞こえる音量で舌打ちを鳴らす。マネすんじゃねえよ。こいつだけでもあのまま失格になってりゃよかったのに。

「？魔帝？リーゼロッテ、よくもあれから挽回したものだ」

セレス同様に俺も感心していた。リーゼのあの様子はたぶん事後だ。そこからレランジェ一人が主を抱えてゴールまで辿り着いたんだろうね。よく失格にならなかったな。

とにもかくにも、リーゼたちがゴールしたことで予選は終了ってわけ――

「喝っ！！」

その時、部屋全体を震撼させる怒鳴り声が轟いた。

「わしの横でべちゃくちゃべちゃくちゃ、やかましいぞ小童ぁあッ！！」

凄まじい怒気を撒き散らしたのは、千手観音のごとき六本腕を組んだ牛角の巨漢だった。禿頭の頭には何本もの血管が浮き出ており、首にかけている巨大な数珠みたいな繋ぎ玉が感情に呼応するように明滅している。めっさお怒りのようだ。

その泣く子も失神しそうな厳つい顔で睨んでいる相手は、彼のすぐ傍で意味のない独り言を無限ループさせていたグレアムだった。

「んあ？　ああ、俺的に悪ィな」

激怒の矛先を向けられているにも関わらず、グレアムは微塵も動じない。六本腕の巨漢が放つ殺気をそよ風のごとく流している。

「ところでお前的にパンプキンパイはおやつに入ると思うか？」

だからどうしてちょっと聞いてない間に独り言が変な方向にぶっ飛んでんだ？

「小童が、わしを馬鹿にしとんのか？　おやつに決まっとろうがぁあッ！！」

ごもっともで。――いやそうではなく、なんか激しく戦闘が勃発しそうな雰囲気なんですけど！

周りは六本腕の巨漢の相棒も含め、注目はしているが我関せずを決め込んでやがる。不良のカツアゲを目撃したところで止める勇気も力もない一般人とは違う。やろうと思えば鎮圧できるのに、こいつらは行動を起こす気がないんだ。中には楽しんでいる風なやつもいるから困る。

だが、これが異界監査官だ。組織に属しているにも拘わらず、個人を優先して動く存在。特に見知らぬ相手との協調性は絶無に等しい。

「零児、止めるぞ」
セレスが聖剣を抜こうとするが、それを俺と稲葉が同時に手で制した。
「セレスはんが行ってもどうにもならへん」
「しかし、レト殿……」
「稲葉の言う通りだ。やめた方がいい。こいつらの場合、余計な手出しをすれば余計にごちゃごちゃになるぞ」
かくいう俺も、今回ばかりは行動を起こす気がない側だった。第三者が動けば収拾がつかなくなる。稲葉も、六本腕の巨漢の相棒である包帯マジシャンも、そして他の全員もそいつをわかってるんだ。
「わしはぐちぐちと小言を垂れるやつが大嫌いじゃけんのう！　怪我しとうなかったらわしの視界から消え失せい！」
「そいつは俺的に気の合わねェ話だ。だが、俺的にてめェみたいな声の馬鹿でかいやつァ好きだぜ？」
ブチン。
「この、耳障りな上に目障りな小童がぁあっ！　明日を迎えるまでもなくここで潰れとけぇえっ！」
筋肉質な六腕がそれぞれ平手に構えて一斉に『つっぱり』を繰り出す。なんて迫力！　小さなビルなら二秒で解体してしまいそうな凄まじさだ。
が――
「俺様に喧嘩売んのは勝手だがよ、お前的に、試合前に体ぶっ壊してほしいわけか？」
一つ瞬きした間にそれは起こった。
ずっしりと仁王立ちしていたはずの六本腕の巨漢が、次のコマでは逆さになっていたんだ。あまりに一瞬だったが、なにが起こったのかは誰もが悟った。
グレアムが片手で六本腕の一本を掴んで捻った、たったそれだけのこと。されどもたったそれだけで、二メートルは優に超える巨体が頭から床に叩きつけられたんだ。

六本腕の巨漢はパチクリと呆けたように目を瞬かせている。たぶん当人だけがなにが起こったのかわかってないんだろうね。

ケラケラと巨漢を指差して爆笑しているのは狐耳の双子。ニヤニヤと粘っこい笑みを浮かべているのは薔薇服の優男。他の監査官たちは寡黙を貫いているが、『いい余興だった』と言わんばかりの空気だ。

と――ヒュワッ。

室内に、あからさまに不自然な風が吹いた。

「はぁい♪　全次空のアイドル、誘波ちゃん優雅に参上でぇーす♪」

鮮やかな十二単をはためかせた天女が旋風の中から現れた。部屋に充満する緊迫した空気とは真逆の空気が一息に流れ込んでくる。空気読めよ風使いのくせに。

「あらあら？　なにかあったのですかぁ？　喧嘩は両成敗ですよぅ？」

この場にいる全員の視線が少女――日本異界監査局本局長・法界院誘波に集う。立ち上がった六本腕の巨漢はグレアムを一睨みするも、もうなにも言わなかった。

ともかく誘波が来れば安心だ。てなわけで、俺はやつに誰よりも先に言わねばならんことがある。

「誘波、てめえが隠し撮りした映像をこの場で破棄するか俺に渡せ。あとその登場の台詞はどっかで一度言ってるぞ」

「無駄なところで物覚えのいいレイちゃんは嫌いです」

ぷいっと膨れっ面で目を逸らされてしまった。……コイツ後デ締メル。

「ここでなにがあったかはまあ、予想はついてますが、咎めるつもりはありません。それよりもリーゼちゃんとレランジェちゃんのゴールインにより、予選通過枠の八組が埋まりました。皆さん、お疲れ様です」

俺の要求などなかったかのように予選通過者に労いの言葉をかける誘波。

「長話をするつもりはありませんが、明日の予定だけ確認させてください。明日の本選開始時刻は午前十時です。これは例年通りトーナメント形式で、普段は封印してある監査局の大闘技場にて行います。ですがその前に、皆さんには再びこの部屋に集まって対戦順を決めてもらいます。方法はくじ引きです。あ、超能力を使ってずるしちゃダメですよぅ」

そんなやついねえよ。たぶん。

それから誘波はいくつかの細かい説明を終えると、ふんわりとした笑顔で俺たち全員を見回す。

「ではでは、本日はこれにて解散としたいのですが、なにか質問のある方はいらっしゃいますか？」

セレスが挙手した。

「誘波殿、賞品を見せてはもらえないだろうか」

「あら、忘れてました。皆さんも実物が見たいと思ってますよね。ではどうぞどうぞ」

パチンと誘波が指を鳴らす。と、陣風が吹き荒れてどういう理屈なのか数々の品物が部屋の片隅から順に出現していった。俺がいいなと思っていたウォーターソファーを始め、近未来型洗濯機やユーラシア大陸横断旅行券、世界の高級食材盛り合わせなんてものもある。

そして最後に、セレスが欲していた紅光を反射する銀刃の大剣が出現した。

「！」

瞬間、空気の微妙な変化を俺は感じ取った。

いるんだ。あの剣を狙っているやつが、何人も。

ざっと見回しても誰がそうとは判然としない。だが、一つだけその中に異質な気配が混ざっていることに俺は気づく。

ゾワリとした感覚。これは、あの望月絵理香が恋人のことを語る

時に放った執着心に似ている。しかもただの執着心ではない。そこには他の監査官に向けられた敵意、いや殺意のような感情まで籠っていた気がした。

どういうことだ？

一体、この気配の発信源は誰なんだ？

わからないまま、俺たちは解散となった。

二章　監査官対抗戦・予選（8）（後書き）

予選編はこれにて終了となります。次回から三章に入ります。

予選の最後が呆気なかったことは重々承知。ゴール前のラスボス的な盛り上げるネタはいくつか用意していましたが、それやってるとあと五話くらい二章が続いてましたね。できる限り一章に二桁の話数はかけたくない夙多史です。

人気投票で零児に入れてくださった方、ありがとうございます！

あと二票で一位を掻っ攫えますｗ

次回の更新は９月３日（土）のつもりですが、書き上げることができたなら８月３０日（火）に更新します。期待はせずに待っていてください＾＾；

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝

Q：迫間と四条はよくゴールまで辿り着けましたね。

A：がんばったんです（↑テキトー）

Q：リーゼやセレスもルーキーでは？

A：ルーキーですが、彼女たちと違って稲葉は実戦経験が浅いのです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝

三章　監査官対抗戦・本選（1）

世の中には理解不能な怪現象が起こることがままある。
人魂みたいなオカルト的現象なんてものは、異界監査官をやっていればさほど珍しいものでもない。寧ろ人魂程度なら可愛いくらいだ。『次元の門』という超常現象を相手にしてたら誰だってそう思うさ。
こんな話をするってことは……そう、監査官の俺でも驚くほどの怪現象を目の当たりにしたんだ。もっとも、そいつはお泊まり会の怪談話に使えそうなネタではない。

一度壊滅したと思われた女装喫茶が盛り返していたんだよ。

いいぞ、悲鳴を上げても。もしくは『なんでやねん！！』と突っ込んでくれ。
どうやら女装だとわかったらわかったで、ドイーさんのハイクオリティなメイクアップ技術を一目見ようと客が集まったらしいんだ。広まっていた噂も、『二―Dの喫茶に可愛い娘がいっぱいいるらしいぞ！』という午前中から、『二―Dの喫茶の女装レベルがマジぱねぇらしいぞ！』に変わっていた。
奇しくも男装喫茶代表の郷野美鶴は集客を手伝ってしまった形になる。こうなるなんて誰が予想できただろうか。いやできるわけがない。反語。
男装喫茶の方はセレスとリーゼが抜けた穴を他の女子で埋められるはずもなく、結果として僅差で女装喫茶に軍配が上がった。
俺はというと、内心でガッツポーズ。男子が勝ったら二日目からメイド喫茶、女子が勝ったら執事喫茶って約束だったからな。監査官対抗戦の合間に執事服でウェイターの仕事なんてやってられるか。リーゼやセレスのメイド服姿が拝められるのはなんか新鮮でちょっ

と楽しみだったりする。ちょっとだぞ。
さて、学園祭における二年Ｄ組の勝敗結果を確認したところで――

俺は今、異界監査局の女子寮にいます。

も一つ言えば、女の子の部屋にいます。あ、女子寮だから当たり前か。テンパってるな俺。深呼吸して落ち着こう。すーはーすーはー。

……よし。心臓の刻むビートが少し緩やかになったので、座布団の上に正座している俺は改めて部屋を見回してみる。

１ＬＤＫのちょっとお高めなマンションって感じの部屋だ。広々としたリビングは清純な空気で満たされていて、気を抜けば自分が黴菌なんじゃねえかと錯覚しそうになる。

しかし部屋の広さの割には物が少なく、必要最低限の家具しか置かれていない。小さ目の正方形テーブルに時計にタンス、フローリングの床に敷かれた無地のカーペットくらいだ。女子の部屋のイメージとしてはちょっぴり味気ない感じが否めないな。

でも、らしいな、と俺は思っていた。

ここはセレスの部屋なんだ。

『零児、例の剣について話がしたい。後で私の部屋に来てくれないか？』

監査官対抗戦の予選を終えてすぐに、セレスの方からそう申し立ててきた。俺は嫌とは言えず二つ返事で了承してしまい、現在に至る。

セレスが異界監査局の女子寮で暮らしていることは知っていたものの、訪れたことは一度もなかった。男子である俺が女子寮に行く機会なんて一生ねえと思ってたのに。

そもそも、この禁断の聖域に踏み込んでもいいのか俺？　あとで懲罰が待ってるオチじゃねえだろうな。

「つか、セレスはなにしてんだよ。ちょっとここで待ってろって言

ったっきり、もう四十分は経つぞ」
いい加減に足が痺れたので俺は正座を崩した。いや、別に正座しろって言われたわけじゃないんだけどね。なんとなく、ほら、緊張したっていうか……。
ガチャリ。ドアがどこか遠慮がちに開いた。瞬間、鼻孔をくすぐる甘酸っぱいレモンのような香りが部屋に流れ込んでくる。
「すまない零児、待たせてしまった」
部屋に入ってきたセレスは、なんというか、ホクホクしていた。着ている学園の制服は新しく、着替えたのだとわかる。だが、細く煌びやかな銀髪はしっとりと濡れていて艶があり、頬は桃色に染まって上気しているのはどういうことだ？　ついでに手に持っている白い布は――ば、バスタオル？
「な、なにしてはったんでゲスか？」
いかん、俺の言語能力に障害が……。
「その、なんだ。汚れていたし、汗もかいた。だから話の前にシャワーを浴びたいと思ってなにが悪い」
男を部屋に招いて、
女がシャワーを浴びる。
浮上してくるイケナイ妄想を激しく頭を振って追放した。
「わ、悪くはねえけど、それならそうと言ってくれればよかったのに」
「だって、言ったらあの時のような事故が発生しそうな気がしたんだ」
「あの時？」
昔、セレスが間違って男子シャワー室に突撃したことを言ってるのだろうか？
「な、なんでもない！」燃えるように赤面してセレスは手をぶんぶん振り、「そ、それより零児もシャワーを浴びたければ使ってもいいぞ」
「遠慮するよ。俺はシャワーって好きじゃないし。帰ってからゆっ

くり湯船に浸かるさ」
「そ、そうか？　いや、やっぱり使え！　零児が汚れていると、私が不快なんだ！」
「でも着替えがないし」
「それを着ればいいではないか」
セレスが示したのは、俺のカバン横に置かれた紙袋に収まってあるピンク色のお姫様ドレス。記念品と言ってドイーさんから強制的に渡された女装セットだ。そうかなるほどこれを着れば――って！
「いやいやいやいやいや無理！！」
俺は全力で否定した。帰って速攻で処分しようと思っていた人生の黒歴史を、よりにもよって女の子の部屋で着るとかどんだけヘンタイだよ！
「大丈夫だ。ここには私しかいない。恥ずかしがることはないぞ」
あれ？　セレスさん、なんか楽しんでませんか？　俺を見る目がキラッキラって輝いてるんですけど……。
「いいか零児、女性の部屋で汗臭い格好のままはどうかと思うのだ。部屋が汚れてしまえば後の掃除も大変になる」
「本音は？」
「この前の温泉街といい、今日の昼といい、私ばかりが恥ずかしい姿を見られていては不公平だと思う」
「勘弁してくだせぇ！　ホントこれだけは勘弁してくだせぇ！」
「わわっ！？　泣くほど嫌なのか！？」
流涙と滅り込むような土下座でなんとかこのまま話を始める許可が下りた。ところで今日の昼って俺なんかしたっけ？　ああ、執事服のことか。
セレスは少々不満の残る表情をしながら、テーブルを挟んだ向かい側に正座した。
俺は一つ深い呼吸をして気持ちを切り替える。
「それでセレス、実際にあの剣を見てどうだったんだ？」
話を促すと、セレスは表情を改めて真剣な光を翠瞳に宿した。

「うむ、私の思い違いではなかった。アレは紛れもなく本物だ。本物の――魔剣だった」
「魔剣？」
少し間を置いてから紡がれた単語に、俺は聞き覚えがあった。その単語自体は誰もが知っている言葉だろうけれど、セレスの口から出たならば意味は一つに絞られる。
「そうだ。アレは聖剣と対を成すラ・フェルデの魔剣。銘はディフェクトス。私が聖剣十二将となる前にいくつもの街を滅ぼし、私の……」
そこでセレスは躊躇うように数瞬だけ口籠り、
「剣の師の命を奪った、忌まわしき一本だ」
込み上げてくる負の感情を無理やり押し殺した声で吐き捨てた。
「……」
俺は、なにも言えなかった。悲しげな顔をするセレスに、かけてやる言葉が見つからなかったんだ。
「私の師は聖剣十二将に就任したばかりだった。それでいて、どの将よりも強く誇り高かったと私は思っている。実際はそうでもなかったのかもしれないが」
「尊敬してたんだな」
「師であり、実の兄のように慕っていた。私がラ・フェルデ国防学院に在席していた頃も、たまに剣術の講師として招かれていたほどの腕前だった」
楽しかった日々を懐かしむように語るセレスの表情に、影が落ちる。
「でもあの日、魔剣の鎮圧任務に向かってから帰らぬ人となった」
聖剣十二将の一角が敗れるほどの力。俺はセレス以外の聖剣十二将を知らないが、セレスが末席ということは他の十一将の実力は恐らく彼女以上だろう。聞く限り、セレスの師匠もかなりの実力者だ

ったはずだ。
なのに、敗れた。俺がラ・フェルデ人だったら戦慄ものだ。
「その後、魔剣はどうなったんだ？」
「陛下が自ら出陣なされて、使い手諸共に次元の狭間に封印した…はずなのだ。なのに、どうしてこの世界に存在しているのか私にはわからない」
セレスはそこで言葉を切って瞑目した。膝の上で握った拳が小刻みに震えている。彼女があの剣に対してなにを思っているのか、俺には想像もつかない。
数秒間の沈黙の後、セレスはすっと瞼を上げた。
「なんであろうと、あの魔剣がこの世界にあることはラ・フェルデの落ち度になる。私情を抜きにしても、聖剣十二将たる私が回収しなければならないのだ」
使命感。なんともセレスらしい理由だな。
「どうしてそれを誘波に言わなかったんだよ？」
「確証がなかったんだ。アレは本来、こんな場所にあるはずのない物だから。それに誘波殿は呪われた剣だろうと取り消す気はないと言った。私がこの話をしたところで無意味だと思う」
「だろうな。あいつだって馬鹿じゃない。自分で調べて危険じゃないと判断したから賞品にしたんだ。魔剣とか聖剣とかって言うけど、要は使い手の問題なんじゃないのか？」
怒鳴られること覚悟であまり考えずに言ってみると、セレスは口元に手をやって考え込んだ。
「うん、一理はある。実のところ私も魔剣というものを『忌まわしき力を秘めた武器』としか認識していないのだが、この聖剣ラハイアンだとて使い方次第では人に害成す力となり得る。零児の言う通り、魔剣もそれを制御できる者が持てば良いことに力を振るえるのかもしれないな」
フッとセレスは柔らかく微笑んだ。窓から差し込む夕日に映えるセレスの姿は、思わず見入ってしまいそうで……やっぱ綺麗だなぁ。

「だが、魔剣も聖剣と同じかそれ以上に使い手を選ぶはずだ。おいそれと他人には渡せない。私はもうすぐラ・フェルデに戻ることになるが、その前に必ず回収しておきたい」

どうも、魔剣を回収する意思に揺らぎはないようだ。そりゃそうだ。師匠の仇なんだからな。だったら、相棒たる俺もやることは変わらんな。

「全力で本選トーナメントを勝ち進んで、優勝しようぜ」

「無論だ」

俺とセレスは力強く頷き合った。賞品は優勝者から選択していくことになっているから、必ずしも優勝しなければならないわけではない。けれど、魔剣を狙っている者が他に何人もいることは予選通過者と対面してわかった。もしかすると本局チーム以外の全チームが狙っているかもしれん。

さて、と俺はすっくと立ち上がった。

「そうと決まれば、さっさと帰って明日のためにゆっくり休むか」

恐らく先に帰ってるだろう？魔帝？様御一行がいるから休まるかどうかは甚だ謎だけれど。

「待て零児」

そうだこの紙袋の中身はセレスにあげようかいやっぱ黒歴史は燃やすしかねえ、と二秒ほど逡巡していた俺をセレスが呼び止めた。

「なに？　あ、もしかしてこのドレス欲しかった？」

「いいのか？　くれると言うならもらうがでもサイズが――って違うそうではない！」

セレスのノリツッコミは新鮮だった。

「零児、私は言ったはずだ。今度、私の故郷の料理をご馳走すると」

――ホワッツ？

そんなこと言っ……たな。予選前にたこ焼きを買った時だ。

「じょ、冗談じゃなかったのか？」

「このようなことを冗談にしてなにが面白い。今日はここで夕食を取るといい。実はもう作ってあるんだ」

なん……だと……？

シャワーにしては長いなぁとは思ってたが、料理までしていたのか！　納得と同時に明日を歩んでいる俺のビジョンが見えなくなった。

セレスは先程の暗い話が嘘だったかのように活き活きと立ち上がると、キッチンから土鍋を持ってきてテーブルに置いた。なんで土鍋？

「残さず食べてくれ」

セレスは花咲くような満面の笑みを浮かべて土鍋の蓋を取った。

俺は既に嫌な汗が止まらない。だって――

「あのう、セレスさん。ラ・フェルデの料理は紫色の湯気が昇ったりするもんなんすか？」

「そんなわけないだろう。おかしなことを言うな、零児は」

「見えないの！？　このモクモクと煙のごとく立ち上る濃い紫が見えないの！？　あまりに色が濃すぎて鍋の中身が判然としないんですけどなに入れたらこうなるの！？」

しかもなんかボコボコいってるし！　沸騰しているだけじゃこんな音は立たない。マグマかなにかみたいだ。

「無駄と知りながら訊くけど、ちゃんと味見したよね？」

「……無論だ」

「なぜ目を逸らした今！？」

「残さず食べてくれ」

「いやだってこれ――」

「残さず食べてくれ」

「……ういっす」

これほど恐怖を覚えた美しい笑顔を、俺はこの先の生涯で見ることはないだろうね。

三章　監査官対抗戦・本選（1）（後書き）

投稿できましたが、これにより土曜更新が不確定になりました。
いや頑張れば行けるかな？　どうせ無理だろうという気持ちで待っていてください＾＾；

人気投票、誘波とレトに入れてくださった方ありがとうございます♪
それでもセレスがトップなんですよね。そんで相変わらずファーストヒロインには票が入らないと（笑）

三章　監査官対抗戦・本選（2）

翌日。伊海学園学園祭二日目。

かろうじて朝日を拝むことのできた俺は、急激に半世紀ほど年老いたようにゲッソリしていただろうね。実際、教室に入って早々に昨日の勝利で調子と鼻の下を伸ばしまくっている癖毛男――桜居とかいう変態――が朝の挨拶代りにそう突っ込んできたし。

あの後はなんとか家に帰って、すぐに死んだ。ええ、死んだとも。気絶に近い眠り方をしていた俺をリーゼが何度も起こそうとしたようだが、蹴っても殴っても燃やしても起きなかったそうだ。どうりで今朝から体中が痛いわけか。

そんな体調で大丈夫か？

大丈夫だ、問題ない。

「ふぅん、レランジェっていっつもこんな動きにくい服着てたのね」

「こんなフリフリの可愛い服が私に似合うわけ――って零児！　こっちを見るな！」

リーゼとセレスのメイド服姿をしかと目と脳裏に焼きつけたから。

時刻は八時半前。メイド喫茶の準備はほぼ完了し、女子も着替え終わったので、開店時間までの数分間に自然とお披露目会が開かれることになったんだ。

メイド服の配色はスタンダードに黒地に白いフリルの縁取り。デザインはセクシーにも肩見せの半袖で、スカートの丈は学園の制服よりも数センチほど短いな。当然、頭にはレースフリルのカチューシャを搭載している。

「いやいや、ありえんくらい似合ってると思うぞ、セレス」

昨日の仕返しだ、と俺はもじもじ恥じらうセレスを凝視してやる。

「お、お世辞は結構だ！　本音を言ってもいいのだぞ」

「いやいや、本音も本音。お世辞なんかじゃねえよ。げっへっへ」

「なんだそのわざとらしい笑いは!?」

スレンダーでありながら出るところは出たセレスは、メイド服に肩の部分がないから魅惑の谷間が丸見えなんだ。しかも顔を真っ赤にして胸を隠そうとしてるもんだから――くっ、余計にエロい。クラスの男子どもがセレスに視線の照準を固定したまま石化してるわけだぜ。

メイド服は毎日見ていて飽きたと思っていた俺だが、普段それを着ないやつが着ると全然違うんだなぁ。

「むむむぅ、騎士崩れのくせに」

皆がセレスにばかり注目しているせいか、それともセレスのボンキュドカンに嫉妬してるのか、お子様リーゼがぷっくりと面白くなさそうに頬を膨らましていた。それはそれでかわえぇけど、お前もちょっとは恥じらってみたらどうだ？

「レージ！　お前はわたしのものなんだから、騎士崩れじゃなくてわたしを見なさい！」

「俺は敵じゃなかったのか？」

「あう」

揚げ足を取った俺に何も言い返せなくなったリーゼは、口をアメーバみたいな形にしてわなわなしてるな。面白い顔だなあははは、と笑おうとしたところで――

「『わたしのもの』とはどういう意味かな白峰被告」

「ちょっとおいちゃんたちに教えてもらえんかね？」

「ていうか死刑」

殺気を剥き出しにした男子連中に囲まれた。俺、滝汗。『わたしのもの』発言に慣れちまったせいで油断してた。ここは地雷原だった。

「奴隷って意味です」

「「「ならばよし」」」

いいんだ！？

奴隷は奴隷でリンチにされるかと思ったけど……まあ、いっか。

「リーゼロッテ君、少しいいかな？」

と、メイド服の上からいつもの白衣を着た背の高い女子――郷野美鶴がリーゼに耳打ちする。てかお前それ卑怯だろ。これは罰ゲームみたいなもんなんだから白衣とか反則！

「セレスティナ君に勝てる方法を伝授してあげよう」

「おい郷野、リーゼに変なこと吹き込むなよ」

注意するも、郷野はリーゼの耳元でごにょごにょと囁くことをやめない。一度だけ俺の方に視線を向けてニヤけたのはどういう意味だ？

「そんなことでいいの？」

郷野から謎の必勝法を伝授されたらしいリーゼは、ちょこんと首を傾げた。それからとててと俺の下まで駆け寄ると――

「えっと、ごしゅじんさま、今夜のごほうしはどうなされますか？」

ルビーのような紅い瞳を上目遣いで向けてそう言った。

「散っ！」

瞬間、俺はテレポート能力者となった。殺気孕む教室からコンマ一秒でも早く脱出するために。

だが、やつらはそんな俺の本能的なスピードをも超越して回り込みやがった。

「隊長、白峰のクソ野郎の包囲が完了しました！」「よしよくやった」「白峰、まさか夜な夜なあんなことやこんなことを」「やってたのか？」「我らが天使であらせられるリーゼちゃんと？」「このゲスが！」「白峰くん言ってくれたらボクならいつでも！」「だから誰だよ今の！」「ていうか死刑マジ死刑」「桜居隊長、この腐れ外道の処分はいかほどに？」

「うむ、蜂の巣」

「「「ラジャー！！」」」

「待てお前らそのどう見ても改造してるエアガンはどこから持ってき痛だだだだだだだだだだッ！？」

あんな明らかに言わされた棒読みの台詞でなんで超人化できるんだよお前ら！　あとリーゼ、仮にも？魔帝？のお前が『ご主人様』とか言うな！　その辺のプライドも持とうね！

華やかになるはずの二―Dメイド喫茶は、俺の悲鳴と同時に開店したせいで『絶叫喫茶』と呼ばれることになったとか。

――で。

第一印象こそ最悪だった二―Dメイド喫茶だったが（俺のせいだけじゃない。断じて）、学園祭二日目から開店するという珍妙さが話題を呼んでいた。昨日の女装喫茶の件もあって、『男子があんなになったんだから女子はもっとやばいはず』と期待してやってくる客も大勢いた。でも残念だったな、ドイーさんはもういないんだ。どこ行ったんだろうね。

まあドイーさんはどうでもいいとして、俺は午前中に一度抜けなければならない。対抗戦本選の組み合わせを決めるくじ引きがあるからだ。場合によっては戻って来れんかもしれんな。

ともかくそれまでの一時間、俺は例によってキッチンスタッフを任されていたのだが――

「包丁捌きが粗雑不安定ですね、ゴミ虫様」

振り返ると、憎きポンコツ無表情毒舌メイド――レランジェがやっぱり憎たらしい無表情をして厨房を覗いていた。

厨房内の男子たちがざわめく。「メイドさん？」「本物？」「マジで？」「確かリーゼちゃんの」「そういや昨日見たぞ」「リーゼちゃんとこのメイドさんが一緒にいたとこを」「ていうかゴミ虫様って？」などと思ったことを素直に口に出してるな。ちなみに桜居はいない。異界研の方に行ってる。

「包丁は『武具』じゃないからな。調理道具の扱いは人並みでいいんだよ」

「人並み以下と言ったつもりでしたが？」

おっとこのメイドさん、この俺に料理対決でも挑もうっていうのか？　やめとけよ、勝てるわけがない。俺が。

「それよりなんの用だよ？」

「レランジェはマスターをお迎えに参っただけです。ついでにゴミ虫様を貶す安定です」

「てめえ、対抗戦で当たったら覚えとけよ」

「こちらの台詞ですね。では、遅れては皆さんに申し訳ないので失礼安定です」

厨房を去るレランジェ。ホントになにしに来たんだよ。

時計を見ると、午前九時三十分。やべ、ギリギリだ。そろそろ出かけないと確かに間に合わないぞ。ちょっと遅れて失格とかになったら笑い話にもならん。

ホールを見るとリーゼはもういなかった。レランジェと共に一足先に行ってしまったようだ。俺はセレスに声をかけ、二分で支度を終えて教室を出る。

が――

「君たちは揃ってどこへ行くと言うんだい？」

そこで白衣メイドの郷野に捕まってしまった。

「白峰君にセレスティナ君、あとリーゼロッテ君もかな。君たちは昨日も三人同じタイミングでいなくなったようだけど？」

郷野の目には疑いと好奇心の光が宿ってやがる。あれは俺たちが仲良く学園祭を回っているわけじゃないって気づいているな。

だったら、多少の真実を混ぜた嘘でやり過ごすのが定石だろう。

「俺らは別のイベントにも参加してんだよ。そっちの方に遅れちゃまずいんだ。だから詳しいことは後で桜居にでも聞いてくれ」

あいつなら上手く誤魔化してくれるだろう。

「部活にも委員会にも入っていない君たちが別のイベントを？　ふむ、これは興味深いゾ。同行してもいいかい？」

「ダメだ」

一言で突っぱねると、俺はさっさと歩き始めた。セレスもついて

くる。これ以上こいつに付き合っていたらマジで遅れちまう。
「おやおや水臭いなぁ。白峰君でアイヒマンテスト」
しかし郷野は後を追ってきた。なんてしつこいやつだ。そして今なんか『閉鎖的環境下における権威者の指示に従う人間の心理状況』を俺で実験するとか呟かなかったか？
「美鶴殿、私たちは誘波殿――理事長が秘密裏に企画しているイベントの準備を任されている。関係者以外は立ち入りを許可されていないのだ」
ナイスだセレス。
「それは傷だらけになる作業なのかな？」
郷野のやつ、見抜いてやがる。一応、監査局で治療を受けてもの一日で目立たない程度に回復したってのに。
「けっこうハードなんだよ」
「ほうほう、医者はいらんかね？」
「いらねえよ！」
お前は医者じゃないだろ。保険委員長。
「じゃあな」
理事長の企画ということで納得してもらえたのかどうかはわからないが、立ち止まった郷野を置いて俺たちは駆け足で大学部の一号館を目指した。
「それならそれで、こちらにも手はあるサ」
最後に郷野が含み笑いを浮かべていた意味は、まあ、だいたい想像ついたな。

三章　監査官対抗戦・本選（２）（後書き）

本当なら対戦順を決めるところまで行きたかった……。
三章は１０話超えるかもしれません。なんとかしないと。
今回は本気で推敲時間がなかった。だって今できたから＾＾；

次回の更新はできれば火曜日ですが、一応週二更新に戻ったので不定期とさせていただきますｍ（＿＿）ｍ

三章　監査官対抗戦・本選（3）

案の定、郷野は尾行してきた。

だが、相手が悪いな。監査官の中でも特に他人の気配に神経質な俺を相手にするべきじゃなかった。（超人化さえしてなければ）一般人を巻くくらい造作もない。建物の角を曲がった瞬間にダッシュして視界から消えてやったさ。

そんなちょっとしたトラブルを乗り越えて大学部の一号館にある昨日の真っ白な部屋に辿り着くと、既に予選通過者の面々が顔を揃えていた。

リーゼとレランジェ、グレアムと稲葉、本局組もちゃんといるな。俺が警戒することにした赤毛の女影魔導師も……相棒のロボットの足下で風船ガムを膨らませている。というか、あのロボットはどうやってこの部屋に出入りしてるんだ？

本当なら迫間と四条に二人を倒したチームのことを訊くはずだったのだが、あいつらは思ったよりも重傷だったらしく未だに意識が戻っていない。普通そこまでするか？　対抗戦は社内イベントみたいなもんだから仇討ちなんて大人げないと思ってたが、ちょいとイラッときたぞ。

しん。

室内はこれだけ人がいるのに、嘘みたいに静まり返っている。空気が張り詰め過ぎていて、針一本あれば簡単に部屋が破裂しそうだ。

本選開始二十分前。

「……時間だな」

俺が呟いた次の瞬間、ビュワッといつものように風が舞い、日本異界監査局本局長――法界院誘波が鮮やかな十二単をはためかせて現れた。もっと普通に登場できんのかねこいつは。

「皆さんちゃんと集まっていますねぇ」

ニコニコとこの場の空気にそぐわない笑顔を浮かべている誘波は

……なんだアレ？　手にビックリ箱みたいな四角い青色の箱を持ってるぞ。

「では時間もないことですし、前置きはなしで早速対戦順を決めるくじ引きを行いたいと思います」

そう言って、誘波は箱の丸い穴が開いた面を見せた。

「古っ！？」

なんてアナログ！　監査局の超技術ならもっとマシでハイテクな方法があってもよくね？　――いやこれは誘波の趣味か？　なら納得だ。

「レイちゃんが失礼なこと考えているようなので説明しますと、公平を期すためにわざと古めかしい方法を選択したのです。本局側のコンピュータでランダムに対戦順を決めてもいいのですが、それでもし本局チームに都合のいい組み合わせになった場合、不正だと疑いを抱く方も出てくるはずです。だから皆さんに直接くじを引いてもらうことにしました。まあ、半分は私の趣味ですけどねぇ」

やっぱりか。相変わらず期待を悪い意味で裏切らないやつだな。

「俺ら的に、引く順番はどうなってんだ？」

訊ねるグレアムは、既に戦いたくてしょうがないって感じにうずうずしてるな。対抗戦に参加するもっともらしい理由は思いついたんだろうか？

「そうですねぇ。やはり、予選のゴール順がいいかと思います」

あっ、と俺は誰にも聞こえない程度に声を漏らした。

ゴール順、誘波に訊けば一発でわかったんじゃないか。アホか俺は。

「（零児、漣殿と瑠美奈殿を倒したチームなんだが、誘波殿に訊けばよかったのではないか？）」

俺と同じ考えに至ったセレスが囁いた。

「（後の祭り、いや、結果オーライってとこだな）」

このくじ引きでそいつらが判明するんだ。さて、迫間たちの仇はどこのどいつらかな？

「んじゃあ、まずは俺様からだな」
予選突破第一位チームを代表し、グレアムが箱の中に手を突っ込む。そして特に選ぶ風な様子も見せずにすぐ引き抜いた。
その手にはビリヤードの玉みたいな数字の書かれた球体が握られている。
「『３』だ。俺的にいい感じの数字じゃねェか。『３』っていやァやっぱアレだ。ウルトラ的な巨人が変身してられる微妙な数字だな。あと『３』がついたらアホになるってホントか？　そういやァ、トランプの大富豪で一番弱ェ数字も『３』だったな。……ん？　俺的に『３』ってあまり面白くねェ話だと今気づいたぜ。おい誘波、『Ａ』に変えろ！」
「残念ながらそんな記号はありませんよぅ。今回はボケを自重しているのです」
自重してなかったらやってたのかよ、というツッコミが喉まで出かけたけど飲み込んだ。
「なんだと？　じゃあ『ＪＯＫＥＲ』でいい」
「もっとないですね。トランプから離れてください、グレアムちゃん。それと言う必要もないと思っていましたが、一度引いたらやり直しは利きませんよ」
ブン。部屋の奥の壁から、昔のテレビのスイッチを入れたような音がした。
そちらを見ると、トーナメントの対戦表が映し出されていた。プロジェクターを使ったわけじゃない。壁全体が液晶テレビの画面みたいになってやがる。なんだこの部屋？
画面では群青色の背景に白い線がピラミッド状に連結している。その最下層の三番目には白い文字で、

グレアム・ザトペック
稲葉レト

とチームメンバーの名前がテカテカと輝いていた。
「うふふ、実はこのボールを箱の外に出した時点で、書かれてある番号にチームが登録される仕組みになっているのです。どのチームの誰がくじを引いたのかも、ボールの方で検知して情報を送信しています」
なにやら自慢げに胸を張って語る誘波。やっぱり監査局は無駄にハイテクだった。
しかし、誰にも驚きがない。普通に考えて〈現の幻想〉やその他諸々の方が何億倍も『凄い技術』だからな。一番はしゃぎそうだったリーゼに至っては、赤毛の女影魔導師の相棒たるロボットをチラチラと気にしていてそれどころじゃなさそうだ。スヴェンの時もそうだったが、リーゼはああいうのが好きらしいな。
「むぅ、反応が皆無で面白くありませんね」
誘波は頬を膨らまして唇を尖らすという器用なマネをし、
「では二番目にゴールした第六支局代表のルノードちゃんとラシュリーちゃん、くじを引いてください」
薔薇服の優男と三つ目女が誘波の前に出た。この美男美女カップルが二番手か。男がルノードで女がラシュリーという名前らしい。ラシュリーは昨日と同じく両目を閉じ、額にある第三の目だけで視覚情報を得ているようだ。視力に障害でもあるんだろうか？
「僕が引くよ、ラシュリー」
「……了解」
粘っこい笑みを浮かべるルノードが引いた番号は――『5』。壁に映ったトーナメント表の五番目に二人の名前が表示される。
続いて三番目にゴールしたチームが呼ばれる。第十一支局。包帯マジシャンと、昨日グレアムに片手で捻り倒された六本腕の巨漢のチームだった。名前は包帯マジシャンの方がハイカル・アズミ、六本腕の巨漢はパクダ・カットゥヤーヤナ。なに人だよ。……異世界人か。
巨体のパクダでは手が箱の穴に入らないので、必然的にハイカル

が番号ボールを抜き取る。
『4』だった。
一回戦目で因縁のグレアムと当たることになったな。
「潰しちゃる」
くじを引き終わった去り際に、パクダはグレアムの前に仁王立ちして怨嗟の声をぶつけた。もしかして本当に超能力使って確率操作したわけじゃないよね？　できそうだから怖い。
パクダの宣戦布告を受け取ったグレアムは――ニタァ。
「おいおい、俺的に燃えてきたぞ。楽しい。実に俺的に楽しい。たった一言で俺様を熱くさせるなんてめェは天才か？　こんなに俺様を燃え上がらせてどうする気だ？　今度は逆立ちするだけじゃァ済まなくなるぜ？」
「この小童ッ……」
パクダの角の生えた頭に浮かび上がった青筋が怒りマークを作る。だが、今回は相棒に包帯の隙間から覗く視線で諌められ、しぶしぶと身を引いた。
「続いて四位。第二十八支局代表のリャンシャオちゃんとチェンフェンちゃんですねぇ」
「アイさぁ！」
「一番を引くアル！」
元気よく前に飛び出したのは、狐耳チャイナドレスの双子だった。俺とそう変わらない年頃の少女たちは、毛並のよさそうな黄金色の尻尾をフリフリさせ、二人同時にくじを引こうとして――そりゃ衝突するよね。
「ちょっと待つネ、チェンフェン。ここはお姉ちゃんに任せるアル」
「リャンシャオこそ、お姉ちゃんなら妹に譲るべきネ」
三つ編みポニテが姉のリャンシャオで、三つ編みツインテが妹のチェンフェン。中国人っぽい響きの名前だ。もしかするとハーフなのかもな。髪は黒だけど耳と尻尾は金色だし。
結局ジャンケンで決着をつけ、妹のチェンフェンが引いた番号は

『2』だった。
「さくさく行きましょう。時間があまりありませんからね」
「だったらこんなギリギリじゃなく昨日の内にやっとけよ」
「大人の事情というものがあるのですよ、レイちゃん」
どんな事情だ。システムの調整でもやってたのか？
「では次は――」
と誘波が五番手のチームを呼ぼうとしたところで、
「イザナミ！　わたしも早くそれやりたい！　次やらせて！」
わがままリーゼがずかずかと前に出てきた。お前な、ちゃんと順番守れよ。最後だから引く必要ないけれども。
「弁えろ、？魔帝？リーゼロッテ」
セレスが咎めるも、待つことすなわち退屈が大嫌いなリーゼはもう我慢ならんらしい。子供っぽく眉根を吊り上げて――ビシッ。俺とセレスを力強く指差した。
「わたしは、早くお前たちを燃やしたいのよ！　そして騎士崩れ、お前からわたしのレージを取り返すんだから！」
ま、また危険発言が。ここが教室じゃなくてよかったぜ。
「零児は私のパートナーだ。？魔帝？リーゼロッテ、貴様ではなく私を選んだのだ」
「お前とは絶対に決着をつけてやるわ」
「面白い。望むところだ」
「はいはい、そこまでにしてくださいねぇ。開始時間が遅れると私がお客さんに怒られるんですよぅ」
パンパンと手を叩いて誘波が口喧嘩を鎮める。こいつがこんな役をするなんてどういう風の吹き回しだ。風使いなだけに。
「実はあまり面白いことは言えてないって気づいてますか、レイちゃん？」
「心を読むな！」
このアマの読心術も相当なもんになってきたな。
「リーゼちゃん、これはゴールした順番でやっているのです。あと

少しですから、我慢してくださいね」
　ニコニコ顔の誘波は顔の横で人差し指を立て、お姉さんみたいな優しく包み込むような口調でそう言った。だが――
「あと少しって、どのくらい？」
「それは……」
　ああ、そうか。リーゼはあの時どこぞのスライムのせいでダウンしてたから知らないんだ。自分が最後だってことを。誘波も珍しく困った顔してるな。写メ撮っとこうか。
「先に引かせてやんな」
　と、リーゼを助太刀する発言が飛んできた。そのスケバンを彷彿とさせる鋭利な声音の発生源は、意外なことに赤毛の女影魔導師だった。
「そういうのは、やりたいやつがやりゃいいんだ。オレは別にどうでもいい」
　男口調の女影魔導師は、刃物のように鋭い目つきで相棒のロボット――の胸部にあるコックピットを見上げた。そこには誰が見たって立派な赤ちゃんが操縦桿（？）を握っている。
「ヴィルゲルム、てめえはどうだ？」
　ヴィルゲルム!?　なにそのものごっつい名前!?　ロボットだよね？　赤ちゃんじゃなくてロボットの名前だよね？
『イエス。先に引くほどメリットがあるならば話は別ですが、今回はそのような要素は見当たりません。よって、私がホーネッカー氏の意見に反論する理由はないでしょう。順序の割り込みを許可します』
　知的!?　あの赤ちゃんめっちゃ知的なボイスをスピーカーから出したぞ!?　ロボットの手でエアメガネをくいくいさせてるとこだけがアホらしいけど。
「あんたらはどうだ？」
　ホーネッカーと呼ばれた赤毛の女影魔導師が、俺たちと、漆黒鎧の騎士と布巻き少女に水を向ける。

「構わん」と漆黒鎧の騎士。
「いいんじゃない？」と布巻き少女。
俺もリーゼの社会常識が欠如してる点はともかく、順番を抜かれることに関しては端から文句なんてない。寧ろ引かなくてよくなるから面倒なことしなくてラッキーとさえ思えるね。
「セレスもいいだろ？」
「好きにしろ。ここで私だけ反論したら、悪者みたいになる」
セレスは拗ねたように顔を逸らした。既に引いたチームは興味なんてないだろうし、満場一致だな。
「マスターがご迷惑をかけて申し訳ありません。謝罪安定です」
ペコリと丁寧にレランジェがマスターの代わりに頭を下げる。こいつは困ったことに俺以外には礼儀正しいんだよ。
「ほら、リーゼも礼くらい言えよ」
そう俺が注意するも、
「ふん、？魔帝？で最強のわたしに譲るのは当然よ」
と返ってくる。予想通り過ぎて怒る気も失せてきた。
「本当によろしいのですね、ウェルシーちゃん」
誘波が確認を取る。赤毛の女影魔導師の本名はウェルシー・ホーネッカーというらしい。
「みんないいっつってんだ。時間がねえんだからさっさと進めろ、誘波」
「それもそうですね」誘波は箱をリーゼに差し出しつつ、「ところでクロちゃんは元気にしてますか？」
「オレが知るわけねえだろ！　鷹羽のクソ野郎のことなんざ！」
「でも兄妹弟子だったのでしょう？」
鷹羽の兄妹弟子？　マジか。あの口の悪さをどこかで聞いたと思ってたら、妙に納得しちまった。
「だいたい、オレはあいつと反りが合わなかったから連盟辞めて監査官になってんだ。嫌なこと思い出させんな！」
鷹羽が彼女になにをしたのかは知らんが、相当恨まれてるな。だ

から鷹羽の弟子である迫間と四条を過剰にボコッたとか？　リーゼのわがままを聞いてくれたから悪いやつではないと思うけど。

「チッ、胸糞悪い。ちょっと外の空気吸ってくる」

「くじ引きはどうするのですか？　ヴィルゲルムちゃんでは引けませんよ」

　ロボットでは穴に手が入らない。中の赤ちゃんだと箱の大きさ的に玉に手が届かない。

「最後に残ったやつでいい。オレたちの対戦順が回ってきたら呼べ」

　吐き捨てるように言い残し、ウェルシーは大鎌を肩に担いだまま退出してしまった。どこが反りが合わない、だ。鷹羽にそっくりじゃないか。

「仕方ありませんね。リーゼちゃん、何番でしたか？」

「『6』よ」

　リーゼは数字の書かれたボールを誘波に見せた。『6』ってことは……俺はトーナメント表に注目する。薔薇服の優男と三つ目女――第六支局代表のルノード&ラシュリーと対戦だ。

「よろしく、可愛らしいおチビちゃん」

「……ルノード、失礼」

「ん～、僕としては誉めたつもりなんだけど」

　粘い韻を含む口調のルノードと、やはり両瞼は閉じられたままのラシュリーに、リーゼはふんと鼻息を鳴らしただけで眼中にないことをアピールした。

　赤毛の女影魔導師――ウェルシー・ホーネッカーがへそを曲げてくじ引きを放棄したから、残るは俺たちとそこのあべこべチームだけだ。

「第四十四支局代表、カルトゥムちゃんとゼクンドゥムちゃん。くじを引いてください」

　漆黒鎧の騎士がカルトゥム、布巻き少女がゼクンドゥムというらしい。こっちの少女もごっつい名前だな。流行ってんのかそういうの。

「カルトゥム、籠手を嵌めてちゃ引けないだろ？　ボクがやっとくよ」

ボク？　実は少年だったってオチか？　いや、小柄で幼児体型だけどあの体のラインはたぶん女だ。ボクっ娘ってやつだな。よく知らんけど。

そいつらの引いた番号は『8』。続いて俺の引いた番号が『1』だったから、自動的にウェルシーとヴィルゲルムは『7』となる。

そういや順位があやふやになったな。

一応訊いとくか。

「なあ、誘波。あのウェルシーってやつの順位は結局何位だったんだ？」

誘波はなんでそんなことを訊くんだという風に訝しげに首を傾げ、答える。

「ウェルシーちゃんとヴィルゲルムちゃんは――五位、ですね」

……へ？

俺は反射的にあべこべチームを見た。

その瞬間、部屋の床全体を覆うほどの青い魔法陣が展開される。

「時間ですので、皆さんを一気に大闘技場までご案内します。ウェルシーちゃんはどうせ午後からですので放っておきましょう」

俺たちの体が魔法陣の輝きに包まれる。途端、またあの無重力空間に投げ出されたかのような感覚。……うっ、やっぱりこれ酔うわ。

誰が迫間と四条を倒したかなんてことはもう置いておこう。

ここからは、自分たちの戦いに集中だ。

三章　監査官対抗戦・本選（３）（後書き）

まさかくじ引きだけでこんなに長くなるとは思わなかったｏｒｚ
一つのシーンにキャラが多すぎてムズイ。なんでこんな話にしたんだと少し後悔中の夙多史です。作者でこれだから読者の方はもっと混乱されるかもしれませんが……弁明の余地もないですね。ごめんなさい。

次回、ついに１００部目となります。１００話ではないんですがねｗ
１００部目だから景気よく戦闘を……と思いきや、まだでした。ごめんなさい。１０１部ではちゃんと戦ってますからホント！

ところでトーネメント表とかあった方がわかりやすいでしょうか？　作って載せようとは思ってたのですが面倒だったのでやめました。ごめんなさい。

今日は謝ってばっかりだ（汗）

人気投票、零児と鷹羽に入れてくれた方、ありがとうございます♪
出番めっちゃ少ない鷹羽に入っててびっくらこきました＾＾；

次回の更新は９月１０日（土）です。

……あ、レト喋ってないや。ごめんなさい。

三章　監査官対抗戦・本選（４）

いきなりでなんだが、俺は異界監査局という組織に精通しているわけではない。知らないことは円周率の十万桁目の数字はなんだと問われるくらいわからんし、知ってることは本当に些細な程度だと思う。

つまり、異界監査局が所有するイタリアの円形闘技場（コロッセオ）にも引けを取らないバトル施設の存在は知っていても、一体日本のどこに隠し持っているのかは見当もつかない。そもそも日本なのかも疑念すべき箇所だ。携帯も圏外だしな。

昔、大闘技場の高所から辺りを見回したことがあるんだが、深森と山脈に囲まれていて集落の一つも見当たらなかったことを覚えている。アマゾンの奥地にでも行かなきゃこんな場所はないんじゃないか？

地球観測衛星が高みの見物を決め込んでいる時代だ。こんな場所などとっくの昔に見つかっていなけりゃおかしい。

と俺はそう思うわけだが、どうやらここには強力な『封印』が施されていて、普段は人が侵入することもなければ空から見つかることもないなんとも都合のいい地帯らしい。あ、これも知っているのは表面だけだぞ。なぜ封印されているのかまでは聞いたことすらないからな。

まあ、今はそんな話なんてどうでもいい。白い部屋から強制転移させられた俺たちは、気づいた時にはこの世界文化遺産に登録を申請すれば二つ返事でＯＫ貰えそうな大闘技場の対戦フィールドに出現していたんだ。

次の瞬間――

ワァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

アアアッッッ！！

長径約二百メートル、短径約百六十メートルという楕円形のドでかい闘技場が、地鳴りが起こるほどの大歓声に包まれた。

見回せば、対戦フィールドをぐるりと取り囲む観客席には甲子園の決勝時みたく大勢の観客で満たされていた。軽く万は超えてるんじゃないか？

これは日本だけじゃない。世界中の異界監査局の局員や監査官、またはこの地球で暮らしている異世界人たちや、桜居のような『こちら側』を知る地球人が本選を観るために集ったのだ。こんなイベントをやってんのは日本だけだからな。

開放されている天井部分には日除け処理が緻密に整えられており、観客席に真夏の直射日光が当たらないように設計されている。しかしこれだけの熱気を放出する観客席から熱中症患者が出ないわけがない。そこは抜かりのない監査局医療班が各所に待機していることだろう。

恐らく、この観客たちの八割が『こちら側』を知る一般地球人と、監査局の保護を受けているだけの力なき異世界人で占められているはずだ。監査局員が残りのほぼ二割、余った０．なんちゃらパーセントが監査官って感じだな。

もっと言うと、海外の監査局がこういう催しを開かない理由の一つに、希少な監査官を数日とはいえ担当地域から離れさせたくないってものがある。だから観客席にいる監査官たちは、予選敗退した日本の監査局所属のやつらでほとんどってことだ。

「壮観だな。ラ・フェルデの国立闘技場にも匹敵しそうだ」

圧倒的な観客数に気圧されることなくセレスが感嘆する。もしセレスがこの場で武装制服ではなくメイド服だったら……羞恥心のあまり昇天しそうだ。無論、俺も女装姿でこの場に立たされたら腹切って死ぬ。迷いなく。

現在、大闘技場では本選出場チームの簡単な紹介が行われている。ここが野球場だとすればスコアボードがありそうな位置に巨大モニターが設置されており、どこで盗撮したのか履歴書に貼っても恥ずかしくない顔写真がでかでかと表示されていた。今映っているあれは、銀髪翠眼の凛々しい美少女――セレスと、誰だあの鬱そうな面した冴えない野郎は？　……俺か。

「――って今思えば俺ら一番手じゃないか！？　うわぁ、『見世物』って考えると盛り上げる自信ねえぞ」

「大丈夫だ、零児。戦闘が始まれば周りなど見えなくなる。気にせず自分のスタイルで戦えばいい」

「知った風に言うじゃないか、セレス。経験あるのか？」

「前に言わなかったか？　ラ・フェルデでは聖剣十二将の互角試合がこういう見世物として行われるのだ。当然、聖剣十二将の私は出場経験がある」

一回戦で敗れてしまったがな、とセレスは悔しそうに付け足した。

「その騎士（チス）の言う通りネ」

「客人なんてカボチャ思うといいアル」

ぴょん。しゅたっ。

軽業師のような動きで二着の赤いチャイナドレスが宙を舞い、俺たちの前に躍り出た。

中国風狐耳少女の双子――第二十八支局代表、リャンシャオとチェンフェンだ。

間違えないように確認すると、三つ編みポニーテールが姉のリャンシャオ、三つ編みツインテールが妹のチェンフェン……で合ってるはず。髪型まで同じだったら本気でどっちがどっちかわからないくらい、この双子は似てるんだ。

「そうか、あんたらが俺たちの本選最初の相手だったな」

言うと、双子は狐耳をピコピコ動かした。うっ、やばい。触って

みたい……。
「最初の相手、はちょっと間違いネ」
「あん？　なにがだ？」
リャンシャオの発言に眉を寄せた俺に、チェンフェンがニシッと笑って答える。
「最初で、最後の相手アル」
……。
この狐女ども、戦意剥き出しのギラついた目をしてやがる。やる気も自信も満々。こいつらだけに言えることじゃないが、間違いなく、予選で俺らが戦ったどの相手よりも強い。
油断はできない。でも怯んだ様子を見せるわけにもいかんし、こちらもちょっと余裕ぶっとくか。
「あんたらが、俺たちに本気を出させるほどの相手だといいんだけどな」
即興で考えた適当な台詞を聞いた双子は顔を見合わせ、同時に犬歯を剥いて笑い、声を揃えて言う。
「「面白いこと言うアル、レイ・チャン」」
「違う！　その名前は決定的に間違ってる！」
「香港の人アルか？」
「違うっつってんだろ！　えっと……ポニテだからリャンシャオか。俺は日本人とのハーフだっ！」
ああ！　恐れていた事態が！　あそこで観客たちに気前よく手を振っている着物のアホのせいで中国人と間違えられちまった！
「零児、動揺するな。確かにこの者たちは強いだろう。だが、我々も力を合わせれば負けることはない」
「うん、セレス、いいこと言ってるけど俺の心境は読み間違ってるからね」
俺たち、実はぐだぐだだな。対する双子は会話を引き継いだり一字一句同じこと言ったりと、どうもお互いの心が強く通じ合っている。激しく不安になってきた。

「負けはしない、ネ。レイ・チャンの相棒（トンフォ）は自信過剰アル」
お前らが『自信過剰』とか言うな……えっと、チェンフェンか。
「事実を言ったまでだ。我々は負けない」
「へぇ、じゃあ君（ニー）はどんな武器使うヨ？」
「見てわかるだろう？　剣……ッ！？」
ニシシ、と悪戯っ子ぽく笑うチェンフェンに訊かれたセレスは、背中に手を回して絶句した。俺も思わず目を丸くする。

聖剣ラハイアンが、消えていた。

いやそれはおかしい。ここへ転移して来た時には確かにセレスは背負っていた。その辺に落としたのかと思って俺は地面を探したが、学校のグラウンドと同じ砂が敷き詰められているだけでなにも落ちていない。
「探し物はこれアルか？」
シャリリ。鞘と刃が擦れ合う音が聞こえた。
バッ！　と俺とセレスは地面から視線を前に戻す。そこには、自身の身長よりも長い剣を、敵将の首を討ち取った足軽兵よろしく片手で掲げるリャンシャオの姿があった。
い、いつの間に？
この狐女、なにをやったんだ？
俺もセレスも、盗られたことに全く気づかなかったぞ。
「二人ともキツネにつままれた顔してるアル」
俺らを馬鹿にしてケラケラ笑うチェンフェン。
「綺麗な剣アル。是非コレクションに加えたいネ」
うっとりと聖剣を見詰めるリャンシャオ。
「か、返せ！」
我に返ったセレスがリャンシャオからラハイアンを引っ手繰る。
意外にも素直に返してくれたことに俺は驚きつつ、
「あんたらも、賞品の剣を狙ってるのか？」

剣をコレクションしてるみたいだから訊いてみた。もしもそうなら一層負けるわけにはいかないな。

「そうアル」リャンシャオはコクンと頷くが、「でも、第二候補ネ」

「第二候補？」

賞品はチームに一つではなく二つまで選べることになっている。そうしないと余計な争いを生みかねないからだ。だから第一も第二もそんなに変わらんと思うが……。

「剣集めが趣味なのはリャンシャオだけヨ。ワタシたちは姉妹で同じ物を狙ってるネ」

それは、と溜めを作り、双子の狐耳姉妹は恍惚とした表情で同時に口を開いた。

「「世界の高級食材盛り合わせ！！」」

キャー、と『言っちゃった』的にテンションを跳ね上げる姉妹。

「見たことない食材いっぱいあったヨ！」

「満漢全席作るネ！　あれ夢だったネ！」

「腕の見せ所アル！」

「んん～、楽しみ過ぎて妄想が止まらないヨ！」

……あ、そっすか。

一気に心がドライになった俺は、両手を頬にあててあれやこれやを想像している彼女たちをジト目で見詰める。声も同じだからどっちがなにを喋ってるのかさっぱりわかんね。

と、そうこう騒いでるうちに開会式（？）が終わったようだ。

適当に時間を過ごしていた予選通過者たちに誘波がふわふわした笑顔を向ける。

「では、皆さんは一度選手控室に入ってください。その後すぐに一回戦第一試合を開始しますので、レイちゃんチームとリャンフェンちゃんチームは準備をお願いします」

「「名前混ざってるネ！」」

軽くショックを受けたらしい双子の同時ツッコミは笑顔で風に流し、誘波は続ける。

「なお、一回戦第三試合以降はお昼休みを挟んで午後二時からとなります。午前中に試合のない方々は、控室後方にある転移魔法陣で学園に戻っても構いません。ご自由に過ごしてくださいね」

三章　監査官対抗戦・本選（４）（後書き）

次回、やっとこさ一回戦突入です。
一話一戦でやっていかないと三章の話数がやばいなぁ。

人気投票、リーゼに入れてくれた方、ありがとうございます。まさかここでファーストヒロインに票が入るとは思いませんでした＾＾；

テイ〇ズの新作に没頭しているので次回火曜更新できるかわかりませんが、頑張ります。

三章　監査官対抗戦・本選（5）

そうして、一回戦第一試合が始まった。
準備と言っても俺は特にすることもなく、セレスも既に武装していた。相手の双子も同様で、チャイナドレスから特に変わった様子もなくバトルフィールドにて俺たちと対峙している。
チーム二人ともに気絶、降参すれば負け。ここには場外なんてものはないから条件はそれだけだ。当然、相手を殺してはならない。
時間制限は一時間。決着しなければ勝敗は判定任せとなる。
時が止まったかのような静謐。ピリピリとした空気が肌と神経を刺激する。
長い。一秒一秒が分単位で流れるような感覚の中、俺は気持ち体勢を低くして身構える。
そして――ドォオン！！
モニターに『ＢＡＴＴＬＥ　ＳＴＡＲＴ』の文字が表示されるのと同時に、開戦の花火が景気よく打ち上がった。

〈魔武具生成〉――日本刀。

俺の右手に集った魔力が、最も得意とする武器として具現する。
「気をつけろセレス、相手の手の内がわからない」
「承知している。零児こそ油断禁物だ」
セレスは相手の双子から目を離さず超長剣を抜き放つ。対する双子もカンフーのような構えを取った。あいつらは素手なのか。なんか、こっちだけ武器使って申し訳ない気分だ。棍にするべきだったか。
「チェンフェン、景気づけに一発派手にお見舞いするネ！」
「了解！　出し惜しみはしないアル！」
ポン！

凄まじくマヌケな音がした。なんだあれ？　チェンフェンの前にデフォルメされた雲のような白煙が発生したぞ。

ポン！　ポン！

初めの小爆発を皮切りに、卒業証書とかを入れる丸筒のキャップを抜いた時のようなアホらしい音が連続して響く。

空中に無数にたゆたう白煙。視界を悪くさせる作戦かと思いきや、その全てから一斉に魚影が飛び出した。

「なにっ！？」

召喚術？　いや生き物じゃない。両先端に龍の頭と魚の尾を模ったハリボテがついた竹筒だ。その左右にはヒレのように取りつけられた四つの小筒があり、そこから噴射される炎で飛翔している。

「あれは、火龍出水（フォロンチュースイ）じゃねえか！」

昔の水軍が敵船を焼き討ちするために用いたロケット兵器だ。こいつら素手じゃねえぞ！　カンフーの構えはフェイクかよ！

「いきなりで驚きはしたが、狙いが定まってないぞ？」

セレスの言う通り、龍頭の空中魚雷群のほとんどが俺たちに掠りもしない軌道を飛んでいる。だが――

「違うぞセレス！」

俺が叫んだ直後、全ての龍の口が火箭――火薬の燃焼ガスを利用して飛翔するロケット花火みたいなもの――を吐き出した。火龍出水は多段式ロケットなんだよ。

まるで龍の息吹がごとく、一つの口からいくつもの火箭付きの火矢が飛び出し俺たちを襲う。狙いが定められているわけではないが、この数はとてもじゃないが避け切れないし、捌き切れない。最近は数撃ちゃ当たる戦法が流行ってるってことがよくわかるなおい。

例に漏れず、防ぐしか手はないな。
「セレス、盾を生成する。俺の後ろへ」
「ダメだ零児！　今武器を捨てるな！」
後ろへと言ったのに、セレスは止める間もなく俺の前に立った。
「前方だけならば私が防ぐ！」
セレスは剣尖を斜め下向きに構え、迫りくる火矢を見据えたまま地面に大きく半円を描く。瞬間、聖剣ラハイアンが強烈に輝き、その切っ先で抉られた地面からも同じ光が爆発的に噴出した。
天高く立ち昇る光の壁。
眩いが、痛くはない。寧ろ温かくて優しい感じさえする。なのに、そんな白光に包まれた火矢は、キャンプファイヤーに飛び込む虫ケラのごとく次々と消滅していった。
こんなこともできるのか、セレスの聖剣技は。
なんて感心してる場合じゃないな。
「呆けるな零児、来るぞ！」
光の壁を迂回する形で双子が左右から挟撃してきた。セレスはこれを読んでいたんだ。だから俺に武器を捨てさせなかった。俺の〈魔武具生成〉は制限上、一度に一つの武具しか生成できない。大盾なんて持ってたらやばかった。
俺とセレスは背中合わせとなって駆け迫る双子と相対する。俺の方が三つ編みポニテの姉――リャンシャオ。てことはセレスの方が……は？　向こうも三つ編みポニテだと！？
「「覚悟するネ！」」
二人のリャンシャオが同時に同じ台詞を叫び、低い体勢から鋭い掌底を放つ。今度は本当にカンフーだ。
「く、わけわからんがさせるかよ！」
恐らく見えてない間にチェンフェンが髪を一つに束ねたんだ。俺はリャンシャオＡ（仮）の掌底破を間一髪でかわし、峰に返した日本刀で気絶目的に後ろ首を叩く。
ボン。

リャンシャオAが白煙と共に破裂した。
「……はい？」
目を点にする俺の前を、ヒラヒラと短冊のような紙片が舞う。つ
いつい取ってみると、それにはこう書かれていた。

『ハズレ』

ムカつく！
なんぞコレ？　分身の術とかそういうアレか？
セレスの方を見ると、そっちのリャンシャオもアホらしい音を立
てて破裂していた。
と――しゅたっ。
空から、三人目のリャンシャオが降ってきた。セレスの真後ろに。
ニシッと笑ったそいつは――本物だ！
「セレス！？」
「遅いネ！」
振り向いたセレスの顎下を、リャンシャオの振り上げた爪先が掠
める。咄嗟にセレスは聖剣を横薙ぎに振るったが、リャンシャオは
身軽にもその場で飛んでかわし、隙のできたセレスの鳩尾に双掌を
打ち込んだ。
「がはっ」
くの字に曲がったセレスの体が宙に浮いて吹っ飛ぶ。
息つく間もなくリャンシャオのターゲットが俺に変更される。
足下で爆発でも起こったかのような跳躍で一瞬にして俺との距離
を詰めたリャンシャオは――ポン！　ポン！
広げた両手に二振りの湾曲刀を出現させた。日本刀よりも刃の身
幅が広く、柄尻に赤い刀彩が装飾されている。重量と遠心力で高威
力を発揮する中国の刀――柳葉刀（りゅうようとう）だ。
「アイヤーッ！！」
気合いと共に身を大きく捻った回転斬りが来る。完全に素手だと

思い込んでいた俺は、一閃目はどうにかかわしたものの、二閃目は左二の腕を浅く斬りつけられてしまった。半袖の制服がもっと短くなり、つーと赤い液体が腕を這う。

だが――

「隙だらけだ！」

二撃で仕留め切れず、回転の遠心力で背中を見せることとなったリャンシャオに俺は日本刀を振り被り――

ギラッ。

遅れて引っ張られてきた三つ編みポニーテールの先端が、鈍く光ったことに気がついた。

「――ッ！？」

ギィイン！！

俺が即座に防御に回した日本刀と、ポニテに隠された『三本目』の柳葉刀が激しい金属音を奏でた。

重量ある一撃に俺はバランスを崩して転がった。なんとか受け身を取って体勢を整えられたのは吉だったな。

「アレを見切るとは、なかなかやるアル、レイ・チャン」

リャンシャオがくるくると空中で前転しながら追撃をかけてくる。回転の勢いを乗せた二本の柳葉刀が同時に振り下ろされる。俺はどうにか横に転がって避けるも、柳葉刀が地面を大きく抉ったことで発生した石礫が弾丸のように体を撃つ。

「くそっ」

痛みを気合いで押し殺して峰打ちを放つ。だが、軽業師のように身の軽いリャンシャオは簡単にかわしてしまう。

「峰打ちなんて生温いことしてても当たらないアル」

「それもそうだ」

こいつらレベルの実力者に手加減して勝てるほど俺はチートじゃない。殺さないまでも、重傷負わせて病院に送りつける気概で相手しないとこちらがやられる。セレスも心配だが、敵から目を離すわけにはいかない。

「ふふん、覚悟が決まった目になったネ」
再び攻めてくるリャンシャオに、俺は日本刀の袈裟斬で応戦。しかし――
ポン。
例のマヌケな爆発音が鳴り、リャンシャオが縮んだ。
「はい？」
見た目幼稚園児くらいになったリャンシャオの頭上を日本刀が空振る。擦り抜けてきた子供リャンシャオは柳葉刀を地面に突き立て、鉄棒で逆上がりをする要領で俺の股間を蹴り――！？
「――ッッッ！？」
声にならない悲鳴を上げてしまったことは、人類の半数の人間ならわかるだろう？　この全身に迸る思わず転げ回りたく感覚は痛いとかじゃないんだ。でも表現するなら『痛い』が一番近い。
なんか、最近、よくお股を蹴られる気がする……。
「アハハッ！　面白いくらい悶え苦しんだアルね」
元の姿に戻ったリャンシャオが柳葉刀の背で肩をコンコンと叩く。畜生、ケラケラ笑いやがって。御婿に行けなくなったらどうする？
「い、言っとくが、も、もう同じ手は、食わねえぞ」
生まれたての小鹿のごとく内股で立つ俺を、どうか見なかったことにしてくれ。足のガクガクが止まらねぇ……。
「そうアルね。ここからは真っ向勝負アル」
「――と見せかけて神火飛鴉（シェンフォフェイヤー）！！」
ゴオオオオ！　という激しい噴出音に視線だけを動かすと、不格好な巨鳥のハリボテが腹部に装着された火箭を推進力に突っ込んできていた。そのハリボテの上には勝ち誇った憎たらしい笑みを浮かべるチェンフェンが四つん這いで搭乗している。神火飛鴉。内部に爆弾を詰めた攻城用の無人特攻機だ。人乗ってるけど。
「あれもこれもどっから出してんだよ！」

俺は回避しようとサイドステップを試みるが、チェンフェンが巧みにハリボテを操作して俺を追跡してくる。
「逃がさないヨ！」
さらにリャンシャオが両手の柳葉刀を虚空に消し、代わりに出現させた縄付きの鉄製鉤爪――飛爪を投げつけて俺の日本刀と左腕を絡め取った。やべぇ。
「中の火薬は死なない程度に調整してるネ。だから安心して吹っ飛ぶといいヨ」
神火飛鴉から飛び降りつつ、チェンフェン。
「そしてあの騎士みたくさっさと倒れるアル」
ぐいっとなまら強い腕力で俺を神火飛鴉の方へ引っ張りつつ、リャンシャオ。

「勝手に私を倒したことにしないでもらいたい」

凛とした声が闘技場に響いた。刹那、宙を駆ける渦巻状の光刃が俺を拘束していた飛爪の縄を斬り、ブーメランのよう軌道を曲げて神火飛鴉をも両断した。
ハリボテ内部に仕込まれた爆薬が暴発し、まだ近くにいたチェンフェンを巻き込む。
「アウチャーッ！？」
「ちょ、チェンフェン！　こっちに飛んでくるなぎゃう！？」
爆風で吹っ飛んだチェンフェンがリャンシャオに激突し、二人仲良く変な悲鳴を上げて遠くまで転がっていった。
「大丈夫か、セレス」
「少し意識が飛んでいたが、問題ない」
頑丈だな、とは失礼そうなので言わないことにした。
「よくもやってくれたネ！」
「こうなったら本気出すアル！」
ボフン！　と特大の白煙が闘技場の一画を覆った。

「「――ッ！？」」

すぐに風に流れた白煙の中から現れたものは……マジかよ。クレーン車に似た巨大投石機と、その前方に整列されている台車と合体した大砲が三門。そして、それらの兵器を扱える人数まで分身したリャンシャオとチェンフェンだった。じゅ、十人くらいいるぞ。

な、なんなんだよ、こいつら。どこの国に戦争ふっかける気だ？

「ワタシたちは『移動武器庫』って呼ばれてるネ」

「狐妖術（こようじゅつ）って呼ぶアル。分身、収納、変化、いろんなことができるヨ」

あんだけいると誰が喋ったやらさっぱりわからん。だからやつらの声は無視して俺は兵器を確認する。

投石機はてこの原理を応用した回回砲（ホイホイパオ）、大砲は高射程・高強度・高威力を誇る拠点防衛に用いられていた紅夷炮（ホンイーパオ）ってとこか。どちらも歴史博物館にでも展示している方が自然な代物だぞ。

「どうする、零児？」

「突破するしかねえだろ。幸い、あれらは古い兵器なだけに連射もできなければ発射速度も遅い」

了解の意思をセレスは頷きで返した。まさか母さんに叩き込まれた専門外の無駄知識がこんなとこで役に立つとは思わなかったな。

「行くぞ！」

「発（て）ぇーッ！！」

俺とセレスが地面を蹴ったのと、指揮官風チェンフェンが分身たちに指示を出したのはほぼ同時だった。

三つの大砲が時間差で砲弾を吐き出す。爆音が轟き、闘技場に火薬の臭いが蔓延する。

砲弾の速度は凄まじいが、どの大砲から発射されるかを見極めれば避けるのは容易い。銃よりもわかりやすい。俺たちは難なく砲撃をかわしつつ敵陣に迫る。

やや誘われてる感がするのは否めないが、あの指揮しているチェンフェンが本物だろう。だとすれば、本物のリャンシャオはどこだ？

俺は砲弾を日本刀で受け流しながら目を彷徨わせ……見つけた！
本物のリャンシャオは、投石機に石の代わりに乗っていた。たぶんあいつで間違いない。他の分身とは違い、一人だけやけに存在感のある武器を両手に握っているからだ。
尖端が麒麟の角のように二つに分かれた大刀――麟角刀（りんかくとう）。その形状により刺突と切断に長けた中国武術における形意門特有の武器だ。
投石機の張り詰められたロープが切られ、リャンシャオは自らが砲弾となって突攻する。
「無茶苦茶なことを」
俺の前を先行していたセレスは立ち止まるが、逃げない。聖剣を中断に構え、スピンまでかけて飛んでくるリャンシャオを迎え撃つつもりだ。
飛んで火に入るなんとやら、だな。今も砲撃が続いている大砲と同じだ。来るとわかっているなら対処はでき……ん？
俺はその時、視界に映ったそれがなんなのか一瞬では理解できなかった。

二本の麟角刀を握って回転飛行するリャンシャオ。その後ろを追随している二つの砲弾に、ちょこんと耳と尻尾が生えてないか？

要は、全部フェイク。
あのド派手な兵器と分身たちは、ただの目眩ましだった。
「セレス、そいつじゃない！　後ろの砲弾を狙え！」
「なに？」
俺の言ったことに戸惑いを見せたセレスだったが、彼女も言われて気づいたようだ。俺は左、セレスは右の砲弾に正面から突っ込む。
「くっ、よく見抜いたネ！」
「ワタシたちの変身は完璧だったはずアル」
ポポン！　と白煙を纏って二つの砲弾が双子に変化する。いや、砲弾の変化が解かれた、が正解か。

ガキィン！！　そんな剣戟音が二重に響震した。
俺の振り下ろした日本刀は正真正銘本物のリャンシャオの麟角刀に、セレスの聖剣はこちらも正真正銘本物のチェンフェンが握る鉄扇に受け止められていた。ちなみに無視された分身リャンシャオは、回転したまま飛び続けて壁に激突し、勝手に爆散していた。
「零児、そっちは任せたぞ」
「オーケー、任された」
俺は組み合いながら砲撃にも備えようとしたが、なんか知らんが他の分身たちも消えてるな（兵器はそのままだけど）。
「もう化かしごっこはなしだぜ」
「それはワタシたちの勝手ヨ」
そう返されたが、もう腹の立つ術を使わせる暇なんて与えないぜ。たまにフェイントを織り交ぜつつ俺は連撃の手を休めない。だが、リャンシャオも巧みに防いでは隙あらば反撃してくる。
一閃。また一閃。
防ぎ、弾き、刃を滑り込ませる攻防。
まさに剣戟戦。止むことのない金属音が闘技場を支配し、観客たちはさぞかし呆然としていることだろう。
飛び上がったリャンシャオの回し蹴りが俺の鼻先を掠める。後からやってくるポニテに隠された刃が頬の皮膚を抉る。
「チッ」
両手の麟角刀とポニーテールに仕込んだ柳葉刀という三刀流で踊るように動くリャンシャオを、日本刀一本で凌ぐのは正直やばい。徐々に押されていることが自分でもわかる。
「アハハッ！　ワタシの剣技にここまでついてきた男はレイ・チャンが初めてアル！」
近接武具の専門家を自称する俺だが、この双子も同じだ。様々な武器の扱いに慣れていやがる。俺と違うところは、遠距離武器も扱えるってことだな。
なんにしても強い。相手を化かすようなやつは、自分自身はとて

も弱い。そう相場が決まってることを知らんのか。
こうなりゃ、俺もとっておきを温存せずに使っちまうか？
……いや、まだ早い。優勝を狙ってるんだ。今は出し惜しみするべきだろう。
それに、このままでも勝機がないなんてことはないしな。
「そろそろだな」
「余裕ぶるのはいい加減にするネ！」
下から突き上げてくる麟角刀の枝分かれした尖端を、俺は振られた腕の方向に身体をずらしてかわし、斜め死角から日本刀を打ち込む。だが、リャンシャオはそれにも反射的に反応して斜め後ろに飛んだ。
着足と同時に身を屈め、全身をバネにして飛びかかってくるリャンシャオに対し、俺は——日本刀を捨てた。

〈魔武具生成〉——トゥ・ハンド・ソード。

「——ッ！？」
俺の右手に突如出現した百八十センチを超える巨大な両手剣に、リャンシャオは目を見開いて急ブレーキをかける。突っ込んだら斬られると判断したのだろう。正解だ。俺は生成と同時に振り下ろしていたからな。
だがそれでも、勢いのついていたリャンシャオはトゥ・ハンド・ソードの間合いから逃れられてなどいない。咄嗟に両手の麟角刀をクロスさせ、超重量級の一撃を受け止めた。
瞬間——バキン！！
二本の麟角刀が呆気なく砕け折れた。
「ふぇ？」
唖然とするリャンシャオがペタンと尻餅をつく。
彼女の扱う武器は全部普通に地球産だった。魔力で鍛えられた俺の武器を何度も受けて耐えられるわけがない。だから武器の限界を

悟られる直前まで打ち合い、ラストは思いっ切りでかい一撃を加えて一気に圧し折ってやったんだ。
トゥ・ハンド・ソードの剣先を突きつけられた腰抜け状態のリャンシャオは――
「こ、降参アル……」
ポン！　と狐妖術とかで右手に白旗を取り出してフリフリした。
用意がいいな。
「セレスは？」
まだ戟音が続いている。
両手に開いた鉄扇で文字通り舞い踊る戦い方をするチェンフェンは、防戦一方だった。セレスの光輝く超長剣の一閃を上手く防いだりかわしたりしているものの、リーチに差があるためなかなか懐に攻め込めないでいるようだ。
そもそも、チェンフェンの動きは姉に比べて微妙に緩慢だ。火龍出水や神火飛鴉を扱っていたところを鑑みるに、たぶん妹の方はそういう遠距離兵器系が得意なのだろう。
「これで終わりだ！」
大上段から振り下ろされた聖剣をチェンフェンはバックステップで回避するが――
「輝け！」
地面に叩きつけられた聖剣の尖端が、まるでその場所に地雷でも埋め込まれていたかのような光の爆発を引き起こした。
「ぎゃう！？」
巻き込まれたチェンフェンが吹っ飛び、目を渦巻にしてダウンする。頭の狐耳だけがピクピクと痙攣していた。
「あーあ、チェンフェンもやられたアルか。完敗アル」
たはは、とリャンシャオは苦笑した。狐耳と尻尾が脱力したように垂れている。
「悪いな。俺らはどうしても負けられねえんだ」
俺はトゥ・ハンド・ソードを手放して消失させる。そんな俺を、

リャンシャオは不思議そうなきょとり顔で見上げていた。

『一回戦第一試合、勝者はレイちゃんとセレスちゃんチームでぇーす！』

今になって、ずっと実況していたらしい誘波のアナウンスが耳に届く。せめてそこは本名で勝利宣言してほしいものだ。

三章　監査官対抗戦・本選（5）（後書き）

※双子の能力は零児のパクリではありません。作っているのではなく、取り出しているのです。念のため。

人気投票、リーゼ・セレス・鷹羽に入れてくださった方、ありがとうございます！

次回の土曜日はもしかするとお休みするかもしれません。これまでもそんなこと言いながらしっかり更新してきましたが、今回は本当に余裕がないのです。

三章　監査官対抗戦・本選（6）

どこぞの双子が武器兵器を叩き売りしてくれたおかげで、フィールド整備のためのインターバルは思いのほか時間がかかっていた。
「やったな、零児。この調子で明日の試合も勝とう」
「そうだな。勝たなきゃ優勝できねえもんな」
出入口に鉄格子でも嵌めればたちまち牢獄と化してしまいそうな選手控室にて、俺は凛々しい笑みを浮かべるセレスと控えめなハイタッチを交わした。
「とはいえ、俺には不安しかないんだけど」
次に当たる相手はまだ決定していないものの、予想はできている。あいつらが勝ち上がったとして、果たして俺らが勝てるのか激しく心配だ。
「レイ・チャン」
軽く室内を見回してみる。午後から試合があるやつらは全員いない。リーゼとレランジェもだ。次の試合をするチームも控室の外に出ているため、この場にいるのは第一試合を終えた俺たちだけだな。
「ねえ、レイ・チャン」
「いえ、人違いです」
稲葉から聞いたところによると、リーゼたちは俺らの試合が決着した後すぐに転移陣から学園に戻ってしまったらしい。こういう試合観戦はあのお嬢様好みだと思ったんだが、どうやら俺ら以外は本気で眼中にないみたいだな。
「嘘はよくないネ、レイ・チャン」
「その人なら引っ越しましたよ。あとお前が言うな」
まったく、他のやつらも少しはライバルの分析くらいしろよ。なんか拍子抜けじゃないか。出し惜しみなんてせず、入院している間に温めておいた理論と設計を試しておけばよかったぜ。
「レイ・チャン！」

「零児、呼んでいるぞ」
「違う！　俺はそんな名前じゃねえ！」
はっ！　しまった。穏便に他人を演じるつもりだったのに……。
「……なんの用だよ、リャンシャオ」
俺は渋々とチャイナドレスっ娘の三つ編みポニーテールを確認して訊ねた。もっとも、気絶した妹の方は医療班に担架で運ばれていたからここにはいないのだけど。
リャンシャオは薄い胸の前で両手の指を絡ませながら、上目遣いに俺を見詰めて口を開く。
「レイ・チャンは、強いアル。ちょっと、惚れたヨ」
「……は？」
俺の聞き間違いだと嬉しいんだが、今、変な言葉が聞こえたぞ。セレスもなにやらあんぐりとしているし、確認のためにも訊き返した方がいいな。
「悪い、歓声がうるさくて聞こえなかった。もう一回言ってくれないか？」
頼む、俺の幻聴であってくれ。
「二回も、言わせないでほしいネ。ワタシはレイ・チャンに惚れたアル」
くっそ幻聴じゃねえ！
ポッと頬を赤く染め、体をくねくねさせて乙女のように恥じらうリャンシャオ。頭の狐耳がピコピコ動き、尻尾も飼い犬みたく左右を忙しなく往復しているぞ。
「レイ・チャン、提案があるネ」
「な、なんだよ」
「今から結婚するヨ！」
「はぁあッ！？」
リャンシャオが勢いよく抱きついてきた。ひぃ！　と俺の口から情けない悲鳴が飛び出す。
「ちょっと待て落ち着け！　たぶんお前は俺がどっか変なとこを叩

いたせいで正気を失ってるんだ。つか離れろ！」
「そんなことないヨ。ワタシは本気ネ。それにワタシの種族の女は屈服させられた男と結ばれないといけないアル。これは掟ネ」
なんて難儀な種族だ。
「リャンシャオが結婚するならワタシも一緒アル！」
「――ってチャンフェン!?　お前どっから現れた!?　医療班に運ばれたんじゃなかったのかよ!?」
「回復したネ」
「早っ!?」
左右の腕を半獣人の双子美少女に絡め取られる俺。なんだこの状況？　これなんてエロゲ？　誰か説明してくれ！
「ほう、結婚するのか、零児。ソレハメデタイナ」
セレスが温度のない口調で祝賀の意を表してきた。気のせいかな、翠色の瞳からは光が失われ、背後に『ゴゴゴ』と効果音がつきそうな黒いオーラを放ってらっしゃるように見えるんですけど。こ、コエェ……。
「ああ、そうだ。私の国では祝事の際に、剣を主役の左胸に突き立てるという習わしがあってだな」
「嘘だ！　祝い事の度に人死にの出る大参事じゃねえか！　聖剣を抜くな怖いから！」
「安心しろ。介錯をするは初めてだが、まあなんとかなる」
「介錯って言っちゃった!?」
「「レイ・チャン、もし優勝したら妻のために高級食材よろしくネ」」
「それが狙いかっ！　お前らいい加減に冗談はやめて離れろ！　ほら、次の試合が始まるぞ！」
俺は双子を振り払い、なぜか乱心しているセレスから逃げるように控室を出た。
控室の外に申し訳程度に置いてある観戦席に腰かける。対戦フィ

ールドの整備は終わっており、既に二チームが中央に屹立して視殺戦を繰り広げていた。
片や、俺と同じ本局所属のチーム、グレアム・ザトペックと稲葉レト。
片や、第十一支局代表の六本腕の巨漢――パクダ・カットゥヤーヤナと、包帯マジシャン――ハイカル・アズミ。
両チームは睨み合ったまま一言も喋らない。
そして、開戦の花火が打ち上がった。誘波が早速楽しげに実況解説し始めるが、雑音なので無視しておく。
「どうした、小童？　今回はぶつぶつと耳障りな台詞を吐かんのか？」
六本の腕を組むパクダが挑発的に口を開く。
「もしや、今になってビビっとんのか？　青いのう、小童。じゃけんどわしは手なぞ抜かん。昨日のようにはいかんぞ」
ニヤリ、とパクダは笑みを浮かべる。姿からして悪魔みたいなだけに、空恐ろしいものを感じるな。
だが、姿形だけではあのグレアムを畏れさせることなんてできやしない。
「てめえ的に、ぶつぶつ喋るやつは嫌いじゃあなかったのか？」
グレアムの前髪で隠れてない方の瞳に狂気的な光が宿り、パクダの表情筋が硬直する。
「知らないなら俺的に教えてやろう。時間には限りってもんがある。そいつァどっかの神かなんかが定めた絶対的ルールだ。この試合も一時間しかねェわけで、なにが言いてェかっつうとアレだ……つまらねェことほざいてねェで、さっさとかかってこい」
右手の人差し指だけを立て、クイクイっと『かかってこい』のジェスチャーをするグレアム。その挑発にパクダは完全に憤慨したようだ。真っ赤になった顔から湯気が出ている。
「容赦はせんけんの、小童。死なんよう気をつけい」
ポウ、とパクダの首にかけられている数珠――七つある玉の一つ

が淡く緑色に輝いた。途端、パクダがその巨体からは想像できない俊敏さで一気にグレアムとの間合いを詰める。

なんてスピードだ！　身軽なリャンシャオたちよりも断然に速い！

「擦り潰す！」

緑色の輝きが消え、次に別の玉が黄色に輝く。と、パクダの全身がみるみるうちに鈍色に染まり、筋肉質から硬質な印象になった六本腕が佇むグレアムに猛攻を仕掛けた。あの光沢ある硬そうなボディは、恐らく鉄。アイアンゴーレムかあいつは？

鉄骨を地面に落としたような生身の肉体ではありえない音が断続的に響く。パクダの拳は一撃一撃が凄まじく重い。地面が消し飛んだようなクレーターができるまであっという間だった。俺なんかが食らったら一瞬でミンチだぞアレ。

だが――

「今のが本気だとすれば俺的に非常に残念なのだが、準備運動だよなァ？」

クレーターの中央に立つグレアムは変わらぬ姿だった。元々薄汚れていた作業服が砂まみれになっただけのように見える。

「小童、わしの拳を全て受け逸らしたか」

パクダは驚いているものの、動揺はしていない。あの嵐のごとき連続パンチを全て受けて逸らされたのなら……どうりで地面だけが吹っ飛んでるわけだ。

グレアム・ザトペック。相変わらず常識外れなことしやがる。ところで戦っている二人の相棒たちは突っ立ったまま動いてないな。グレアムに任せとけば万事解決の稲葉はともかく、ハイカルは加勢してもいいだろうに。

「ふん、ならば受けられず避けられぬ攻撃をするまで」

黄色から赤色へ、数珠の玉の輝きと、輝く位置が移行する。

ボワッ！　ガスコンロを点火した時のような音を発し、パクダの全身が赤く燃え上がった。火達磨になったパクダだが、彼自身にダメージはないようだ。

炎を纏う能力。真夏の太陽がもたらすものとは違う直接的な熱気が、風に乗って俺にまで伝わってきた。

くそ熱っ！　そして暑い！　俺だったらあんなのの近くになんてとてもじゃないがいられないぞ。だからハイカルは見物を決め込んでるのか。

「面白ェ。そして楽しい」一番近くで熱を浴びているグレアムが笑う。「俺的に実に面白ェ力だ。そりゃアレか？　てめえ的にあと四つ能力があるってことか？」

「ほう、よく気づきおったな、小童。まあ、これだけ見せればサルでも気づくか。わしには万物を構成する七つの要素を纏う力がある。言っておくが、この数珠は能力のブースター兼制御用の魔導具じゃけん、壊したところで力が使えんなるいうことはないぞ」

万物を構成する七つの要素。インド辺りの自由思想家が唱えた七要素説に似てるな。確か、地・水・火・風・苦・楽・命だったっけ？　表沙汰にはならないが、そういう胡散臭い思想家や発明家などは大抵異世界と関わりを持っている。七要素説はパクダの世界に由来があるのかもしれん。

最初は風の要素で高速移動し、次に地の要素で硬質化、そして今は火の要素を纏ってるってことか。

「貴様はもうわしに触れることすら叶わん。今なら降参を認めちゃる」

「難しい話は俺的によくわからんが、熱いってことだけわかってりゃあ充分だ」

作業着の背に隠し持っていたトンファーを抜いたグレアムが――消えた。立っていた場所に砂塵だけが舞い上がっている。

その事態を俺が認識した直後――

「おぐぅ！？」

炎纏うパクダの腹に、グレアムのトンファーが減り込んでいた。

「丁度、俺的に太陽をぶっ壊してェと思ってたとこだ」

衝撃が遅れてやってくるほどの一撃に、白目を剥いたパクダの巨

体が背中側の壁まで何十メートルも吹っ飛んだ。大穴の穿たれた壁の真上にいた観客たちが悲鳴を上げる。

「あァ？　ミスった。加減して残り四つも見るつもりだったってのに、俺的に残念な話だ」

クルックルと両手のトンファーを回して独りごちるグレアム。パクダを殴打した方の手は、攻撃速度が速過ぎたせいか火傷すら負っていない。……化け物め。

「グレアム先輩！　後ろや！」

今まで空気だった稲葉が始めて声を発した。グレアムは「あァ？」と振り返り――

突如、背後に現れた巨大な棺桶に閉じ込められた。

ハイカル・アズミ。

もう一人の空気だったやつの仕業だ。グレアムとはかなり距離があるはずなのに、一体なにをしたんだ？

無言で煙管を吹かしているハイカルがパチンと指を鳴らす。すると、どこからともなくマッチで火をつけたような音が微かに聞こえた。

注意深く観察することで俺は気づいた。グレアムを封じ込めた棺桶の周囲の地面に、長いロープが複雑に張り巡らされてやがる。そのロープの先端は火がついていて、棺桶に向かって凄まじい勢いで走っている。

導火線だ。

ほっといたらどうなるかなんて考えるまでもない。棺桶は中のグレアムごと木端微塵だろう。

「あかん！」

稲葉が導火線の火を消すために動く。長さから考えてリミットは一分ってとこだな。それまでに助け出すか、グレアムが自分で脱出するしかない。ハイカル・アズミ、マジシャンなら自分が脱出マジ

ック見せろよ。
ゆらり、と。
実体化した幽霊のような足取りで、ハイカルが棺桶と稲葉の間に立ち塞がった。
「そこどきぃ！　紫雷装纏（しらいそうてん）――」
稲葉の体に紫色の電気が帯びる。その電気が稲葉の右手に集約し、槍のような形状を作る。
「――紫電滅槍（しでんめっそう）！」
叫んだタイミングで稲葉は雷の槍を投擲した。紫色の残光を引く雷の槍がレーザー光線よろしく宙を疾（はし）る。
ハイカルは無言。包帯の合間から覗く片目で迫る雷槍を捉えたまま、避ける素振りすら見せない。それどころか、被り穴を前方に向けたシルクハットを闘牛士のように両手で持ち――稲葉の雷槍を、帽子の中に吸い込んだ。
「なんやて！？」
驚き警戒して立ち止まる稲葉。対してハイカルは再び指を鳴らす。と、シルクハットから今しがた吸い込んだ稲葉の雷槍が飛び出した。
「あうっ！？」
反応が遅れ、稲葉は自分自身の技を浴びる。どうにか直撃は避けたものの、左腕をやられたみたいだな。帯電能力者の稲葉が電気で痺れることはないが、ダメージは少なくないはずだ。
「この、黄雷装纏（おうらいそうてん）――」
稲葉の体に黄色い電気が纏う。稲葉は帯びた電気の色によってなにかの能力が一つ向上するんだ。赤は腕力強化、青は跳躍力強化、紫は射程力強化といった具合にな。
確か黄色は……瞬発力強化だ。
「――瞬神剛破（しゅんしんごうは）！」
比喩でなく雷速でハイカルに肉薄した稲葉が速度を乗せた右拳を放つ。ちなみに技名を恥ずかしげもなく叫ぶのは稲葉がそれをカッコイイと思っているだけで、特に意味はない。

黄雷纏う超速の鉄拳がハイカルの顔面を捉えた――かのように見えた。

ハイカルは紙っぺらのようにヒラリとかわしていた。そして足を引っ掛けて稲葉を転倒させる。

顔面から派手にすっ転んだ稲葉はすぐに起き上がろうとするが――ガシャン！　地面に深々と突き刺さった手枷足枷で四肢を封じられてしまった。仰向けのまま地面に縫いつけられる形だ。あの枷も棺桶と同じく、突然そこに現れたように見えたぞ。どうなってんだ？

「くっ、動けへん……」

まずいな。新米監査官の限界だ。しかも稲葉は単純で読まれ易い。本選にまで勝ち上がってきたベテラン（？）の監査官相手に一対一はかなり厳しいぞ。

ハイカルは煙管を一つ吹かし、シルクハットからＳＦ映画にでも出てきそうな光線銃っぽい拳銃を取り出した。流石の俺もあんな武器は知らん。知ってるのは地球産だけだ。

銃口が稲葉の背に向けられる。急所を外して気絶させる腹なのだろう。

とその時だった。

ついに、導火線の火が棺桶にまで到達してしまった。

それがなにを意味するかは、ご想像通り。ダイナマイトを十個使っても足りそうにない規模の爆発が起こった。

あらかじめ油が撒かれていたかのように火炎が広がり、もくもくと黒煙が立ち昇る。辺り一面には微塵に砕けた棺桶の破片が散らばっている。

そんな中で、やつは立っていた。

「おかしい、俺的に不思議な話だ。なんかに閉じ込められたと思ったら急に眠くなっちまって、目ェ覚めたら周りは大火事ときた。ハハハ、なんだァこりゃ？　夢か？　夢だとしても俺的にわくわくす

るじゃねェか」
　火災を背景に悪魔のように笑うそいつは、言うまでもなくグレアムだ。作業服こそ焼け焦げてボロボロだが、本人に大したダメージはなそうだな。
「グレアム先輩……」
　相方の復活に瞳を輝かせた稲葉が歓喜の声を上げ――
「あんた、どこまでバケモンなんや？」
　――なかった。
「おう、誉めてもなんも出ねェぜ。それよりお前的になんだァその格好は？」
　グレアムは地面に縫いつけられた稲葉をまじまじと見、
「……いや、なんだ、悪ィ。俺的に後輩の趣味には口出ししねェ主義なんだ」
「ちゃうねん！　捕まっとるだけや！」
「あァ？　そうか、だったら話は早ェな。そこの包帯マンをぶっ壊せばいいんだろ？」
　思わず萎縮してしまいそうな闘気がグレアムから発せられ、ハイカルは銃口の照準を変更する。
　躊躇いなくトリガーが引かれる。
　名状しがたい拳銃から飛び出したなんだかよくわからない緑色の光線は、グレアムのトンファーに呆気なく弾かれた。
「おいおい、包帯マン。そこの後輩は俺様が無理やり対抗戦に参加させた大事な相棒なわけだが、なんで怪我ァしてんだ？　全身の骨をバラバラに解体するぞコラ！」
「！」
　気迫。たったそれだけで、片目を畏怖に見開いたハイカルは数歩後ずさってしまった。
　そしてそれが命取りになる。
　再度ハイカルが引き金に指をかけた時には既に、グレアムは彼の包帯顔にトンファーをぶち込んでいた。下向きに力が加えられてい

たのか、ハイカルはバウンドすらせずに地面に減り込む。
ピクピクと痙攣して完全に失神したハイカルだったが、まだ勝利の判定が行われない。
理由は、グレアムの後ろ。
「小童、今度こそ潰しちゃる」
パクダだ。まるで魂が輝いているような神々しい光を宿した六の拳が、一斉にグレアムへと殺到する。地面が割れ、轟音が響く。これまでとは桁違いの威力は、文字通り七要素の『命』を削って打ち放ったものだろう。
しかし――
「悪ィ、俺的に一度倒したてめェにはもう興味ねェんだ」
グレアムは、いつの間にかパクダの背後に回っていた。そして振り向いたパクダの顎を、飛び上がりながらトンファーで殴打した。
脳が激しく揺さ振られたパクダは、口から血反吐を撒き散らしながらよろけ、ドスンと糸が切れたように崩れ落ちた。
今度こそ決着がついたな。

『一回戦第二試合、勝者はグレアムちゃんとレトちゃんチームでぇーす！』

間もなくして、誘波の間の抜けたおっとり声と、観客たちの大歓声が闘技場の隅々まで響き渡った。

「あわわわ、レイ・チャンたちに勝ってたらあんな怪物と戦うことになってたヨ」
「相棒の娘はともかく、あのグレアムって男とは絶対戦いたくないアル」
俺のすぐ後から試合観戦を始めていたリャンシャオとチェンフェンが、怯えたように身を寄せ合って狐耳と尻尾を丸めているな。怯

えたいのは次にあいつと戦う俺の方だっての。
「零児、今のうちに訊いておきたいことがある」
セレスが騎士モードの凛々しい顔つきになってそう言ってきた。
俺はセレスがなにを問うてくるのか、だいたい理解している。
「グレアム殿は、一体どのような能力を持っているのだ？」
やっぱり、そうきたな。
次に戦う相手だ。隠す意味なんてない。俺は正直に答えることにした。
「ねえよ」
セレスはしばらく、なにを言われたのかわからないって顔をしていた。
「零児、すまない。私は『ネーヨ』という能力には心当たりがない。もっと詳しく説明してもらえないか？」
なんだよ『ネーヨ』って。逆に俺が訊きたい。
「あいつは魔術や超能力のような不思議パワーは使えないし、体内に魔力すら持っていない。普通の非力な地球人と同じなんだよ。……肉体構造的にはな」
馬鹿な、とセレスは驚愕した。当然だ、あんな戦いを見て誰がグレアムを無能力者だと思うもんか。俺だって最初はそうだった。
「あえてあいつの力がなんなのかを言葉にするとしたら、人並み外れた強靭な肉体と身体能力ってとこだな。あー、あとあのトンファーか。アレはグレアム専用に監査局が作った　絶対に壊れない特製品らしい」
ここまで話してもセレスは鵜呑みにできないようだ。腕を組み、難しい顔をして唸っている。
「要は、純粋に力だけの化け物ってことだよ」
俺だって馬鹿じゃない。優勝を狙ってるからにはグレアム対策だってちゃんと考えたさ。でもな、いくら考えても『決して近寄るな』『決して近寄らせるな』『遠距離から狙い撃て』くらいしか出てこない。俺にとってはどれも致命的に無理な話だ。

参ったね、どうしよ？

三章　監査官対抗戦・本選（６）（後書き）

やっぱりいつもより遅れた！？
でもちゃんと更新しましたから許してください。そして駆け足で書いたのでいろいろ変なことも見逃してください。後でちゃんと改稿しますんで。

人気投票、リーゼと誘波に入れてくださった方、ありがとうございます。まさかリーゼがメイドさんに並ぶ日が来るとは思いもしませんでした＾＾；

最近は一話７０００文字オーバーが多いですけど、シャッフルの読者的にそれはどうなんでしょうか？　いつもは３５００～６０００くらいで書いていたので。

次回の更新は９月２０日（火）……にできればいいなぁ。

三章　監査官対抗戦・本選（7）

対抗戦は昼休憩に入った。

大闘技場では異界監査局の新技術やらなにやらのデモンストレーションが行われているようだが、そんなものに興味はない。学園に帰って腹ごしらえと学際見物、ついでに喫茶の方も手伝わないとな。

セレスはまたメイド服を着せられることにいやいやと首を振っていたが、まずは教室に顔を出そうと思う。

「やあ、待っていたよ、白峰君にセレスティナ君」

二―Dの教室に入るや否や、メイド服に白衣といった奇天烈極まる格好をした同級生が、腰に手をあててどんと待ち構えていた。

「コラコラ、なぜ私の顔を見るや踵を返そうとするんだい、白峰君？」

肩を力強く掴まれた俺は強制的に向き直させられる。俺と同じ高さに目線がある長身の女子生徒――郷野美鶴は、その瞳に『もう絶対に逃がさないゾ』という意思の光を宿していた。

「いや、ちょっと急用を思い出して」

「私の顔を見て思い出す用とはなんなのかな？」

「お豆腐が切れてて」

「意味がわからないゾ、白峰君。君は嘘というか、ボケには向いていない」

「悪かったなツッコミ担当で！　俺だって好きでツッコんでるわけじゃねえんだよ」

っと、今の台詞自体がもうツッコミだな。知ってるか？　ツッコミは意外と大変なんだぞ。主に精神的に。まだ胃薬残ってたかな？

「それはそうと美鶴殿、私たちを待っていたようだが、なにか用事でも？」

セレスが胸の下で腕を組んで訊ねた。魅力的なバストが持ち上げられて周囲の野郎どもを釘づけにするが、本人に自覚はないな。ち

なみに聖剣以外の武装は控室のロッカーに仕舞ってあるから普通に制服姿だ。

「うん、用というのは他でもない」

セレスに対抗するように郷野も腕を組んだ。普段は白衣のせいで目立たないが、こいつはこいつでかなりけしからんものを持って…… …ハッ！　郷野のやつ、俺を見て笑ってやがる。この女、自覚してやるタイプだ！

「秘密イベントのことなら教えないぞ」

俺は視線を店内の方に逸らした。危ない危ない。まんまと郷野の計略に嵌るとこだったぜ。そこになんの意図があるのかは知らんけど。

「これはまたけち臭いなぁ。……白峰君をアトミック・ソルジャー」

「待て、今なんか俺を核実験演習で被爆させるような呟きが聞こえたぞ」

「ん？　白峰君、体中に真新しい切り傷がついているゾ？　どうしたんだい？」

無視された。いやそれよりもぬかった！　大したことない傷だから治療を受けるの忘れてた！

「や、これはなんでもないんだ。カッター使ってたら刃が折れて飛んできただけだ」

「いやいや、カッターの刃が折れたくらいでそんな傷はつかないだろう。まるで真剣でちゃんばらでもやってきたように見えるゾ？」

郷野め、相変わらず妙なところで鋭いな。

「どれ、私が手当てしてあげよう」

「必要ねえよ。こんなの、唾つけときゃ治るって」

「君はそんな根も葉もない民間療法を信じているのかい？」

おかしそうにクスリと笑われた。人を見下す態度がなんとも腹立たしい。

「約束しただろう、白峰君。学際中に怪我をしたら保険委員長として手当してあげると」

「言ってたけど約束した覚えはねえよ！？　それにお前の治療を受けて無事で済むわけがない！」
「セレスティナ君、少し白峰君を借りるけどいいかな？」
「聞けよ話！？」
マズイ、胃がキリキリしてきたぞ。なんで俺の周りはこんなやつらばっかりなんだ。
俺は一緒にいても胃が痛くならない常識人・セレスを見る。きっと今の俺は救いを求めるような目をしているだろうね。
「ああ、零児の怪我を手当してもらえるのだろう？　よろしく頼む」
「セレスさん！？」
救いの手は伸ばされもしなかった。セレスさん、あなた郷野が学内でなんて呼ばれてるか知らないんですか？
「なにを嫌がっているんだ、零児。明日のこともある。傷はしっかり癒しておけ」
「せめて医者を選ばせてくださいっ！」
セレスが純真に俺を想って言ってくれてるのはわかる。でも今回ばかりはその優しさが胃を締めつけるんだよ。そろそろ吐血するぞ？
「では行こうか、白峰君」
くるりとニヤケ顔で振り返った郷野は――その手にスタンガンを握っていた。
「……ナンデスカソレハ？」
「スタンガンだが」郷野は眉を顰めて顎に手をやり、「ふむ、それ以外に見えるとすれば目の治療も必要になるな」
「違えよ！　なんでそんなもんをお前が持って俺に向けてんのか訊いてるんだ！」
「なんだそういうことか。これは白峰君を捕獲するためにクラスの田中君に借りたのサ」
「誰だよ田中ってそんな適当な苗字のやつクラスにいねえよ匿名希望か！　……あ、いや待て近づけるな。わ、わかった、観念しよう。だからそのスタンガンは仕舞ってぎゃあああああああっ！？」

こんな時、グレアムみたいな強靭な体を持ってたら気絶せずに済むのかな？

「――ふざけんなよ郷野っ！」

俺はそんなことを叫びながら目を覚ました。アレが全部夢だったなら思わずスキップしたくなるほど嬉しいのだが、残念なことに俺がいる場所は保健室のベッドの上だった。

「やあ、意外と早いお目覚めだね、白峰君」

郷野は保健室の棚を漁る手を止めてこちらに顔を向けた。

「で、なにやってんだよ？」

「昨日まであった場所に治療道具がなくてね。それを探してるのサ」

ガサゴソと適当に保健室を荒らす郷野。こいつが本当に保険委員長なのか既に怪しいぞ。

「白峰君、メチレンブルーがどこにあるか知らないかい？」

「なんで切り傷の手当にメトヘモグロビン血症の治療薬が必要になるのかを教えろ！」

こいつがどうして『悪魔の保険委員長』と呼ばれているのかわかった気がした。

「普通に消毒してバンソウコウ貼れば終わりだろうが」

「そんな甘い治療を私がするとでも？　ああ、これかな？　……いや違った。ただのアクリノールだ」

「それだよ俺が今欲しい消毒薬は！」

アクリノールとはバンソウコウやガーゼに染み込んでいる黄色いアレのことだ。

「てか先生はいないのかよ？」

「養護教諭の磯原先生ならそこで酔い潰れているけど？」

「もうそいつクビにしろよ！」

学園祭だからってなんで昼間っから酒煽ってんだよ！　おかしいだろ教師として！

「もういい、自分で手当する」
俺はベッドから降りようと体をずらすが、
「おっとそれはさせないゾ」
シュルルル、バシッ！　どんなテクニックなのか、郷野が白衣のポケットから取り出した包帯で俺は一瞬にしてグルグル巻きにされてしまった。ハイカルでもこんなミノムシ状態にはなってなかったぞ。
「な、なにしやがる！」
「テーピングだよ」
すまし顔で、郷野。
「さてと、白峰君も気がついたことだし、これから拷も……もとい治療を始めよう」
「今さりげなく『拷問』って言いかけたろ？」
「白峰君、君はどこまで嘘をついてるんだい？」
郷野はベッドに腰掛け――るどころか、包帯で束縛された俺の腹に跨ってきた。そのまま胸を見せつけるように身を屈め、俺の頬に艶めかしく手を添えてくる。
色仕掛けってやつか。その手には食わないぜ。確かにこいつは美人だが、こんなことを躊躇いなくやる変人は俺の好みじゃ胸でかいなぁ……ハッ！　今のは違うぞ単に視覚情報を述べただけであって俺は別に――
「ふふふ、動揺しているね、白峰君。やはり君は面白いよ」
不敵に笑った郷野は満足したように俺の体から離れた。そのままベッドに腰を落ち着ける。ほっとする俺。
「こんなことまでして、お前は一体なにが聞きたいんだよ」
「白峰君が留学生や外国人の先生以外に隠してること、かな？　いや、桜居君は知っているようだね。あと他のクラスだけど迫間君と四条君も」
「な」
なんなんだこいつ。感がいいにも程度ってもんがあるだろ。

「リーゼロッテ君やセレスティナ君もそうだけど、この学園にいる外国人は全員が似たようなアクセサリーをつけているだろう？　そこにはなにか意味があると思うんだ」

アクセサリー……〈言意の調べ〉か。ペンダントにブレスレットに指輪など、形は様々なのによく気がついたな。

こりゃもう、下手に惚けても無駄だ。

「……知ってどうすんだよ？」

「どうもしないサ。ただ知りたいだけ。こう見えて、私は隠し事をされるのが嫌いなんだ」

隠し事を暴くのが好きの間違いだろ。

しかしどうする？

話したところで最悪俺がデンパと思われる程度だ。監査局的に実害はない。一般人には桜居という前例もいるし、知った郷野自身がどうこうするとも思えない。

だが、郷野の口から真実が広まる可能性は捨てきれないぞ。その場合、郷野がデンパと噂されることが最悪ではない。最悪は、広まった真実を皆が信じてしまったことで異世界人が迫害させる危険だ。

人は自分たちと違う存在を恐れてしまう。地球人同士ですら人種差別なんてものがあるんだから、皆がすんなりと受け入れてくれる確率は限りなくゼロに近いだろう。この地球で暮らす力なき異世界人たちは、心のどこかでそういった迫害を恐れている者も多いと思う。そんな彼らを保護するのが異界監査局であり、俺たち異界監査官だ。

だから、やはり言えない。郷野に口止めを頼めばいいのかもしれんが、残念なことに俺はこいつの口の堅さを信用していないんだ。その点桜居はアレで信用できるし、真実を知る前から既にデンパさんだったから問題にならなかった。

〈魔武具生成〉――サバイバルナイフ。

「悪いな、郷野。俺が勝手に秘密をバラすわけにはいかなくてね」

右手に巻かれた包帯を突き破ったナイフで、俺は自分自身を解放

して立ち上がる。切り裂かれた包帯がハラリと力なく床に散らばった。

郷野は俺がナイフを隠し持っていた（と思ったらしい）ことに驚いているようだったが、すぐに目の色を変えて俺と相対する。

「そう言われると、ますます知りたくなってくるゾ。人間誰しも天邪鬼なのだ」

郷野がまたも俺を捕まえるために包帯を構えたその時――

「レージ！　こんなところにいた！」

壊れそうな勢いでスライドされた保健室のドアの先に、長い金髪に紅くクリっとした瞳の可愛らしい少女が立っていた。

「リーゼ、どうしてここに？」

俺の質問には答えずリーゼはずかずかと保健室に足を踏み込んできた。そして俺の右手首を掴んで無理やり引っ張っていく。

「ちょ、なんだよいきなり？」

「レージは私のものなんだから、一緒に来なさい」

「俺は敵じゃなかったのかよ？」

「今はいいの！」

むくれた顔でそう言ったリーゼから、なにやらずっと我慢してきたものが爆発したような感情が伝わってきた。

「うん、今回はこれくらいにしておこう。白峰君、これを」

郷野が投げ寄越したそれを俺は左手でキャッチする。

バンソウコウの箱だった。それもまだ開けてない。

「リーゼロッテ君にでも貼ってもらうといい」

ニヤリ、と楽しそうな含み笑いを浮かべる郷野に、俺は一言お礼を――

「持ってんなら最初から使えよっ！！」

――言ってたまるか。

「そんで、お前は俺を連れ出してどうするつもりなんだよ、リーゼ」
俺とリーゼは校舎を出て適当なベンチに座っている。リーゼはシールを貼ることが楽しくて仕方ない子供って感じの顔をし、俺の傷口にバンソウコウをペタペタ。雑過ぎて傷がはみ出ているけど文句は言わないでおこう。郷野にされるよりは百倍マシだ。
リーゼは最後の傷口――左頬にバンソウコウを貼り終えると、ルビーレッドの瞳でじっと俺を見詰める。
「遊ぶのよ」
「なんだって？」
俺はリーゼの言いたいことが計り切れずポカンとした。
「レージ、最近わたしに構ってくれないもん」
「そりゃあ、セレスとチーム組んだから、いろいろ打ち合わせとかもやってるし。あんまり時間がなくてな」
ていうか、リーゼが敵対宣言したのも理由の一つだ。……いや、それは人のせいにしてるな。時間はなかったけど全くというわけじゃない。敵対宣言の気まずさに負けて構ってやらなかった俺の責任だ。
「レージがあの騎士崩れに盗られてから、なんだかよくわからないけど楽しくなくなった。退屈じゃなかったけど、楽しくないのは嫌い。それに、レージが騎士崩れと一緒に戦ってるとこ見てたら、この辺がモヤモヤして変な感じになったの」
リーゼは自分の発展途上な胸に手を置いた。
「ミツルならなんか知ってると思って訊いたら、レージと遊べば治るって言われた」
そうか。リーゼが来てからやけにあっさり退いたと思ったら、郷野のやつ、最初から俺をセレスと引き離してリーゼに会わせる算段だったんだ。しかもリーゼの様子からして示し合わせていたわけじゃない。恐らく俺が気絶している間に保健室に来るように伝えたのだろう。

「だからレージ、遊ぶわよ」
単純に、リーゼは寂しかったんだと思う。強気な命令口調で言っているが、掴んだ手を離せば俺がどっかに行ってしまう、そんな怯えを孕んだように俺を見る瞳が微かに揺れていた。
兄貴を取られそうになる妹の心情なんだろうか？　俺にはわからんけど。
しゃあないな。
「わかったよ。遊ぶか」
「ホント！」
「ああ、ホントだ」
俺はくしゃくしゃとリーゼの頭を撫でてやった。リーゼは気持ちよさげに目を細める。子猫みたいだな。
「ただし、昼休憩の間だけだぞ。午後からはお前の試合があるんだ」
「うん、わかってる。あんなやつらなんて？魔帝？で最強のわたしの敵じゃないわ」
いつものフレーズが出たからもう大丈夫だろうね。セレス、悪いけど昼休憩の間だけ一時解散させてくれ。
「あれ？　そういやレランジェはどうしたんだよ？」
とりあえず腹ごしらえをしようと立ち上がった時、リーゼの近くに控えているはずの俺専用暴言スプリンクラーがいないことに気がついた。
「レランジェならミツルと話してる時に用があるってどっかに行った」
「そうか」
よっしゃ、やつが不在なら俺の胃は安泰だな。
「お呼びですか、ゴミ虫様？」
……俺の心のガッツポーズを返せ。
「主ほったらかしにしてどこ行ってたんだよ、レランジェ」

「異界技術研究開発部にて戦闘前の最終調整安定です。美鶴様にならマスターをお任せできると判断しました」
もうあの部署はこいつのためにあるような気がしてきた。
「ところでゴミ虫様、先程の試合はなんですか？」
「あん？　なんか文句でもあんのかよ？」
「なぜ素直に斬られて死んでくださらなかったのですか？」
「負ける気がないからだ！　あと殺しちゃダメなルールだぞわかってんのか！」
この機械人形は一向に俺に対するバグが取れないな。
「殺しちゃダメなら、死なせなければいいんでしょ？」
当然のことのように語るリーゼ。この魔帝様御一行を相手にする二人が気の毒だな。頼むから死んでくれるなよ。
「まあ、なんだ。対抗戦、適度に頑張れよ」
「うん。絶対勝って騎士崩れからレージを取り戻すから」
あー、そういやリーゼにとっての賞品は俺だったっけ。
「マスターはなにがあろうともレランジェが守護安定です」
このゴスロリメイド様は普段通りだな。
「んじゃ、まずはメシにしようぜ。腹が減ってはなんとやらだ」
日本の諺には流石に疎く首を傾げるリーゼに、俺は適当に焼きそばやフライドポテトを奢ってやることにした。

その後、俺がリーゼたちと学園祭を回っていたことを知ったセレスにさんざん文句を言われた。ごめんなさい……。

三章　監査官対抗戦・本選（7）（後書き）

普段は場面変動が起これば次話に回す私ですが、都合上一話にまとめました。

なのでやっぱり最近の文字数が多くなってますね。どうしましょ……。

人気投票、リーゼとセレスに入れてくれた方、ありがとうございます！　絶賛セレス編を書いてるのにリーゼの株が上がってる。不思議です。

次回の更新は9月24日（土）です。金曜休みだから間に合うはず！

三章　監査官対抗戦・本選（8）

「あのう、セレスさん？　そろそろ機嫌直してもらえないでしょうか？」

「ふん、知るものか。零児などデポトワールの海溝に沈んでしまえばいいんだ」

「ラ・フェルデ用語を出されても困るんですけど……」

大闘技場の選手控室の片隅で、珍しく頬をぷっくり膨らませたセレスがツンとそっぽを向いた。

「ていうか、そんなに拗ねることなのか？」

「別に拗ねてなどいない。ただ、私がフリフリの可愛いドレスを嫌々着せられて給仕をしている間に、零児は？魔帝？と楽しんでいたのだろう？　相棒の私は放ったらかしで。それがなんというかその、気に入らないだけだ」

「やっぱり拗ねてるんじゃないか。俺が悪かったよ。綿飴あげるから許してください」

「そんなものに釣られるものか！　私を？魔帝？と一緒にするな！」

「とか言いながらちゃっかり受け取ってるし」

セレスは俺に背中を向けて、はむっ、と焼け食いするように綿飴に食らいついた。「ん、甘い……」と感動の呟きを漏らしたことは聞こえなかったことにしよう。

なんとなく、今これ以上つついたら聖剣で斬られそうだ。しばらくそっとして落ち着くのを待った方がいいかな。

「はぁ、明日までにはなんとかしねえと」

大きな溜め息をついて俺は控室の外に出る。今からでも一緒に学園祭を回っていろいろ奢ってやれば少しは機嫌直してくれるかもしれないが――

リーゼたちの試合は、既に始まってるんだ。

俺は全ての試合を観るつもりでいる。優勝を狙うからには、敵情視察を怠るわけにはいかないだろ。

特に、俺らの前にゴールしたっていう、第四十四支局の仮面野郎と布巻き女の試合はな。

ベンチにも座らずに悠々と試合見物を決め込むそいつらは、暗闇の中で影魔導師である迫間と四条を倒している。下手すればグレアム以上に油断ならない相手だ。

まあそれは俺の思い過ごしで、あっさり一回戦落ちするかもしれん。それならそれで、あの鷹羽の兄妹弟子らしい赤毛女のチームを警戒するだけだ。

とりあえず今は、リーゼたちの試合に集中しよう。

試合が始まってそれなりに経過しているが、趨勢はどちらにも傾いていなかった。

「いい加減に燃えなさいよ！」

リーゼは突き出した掌の先に中規模魔法陣を展開、そこから焦熱の黒炎流を放射する。

「おチビちゃんはとんでもない量と質の魔力を持ってるようだけど、それ故に力技にばかり偏ってうまく扱い切れていない。だからこそ――」

リーゼと対する薔薇服の優男――第六支局代表のルノードは、迫る？魔帝？の炎をフランベルジェの波打つ刃で掬い上げるように薙いだ。

「――簡単に絡め捕れる」

そのフランベルジェに、ルノードを食らうはずだった黒炎が綿飴の製造過程のように巻き取られた。

「返すよ」

黒炎を纏ったフランベルジェが振り下ろされる。完全にルノードの支配下に置かれた黒炎が刃から離れ、怒涛と化してリーゼを襲う。

リーゼはその場を動くことなく、ただ腕を払っただけで自分の炎を打ち消した。
「フン、わたしの炎でわたしが燃やせるわけないでしょ」
くだらなそうに鼻息を鳴らすリーゼだったが――
「……知ってる」
額にある第三の目だけを見開いた美女――ラシュリーが突撃を仕掛けてきた。カールスタイルの金髪を靡かせ、お姫様ドレスを着ているとは思えない駿足で一息にリーゼとの距離を詰める。
「レランジェ」
「了解です、マスター」
主の声に従い、今まさにリーゼの首根っこを鷲掴もうとしていたラシュリーの腕を、駆けつけたレランジェが弾いた。
「……邪魔」
ラシュリーは両掌に黒紫色の球体を生成してレランジェに放つ。エネルギーが渦巻いているような球体。感じからして魔力の塊だ。それも相当な量が凝縮されている。少しでも触れればただでは済まないぞ。
しかし、その魔力弾もリーゼの炎に呆気なく焼き消される。
飛び退くラシュリー。入れ替わりにルノードが入ってフランベルジェを振う。
魔工機械のレランジェが剣を腕で防ぎ、その陰からリーゼがいくつもの黒炎弾を射出させる。だが、全ての黒炎はルノードが一睨みしただけで明後日の方向へと逸れてしまった。
「無駄だよ。僕の術式が発動している限り、君たちの手から離れた？意思ある力？が僕に届くことはない」
「ふぅん、よくわかんないけど面白いじゃない」
瞬速で振るわれるルノードの剣を飛んで跳ねてかわしながら、リーゼは笑っている。楽しそうだな。俺にはない感覚だ。
「マスター、目です。両目に術式が刻まれています」
「おやおや、もうバレたみたいだね」

ルノードは身体を後ろに反らしてレランジェの手刀を避ける。俺からは見えないが、粘っこい笑みを浮かべるやつの両目に術式があるらしい。瞳に魔法陣でも描かれているのだろう。

「……ルノード、蹴散らさすから離れて」

急激にラシュリーの魔力が高まるのを感じた。瞬間、ぼこりと彼女の足下の地面が盛り上がる。隆起する土塊は対戦フィールドの三分の一を日陰にするほど巨大化し、目に見える速度で形を変えていく。

逞しい二本足に反して両腕は細く、地面をのたうつ尻尾は丸太よりも太い。鋭い牙の並んだ大口は鋼鉄ですら噛み砕きそうで、大きく広げられた巨大な双翼が西にやや傾いた太陽を覆い隠している。

全体的にトカゲに似たフォルム……いやいや、ドラゴンってアリかよ。

「あはっ！　イヴリアでよく狩ってた一番強い魔獣に似てるわね」

「見かけ倒し安定です」

土塊のドラゴンが繰り出す踏みつけを、バックステップで難なくかわすリーゼとレランジェ。続いて振り回されたテールアタックもその場で飛んで回避する。いきなり登場したドラゴンに驚愕したのは俺と観客くらいかよ。

あのドラゴンの土人形は、頭に乗っているラシュリーが魔力を注いで動かしているようだ。一般的なイメージとは違うが、ゴーレムの一種と見て間違いない。ここでこんな切り札級のものを出したということは……ついに勝負をかけてきたな。

バチィ！！

スパーク音が轟く。ドラゴン・ゴーレムの足下で青白い光が閃いたかと思えば、光線状のプラズマが落雷のような轟音を発して迸った。それはドラゴン・ゴーレムの胴体を貫通し、その巨体をガラガラと崩壊させる。

レランジェの魔導電磁放射砲だ。また威力上がってないか？　電気技は地面に効かないってルールは完全無視かよ。てかこれじゃド

ラゴンが呆気なさ過ぎだろ。
「……嘘？」
ドラゴンだった土塊の山に生き埋めにされていたラシュリーが、ゾンビのように這い出てきた。第三の目が驚愕に見開かれている。
「……何者？」
「魔工機械安定です」
素っ気なく答えたレランジェは、その右手に備えた兵器の照準を再びラシュリーに合わせ、
「トドメです」
容赦なく、もう一発ぶっ放した。あれだけの威力を誇るのになんつう充填速度だ。
「させないよ」
間に割って入ったルノードがフランベルジェを横薙ぎし、青白いプラズマ光線を真横に弾いた。軌道を変えられた魔導電磁放射砲は、観客席の直下の壁にぶつかって消える。
これは俺の予想だが、ルノードの術式は視界に捉えたあらゆる攻撃に対し、そこに込められた意思を乗っ取って攻撃自体の方向を捻じ曲げるのだろう。でも意思の塊である？人？そのものには効果がなく、強力な攻撃だと乗っ取れたとしても操るまでには至らない。その欠点を補助するために使われているのがあのフランベルジェ。そんな感じかな。
ラシュリーは先程のドラゴン・ゴーレムのように、魔力を流した無機物を自在に操れるといったところか。魔力弾を撃てるほどの魔力制御能力もある。
どちらも強い。特にルノードはリーゼたちにとって相当厄介だぞ。
「立てるかい、ラシュリー？」
「……平気」
ルノードはお姫様にするような仕草でラシュリーに手を差し伸べる。なんかレランジェ辺りから忌々しげな舌打ち音が聞こえたのは、俺の耳が過剰反応しているせいかもしれん。

「……ルノード、あの二人、強い」
「だね。だけど心配はいらないよ。君がその目を開くような事態にはならない」
気障っぽい口調で優しくそう語りかけ、ルノードはラシュリーを立たせる。気になること言ったな。目が開くとどうなるんだ？
「マスター、まずはあの女から狙う安定……マスター？」
倒し易い方から確実に潰していこう、そんな作戦を持ちかけようとしたレランジェだったが、隣にいたはずのリーゼは忽然と姿を消していた。
ルノードの背後の空間が、突如として黒く炎上する。
「転移！？」
ルノードが気づいた時にはもう遅い。黒炎から飛び出したリーゼが、紅い瞳を楽しげに煌めかせてルノードの美麗な横面に爪先を食い込ませた。アクロバティックなジャンピングキック。無論、そのミニあんよは黒々と燃える灼熱の業火を纏っていた。
「がはっ！？」
吐血し、機関車のように顔から煙を吹きながら地面と水平にぶっ飛ぶルノード。と、その先にすかさず回り込んだレランジェが片足をすっと上げ――
――ドゴン！
大地が罅割れるほどの踵落としを、ルノードの頭部にお見舞いした。
スカートなのに自重してもらいたい。いや、別にあいつのなんて見たくもないんだけどさ。――ってそうではなく！
……死んだろ、アレ。
土煙で見えないけど、頭とかグシャッてなってないだろうな？
ザクロの果実を踏みつけたみたいに。やば、想像したら吐き気が……。
俺がつい片手を口にあてたその時、土煙の中からむくりと人影が起き上がった。

「なぜ、立てるのですか？」
身構えるレランジェに、頭から血を流すルノードがニヤッと嗤う。
「生憎と、僕は普通の体ではなくてね。ある程度の傷ならすぐ治癒する。そういう術式を魂に刻んでるのさ」
超速再生能力だと？　妖怪かあいつは？　でも、フラついているところを見るにノーダメージってわけではなさそうだな。
「刻印魔術師。それが僕の肩書きでね。形のあるなしに問わず、いろんなものに術式を刻んで使役できるのさ。ああ、安心するといい。刻印術には手間がかかるからね。即席で編んだ術式を臨機応変に戦闘で使えるわけじゃないんだよ」
とか言っておきながら、恐らくはいくつもの刻印を前もって準備しているはずだ。あの両目やフランベルジェ然り。
「ついでに言うと、僕の魂はとある場所に預けてある。そうしないと体が術式に堪えられないからね。よって、僕は死ぬこともない。遠慮せず全力を出すといい」
超速再生に加えて不死身って……誰だよあんなチートを対抗戦に参加させたやつは！
「よく喋りますね。余裕安定ですか？　あなた様の体がどうだろうと関係ありません」
レランジェは落ち着いたいつもの無表情でそう返した。
「なんだって？」
「この戦いは相手を戦闘不能にすれば勝利安定です。いくら死なない体で再生ができるとはいえ、見たところ痛みや疲労などは残るようですね。殺せなくとも倒せないわけではない、レランジェはそう考えます。要は――」
「燃やせばいいのよ！」
リーゼの声は空から響いた。
見上げれば、もがき暴れるラシュリーをふん捕まえたリーゼが落下していた。黒炎の転移で上空に移動したのだろう。
なんのために？

決まっている。その手に捕まえている三眼の美女を地面に叩き落とすためだ。リーゼが転移をあんな風に使うとは……誰の入れ知恵だろうね。

案の定、リーゼはラシュリーをルノード目がけて放り投げた。さらにそこへ特大の黒炎を追撃で放射する。え、えげつねぇ。

「ラシュリー！？」

ん？　ルノードの表情が一変したぞ。

とんでもない跳躍力で飛び上がったルノードがラシュリーを受け止め、フランベルジェを構えて切迫する黒炎の奔流を睨みつける。

だが――

「――なっ！？」

「……っ！？」

絶句するルノードとラシュリー。それもそうだ、リーゼの黒炎は一方向だけじゃない。周囲の空間に無造作に展開された数多の魔法陣から射出されてるんだ。

「大丈夫、殺しちゃダメだから手加減はしてるわ」

レランジェの隣に転移したリーゼが小悪魔的笑みで言った。やってることは悪魔でさえ泣いて謝りそうだけど。

空を黒く塗り潰す炎から、ぼとり、と焦げ臭そうな塊が落ちてくる。

かろうじて原型を留めている状態のルノードは……すげーな、あんな状態でも生きてるよ。意識はないみたいだけど。

待て、ラシュリーがいないぞ。空の黒炎は晴れたが、そこにも当然存在してない。まさか焼滅させたんじゃなかろうな？

俺だけでなく観客たちからも不安の気配が伝わる中――ヒラリヒラリ。

ルノードが装着していた真紅のマントが舞い落ちてきた。どこにも焦げ跡すらないマントが地面に触れた瞬間、光輝く紋章のような図がそこに浮かび上がった。あれは、ルノードの刻印術か？

すると、輝く紋章から紫色の豪奢なドレスが吐き出される。ラシ

ユリーだ。どういう理屈かは知らんが、マントに仕込まれていたルノードの刻印術で一時的に別空間にでも退避していたのだろう。
額の目で無残に転がるルノードの姿を確認したラシュリーは、静かにリーゼを見やる。降参するのかと思いきや――

カッ！

今までどんなことがあろうとも閉じられていた両目が、大きく開眼した。
額の目は青い瞳をしているが、開かれた双眸は黒紫色の輝きを不気味に放っている。彼女の表情からはどことなく怒りが滲み出ていた。
「マスター、警戒安定です」
「フン、やっと本気ってことね」
好戦的な紅眼で睨み返すリーゼ。と、その小さな体からなにやら煙状の輝きが漏れ始めたぞ。リーゼには似つかわしくないどこか神聖な雰囲気を持つその光は……ラシュリーの掌に凝集されていく。
「え？　なにこ……れ……」
くらり。
あれだけ元気いっぱいだったリーゼが、突然地面に突っ伏した。
「マスター！？」
珍しく動揺を見せたレランジェが主の体を抱き起す。既にリーゼから漏出していた輝きは収まり、全てラシュリーの掌に集い球状の光となっている。
どうなってんだ？　あいつはなにをしたんだ？
やがてレランジェが顔を上げる。視線を向けたのはラシュリーではなく、モニターの下に設置された実況席にいる誘波だった。
「マスターが、息をしていません。心臓も停止しています」

……へ？

俺はレランジェの言葉をすぐには理解できなかった。

息もなく、心臓が止まっている。つまり――

リーゼが、死んだ。いや、殺された。

「あいつやりやがったッ！」

『止まってください、レイちゃん！』

勢いのまま対戦フィールドに飛び出そうとした俺に、誘波からいつになく強い口調でストップがかかった。

観客たちも騒然としている。

『ラシュリーちゃん、どういうことですか？』

再び両目を閉ざしたラシュリーに、誘波が実況席から問い詰めた。

「……大丈夫。死んでない」

ラシュリーは若干申し訳なさそうに言葉を紡ぐ。

「……魂を抜いただけ。仮死状態。戻せば生き返る」

魂を、抜いた？　なにを言ってるんだあの女？

「彼女は？魂吸の魔眼？っていう特殊な目を持っていてね。その両目で見詰め合った相手の魂を問答無用で抜き取ってしまうんだ」

だいぶ自己再生の進んだルノードが意識を取り戻し、倒れたまま説明する。

「抜き取った後の魂は制御できるけど、抜き取ること自体は本人の意思じゃどうにもならないらしいよ。だから、ラシュリーはいつも両目を閉じてるんだ。それと、僕の魂は彼女に預かってもらっている」

そうか、だからあの時、血相を変えてラシュリーを死守したのか。

魂のないルノードが動いているのは、なんらかの刻印術なのだろう。

なんだろうと、リーゼが助かると知ってどうやら俺の中で爆発した激情は落ち着いたようだ。自分でも不思議なくらい怒ったと思う。

にしても、仮死状態。これは殺害にカウントされるのかね？

誘波の判断は、

『それなら問題ないですね。試合を続行してください』

だと思った。

「いや、僕は降参するよ。おチビちゃんの炎で受けた傷は治りが遅いみたいで、しばらく動けそうにないからね。それに、ラシュリーに目を使わせるつもりはなかった。アレは殺したのと同じだよ」

『よろしいのですか、ルノードちゃん？』

「ああ、対抗戦には第六支局長の出世のために参加させられたようなものだしね。僕に未練はないよ」

賞金は惜しいけど、とルノードは少し悔しそうに付け加えた。

「……降参。この目は、機械には効かない」

両目を閉ざしたラシュリーも諸手を上げた。このまま戦ってもルノードは動けないし、ラシュリーだけではレランジェに勝てないだろう。賢明な判断だな。

『わかりました。では、三回戦はリーゼちゃんとレランジェちゃんのチームの勝利です』

誘波が勝敗を宣言し、歓声が沸く。その後、ラシュリーは掌上に浮かばせていたリーゼの魂を体に戻してくれた。

リーゼはすぐに生気を取り戻した。けれど意識はまだなく、ルノードと共に医療班に運ばれていった。レランジェとラシュリーもそれに同行する。

「ちょっと心配だな。あとで様子を見に行くか」

言いつつ、俺は視線だけを横にずらす。そこには、リーゼたちの試合をなんの感慨もなく観戦していた二人組がいる。

漆黒鎧の仮面の騎士と、布巻き少女。カルトゥムとゼクンドゥム、だっけ？

リーゼの様子見は次の試合が終わってから、になるな。

三章　監査官対抗戦・本選（８）（後書き）

ルノード、最初は不死身にするつもりはなかったんですけどね……。

しかし観戦者視点だとあまり緊張感が出ないなぁ。

人気投票、リーゼに入れてくれたお方、ありがとうございます！

気づけば底辺の一つ上から一気に三位に上がってました＾＾

投票総数はあと一票入れば４０票！　十一票入れば５０票！　三巻終了時点で５０に達するといいんですけど（苦笑）

次回の更新は９月２７日（火）です。間に合わなかったらごめんなさいｍ（＿＿）ｍ

三章　監査官対抗戦・本選（9）

監査官対抗戦・本選――一回戦第四試合。

対抗戦二日目のラストを飾るのは、第三十二支局代表チームと第四十四支局代表チームの試合……のはずなのだが。

第四十四支局の二人は既に配置についているけれど、第三十二支局の二人が一向に現れない。控室にもいなかった。というか、まずあのヴィルゲルムとかいうロボットが控室に入らないんだ（乗ってる赤ちゃんの名前ではないはず）。

とっくに試合開始時間は過ぎている。このまま遅刻で不戦敗なんてマヌケなことにならないだろうな？

俺がいい加減にその可能性を危惧し始めた時、空からロケットエンジンのような噴射音が聞こえてきた。

ような、じゃないな。本当にロケットエンジンを翼みたいに背部に取りつけた人型ロボットが、ゆっくりと対戦フィールドに舞い降りてきたんだ。胸部にあるコックピットには、いつ「オギャー」と泣き出してもおかしくない赤ん坊がキリっとした表情で操縦桿を握っている。そしてロボットの肩には、くすんだ赤毛を後ろで束ねた黒ロングコートの女が立っていた。そいつは血色の刃をした大鎌を担ぎ、鋭い目つきを対戦相手に投げつけている。

第三十二支局代表――ヴィルゲルムとウェルシー・ホーネッカー。

遅刻した上に派手な登場しやがる。

『遅れてしまい申し訳ありません。ホーネッカー氏の捜索に手間取っていました』

とても赤ちゃんとは思えない知的ボイスがロボの口辺りから響く。

「てめっ、ヴィルゲルム！　余計なこと言ってんじゃねえよ！」

『謝罪と遅れた理由ははっきりと述べるべきです、ホーネッカー氏』

赤ちゃんに言い包められた成人女性は、くそっ、と悪態をつきながらロボの肩から飛び降りた。

『法界院氏、我々は失格になっていたりするのでしょうか？』
『あと五分遅れていたらそうなっていましたねぇ。セーフですよ、ヴィルゲルムちゃん』
『寛大な処置、感謝します』
深々と実況席に向けて頭を下げるロボット。その下の赤毛女はバツが悪そうに鼻を鳴らしていた。お前が一番謝るべきだろ、と誰もが思ってるだろうね。
と、第四十四支局代表の片割れ、布巻き少女・ゼクンドゥムが「キヒッ」と不気味な笑い声を漏らす。
「あんたら、そのまま遅刻して失格になった方がよかったんじゃない？」
「ああん？」
あからさまな嘲笑を受けたウェルシーが額に青筋を浮かべて睨み返す。殺気が刃物のように研ぎ澄まされていて、気の弱い人間だとそれだけで失神、下手すれば心拍停止に陥りそうだ。
大闘技場に一瞬の沈黙が下りる。
『それではお待たせしました。これより一回戦第四試合を始めたいと思います』
誘波が開戦をアナウンスで告げ、空砲の花火が打ち上がった。実況席上のモニターに『ＢＡＴＴＬＥ　ＳＴＡＲＴ』の文字が派手なアクションで表示される。
先に動いたのは、第三十二支局の二人だった。
「やれ！　ヴィルゲルム！」
『イエス。モードＦＯＳを発動します』
ガコン！　ヴィルゲルムの両肩部分が開き、そこから四本のミサイルが天に向けて発射された。どこ狙ってんだと思ったが、俺はすぐにミサイルの役割を知った。
上空で弾けたミサイルが、黒い粒子状の物体を拡散させて雲一つない青空を覆ったからだ。範囲は大闘技場を中心に半径一キロくらいか。普通の暗雲が太陽を隠すよりも暗い影が大闘技場を支配する。

モードＦＯＳ。フィールド・オブ・シャドー。たぶんそんな感じだろうね。影魔導師のウェルシーがどうやって戦うのかとずっと疑問だったんだが……なるほど、日の下で戦えないなら、戦えるフィールドを変えてしまえばいいってことか。

影魔導師は周囲に満ちた?影?を繰り、練り、操って戦う。しかし実態は、影を通してこの世界の別空間に存在する異世界――『混沌の闇（ケイオス・ダーク）』に干渉し、その混沌を抜き取って形ある情報を与え使役する。それが?影霊女帝?望月絵理香から聞いた影魔導師の力の真実だ。

ウェルシーの足下から霧状の闇が噴き上がる。次の瞬間、ウェルシーはゼクンドゥムの背後で大鎌を振り被っていた。

闇を纏い、黒いコートをはためかせ、大鎌を握る姿はまるで死神だ。ウェルシーは一片の容赦もなくゼクンドゥムの小柄な体を両断せんと凶刃を振う。

だが、その刃は間に割って入った片刃の長大剣で受け止められた。漆黒鎧の仮面騎士――カルトゥムだ。

耳を劈く金属音。衝撃が広がり粉塵が舞う。

血色の大鎌に?影?が付加する。

「おらぁあッ!!」

ウェルシーが裂帛の気合いと共に大鎌を振り切る。カルトゥムの剣が弾き返され、さらに?影?の衝撃破が第四十四支局の二人を薙ぎ飛ばす。

しかし猛攻はまだ終わらない。ウェルシーは大鎌を片手に持ち直し、空いた方の手に?影?を集わせる。半液体状に見える純黒の物体が一瞬で帯状の形を成し、別々の方向にぶっ飛んでいる二人に絡みついた。

影魔導術――〈束縛（チェイン）〉。四条の十八番だが、流石のあいつもあんな速度で術は使えないぞ。

「ヴィルゲルム!」

『イエス』

ヴィルゲルムが？影？の帯に捕らわれている二人に両掌を翳す。その腕がガシャガシャガコンと組み変わり、大砲の砲口に似たフォルムへと変形した。

『高圧エネルギー噴射砲、発射』

両腕の砲口から、一言でわかりやすく表すなら『ビーム』が飛び出した。おいおい、生身の人間にそんなＳＦ兵器使うなよ。

闇を切り裂く二条の閃光が二人を呑み込まんと奔る。〈束縛〉が光によって掻き消されるが、その時にはもう避けられる距離ではない。

「――くだらぬ」

カルトゥムは両手持ちした片刃の長大剣を右肩上がりに、剣尖が下に来るように構え――

――ヴィルゲルムの放ったレーザービームを、たったの一閃で両断した。

う、嘘だろ。光を斬るとかどんだけだよ。

ゼクンドゥムは？　と見れば、彼女の姿は影も形もなかった。光線を食らって消し炭になったのかと思ったが、違う。

「ちょーっとボクたちを舐め過ぎなんじゃないの？」

身に纏った白い長布を風に靡かせるゼクンドゥムは、ヴィルゲルムの頭部に寛ぐようにして腰かけていた。一体いつの間に？　あいつも転移ができるとか？

ゼクンドゥムに気づいたヴィルゲルムが腕を人の手に戻して彼女を掴み取ろうとする。だが、ゼクンドゥムはふわりと空中に浮かぶと、嘲笑いながらヴィルゲルムの手を避けていく。顔に集るハエをなかなか払えない猿みたいだ。

「澄ましてんじゃねえよ！　とっととくたばれ！」

ヴィルゲルムが鬱陶しく纏わりつくゼクンドゥムを相手している間に、ウェルシーの大鎌とカルトゥムの長大剣が再び激突した。

首を刈り取る勢いで振るわれる血色の刃を籠手で受け止め、カルトゥムはもう片手で握った長大剣を横薙ぎ。半円を描く刀身をウェ

ルシーが避けたところに、薙いだ勢いを殺さぬまま大上段から叩きつける。

ガィン！　ウェルシーは大鎌の背でそれをガード。足下が陥没するほどの威力だったが、ウェルシーはなんともないように持ち堪えている。

そのまま?影?の転移。

カルトゥムの背後を取り、袈裟薙ぎに大鎌を振り下ろす。しかしその不意打ちもあっさり剣で防がれてしまった。

ウェルシーがニヤリと笑う。瞬間、彼女の足下から?影?の槍が突き出した。

それはカルトゥムの腹部を狙った刺突だったが、紙一重でかわされ鎧の一部を砕いただけで終わった。

「チッ」

舌打ちし、ウェルシーは後ろに大きく飛び退る。それから周囲の?影?をありったけ集わせ、その場で大鎌を薙ぐ。すると、三日月状をした黒き大刃が無数にカルトゥムへと殺到した。

仮面をしているから表情は読めないが、カルトゥムは特に焦った様子も見せず?影?の刃を捌いていく。

そこに――

「死ね」

ウェルシーが、やっちゃいけない発言をして大鎌を地面に突き刺した。

「――ッ!?」

刹那、カルトゥムの周囲、四方八方の地面から?影?の刺が幾本も突出した。瞬きする間に黒い剣山ができ上がる。

カルトゥムは……串刺しになっていた。いくつもの刺が漆黒鎧ごとその大柄な体を貫き、大量の血が流れ落ちている。けど、巧みに急所だけは外しているな。まだ死んじゃいない。

鷹羽の兄妹弟子なだけあって?影?の操り方が相当に上手い。望月絵理香と比べても遜色ないんじゃないか?

「おい、離せよ！」
『ノー。お断りします』
向こうもようやくヴィルゲルムがゼクンドゥムを捉えたようだ。
巨大ロボは防御力皆無そうな布巻き少女を潰さない程度に力強く握り締め――
――地面に思いっ切り叩きつけた。
大地が揺れたぞ、今。大丈夫かよ。
カルトゥムもゼクンドゥムも完全にノックアウトしている。特にカルトゥムは早く治療しないとマジで死んじまうぞ。
てか、負けたな。第四十四支局。あっさりってわけじゃなかったけど。
まあ夜闇ほどではないにしろ、この影が満ちた戦場で一流クラスの影魔導師相手にここまで動けたのだから大したものだ。影魔導師としては二人で一人前の迫間と四条に勝つことも、全く不可能ってわけじゃなさそうだな。
実況席の誘波が状況を再確認し、マイクを握る。
『一回戦第四試合はウェルシーちゃんとヴィルゲルムちゃんの勝――』
ピキッ。
え？
その時、俺の視界が罅割れた。比喩ではなく、本当に目の前の景色に亀裂が走り、ガラスが砕けるように一気に瓦解したんだ。
な、なにが……。
なにが起こったんだ？
わけがわからず頭がくらっとする。砕け散った後の視界には、元の変わらぬ闘技場の景色が広がっている。
だが、決定的に違う箇所が一つだけ映っていた。

「あ……がっ……」

女性の呻き声。

そこには、血塗れになったウェルシーがカルトゥムにアイアンクローを食らっている姿があった。

視線を左にシフトさせると、ガラクタのように動かなくなったヴィルゲルムが倒れている。その背には、ゼクンドゥムが白布をはためかせて超然と佇んでいる。

「なんでだ。さっき、あいつらが勝ったじゃないか……？」

困惑しているのは、どうやら俺だけじゃないらしい。この場にいるカルトゥムとゼクンドゥム以外の全員が俺と同じ光景を、つまりウェルシーたちが勝利した直後に視界が砕ける様を見たようだ。

「キヒッ。やあ、観客の皆さん。ボクの夢からは覚めたかな？」

ゼクンドゥムが得意げに笑ってそう言った。完全に人を馬鹿にした笑みだ。

夢……だと？　そんな馬鹿な。俺はずっと起きていたはずだ。

「幻術、ではないのか？」

俺の隣で観戦していたセレスが呟く。

「ラ・フェルデにも多少なりそのような術者がいる。今のはなんとなくだが、その手の力と似ていた」

セレスは難しい表情をして腕を組んでいる。幻術について考察しているのかと思ったが、セレスの視線はカルトゥムを捉えているようだった。さっきの台詞からして、幻術をかけたのはゼクンドゥムと思われるが。

「あの剣技……まさか……いやそんなはずは……」

なんかセレスは聞き取り難い声でぶつぶつ言っているな。三回戦前の不機嫌さはどこかに吹っ飛んでしまっているご様子。そんなにあのカルトゥムが気になるのか？　まあ俺も気になってるけど。

『い、一回戦第四試合はカルトゥムちゃんとゼクンドゥムちゃんの

勝利です』

今度こそ誘波がジャッジを告げ、対抗戦二日目はなにがなんだかよくわからないまま幕を閉じた。

観客たちがいそいそと退散していく。

そんな中、セレスだけがずっと漆黒鎧の騎士を睨みつけていた。

三章　監査官対抗戦・本選（９）（後書き）

ちょっと明日からスーパー残業タイムに入りそうです。次話の半分ほどは書けていますが、もしかしたら土曜日には間に合わないかもしれません。こんなこと言っときながらちゃっかり間に合わせるのがいつものパターンですが、今回は本当に雲行き怪しいです。と言いつつもしっかり間に合わΣ（ﾟ∀ﾟ（「」ヽ（ﾟДﾟ＃）ノオワレ

間章（2）

幾多の輝きが遠くちりばめられた闇色の空間に、一本の光の筋が通る。

それはとある一点の輝きから、別の一点の輝きに向かって徐々に伸び続けている。

まるで、本来相容れないはずの二点を繋ぐ架け橋のように。

「存外に、遠い」

光の橋の先端を歩むは、法衣に似た白い王族衣装を纏う青年――クロウディクス・ユーヴィレード・ラ・フェルデだった。

彼は長く美しいブロンドの髪を風もないのに靡かせ、絶対的な意思の光を宿した赤紫色の瞳でまっすぐに向かい側にある輝きを見据えている。

彼の傍らに浮かぶ、星空を剣の形に切り取って貼りつけたような長剣が明滅する度に、光の橋が僅かずつその先端を広げる。クロウディクスがそこを踏み締める度に、光の橋は強固なものとして定着する。

次元に距離という概念は存在しない。この空間は異次元でも異空間でもなく、わかりやすく例えるならイメージの世界。しかしただの妄想や夢とも違う、クロウディクスが個として存在できる世界だ。

言うなれば、ここは？次元渡り？のための儀式場だ。

クロウディクスはそこに精神体として存在している。こうして自世界と他世界とをリンクさせてから、本体のある現実世界から門を開くのだ。そうしなければ、開門したところでどこに繋がるかわかったものではない。

よく観察すれば、クロウディクスの世界から数多の光が伸びていることに気づくだろう。それらは別々の輝きに接続している。現在クロウディクスが行っているように、歴代の神剣継承者が繋いだ橋だ。

ただし、無数とも言える光の橋の半数以上は、このクロウディクスが架けたものである。
「あの世界、少し不安定に見える。次元を支える大柱の本数が少ないのか？」
自分の臣下が迷い込んだ異世界である輝きを見詰めながら、クロウディクスは呟く。
「小さな柱が寄り集まって固定されている世界かもしれない。だとすれば、自然に開く門があの世界に通じることは珍しくない、か」
クロウディクスは余裕ある表情で思案しつつも、歩み続ける足は止めない。
「私の世界にも小柱はいくつも存在するが、大柱は十二本で安定している。さて、あの世界の大柱は何本だろうな」
興味が湧いたとでも言うように、彼は唇の端を微かに吊り上げた。
と――
『陛下、儀式中に申し訳ありません。少々よろしいでしょうか？』
どこからともなく、僅かに焦りの含まれた男性の声が響いてきた。
「アレインか。なんだ？」
思考を全て声に出してしまう精神体だが、今の言葉は現実世界の本体も口にしている。意識がこちらにあろうとも、現実との会話は可能。そんな高等技術もクロウディクスだからこそ成せる業だ。
声の主――ラ・フェルデが誇る聖剣十二将の纏め役は、些か深刻な口調で言葉を紡ぐ。
『例の封印の定期調査が終了したのですが、結果にいくつか不審な点が見つかりました』
至って落ち着いた調子で、アレインは『不審な点』について淡々と伝えていく。報告を聞き終えたクロウディクスは、そこで一旦足を止めた。
「調べてみるか」
クロウディクスは隣に浮遊している神剣を掴むと、前方にまっすぐ翳し、静かに瞑目する。すると神剣の剣身が激しく明滅し、次第

にその輝きが安定していく。
すっ、とクロウディクスは瞼を上げた。
「……なるほど、確かに封印はそのままだが、中身がない」
ラ・フェルデ人が聞けば誰もが青ざめるだろうことを口にしたにも関わらず、クロウディクスの表情から余裕は消えない。
『どういうことなのでしょう？』
「やつが自分で抉じ開けることはまず不可能だ。綻びが生じて漏出したか、あるいは私と似た力を持つ者が意図して連れ出したか」
『まさか、陛下と比肩する力を持つ者が存在すると仰るのですか？』
「いても不思議はないだろう。次元は広い」
会話をしている間にも、クロウディクスの調査は続行している。
「ほう。面白いことが判明したぞ、アレイン」
声はなかったが、怪訝そうなアレインの気配が伝わる。
「やつは、セレスが今いる世界に飛んだようだ」
『！』
今度はアレインの息を呑む気配。
「儀式を急ぐぞ。完了次第すぐに次元を渡る」
『了解しました。では直ちにその旨を全聖剣に伝え、門の前に召集させます』
「待て、アレイン。やつを捕縛し、セレスを連れ戻す程度のことで聖剣を総動員する必要はない。それに聖剣を異世界にやるには？手続き？がいる。わざわざそれを待っている時間が惜しい」
フッ、と笑い、クロウディクスは王依を翻して前進を再開する。
「なに、私一人で充分だ」

間章（2）（後書き）

短くてすみませんｍ（＿＿）ｍ
ちょっと予定を変更して間章を挟み、次回から四章に入ることにしたもので……。
なんかいろいろとカオスな三巻ですが、最後までおつきあいくださると嬉しいです＾＾

人気投票、誘波に入れてくださった方ありがとうございます。最近出番が少なくなってる気がしないでもない彼女ですが、これからちゃんと活躍……するんだろうか？

次回の更新は１０月４日（火）です。

四章　聖剣と魔剣（1）

空が夕焼け色に染まる頃、俺は異界監査局の医療施設を一人で訪れていた。

理由は二つ。

一つは、リーゼの様子見だ。ラシュリーの？魂吸の魔眼？で魂を抜かれ、仮死状態となっていたリーゼは、まだ目覚めていない。だけど異常はどこにも見当たらないようで、今は深く眠っているだけの状態だと医者は言った。

ただ、明日の試合までに目覚めるかどうかはわからないらしい。もしも目覚めなかったら、まあ、棄権するしかないだろう。

リーゼはこのまま入院、か。レランジェもつきっきりで看病するみたいだから、今夜は久々に俺オンリーだ。……なんかちょっと、寂しいな。

理由の二つ目は、迫間と四条の意識が戻ったと聞いたからだ。

二人の病室に向かう途中、俺は思いがけない人物と遭遇した。

「おう、零児的にあいつらの見舞いか？」

「……なんでお前がここにいるんだ？」

マロンクリーム色の髪で右目を隠した作業着姿の青年――グレアム・ザトペックだった。迫間たちの病室がある方向からやってきたが、まさかこの戦闘鬼もお見舞いを？

「俺的に後輩の見舞いに来ちゃあおかしいか？」

「キャラじゃねえ」

「よくわからんが、俺的に誉め言葉と受け取っておくぜ」

「誉めてねえし」

これ以上関わると面倒臭そうだ。さっさと病室に行こう。

「待てよ」

一段階トーンを低くした口調で呼び止められた。

「零児的に、四十四支局をどう思う？」

「カルトゥムとゼクンドゥムのことか？　不気味なやつらだな。あと強い。どこで幻術をかけられたのか全く気づけなかった」
　しかも対戦相手だけでなく観客全員にかけられていた。それほどの規模の幻術を全く悟らせることなく使用した実力はとてつもない。けど、あの場の全員にかけた意味がわからないんだよな。演出目的か？
「途中までは現実だったぜ。しかも、やつら的に全く本気じゃなかった」
「どうしてわかるんだ？」
「勘」
　勘かよ！　根拠ねえな！
「俺的に冗談だ」
「冗談かよ！」
「いや、途中まで現実だったことは本当だ。戦いの傷跡的にな」
　流石は戦闘鬼。大雑把なようでいて、細かいところまでよく見ている。
「……クックッ。ハハッ！　やばい。俺的に楽しくなってきた。明日は零児、てめェらとも戦れるからなァ。あァ、今からウズウズするぜ。ウズウズし過ぎて爆発しそうなわけだが、俺様はこれからどうすりゃいい？」
「とりあえず走ればいいと思う。倒れるまで」
「おう、なるほど、そりゃあ俺的に思いつかねェ話だ。零児的に頭いいじゃねェか。んじゃ、早速行ってくるぜ」
　そのまま駆け去ろうとするグレアムだったが、
「あァ、そうだ」
　ふとなにかを思い出したように立ち止まった。首だけ動かして俺を見る。その表情には普段のグレアムとは違う、どこかシリアスめいた雰囲気があった。
「零児的に、あの騎士の嬢ちゃんから目を離さねェ方がいいぞ」

それだけ告げると、今度こそグレアムは走り去っていった。迷惑を一切考慮していないロケットダッシュであっと言う間もなく姿が見えなくなる。

「セレスから目を離すなって……どういうことだよ？」

確かに第四試合が終わった直後は様子が変だったけれど、それからは普通な感じで喫茶の手伝いをしていた。今ごろはクラスの連中と楽しく学園祭を回っているはずだ。

「とりあえず、迫間たちのお見舞いが先だな」

院内で走り回るグレアムにブチ切れた看護婦さんの怒鳴り声を背中に浴びつつ、俺は廊下の突きあたりに位置する病室の扉をノックした。

すぐに威圧的な少女の声で返事があり、俺は少し躊躇いつつも中に入る。

「なんだ、アンタか」

手前のベッドに黒衣を着たまま上体だけ起こしている少女が、俺を見るなりやたら残念そうな溜め息を吐いた。

「誰だったらよかったんだよ、四条」

「アンタじゃなけりゃ誰でもいいわ」

このチビ……遊園地のほとんどのアトラクションに乗れなくなるほど背を縮めてやりたい。

「面倒臭いからいちいち気にすんなよ、白峰。瑠美奈はお前に対して気まずいだけなんだ」

奥側のベッドで同じように上半身だけを起こした少年がだるそうにそう言った。

「ちょっと漣！　アンタなに言ってんのよ！　なんであたしがこんなやつ相手に気まずくならないといけないのよ！」

慌てたようにギャーギャー騒ぐ四条に、迫間は面倒そうに指で耳栓をした。ホント仲いいなこの二人。病室もなぜか一緒だし、互いが一定以上離れると死んでしまう呪いにでもかかってんのかね？

「んで、なんで気まずくなるんだよ。予選で負けたからか？」
「なってないって言ってるでしょ！」
「まあ、原因だけど理由じゃねえな」
顔を赤鬼みたく真っ赤にして怒鳴り散らす四条はとりあえずスルー。拳が飛んでくる前に迫間を促すことにした。
「瑠美奈は大会の賞金でお前んちを弁償するつもりだったんだよ」
言い切った瞬間、般若面を被った方がまだ怖くない顔をした四条が、ベッドから飛び跳ねて迫間に馬乗りになった。
そして、顔面減り込みパンチ。うわっ、痛そう……。
気が済むまで相棒を殴り続けた四条は――ぴょん。ベッドから飛び降りると、なぜか悔しげな涙目で俺を睨め上げた。
「別に、アンタのために弁償しようとしたわけじゃないわよ！　アンタんちのリビングを壊した責任の半分、いえ四分の一はあたしにあるんだから、なにかしないとあたしの気が済まないだけなの！」
なるほど、だから纏まった金が欲しいと言っていたのか。ずっと結婚資金だと思ってたよ。ところで――
「それなんてツンデレ？」
「こ、こここコロス！」
かぁあああ、とさらに顔を紅潮させた四条が俺の顎下目がけてアッパーカットをぐべらっ！？　く、口は禍の門ってやつか……。
俺と迫間が暴力的痛みから復帰し、四条が落ち着くまでたっぷり十分ほど費やした。
「――で、お前らを倒した相手なんだが」
俺は床に胡坐を掻いて本題を訊ねることにした。
「どういうやつらだったんだ？」
これは確認だ。もしも『違ってました』では話が進まない。
「さっきグレアムにも話したんだが、黒い鎧を着た仮面の男と白い布の少女だった」
「途中までは勝ってたのよ。でも、気がついたら私たちの方が傷だらけになってて……」

四条はうまく説明できない様子で口籠った。
同じだ。第四試合も最初は第三十二支局の二人が押していた。それどころか完全に勝っていた。なのに、あの視界が砕けるような感覚の後、負けていたのは第三十二支局の方だった。
「なにか気づいたこととかないか？」
「……」
「……」
黙り込む迫間と四条。負けた戦闘のことを思い出しているのだろう。
やがて、四条が口を開く。
「あいつら、なんか対抗戦が目的って感じじゃなかったわ。なんて言えばいいかな……余興？　そう、余興よ。対抗戦にはついでに参加してやってる、そんな馬鹿にしたような雰囲気がしたわ」
「つっても、それは白布女の方だ。仮面野郎はなにを考えてるのか全然わからなかったな」
頭の後ろをかったるそうに掻きながら、迫間がそう付け足した。
「悪いけど、あたしたちにわかることはこのくらいよ」
「優勝狙うってんなら気をつけろ。ていうか、今やつらについて聞いてくるってことは、もしかして次の相手なのか？」
「ん？　知ってんじゃねえのかよ？」
「あたしたちはさっき目が覚めたの」
ああ、だから大まかなことしか伝わってないのか。この適当さからして、伝えたのは俺の前に見舞いに来ていたあいつだな。
「次の相手はグレアムと稲葉だ」
率直に言うと、迫間と四条は口を半開きにしたまま十秒ほど固まった。そして二人は顔を見合わせると、示し合わせたかのように肩を竦めた。
「……ハハ、あいつは俺らを倒した二人とは別の意味で怖えよな。面倒臭いが、諦めが肝心だぜ、白峰」
「……ご愁傷様。せいぜい三十秒は持ち堪えなさいよ」

「せめて応援しろよ！」
どの道ぶちあたる壁だからいろんなことを諦めてるけど、セレスが諦めない限り俺も負けることだけは考えない。もしリーゼと組んでたら声高々と棄権を宣言していただろうね。
「なら、少しでも特訓した方がいいんじゃないの？　相棒の子はどうしてるのよ？」
「セレスならクラスのやつらと一緒に学園祭を楽しんでるんじゃないか？」
「……はぁ」
おいコラ四条、なんでそこで溜息をついて半眼で睨むんだよ。迫間も憐れむような苦笑を向けるな。
「あたしたちのことはいいから、アンタはその子捕まえて特訓してきなさい。一緒に学園祭を回ることも忘れないこと。いいわね」
「なんでお前にそんなこと言われにゃならんのだ。あと漫画じゃないんだから、今から特訓しても急激に強くなったりしねえよ」
「ぐだぐだ言ってないでさっさと行きなさい！」
物凄い剣幕で病室から追い出されてしまった。
なんなんだよ、一体……。
まあ、特訓するかどうかはともかく、作戦会議はきちんとしておくべきだな。
『零児的に、あの騎士の嬢ちゃんから目を離さねェ方がいいぞ』
ふと、グレアムが最後に言った言葉を思い出す。その意味が気にならないと言えば嘘だ。
「仕方ない、セレスを探すか」
とりあえずクラスの連中に合流しようかと考えたその時、マナーモードにしていた携帯電話がズボンのポケットの中で微振動した。
施設内携帯禁止の張り紙に罪悪感を覚えながら出てみると、相手は桜居だった。こちらから電話する手間が省けたな。
「どうした、桜居？」
『ああ、白峰、お前今一人か？』

「？　そうだが？」
気のせいか、桜居の口調にいつものおちゃらけた感じがしない。
こいつからこれほどの深刻さを感じたことなんて、今までに何回あっただろうか？　少なくとも五本の指があれば事足りる。
あまり、いい予感はしないな。
『セレスさんがいきなり血相を変えてどっかに行ったんだけど、監査局でなんかあったのか？』
「なんだって？」
たとえ気心の知れた友人たちとの間でも勝手な行動を慎むセレスが、なにも告げずにどこかに行っただと？
「それ、いつだ？」
嫌な予感は当たる。桜居が次に口にした言葉がそれを証明してしまった。
『ついさっきだよ。なんか、黒い鎧でコスプレしてる人を見かけた後だったな』

四章　聖剣と魔剣（1）（後書き）

どうでもいいことですけど、グレアムの前髪で隠れてる目を左から右に変えました。こんなのいちいち覚えてる人はいないでしょうけどね。あ、物語的に意味はないですよ。彼は魔眼なんて異能も持ってません。

変えた理由？　作者のイメージ的な都合です。べ、別にイラスト描いたら間違えたってわけじゃないんだかブフッ∴（´ε（○＝（。∀。）

次回の更新はたぶん10月8日（土）です＾＾；

……あ、もう二週間ほどしたら誕生日だわ。今のうちになんか企画考えとこうかな。

四章　聖剣と魔剣（2）

激しく心配だ。

この世界に来てからまだ日の浅いセレスは、携帯電話などという文明の利器を持ち合わせていない。つまり、俺からは連絡がつかないんだよ。

それならそれで連絡がつきそうな手段を取るのが定石だ。よって、医療施設を飛び出した俺は真っ先にあいつに電話することにした。学園どころか街全域を常時掌握していそうな風使いに、だ。

しかし――

「……くそっ！　いつもは呼ばなくても勝手に出てくるってのに、なんで肝心な時に繋がらないんだよ！」

たぶんまだ大闘技場にいるのだろう。あそこは圏外だからな。

桜居や郷野、他のクラスメイトたちもセレスを探してくれていたのだが、俺がやめさせた。危険かもしれないからだ。

セレスが追った相手は監査官だから大丈夫とは思う。思うが、なにせ監査官というだけで得体が知れない。一般人は巻き込めない。

桜居たちから得られた情報を頼りに聞き込みをしていく。幸い、セレスは目立つから覚えている人が多かった。

おかげで差して時間をかけることもなく、俺は居場所にアタリをつけることができたんだ。探偵の道でも真剣に考えてみようかな。

「……いた」

高等部から少し坂を下ったところにある、中等部の旧校舎裏だった。建物が木造で古過ぎるため立ち入り禁止となっているそこは、雑草が伸びたい放題で人の手が長い時間加わってないことが窺える。当然、学園祭のエリア外で誰もいない。

セレスと、第四十四支局の二人を除けばな。

「……」

俺は校舎の陰に隠れて少し様子を見ることにした。確かめもせず

に「セレス大丈夫か！」なんて叫びながら飛び出して、もし俺の勘違いで騎士同士の盛り上がった談笑でもしてたら恥ずかし過ぎるだろ。

でも、雰囲気は談笑って感じじゃないな。

「今一度問う、カルトゥム殿」

セレスは既に聖剣を抜き払い、漆黒鎧の仮面騎士に突きつけている。その表情は警戒色に染まっていた。

「なぜあなたが我が師――カーイン・ディフェンシオン・イベラトールと同じ剣技を使う？」

疑惑の視線をカルトゥムに突き刺しつつ、セレスは凛と響く口調で訊ねた。い、いきなり状況が掴めないぞ。セレスの師匠と言えば、確か魔剣との戦いで戦死したはず。他でもないセレスの口から俺はそう聞かされた。

すると、仮面騎士の後ろにいる白布を巻いた少女が嘲るような笑いを零す。

「気のせいじゃないの？　もしくはたまたま似てただけとか？」

「ゼクンドゥム殿、私はカルトゥム殿に訊ねている。あなたには黙っていただきたい」

「へいへい」

両手を頭の後ろに回してつまらなそうに一歩下がるゼクンドゥムは――チラリ。視線だけを動かしてこちらを見た。

……あいつ、俺に気づいてやがる。これじゃあ迂闊に出られない。

「どうなのだ、カルトゥム殿？」

険悪な目で問い詰めるセレスに、カルトゥムは沈黙を返す。

「確かに、ゼクンドゥム殿も言ったように似ているだけと考えもした。だが、似ているのは剣技だけではない。剣を振る時、防ぐ時、移動する時の微妙な癖まで全く同じだった。そこまで瓜二つな人間が二人と存在するだろうか？」

推測を述べながらも、セレスは神経を研ぎ澄ませていく。その鋭利な空気が俺にまで伝導してくる。

「三度目の問いだ、カルトゥム殿。答えなければ私は躊躇わず聖剣を発動させる。あなたは、何者だ？」

最後通達と問いを受けたカルトゥムは、フッ、とその口元に微笑を浮かべた。

「もはや、この仮面は不要か」

カルトゥムは籠手を嵌めた右手を顔に持っていき――

「久しいな、セレスティナ」

――その仮面を、外した。

「――ッ」

セレスが息を呑む。カルトゥムの喉元に突きつけられていた聖剣が僅かに下がる。双眸は見開かれ、彼女は半歩後じさった。

カルトゥムの素顔は、一言で片づけるとしたらイケメンだった。端整な輪郭に鷹のような鋭い目つき。その瞳の色は、男にしては些か長過ぎる髪と同じで日本人よりも黒い。鼻は高くもなく低くもなく、髭は剃っているのかずいぶんと若く見える。二十代後半か、三十代前半だろう。

歴戦の戦士を思わせる雰囲気は、やつの後ろで飄々としている少女とは比べ物にならない威圧感があった。

こいつは強い。そう思わせるだけの力が目に宿ってやがる。

「セレスティナ・フェンサリル……いや、今はセレスティナ・ラハイアン・フェンサリルだったな。それがお前の聖剣というわけか」

重さのある声で、カルトゥムはセレスのフルネームを呼んだ。セレスは見開いていた両目をすっと細め、カルトゥムの視線から隠すように聖剣を下げる。

「……やはり、カーイン師匠ご本人でしたか」

師匠？　ちょっと待て、セレスの師匠は死んだはずじゃなかったのか？

どうなってるんだ？

「存外に、落ち着いているようだな」
「いえ、これでも驚いております。師匠は亡くなられたと伝わっていましたので……。一応確認しますが、アンデットとして蘇ったわけではありませんね？」
「無論だ」
カルトゥム――もといカーインは鷹揚に腕を組んだ。死者でないと知ったセレスは安堵したのか物凄く緩んだ表情になったが、すぐに気を張り詰めて騎士の顔に戻る。退屈とでも言いたげに草むしりなんかをしているゼクンドゥムがいなければ、抱擁の一つでも交わしていたのかもしれない。
まあ、見た感じ上司と部下。抱擁なんてする関係ではなさそうだけどな。
「なぜ、もっと早く仰ってくださらなかったのですか？　仮面と偽名で、まるで正体を
私に知られたくないような感じでしたが……？」
「さてな。それより、なぜ真っ先にすべき質問をしない？」
「え？」
困惑するセレスに、カーインは腕を組んだ不動の姿勢のまま言う。
「俺が生きてこの世界にいることを、だ」
ピクリ、と反応したセレスがカーインの顔を見上げる。
「それは……気になりますが、私と同じで偶然この世界に迷い込んだのでは？　その、魔剣との戦いの最中に」
「お前は偶然かもしれん。だが、俺は違う」
「どういうことですか？」
セレスが怪訝そうに訊ねると、カーインは考えるように瞑目した。
そして数秒後、重たげにその口を開く。
「セレスティナ、心を強く持て。動揺はしても構わんが、絶望だけは決してするな」
カーインはなにやら気になる警告をして一泊置き――

「俺は、？魔剣士？だ」

とんでもないことを告白した。

「！？」

カルトゥムの正体を知った時よりも驚愕した表情になるセレス。

恐らく俺も似たような顔をしているだろう。

魔剣士。

言葉から察するに、セレスの師匠であるカーインの命を奪ったと言われていた魔剣の使い手だろう。死んだはずのカーインが実は殺した方の魔剣士でラ・フェルデからこの世界にやってきて異界監査官をやってるカルトゥムで……ダメだ、こんがらがってきた。

「……申し訳ありません。仰っている意味が」

セレスも俄かには信じられないようだ。さっきから手足が小刻みに震えている。

「ラ・フェルデでは、俺は魔剣に殺されたことになっているらしいな。だが、アレは国の体裁のためだ。魔剣を使い、街々を破壊していた者が聖剣十二将の一人だと知られることは国にとって都合が悪い」

事実の隠蔽と情報操作ってやつか。この世界でも、特に異世界絡みだと珍しくもない。

「あ、ありえません！　だって、師匠の剣は魔剣ではなく、聖剣ディフェンシオンのはずです！」

「……フン、やはり、お前はまだ知らぬようだな」

どこか得心のいった表情で、カーインは真実を語る。

「魔剣とは、堕ちた聖剣のことだ」

「なっ……」

何度目かの驚愕と、絶句。セレスは零しそうになった聖剣ラハイアンを慌てて掴み直した。

「聖剣ディフェンシオンは今や銘と姿を変え、守る力も壊す力となっている。あのくだらない大会の賞品とされた魔剣ディフェクトスは、元々聖剣ディフェンシオンだった物――つまり俺の物だ。現役聖剣十二将のお前には悪いが、アレを回収するのは俺だ」

カーインの口調は静かで落ち着いているのに、吹き飛ばされそうな気迫がそこに込められていた。対抗戦の予選を通過した時に感じた執着心と殺気は、こいつのものだったのか。

「そんな、嘘ですよね？　聖剣が魔剣になるなんて……？」

「嘘ではない。だから忠告した。俺のようになりたくなければ、絶望するな、憎しみを抱くな、世界を疑うな。負の感情は聖剣を堕落させ、持ち主を狂わせる」

「師匠の身に、なにがあったのですか？」

その質問には答えず、カーインは続ける。

「かつての俺は狂人と化して街々を消滅させた。罪のない者を何人も手にかけた。その後はお前も知る通り、陛下により次元の狭間へと封印された」

その話は俺もざっくりとだが聞いている。本来、やつも魔剣もこの世界に存在するはずがないんだ。

「だが、俺はその閉ざされた次空から――」

「カルトゥム」

説明を始めようとしたカーインを、草むしりに飽きたらしいゼクンドゥムが止める。

「ボクお腹空いちゃったなぁ。なにか食べに行かない？」

まるで父親におねだりする子供のような無邪気さで、ゼクンドゥムはカーインの腕を引っ張る。それに対してカーインは、ふう、と小さく息を吐いた。

「……らしくなく、喋り過ぎたようだ」

「カーイン師匠！」

踵を返そうとするカーインにセレスが食い下がる。

「悪いが、これ以上は語る口を持たぬ。どうしても知りたければ―

―」

カーインは腰に佩いていた長大な片刃剣を鞘から抜き払い、

「――こいつで問え」

その場で調子を確かめるように一振りした。

四章　聖剣と魔剣（２）（後書き）

一話で纏めるつもりが、書き終われなかったので半分に分けて投稿しました。

おかしい……別段残業もしてないしゲームもやってないのに目標地点まで執筆できなかった。まあ、そういうときもありますよね＾＾；

次話はたぶんすぐ書けるけどどうしましょうか？

や、更新日は守るべきですね。その方が夙的にもゲームに集中できま（強制終了）

次回の更新は１０月１１日（火）です。

あ、イラストコーナー更新してます＾＾

四章　聖剣と魔剣（3）

漆黒の鎧が夕焼けを不気味に反射している。カーインのギラつく眼光が、明確な闘志を孕んでセレスを射る。

危険を感じたのか、セレスは咄嗟に飛び退った。

「師匠……そうですね、あなたはいつも、実戦で教える人だった」

少し躊躇う素振りは見せたものの、セレスも握っていた超長剣――聖剣ラハイアンを中段に構える。

「師匠、いえ、？魔剣士？カーイン・ディフェンシオン・イベラトール。ラ・フェルデに仕える聖剣十二将として、あなたを捕縛します」

凛、と。セレスは私情を全て捨て、騎士としての矜持に従い、自らの師に剣を向ける。カーインはそんな彼女を満足げに見据える。

「間違えるな。今の俺はカーイン・ディフェクトス・イベラトールだ」

冷然と間違いを訂正すると、カーインは腕を引っ張っていた少女を下がらせる。

「構わぬな、ゼクンドゥム？」

「まあ、いいよ、面白そうだし。ボクらは適当に見物してるから。ねぇ？」

後ろ歩きで安全な距離を取る布巻き少女。最後の一言は俺に向けられた言葉だ。手出しするなら相手になる、そこにはそういう意思を感じた。

「来い、久々に稽古をつけてやろう」

「わかりました。全力で行きます！」

地を蹴り、セレスは一瞬でカーインとの間合いを詰める。優しくも攻撃的な光を剣身に纏い、振り下ろされた超長剣はしかし、カーインの籠手で防がれた。

聖剣ラハイアンに纏っていた白い光が漆黒の籠手に吸い込まれる

ように消えていく。
「た、対光属性の鎧……」
「敵と斬り結んでいる最中に驚くとは余裕だな、セレスティナ」
驚きに目を瞠ったセレスに片刃剣の袈裟斬が来る。間一髪聖剣で防いだが、そのまま力負けして吹っ飛ばされる。
即座に体勢を立て直して再び突撃するセレス。二つの刃が衝突し、白光と火花が弾ける。
だが、打ち合いは数度と続かなかった。
セレスは鎧の隙間を狙って刺突を仕掛けたが、その刃が人体を貫くよりも一瞬早く、カーインは聖剣を叩き落としたのだ。
「くっ」
凄まじい力だったのだろう。聖剣を落としてしまったセレスは手が痺れて動かない様子。
その隙を、カーインが突かないわけがない。
元弟子の鳩尾に、カーインは力強く握った拳を容赦なく打ちつけた。かはっ、とセレスがくの字に折れる。差し出すような形となった彼女の頭をカーインは鷲掴み、ゴミ置き場に放るように投げ捨てた。
「お前の全力とはこの程度か？」
呻き転がるセレスを、凍えるような無感情な瞳で見下すカーイン。
「だとすれば、幻滅だ」
カーインは片刃剣を両手持ちし、力を溜めるような遅めの動作で後ろへ引く。その刃に、空気が捻じ曲がるほどの闘気が宿る。
「やばい！」
俺はすかさず飛び出した。ゼクンドゥムが邪魔をするかもしれんが関係ない。あいつは、本気でセレスを殺す気だ。
俺が起き上がりかけたセレスを突き飛ばしたのと、カーインが片刃剣を下段から大振りしたのはほぼ同時だった。
ズン！
とてつもなく重量のある物体が落下したような音が響く。続けて

けたたましい崩壊音。
見ると、俺たちの数十センチ隣を大地の裂け目が通過していた。
それを目で辿り、絶句する。
旧校舎の一部が、そこだけ切り取られたかのように跡形もなく粉砕していたからだ。
元々ボロい建物だったが、他の箇所は一切崩れることなくそこだけが消滅している。加えられた力が一点に集中していたせいだろうが、なんつう技術と威力だ。
「れ、零児、なぜここに？」
俺に突き飛ばされたことにようやく気づいたセレスがもっともな疑問をぶつけてくる。
だが、その質問に答えるのは後回しだ。
「てめえ、マジでセレスを殺す気だったろ！」
俺は日本刀を生成しながら、変わらぬ無感情のカーインを睨む。
その向こうではゼクンドゥムがニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべていた。あいつ、端から俺を妨害する気なんてなかったな。
「セレスは弟子じゃないのかよ！」
「昔の話だ。今の俺はそいつの師だった頃の俺ではない。立場が逆の者同士の戦いは常に生きるか死ぬかだ」
「聖剣士と魔剣士の関係なんか知るか！　死闘なら国に帰ってから勝手にやれ！　だがな、ここでは同じ監査官だ。立場が逆なんてことはない」
「そうか、そういう設定だったな」
カーインはセレスに警告していた時と違い、非情で冷酷な色を黒い瞳に宿している。
「白峰零児と言ったか？　貴様も邪魔だ。セレスティナ共々ここで消えるといい」
カーインが剣を引く。再びあの闘気による衝撃破が来る。しかも、さっきよりも溜めが速い！
完全に立ち上がれていないセレスを庇いながらでは、とてもじゃ

ないが避け切れない。盾を生成したところで、あの威力を防ぐことなんてできないだろう。

くそっ！　どうする！

「終わりだ」

カーインの長大剣が振り上げられる。

その直前――

ビュワっと、カーインの目の前で小さな旋風が巻き起こった。

ガキン！！

構わず振り切ろうとしたカーインの長大剣を、風の中から現れたなにかが受け止める。

誘波だ――と思ったが、違う。カーインの刃を防いだのは、銃に似た形状をした二対の打撃武器――トンファーだった。

「おいおい、試合でもねェのに俺的に楽しそうなことやってんじゃねェかよ」

風の中から現れる、マロンクリーム色の髪と作業着。

グレアム・ザトペック。

「なァ！！」

ギン！　楽しそうな叫びと共に弾かれる長大な片刃剣。カーインは僅かに眉を曇らし、後ろに大きく飛んだ。

「次は俺様と遊んでくれよ。つか、二人纏めてかかってこい」

凶悪な笑みを浮かべるグレアムに対しても、カーインは怯みもせず無言を貫く。

「どうやら、間に合ったみたいですねぇ」

するともう一度風が舞い、俺とセレスを庇うような位置に鮮やかな十二単を着た少女が出現した。緩やかなウェーブヘアーを靡かせるそいつは、今度こそ日本異界監査局本局長――法界院誘波で間違いない。

「誘波殿に、グレアム殿……」

どうして？　と俺にしたのと同じ質問をセレスがする前に、誘波がニッコリと場違いなおっとり笑顔を向けて答える。
「私の庭で異常があれば駆けつけるのは当然ですよ、セレスちゃん。丁度グレアムちゃんとお話ししていたので、一緒に助太刀に参上しました♪」
だからグレアムらしくない登場をしたのか。
「だったらもっと早く来いよ。今までなにやってたんだ？」
「闘技場の近くにいた動物さんたちと戯れていました」
「お前、そういうキャラだったっけ？」
「むぅ、酷いですレイちゃん、私はこれでも純心無垢な乙女ですよ？」
もしもそれが真実なら俺はお前に対して敬う言語を使っている。
「それはそうと――」
変わらない笑顔でニコニコしながら、誘波は第四十四支局代表の二人に視線を投げる。
「どういうことなのかはあえて訊ねませんが、まだ争うと言うのなら私たちがお相手しますよ？」
誘波とグレアム。
この本局二強が組んだら勝てる気がしねえな。
「どうしますか？」
柔らかおっとりとした全く凄みのない口調で問いかける誘波に、カーインは戦闘態勢を解除して納刀した。
「やめておこう。ここで貴様らと戦えば後に響く」
あっさりと退くカーインに、ゼクンドゥムも「そうだね」と同意する。俺らを殺そうとしておいて、こいつらは対抗戦できちんと優勝して魔剣を回収するつもりなのか？
いや、強引な手段を取ると返り討ちに合うことがわかってるんだ。だからこそ邪魔になる可能性のある俺たちの排除にかかったのか。
「俺的には別にいいんだぜ？　この場で対抗戦の決勝をやってもよぉ」

両手のトンファーをくるくると回しながら愉快そうに口を開くグレアム。勝手に俺らとリーゼたちを負けたことにしないでもらいたい。

「行くぞ、ゼクンドゥム」

「はいはい、それじゃあ、また明日ねぇ」

作ったような無邪気さで手を振るゼクンドゥムの周囲が、ぐにゃり、と歪んで見えた。すると二人の姿が蜃気楼かなにかみたいに空間に溶けて消える。今のも転移の一種だろう。

「なんだよ、つまんねぇな。俺的に興醒めだぜ」

グレアムはトンファーを作業着の背中に仕舞うと、残念そうなオーラを発しながら歩き去ろうとする。

「グレアムちゃん」

そんなグレアムに、誘波が声をかけた。

「先程の件、よろしくお願いしますよ」

「あァ。もしもそうなった時はな」

振り返りもせず、グレアムはそれだけ返事して旧校舎の陰に消えていった。

「では、私もまだやることが残っていますので」

「ちょっと待てよ、誘波」

俺は風の転移をしようとする誘波を引き留める。

「いつになく仕事熱心なのはいいことだが、いろいろと説明不足過ぎるぞ」

「あらあら、私はいつも仕事熱心ですよぅ？」

「見え透いた嘘をつくな自由人め」

頻繁に俺んちでサボってるくせに。まあ、最近は対抗戦のせいかあまり来てないけどな。

「零児の言う通りだ、誘波殿。この場に現れたことはわかったが、グレアム殿になにをさせるつもりなのだ？」

「それに、あの四十四支局の連中は結局なんなんだよ？」

俺たちの質問攻めに、誘波は人差し指で顎を持ち上げて可愛らし

く「う〜ん」と唸る。
「言っても言わなくても、レイちゃんたちは気になって明日の試合に集中できそうにないですね。グレアムちゃんは目の前の戦いにしか興味がないのでお話ししましたが」
「勿体ぶらずにさっさと教えろよ」
促すが、それでも誘波は悩んでいるようだ。
「ならこうしましょう。明日の試合でグレアムちゃんたちに勝てたら、お話しします」
無理難題を押しつけられた。いや勝たなきゃいけないんだけどね。
風が舞う。
「まあ、最悪の場合、それまでにわかってしまうかもしれませんが……」
消え際に気になる言葉を残し、誘波の転移が完了してしまった。
今まで誘波がいた虚空を見詰め、俺とセレスは沈黙する。
何秒、いや何分突っ立っていただろうか。やがてセレスが夕闇の空を見上げながら口を開く。
「零児、これから予定はあるか？」
「いや、ないな。今日はリーゼたちもいないし、ずっと暇だ」
「なら、少し付き合ってくれないか？　訓練がしたい」
「グレアムやあの師匠ってやつに勝つためか？　一朝一夕で強くなんてなれないぞ？」
「コンビネーションを高めるくらいはできる」
セレスは振り返って俺をまっすぐに見た。そのエメラルドグリーンの瞳はどこまでも真剣で、自分の弱さを認め、必死に強くなりたいという意思を感じる。
俺は軽く微笑んだ。そんな顔されちゃあ、否定なんてできねえよ。
「ああ、わかった。付き合うよ。てか、俺は最初からそのつもりでお前を探してたんだ」
「む？　そうだったのか」
セレスは得心がいったような顔をし、カーインに叩き落とされて

いた聖剣を拾う。
と――

「その特訓、あたしたちも付き合ってあげるわ」
「チーム戦なんだ。二人でやるより、相手チームがいた方が面倒臭くないだろ？」

声に振り向く。真夏なのに暑苦しい黒のロングコートを羽織った二人組がそこにいた。
「漣殿に、瑠美奈殿」
だった。
「お前ら、病院抜け出してもいいのか？　てか、よくここがわかったな」
訊ねると、四条が可愛げなくフンと鼻息を吹いた。
「影魔導術は〈探知（サーチ）〉もできるのよ。夜になれば、誘波の風にも劣らないわ」
「病院の方は面倒臭えことに無許可だ。病室から直接転移したからな。まあ、受けた傷もあらかた治ってるし、大丈夫だろ」
苦笑気味に言った迫間が影の中から漆黒の大剣を取り出す。？影食み？の力を宿す迫間の最大武器――〈黒き滅剣（ニゲルカーシス）〉だ。
「どうするの？　あたしたちの申し出、受ける？　受けない？」
腰に片手をあてて問うてくる四条に、俺とセレスは顔を見合わせた。そんなものは決まっている。お互いの意思を確認するまでもない。
代表してセレスが答えた。
「ああ、二人ともよろしく頼む」
それから俺たちは場所をどうするかの話合いになり、時間も惜しいし人気もないのでこの旧校舎裏を使うことにした。

四章　聖剣と魔剣（３）（後書き）

修行編はカットします。書いても面白そうにないので。

人気投票、リーゼに入れてくれた方、ありがとうございます。まさかここまで挽回するとは……。

次回の更新は１０月１５日（土）です。できなかったらすみません＾＾；

四章　聖剣と魔剣（４）

そして学園祭最終日、大闘技場の対戦フィールド。
時刻は午前十時を回り、監査官対抗戦準決勝第一試合が始まろうとしていた。
グラウンドのような地面を踏み締めている俺とセレスの目の前には、同じ本局の異界監査官であるグレアムと稲葉が立っている。稲葉はともかく、グレアムのやる気と言ったら海水浴場に来た子供たちにも引け取らないな。まったく、遅刻で失格してくれりゃよかったのに……。
グレアムは両手に握ったトンファーをくるっくるさせながら楽しそうに笑う。
「おう、ようやくてめェと戦れる時が来たなァ」
「できれば永遠に来てほしくなかったけどな」
「去年は零児的にわざと予選落ちしやがったから、結局戦えなかったしよォ。その分、今日は張り切らせてもらうぜ」
「なにを言ってるのかさっぱりわからんね」
ちなみに去年の優勝者はグレアムではない。こいつに弱点があるとすれば、それは頭の残念さだ。確か去年は催眠幻惑系の相手に翻弄されたと聞いている。
まあ、催眠術も幻術もできない俺たちには関係ないことだが。
日本刀を生成する俺に倣い、隣のセレスも背負っていた聖剣の布を解き、鞘から抜く。
「グレアム殿、決勝を控えているとはいえ、あなたに余力を残して勝てるなどとは到底思えない。初めから全力を出させてもらう」
「ハハッ！　いいねェいいねェ。そうしてくれりゃあ俺的に楽しめるってもんだ」
「あのう、なんかさっきからウチのこと忘れてへんか？　一対二みたいな構図ができてんねやけど……」

普段通り女子用の赤いジャージ姿をした稲葉レトが、グレアムの斜め後ろで苦微笑する。忘れちゃいないが、影が薄くなったのは組んだ相手が悪かったと思ってくれ。

『挨拶は終わったようですね。それでは、これより準決勝第一試合を始めます』

誘波の合図と共に開戦の空花火が青空で炸裂する。

俺とセレスは即座に身構えた。

「セレス、打ち合わせ通りにいくぞ」

「了解した。こちらは任せろ」

セレスが僅かに頷いたことだけを確認し、俺は視線を前方に戻す。

眼前数センチのところに、トンファーの打撃部が迫っていた。

驚く暇すらなかった。

打ち飛ばされる覚悟もできなかった。

だが、トンファーはあと数ミリで俺に届くという距離でピタリと止まった。

「……おいコラ、零児的にふざけてんじゃねェぞ」

低く、静かな怒りの籠った声が俯いたグレアムから漏れる。

「紅白なんちゃらって呼ばれてた頃のてめェなら、今のくれェは見切れただろうがよォ。俺的にまさかとは思っていたわけだが……零児、てめェ、悠里のやつがいなくなってからずいぶん腑抜けちまったようだなァ！　あァん！」

「くっ」

正気づいた俺は、グレアムの気迫にあてられたように後ろに飛んだ。

「今のはてめェの腑抜け具合を確認しただけだ。次は止めねェぞ。零児的に昔の勘を取り戻さねェと、俺的にうっかり殴り殺しちまうかもしれねェ。頼むから、俺様をがっかりさせんなよ？」

仕切り直しとでも言うように、グレアムは踵を返して元の位置に

戻る。
「……昔の俺はアレを防げたって？　無茶言うなよ」
覚悟なんてとっくにできてるつもりだったが、まだ甘かった。一瞬一瞬に神経を尖らせないことにはあいつの動きなんて見えない。
「零児、大丈夫か？」
「俺の心配はしなくていい。あの化け物から目を離すな」
これからが本当の戦闘開始だ。俺とセレスは同時に地を蹴って左右に分かれ、まだこちらに背中を向けているグレアムを挟撃する。
一回戦でこいつらに敗北した第十一支局は一対一で戦っていた。だったら、俺たちは一対二で戦うまでだ。昨日の特訓でコンビネーションはそこそこ鍛えられたはず。今の俺たちならやれる！
まあ、実際はそんなに甘くない。
両サイドから迫る二つの刃を、グレアムは見向きもせずに両手のトンファーで受け止めやがったんだ。
「てめェら的にいい感じな息の合いようだ」
嬉々とした声音。先程の俺に対する怒りはもうどっかに吹っ飛んでるらしい。
グレアムは俺たちの武器を受け止めていたトンファーを唐突に離した。俺とセレスは僅かにつんのめる。しかしその僅かな隙に、グレアムは両手を大きく広げ、身を捻り――
「俺的に楽しくなってきたぜェ！」
狂喜乱舞といった様子で大旋回した。
周りの敵を弾き飛ばすための回転ではない。トンファーの特殊な形状を利用して、敵を絡め取るための回転だ。
トンファーを体に引っ掛けられた俺たちは、二人揃って呆気なく地面に叩き伏せられた。
「がっ！？」
「うっ！？」
全身に襲い来る衝撃。くそ痛え……。気を抜けば楽に失神できそうだが、そうなったら負けだ。

俺はすぐさま起き上がってバックステップ。セレスも転がってグレアムから距離を取ったようだ。

セレスの聖剣ラハイアンが強く輝く。刺突に構えられた光纏う剣。その剣尖から野球ボールくらいの光弾が連続的に射出された。

ガトリングガンのごとく無数に迫る光弾を、グレアムは表情を愉悦に歪めて全て弾いた。明後日の方向に打ち返された光弾だが、一つたりとも観客席には直撃していない。偶然ではなく、グレアムが意図的にそう弾いたのだ。

光弾が止んだ瞬間に俺はグレアムの懐に迫り、下段から偃月を描くように日本刀を振う。トンファーで防がれることなく難なく避けられた。畜生！

そこにセレスも加勢する。光の刃がグレアムの肩部を捉えようとしたその刹那――

「「！？」」

鳥が羽ばたくように左右のトンファーが振り上げられた。その速度も尋常じゃないが、俺の反射神経はなんとかついていってくれた。日本刀の刃でトンファーを受け止める。セレスもどうにか振り切りかけた聖剣を割り込ませることに成功したらしい。

だが――

「ぐっ！？」

完全に力負けした俺たちは、踏ん張ることさえ許されずに左右にぶっ飛んだ。俺は地面に叩きつけられる寸前で受け身を取り、起き上がる。くそっ、なんてパワーだ。

「ハッハーッ！　さっきよりは零児的に動きよくなったじゃねェか！」

グレアムは俺を狙うことになんの迷いもなかった。神速の跳躍で切迫し、俺の顔面にトンファーをぶち込もうとする。

反撃の隙なんてあるわけがない。俺は日本刀を盾にするしかなかった。

「だがな、いつまでもそんなナマクラ使ってんじゃねェよ！」

バキン！
と、魔力で生成された普通より強度の高いはずの日本刀が、まるで細枝のようにあっさりと折損した。
なんて簡単に圧し折るんだこいつ……。
「だったら」
でも、こんなことで驚いてなどいられない。この化け物ならそれくらいやってのけると予想できている。
「これでどうだ！」
〈魔武具生成〉――野太刀。
武人として最も剛気で腕力があるという威武を誇るために作られた長大な太刀だ。五尺を超える大刀は、たった今壊された日本刀なんかよりも硬く重い。無論、生成者の俺にはそんな重さなど感じないし、魔力を過剰に流し込んだ分強度も上がっている。
俺は逆袈裟斬に野太刀を振う。確実にグレアムを捉えるはずだった一撃は、身を斜めに屈められて避けられた。すぐに刃を返して袈裟斬。だがそれも、グレアムはその場から動くことなく器用にかわす。
これほど長大なリーチの得物を短刀のような素早さと小回りさで振っているにも関わらず、グレアムには防がれるどころか掠りもしない。
「まだだな」
ポツリと、俺の斬撃を避けながらグレアムが呟く。
「零児的に、もっと全力出せやァ！」
上段から振り下ろした野太刀にトンファーが打ちつけられる。パキッ、と嫌な音がしたかと思えば、野太刀の刀身が呆気なく？げ落ちた。
う、嘘だろ……？
コレ、かなり魔力を込めたはずだぞ。

「零児！　避けろ！」
セレスの叫び。見ると、光の斬撃渦が二つ、こちらに飛来していた。
言われた通り俺は横に避けようとする。だがそれよりも速く、紫電の槍が二つの光渦を貫いた。
爆光を発して相殺する槍と渦。
「せやから、ウチもおることを忘れんといてえな」
稲葉だ。紫色の電気を全身に帯びた彼女は、もう一本新しい雷槍を作ってセレスに投擲する。セレスはそれを横に飛んで回避すると、そのまま稲葉へと突撃をかけた。俺に加勢することは後回しにするらしい。
けど、それでいい。いきなり調子を狂わされたが、元はそういう打ち合わせだったんだ。
稲葉には悪いが、倒し易い方から先に倒させてもらうぞ。稲葉もセレスも監査官としてはルーキーだが、戦闘の経験はセレスの方が圧倒的に上だろうからな。滅多な事じゃ遅れは取らんはずだ。
だから、俺が一人でグレアムを引きつけて堪えなきゃならん。さっきの攻防からして二人がかりでも勝てるわけねえじゃんと思ったやつ、笑いたけりゃ笑え。これでも望み薄だが勝算はあるんだ。
勝つためには、まずどうにかしてあいつの攻撃を全部凌がな――

ドムッ！

その時、俺は自分の腹辺りから鈍い音を聞いた。
見ると、グレアムのトンファーの先端が突き刺さる勢いで減り込んでいる。
「――ッ！？」
それを認識した直後に、激痛が体中に駆け巡った。
遅れて、衝撃が来る。
「せっかく手ェ抜いて待ってやってんのに、なんで本気出さねえん

だ？　零児的に、俺様の知らねェ隠し玉があるはずだろうが」
グレアムがなんか言ったが、聞き取れなかった。
両足が地面から離れる。体が砲弾にでもなったかのような錯覚に襲われる。おかげで、自分が吹き飛んだのだと理解する。
「零児！？」
「余所見は禁物やで、セレスはん！」
赤い雷を纏った稲葉の掌底がセレスの胸当てを打った光景を最後に、俺の意識は途切れた。

四章　聖剣と魔剣（４）（後書き）

稲葉がエアパートナーでごめんなさいｍ（＿＿）ｍ
次回の更新は１０月１８日（火）です。

四章　聖剣と魔剣（5）

「うォい後輩！　てめェ、俺様の戦いに水差すんじゃねェぞ。俺的につまらない話になっちまうだろうがよォ。ったく、後輩なら後輩らしく、先輩の戦いをその辺で大人しく見物してろや」
「ええ！？　せやけどこれチーム戦やで、グレアム先輩。ウチ、見てるだけって性に合わへんねん」

そんな遣り取りが聞こえて俺の意識は覚醒した。
医療施設内に運ばれたのかと思ったが、まだ熱気溢れる闘技場の対戦フィールドだ。俺は壁に打ちつけられたらしくへたり込んだ体勢でいる。どうやら、気絶していたのはほんの数秒だったようだな。
「痛っ……」
体の、特に腹部の痛みに堪えながら俺は立ち上がる。歓声が上がったってことは、まだ俺たちは負けてないのか？
『危なかったですねぇ、レイちゃん。カウント8でしたよ』
誘波はちゃんと十カウント取ってからジャッジしていたらしい。見れば、セレスも反対側の壁に力なく凭れたまま動かない。二人とも気絶して八カウント、本気でやばかった。
グレアムが立ち上がった俺に気づく。
「ほう、根性だけは昔と変わってねェみてェで俺的に安心したぜ。だが、てめェ一人で、しかもその体でまだ戦れんのか？」
「当然、だ」
虚勢を張ったのは見え見えだろうが、グレアムは全く気づいていない様子でクツクツと笑い――一気にテンションを跳ね上げる。
「ハッハーッ！　そう来なくっちゃあ俺的に面白くねェ！　さァ、待っててやるから零児的に一番強ェ武器を生成しやがれ。あるんだろ？　とっておきが」
「言われなくても、もう出し惜しみはしねえよ」

俺は魔力を練り上げ、イメージを載せて右手に集中。入院中に纏めた理論と設計を、最も安定した形で使える武器として具現化させる。

右手付近が陽炎のように揺らめく。次の瞬間、そこに二メートル近い棒状の打撃武器が出現した。

「あァ？」

グレアムが怪訝そうに眉根を寄せる。

「なんだァそりゃ？」

「棍にしか見えへんけど？」

稲葉も疑問顔だな。

「おいおいおい、零児的にただの棍で楽しく戦れると思ってんのか？　……いや待て、別に俺的に面白くねェわけじゃあねェな。俺様のトンファーと似たようなもんだしよォ。零児的に使い込んでるだけあってちったァマシってことか？　ところで棍とトンファーが似てるって俺的に言っちまったが、打撃武器って以外になんか似てるとこあんのか？　俺的にトンファーは――」

「グレアム先輩、独り言もええけど来るで！」

俺は棍を両手で強く握り、稲葉の声で独り言の世界から戻ってきたグレアムに向かって疾走する。

そんな俺を見て狂戦的に笑うグレアムだが、向こうから仕掛けようとはしない。俺の出方を窺ってから反撃する気だろう。全ては楽しむために。

敵との距離は目測三十メートル。そこで俺は走ることを止め、代わりにダン！　と強く地面を踏みつける。その勢いに任せて体を大きく捻ると、届くはずのない棍をその場で横薙ぎに振り回した。

瞬間、棍の先端が伸びた。

「えっ！？」

驚いたのは稲葉だ。グレアムは一瞬だけ左目を見開いたが、すぐに愉快げな光を瞳に宿して垂直に跳躍する。

「ぎゃっ！？」

反応の遅れた稲葉だけが伸長した棍を横腹に受けて転がった。残念ながら意識は飛ばなかったようで、彼女はすぐさま起き上がる。
「なるほどなァ、ただの棍ってわけじゃないってか」
着地したグレアムの表情は愉快度が三割ほど増していた。
「零児的に、こういう能力武器は作れねェんじゃなかったのか？」
「俺の〈魔武具生成〉はな、構造さえ完璧に把握してれば異能をつけることだってできるんだよ。でもな、これは別に能力武器なんて大層な代物じゃない」
「あァ？　なに言ってんのかよくわかんねェが、零児的に棍を伸ばしたままでいいのか？　俺的に、ぶっ壊してくれって言ってるもんだぞ？」
稲葉を打った位置で伸びたまま止まっている棍に、グレアムはトンファーを振り下ろす。武器破壊をするつもりだろうが、そうはいかない。
グレアムが叩き折ろうとした位置から先が、光の粒子となって霧散した。
「？」
スカッと空振りするグレアムに、俺は消えた部分を修繕するように棍を伸ばす。
伸長速度を利用した強烈な刺突。鉄板だって貫く自信があるね。
しかしグレアムの反射神経は神がかっていた。空振りの隙などなかったかのようにトンファーを割り込ませて防御姿勢を取る。
衝突――その直前、伸びる棍の軌道が九十度上向きに曲がった。
「おう？」
そしてさらに九十度曲がり、先端がグレアムの眉間を狙う。こいつは伸びて曲がる棍なんだよ。
確実に捉えた――と俺は確信した。が、グレアムはほぼゼロ距離からの顔面刺突を、首を逸らしただけでかわしやがった。
そして、一言。
「零児、てめェ……作り続けてるだろ」

唸るように言うグレアムに、俺は棍を元の長さと形に戻すと、
「もう気づいたのかよ……」
げんなりと溜息を吐いた。グレアムはアホだが、実戦での洞察力と直感は半端ない。口頭で説明して理解できないことを、戦いの中であっという間に看破するんだ。
「どういうことや？」
横腹を擦りながら首を傾げる稲葉。仕方ない、説明してやろう。
「こいつは棍に見えるが、実際は完全に具現化されてないんだ。魔力を常に流動させて形を固定しないようにしてる。？不完全な生成？とでも言えばいいかな。まあ、生成途中の武器を振り回してる感じだと思ってくれ。だからこそ、伸ばしたり曲げたりといったイメージの上書き（オーバーライト）が可能なんだよ」
もっとも、元となる形――この場合は棍だ――をあまり崩さない程度にしか変形できないけどな。つまり、棍の先端を突然刃に変えるなんて芸当はできない。それを設定する段階では武具を具現できないからだ。
ただ、この？不完全な生成？には致命的な弱点があるんだが――
「とりあえず、できることは伸ばす曲げる取り消すだけじゃない」
俺は棍を構え直して走り、地面に突き立て、棒高跳びの要領で高く跳躍する。
「形さえ似ていれば、部分的に巨大化させることもできるんだ！」
改めて、この武器を命名しよう。

〈魔武具生成〉――神鉄変幻棍（しんてつへんげんこん）。

西遊記の孫悟空が使う神珍鉄の棒――如意棒に因んで名づけた長さ・太さ・向きを自在に変化することのできる棍が、普通の何十倍もの巨大さになってグレアムと稲葉を押し潰さんと迫る。ただ、全体が巨大化しているわけじゃない。伸ばした棍の先端が一番太いという円錐形をしており、俺の手元は普通に握れるサイズだ。以前ス

ヴェン戦で生成した偽グングニルみたいに、握れなくて消滅することはない。

ズドン！　と、まるで旅客機でも墜落したかのような衝撃音が木霊する。

爆発的に土煙が舞い上がる中、着地した俺は確かな手応えを感じていた。

でもそれは、敵を倒したという手応えではない。

「楽しい、俺的にこんなに楽しい時間は久々だなァ。ハッハァーッ！」

高揚し切った笑い声。次の瞬間、トン単位で重さがありそうな巨大棍が僅かに持ち上がり、一息に跳ね返された。

俺は神鉄変幻棍をデフォルトの太さと長さに戻す。同時に土煙が風に流れ、マロンクリーム色の髪をした作業着男と、赤いジャージ少女が変わらぬ姿でそこに現れる。

俺が感じていた手応えは、防がれた手応え。

「黄雷装纏――」

瞬発力を強化する黄色い雷を全身に纏った稲葉が一鼓動のうちに俺に肉迫する。

「今のはビビったわぁ、白峰先輩。あんなんもできるんやな」

ぎゅっと握られた拳が切迫の勢いを乗せて振るわれる。

「――瞬神剛破！」

速い。が、グレアムほどじゃない！

顔面を狙った黄雷纏う拳を寸でのところでかわし、俺は片足を軸として回転。気絶目的で棍を稲葉の後頭部に叩きつける。

が、それをグレアムがトンファーで庇うように防御した。

「俺的に楽しくなってるところに出しゃばるな後輩！　零児は俺様の獲物だ。そうだろう？」

「俺に同意を求めるな！」

グレアムの重過ぎる一撃を変幻棍で防ぐ。やはりその衝撃には踏ん張りも利かず、俺は後方に吹っ飛ばされた。変幻棍も打たれた部

分からポッキリ折れる。
でもそれは別にいい。自在に伸ばせて自在に消せるってことは、新しく生成するよりも速く復元できるってことだからな。
体勢を立て直し、壊された部分を修繕した棍をグレアムに向けて伸ばす。
だが、そこまでだった。
「くそっ、尽きたか」
フッ、と伸びていた変幻棍が消滅する。すると、グレアムの楽しそうな顔が歪んだ。
「おいおい、零児的にまさか魔力が尽きたんじゃねェだろうな？そんなつまんねェ話はなしだぜ」
残念ながらその通り。俺の蓄えてる魔力が空になったんだ。不完全なだけに、通常の生成と違って魔力の流動がなくなれば武具も消えるんだよ。
と言っても、そいつは大した欠点ではない。
武具を？不完全な生成？で留め続けることにも精神を磨り減らすが、一番の欠点は魔力の消費が著しいこと。常に魔力を放出しているのだから当然だ。シンプルな形状の棍でなかったら、戦闘に使えるほどの時間内で具現を維持できない。リーゼから莫大な魔力を定期的に〈吸力〉している現状でさえそれなのだ。
だからできれば最後の最後まで使いたくなかった。欠点は入院してる時にマッチ棒くらいの棍で練習してわかったんだが、やはりリスクが大き過ぎる。
しかし、問題はない。予定通りだ。
「ああ、確かに魔力は尽きた。でも、準備は整った」
「あァ？」
「白峰先輩、なに言ってんねん？　魔力なしでどう戦うんや？」
「なぜ俺が、わざわざ見せつけるように戦ってたと思う？　不利になるのに能力の説明をしたと思う？」
投げかけた意味深な問いに、グレアムも稲葉も頭上に『？』を浮

かべる。
「時間稼ぎだよ。なあ――」
流石にグレアムもこのタイミングで攻撃しないだろうと踏み、俺は視線を二人から逸らす。
「セレス」
俺の視線の先に堂々と屹立していたのは、煌めく銀髪の女騎士――セレスティナ・ラハイアン・フェンサリルだった。彼女は凛々しい翠眼に強い意思を宿し、両手持ちした光纏う超長剣を、剣尖を下に向けて頭上に掲げる。
「我刻むは光牙の聖痕、白き意思、正の理を持ちて、天地に蔓延る邪を祓え」
セレスはまるで魔法の呪文のような文言を唱え、
「聖剣術――浄魔光爆陣(じょうまこうばくじん)!!」
聖剣ラハイアンを、地面に深々と突き刺した。
瞬間、対戦フィールドに異変が生じる。
「――ッ!?」
稲葉が驚駭する。無理もない。あちこちの地面に刻まれていた戦いの傷跡から、淡い白光が漏れ始めたのだ。光は傷跡から傷跡へ連結し、一つの巨大な『式』を成していく。
そこまでの流れは、本当に一瞬の出来事だった。
なにかを言う暇なんてない。無論、悲鳴すら上げられない。
大闘技場対戦フィールドの二分の一を占める光陣から、一条の光の柱が立ち昇った。
それはグレアムと稲葉を呑み込み、上空に漂っていた白雲を払い除けて天を衝く。俺はギリギリ巻き込まれない位置に立っていたからセーフ。
白く美しい光の柱を眺めながら、俺は昨晩の打ち合わせを思い出す。

「聖剣術？」
「そうだ。戦闘における聖剣の力は大きく分けて二つある。一つは聖剣技と呼ばれる、発動に準備を必要としない剣技だ」
「あの光弾とか光の渦とかだろ？」
「うむ、小規模な戦闘ならそれらだけで事足りる。だが、聖剣術は中・大規模戦において敵を一掃するための技であり、発動に準備と聖言が必要になるのだ。この前の温泉地で私が零児たちに光を届けただろう？　あれが聖剣術だ」
「いやちょっと待て！　あんなのをグレアム一人に使うってのか？」
「ああ、そのくらいしないとあの者は倒れないだろう」
「グレアムはいいとしても、稲葉もいるんだぞ？　もし巻き込んだらやばいんじゃないか？」
「そこは加減する。それでもかなりのダメージを期待できるはずだ」
「ていうかセレス、あの後ぶっ倒れたんじゃないのか？　そんなの使って大丈夫なのかよ」
「そこもちゃんと加減する。だから心配するな、零児」
「……わかった。セレスを信じるよ。それで、準備ってのはなにをすりゃいいんだ？」
「使う聖剣術にもよるが、主に聖剣でつけた傷――聖痕が必要になる。それを二人に気づかれないように、できるだけ多く地面に刻んでおきたい」
「あー……じゃあ、こうしよう。俺がグレアムをどうにか引きつけるから、セレスは稲葉を狙え。稲葉も決して弱いわけじゃないが、グレアム相手よりはまだ刻める余裕があるだろ」
「しかしそれでは、零児が瞬殺されるのでは？」
「……そこは信じてください」
「不安だが、仕方ないか」
「あとそうだ、たぶんそんなにうまく事は運ばないと思うから、も

し俺が棍を生成したら一気に作業に取り掛かってくれ」
「？　どういうことだ？」
「グレアムも稲葉も、俺に釘づけになるってことだ」
「む？　よくわからんが、了解した」

正直、セレスがコソコソしてたら流石に気づくんじゃないかと思ってたが……二人ともアホで助かった。セレスも見つからないように上手く死角をついて動いてたみたいだしな。
「零児、よく持ち堪えた。成功だ」
セレスが屈託のない笑顔を見せて駆け寄ってくる。聖剣術はまだ発動しているのに、術者が動いてもいいのか？
「成功したのはいいが、俺の魔力が空っぽだ。決勝どうすりゃいいんだろうね。リーゼから〈吸力〉することはできそうにないし」
「私が魔力とやらを持っていればよかったのだが……」
魔剣はどうか知らないが、聖剣は持ち主の精神力で制御する。セレスの異能は剣にあるわけで、魔力によるものではないのだ。
「まあ、決勝は午後からだし、それまでにどうにか補給すればいい――」

「惜しい、俺的に惜しい話だ」

光柱の中から響いた声は、完全に勝った気でいた俺らの希望を打ち砕くには充分な威力だった。
「……は、はは……冗談はやめろよ。なんでまだ立てるんだよ」
徐々に直径を狭めていく光の柱。そこから、作業着が焼け落ちてほとんど半裸状態になったグレアムが気絶した稲葉を抱えて歩み出てきた。
「今のはちったァ痛かったぜ。ハハハ、いいじゃねェか。なかなかに面白かった。こんな面白ェもんが見れたってことは、後ろでちま

ちまやってた嬢ちゃんを放っといて正解だったわけだ」
狂喜。やつの顔に浮かび上がっている感情はそれしかなかった。
こいつ、やっぱり気づいてて無視してたのかよ。
「でもなァ、俺様を倒すにはちょっとばかし火力が足りなかったなァ。ま、そこについて本気出せたァ言わねェさ。あれ以上威力上げちまったら、こいつがくたばることになってたしよ」
「はうぅ」
グレアムはグロッキー状態の稲葉を乱雑に放る。なにも知らなければ味方を盾にした最低野郎に見えるが、稲葉の服があまり焼けてないところを考えると、たぶん庇ったのはグレアムの方だ。
それでいて、やつはしっかりと地に足をつけて立っている。もう『化け物』という言葉じゃ表現し切れねえぞ。
「さァ、俺ら的に第二ラウンドと行こうぜェ！」
楽しそうに、愉しそうにトンファーを構えるグレアム。セレスも聖剣を握り直し、俺は武器がないからあまり得意じゃない拳を使うしかない。
もはや勝てる気がしない。それでも、やれるだけやってやる！
俺がやけくそ気味に覚悟を決めたその時だった。

ゴゴ！！
「「「！？」」」
大地が、いや、空間全体が大きく揺らいだ。
俺はバランスを崩して転びそうになるのを必死に堪える。観客たちから悲鳴が上がる。この普通の地震とは異なる感覚、間違いない。
「な、歪震だと！？」
急激に次空が大きく歪み、？元へ戻ろうとする力？が働くことで生じる空間振動。なんでそれが今、この場所で起きるんだよ！
気づかないくらいの小さな歪震なら珍しくもない。だが、こんな何十秒も続く揺れはただ事じゃないぞ。

揺れが収まるまで約一分。感覚的には十分は揺れてた気分だった。
しかし、異変はそれだけではなかった。
「なんだ、アレは……」
セレスの震える声。瞠目する彼女は首を僅かに後ろにもたげて斜め上空を見上げている。
俺もセレスに倣って視線を上方に向け――
「――ッ！？」
そして、言葉を失った。

大闘技場より少し外れた位置の空間一面が、陽炎のように揺らめいていたからだ。
アレはたぶん、『次元の門（プレナーゲート）』とは違う。よく観察すれば歪みは円筒形を成しているようだとわかる。それが、まるで軌道エレベーターのように天空へと続いている。
柱。
見た目の印象を表すなら、それが妥当か。
唐突過ぎてわけがわからない。なんなんだよこの状況は！
『それは本当ですか！』
マイクがオンになったままなのだろう、実況席から誘波の驚き声が大闘技場内に響いた。
『困りましたね。私としたことが、そこを計算にいれてませんでした』
誘波はおっとりした口調でなにやらを呟いているが、そこには明らかに焦燥の色が含まれている。
「誘波！　一体なにが起こってんだよ！」
『あっ、レイちゃん、聞こえてましたか。えーとですね、最悪の事態です』
「だからなんだよ、最悪の事態ってのは？」
『医療施設が何者かに襲撃され、リーゼちゃんが攫われたようです』

……。

……は？

リーゼが、攫われた……？

誰に？

いや待てよ、人為的に歪震を引き起こし、リーゼを狙っている連中には心当たりがある。

「――キヒッ」

四章　聖剣と魔剣（５）（後書き）

ま、間に合った＾＾；
そしてようやくなにかが始まる！
回想シーンはテンポよくするために会話のみの構成にしました。
いや違うよ。面倒だったからじゃないよ。

大事な場面なのに推敲が足りないのは本当にすみませんｍ（＿）ｍ
次回の更新は１０月２２日（土）です。
……間に合うかなぁ。

四章　聖剣と魔剣（6）

異常気象じゃないかと思うほど不自然に暗雲が広がり始めた空から、馬鹿にしたような不敵な笑いが降ってきた。

「アッハハハハハハハハッ！　凄い、凄いよ！　まさに絶景だね！　アレがこの世界を支えている四本の大柱の一つってわけか。――キヒッ、なんて砕き甲斐がありそうなんだ！」

闘技場の上空に浮遊し、両腕両脚を大の字に開いて高らかに哄笑するそいつは、白い布を羽衣のように裸体に巻いた少女だった。

日本異界監査局第四十四支局代表の片割れ――ゼクンドゥムだ。

なんであいつ、あんなところにいるんだよ？

いやそれもだが、世界を支える柱だって？

「まさか、アレが『次元の柱』なのか！？」

この世界を、この次元を安定させる大黒柱のような物。それが『次元の柱』だと聞いている。『柱』というのは比喩表現だと思っていたが、あそこに出現している巨大な空間の歪みは本当に柱そのものじゃないか。

なんだろうと、もう対抗戦なんてやっている場合じゃないことだけはわかる。

「まったくギリギリだったね。今日中にアレをこちら側に引き出せなきゃ、来年まで持越しになるところだったよ」

「お前、一体何者なんだ？　今の歪震はお前がやったのか？」

白布を靡かせ浮遊するゼクンドゥムに、俺は警戒しながら訊ねる。

その声はきちんと届いたようで、ゼクンドゥムは無邪気そうでいてどこか酷薄な笑みを浮かべて振り返った。

「さあ、どうだろうね？　ボクは単にアレを見た感想を述べただけだけど？」

「はぐらかすな！　ギリギリだったとか、来年まで持越しとか、そういう怪しい台詞が聞こえたぞ？」

「あれれ？　聞こえちゃった？　参ったなぁ」
全然参った様子なくヘラヘラ笑うゼクンドゥム。飄々としていて掴みどころがない。
と――
「さっきからなに言ってんのか俺的によくわかんねェが、てめェ、せっかく楽しいところだった俺様の戦いに水差すんじゃねェぞあァ！」
グレアムが、天に向かって咆哮した。するとゼクンドゥムは、ぷっ、と吹き出して腹を抱え爆笑する。
「アッハハハハハッ！　お兄さん面白いねぇ。まだこんなくだらない大会を続けるつもりなんだ？　でも、ボクらはちょーっと付き合いきれないかなぁ」
「あァ？」
ゼクンドゥムのふざけた態度にグレアムは左目を細める。対するゼクンドゥムは全く怯むことなく笑みをあからさまな嘲笑に変え、
「もう、ボクらの監査官ごっこは終わりってことだよ」
冷酷な声でそう告げた。
瞬間――ドゴォン！！　と実況席の方から痛烈な爆発音が轟いた。続いて凄まじい暴風が激しく逆巻いて天に昇る。今度はなんだ？　誘波がなにかと戦っているのか？
突然の爆発と大竜巻に、観客たちが悲鳴を上げて我先にと逃げ出していく。監査局員が避難誘導しているようだが、わけがわからないままではパニックは収まらない。
一気に恐怖で騒然となる闘技場。おかげで後ろで気絶していた稲葉が「な、なんや？　なにが起こっとるんや？」と目を覚ましたが、構ってなどいられない。
「おい！　お前なにを――」
俺は実況席から暗雲立ち込める上空に視線を戻すが、

「――い、いない！？」

そこに浮遊していたはずのゼクンドゥムは忽然と姿を消していた。

俺はもちろん、セレスやグレアムも視線を彷徨わせ、白布を巻いた特徴的な少女を捜す。だが、どこにも見当たらない。闘技場の向こうにでも飛んで行ったのだろうか？

そう思った時、眼前の空間がぐにゃりと渦を巻くように歪んだ。

空間の歪みから歩み出てきたのは布巻き少女――ゼクンドゥム。

そしてやはりというか、彼女の傍らに並ぶ漆黒鎧の騎士だった。もう仮面をつけていないそいつは――

「カーイン師匠！？」

セレスが叫んだ。元聖剣十二将にしてセレスの剣の師――カーイン・ディフェクトス・イベラトールは、氷刃のような眼光で悲痛な表情をする弟子を睨み据えている。

「師匠、その剣は……」

セレスの視線がやつの握っている物体に向けられる。それは昨日まで振るっていた長大剣ではなく、紅の反射光を不気味に放つ銀刃の片刃大剣だった。

魔剣ディフェクトス。

堕ちた聖剣。

先の実況席で起こった戦闘は、あいつが魔剣を奪うためのものだったようだ。しかし、実況席には誘波がいたはずだ。あの最強の風使いが易々と敵を逃がすとは思えないが……？

「いやぁ、危なかったねぇ、カルトゥム。ボクが助けなかったら八つ裂きにされてたんじゃないの？」

「……」

からかうように上目遣いで長身を見上げるゼクンドゥムを、カーインは静かに一瞥しただけでなにも言わない。

すると風が舞い、俺たちとあの二人の丁度中間地点に鮮やかな十二単が出現した。薄緑色のウェーブヘアーを風に躍らせ、日本異界監査局本局長の法界院誘波は、こんな時でも変わらぬおっとり笑顔

で目前の敵に言葉を放つ。
「正直、あなた方を侮っていたようです。私の追撃から逃れた今の術は、ただの転移ではありませんね？」
「へぇ、気づいたんだ。流石だね。そうだよ。〈夢回廊〉って言ってね、ボクの世界（ゆめ）とこの世界とを繋ぐ扉を開いてるだけさ。アレだね、なんとなく『次元の門』に似てるかな」
日本異界監査局のトップに対し、上から目線でゼクンドゥムは語る。ユメと世界を繋ぐ？　なにを言ってるんだあのボクっ娘は？
「？次元渡り？……とは違うようですね」誘波は落ち着いた息を吐き、「まあいいでしょう。とにかく混乱している人が多いのではっきりさせましょうか。あなた方が何者で、なぜ存在しないはずの第四十四支局を名乗っているのかを」
……え？
「誘波、お前なにを言って――ッ」
ズキン。頭の奥に刺すような痛みが走った。
それは忘れていた大切ななにかを、あと少しで思い出せそうな感覚。
「思い出してください、レイちゃん。日本異界監査局に『４』と『９』はありません」
「！　そうか、欠番だ！」
誘波の言葉で、俺の靄がかった記憶が一気に明快になった。
セレスが眉を曇らす。
「どういうことだ零児？　欠番とはなんだ？」
「ああ、病室やマンションとかで縁起悪くて飛ばしている番号のことだ。『４』は死を、『９』は苦を連想するからな。日本の監査局も同じで、そういう数字が刻まれてる支局は存在しないんだ」
これは日本ラブな誘波が決めたことだ。あいつら以外に『４』や『９』のついた支局を見かけなかったのに、なんで気づかなかったんだ。
あまりにどうでもいいから忘れていた？　……違う、忘れていた

んじゃない。第四十四支局が存在する、そんな偽の情報を俺は疑うどころか当然だと思っていた。

まるで生まれた時からそういう世界で暮らしていたかのように。

「ひゅー♪　凄いじゃない、着物のお姉さん。ボクの夢から自力で抜け出せていたなんてね」

パチパチとゼクンドゥムの柏手が虚しく響く。

「夢の中だと、どんな無茶苦茶な設定でも真実になる。〈白昼夢〉――あんたたちは起きたまま、一部でボクの作り出した夢を見ていた。そういうことさ。簡単に言えばね」

「洗脳ってことか？」

訊くと、ゼクンドゥムは見た目相応の少女らしい無邪気な笑顔を俺に向ける。

「似てるけど違うよ。夢だって言ってるでしょ。現実じゃありえないことでもなんの疑いもなく受け入れてしまう。そういう世界に誘っているんだ。まあ、難しく言ってもわかんないよね。でも、お兄さんは一度実体験してるはずだよ？」

「実体験？　四回戦のことを言ってんのか？」

「あれ？　まだ気づいてないの？　おっかしいなぁ、とっくにあの夢は破棄してるのに」

人を小馬鹿にした態度がいちいち癇に障るな。誘波も大概だが、こいつは悪意がある分さらにその上を行くぞ。

ゼクンドゥムは自転車の手信号をするように左手を真横に上げ、

「お兄さん、こういうの、見たことない？」

突然、その手の先に黒髭をふんだんに蓄えた熊のような大男が現れた。赤い帽子とサングラスをかけ、キノコを食べると背が伸びるという不思議な体をした配管工っぽいツナギを着たそいつは――

「なっ！？」

紛れもなく、桜居がどこぞから連れてきたメイクアップアーティストのドイーさんだった。

だが、あのドイーさんは生きているという感じがしない。という

より、切れかけの立体映像みたいに姿が不安定にぶれている。
「待てよ。じゃあ、あの女装喫茶の異常なまでのクオリティーは……」
「そう、ボクが見せていた夢さ。いやぁ、現実は吐き気がするほど酷くって、なのにみんな可愛い可愛いって……ぷはっ！　危うく腹筋が崩壊するところだったよ」
なんて嫌な性格してるんだ、こいつ。桜居はもちろん、あの時の喫茶に訪れた人はみんなこいつの夢とやらを見せられてたってのか？　桜居の知り合いってのも、そういう設定の夢だったってことか？　冗談だろ？
と言っても、今思えばあの女装クオリティーは不自然なところだらけだ。中には背が縮んでたようなクラスメイトもいた気がするぞ。
「アッハハハ！　当分は思い出しただけで笑えそうだ。あ、そんな怖い顔しないでよ。学園祭ってものを盛り上げるのに貢献してあげたんだから感謝してよね。暇潰しだったけど」
このガキ、どこまで人を馬鹿にすれば気が済むんだ。
と、爆笑するゼクンドゥムの脇を不可視の刃が掠めた。少女の白髪が数本、ハラリと散る。
誘波の風刃だ。
「お喋りもいいですけど、そろそろ正体を明かしてはどうですか？　いえ、こちらから訊ねましょうか」
ニコニコした笑顔に鳥肌物の恐ろしさを含ませ、誘波は詰問の言葉を紡ぐ。
「あなた方は、あそこに見える『次元の柱』を壊すために乗り込んできた『王国（レグヌム）』の先兵、違いますか？」
『王国』――？魔帝？の、リーゼの循環する底なしの魔力を欲し、先の温泉地で『次元の柱』を一本圧し折った謎の組織。
やっぱり、こいつらもそうなのか？
キヒッ、とゼクンドゥムの口の端が吊り上がる。
「そうだと言ったら？」

その言葉が、答えだった。
「言っても言わなくても、私たちのすることは変わりません」
既に確信を持っているのだろう誘波が、なにかに合図を送るように細腕を上げる。

「理解してますか？　あなたたちは、ここにいる日本異界監査局の精鋭全員を敵に回すのですよ？」

そこでようやく、俺は気づいた。
とっくに蛻の殻になっているはずの観客席。そこに、未だ多くの人影が残っていることに、だ。
人影たちは誘波の合図に従うように次々と対戦フィールド内に飛び降り、俺たちの後ろまでやってくると適当に立ち止まった。
ざっと百人。大闘技場の規模から考えれば少なく見えるが、こいつら全員が対抗戦に参加していた異界監査官だ。注視すればどこかで見た顔もちらほらとあるな。
「ふぅん、ずいぶんと備えがいいじゃない？」
百の猛者たちからの敵意ある視線を浴びながらも、ゼクンドゥムの余裕は崩れない。カーインも相変わらず何も言わず、ただ視線だけを動かして警戒するように周囲に睨み利かせている。
「当然です」
誘波は自慢げに割と主張のある胸を張り、
「この地に存在する『次元の柱』は、祝ノ森にあった物とは違って世界の大部分を支えている四柱の一つです。それを守護するためにこの地には強力な封印が施されていますが、封印は強力過ぎる故にたった一年で緩んでしまいます。矯正にかかる時間は三日。柱の破壊を目論むあなた方が狙ってくるとすれば、そこしかありえません」
この大闘技場がなんで封印されているのかさっぱり知らなかったが、そういう理由があったのか。これまでの俺なら言われたところでピンと来なかっただろうが、実物を目撃してしまえば納得せざる

を得ない。
「――ってちょっと待てよ誘波！　三日ってことは、毎年やってる監査官対抗戦は……」
「はい。柱を守護するための戦力をこの地に集めるためですよ、レイちゃん」
　そうか。対抗戦のような興味を引くイベント事にでもしない限り、個人を優先して動く監査官が集うわけがない。中にはグレアムのような戦闘キチも多いと聞くし、対抗戦はそんな強者を揃えておくには持って来いってわけだ。
「今年の対抗戦をチーム戦にした最大の理由は、『王国』の存在が明らかになったためです。もしも『王国』が攻めてきた場合、より多くの戦力が必要でしょうから」
　見た感じ、ここにいる俺たち以外の監査官はみんな事情を知っている風だ。だからと言って知ってて対抗戦に参加したわけではなく、直前に誘波に告げられたってところか。恐らくはなにかしらの交換条件をつけて。
「アハッ！　なるほどなるほど。でもそこまで推測しておきながら、ボクらを放置してたのはどうしてかな？」
「正直、あなた方が上手だったり、『王国』という存在が曖昧で確証なく動くことができなかったという理由もありますが……状況を見てわかりませんか？　あなた方を袋のネズミにするためです」
　異界監査官が百人。しかも一人一人が雑魚じゃない。予選のルールやチーム戦だったことも考慮すると、予選通過者以上の実力者だってゴロゴロいるはずだ。もしかして俺たちになにも言わなかったのは、俺たちの挙動からその狙いを敵に悟らせないためだったのかもしれない。
「たった二人……いえ、もう何人かお仲間が隠れているようですけど、舐められたものですね。それとも、『王国』という大層な名前の割に人員不足なのですか？」
　誘波にしては珍しく、からかいとは違う挑発的な口調で言う。

「これ以上はコソコソやって成功できることではありませんよ。大人しく捕まるのであれば、私の楽しい楽しい質問会だけで済ませてあげます♪」

拷問会の間違いだろ、そんなツッコミを俺が口に出そうとした直前――ぷはっ！　とゼクンドゥムが息継ぎをするかのように盛大に噴き出した。

「アッハハハハハッ！　あー、ダメ。もうダメ。おかし過ぎて頭トんじゃいそうだよ」

堰を切ったような大爆笑。ゼクンドゥムは腹を抱えて前屈みになり、目尻に涙まで浮かべてやがる。今のどこに笑いのツボがあったんだ？

「あんた馬っ鹿じゃないの？　ボクらがなんのために監査官ごっこやってたと思ってるのさ？　仲間が柱を出現させるまでの暇潰し？　違う違う」

おかしそうに嗤いながら顔の前で手をヒラヒラさせ、ゼクンドゥムは告げる。

「どのくらいの戦力があればあんたらを殲滅できるか分析するためだよ！」

言うや否や、ゼクンドゥムの背後の景色が大きく渦を巻いた。

「〈夢回廊〉――開通」

ゼクンドゥムがその場で手刀を薙ぐと、背後の空間の渦に変化が生じた。今まで見せていたものとは違う。渦の中央が白み、次第に歪みを押し退けて広がっていく。

空間に穿たれた白い穴。そこからガシャガシャと金属の擦れる音が聞こえたかと思えば、完全武装した兵隊が整然と行進して出てきた。その数、百は優に超えてるぞ。

「なっ、なんだこいつら!?」

訓練された動作でカーインの後ろに整列する兵隊たちに、俺だけ

じゃなく他の監査官たちも愕然としている。誘波は少しだけ目を見開いたようだが、すぐに落ち着きを取り戻していた。
「それだけですか？」
「まさか。いいよ二人とも、もう出てきても」
余裕の笑みを満面に浮かべたゼクンドゥムがどこかに呼びかける。
瞬間――ガガガガガガッ！！
「今度はなんだ！？」
またも歪震かと思ったが、これは地鳴りだ。なにかが地面を突き進んでいるような、そんな削岩音。
整列している兵隊たちの右翼の地面が激しく隆起する。大地を爆発させて現れたのは、両手にドリル状の槍を握る西洋騎士のような出で立ちをした、首のない青いフォルムの巨大機械人形だった。
まさか――
――嘘だろ？
「ふむ、ようやく表舞台というわけか。裏方も決して嫌いなわけじゃないけど、まったく待ちくたびれたよ」
「お前、スヴェン！？」
機械巨人の本来なら首がある位置に立つ燕尾スーツの青年――スヴェン・ベルティル。かつて本局所属の異界監査官をしていた、リーゼの魔力に目をつけたマッドサイエンティスト。生きているとは聞いていたが、なんでここで出てくるんだよ！
スヴェンは紳士然と眼鏡の位置を直して俺を見る。
「久し振りだね、白峰零児。また会えて嬉しいよ」
「……くっ、俺は全然嬉しくないんだけどな！」
スヴェンの首なし機械人形（デュラハン）が飛び出してきた地面の大穴から、同じデザインで一回り小さな機械人形たちが蟻の巣をつついたようにわらわらと這い出てくる。何体いるんだよ、キショイぞ。
それでも、敵の増員はまだ終わらなかった。
兵隊たちの左翼。そこの空間に、唐突に切れ目が入った。それも一度に複数箇所。

切れ目は綺麗な楕円形に広がり、その奥はゼクンドゥムの〈夢回廊〉とは真逆のドロドロした闇が蠢いている。

アレは、『混沌の闇』の？穴？だ。どうしてこんな昼間っからと思って天を仰ぐと、歪震と『次元の柱』が出現した影響か、分厚くドス黒い雲が日光を遮断していた。

？穴？から零れる闇と共に、粘土細工で作ったような不細工で多種雑多な姿をした獣が飛び出してくる。全身真っ黒で眼だけが赤く爛々と輝いている獣たちは――影魔導師の間で影霊（レイス）と呼ばれる異獣だ。

となると――

「ふふっ」

怖気の走る不気味な笑いが聞こえた瞬間、影霊たちに囲まれるような位置に闇が噴き上がった。

その中から現れる、巨大な影。五メートルを超える全長は筋肉質で、ワニのような頭部にノコギリのような鋭い牙、背中から生えた蝙蝠のような巨翼と、ドラゴンのような長い尻尾には見覚えがあり過ぎる。

そんな悪魔のごとき異形の肩に、黒いセーラー服を着た長髪の美人が腰掛けている。彼女は周囲の影霊と同じ赤く煌めく双眸を俺に向けて、気さくに手を振った。

「はぁい、監査局のわんこさん。こんにちはぁ♪」

「望月絵理香……」

やめてくれよ。冗談にしてはきつ過ぎだろ。俺はなんか悪い夢でも見てんのか？　だったら早く覚めてくれ。頼む！

「なるほど、大闘技場周辺でコソコソしていた動物さんはお二人でしたか」

わけもわからず現実逃避したくなった俺を、誘波の言葉が引き戻した。

『闘技場の近くにいた動物さんたちと戯れていました』

あの時の台詞は、俺をからかうための嘘じゃなかったのか。
「キヒッ。どうしたのかな？　着物のお姉さんと作業着のお兄さんはともかく、後ろの人たちはさっきまでの威勢がどっかに飛んでっちゃってるね」
まあ無理もないけどね、と付け足して軍団の先頭に立つゼクンドゥムは右後方を手で指し示す。
「第八柱執行騎士（オクタウム・エクエス）、？機奏者？スヴェン・ベルティルの率いる機械人形が五十機」
次に左後方を見る。
「第六柱執行騎士（セクストゥム・エクエス）、？影霊女帝？望月絵理香の率いる中・上級影霊が百五十体」
くるっと優雅にターンをして後方を向く。
「さらに第四柱執行騎士（カルトゥム・エクエス）、？剣神？カーイン・ディフェクトス・イベラトールの率いる魔装騎兵団が三百人」
最後に俺たちに向き直り、両手を大きく広げる。
「そしてこのボク、第二柱執行騎士（ゼクンドゥム・エクエス）。通り名は？夢幻人？。人々の悪夢から生まれたボクに固有名称はないから、これまで通りナンバー（ゼクンドゥム）で呼んでね♪」
愛らしさの奥にそれが霞んで見えるほどの悍ましさを感じさせるゼクンドゥムは、俺たちに見せつけるように二本の指を立て、
「ボクらの任務は二つ。一つ目はそこに見えてる『次元の柱』を破壊すること。二つ目は第六柱が口を滑らせたことでボクら『王国』の存在を知ってしまった日本異界監査局を、主力が集結するこの機に叩き滅ぼすこと」
無邪気な表情で、とんでもなく残忍な言葉を吐いた。
「唐突で申し訳ないけど、ちょっと戦争とかやっちゃおうか、日本異界監査局の皆さん」

四章　聖剣と魔剣（６）（後書き）

次回の更新は１０月２５日（火）です。間に合えば。

四章　聖剣と魔剣（7）

絶望的な光景だった。

意味がわからない。なにがどうなったら安全面の考慮された？試合？から、ルール無用の？戦争？に発展するんだよ。

ついさっきまで幽霊のように実体が不明瞭だった組織――『王国』。それが俺たちを潰すために攻めてきた。？軍団？という、確立した存在となって姿を現した。

やつらの言う『執行騎士』ってのが恐らく幹部に相当するのだろう。軍に置き換えるとしたら将軍か。俺は戦ったことがあるからわかるが、とてつもない実力者たちであることは間違いない。

その執行騎士が四人。

しかも、それぞれがそれぞれの部隊を率いている。

自律的に殲滅行動を取る機械人形が五十機。返り血を浴びただけで？影？の浸食を受けてしまう影霊が百五十体。カーインの後ろに控える兵隊たちは知らないが、魔装騎兵団とか言ってたな。つまりあの三百人全員が？普通ではない？武具を装備しているのだろう。

彼我の戦力差は、数の上だけでも軽く五倍。これを絶望的と言わずしてなんと言おうか。

意味がわからない？　違うな。混乱して事態を呑み込めないのではない。この唐突でありえない現状を、俺は理解したくないんだ。

「おい、？影霊女帝？」

姿を現してから常に沈黙していたカーインがついに口を開いた。だがその重々しい口調は俺たちにではなく、味方である望月絵理香に向けられていた。

「なにかしら、？剣神？？」

お互いが二つ名で呼び合う。

「その目障りな？穴？を閉じろ。貴様、味方まで侵蝕する気か？」

「ふふっ、私は別にどうだっていいのだけれど」

望月は悪魔のような姿をした異獣の肩上でクックツと不敵に嗤う。
あの悪魔異獣は、彼女の恋人の広瀬智治を食らった最上位影霊だ。
恋人の命を奪った影霊を、望月は恨むどころか恋人本人だと言い張ってあのように手なずけてしまっている。厄介極まりない。
「……」
「うっ、わかったわよ。だからそんなギロギロした目で私を見ないでくれる？　まったく嫌よね、異世界人は。本来この世界にあるべき存在じゃないから、この世界に寄生してる『混沌の闇』の侵蝕を受けるとすぐ死んじゃうんだもの」
異世界人をまるで下級種族だとでも言うように嘲りつつ、望月は糸状の？影？で闇を零す空間の？穴？を全て同時に縫合する。『混沌の闇』とは他世界に根を絡ませ、その世界の情報を養分に育つ言わば『世界の種』。影魔導師には地球人しかいないなんて話を聞いたことがあるが、そういった理屈があったのか。
「？穴？を塞いでいただいたのはこちらとしても助かります。ですが、他の監査官はともかく私を相手にするには戦力の桁が一つ足りないのではないですか？」
そうだ、見ただけでは絶望的だが、実際はそうじゃない。
こちらには誘波がいる。スヴェンの操るデュラハン軍団を物ともせず斬り捨て、ここにいる以上の影霊の群れを無傷で駆逐した最強の異界監査官が。
戦力差を見せつけられて動揺していた監査官たちが、誘波の余裕に感化されて落ち着きを取り戻していく。
誘波に言葉をぶつけられたゼクンドゥムは、表情から色を消した。そしてなにかを思案するように瞑目し、やがてつまらなさそうに言う。
「ねえ、やっぱりもうこの茶番劇やめない？　ボク飽きちゃったよ」
なんだって？
飽きた？　茶番劇？　どういうことだ？
「なに言ってんだお前？　そっちから一方的に仕掛けてきたんだろ

うが！」

言動が意味不明過ぎて思わず叫んだ俺に、ゼクンドゥムは面倒そうな顔をして語る。本当に飽きてしまったという面だ。

「それがそうでもないんだよね。この大闘技場という場所は、最初から最も盛り上がる局面で戦場になるように仕組まれていたんだ。ボクたちはその提案に乗った。いや、命令を忠実に実行したと言った方がいいよね。そうでしょう？」

ゼクンドゥムの視線が俺から別の一点にシフトする。

「ボクらの？王様（レクス）？――法界院誘波様」

俺は、ゼクンドゥムが今なにを言ったのか全く理解できなかった。

「――えッ！？」

ゼクンドゥムが、カーインが、スヴェンが、望月が、その他大勢の兵隊たちが誘波に向かって恭しく片膝をついた。ちょっと待てよ。なんだよ、それ。

「誘波殿が、『王国』のトップ……」

セレスがありえないといった様子で呟きを漏らす。他の監査官たちにも先程以上の動揺が波及していく。

「嘘だろ、誘波？　あいつらがテキトーなこと言ってるだけだろ？　お前が敵のボスだなんて、そんなふざけたこと、あるわけねえよな？」

俺の声は、自分でもわかるくらい震えていた。

誘波は三十秒ほど無言を返した後、数歩『王国』側の方へと歩み寄り、申し訳なさそうに振り返った。

「すみません、レイちゃん」

聞きたくない言葉。

「本当は最後まで知られずにいてほしかったのですが、ゼクンドゥムちゃんがバラしちゃった以上、仕方ありませんね」

どうして、似合わない真面目な顔してるんだよ？

「……冗談はよせよ」
「冗談だと思いますか？　まあ、思うでしょうね。ですが、『王国』という存在を異界監査局がこれまで感知することなく、存在を知っても曖昧なまま進展しなかったことに疑問を抱いたりしなかったのですか？　内部に、それもあらゆる情報を操作できる位置に、『王国』の手の者が潜んでいると少しでも考えたりはしなかったのですか？」
　それは、それだけ『王国』が上手なのだと俺は思っていた。裏切り者はスヴェンだけだと信じたかった。
「なぜだ、誘波殿。あなたはこのようなことをする者ではない。いや、それが演技だとして、このようなことをして一体なにがしたいのだ？」
　驚愕の事実を無理やり割り切って受け入れた、セレスはそんな複雑な表情をしていた。誘波はゆっくりと首を動かして一度だけ『次元の柱』を見ると、
「私を解放するためです」
　わけのわからないことを口にした。
「なにを言ってるんだ？」
「私は、この地、あの大柱に繋がれた存在です。柱が存在する限り、私に自由はないのです。？風？とは自由なもの。決して縛られてはいけない。私は、本物の？風？になりたいのです」
「待て待て！　ホントになに言ってんだよ？　お前に自由がないだと？　ふざけんな。自由人の鑑だろうがお前は！」
「そう見えていたのは周りだけでしょうね。とにかく、レイちゃんたちにはここで死んでいただきます。異界監査官という強者の血と魂を生贄に、私はあの大柱を破壊できるだけの力を得る。この大闘技場にはそのような術式を組み込んでいるのです」
　いつものようにおっとりしていて、しかし冷徹な韻をそこに含んで誘波は断言した。俺たちに、死ね、と。
　すると――

「てめェの事情なんざ俺的に知ったことじゃあねェ」
グレアムが唸った。
「要は、てめェ的に敵だったってことでいいんだな？　あァ！　誘波！　あの話はそういうことだったってわけか！」
トンファーを握って目にも留まらぬ速さで誘波に接近したグレアムは――ブォン！　トンファーが誘波に届く数ミリ寸前で突風により吹き飛ばされた。
「チッ」
転がったグレアムは受け身を取って舌打ちする。誘波はそんな彼を見据えながら――すっ。
ゆらりとした綺麗な動作で、俺たちに手を翳した。次の刹那、彼女の周囲で風が荒れ、俺たちに牙を向ける裂刃の颶風となる。
「今まで楽しかったですよ、グレアムちゃん。そして、レイちゃん」
最後はにっこりと笑って、誘波は別れの言葉を紡いだ。
その時だった。

パリン！

視界が、窓ガラスのように一瞬で罅割れ砕け散った。
頭がくらっとする。この感覚、まさかあの時と同じ……？
「悪夢から覚めましたか、皆さん？」
おっとりしていながらも真剣な声。眼前には鮮やかな十二単を纏った少女が毅然と屹立していた。
俺たちに、預けるように背を向けて。
「誘波、お前、敵だったんじゃ……？」
「いつまで寝ぼけているのですか、レイちゃん。そんなわけないでしょう？」
となると……俺はゼクンドゥムを睨んだ。
「やっぱり今のは、てめえの見せた夢か！」
残念なことに、『王国』の軍団は夢じゃなかったようだ。スヴェ

ンも望月も当然のようにそこにいて、俺たちを見てニヤついてやがる。

「その通りです、レイちゃん」

ニコニコ笑っていた誘波の表情が、すぅと真剣な物に変わる。

刹那、風神の怒りのごとき凄まじい裂風が『王国』側に吹き荒れた。抉られた大地が砂塵と化して巻き上がり、周囲の大気からは軋むような音が聞こえた。

耳を劈く大勢の悲鳴。そんな彼らを、誘波は感情を消した青い瞳で睨めつける。それは誘波が初めて見せる、本気の怒り顔だった。

「私が、大好きな監査局を、レイちゃんを、皆さんを裏切るわけがありません。よくも気持ち悪い夢を見せてくれましたね。本気で潰しますよ？　まあ、動機の設定は当たらずも遠からずでしたが」

ブチ切れた誘波に顔を真っ青にするスヴェンとは違い、ゼクンドゥムは澄ました面で「キヒッ」と嫌らしく嗤う。

「あっれぇー？　面白くなかった？　変だなぁ。身近な人物が黒幕でしたって展開はボクけっこう好きなんだけどなぁ。超展開過ぎたとか？」

ふざけ切った調子で、ゼクンドゥム。あいつは百回くらい殴らねえと気が済まないぞ。

「あァ？　つまり誘波が敵っつうのはてめェ的な幻術だったわけか？」

「幻術じゃなくて夢だって何度も言ってるのに……お兄さん頭大丈夫？」

ゼクンドゥムはげんなりと肩を落とした。グレアムを含め、混乱していた監査官たちはどうやら次第に状況を理解してきたようだ。皆が皆、白布を巻く少女を殺気立った視線で射ている。セレスだけが誘波が黒幕じゃなかったことに安堵した様子を表していた。

「それにしても、やっぱり凄いね、着物のお姉さん。ボクの夢から抜け出すだけじゃなく、他人に見せてる夢も破り捨てちゃうなんてさ。本当ならあのまま同士討ちしてくれると楽だったんだけどね」

「ゼクンドゥムちゃんの能力はとても厄介ですが、一度に見せられる夢は一つだけなのでしょう？　一人で複数の夢を同時に見ることはできませんからね。そして、自分の描いた設定を人に投影するためには特殊な『場』を形成する必要があるようです。つまり――」

誘波が右手を振るう。瞬間、俺たちを覆うように展開されかけていた透明なにかが斬り裂かれて消えた。

「――場を破壊してしまえばいいだけの話です」

いや、透明なにかと言うより、今のは空間そのものだった。虚空が紙っぺらよろしく破られ、引き裂かれ、その向こうから変わらない景色が現れたんだ。どうやらまたゼクンドゥムは俺たちを夢に誘おうとしていたらしい。全然気づかなかったぞ。

「もう夢に入る前に防がれちゃうんだ。凄い。まったくもって脱帽だね」

ゼクンドゥムが初めて苦虫を噛み潰したような顔をし、

「流石は柱守の大精霊、法界院誘波だ。いや、？風？のシルフィードと呼んだ方がいいかな？」

さらりと、とんでもない事実を俺たちに知らしめた。

「……そこまで知っているのですか。いえ、でなければあの夢の設定は作れませんね。『王国』とはやはり侮れません。ですが、知ってここの場所で喧嘩を売ろうなんて愚計だと思いませんか？　ここだと、このように私の力は飛躍的に上昇しますので」

ヒュオオオオッ。

突如、『王国』側全域に凄まじい下降気流が吹いた。超重力のごとく対象を押し潰す誘波の〈圧風（プレッシャー）〉だ。しかしこれほどの規模のものを俺はかつて見たことがない。

「皆さんに、風の加護を授けます」

『王国』軍が成すすべなく地に伏せていくのを認めつつ、誘波が言う。すると、俺の周りに微弱な大気の流れが発生した。周囲を見回

すと、俺だけじゃなくここにいる約百人の監査官全員に同じ風が纏ったようだ。

これは風の加護。彼の温泉地で『混沌の闇』の侵蝕を受けなくするために付加されたものと同じだ。――と思ったが、それだけじゃない。

体が軽い。綿毛のようにという表現がピッタリくるくらい軽い。しかもグレアムとの試合で負った傷の痛みやらなにやらが消えている。

この場所が誘波の力を上昇させるというのは本当らしい。前は俺とリーゼの二人しか風の加護を得られなかったし、こんなに追加効果もなかった。

いやそれよりも――

「誘波、柱守の大精霊ってどういうことだ？　これも夢なのか？」

「レイちゃん、話は後です。〈圧風〉だけで呆気なく終わるとは思えません。敵の動きに備えてくださ――ッ！？」

忠告する誘波の肩に、後ろから白い手がポンと置かれた。

「ボクの〈白昼夢〉を破ったくらいでいい気にならないでよね」

ゼクンドゥムだ。あいついつの間に？　てか、そんな些細なことよりも重大な事実がある。

あの誘波が、敵に触れられたってことだ。

未だかつてグレアムしか成功しなかった光景を前に、俺たちは唖然として動けないでいる。

そして――

「カルトゥム、やっぱり予定通りにやるしかなくなったよ。そっちは任せたから」

そんなことを言いながら、ゼクンドゥムは小さな体で誘波をガッチリと羽交い絞めした。

「なにをする気ですかゼクンドゥムちゃん！」

「大精霊がいたら分が悪いからねぇ。お姉さんはボクの世界（ゆめ）に誘わせてもらうよ」

誘波は風で振り払おうとするが、それよりも速く、二人の姿は空気に溶けるように消えてしまった。〈夢回廊〉、その向こう側の世界へと。

歪んだ空間が元に戻るまでの数秒間、俺たちはただ呆然とし、誰一人として喋ることができなかった。

「……誘波が、やられた」

正確にはやられてなんていないが、この戦場から一縷の希望が退場させられたことになる。それは倒されたのと同義だ。

「嘘だろおい!?　どうすんだよ!?」

「狼狽えている場合ではないぞ零児！　来るぞ！」

緊迫したセレスの声が響く。〈圧風〉から解放された敵軍がむくむくと立ち上がっていた。戦意、闘気、殺気。それら全てが爆発的に跳ね上がり、トップを失って騒然とする監査官たちに押し寄せる。

「一時はちょっぴり焦ったけど、これで思いっ切り遊べるわね。ふふっ、ペットたちのいい運動になるわ」

と、悪魔異獣の肩で楽しそうに足をブラブラさせる望月。彼女の周りに溢れる異形たちが一斉に唸りを上げる。

「僕としても、バージョンアップしたデュラハンの試験運用には持って来いの環境だ」

眼鏡を持ち上げ、スヴェン。ガシャンガシャンと機械音を轟かせ、首なしの機械人形たちがそれぞれ手に持った槍を構える。

二人の執行騎士の軍勢に挟まれる位置で整列する兵隊――魔装騎兵団。その先頭に立つカーインは殺人的に鋭い視線をギラつかせ、

「殲滅しろ」

魔剣ディフェクトスを前方に翳し、無情にそう命令した。

四章　聖剣と魔剣（7）（後書き）

次回の更新は10月29日（土）です。

四章　聖剣と魔剣（8）

怒号、そして悲鳴。

一斉に動き出した『王国』軍が、圧倒的な戦力差で俺たち異界監査官を蹂躙せんと襲い来る。影霊が吼え、機械人形が巨槍を振り回し、様々な異能を宿した武具を装備する兵隊たちも鬨の声を上げて進撃する。

「うわあああ！？」「誘波がやられちまった」「おいやべえよどうすんだよ！」「こんな相手に勝てるの？」「逃げた方がいいんじゃない？」「無理だって！」「ふざけんな！」「俺はこんなとこで死ぬために来たんじゃねえよ！」「殺される！」「私は自分の世界に帰りたいだけなのに」「畜生！」「こんな軍団、誘波なしでどうすりゃいいんだよ！」

喚き、叫び、嘆き、ほとんどの監査官が大パニックに陥っている。これじゃあ敵を迎え撃つどころじゃないぞ。野盗が攻め込んできた小さな村落のごとく、抵抗する間もなく焼き払われてしまう。

風の加護は誘波がいなくなっても残ったままだ。ならば俺だけでもやってやる、そう思いたいが、いかんせん魔力がない。グレアムたちとの試合で全て消耗し切ってしまっている。もはや日本刀一本も満足に生成できないだろう。

それにたとえ魔力が尽きないほど有り余っていたとしても、俺一人がどうにかできる相手ではないことだってわかっている。

『次元の柱』は、きっと絶対に守らなければならないものなのだろう。だが、頭では理解していても実感は薄い。勝ち目のない戦いに身を投じてまで死守したいという思いは湧いてこない。たとえ柱の現物がそこに見えていても、それが破壊される先に滅びが待っているとしても。根も葉もない予言を聞いているような、そんな感覚から抜け出せないでいる。

逃げるが勝ちか。そう判断しかけた時、俺は気づいた。

怒涛と化して雪崩れ込んでくる大群。その後方で、カーインだけが反対方向に歩いていた。やつの目指す先にある物は……『次元の柱』だ。まさか、たった一人で破壊するつもりなのか？

「待つんだカーイン、これを使うといい」

一番槍で俺に飛びかかってきた狼っぽい影霊の噛みつきをかわしていると、カーインを呼び止めるスヴェンの声が聞こえてきた。

狼型影霊を蹴り飛ばしてからそちらに視線を向ける。と、機械人形の一機が、握っていた槍ではないなにかをカーインに放り投げているところだった。

全体的に黒っぽく、端から伸びている金色の長い糸束みたいなものがふさっと宙に広がって――なッ！？

「リーゼ！？」

だった。見間違うはずがない。金色の長髪に小柄な体、魔女っぽい黒衣の端々から白く細い四肢を覗かせる少女を俺は他に知らない。

意識のないリーゼを片腕で受け止めたカーインは、「これをどうしろと？」とでも言うような視線をスヴェンに向ける。

「それの魔力を魔剣に食わせるといい。そうすれば効率よく柱を壊せるだろう。ただし、傷物にはしないでくれよ。それは僕の研究にとって核を成す大事な部品だからね」

――プチン。

その時、俺の中でなにかが切れた。

「あんのクソメガネ！　リーゼを物みたいに言いやがって！」

柱を守る？　そんなもんはどうでもいい。いやどうでもよくないにしても、ついでいい。リーゼが、仲間が捕らわれている。その事実だけで『逃げる』という選択肢は消え失せた。

助けるしかない。いくら敵の数が多くても、這い蹲ってでも取り返してやる！

「零児！」

「白峰先輩！」
あちらに気を取られていた俺に迫る二体の狼型影霊を、駆けつけたセレスと稲葉が蹴散らす。一体は輝く聖剣で斬られ霧散消滅し、もう一体は赤雷纏う剛拳で潰され闇へと還った。
「零児、お前は下がっていろ」
敵軍に目を配らせながらセレスが言った。稲葉も頷く。
「せやで、白峰先輩。魔力のない白峰先輩はたぶんウチらん中で一番弱い。ここに安全な場所なんてないやろうから、学園に戻った方がええよ」
まさか後輩にそんなことを言われる日が来るとは思わなかった。しかし、状況が変わったんだ。ここで退けるほど俺は人間できちゃいない。
「リーゼがカーインに捕まっている。助けねえと」
「？魔帝？なら、私が助ける」
セレスの意外な言葉に、俺は一瞬目を丸くした。
「いいのか？」
「私は師匠に聞きたいことが山ほどある。そのついでだ。それに、？魔帝？はアレで悪人ではないことを私は知っている」
「そうか」
素直じゃないセレスに心の余裕を僅かに取り戻した俺だったが、やはり彼女に任せっきりになどできない。俺は守られる側じゃなく守る側だ、そう自分に言い聞かせて告げる。
「悪いが、俺は逃げない。武器が作れないなら敵から奪う。魔力がないなら敵から奪う。昔はそうやって戦ってきたんだ。その危機的感覚は――」
俺は左足を一歩引いて体を横にずらす。その直後、俺の数センチ隣を掠めて氷の大剣が地面を砕いた。すぐさま俺は片足を軸として身を回転させ、氷剣の持ち主である兵隊の横腹に爪先で蹴りを入れる。
「――まだ忘れちゃいない」

あまり得意じゃないが、俺は一応体術もある程度は母さんに扱かれて会得しているんだ。そうでなければいろんな武具なんて使えやしない。かといって武器がないままだと足手纏いにはなりそうだけどな。

これで兵隊が武器を落としてくれりゃ儲けもんだったんだが、そんなに甘くはなかった。氷剣の兵隊はガチガチに武装しているとは思えない身軽な動きで受け身を取り、再度武器を構え直している。隊列を無視して先走った下っ端、といったところだが、それでも実力は雑魚じゃないことがわかる。

セレスの聖剣と兵隊の氷剣が打ち合う。そこを取り囲もうとする別の兵隊たちを稲葉が紫雷の槍でどうにか牽制している。

俺は改めて周囲の状況を見る。感情論を抜きにして、この敵軍の壁を突破してカーインの下まで辿り着くのは至難の業だ。

俺から見て右側では、例の悪魔異獣が大木のような尻尾を振り回し、？影？の破壊光線を口から発射して猛威を振るっている。

「ふふっ、遊びましょう、わんこさんたち」

その怪物の肩から飛び下り、影霊たちの主が自ら戦線に介入する。二本の影刀を持って疾駆し、瞬時に五人もの監査官を擦れ違い様に斬り捨てる。血飛沫を上げて倒れる監査官たちを見下しながら、望月は薄ら怖く笑っていた。

一際大きな悲鳴が聞こえ、俺は左方に視線をやった。そこでは巨大な機械人形の群れがドリル状の槍を振り回して大勢の監査官たちを薙ぎ飛ばしている。一本の槍が振るわれる度に、二人以上の監査官が宙を舞っている。

劣勢過ぎる。抵抗すればあそこまで簡単にやられるはずのない監査官たちは、誘波を退場させられた絶望感から完全に戦意を失っているようだ。

やばい。このままじゃ、三十分も持たず殲滅が完了しちまう！

カーインに一矢報いるどころか、近づくことすら叶わない。そんなふざけたことってあるかよ！

俺たちも十人近い兵隊に囲まれてしまっている。正直、絶体絶命だ。

まさしく、そんな時――

「おいおいおいおい、ふざけてんじゃあねェぞてめェらッ！！」

馬鹿でかい音を立て、機械人形の一機が胴から真っ二つに砕き折られた。破砕面からバチバチと青白いスパークが飛び散っている。

落下して動かなくなった機械人形の上半身に、マロンクリーム色の髪をした焼け焦げた作業着姿の男が飛び乗った。

グレアムだ。

「てめェら的に、誘波を失ったくれェでなに弱気になってんだ？　あァ！　てめェらは監査官だろうが！　いつから大将がいなけりゃなにもできねェ三下になり下がったんだ？　気に入らねェ。俺的に気に入らねェからてめェら纏めてぶっ壊すぞ！」

肌にビリビリと突き刺さるようなグレアムの怒鳴り声に、敵も味方も戦闘を一時中断して注目する。

「俺ら的に、てめェの戦いをすりゃいいだろうが！　そうやって戦ってきたんじゃねェのか！　逃げてェやつはさっさと消えろ！　俺的に邪魔だ！　だがな、こんな面白ェ状況で尻尾巻いて逃げるような野郎が同じ監査官ってのは俺的に泣けてくる話だぜ！」

たぶんグレアムの辞書には『戦略的撤退』という難しい言葉は収録されていないのだろうが……今、空気が確かに変わった。

「俺様たちは異界監査官だ。他人の指示なんて必要ねェ。こいつら倒せば元の世界に帰る方法とかが手に入るかもしれねェって誘波に言われてんだろ？　俺的にはどうでもいいが、それがてめェらの目的なら全力で噛みついてみせろや！」

決定的な台詞だった。

「そ、そうだ！」「誘波がいないからってなんだ」「俺がいれば問題ねえ」「こんな相手に勝てるかだって？　僕なら勝てるね」「こ

こで逃げるなんて格好悪いわね」「やってやる！」「ふざけんな！誰が三下だ！」「余裕で潰してやんよ！」「ああ、ぶっ殺してやる！」「私たちを舐めたこと、後悔しなさい！」「誘波なんて最初から必要ねえんだよ！」

パニックになり、あちこちに纏まりなく飛んでいた意識が一つのベクトルに乗った。『王国』に対抗するという、一つの意思に収束した。

ハッ、とグレアムが笑う。

「いいじゃねェか。てめェら的に目ェ覚めたみたいでよ。じゃあこうしようぜ。雑魚一匹一ポイント、ロボ一匹十ポイント、大将一匹百ポイントで最終的に一番ポイントが多いやつが優勝だ！」

優勝の意味がこれっぽっちもわからないが、グレアムのおかげで監査官たちの士気が上がったのは確かだ。

地鳴りのごとく鬨の声を発し、倒れた者も起き上がって我先にと敵に立ち向かう。急変した凄まじい気迫にたじろぐ兵隊たちを、変わらず襲い来る影霊や機械人形たちを、それぞれの能力で叩き伏せんとする。

炎が、氷が、雷が乱れ飛び、大闘技場の対戦フィールドを花火のように鮮やかに彩る。趨勢を、僅かずつだが押し返している。

なんて激戦だ。

集団戦などこれっぽっちも考慮していない勝手極まる個人戦だが、共通の敵がいるからか、お互い様だとわかっているからか、仲間割れに発展する気配はない。

普通なら足の引っ張り合いになるだろう。だが、それはチームを意識した場合だ。グレアムの最後の言葉は、味方を仲間から『競争相手』に変えたのだ。

戦うのは集団ではなく、個人。

だからこそ、監査官は強い。

その様子を砕き割った機械人形の上から満足げに眺めているグレアムが、ぼそりとなにかを呟いたことに俺は気づいた。

遠い上にこの喧噪だ。聞こえるわけがない。読唇術なんて高等なスキルを俺は習得していないからわかるはずもない。

でも、なんとなくなにを言ったのか悟れた。

『これでいいんだろ、誘波』

グレアムがあのように他人を鼓舞したことを俺は少し意外に感じていたんだ。誘波は自分になにかあった時、混乱する監査官に方向を示す役をグレアムに託したのだと思う。もちろん、本人たちに訊かないことには予測の域を出ないが、グレアムの『約束を守ってやった』と言うような表情を見るとそう思わずにはいられない。

さて――こうなると、俺らも立ち止まってばかりいられないな。

消えた誘波がどうなったのか気になるところでもあるけど、あいつの心配をするほど無駄なことはそうそうないだろう。だったら、俺たちは俺たちの戦いに集中するべきだ。

「零児、退かないのであれば？魔帝？はお前が助けるんだ」

「ああ、わかってる。セレスは俺らなんて気にせず、思いっ切り師匠を引っ叩いてこい」

「うむ。そのために、まずはこの包囲を突破する。そして一気にカーイン師匠の下まで駆け抜ける！」

頷き合う俺とセレスに、背中合わせで敵を牽制している稲葉も言葉を乗せてくる。

「ウチも全力でサポートするわ。あと白峰先輩、ウチの魔力、少しやけど貸したる」

「！　サンキュ、稲葉」

遠慮なんてしてられない。ここは素直に受け取っておくべきだ。

左手で稲葉の手を握り、〈吸力〉する。流れ込んできた魔力を俺用に変換し、次は右手に収斂させる。

〈魔武具生成〉――棍。

普通の棍だ。稲葉から借りたなけなしの魔力じゃ日本刀三本が限界だろう。棍なら五本ってところか。なんにしても神鉄変幻棍なんていう無茶苦茶な生成などできるわけがない。

だが、充分だ。

「行くぞ！　リーゼを助けてカーインをぶっ飛ばす。そんでもって『王国』の企みも潰してやる！」

その言葉を号令に、俺たちは同時に大地を蹴った。

四章　聖剣と魔剣（８）（後書き）

※お知らせ※

ＭＦ文庫Ｊライトノベル新人賞に投稿した作品が二次選考通過止まりで落選しました。つきましては三巻終了後に次の公募用作品を書くための休載期間に入らせてください。勝手は重々承知ですが、決して打ち切るわけではありませんので、シャッフルワールド！！を見限らず待っていただけると嬉しいです＾＾

落選した作品はなろうにて週3で再アップしています。未読の方は暇潰しにでも使ってください。＞ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ９５３８ｘ／＜

人気投票、セレスに入れてくださった方、おかげ様でぶっちぎりです（笑）　ありがとうございます！

次回の更新は１１月１日（火）です。

四章　聖剣と魔剣（9）

「緑雷装纏（りょくらいそうてん）――」

高く垂直跳びをした稲葉の体が緑色の電気を帯びる。そのまま稲葉は帯びた電気を掌に収束させ、宙空で一回転。球体となった緑雷が次々と射出され、俺たちを取り囲む魔装騎兵団の頭上で円形を陣取る。

その色により様々な特性が強化される稲葉の雷。緑色は――範囲だ。

「――降雷乱舞（こうらいらんぶ）！」

轟！　と。

全ての球体から緑色の落雷が降り注ぎ、呆然と天を仰いでいた兵隊たちに襲いかかった。

「今や！　白峰先輩！」

着地した稲葉の声を聞くまでもない。俺たちはとっくに一点突破を狙って疾走（はし）っていた。

緑雷の直撃を受けて倒れた者もいれば、攻撃を見切って回避した者、特殊な防具のおかげか直撃しても平気で立っている者もいる。見た限り、倒れた者は少ない。

俺たちの進路に立ち塞がる兵隊は三人。セレスはそのうち最初に突っ込んできた氷剣の兵隊と斬り結び、俺は棍の中心を握って残り二人の相手をする。

輝く聖剣が氷剣ごと兵隊を斬り伏せる。数瞬遅れて俺の棍が兵隊二人の喉を突いて昏倒させた。

無論そこで立ち止まったりはしない。後ろは稲葉が抑えてくれているが、追手は必ず来る。それに、敵は前の方が多い。

「カーイン団長の下には行かせるな！　どちらも近距離タイプだ！　魔導銃士隊、前へ！」

指揮官らしき兵隊の命令に従い、拳銃からバズーカのような重火

器まで様々な遠距離武器を持つ兵隊たちが壁を作る。くそっ！　武器の統一感はないが、兵隊だけあって集団での戦闘に慣れてやがる。
「セレス、横を抜けるぞ！」
「ああ」
火炎放射やよくわからんエネルギー弾が殺到してくる中、俺たちは回避するためにも横に飛ぼうとし――
「いや、君たちはそのままっすぐ進むんだ」
粘っこい韻を含んだ声がした瞬間、炎やエネルギー弾は反射されたかのように方向を百八十度変えて兵隊たちを襲った。
俺たちと悲鳴を上げる兵隊たちとの間に二つの影が割って入る。
流石に、立ち止まってしまう。
「武器だとしても使用したのは人の意思。ならば捻じ曲げることなんて容易いよ。特に、君たち程度の意志力なら補助道具（フランベルジェ）を使うまでもない」
「……ここは任せて」
薔薇服の優男と、紫色のドレスを着た三つ目の美女――刻印魔術師のルノードと？魂吸の魔眼？を持つラシュリーだ。
「お前ら、どうして……？」
どうして、俺たちを助けたんだ？
「あのおチビちゃんが捕まったのは僕たちのせいでもあるからね」
「……助けるなら、協力する」
ルノードは敵から目を離さず腰に佩いたフランベルジェを抜き、ラシュリーは開いている第三の目で俺たちを見詰めて柔らかく微笑んだ。
「……行って」
「ありがたい」
「感謝する」
俺とセレスは再び走るために足を動かそうとしたが、追手と前方

の兵隊に板挟みにされていると気づいて躊躇する。
「銃士隊は下がれ！　跳ね返される！」
指揮官が声を張り上げる。訓練された動作で俺たちはあっという間に取り囲まれてしまった。
しかし、そんな危機的光景にルノードはクツクツと笑う。
「おやおや、そんなに僕たちを見詰めていいのかな？　ラシュリー」
「……了解、ルノード」
カッ！　とラシュリーが両目を大きく見開いた。
開眼された両の瞳は不気味な黒紫色の光を放っている。すると、ラシュリーの前方にいた指揮官たちの体から白い光が煙のように抜け、ラシュリーの掌に集った。
彼女の？魂吸の魔眼？が一度に十人近い兵隊たちの魂を抜き取ったんだ。仮死状態となった彼らは白目を剥いて呆気なく地に伏している。
す、すげぇ。この二人を相手にしてたら一回戦落ちは確定だったかもしれんな。
「な、なんだアレは！？」
「魔眼だ！　女の目を見るな！」
「デュラハンだ！　デュラハンを回せ！」
動揺する兵隊たちの悲鳴を背中に浴びて、俺とセレスは倒れた指揮官たちの横を駆け抜ける。
その先には――ズシン！　ズシン！
一歩踏む込む度に地震を起こしているような重低音を轟かせ、二体の首なし機械人形が立ちはだかった。さっき兵隊の誰かが呼んだデュラハンだ。
こいつらは個体で考えるなら兵隊より厄介だぞ。やっぱ簡単に通してはくれないか。
「零児、蹴散らせるか？」
「無理だと言ってもやるしかねえよ！」
三メートル近い巨大ロボが二機。人の身で壊せるかどうか不安だ

が、初めてというわけじゃない。あの時より状況が不利でも、やってやれないことはないはずだ。

二機のデュラハンがドリル状の巨槍を掲げる。

と――

「ふんぬ！」

左側のデュラハンが、突如飛びかかってきた巨体に組み伏せられた。闘牛のような角を禿頭に生やし、七つの玉を繋げた数珠を首に下げた巨漢は、六本の腕のうち四本でガッチリとデュラハンの動きを封じている。

「小童に壊せて、儂に壊せんわけがないけんのう！」

ポゥと淡く輝いた残り二つの拳で、パクダ・カットゥヤーヤナはデュラハンを滅多やたらと乱打した。デュラハンを構成している装甲や部品やらが見る間に解体されていく。

だがデュラハンはもう一機いる。俺たちを狙おうとしていた右側の巨槍がパクダの大きな背中に向けられる。

パチン！　指を鳴らす音が軽快に響いた。

瞬間、パクダを狙っていた右側のデュラハンが、地面から生えるようにしてせり上がった三本の巨剣に貫かれた。

スパークして動かなくなるデュラハンの足下に、包帯を巻いたマジシャン風の男が立っている。彼――ハイカル・アズミは包帯の隙間から覗く右目で俺たちの方を見ると、クイッと顎をしゃくって『次元の柱』の方向を示した。

行け、ということらしい。

「すまない！」

「恩に着る！　パクダ殿、ハイカル殿」

簡単に礼を言い、俺とセレスは走る。

走る。走る。走る。とにかく走る。

目指すカーインは観客席の階段を登っている。大闘技場から『次元の柱』まで距離がある。破壊するなら麓ですればいいはずだ。なのになぜこの場に現れた？

魔剣を回収するため？　それもあるだろう。リーゼの魔力を魔剣に食わせる、とスヴェンが言っていたし、あの魔剣が柱を壊す重要な鍵となっているのは間違いない。

「カーイン師匠は、一体どういうつもりなのだろうか」

走りながらセレスが呟きを漏らした。その表情は暗く、複雑だ。

「あの観客席の一番上が最も柱を見渡せる。あいつはそこからなんらかしらの手段で柱を破壊するつもりだろうな」

「いや、零児、そうではなくて――」

「？剣神？が私たちに加担していること、かしら？」

「「――ッ！？」」

天空から高密度の？影？の奔流が落ち、俺たちの進路十数メートル先の地面を爆散させた。爆風が衝撃波となって俺たちの体を打つ。が、どうにか足の踏ん張りを利かせて吹き飛ぶことだけは凌いだ。

重たい羽ばたき音を立てながら、巨大な影霊が舞い降りてくる。その肩に乗る黒セーラー服の少女が不敵な笑みで見下している。

「……望月絵理香」

奥歯を噛みしめ、俺は悪魔異獣と少女を睨め上げた。

「あなたは、知っているのか？　カーイン師匠になにがあったのか。どうして『王国』などという悪に協力しているのか」

問いかけるセレスに対し、望月はクスクスと小馬鹿にした笑いを返す。

「私たちが『悪』だなんて人聞きが悪いわね。でも、ふふっ、私はそれも嫌いじゃないけど」

「質問に答えろ！」

「ふふふっ。どうでもいいわ。私は智くんさえいればそれでいいの。他の人なんて興味ない。ああ、？王様？だけは別かな。あの人は、私を混沌から掬い上げて智くんと会わせてくれた恩人だもの」

「つまり知らないと？」

「そういうことよ。知りたければ本人に訊くことね。特別にここを通してあげるから。でも――」

ゾワリ。
背筋に走った悪寒が、望月の変異を告げる。
「智くんを傷つけたそこのわんこさんだけは、この場で殺してあげる！」
二本の影刀を構え、煌めく血色の瞳をした望月が悪魔異獣の肩から飛び降りた。
まっすぐに俺だけを見詰めて。俺だけに、殺意を向けて。
影霊たちの女王が、来る。
「――ッ！？」
急に、望月が俺への突貫を止めて後ろに飛び退った。次の瞬間、彼女が突っ込んでいただろう場所に無数の黒いナイフが雨霰と降り注いだ。
続いて灼熱の黒炎が凄まじい勢いで俺の脇を擦り抜ける。リーゼの黒炎とは違う、影が炎の形を成しているような無光の燃焼体。望月はそれに？影？の衝撃波をぶつけて相殺する。
「面倒臭えが、白峰も通してやってくれないか？」
「相手が欲しいならあたしたちがなってあげるわ、望月先輩」
振り向くと、漆黒の大剣を握る少年とカラスのような黒翼を背に生やした少女がそこにいた。
「迫間！　四条！」
黒いロングコートを羽織ったそいつらは俺を一瞥すると、キッと表情を引き締めて望月に向き直った。
「久し振りね、漣くんに瑠美奈ちゃん。まさか、二人だけで私を止められると思ってるの？」
身も凍りそうな望月の畏怖が少し弱まる。だが、望月の言う通りだ。四人がかりでようやく追い返すことに成功した望月を、迫間と四条の二人だけでどうにかできるとは思えない。時間稼ぎを引き受けてくれるだけなのだとしたら、それは御免だ。今回は影霊の弱点

である光を使えるセレスがいる。俺たちも加勢するべき――

「ああ？　寝惚けてんじゃねえぞ？影霊女帝？。クソ羽のガキ弟子だけにてめえの相手なんざさせっかよ」

闇が噴き上がる。その中から、鋭い目つきをしたくすんだ赤毛の女が大鎌を構えて飛び出した。

「てめえの首は、オレが刈り取るんだからよ」

ガキィン！　大鎌と影刀が衝突し、聞き慣れない金属音が響く。

大鎌の乱舞に望月は顔を顰め、バックステップで赤毛の影魔導師――ウェルシー・ホーネッカーから距離を取る。

「悪い口調……黒帽子のストーカーおじさんみたい」

体勢を低く取り、望月は嫌なことを思い出したように呟く。

その後ろで悪魔異獣が吼えた。？影？の咆哮波をぶっ放そうとする悪魔異獣だったが、突然空から降ってきた巨大ロボにアッパーカットで顎を殴られた。咆哮波は強制的に閉ざされた口内で爆発する。

デュラハンじゃない。ちゃんと頭部があるし、デザインがまるっきし違う。なによりも、胸部にあるコックピットに赤ちゃんが乗っているのが見えた。

「ヴィルゲルム！　そのでかぶつは任せたぜ」

「イエス・マム」

赤ちゃんの知的ボイスがロボのスピーカーから流れ、ヴィルゲルムと悪魔異獣が組手をするようにお互いを掴み合う。怪獣映画を見ているような大迫力の光景に、俺はただ呆然とするしかない。

「智くんになにをするの！」

血相を変えた望月がヴィルゲルムに飛びかかろうとするが、その先に回り込んだ迫間と四条によって妨害される。

「オラ！　ボケッと突っ立ってんじゃねえガキ共！　影魔導師の相手は影魔導師がする！　てめえらはてめえらのやることをやってきやがれ！」

「「！」」

ウェルシーに叱咤されてハッとする。礼を言う前にウェルシーは転移で迫間たちの戦いに加わったため、俺とセレスはそのまま足を動かすことにした。

「瑠美奈殿たちは大丈夫だろうか？」

心配げにセレスが言う。

「やはり、私が戦った方がよかったのではないか？」

セレスも一応は影霊の弱点を知っている。聖剣を使えばその辺の雑魚影霊など一振りで斬滅させることができるだろう。でも――

「きっと大丈夫だ。ウェルシーとヴィルゲルムはともかく、迫間たちは望月と因縁がある。行けって言うんだから俺たちが留まる必要はないだろ」

それが死ぬ気の無謀な時間稼ぎじゃなければ、な。

「そこまでだ異界監査官！　これ以上先へは通さん！」

数人の兵隊たちが俺たちの進路を塞ぐ。カーインまではまだまだ遠い。

「く、次から次へと鬱陶しいな！」

「蹴散らすぞ、零児」

走る足は止めず、セレスは聖剣を、俺は棍を強く握り構えて突攻する。

「迎え撃て！　ここで仕留めろ！」

「そうはいかないアル！」

「道は開けてもらうネ！」

兵隊たちの両サイドを、赤いチャイナドレスをはためかす瓜二つの少女たちが挟撃した。狐耳と尻尾、三つ編みのポニーテールとツインテールが、振り回される銀色の刃と共に美しい演舞を披露する。

抵抗するも虚しく、不意を突かれた兵隊たちは十秒と持たずに全滅した。

「レイ・チャン、無事アルか？」
三つ編みポニテの方、姉のリャンシャオが訊ねてくる。いい加減に普通に呼んでほしい。本人たちは普通なのかもしれないが。
「ああ、助かった。まさかお前らまで俺たちに協力してくれるとはな」
「夫の道を切り開くのは妻の役目ネ」
ぽっと赤く染まった頬に両手を添えるリャンシャオ。ハハハ、こいつなに言ってるんだろうね？　そして今一瞬お隣のセレスさんから殺気じみた気配を感じたのは気のせいに違いない。
「レイ・チャン、あいつなんか始めたヨ」
三つ編みツインテの方、妹のチェンフェンが観客席の一番上に立つカーインを指差した。見上げると、カーインは座席に寝かせたリーゼに魔剣を添えているようだった。
リーゼの魔力を食らっているのか？
「チッ、急がねえと！」
「待つネ」
駆け出そうとした俺の腕をリャンシャオが掴んだ。
「なにすんだよ！」
「走るより、アレで飛んでった方が早いアル」
ポン！　とマヌケな音を立てて白煙から現れたのは、鳥を模った巨大なハリボテ――神火飛鴉だった。
「アレに乗れと？」
「そうアル」
大真面目な顔で頷かれた。
「大丈夫。爆撃用の火薬は抜いてあるヨ。移動用に作った物だから二人くらい楽勝で乗せられるネ」
狐妖術とかっていう怪しい術で神火飛鴉を取り出したチェンフェンが自信ありげに語る。
「零児、迷っている時間も惜しい。行くぞ」
「あーもう、どうにでもなれ！」

セレスが先行したため俺に拒否権はなくなった。もはやヤケクソで神火飛鴉の背中に跨り、先に乗っていたセレスの胴に手を回す。
「ひゃっ！？　れ、零児、変なところ触ったら振り落すからな！」
「りょ、了解です……」
赤面するセレスがハンドル代わりの手綱を握ったところで、着火。そして、発射。
下部に取りつけられた火箭の勢いで一気に空へと舞い上がる。激しく揺れたが、セレスは乗馬をするような動作で上手く軌道を修正している。もし俺が前だったら二秒で墜落してただろうね。
戦場を真下に、俺とセレスを乗せた神火飛鴉は空中を突き進む。といってもそんなに高空というわけじゃない。対空砲火を受ければひとたまりもない位置だ。
それでも、息がしづらくなるほどの速度がある。この調子なら敵に妨害する時間を与えることなくカーインの下へ辿り着けるはずだ。
そう俺は思っていたが、やはり現実はうまくいかない。
回転する巨大な螺旋槍が絶妙なタイミングで神火飛鴉の片翼を抉り取った。
「うわっ！？」
「零児、しっかり掴まっていろ！」
バランスを崩して落下する神火飛鴉をセレスが巧みに操って滑空させる。そして高度がある程度下がった時、俺たちは躊躇わず神火飛鴉から飛び降りた。
墜落し破裂する神火飛鴉を確認してから、俺は巨槍を握るそれを睨みつける。
「ショートカットなどというくだらない真似は阻止さてもらったよ、白峰零児、セレスティナ」
「スヴェン！」
オリジナル・デュラハンの頭部で二丁拳銃を構える燕尾スーツの青年を見ていると、なんとも言えない怒りが込み上げてくる。無性にあのメガネを砕き割りたい。

「貴様、まさか本当に生きていたとはな」
低く言葉を投げかけるセレスに、スヴェンは感慨に耽るように眼鏡を持ち上げた。
「ふむ、僕もあの時は死を覚悟したよ。実際、第二柱（ゼクンドゥム）に助けられなければ塵芥一つ残らなかったと思う」
ゼクンドゥム……そうか、あいつならあの局面からでもスヴェンを異空間に退避させられる。誘波の探知を掻い潜ったのもそういうことだろう。
「とにかく、君たちをカーインの下へは行かせない。ここで大人しく柱が崩れる光景を見ていると――」
スヴェンの言葉を遮って、ガガン！　と奇妙な衝突音がした。かと思えば、五メートル近い巨体を持つデュラハンがぐらつき――

そして、倒れた。

……違う。倒れたは倒れたでも、倒されたんだ。
誰に？　決まっている。この場にいてこんなことできるやつなんて一人しか思い浮かばない。
「俺的に、全然物足りねェ話なんだが……おいメガネ、てめェならこの渇きを少しくれェ潤せるか？」
半分焼け焦げた作業着の、マロンクリーム色の髪をした男が狂戦的な笑みを浮かべてトンファーを回転させていた。
「グレアム・ザトペック……」
デュラハンの頭部から投げ出されて尻餅をついていたスヴェンが苦い表情をする。
「僕の周りは五機の量産型デュラハンで固めていたはずだ。なぜ君がここにいる？」
「ん？　あァ、アレのことか？」
グレアムはつまらなそうに立てた親指で背後を示した。そこでは、かろうじてロボットのパーツだとわかる部品が山積されていた。黒

煙を上げ、火花を散らしているそれらはもはやガラクタでしかない。
「あんなオモチャじゃあ準備運動にしかなんねェなァ。来いよ、メガネ。零児と嬢ちゃんに代わって俺様が遊んでやる」
「……まったく、相変わらず冗談みたいな強さだ」
飛び起き様に二丁拳銃を連射するスヴェン。その弾丸をテンション高く笑いながらトンファーで捌くグレアム。オリジナル・デュラハンが起き上がって二本の巨槍を刺突するが、グレアムは飛んで跳ねて時には受け流して難なく凌いでいる。
「行こう、セレス。スヴェンはあいつに任せとけば問題ない」
「そのようだな」
どうやら壁はスヴェンで最後だったようで、カーインまでの道のりに邪魔者はいない。残りの対戦フィールドを一気に駆け抜け、非常用の梯子を登って誰もいない観客席へと立つ。
その時だった。
観客席最上部の壁が、鈍く短い音を立てて消失した。
「え？」
崩壊したのではなく、消失。まるで最初から大穴が穿たれたデザインだったかのように、瓦礫一つ零れていない。
壁に開いた大穴の前に屹立する漆黒鎧の男がゆっくりと振り返り、階段下の俺たちに冷え切った視線を落とす。
右手には紅い反射光を放つ銀色の片刃大剣――魔剣ディフェクトス。
左手にはボロ雑巾のように襟首を掴まれたリーゼ。意識はまだ戻ってない。
「辿り着けたか、セレスティナ」
カーインの声には感情が籠っていないが、素直な称賛が含まれていた。
「カーイン師匠、お答えください。正義に熱かったあなたが、どうしてこのようなことをなさっているのですか！」
「言葉は不要だ、セレスティナ。俺が成そうとすることを悪だと断

じるならば、その聖剣を持って裁くといい。俺もこの魔剣にて裁きに抗おう」

「ですが、師匠！」

「くどいぞ。聞きたければ俺を下せ。無論、二人がかりが卑怯などとは言わぬ。今は騎士の決闘ではなく戦争だ。殺すつもりで来い」

カーインの刺突に構えられた魔剣ディフェクトスが、得も知れぬ紅のオーラを纏う。

「俺とお前、どちらの正義が正しく、どちらの意思がより強固なものか。この場にて証明しよう」

四章　聖剣と魔剣（９）（後書き）

人気投票、リーゼと望月に入れてくださった方、ありがとうございます！

ここにきて望月先輩の株価が急激に上昇しました。敵キャラ書くのが苦手な私にとっては嬉しい限りです＾＾

できれば次回で四章を終わらせたいです。今回は五章構成なのです。

そして次回で第一回目の人気投票の最終結果発表をしたいと思います。

次回の更新は１１月５日（土）です。

四章　聖剣と魔剣（１０）

階段を駆け上るセレスに俺も続く。カーインは最上部に陣取ったまま不動の姿勢を保っている。

俺の優先すべきことはわかっている。リーゼの救出だ。カーインにその気はなさそうだが、あの状態では人質も同然。セレスが遠慮なく戦うためにも、早急にリーゼをカーインから遠ざける必要がある。

「闇雲に猛進したところで俺には届かんぞ！」

闘気！

刺突の構えからの掬い上げる一閃。紅いオーラを纏う魔剣から闘気の波動が放出される。階段を抉り砕きながら迫る不可視のそれを、俺たちは左右に飛んで回避する。

「師匠！」

観客席の椅子を蹴り、飛び上がったセレスが上段から聖剣を打ち込む。カーインは魔剣を横にしてその一撃を受け止めた。

聖剣の清らかな白い光と魔剣の不気味な紅い光が交差する。

互いに刃を競り合わせ、弾き、打ち込み、そして受け流す。

鳴り止まない剣戟音。周囲の空気すら薙ぎ払うかのような苛烈な剣舞。俺なんかが介入できる隙なんてない。

斬っては避けられ、避けては斬り込まれる。

互角……そう思うかもしれん。だが、傍観する俺は気づいた。カーインは片手しか使っていない上に、その場から微動だにしていないんだ。

左手はリーゼを掴んでいるため使えないとしても、セレスを舐めているとしか思えない。舐めてかかれるほどの余裕があるとも取れる。

「……やはり、迷いがあるな」

ギィン！　振り上げられた魔剣が絡め取るようにセレスの手から

聖剣を弾き飛ばした。
「くっ、しまった！」
「迷いは刃を鈍らせるとはよく言ったものだ」
斬！　振り下ろされた魔剣を諸に受けたセレスは、悲鳴を上げて階段を転げ落ちる。
「セレス！」
「げほっ！　来るな零児！　私のことはいい！」
駆け寄ろうとした俺をセレスは声を荒げて制した。血は出ていない。その代り、胸当てだったものの破片がそこら辺に飛散している。防具を犠牲に直撃は免れたのか。
「お前は、？魔帝？を救うことだけを考えろ！」
「……ああ、わかった」
嘘せ返るセレスを背に俺はカーインに突撃する。魔剣の能力はわからないし、それを抜きにしても勝てる相手とは決して言えない。けれど、動かなければリーゼを救うことなんてできやしないだろ。
「リーゼを返してもらうぞ！　カーイン！」
「それはできぬ。これは我らが計画を成すための核となり得る存在なのでな」
俺は棍で顔面刺突を狙う。だがカーインは棍を刃で薙ぎ、そのまま魔剣を捻じ込むように突いてくる。俺は身を捻り紙一重でそれをかわすも、銀刃に込められた闘気で脇腹を浅く抉られた。
痛みを気合いで堪え、棍を上段から叩き下ろす。
「計画ってのは、『次元の柱』を壊すことか？」
「その先だ」
魔剣と棍が衝突する。力の拮抗は数瞬。なけなしの魔力で生成した棍はあっさりと切断されてしまった。
〈魔武具生成〉――日本刀。
怯まず、斬られた棍が消失するよりも早く次の武器を生成する。日本刀が完全にその形を成す前に右手を振るう。
棍を破壊した隙を突く攻撃だったが、カーインは手首を捻るだけ

で巧妙に魔剣を割り込ませてきた。
激しい金属音が炸裂する。日本刀を持つ手が痺れるほど強く打ち込んだのに、カーインは数ミリたりともそこを動かない。
「どけ零児！」
声に反射的に体が動く。横に飛んだ俺と入れ替わり、回収してきた聖剣を一層輝かせたセレスが大上段から斬撃を叩き込む。
「迷える剣で俺を斬れると思うな、セレスティナ」
カーインはセレスの剣を防ごうとするどころか、なぜか魔剣を下げた。
そして――
「喝ぁッ！！」
くわっと口を開き、カーインが咆えた。
「ぐっ」
「あうっ」
爆発する闘気が振動波となって俺とセレスを吹き飛ばす。観客席の椅子が捻じ切られるように外れて転がり、大きな罅割れが石の床を端まで走り抜け一部を崩壊させた。
俺は中段ほどの観客席に掴まって風圧に堪える。衝撃を受けた時とは違う痛みが浸透し、体が痺れている。なんてやつだ。気合いだけでこれほどのことができるのかよ。
「今のお前など剣を使うまでもない」
幻滅の視線でカーインは俺とほぼ同じ位置まで転げ落ちたセレスを射る。俺に至っては眼中にすらないらしいな。
「師匠は、師匠は迷わないのですか！　浮浪児だった私は、あなたに手を差し伸べられて救われました。私に剣を教え、騎士の道を示してくれたのもあなたです。私はあなたに憧れていました。あなたが亡くなったと聞いた後も、あなたのような騎士になるべく鍛錬してきました。そんな人生の目標にして大恩人を、どうして斬らなく

てはならないのですか！」
　血反吐を吐きそうな勢いでセレスは叫んだ。目尻に涙を浮かべる彼女は、聖剣の騎士としてではなく、セレスティナ・フェンサリル個人としての感情を吐き出している。
　セレスが滅多に見せることのない、心の底からの本音だ。
「……」
　カーインは無言。攻撃するわけでもなく、無視するわけでもなく、ただ瞑目して弟子の訴えに耳を傾けている。
「私の剣に迷いがあるというのなら、なぜそれを指摘するのですか！　構わず斬り伏せることもできるのに、なぜ私を試すような戦い方をするのですか！　師匠も迷っているからではないのですか！」
　やがて、カーインは静かに口を開いた。
「……迷いなど、あるものか」
　その呟きには、激しい憎悪が込められているように聞こえた。
「俺は国を、世界を捨てた。だが、騎士としての誇りまでも切り捨てたわけではない。一人の騎士として、弟子だったお前に忠告しているに過ぎないと知れ。お前の迷いが俺の事情を知らぬことに起因するならば、仕方あるまい。少しだけ話をしてやろう」
　カーインは無表情のまま、言う。
「俺には妻と娘がいた。異世界人の妻と、その血を引く娘だ」
　既婚者だったのか。セレスが僅かに驚いているところを見るに、どうやら弟子の彼女も知らなかったみたいだな。
「四年前に起こった旅客飛空艇の墜落事故は知っているな」
「はい。奇跡的にほとんどの乗客と乗務員が無傷で助かった事故だと聞いています」
「その飛空艇には俺も乗っていた。妻と娘もだ」
「！？」
　セレスは瞠目した。わかってはいたが、知らない世界の話だと俺は全くついていけないな。セレスの世界には飛空艇なんてものまであるのか。今のところそんなどうでもいい感想しか出てこない。

「まさか」
だが、世界の事情を知るセレスはそれだけでなにかを悟ったようだ。
「そうだ。人々を救ったのは奇跡ではなく俺の聖剣――ディフェンシオンだった。俺の意思とは関係なく、聖剣の自律的な守護の力が人々を窮地から生還させたのだ。ただし、純粋なラ・フェルデ人のみだったがな」
「!?」
驚愕したのは俺の方だ。セレスは感づいていたのか深刻な顔をして固唾を呑んでいる。
聖剣が救ったのは純粋なラ・フェルデ人のみ。つまり異世界人だというカーインの妻とハーフの娘は……ということになる。
「聖剣は『次元の柱』より生まれる『実(みのり)』から鍛えられる。その役目はこの世界における大精霊――あの法界院誘波と同じく世界と柱の守護。十二本の聖剣は存在するだけで連結した結界を成して柱を守り、持ち手を選ぶことで世界を守る。聖剣十二将となって日の浅いお前はまだ聞かされてはいないようだが、これが真実だ」
セレスはなにも言葉を返さない。黙って聞き続けることが義務だとでも言うように、翠色の瞳にカーインを映して次の言葉を待っている。
「聖剣が勝手に発動するということは、世界の意思が働くこと。わかるな？　俺の妻と娘は世界に見捨てられたのだ！」
ダン！
カーインが魔剣をその場で薙いだ瞬間、俺たちの寸前までの観客席が床ごと消失した。まるで砂場の砂をスコップで掬い取ったかのように、消え去った部分はどこにも見当たらない。
ゾッとした。
なんだ今のは？　これが魔剣の力か？
「俺は絶望し、世界を恨み、そして堕ちた。救う力だった聖剣は奪う力の魔剣へと変わり、なにも救うことのない殺戮の道具と化した」

見せつけるように、カーインは魔剣を前方に翳す。
「対象範囲内のあらゆる世界の構成物を食らい尽くす、それがこの魔剣の力だ。無論、そこには『次元の柱』も含まれる」
「なっ……」
とんでもなく物騒な能力に俺は思わず声を漏らした。もし斬り合っている時に力を使われていたら……そう考えるだけで戦慄する。
魔剣ディフェクトスに纏う紅いオーラが、より不気味に見えた気がした。
「それで？魔剣士？となった師匠は、ラ・フェルデとは関係のないこの世界までも壊そうとしているのですか？」
セレスの静かで重い口調の問いに、カーインは無言を返した。それを肯定と受け取ったのか、セレスは聖剣の輝きを増加させる。
「それが師匠の正義だと仰るなら、見損ないました。あなたは見境のない復讐者です。聖剣がなんなのか？　魔剣がなんなのか？　そんなことはひとまず横に置いておきます。今はただ、あなたを討つためだけにこの剣を振るう！」
「フン、覚悟はできたようだな。ならば俺もこれ以上語る言葉はない。来い！　俺は壊す者でお前は守る者。決着はどちらかが倒れるまでだ！」
カーインは魔剣を刺突に、セレスは聖剣を中段に構える。とても割って入れない空気を作り出す二人の世界から、俺は完全に蚊帳の外だった。
その時――
「水を差すようで申し訳ありませんが、決闘ならマスターを巻き込まない場所でやれ安定です」
機械的な声と共に、凄まじいプラズマが真横からカーインを襲った。
「！」

即座に反応したカーインは魔剣を一閃し、迫る電撃の奔流を断ち斬った。だがその瞬間には既に、ゴスロリのメイド服をはためかすそいつがカーインの眼前まで疾走していた。

「レランジェの不在時にマスターを攫うとは処刑安定ですね」

ゴスロリメイド――レランジェが刃物の刺突を思わせる手刀をカーインの喉元に放つ。カーインは首を傾げて間一髪かわすも、皮膚を僅かに掠めたらしく血が滴る。

「今です！」

腕で薙ぎ払われながらレランジェが叫んだ。だがそれは俺たちに対してではない。

カーインが魔剣の力で壁に穿った大穴。そこから、二本のピンク色の触手が伸びてきた。

吸いつくように床に張りついた触手が収縮し、一本釣りされるみたいに引っ張り上げられた本体が姿を現す。

「おねえさまを放せユゥ！」

マルファだ。幼い少女の姿をしている異世界のスライムは、粘体と化した両腕を床について宙に踊っており、ツインテールを幾本もの槍に変えてカーインへと撃ち放つ。

「……小賢しい」

微かな苛立ちを口調に表したカーインが魔剣を薙ぐ。スライムの槍は一瞬で塵一つ残さず消え去った。打撃・斬撃・電撃・衝撃を無効化するマルファでも、流石に消失には抵抗できなかったか。

ん？　待てよ。なぜやつはレランジェやマルファごと魔剣で消失さなかったんだ？　俺たちに力を見せた時よりも狭い範囲に二人はいた。できないことはないはずだ。

そもそも、やつはあの魔剣で『次元の柱』を壊すつもりだろ。それほど大規模に力を振るえるなら、最初に邪魔な俺たち監査官を消し去った方が合理的だ。

使いたくても使えなかった？

まさか生物は消せないってことか？　いや、マルファの槍はマル

ファ自身の体を変化させている。それはない。
となると、考えられることは柱を壊すための力の温存。
消失の力は無限には使えない。俺たちとの戦闘で使う回数と範囲をかなり限定しないとあの柱を壊すことができなくなるんだ。
「セレス！　一気に突っ込むぞ！」
「ああ！」
確信した俺は日本刀を握り直して跳躍した。魔剣に抉り取られた観客席の床を俺は右から、セレスは左から回り込んでカーインを挟み討つ。
体勢を立て直したレランジェとマルファも挟撃に加わる。
気をつけるべきは、全方位に放たれる気合いの振動波。ただの衝撃や風圧とは違い、あの技を受けるとしばらく体が麻痺してしまう。
「先も言ったが、俺は戦争において多対一を卑怯などとは言わん。数で劣るならば相応の戦い方をするまでだ」
カーインの全身に空間が歪んで見えるほどの闘気が宿る。やつは剣尖を床に向けるように魔剣を持ち直すと、

「破ぁッ！！」

裂帛の叫びを発して魔剣を床に突き刺した。
刹那、カーインを中心に床が爆発し、衝撃と瓦礫の弾丸が俺たちを薙ぎ飛ばした。俺、セレス、レランジェは対戦フィールド側に吹っ飛ばされ、衝撃耐性のあるマルファも大穴の向こうに見える森へと落ちていく。
畜生っ！　あと一歩ってところだったのに！
俺はあいつに近づくことさえできないのか？　捕まっている女の子一人助けることもできないのか？
嫌でも気づかされる。俺は、弱い。
観客席最下部に弾き落とされた俺は、石床に背中を強かに打ちつけた。

痛い。だが、そんな痛みなどどうでもよくなるほどの無力感が俺を支配していた。
意識を失わなかったのは幸いか。周りを見ると、セレスとレランジェもそこで呻き声を上げていた。
カーインは観客席最上から俺たちを見下している。せめてリーゼが目を覚ませば……そう願うが、これだけ騒いでも目覚めないことを考えると、スヴェンに薬でも盛られているのかもしれない。
戦争の様子は依然として劣勢だ。少し盛り返したと思ったが、やはり数の差は大きい。あのグレアムですら、スヴェンを含めた何人何体何機もの敵兵に取り囲まれて息を切らしていた。
戦局は終盤を迎えている。俺たちの、負けとして。
俺にもっと力があれば、状況は変わっていただろうか？
強くなりたい。今さらそう願うが、もう遅い。俺たちは負けたんだ。
カーインもそれを見越したのか、俺たちを見下げることをやめて『次元の柱』に向き直った。
異変が起こったのは、まさにその瞬間だった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

二度目の巨大な空間振動が大闘技場を揺るがした。
「なんで、また歪震が……？」
カーインは恐らくなにもしていない。揺れる大地にバランスを崩しながら周囲を見回すと、スヴェンも望月も困惑した顔をして戦闘を中断していた。
これは『王国』が仕組んだ歪震じゃないのか？
だとすれば、なぜ？
疑問に思ったその時、ピタリと揺れが収まる。
直後、対戦フィールドの中央の空間からなにかが勢いよく突き出

した。

「なんだ？」

遠くてよく見えないが、それはまるで星空のような不可思議な色をした……剣？

「――ッ！？」

アレが剣だと認識した途端、俺は驚愕した。……いや俺だけじゃない。この場にいる全ての人がそれを見て絶句している。

空間が、星空色の剣を中心に、あたかも門を開くような動作で割れたからだ。

文字通りの、『次元の門』。

宇宙空間にも似た世界が広がるその奥から――コッ、コッ、コッ。静寂な廊下を歩くような靴音を立てて、一人の男が歩み出てきた。長く美しいブロンドの髪に、法衣のような豪奢な衣装をマントのように羽織っている。ただの人間じゃない。その姿を見るだけで、思わず萎縮してしまいそうな絶対的な存在感を男は放っていた。

「あ……あ……」

セレスが言葉を失い、翠眼をこれ以上ないほど見開いている。どうしたって言うんだ？　あいつはなんなんだ？

『王国』の新手。そう考えるのが妥当だろうが、なぜか違うと感じている自分もいる。

辺りをざっと見回した男が、口を開く。

「ふむ、ラハイアンの気配を追ってこの場所へ出てみたが、どうも間が悪かったようだ」

溜息を一つ零すと、男は余裕のある表情でどこか優しく、しかし威圧的に言い放つ。

「唐突に現れた私にこのようなことを言える権利はないかもしれない。それでもお前たちが私の言葉を理解できるなら、両軍とも武器

を収めてもらおうか」
男の隣に浮遊している星空色の剣が呼応するように明滅する。
「へ、陛下……」
「クロウディクス……」
セレスとカーインのそれぞれが、それぞれの感情を含ませた声で呟いた。

四章　聖剣と魔剣（１０）（後書き）

ラ・フェルデついに参戦！

長かった。ここまで長かった。
やっとこさ四章終了です。

というわけで、前回のあとがきで予告していた通り、人気投票の最終結果発表を行いたいと思います。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

１位　１３票　セレスティナ・ラハイアン・フェンサリル
２位　９票　リーゼロッテ・ヴァレファール
３位　８票　白峰零児＆望月絵理香
５位　５票　法界院誘波
６位　４票　レランジェ
７位　３票　稲葉レト
８位　２票　スヴェン・ベルティル＆鷹羽畔彰
１０位　１票　マルファ

１１位　０票　桜居謙斗＆迫間漣＆四条瑠美奈
（計５５票）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

やっぱり女騎士って人気高いんですね＾＾
昔１位を爆走していたメイドさんの勢いはどこへやら；
一番ビックリしたのは望月先輩に８票も入ったことですかね。ヤンデレという理由でｗ
１票から増えることのなかったファーストヒロインも三巻に入ってからなぜか急上昇で２位ですよ！（理由書いてもらえないことが多くて＾＾；）。

こんな結果になりましたが、投票してくださった方、誠にありがとうございました！
第二回は三巻終了時を予定しておりますｗ
次回の更新は１１月８日（火）です。

五章　神剣の継承者（1）

陛下だって？

「セレス、じゃあ、あいつがラ・フェルデを統一する国王なのか？」

「あいつなどと言うな、無礼者。そうだ。あの方こそ、私がお仕えするラ・フェルデ国王、クロウディクス・ユーヴィレード・ラ・フェルデ様だ」

鷹揚に頷くセレスは、希望に満ち溢れた表情をしているな。そんなに信頼しているのか、あの男を。

俺は再度ラ・フェルデ王を見る。随分と若い。二十歳は超えてそうだが、三十にはまだまだ達してないといった風貌だ。カーインも若く見えるけど既婚者だし、もしかするとラ・フェルデ人は老衰が地球人より遅いとか？

星空色の剣が明滅を止める。

「空間を掌握した。……なるほど、愉快なことになっている。この場にいるほとんどの者がこの世界の住人ではないな。黒い獣どもは？寄生する混沌？か？　久々に見た。――そして、見知った顔が二人」

ラ・フェルデ王――クロウディクスが落ち着きある動作で首を捻り、その赤紫色の瞳で俺たちを捉える。正確には、俺たちの中のセレス一人を。

「セレスティナ・ラハイアン・フェンサリル十二席」

「は、はい！」

セレスが弾かれたように起き上がり、直立。そして敬礼。痛みが走ったのか、僅かに表情が苦悶に歪んだ。

「それともう一人――」クロウディクスは首をもたげ、「まさかまた顔を合わせることになろうとはな、カーイン」

薄らと、王者としての余裕を感じさせる笑みを浮かべてそう言った。大声ではない。普通なら聞こえないほど距離が離れているのに、

クロウディクスの声は不思議と耳に届く。
「クロウディクス、なぜ貴様がこの場に出てくる？」
カーインは昔仕えていた主に対してとは思えない、憎しみを孕ませた口調で問う。あの男が本当にラ・フェルデ王だとすれば、カーインを次元の狭間に封じた張本人だ。当然か。
「愚問だな、カーイン。セレスを迎えに来たに決まっているだろう？」
セレスは言っていた。陛下が枕元に立ち、近いうちに迎えに来ると。それがよりによって今だ。タイミングが良いのか悪いのかわからない。どうでもいいが、ラ・フェルデでもセレスは『セレス』って呼ばれてるんだな。
「この世界の事情に干渉するつもりはない。だが、セレスと魔剣は回収させてもらう。構わんな？」
クロウディクスの確認は、俺たち全員に向けられていた。
と、クロウディクスの前に二つの影が立ち塞がった。
「なに言うておるのかわからんが、やつの知り合いなら貴様も儂らの敵いうこっちゃ。ここで潰れておけ小童！」
「……」
全身に灼熱の業火を纏ったパクダが六本腕の拳で殴りかかり、包帯マジシャン――ハイカルがＳＦ風の拳銃のトリガーを引く。
「お前たちやめろ！　そのお方に手を出すな！」
セレスが絶叫するも、パクダとハイカルは止まらない。六の炎拳と緑色のエネルギー弾が無慈悲にもクロウディクスを襲う。
だが――トン、と。
気がついた時、クロウディクスは二人の背後を歩いていた。動きを目視できなかった。突然そこに現れたような、転移にも似た移動。なのになんの予兆もなかった。
俺は何種類も転移術を見ている。誘波の転移は風が舞い、影魔導師の転移は闇が噴き上がる。ゼクンドゥムのアレは転移術とは言えないかもしれないが、それでも空間に歪みが生じていた。

それに、パクダとハイカルはどうしたんだ？　二人とも、まるで時を止められたかのように攻撃姿勢のまま微動だにしない。パクダが纏っている炎の揺らめきすら停止している。

なにが起こったのかわからない異常な光景に、俺はもちろん全員が息を止めて呆然とした。

「断りなく私を攻撃しようとは、なんとも果敢なことだ。だが、身の程は知った方がいい」

クロウディクスが流し目で硬直する二人を見る。すると――ぐらり。パクダとハイカルの硬直が解け、糸が切れたかのようにどさりと倒れ伏した。両者とも白目を剥き、口から泡を吹いている。

な、なにをしたんだあいつ？

あの二人ほどの実力者を、一瞬で同時に倒しただと？

「彼らの周囲の空間を凍結させただけだ。窒息しているが、なに、死んではいまい」

なにをしたのか説明するクロウディクスだったが、その言葉をほとんどの者が聞いていなかった。パクダとハイカルが倒されたことで、再び戦場に火がついたからだ。

オリジナル・デュラハンの首に立つスヴェンが眼鏡を持ち上げる。

「彼が何者かは知らないけど、魔剣を回収されるのは困る。排除しろ」

監査官たちの敵意は『王国』だけでなくクロウディクスにも向けられている。『王国』もスヴェンの命令でクロウディクスを殲滅対象に加えた。

三つ巴だ。観客席の最下部から状況を眺めるしかない俺には、どうすればいいのかわからない。

「やめろお前たち！　戦いをやめるんだ！」

「待て？機奏者？！　今はまだやつと事を交える時ではない！」

セレスと、カーインまでもが血相を変えて訴えている。

「干渉はしないと言ったはずだが……武器を収めぬなら仕方あるまい」

クロウディクスは隣に浮かぶ星空色の剣を握り、
「セレスティナ・ラハイアン・フェンサリル！」
大声ではっきりとセレスを呼んだ。ビクゥ！　とセレスの肩が跳ねる。
「一つ訊く。お前の敵は、どれだ？」
セレスは虚を突かれたように呆けたが、それも一瞬で、すぐに絶大な信頼を込めた表情で叫ぶ。
「統制されている方です、陛下！」
「なるほど」
それだけで全てを悟ったように、クロウディクスはただその場で一薙ぎした。
あいつが動いたのは、その一閃だけだった。
だが監査官も『王国』も、その一閃だけで静まり返ったんだ。
戦場を跋扈していたデュラハンと影霊が、一斉に切断されたからだ。

俺は見た。クロウディクスが星空色の剣を振るった時、剣身が消え、デュラハンや影霊たちの傍の空間から出現していた。同時にだ。同時に何本もの星空色の剣身が現れ、何体もいるデュラハンや影霊を豆腐でも切るようにあっさり両断しやがった。
狙ってやったのだろう。被害に遭ったのは『王国』だけだが、流石に両軍とも止まるしかない。
「馬鹿な……」
オリジナル・デュラハンを切り崩されて放り出されたスヴェンが、ありえないものを見る表情で震えていた。
「生物ではない機械人形と混沌を排除した。まだ私に歯向かうと言うなら、？人？であるお前たちも斬らねばならなくなるが……」
どうする？　そんな脅しの視線で周囲を見回すクロウディクス。
誰もが凍りつく中で、一人だけそんな脅しなどに屈さず行動したや

つがいた。
　クロウディクスの背後から吹き出すどす黒い闇。まるで殺意が具現したかのような闇を纏って、黒セーラー服の少女が飛びかかった。
「よくも……よくも智くんを！　殺してやるわ。その首刎ね落としてぐちょぐちょに掻き潰してペットのエサにしてあげる！」
　血色の瞳を爛々と煌めかせた望月絵理香が影刀を振るう。見れば智くんこと悪魔異獣も先程の一斉斬滅の対象になっていたようだ。しかしまだ生きているらしく、上半身だけとなった体で這うようにして『混沌の闇』に帰ろうとしている。
　望月の影刀がクロウディクスの首を捉える――寸前でピタリと静止した。
「ほう。驚いた。これほど完成度の高い混沌を見たのは初めてだ」
　クロウディクスは感心するように呟いた。望月は飛び上がった状態で停止ボタンでも押されたように固まっている。空間凍結。さっきパクダとハイカルに使った技だ。
　そのまま窒息して崩れ落ちる望月。入れ替わりに、マロンクリーム色のなにかが凄まじい速度でクロウディクスに接近する。
「俺的にてめェが敵か味方なんて関係ねェ！　強ェんだろ？　楽しく戦り合おうぜなァ！」
　あの馬鹿！　なにやってんだよあの馬鹿！　そいつはたぶん味方だってのにあの馬鹿！
　パシン！
　グレアムのトンファーが、片手で受け止められた。
「なかなかいい動きだ。だが、お前はセレス側ではないのか？」
「おッ！？」
　ぐりん、とグレアムの体が半回転した。
「寝ていろ」
　その勢いのまま真横に放り投げられる。ヒュンとミサイルのように空を切って飛んでいくグレアムは、自身の体で観客席の壁をぶち抜いて沈黙した。

「……な、んだと……？」

ありえん。嘘としか思えない。あの望月やグレアムが手も足も出ないのかよ。『赤子扱い』でももう少し頑張れた表現だぞ。

強過ぎる。いやもう『強い』という言葉の範疇に存在しないんじゃないかあいつ。

「退け！　『王国』！　そいつはラ・フェルデ国王、神剣の継承者――クロウディクス・ユーヴィレード・ラ・フェルデ！　この程度の戦力で敵う相手ではない！」

カーインが声を高々と張る。

「もっと戦力があれば私に敵うと？　間違っているぞ、カーイン」

クロウディクスが一歩、こちらに、カーインに向かって歩み寄ってくる。赤紫色の瞳が絶対者の威光を放ってカーインを突き刺す。

「神剣ユーヴィレードは次空を制する。そこが『空間』である以上、私に対し数は無に等しい。空間を断つ神剣に物体の強度・大きさなどは意味をなさない。？次元渡り？の能力者にとって空間を渡ることなど歩行と同義。要するに――」

クロウディクスの姿が、消えた。

「この私に、距離という概念は通用しない」

たった一歩だけ歩を進めたような調子で、クロウディクスは対戦フィールドの中央からカーインの目の前に移動した。

速い？　違う。転移？　たぶん違う。クロウディクスとカーインとの距離がゼロになった。今の移動はそんな感じだったぞ。

「おのれ！」

反射的に振るわれたカーインの剣撃を、クロウディクスはそよ風のように悠然とかわす。

「喰らえ！　ディフェクトス！」

俺たちには滅多に使わなかった魔剣の力を、カーインはなんの躊躇いもなくクロウディクスに振いやがった。

「やばい！　飛べ、セレス！　レランジェ！」
危険を察知した俺たちは観客席から飛び降りた。次の瞬間、俺たちが今までいた場所も含めた観客席の大部分が蒸発するように消えてなくなった。
クロウディクスは……いた。何事もなかったかのように泰然と元の位置に立っている。あいつの足下の床だけが消失せずに残っている。どうなってんだ？
「あらゆる次空は私の物だ。お前の魔剣は世界の構成物を喰らう力だったな。存在する位相をずらし、その力の対象から外させることも可能だということを、よもや忘れたわけではなかろう？」
存在する位相をずらす？　なんなんだあいつは？　やってることがチートなんてレベルじゃないぞ。規格外過ぎる。
カーインは冷や汗を流し、クロウディクスを睥睨する。
「あらゆる次空は貴様の物、か。相変わらず傲慢な男だ。神にでもなったつもりか？」
「なにを馬鹿な。神ではない」
クロウディクスはくだらない質問だとでも言うように笑い、

「王だ」

傲然とそう言い放った。
カーインは無言でクロウディクスを睨むと、なにを思ったのか唐突に背を向けた。
魔剣ディフェクトスの紅いオーラが何倍にも膨れ上がる。やつがまっすぐに見据えているもの、それは壁に穿たれた大穴の先にある『次元の柱』だった。
問答無用で破壊する気か！
カーインは魔剣を大きく振り被り――そして、振り切った。
対戦フィールドに落ちた俺からは見えないが、膨大な範囲の消失が進んでいることを鈍く凄まじい蒸発音から感じ取る。

「そういうことか」
得心が言ったように囁いたクロウディクスの手から、神剣ユーヴィレードがフッと消える。

途端、俺の位置からですら嫌でも目に入っていた柱状の巨大な歪みが、溶け入るように見えなくなった。

まさかカーインに消されたのか!?
焦った俺だったが、いくら待ってもなにも起こらない。アレはこの世界を支える四柱の一本だと聞いた。だとすればなにか異変があってもいいはずなのに、微弱な歪震すら発生しないのはどういうことだ?
「……やってくれたな、クロウディクス」
カーインが忌々しげに振り返った。その恨み憎しみ怒りの籠った負の視線を、クロウディクスはどこ吹く風と受け流す。神剣はいつの間にか彼の手に戻っていた。
「剥き出しになった柱は様々な意味で危険だからな。元の位置に戻したまでだが、なにか問題だったか?」
「簡単に言ってくれる。我々が三日かけて生み出した歪みだぞ?」
「当然、簡単なことだ。あらゆる次空は私の物だと教えただろう?」
「ならば他世界でも征服していればよい」
「その必要はない。既に私の物なのだ。故に私はこの世界も守ろう。壊すことは許さん」
「やはり神気取りか」
「王だと言っている」
激しい睨み合いが続く。火花どころか近づいたら溶かされそうな熱気がこちらまで押し寄せてくる。
とその時、カーインの背後から白い手が伸びた。手はカーインの腕を掴んでリーゼごと空間の歪みに引きずり込む。
「む?」

クロウディクスが眉を顰める。あいつがなにかしたってわけじゃないのか？　いや、あの白い手には見覚えがある。

俺は周囲を見回す。すると対戦フィールドの中央付近に、黒い鎧と白い布が吐き出されるように出現した。

「まったく、ボクがいない間になにが起こったっていうのさ？　せっかく法界院誘波をボクの世界（ゆめ）に閉じ込めてきたっていうのに、あの金髪は誰？」

白い布はゼクンドゥムだ。誘波と死闘を繰り広げたのだろう、白布は雑巾みたいに汚れてところどころ千切れている。

カーインは立ち上がると、キッとクロウディクスを睨め上げてゼクンドゥムに告げる。

「任務は失敗だ、ゼクンドゥム。やつの出現は予期していなかった。直ちに兵を撤退させろ」

五章　神剣の継承者（1）（後書き）

次回の更新は11月12日（土）です。

五章　神剣の継承者（2）

カーインの撤退宣言に、ゼクンドゥムは嘲笑した。
「なんだって？　冗談じゃない。大精霊は封じたんだ。あとはこっちの兵力で楽に押し切れるんじゃないの？」
「やつの出現は天災すら超える不運だ。周りを見ろ」
「周りって……なッ！？」
ゼクンドゥムは気づいたようだ。『王国』側は望月を除いた執行騎士と、魔装騎兵団が百名程度しか立っていないことに。出現していた『次元の柱』が消えてしまっていることに。
「……わかったよ。〈夢回廊〉を開く」
冷静に状況を呑み込んだのか、ゼクンドゥムの顔が急に真面目になった。
「動ける者は負傷者を運べ！　急げ！」
カーインの号令に従い、魔装騎兵団は迅速に撤退行動を開始する。意外にも味方を助け担ぎながら、兵隊たちは空間に穿たれた白い穴へと駆け込んでいく。
逃げられる！？
ふざけんな！　リーゼはまだカーインに捕まったままだぞ！
「逃がすか！　リーゼを返せ！」
俺はもつれそうになる足を懸命に動かして駆けた。俺は無力だ。グレアムや誘波、ましてやクロウディクスのように強くなんてない。それでも、動かずにはいられない。みすみすリーゼをあいつらに渡すわけにはいかない。もし自分の無力を言い訳になにもしなかったら、俺は間違いなく一生後悔する。
趨勢は変わった。俺たちはまだ負けてないんだ。
だから俺は走る。走って、奔って、疾って、納得いく結果を掴み取ってやる。
力の差は歴然だ。そんなことは痛いほど身に染みている。だが守

る。守ってみせる。そう決めた。俺が決めた！
「カーイン師匠！」
セレスも俺の後に続く。レランジェはどうやら先程の消失に足を巻き込まれたらしく、立てないでいた。悔しそうに舌打ちをし、匍匐前進で這ってでも主の下へ参じようとしている。
安心しろ。お前のマスターは俺が絶対に助けてやるから。
と――
「おいコラ！　てめェら的にぼさっと突っ立ってんじゃねェよ！」
頭から血を流したグレアムが瓦礫を押し退けて顔を出した。大丈夫なのか？　まあ、あのくらいじゃあいつはくたばらないか。
「てめェら的に零児と嬢ちゃんに全部任せる気か？　ふざけんじゃあねェぞあァ！　一匹でも多くふん捕まえろや！」
ハンターのような獰猛な笑みに、周りの監査官もハッとした。雄叫びを上げ、撤退する『王国』を追撃し始める。
背を向ける相手に攻撃する趣味はないが、そいつは時と場合によるってもんだ。
「カルトゥム、あんたもさっさと入りなよ」
「将が先陣切って敗走などできぬ。やつの狙いは俺とこの魔剣だ。俺が先に逃げれば必ず追ってくる。そうなれば『王国』とて無事では済まん。だからこそ、俺は最後までこの場に踏み止まる必要がある。それと――」
カーインが鋭利な視線をセレスに向ける。
「俺にはまだ、果たさねばならぬことがあるようだ」
意思を固めたカーインを見て、ゼクンドゥムはくだらなそうに白髪を掻いた。
「めんどうくさいなぁ。カルトゥムも監査官たちもめんどくさいよ。こうなったらボクの〈白昼夢〉で――」
――ザシュッ！
紙面を刃物で切り裂くような音がゼクンドゥムの言葉を遮った。

ザシュッ！

ザシュッ！　ザシュッ！

ザシュッ！　ザシュッ！　ザシュッ！

ザシュッ！　ザシュッ！　ザシュッ！　ザシュッ！

連続的に聞こえるその音は――空間の裂ける音だった。

「あらあら、ゼクンドゥムちゃん、この私をいつまでもあんな場所に閉じ込めておけると思っていたのですかぁ？」

滅多切りにされた上空の空間から現れた天女は、実にニコニコした笑顔を戦場に振り撒いていた。

「誘波！　無事だったのか！」

「あはっ♪　レイちゃんが心配してくれました。これは退場させられるのも満更でもないですね」

なにやら気持ち悪くキャッキャしているのはいつもの誘波だ。俺は走りながらもちょっと安心する。だけどあいつの十二単も相当に汚れてボロボロじゃないか。あんな姿は初めて見た。一体ゼクンドゥムとどんな死闘を繰り広げたんだよ？

誘波の出現にゼクンドゥムは苦虫を噛み潰したような顔になる。よし、これでやつの〈白昼夢〉は封じられたな。危なかった。

おかげで心置きなくカーインに立ち向かえる。やつは先に部下を逃がすためか、それともセレスとの決着をつけるためか、〈夢回廊〉に背を向けて泰然と俺たちを待ち構えている。

両方だな、と俺は思った。やつの目が言っている、「来い、セレスティナ」と。

俺は三歩後ろを駆けるセレスに訊ねる。

「セレス、勝算はあるか？」

「ない。だが、やるしかない」

セレスは即答した。絶対に曲がらない強い意志を翠眼に宿し、師匠であるカーインをキッと捉えている。

すると、俺たちの進路を塞ぐように金髪と王衣が靡いた。

ラ・フェルデ王――クロウディクス。やはり最初からそこに存在していたかのような挙動で現れやがる。でもなんのつもりだ？　俺たちに背を向けてカーインを見据えているから、邪魔をしようってわけじゃないだろうけど……。

「陛下！　申し訳ありません、お手をお出しにならないでいただけますか！　私はこの手で師匠、いえ、カーイン・ディフェクトス・イベラトールと決着をつけたいのです！」

「お前ではまだやつには勝てんぞ？　それに事はお前たち個人の問題だけではない」

こちらを向かぬまま、クロウディクスは冷然と事実を述べた。

「ですが！」

「わかっている。お前の意思は固い。だから私が直接手を下すことはやめよう。だが、お前を失うわけにはいかん。助力くらいはさせろ」

クロウディクスは星空色の剣――神剣ユーヴィレードを天高く掲げる。

「助力って、なにをするつもりだ？」

俺は訊かずにはいられなかった。クロウディクスはそこで初めて首を動かし、赤紫色の瞳で俺を見る。

ビクリ。やつに見られただけでなぜか心臓が跳ねた。圧倒的な威圧感が心臓どころか俺の全身を鷲掴みにし、いつでも楽に握り潰されてしまう。そんな恐怖に近い感覚に襲われ立ち止まりそうになる。

でも、止まるわけにはいかない。

「なるほど、度胸だけは大したものだ」威圧を緩めるようにクロウディクスは微笑んだ。「お前がこの世界においてセレスに最も近しい存在というわけだな。どうだ？　今度酒でも汲み交わしながら話でもしないか？」

「そ、そんなことはどうだっていい！　なにをするのかって訊いてるんだ！」

せっかくの国王陛下からの申し出だがお断りだ。だって俺未成年だし。

「つれないな。だがこの状況では仕方のないことか」クロウディクスは肩を竦め、「なに、簡単なことだ。私の神剣を介し、聖剣ラハイアンを一時的に柱の庇護下に置く。ラ・フェルデにある第十二の柱とだ」

全然わからん。そんなことしてなんの意味があるんだ？

「柱の庇護下に……そうか！　わかりました、陛下！」

「セレス、どういうことだ？」

「誘波殿と同じだ、零児」

誘波と同じ？　今笑顔でゼクンドゥムと牽制し合いながら「あら？　あの金髪ちゃんはどなたですか？」と恐れ多いことをほざいているあいつは、柱守の大精霊とか言ったっけ。そしてラ・フェルデの聖剣の役割は大精霊と同じだとカーインは言った。

誘波はこの場所だと力が増す。もし聖剣もそれを生み出した柱の傍だと強化されるのだとしたら……クロウディクスは文字通り次元を越えて同じ環境を作り出すってことだ。

「理解は済んだようだな。ならばお前たちはただまっすぐに走り続けろ」

言われなくても止まる気はない。俺とセレスはクロウディクスの横を素通りしてカーインを目指す。

そのカーインが唸る。

「クロウディクス。貴様がなにをするか知らぬが、俺が黙って見過ごすと思わないことだ」

紅いオーラの消え失せた魔剣をカーインは大振りに掬い薙ぐ。込められた凄まじい闘気が波動となって押し寄せる。

地面を深く削り取りながら俺たちに迫るそれは――でかい！　これまで見た中で最大の範囲だ。今すぐ横に飛ばないととてもじゃな

いがかわせないぞ。
「待て零児！　まっすぐ走るんだ」
「は？　アレに突っ込めって言うのかよ！」
ダメだ！　今の一言で完全に出遅れた。もう飛んでも間に合わない！
「――え？」
死んだと思った。もしくは瀕死になっているはずだった。
だが気づいた時、闘気の波動はなく、カーインが俺の後ろに立っていた。
回り込まれた？　そんなはずはない。視界に映る光景もつい今まで走っていた場所とは若干違う。となると、俺がやつの後ろに移動したってことになる。
――そういうことかよ！
「！」
カーインが俺に気づいたのと、俺が日本刀を振るったのは同時だった。カーインの左腕の籠手を打ち、その手からリーゼを零させる。
「リーゼ！」
俺は力なく倒れつつあるリーゼを受け止めようとしたが、
「クロウディクス、小癪な真似を――破ぁッ！！」
カーインが魔剣を地面に突き立てる。爆発した闘気が突き上げるように俺をリーゼ諸とも吹き飛ばす。空中を高く弓反りに舞うこととなった俺は、同じく弧を描きながら飛んでいるリーゼに手を伸ばす。
そこで、もう一人空中に飛び上がった者がいることに俺は気がついた。
「柱を壊せなかったのなら、せめて？魔帝？だけは回収させてもらう！」
「スヴェン！」
このクソメガネ、なんてしつこいやつなんだ。
やばい。狙って飛んだスヴェンの方がリーゼに近い。

リーゼ起きろ！　起きてくれ！　頼むっ！
「……ん」
俺の想いが通じたのか、宙を舞うリーゼの瞼が痙攣した。指がピクリと動き、彼女はゆっくりと目を開く。
「？魔帝？が目覚めたか。仕方ない。だったらもう一度眠らせてぎゃぶふっ！？」
燕尾スーツの懐に手を突っ込んだスヴェンだったが、リーゼの小さな足裏で顔面を踏み抜かれて落下していった。圧し曲がってレンズの砕けた眼鏡と共に。
「リーゼ！　こっちだ、掴まれ！」
「レージ？　……レージ！」
状況を把握し切れていないのだろうが、困惑顔から一変、リーゼはなぜか嬉しそうに俺に向けて手を伸ばす。
白く小さな掌と、俺の掌が融合する。
俺の、左掌と。
「悪い、少し魔力借りるぞ」
「え？」
きょとんとするリーゼの手から、俺の左手を通って流水のように魔力が込み上がってくる。それを俺は制御し、自分の魔力に変換される前に右手へと流す。
イメージを乗せ、具現。
〈魔武具生成〉――魔帝剣ヴァレファール。
リーゼの瞳と同じ紅色をした、禍々しいデザインの波打つ両刃大剣が出現した。武具化に使用しなかった魔力が黒炎と成って剣身に纏う。
俺が唯一生成することのできる異能力武器。狙いは無論、カーインだ。
「はぁあっ！！」

裂帛の叫びと共に、一閃。とてつもない黒炎の波濤がカーインを呑み込まんと宙を奔る。

それに気づいたカーインは、魔剣に弱々しい紅いオーラを絞り出すように纏わせ、迎え撃つ。恐らくやつが使える最後の魔剣の力だ。

黒炎と消失が激突する。数瞬の拮抗。でも、力をほとんど使い切っていた魔剣よりも俺たちの方が強い！

消し切れなかった黒炎がカーインを包む。それでも威力を大幅に削り取られていたのか、黒炎が流れた後もカーインはまだ立っていた。

これでいい。やつを仕留めるのは俺の役じゃない。

「行け、セレス」

俺とリーゼが地面に叩きつけられた時、カーイン前方の土煙から白光が爆発した。

土煙を払い除け、聖剣を構えたセレスが飛び出してくる。

「共鳴しろ、聖剣ラハイアン」

クロウディクスが掲げる星空色の剣が明滅する。すると、聖剣が発する白光が何倍にも強烈になった。

「カーイン！」

セレスはもう『師匠』とは呼ばなかった。

「来るがいい、セレスティナ」

カーインも魔剣を闘気で覆う。両者ともに言葉はそれ以上なかった。

衝突。聖剣と魔剣が甲高い激突音を発する。

白光と闘気が重なり、混ざり、巻き上がる。

「はぁあああああああああああああああああッ！！」

セレスの叫びが大気を振るわせる。白く激しい輝きが上空の暗雲すら払い飛ばす。

そして――バキン！

白き光の聖剣は、カーインの魔剣を斬断し、対光属性を持つ漆黒

の鎧までも粉々に砕き割った。

「がっ……」

鮮血を飛び散らせて白目を剥くカーイン。セレスが勝った、そう思った。

しかしカーインが意識を失ったのはほんの一瞬だけだった。ぎょろり、とすぐに瞳の焦点を勢い余ってつんのめっていたセレスに合わす。

ドムッ！

嫌な鈍い音が鳴った。カーインの鉄拳がセレスの腹を捉えたのだ。

「――かはっ！？」

振り切られる拳。セレスは何十メートルと吹っ飛び、何度もバウンドし、何回転も転がり、それからピクリとも動かなくなる。

「セレス！？　カーイン、てめえ！！」

叫喚したところで、俺の体はもう動いてくれなかった。落下のダメージが思ったよりキツい。

リーゼもまだ薬が抜け切れていないのか、立ち上がれそうにない。上体だけ起こし、戸惑った顔でただキョロキョロしている。

「退くぞ、ゼクンドゥム」

砕けた魔剣を拾い集め、カーインは踵を返した。やつの生き残った部下たちは既に退却を完了している。望月とクソメガネもいつの間にかいなくなってやがる。誰かが拾って行ったのだろう。

残る『王国』の兵はカーインとゼクンドゥムだけだ。だが、あの二人を捕えられるほどの余力を残している監査官はいない。

「逃がしませんよ、ゼクンドゥムちゃん。あなたにはまだまだお仕置きしなきゃいけませんからねぇ」

ただ一人、天使の皮を被った悪魔の微笑みを浮かべる誘波を除いてな。

「他の者は構わんが、カーイン、この私がお前を見逃すと思うか？」

それと、クロウディクスだ。ラ・フェルデ王は数十メートルの距

離をたった一歩で縮め、カーインの傍に出現する。
焦燥の色を浮かべ、カーインとゼクンドゥムは身構えた。が、豪風は無慈悲に舞い踊り、星空色の剣は激しく明滅を繰り返している。

そこで、時が止まった。

そう、俺は思ってしまった。本当は時なんて止まってない。ただ、誘波とクロウディクスが二人ともそのままの姿勢で固まったんだ。
知っている。見たことがある。それもついさっきだ。
クロウディクスの空間凍結。それと同じ現象が今二人の動きを完封している。
どうなってんだ？　神剣が暴走でもしたのか？
「……？王様（レクス）？か。感謝する」
カーインがぽつりと呟き、落ち着きを取り戻した様子で〈夢回廊〉に向き直る。
「セレスティナ、本当に俺を止めたいのならば、さらに強くなれ」
届かぬ言葉を意識のないセレスに残し、カーインはゼクンドゥムと共に白い穴へと消えていった。

五章　神剣の継承者（２）（後書き）

シャッフルワールド！！第三巻、残すところあと四話となりました。

増えなければ（笑）

次回の更新は１１月１５日（火）です。

五章　神剣の継承者（3）

わけがわからんまま勃発したカオスな戦争は、『王国』の撤退という形で幕を下ろした。

現在は監査局の医療班が忙しなく動き回り、敵味方関係なく負傷者を担架で運んでいる。これほどの戦いがあったんだ。考えたくないが、死者も出たかもしれん。

リーゼもセレスもレランジェもグレアムも医療班に運ばれていったが、俺は断った。疲労はとんでもないけど思ったほど重症じゃないし、この場に残りたい理由があったからだ。

「よもや、この私が空間に束縛されるとはな」

「あはは。アレはビックリしましたねぇ、クロウちゃん」

「クロウちゃん？　ふむ、なかなかに愉快な呼称をする。気に入ったぞ、風の大精霊」

「わぁ、気に入られちゃいました。でしたら私のことは『イザナミちゃん』と呼んでください」

「いいだろう、イザナミちゃん」

誘波とクロウディクスは〈夢回廊〉が消え去った直後に自分で空間凍結を解除したのだが、一体どこの歯車が合致したのかこの二人は急速に親しくなっていった。ていうかクロウディクス、真顔で『イザナミちゃん』とか言うな気色悪い。

あの時、カーインの呟きは微かに聞き取れた。最後に誘波とクロウディクスを封じたのは？王様？だ。一体どこからどうやって？疑問は尽きないが、その辺を俺が考えたところで答えは見つからないだろう。

ようやく動けるようになった俺は痛む体に鞭を打ち、クロウディクスの下へと歩み寄る。絶対的な存在感と威圧感に気圧されそうになるも、俺はあいつに言いたいことがあるんだ。それが残りたい理由だ。

「ありがとう、助かった。あんたが来なけりゃ俺たちは全滅していた」

一国、いや、一世界の王に対する言葉遣いじゃないことはわかっている。でも、丁寧な言葉を使えば俺は意味もなくこの王に平伏してしまいそうな気がしたんだ。クロウディクスに変わらぬ態度で接する誘波を初めて尊敬したな。

「私は己の目的を遂行したに過ぎない。礼などいらん。頭を上げろ」

クロウディクスは俺の言葉遣いなど微塵も気にしていなかった。絶対者の余裕ってやつか。

「目的というと、やっぱりセレスは連れて帰るんだな？」

「当然なことを訊く。だが安心するといい。すぐに連れ帰るわけではない。別れの時間くらいは作ってやろう。私もこの世界を観ておきたいし、異界監査局だったか？　そのトップであるイザナミちゃんとは少し話がある」

「あいつのことは『アホナミ』と呼んでいいぞ」

ハッ！　しまった。クロウディクスがあまりにも自然に気色悪い名称を口にするもんだからつい……。

「……レイちゃん、ちょーっとよろしいですかぁ？」

殺気！

「ダッシュ！　――痛い！？　ぐ、なんてこった、体が痛くて走れない！？」

「今なんと仰られたのか、もう一度きっちりはっきりしっかり聞かせてくれませんかレイちゃん？」

「『超絶美人な誘波様』と申しましぎゃあああああああああああっ！？」

風圧のハンマーで殴り潰された。

「く、なんて元気なんだ。ボロボロなのは見た目だけかよ」

すぐに起き上がれる俺も、頑丈さが板についてきたことは自覚している。

「いえいえ、こう見えて私も疲れていますよ、レイちゃん。ゼクン

ドゥムちゃんはとんでもない相手でした」
「お前が『とんでもない』なんて言うとか、どんだけだよ」
「そうですね、これを見てください」
誘波は掌の上に小さな竜巻を起こし、そこからコンパクトなポータブルＤＶＤプレイヤーを出現させた。毎度のことながら、遠くにある物体を風で転送したのだろう。
誘波はプレイヤーを起動して既にセットされていたＤＶＤを再生させる。
画面にはどこぞにあるコスプレ喫茶の店内の様子が映っていた。
「ほう、それがこの世界の映像機器か」とクロウディクスが関心を示しているのは置いておいて、
「これ俺らが学園祭初日にやった女装喫茶じゃねえか！　寄越せ！　そのＤＶＤを叩き割ってやる！」
「焼き増ししたものですから無駄ですよぅ。オリジナルは別の場所です」
くそっ！　どうにかして根絶やしにしなければ！　これはこの世に存在してはいけない映像なんだ。
「忘れたのですか、レイちゃん？　この女装喫茶はゼクンドゥムちゃんの夢が見せた幻だったはずです」
「あっ……」
言われて俺は思い出した。ゼクンドゥムはドイーさんという架空の存在を作り出して桜居に取り入り、俺のクラスに干渉して女装喫茶を盛大に盛り上げたんだ。目的はない。ただの暇潰しだと本人は言っていた。
だが、アレが人に見せた幻だったのなら画面に映っている映像は変だ。そこには男子が女装した気持ち悪い映像ではなく、俺の記憶と一致する美少女たちが忙しなく動き回っている。機械のカメラは現実の光景を映していなければおかしい。
「ゼクンドゥムちゃんの夢は一定範囲内で全て真実になるってことです。機械すら騙せることは〈現の幻想〉に近い能力ですが、彼女

は人の記憶や認識すら変えてしまいます。夢を回避するには自分で気づいて目覚めるか、ゼクンドゥムちゃんが夢を見せる対象外に指定するしかないようですね」

そうだ、もし問答無用で夢が真実になるのなら、対抗戦の一回戦第四試合であの二人は瀕死の重傷を負ったことになる。

「そしてゼクンドゥムちゃんは夢という環境内ではほとんど無敵でした。なんでもありな能力には流石に私も苦戦しましたね」

ゼクンドゥムの世界でどんな死闘が繰り広げられていたのかは想像できない。なのに、俺は震え上がりそうになった。

「そんな化け物を配下に置くなんて、？王様？ってやつは何者なんだ？」

「私と同等かそれ以上の力を持つ者だろう」

答えたのはクロウディクスだ。

「自らの意思で次元を渡れる者は等しく空間を支配できる。何人かそのような者を見てきたが、この私を数十秒間とはいえ空間凍結で封じた者は一人としていなかった。あのカーインが現在仕えている主……フッ、興味が湧く」

口の端を吊り上げるクロウディクス。なんとなく悪人面だが、少し話をしただけでもわかる。こいつは魔王なんかじゃなく、善い意味での覇王だ。たぶん、国民にも大層慕われてるんだろうな。

「まあ、？王様？については捕縛した『王国』軍の兵隊を尋問すればわかることだと思います。たとえ一兵隊が知らなくても、今回の戦いでは大物を捕まえることができたようですし」

「大物？　なんのことだ、誘波？」

訝って訊ねると、誘波はニコニコした笑顔を横に向けた。その視線の先から歩み寄ってきたのは、ズタボロの黒いロングコートを纏った少年と少女だった。

迫間漣と四条瑠美奈。監査局所属の影魔導師の二人だ。

「えっ！？」

俺は迫間が両手で抱えているそれを見て目を剥いた。

黒セーラー服を着た、思わず目を瞠りそうになる美人――望月絵理香だった。クロウディクスの空間凍結で窒息して意識を失っている彼女は、迫間の腕の中でぐったりしている。

「なんで、望月が……？」

「『王国』に回収される前に俺たちが拾って隠してたんだ」

迫間はそう言って気絶している望月を悲しそうな目で見詰める。

「みんなそこのチート王に目を奪われてたから、動き易かったわ」

と、四条。あんな状況でよく動けたな。この二人にとって望月絵理香はなによりも優先される存在なんだとよくわかる。

迫間と四条は一言、二言ほど誘波と事務的な会話をする。そして誘波が指示を出すと、二人は望月を抱えて大闘技場を去って行った。聞こえた感じ、すぐに影魔導師連盟に引き渡すのではなく、しばらく監査局に監禁するみたいだ。

途端、俺は物凄い脱力感に襲われて地面に座り込んだ。

「監査官対抗戦ってイベント事から、よくもまあこんな大戦に発展したもんだ」

もしこれを物語として書き記したら、超展開な上にカオス過ぎて別の意味で話題になるかもな。

「対抗戦はやっぱり中止なのか？」

なんとなく訊いてみる。

「あら？　レイちゃんはまだ戦い足りないのですか？　猛者ですね」

「ほう、そのような催しを行っていたのか。ならば私が相手をしてやっても構わんが？」

「勘弁してください」

四条の表現を借りるが、このチート王を相手にするとか命がいくつあっても足りる気がしない。

「言うまでもなく、対抗戦は中止です。このような結果になって不満な監査官も多いでしょうから、賞金や賞品については落ち着いてから検討してみようと考えています」

「それがいいな」

さて全焼した俺んちのリビングの修理代はどこから捻出しようか、と考えていると、ふと別の疑問を思い出した。
「そういえば、誘波、お前に訊きたいことがある」
「なんですか？」
改まった俺の質問に、誘波は可愛らしく首を傾げる。
「柱守の大精霊って、なんだ？　お前、異世界人じゃなかったのか？」
「あらあら、そんなにレイちゃんは私のプロフィールが知りたいのですか？　きゃー、どうしましょうか♪」
「くねくねするな気持ち悪い！　なんとなく言葉通りなんだってことはわかる。だが、それとお前が監査局の局長をしてることとか、この大闘技場のこととか、『次元の柱』のこととか、整理できてないことが山ほどあるんだよ」
誘波の笑顔が僅かに真面目さを帯びた。
「その話は、また今度にしませんか？　別に隠さなければならないことではありませんが、事は異界監査局の創設から関わってきます。レイちゃん一人だけにお話しするわけにもいきません。今は皆さんも混乱が抜け切れていないでしょうし、保留にしていただけると助かります」
それもそうだが、なんか釈然としない。適当に誤魔化された感じが否めない。まあ、監査局創設にも関わるってんなら激しく長い話になりそうだ。こんな場所で聞けるわけもないか。
「安心してください。いずれ必ずお話ししますよ」
いつものふざけた調子ではない、信じてもいいと思える口調で誘波は言った。そして一泊置き、彼女は一際明るい表情になって言葉を繋ぐ。
「それよりも、です。対抗戦は残念な結末になってしまいましたが、表の学園祭はまだ終わっていませんよ。後夜祭にはとても面白いイベントを用意していますから、レイちゃんもクロウちゃんも是非参加してくださいね♪」

後夜祭だって？
「こんな状況で楽しめるわけないだろ」
「こんな状況だからこそ楽しむのですよ」
ああ言えばこう返される。なにをする気なのか知らんが、郷野についた嘘が真になっちまったな。『理事長が秘密裏に企画しているイベント』っていう嘘が。
「体が動いたらな」
それだけ呟いて立ち上がると、俺はよぼよぼとお年寄りよりも危なげな動作で大闘技場を去ることにした。
……でも、なんか忘れてる気がする。
「おねえさま！　おねえさまはどこだユゥ！？　あれ？　なんで誰もいないんだユゥ？」
控室の転移魔法陣に入った瞬間、そんな叫びが耳に入ってきた。
そういえばマルファのことはすっかり頭から抜けていた。あいつが吹っ飛ばされた森は大規模に消失したはずなんだが、よく生きてたな。
無駄に生命力の高いスライムの寂しげな叫び声を聞きながら、俺は学園へと転移した。

五章　神剣の継承者（3）（後書き）

次回の更新は１１月１９日（土）です。

五章　神剣の継承者（4）

時間の感覚なんてとっくになくなっていた。

監査官対抗戦からの『王国』との戦争で疲弊し切っていた俺は、高等部校舎の保健室で泥のように眠ってたんだ。襲撃された医療施設は明らかにベッド数が足りないだろうなと予測したところまでは覚えている。

ベッド脇の時計を見ると午後八時を回ったところだった。俺が保健室に来たのがえーと……何時だっけ？　空はまだ明るかったと思うけど。

後夜祭はもう始まってるんだろうな。誘波の企画が碌でもないものでないことなんてありえん。男装喫茶ＶＳ女装喫茶みたいにな。

行っても疲れるだけな気もするが、まあ、ちょっと顔を出すくらいならしてやらんこともない。

などと勝手に偉そうなことを考えていると――ガラッ。

誰かが扉を開けて保健室に入ってきた。

養護教諭の磯原先生かと思ったが、足音が二人分ある。そいつらは締め切っていたベッドカーテンの前に立った。シルエットも二つ。一つが小柄で、相対的にもう一つが長身に見える。

「零児、起きているか？」

声はセレスのものだった。となると小柄な方はリーゼだな。あの二人が一緒だなんて珍しいこともある。

「ああ、今起きたところだ。ちょっと待ってろ、すぐ出るから」

「早く出なさいよ」

リーゼに急かされ、俺は身を起こしてベッドから出てカーテンに手をかける。と――

「わっ！？　待て零児まだ私は心の準備が――」

なんかセレスの慌てた声が聞こえたが、もう遅かった。俺はカーテンをスライドさせ――目を点にした。

「誰？」

そこにいたのは俺の知っているリーゼとセレスじゃなかった。リーゼと思われた小柄な少女は腰に手を当てて偉そうに構えているのだが、癖の目立つ紫髪に青緑色の瞳、蜘蛛の巣柄の奇天烈な黒いワンピースを着ている。

その横で顔を赤らめもじもじしている少女は、腰まで流したストレートの銀髪に紅い瞳、服装はワイシャツとミニスカートだった。背負ってある布の巻かれた長物だけが見覚えあるぞ。

「まさか……リーゼとセレスなのか？」

俺はまだ寝ボケてるんだろうか？　二人の容姿が全然違って見える。目を擦ってもやっぱり同じだ。……いや、そういう夢なのかもしれん。夢？

「そうか、わかったぞ。ゼクンドゥムの仕業だな。撤退したと思わせておいて引き返して奇襲する算段だったんだろうが、残念だったな。今度ばかりは俺も自分で夢に気づいたぞ。さあ出てきやがれ！」

「なに言ってんの、レージ？」

紫髪のリーゼ（？）に変な物を見る目で否定された。だ、騙されんぞ。これは夢なんだ。俺の知ってるリーゼは金髪で赤い目をしてるんだ。

「私も夢であってほしいとは思う。だが、もしもこれがあの者の幻ならば、私たちは疑問すら覚えないのではないか？」

普段はポニテに結っている銀髪を下ろした赤目のセレスが残念そうに言う。恥ずかしいのか、顔を赤らめて俺と視線を合わせてくれない。

「じゃあなんだって言うんだよ、お前らのその格好は？」

「白峰君はコスプレという言葉を知らないのかい？」

ガラリと窓が開いたかと思うと、そこから白衣を着た長身の女子生徒が保健室に飛び込んできた。セミロングの髪にやたらでかい胸。

美人顔を愉快そうにニヤけた笑いで台無しにしているそいつは――
「郷野、お前どっから入ってきてるんだよ？」
「いやいや、君たちがなにやら面白そうなことになっているから見逃せないと思ってね。わざわざ入口まで回り込むのが面倒だっただけサ」
それでも女子が窓を跨ぎ越えてくるか普通？
「まあいいや。お前の品格が疑われるだけで俺にはなんの関係もないし」
「酷いことを言う。ところで最近のマイブームは『超高度実験』なんだけど」
「ドイツ空軍の悪名高い人体実験をマイブームにすんな！？」
「白峰君はいろんなことを知っているね」
ころころと愉しそうに笑う郷野。俺だってよくこいつの高度なボケにツッコミ返せると思うよ。テレビとかよく見てるからかな？
「それで、なんでリーゼとセレスがコスプレなんてしてんだよ。お前が無理やり着せたんじゃないだろうな？」
もしそうだったら……別になにもしなくていいか。よくよく見ればリーゼの紫髪はカツラで、隠れ切れなかった金髪が微妙に下から覗いている。二人の瞳の色が違うのはカラーコンタクトだろう。
なんかのアニメキャラだろうか？　そういえばどっかで見たことある姿だな。
「違うぞ零児、これは、その、誘波殿に着せられたのだ」
「こすぷれっていろんな服着れてなかなか楽しかったわ」
郷野を庇うように真実を告げるセレスの横で、リーゼはとても満足げだった。
「悪い、わけがわからん」
「白峰君、その反応はおかしいゾ。君はこのイベントの手伝いをしていたのではなかったのかい？」
「イベント？」
「【ミス・コスプレイヤーコンテスト　Ｆｒｏｍ伊海学園】。略し

てミスコス」
　なんぞそれ？　……あっ、それが誘波の言っていた後夜祭のイベントか。だとすれば話を合わせないとやばいな。俺たちはその手伝いで頻繁にクラスを抜けていたと郷野には言ってあるんだ。
「あ、ああ、そうだったな。寝ボケててすっかり忘れてた。もう終わったのか？」
「さっき終わったわ。もちろん優勝は？魔帝？で最強のこのわたしだけどね」
　この学園のロリコン率がいかに高いのかよくわかった。俺は完全に寝過ごしてたな。ちょっと残念に思うも、行ったら行ったで女装させられて出場という流れになりそうで怖い。
「その発言はやや語弊があるゾ、リーゼロッテ君。優勝は同票で君とセレスティナ君だっただろう？」
「み、美鶴殿！　あまり恥ずかしくなることを言わないでくれ！」
　かぁあああ、とセレスは元々真っ赤だった顔をさらに紅潮させた。普段と違う姿だからか、なんか妙に可愛いなぁ。
「郷野も参加したのか？」
「もちろんサ」
「お前はもうコスプレしてないんだな」
「ん？　白峰君の目は節穴かい？　私は立派にコスプレしているゾ。女医の」
「手抜き！？」
　郷野は「失礼な」とでも言いたげな顔をするが、自分の普段着をコスプレと認めたようなもんだぞ。実際にそうだけれども。
「んで、栄えあるミスコスの優勝者がなんでまた二人してこんなところにいるんだよ？」
「そんなの決まってるじゃない」
　リーゼは発展途上的な胸を張り、
「レージに、わたしと騎士崩れのどっちが本当の優勝か決めてもら

うためよ」

頭が痛くなりそうなことを口にした。

「は？　なんで俺がそんなこと」

「白峰君にも投票権があるんだゾ？　学園の生徒で票を入れてないのは君だけなのサ」

郷野が補足説明をする。さてはこの展開もこいつの入れ知恵だな。偶然にしてはタイミングよく現れたと思ったらこれだ。

リーゼが一歩前に出て上目遣いで俺を見詰め上げてくる。コスプレしているといってもその整った顔は健在なわけでなにが言いたいかと言うと、反則的にかわえぇ。

「レージ、当然この？魔帝？で最強のわたしが優勝よね？」

「どんな結果だろうと私は受け入れる。零児、正直に言ってくれ」

「う……あー……」

ど、どうしよう？　リーゼはコレだし、セレスも受け入れるとか言ってるけど赤いカラーコンタクト越しに期待の眼差しを俺に突き刺してくるし……。あえて郷野に投票するという手もあるが、それは物凄く癪だ。

「迷っているね。優柔不断だと嫌われるゾ、白峰君」

「ほっとけ」

「うん、じゃあもっとキャラに成り切ってみてはどうかな？　それでぐっと来た方に投票するといいサ」

郷野はまずリーゼの前に立って目線が合うように膝を曲げる。

「ほら、リーゼロッテ君。そのキャラはそんなにツンツンして偉そうな感じじゃないゾ。もっと落ち着いていながらも無邪気で、少し妖艶に微笑んでいるくらいが丁度いい」

難しくないかそれ？　つーかお前はなんでコスプレのキャラにそんなに詳しいんだ？

リーゼは一つ深呼吸をすると、そのまま無言でニッコリといい笑顔になる。妖艶さは微塵も滲み出ていないが、子供っぽくて可愛い

な畜生！　――っと、俺はロリコンじゃないから心中の感想はこのくらいで留めておかねば。

郷野が俺を見てニタリと笑う。なんか心の中を見透かされているみたいで怖ぇ。

「次はセレスティナ君なのだが……うん、君はリーゼロッテ君よりもキャラに成り切るのに足らないものが多い」

「わ、私に足りないもの？」

戸惑うセレスの背後に郷野は回り込みながら、

「今のセレスティナ君に足りないもの、それは自信威厳風格余裕根性演技力役者魂大人の魅力そしてなによりも――エロさが足りない」

バッ！　と。

郷野は神業的スピードでセレスが着ているワイシャツの胸元を思いっ切りはだけさせた。

なにが起こったのかわからず呆然とするセレス。第三ボタンまで外れたその胸元からは透けるような雪肌が作り出す美しい双丘と谷間がぷるんと揺れて飛び出しブフハッ！？　おかしい、なぜ、鼻血が……。

「わ、わ、わわ」

セレスは涙目だった。そんな彼女のかなり際どいラインまで丸見えになったバストに、横のリーゼお嬢様は大層不機嫌そうな顔をする。

「うぅ……あぐ……」

ついに嗚咽まで漏らすようになったセレスに郷野は表情を曇らした。あの郷野が反省を示すほどセレスの格好は目の毒なのだ。……鼻血止まらん。

「あ、その、軽くのつもりだったのだ。まさかそんなにボタンが緩かったとは……。本当に悪かったと思ってる」

素直に郷野は謝った。するとセレスは――

「う、うわぁあああああああああああああああああっ！！」

大声で悲鳴を上げ、
片腕で胸元を隠し、
もう片方の手でなぜか俺の右手首を掴み、
全力疾走で保健室から脱走した。
俺を引きずり倒して……。
「ちょ、壁とか廊下であちこち打って痛いんですけどセレスさん！？　引っ張らないで！？　せめて立たせて自分で走るからッ！？」
リーゼの「れ、レージをどこに連れて行くのよ騎士崩れ！」などという声がどんどん遠く小さくなりやがて聞こえなくなった。

どれだけ引きずり回されたのだろう。気づいた時には、俺はスカイテラスの片隅にあるベンチに放置されていた。
現在スカイテラスではその広さを惜しみなく利用してキャンプファイヤーとフォークダンスが行われている。遠くに望める街明かりを背景に、楽しげな表情の男女が手を取り合ってペアを組み、夜闇を真っ赤に彩る炎を囲ってぎこちなく踊っている。この光景こそ本当の後夜祭だと思うのは俺だけじゃないはず……。
それにしても、暢気なものだな。つい数時間前まで何度も死ぬ思いをしてたってのに、このなんでもない平穏さの中にいると戦いの余韻なんて流されてしまう。
「『王国』……か」
あいつら、結局なんだったんだ？　あれだけのことをやらかしたのに、未だに謎のベールに包まれて目的が判然としない。
柱を破壊したその先に目的があるようなことをカーインは言っていたが、まさか『混ざり合う世界（シャッフルワールド）』を引き起こして世界どころか次元の滅亡なんてものを企んでるわけじゃないよな？
想像することすらできない光景なだけに、身震いしてきた。
と――
「すまない、零児。私としたことが、はしたない姿を見せてしまっ

た」

申し訳なさそうな声に振り向く。いつもの学園の制服に着替えたセレスがそこに立っていた。カラーコンタクトも外し、炎の赤を照り返す銀髪もポニーテールに縛っている。

その手にはLサイズの紙コップが二つ。どこかの出店で入手しただろう。セレスは片方の紙コップを俺に渡すと、「隣、いいだろうか？」と恭しく訊ねてきた。無論、OKだ。

キャンプファイヤーを眺める形で、二人して一つのベンチに座る俺とセレス。

「……」

「……」

沈黙。な、なんて気まずいんだ。ちらりと隣に視線だけを向けると、セレスも気まずそうに俯いてもじもじしていた。彼女の頬が少し赤く見えるのはキャンプファイヤーのせいだけではないと思う。

仕方ない。

「俺をこんなところに引っ張ってきて、なんか話したいことがあるんじゃないのか？」

そう切り出して俺は紙コップに口をつける。中身はスタンダードなサイダーだった。

「あ、えっと……そ、そうだな、私も騎士だ。はっきり告げよう」

決然と表情を整え、セレスは凛としたエメラルドグリーンの瞳に俺を映す。

「私は今晩、この世界を発つことになった」

話の重要さに、俺はしばらく硬直した。

「今晩だって？　いくらなんでも急過ぎやしないか？　クロウディクスは別れの時間をくれるって……あっ、もう充分にくれてるのか」

俺が爆睡していたせいだ。だから急だと感じた。セレスはミスコスにも参加して最後までこの世界の思い出を作ろうとしていたのに、

俺はなんて馬鹿なんだ。
「陛下と呼べ。もしくは『様』をつけろ慮外者」
睨まれてしまった。そこには主君を呼び捨てにされた怒りよりも、俺が爆睡していたことに対する弾劾の念の方が強い……ような気がした。
セレスは炎々と燃え上がるキャンプファイヤーを見詰める。
「私はこの世界を知れて本当によかったと思っている。名残惜しく感じるが、それでもやはり、私はラ・フェルデに帰らなくてはならない」
セレスの決断した表情に寂しさの影が差すのを、俺は見逃さなかった。
「……いや、やっぱり急過ぎる。明日でもいいだろう？　なんで今晩なんだよ」
「一刻も早く帰らなければ、私の聖剣が聖剣でなくなるのだ」
「聖剣が聖剣でなくなる？　どういうことだ？」
「先程、陛下に聞かされたのだ。私がいなくなったことで、ラ・フェルデにある十二番目の『次元の柱』――つまりこの聖剣ラハイアンを生み出した柱が新しく『実』を宿そうとしているのだと。『実』が成熟してしまえば、ラハイアンは柱との縁が切れてただの剣となる。私も聖剣十二将ではなくなってしまう。ラ・フェルデに戻り、ラハイアンは健在だと柱に教えなければ私はいろいろなものを失ってしまう。そうなってしまうことが、正直恐い」
騎士としての最高の名誉を剥奪される。それがたとえ国の意思にそぐわないものであっても、波風が立たないわけがない。俺は騎士の、ましてや異世界の考え方なんてわからないが、そのくらいなら予想はできる。
でも、一つ疑問がある。
「セレスが騎士になったのはカーインを尊敬していたからだろ？　あいつはもうお前が尊敬する人物じゃなくなってるんだ。騎士とか聖剣に拘る必要はないんじゃないか？」

「確かに私はあの人を尊敬していた。いや、今もまだしている。そう簡単に幻滅などできない。しかしだ、零児、私が騎士を目指した理由はそれだけではないんだ」
「というと？」
訊くと、セレスは言葉を整理するためか数秒間置いた後に語り始めた。
「私の両親は私が幼い頃に事故で亡くなった。そして他に身内のいなかった私は、街から街へあてもなく放浪する浮浪児となったのだ。いくらラ・フェルデの治安がよくても、周囲が私を見る視線は汚物のそれだった。何度も死ぬ思いをしたし、死のうと思ったことだってある」
「……」
お、重い。リアルに想像できてしまうから反応に困る。俺は黙って聞くことにした。
「そんな私を拾い、剣を教え、騎士の道を示してくれたのがカーイン師匠だった。でもその出会いは偶然ではなく、私を見つけてそうなるように導いてくれた者がいた」
セレスを導いた者、名前を出されなくても難なく悟ることができた。
「あの陛下だな？」
「ああ、その通りだ」セレスは鷹揚に首肯し、「当時はまだ殿下であらせられたのだが、あの方は私に騎士の才を見出してくれただけでなく、浮浪児のために孤児院まで作ってくださった。それから民に呼びかけ、あっという間に浮浪児に対する認識を改めさせたのだ」
あの王ならそのくらい片手間でやりかねない。力で強制させたのではないってこともセレスの様子から読み取れる。
「なるほどな。つまり、セレスが尊敬してるのはカーインだけじゃないってことか」
「うむ。私がラ・フェルデという世界を守りたいと思えるほど好きなれたのは陛下や師匠のおかげだ。いくら恩を返しても返し切れな

い。だからこそ、私は聖剣十二将で在りたいのだ」
ここまで語るセレスの意思は固い。これじゃあ引き留めることなんてできないな。
すると、なぜかセレスは両手の人差し指を胸の上辺りでつんつんさせ始めた。
「それで、その、零児。私がラ・フェルデに帰る前に、一つだけ聞いてもらいたい頼みがあるんだが……」
セレスの頼み？
「いいぞ、俺にできることならなんだってやってやる」
「そうか、なら――」
セレスはベンチから立ち上がると、キャンプファイヤーの方を一瞥し、
「私と、あのフォークダンスというものを踊ってくれ」
凛とした煌きを翠瞳に宿し、淑女然と手を差し伸べてきた。彼女の頬は心なし朱に染まっている。
「俺でいいのか？」
「零児にはいろいろと助けられた。他に相応しい者はいない」
「俺、踊り方知らないんだけど？」
「私も知らない。見様見真似でいいだろう？」
それから俺たちはフォークダンスの輪に加わった。周りの学生や一般客から温かな視線で見守られつつも、見様見真似でたどたどしく踊った。お互いが足を踏んだり踏まれたり、時には転びそうになったりもした。
ダンスなんて今の今まで塵一つの興味も持っていなかった俺だが、セレスが恥ずかしくも嬉しそうに踊っている姿を見ていると段々と楽しくなってきた。こういうのも悪くない。そう思えた。
「本当に、この世界に来れてよかった」
踊りながら、セレスがぽつりと呟く。

「できることなら、もう少しだけでもこの世界で過ごしていたかった」

本音を零すセレスは……笑っていた。

だけどどこか寂しくて悲しそうで、残りたいけど帰りたい、そんなどちらも選べない二つの気持ちが同じ強さで競合しているような微笑み。

一粒の雫が彼女の頬を伝うのを見て、俺は……。

五章　神剣の継承者（４）（後書き）

今回は別作者様の作品とコラボとかしてみました。もちろん許可は取っておりますｗ
正直前半部分はいらないと思ってたのでＮＧだったらバッサリ切ることも考えてましたね。

コラボ作品はＳＡＩ－Ｘさんの『同居人はドラゴンねえちゃん』です。本編でやるなよって話ですけど、その作品のご本人様たちが出てるわけじゃないのでＯＫかなと思いました。なにせこの作品のタイトルは『シャッフルワールド！！』ですしねｗ　前々からコラボしたいなって話していたのです。

そしてリーゼが空気過ぎてセレスがヒロイン過ぎるのはどうしたもんか（笑）

次回の更新は１１月２２日（火）です。

［同居人はドラゴンねえちゃん］
＞ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１４０３ｐ／＜

五章　神剣の継承者（5）

やがてキャンプファイヤーは燃え尽き、後片づけを明日に回してお開きとなった。だが俺とセレスは誰もいなくなった後もスカイテラスに残り、街の夜景を眺めている。俺は腹も減ったし食事でも行かないかと誘ったのだが、セレスがここにいたいと言ったのだ。

夜風が白銀のポニーテールをふさっと靡かせる。汗とは全然違う甘酸っぱい香りが漂い、鼻腔をくすぐる。

お互い無言が続く中、俺は口火を切ることにした。

「なあ、セレス。この世界に残りたいなら、残ればいいんじゃないか？」

「え？」

俺の突然の問いかけに、セレスは驚いて目を見開いた。

「だが、零児、それは――」

「騎士としての矜持や義務、責任があることくらい俺だってわかってる。セレスがそこに誇りを持っていることも知っている。でもな、俺はそんな仮面越しじゃなくてお前の本心に訊ねかけてるんだ。本音で答えてくれ」

「本音……」

真剣な俺の表情にセレスは言い淀んだ。葛藤している、もしくはこの世界で暮らしていた記憶がフラッシュバックしているのかもしれない。

「さっきも話したが、聖剣十二将となることは幼い頃からの夢だったのだ。それを失いたくない」

それも間違いなく本音だろう。この世界で暮らした時間はほんの僅かだ。どう考えてもその想いの方が強いに決まっている。

でも――

「だけど、こんな急な別れは私も望んでなどいない。あと一日だけでいい。一日だけでいいから、私は皆と過ごしていたい！」

目尻に涙を滲ませ、セレスは押し殺そうとしていた心の底からの想いを声に出した。なんとなく、その『皆』の中には？魔帝？であるリーゼも含まれているような気がした。

ずっとではなく、一日だけ。

それでも、俺の気持ちを固めるには決定的な言葉だった。

「そういうわけだから、どうにか便宜をはかってくれないか？」

俺はゆっくりと背後を振り返る。

「クロウディクス」

そこには、美しいブロンドの長髪と王依を夜風にはためかせる絶対的な存在が無音で佇んでいた。やつの隣に浮遊する星空色の剣が意思を持っているかのように明滅している。

クロウディクスは感心したように微笑んだ。

「なにやら取り込み中だったので気配を消していたのだが、よく気づいたものだ」

「あんたの気配は消し切れねえよ」

確かに常人なら気づかないレベルで抑えられていたが、俺を舐めんなよ。音もなく忍び寄ってくるアサシンメイドに比べれば、こいつは真夏の太陽くらい存在感があるんだ。

「へ、陛下！？」

セレスが腰を抜かしそうな勢いで仰天した。声が裏返っているな。

「い、今の言葉はその……口が滑ったと言いますか、な、なんでもないのです！　申し訳ありません！」

「構わん。私とて、本来ならお前の意思を最大限に尊重するつもりでいた」

深々と頭を下げるセレスにクロウディクスは寛容に返す。セレスの意思を最大限に尊重するだって？

「だったらあと一日くらい許してやれよ」

「そうしてやりたいのは山々だが、アレインのやつが言うには今夜

でなければ間に合わないらしい。こちらの世界で夜が明けるまで待ってしまえば、『実』は成熟してしまう。そうなってしまえばどうなるか、お前は聞いているのだろう？」

聞いている。さっきセレスの口から直接聞かされた。そしてアレインって誰だ？

「困るのはセレスだけではないのだ。我々も新たなる聖剣の担い手を見つけ出さなければならなくなる。もしも担い手が見つからなければ、ラ・フェルデの存亡にも関わってくるだろう」

「ならもう一度セレスを聖剣十二将にすればいいじゃないか」

「一度『ラハイアン』を真名に刻んだセレスは二度と聖剣に選ばれることはない。ラ・フェルデの歴史がそれを証明している」

「……どうしても連れて帰るのか？」

「どうしても連れて帰る。法界院誘波には話を通した。あとはラ・フェルデへの門を開くだけだ」

衝突する視線。クロウディクスの王威に押し負けそうになるのを俺は必死に堪えて睨み返す。誘波に話があるってのはセレスのことだったんだな。ちゃんと筋は通してやがる。あともうあの気持ち悪い名称では呼んでないんだな。冗談だったらしい。

「零児やめてくれ！　私はラ・フェルデに帰る！　自分でも決めたことだ。あまり私や陛下を困らせないでくれ。め、迷惑だ」

セレスが悲痛な叫びで訴える。だが俺は彼女の二つある本音の片方を支持すると決めた。この世界に少しでも残りたいという方の想いをな。

「迷惑、ね。そんなどうすればいいのかわからないって顔で言われる迷惑なら上等だ。俺はお前の願望の代弁者になってやる。騎士としてではなく、セレス個人の想いを代わりにぶつけてやるよ！」

〈魔武具生成〉――日本刀。

生成した日本刀の切っ先を、俺はクロウディクスに突きつけた。

「俺と決闘しろ、クロウディクス！　俺が勝ったらセレスを連れ帰

るのは待ってもらう！」

言ってしまったからには引き下がれない。これが俺の決意だ。

「零児！？　なにを言って――」

驚愕するセレスの言葉をクロウディクスが手で遮る。

「いくつか確認したいことがあるが、構わんか？」

「ああ」

クロウディクスの赤紫色の瞳が、俺を試すような眼光を放ってくる。

「お前にとってセレスティナ・ラハイアン・フェンサリルとはなんだ？」

「仲間だ」

即答した俺にセレスは一瞬ムッとした顔を向けた。上に『大切な』をつけた方がよかったのだろうか？

「出会って日も浅い仲間のために、お前はなぜそこまでする？」

「俺は二度と、目の前で知り合いを失うようなことはしたくない」

死ぬわけじゃないし、セレスは元の世界に戻るだけだ。悠里の時とは違う。でも、俺にとっては似たようなもんだ。

「お前の行動はセレスを聖剣から失脚させるだけでなく、最悪の場合、一つの世界を危機に陥れるかもしれない。わかっているのか？」

「わかっているさ。そうならない可能性もあるってことだろ？」

答えると、クロウディクスは驚いたように僅かに目を見開いた。

それからフッと軽い笑いを零す。

「面白いやつだ。白峰零児と言ったか。気に入ったぞ。だが、自分勝手だということを自覚するべきだ」

「悪いな。俺たち異界監査官ってのは個人のためだけに行動する生き物なんだよ。俺はセレスがこの世界に残るという都合のいい方を選択する。ラ・フェルデの事情なんて知ったことじゃない」

一匹狼のやつらも、群れているやつらも、結局は自分がそうしたいからそうしてるんだ。俺だって異界監査官の特徴からはみ出てい

るわけじゃない。
「あんたの反応からして、なんかあるんだろ？　ご都合主義的な方法が」
「確かに思いつく方法は一つある。だが、それでもセレスは連れ帰らなければならない」
なるほど、余程の茨の道ってことなんだな。やりがいあるじゃねえか。
「最後の確認だ。そんな体で私に勝てると思っているのか？」
「勝てるかどうかなんて考えちゃいない。――勝つんだよ！」
クロウディクスは押し黙った。黙って俺を見据えている。今の俺はたぶんグレアム並の獰猛な笑みを浮かべてるだろうね。
セレスは惑乱のあまりオドオドとらしくなく慌てている。クロウディクスは瞑目し、短く息を吐いた。
「この私にここまで啖呵を切った者は久しく見ないな。それだけに惜しい。お前がラ・フェルデ人だったら間違いなく聖剣候補だろうに」
「その称賛はありがたく受け取っておくが、俺はそんな言葉が聞きたいんじゃねえよ」
「わかっている。よかろう。お前を一人の騎士と認め、ラ・フェルデ国王としてその決闘の申し出、謹んで受けようではないか」
「い、いけません陛下！？　陛下が決闘など、私が代わりに――」
聖剣の布を解いて俺と相対しようとしたセレスの頭に、クロウディクスはポンと優しく手を置いた。
「おいおい、お前が戦うのでは意味がないだろう？　もっとも、お前が白峰零児という騎士の『誇り』を打ち砕くつもりなら話は別だが？」
「そ、そんなつもりはありません！」
「ならば下がっていろ。これは私と白峰零児の決闘だ」
有無を言わさぬ力強い言葉でクロウディクスはセレスを納得させてしまった。セレスはハラハラした様子で火の消えたキャンプファ

イヤーの櫓まで下がる。
それを認め、クロウディクスは俺に向き直った。
「悪いが、私もラ・フェルデの命運を背負っている。負けてやるわけにはいかんぞ」
「ああ、わざと負けられたら決闘を申し出た俺が恥をかく」
くっ、そこに立ってるだけなのになんつう覇気してやがるんだ。
人の身では到底勝てる気がしない。俺はなんて無謀な真似をしてしまったんだと今さらながらに後悔しそうだ。
だけれど、ここで退くわけにはいかない。俺は日本刀を居合の形に構える。
「だが、決闘とは対等なものでなければならない。疲弊し切っているお前とでは私が有利になってしまう。不服かもしれんが、ハンデはつけさせてもらうぞ」
クロウディクスに寄り添うように浮いていた星空色の剣――神剣ユーヴィレードが姿を消した。
「私は神剣を使わない。そもそもアレは決闘に使用するには些か反則だろう」
些かってレベルじゃないけどな。手を抜かれるのはいい気分がしないけど、俺は少しほっとしている。
「だったら得物はどうすんだよ？」
「素手でも構わんが、それでは流石に侮辱だろう。セレス、ラハイアンを貸せ」
「え？　あ、は、はい！」
たたたっとセレスがクロウディクスに駆け寄り、聖剣ラハイアンを献上する。これまで決して他人には握らせようとしなかったのに、こいつにならいいんだな。
でもセレスの聖剣ラハイアンだって厄介な武器だ。俺のなけなしの魔力で生成した日本刀では分が悪い。もう魔力も空っぽだし……。
「案ずるな。聖剣、魔剣、神剣はその銘を真名に刻んだ者にしか本来の力は使えん。私が持ったところでラハイアンはただの剣だ」

それを聞いてさらに安心してしまった。情けないな、俺。こうなったらそのハンデは遠慮なく受け入れてやる。

「これで対等だな」

「なにを言っている？　これは私の力を決闘向きに下げただけに過ぎん。ハンデはここからだ。そうだな……私に一撃でも浴びせられればお前の勝ちというのはどうだ？」

なんだって？　いっそ清々しいくらいの余裕だな。腹も立たないぞ。寧ろ笑えてくる。

「ははは、出血大サービスだな。後悔すんなよ？」

「そうでもない。足りないくらいだぞ。なんなら目隠しと片腕しか使用できない制限をつけてもいい」

「そいつはいくらなんでも舐め過ぎだ」

「なら、文句はないな」

条件は整った。あとはどちらが先に動くかだ。

静寂が夜のスカイテラスを支配する。

クロウディクスは聖剣を構えない。一見すると無防備に見えるけど隙がない。周囲の空間が障壁を成しているかのように、どこを突いても防がれてしまうと感覚でわかる。

だがやつは待っている。俺が動くのを。

乗せられるのは癪だが、一撃入れればそれで俺の勝ちなんだ。だったら攻めて攻めて攻めまくってやる！

「行くぞ！」

俺は両足の裏に力を集中させ、一気に跳躍する。居合に構えた日本刀を抜刀の要領で打ち放つ。

しかし、クロウディクスは僅かに身を反らしただけでかわした。間合いや日本刀のリーチを正確に把握しているような余裕ある挙動だった。

俺は振り切った刃の勢いをそのまま利用して回し蹴りを放つ。蹴りだって一撃は一撃だ。でもやはり同じようにかわされる。そこにさらに回転を加えて日本刀を薙ぐ。今度は聖剣で受け止められた。

避けられなかったんじゃない。こいつはわざと受けたんだ。
「その体でなかなかの動きをする。想いの強さというやつか。だが――」
クロウディクスは日本刀を弾くと、中指と親指を重ねるように曲げた左手を俺の顔面に突き出してくる。
「神剣を使わないからと言って、私をただの王だと思わないことだ」
バチン！！
額を銃弾で貫かれたかのような衝撃に俺は何メートルもぶっ飛んだ。みっともなく転がり、軽く脳震盪を起こしてくらくらする頭のまま身を起こす。
――デ、コピン……？
冗談じゃない。普通、指の力だけで人って飛ぶもんなのか？
グレアム辺りならやりかねんが、そういえばこの王はそのグレアムすら片手で捻っていた。恐ろし過ぎて震えることすら忘れそうだぜ。
「神剣の継承者には並大抵の肉体ではなれない。天分の才と血の滲む努力、その他数多くの試練を乗り越えてきた私は既に人の領分を超えている。加減は無用だ。殺すつもりで来なければ触れることすら叶わんぞ」
ゆっくりと俺に歩み寄りながらクロウディクスは語る。敵に自分を倒す助言をするなんていいやつだな。本当に――
「だったらあんたも手加減してんじゃねえよ。どんだけ余裕なんだ」
――本当に、あいつからしてみれば俺なんか虫ケラ以下だってことがよくわかる。
無力さを思い知らされる。
神にでも逆らっている気分だ。いや、王か。
「俺は人殺しになんてなりたくないが、あんたは刺しても死ななさそうだ。なら――」
脳震盪も収まったところで俺は再び跳躍する。
「全力で、殺りに行かせてもらう！」

身を低くして疾走し、途中でフェイントをかけて王の首を狙う。
突き刺す刃は首を傾げられてかわされる。
そのまま即座に日本刀をスライド。首の皮一枚でも削れば俺の勝ちだ。
指で刃を摘まれた。どれだけ力を入れてもビクともしない。
聖剣の刃が迫る。左肩に吸い込まれるように振るわれるそれを、俺はかわせない。防げない。逃げることすら許されない。
斬！
成すすべなく斬り裂かれた肩から鮮血が噴き出す。吐き気がするほどの痛撃が体中を駆け廻り、俺は堪らず膝をついた。
セレスが悲鳴を上げたようだが聞こえない。
痛い。強い。勝てない。
負の念が脳内で渦を巻く。が、無視だ。
「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」
日本刀を手放し、絶叫し、殴りかかる。
パシンと拳は呆気なく受け止められた。そしてあの時のグレアムと同じように手首を捻じられ、半回転した俺は頭から地面に叩きつけられた。
「あがっ……」
気絶しそうになるのを気合いと根性で堪える。まだ、まだ俺は負けちゃいない！
すぐに起き上がって拳打を放つも、次は真横に投げ飛ばされた。
スカイテラスのテーブルや椅子が俺の体で圧し砕ける。
意識がある限り、体が動く限り、俺は何度も何度も起き上がって立ち向かった。その度に投げられ、叩き伏せられ、足を払われては転倒する。
届かない。差が計り知れない。だが、俺は諦めない！　そんなのは最初からわかっていたことだ！
「もういい！　零児！　もうやめてくれ！　私のためにそこまでする必要がどこにあると言うんだ！　お願いだ、もう、傷つかないで

くれ……」

セレスは泣いていた。泣かせたのは、俺だ。間違いなく俺だ。

自分でも本当にここまでする必要があったのかわからなくなっている。なんで俺は意地になってるんだ？　もしかしたらセレスのことはとっくにどうでもよくなっていて、この絶対的な王に勝つことだけが目的に変わっているのかもしれない。

いや、セレスのことをどうでもよくなんてならない。でも、こいつに勝つことが目的になったこともあながち間違っちゃいない。

無力を嘆いた。

変わりたいと思った。強くなりたいと願った。

『王国』は必ず再襲してくる。その時に、周りを守れる強さが俺は欲しい。

この王に届けば、少しは変われるような気がするんだ。

「届けぇえええええええええええええええええええッッッ!!」

渾身の一撃を込めた拳をクロウディクスの顔にぶち込む。

クロウディクスは防がなかった。避けようともしなかった。

なのに、俺の拳は当たらなかった。

途中で腕に力が入らなくなり、膝が折れ、俺は無様にも倒れ伏してしまったからだ。やべえ、意識が、朦朧としてきた……。

「勝負ありだ。それ以上は立ち上がるな。本当に死ぬぞ」

クロウディクスが俺を見下して告げる。こいつは偽りなく自分で痛めつけた敵の身を案じているんだろうが、俺にはその同情が傷よりも痛い。

「うる……せえ……よ……」

それだけ口にするのが限界だった。俺に駆け寄ろうとするセレスを、クロウディクスが聖剣を返す形で止める。

「このままラ・フェルデに帰還する。いいな、セレス？」

「ですが、陛下、零児が……。誘波殿に連絡をさせてください」

揺れる瞳で懇願するセレスに、クロウディクスは首を横に振った。

「法界院誘波は直に来る。あの大精霊はこの場で起こったことなど全て承知のはずだ。それに今はそっとしておいた方がいい」
「……わかりました」
クロウディクスは踵を返し、セレスを連れて去ろうとする。
「待……てよ……」
俺は最後の力を振り絞って手を伸ばし、クロウディクスの足首にしがみついた。
困ったようにクロウディクスは溜息をつき、天を仰ぐ。
「この世界の星空も美しいものだな」
意味のわからないことを口にした。すると、セレスが意を決したようにクロウディクスの足を掴んだ俺の手を払い除ける。
「こ、小汚い手で陛下に触れるな！　慮外者！」
彼女の怒号が耳に響く。
「私は最初からラ・フェルデに帰ると言っているのに、お前ときたら……。頼むから、大人しくしていてくれ」
……わかった。俺は俺の負けを認める。だからそんな顔すんな、セレス。涙でくしゃくしゃになってんぞ？
「帰るぞ、セレス」
「……はい、陛下」
再び現れた星空色の剣をクロウディクスは掴み、空間に突き刺す。次の瞬間、その空間に直線の切れ目が走り、ギギギギとでも音を立てそうな開き方で観音開きとなる。
クロウディクスが先行し、その背中にセレスも続く。
セレスは途中で立ち止まり、俺に振り返った。
彼女の唇が微かに動き、言の葉を紡ぐ。

「さようならだ、零児」

その夜。

俺は完全に敗北し、セレスは異世界ラ・フェルデへと帰還した。

五章　神剣の継承者（５）（後書き）

いろいろと違う方向に行ってしまったのでサブタイトルを変更しましたｍ（＿＿）ｍ
おかしい、予定ではもっと三つ巴してるはずだったのに……。

次回でシャッフルワールド！！第三巻は終章となります。
更新日は１１月２６日（土）です。

終章

セレスがラ・フェルデに帰ってから一週間の時が流れた。

集まっていた監査官たちは各支局へと戻り、大闘技場の地は再封印が施された。ちなみに焼け焦げた自宅のリビングは誘波が「私の憩いの場がいつまでもこれではよろしくないですねぇ」と言って直してくれたので、俺もこれまで通りの生活に戻ることができた。

ただ、夏休みを間近に控えて浮き足立っているクラスの中で、俺だけがこの一週間を憂鬱に過ごしていた。あのような形でセレスを見送ってしまったこともあるが、なによりも今回の戦いでは自分の無力さを嫌と言うほど痛感したからだ。

カーインやゼクンドゥムにはもちろん、望月やスヴェンにすら俺一人では勝てない。やつらがリーゼを狙っている以上、『王国』は近いうちに必ず攻めてくるだろう。あの戦争で完全に縁が切れたとは到底思えない。

そうなった時、俺はどれほど抗える？　今のまま次も凌げるほどやつらは甘くない。そもそも今回はラ・フェルデの――クロウディクスの介入がなければ俺たちは終わっていたんだ。

強くならなければならない。

自分のためにも、周りのためにも。

具体的な案も出ぬまま、そんなことばかり考えていた。

「……」

ふと隣を見ると、自分の席に座っているリーゼが退屈そうに頬杖をついていた。張り合う相手がいなくなったからか、リーゼもこの一週間どうも空回りしている。

逆隣を見る。そこには空席があった。現在は朝のＨＲ中で、担任の岩村先生が明日の終業式について説明している。なのでこの空席は休み時間だからってわけじゃない。もちろん、欠席者でもない。

セレスの席だ。セレスは家の突然の都合で国に帰ったことになっ

ている。まだ席が残っているのは、『せめて一学期が終わるまでは残しておきたい』というクラス全体の総意だ。

「――んなわけでー、終業式は適当に突っ立ってれば勝手に終わるから。そんなことより今日の三限目なんだけど――」

岩村先生が相変わらずテキトーにＨＲを進行していると――ガラガラッ。

教室の教壇側のドアが唐突にスライドした。

「ホームルーム中ですけどおじゃましますねぇ。よい子の皆さんは元気にしてますかぁ？」

目が痛くなりそうなくらい色鮮やかな十二単を纏った少女がニコニコしながら入ってきた。言うまでもなく伊海学園理事長――法界院誘波だ。よい子の皆さんて、お前は幼稚園の先生か？

「り、理事長！？　ど、どどどうされたんですか？　ま、まさか私の給料アップですか？　それとも素敵な殿方を紹介しに？」

岩村先生が混乱している。混乱のあまり変なこと言ってる。

「うふふ、違いますよ。今日は二年Ｄ組の皆さんに素敵なお友達を紹介しに来たのです」

転入生？　異世界人が迷い込んできた話は聞いてないぞ。――いや待て、通常通り異界監査局の教育課程を修了した異世界人かもしれん。マルファとかだったら嫌だなぁ。もし俺んち住込みのゴスロリメイドだったら真剣に転校を考えなければ……。

などと想像だけでげんなりしていると、誘波が「入っていいですよぅ」と廊下にいる転入生に入室を促す。

まず、カモシカのようなスラリとした美脚が見えた。学園の制服であるチェックのスカートをヒラヒラさせているから間違ってない限り殿方じゃない。

次に目に入ったのは、腰まで届くサラサラとした流れるような黒髪。オレンジ色のヘアバンド。雪国の人のような白い肌をしたそいつは、綺麗な顔に人懐っこい笑顔を貼りつけてクラスメイト全員に手を振っていい――ッ！？

「なにぃッ!?」
「えっ!?」
ガタンと椅子を倒して立ち上がる俺とリーゼ。一気に注目の的だがどうだっていい。
なんでだ?
どうして?
「こんにちは、わんこさんたち」
どうして、望月絵理香が俺のクラスに転入してくるんだ!? 捕虜になってるとは聞いてたけど、監禁してるんじゃなかったのか!?
「ふふっ、二人して立ち上がってどうしたのかな?」
望月の人懐こい笑顔の奥に不敵で冷酷ななにかを感じ取って俺は身震いした。ざわっと鳥肌まで立ってきたぞ。あ、悪夢だ。転校の手続きってどうやるんだっけ?
「え、エリカちゃん。ここはあなたのクラスではありませんよ。あなたは三年生でしょう?」
誘波がいそいそと望月を廊下へと押し返していく。呼び方が『エリカちゃん』になっているのはとりあえず保留。
「あら? そうだったわね。ふふっ、お騒がせしてごめんなさいね」
望月は艶めかしく不敵に笑いながら素直に廊下に締め出された。
俺は心の底から安堵する。よく考えれば、黒セーラー服を剥ぎ取られてるってことは活動範囲がかなり限定されるんだ。影魔導術もなんらかの術式で封印されているのだろう。でなければあんな危険人物を自由にさせるわけがないし、あいつもとっくに脱獄しているはずだ。
あれ? でも望月がウチの転入生じゃないってことは……
「誘波殿、入ってもいいだろうか?」
凛とした、鈴を転がすような声音。
聞き覚えのある口調。

布の巻かれた長物を背負い、煌めくような銀髪をポニーテールに結った少女が、少し戸惑いつつも教室に入ってきた。

……。

唖然とするクラス。誰もが、岩村先生すら言葉を失っている。
俺はもちろん、リーゼも立ったまま紅眼を見開いている。
「彼女が本当の二―Dのお友達です。まあ、明後日から夏休みですけどね」
笑顔で紹介する誘波に、凛々しい少女は困惑顔で口を開く。
「その、えっと……セレスティナ・ラハイアン・フェンサリル、です。た、ただいま母国より帰還いたしました」
本人も不本意な自己紹介に笑顔が引き攣っている。
で、俺たち二―Dの愉快な仲間たちはというと――

「「「えぇえええええええええええええええええええええええええッ!?」」」

驚愕と狼狽の声が見事にハモっていた。

※※※

「どういうことか説明しろ、誘波！」
HR終了後、一限目の授業を頭痛がすると言ってパスした俺は、理事長室にある無駄にご立派な机をバン！　と強く叩いた。
理事長室には机の向こうの椅子に座っている誘波と、俺、リーゼ、セレス、あとなぜかレランジェの五人が集っている。
「なんでこのゴスロリメイドがこの場にいるんだよ！」
「え？　零児、疑問点はそこなのか？」
セレスが慌てた。うん、確かにどうでもいい疑問だったな。「秘

書の臨時あるばいと安定ですがなにか？」とゴミ虫を見るような目で告げるレランジェは無視しても構わんだろう。
「そうだな、一つずつ解決していこう。まず、望月を自由にさせている理由を言え」
「自由ではないですよぅ」
おっとりした笑顔と口調で誘波は答える。
「防光制服は没収していますし、影魔導術と身体能力を特殊な魔導具で封じているので小学生と喧嘩しても勝てないと思いますよ。それと彼女だけ学園から出られないように術式を展開し、結界を何層も重ねて張っています。実質この学園に軟禁している状態ですね」
「でかい独房だな。監視は？」
「もちろん、二十四時間密着です。いつでも盗撮できますけど、どうします？」
「俺になにを言わせたいんだお前は？」
まあ、それで大丈夫なら俺に口出しできる権限はないな。望月も一般人以下になってんなら妙な真似はできないだろうし。
「『王国』の情報は聞き出せたのか？」
訊くと、誘波は残念そうに首を振った。
「エリカちゃん以外の捕まえた『王国』の兵隊ちゃんたちですが、意識が戻った時には綺麗に記憶が消去されていました。何者かが予め捕まった時に発動する術を兵隊ちゃんたちに仕組んでいたようです」
用意周到と言うべきかもしれないが、ずいぶんと酷いことをする。たぶん、あの戦争に参加した『王国』軍はこのことを誰も知らなかったんじゃないかと思う。捕まったら記憶を消すという行為を、敵ながら騎士道を貫いていたカーインが認めるはずがない。
「エリカちゃんもなかなか口が堅くて、なにをしても飄々と受け流されてしまうのですよ。自白剤や洗脳術はもちろん、まさかアレにも堪えるとは思っていませんでした」
「アレってなんだ？」

「聞きたいですか？」
「……いや、やめとく」
なんとなく、想像するだけで発狂しそうな拷問内容な気がした。
「あんなやつはどうだっていいわ！　それよりなんでこの騎士崩れがここにいるのよ！」
ビシッとリーゼがセレスを指差して喚いた。セレスがリーゼの無礼さにムッとする。
「？魔帝？リーゼロッテ、私がここにいることがそれほど不満か？」
「当たり前よ！　お前は自分の世界に帰ったんでしょ？　せっかくいなくなってせいせいしてたのに」
「よく言うぜ。ついさっきまで物足りなさそうにしてたくせグフッ！？」
お子様パンチが鳩尾にクリティカルヒットした。
「では、そういうことですので死んでくださいゴミ虫様」
「どういうこと！？　無理やり話を繋げたように見せかけて俺を殺そうとすんなこのポンコツメイドめ！　その翳してる右手を仕舞いなさいっ！」
「チッ！」
うわぁ、なんか久々に聞いた気分だよこいつの舌打ち。やっぱり腹立つわぁ。
――って、いかんいかん、混沌としてきた。話を元に戻さなくては。
「それでセレス、俺もリーゼと全くの同意見なんだけど？」
「れ、零児も、私がいなくなってせいせいしていた、のか……？」
「そこじゃねえよ！　なにガチでショック受けてんのちょっと！　どうしてこの世界に戻って来れたのかって訊いてんの！」
落ち着け俺。ツッコミ衝動に従ったままだと息切れするぞ。それと潤んだエメラルドグリーンの瞳の上目遣いにドキッとしたことは内緒だ。
「あ、ああ、そのことか。非常に言いづらいのだが……」

安心したように腕を組んだセレスは、言葉を整理するためか少し間を空け、言う。

「きちんとした手順を踏みさえすれば、聖剣を異世界に持ち出すことができるのだ」

……。

……。

……はい？

「私は陛下から直々の指令を受けてここにいる。カーイン・ディフェクトス・イベラトールの捕縛、及び『王国』という脅威の排除が私に与えられた任務。そのために、ラ・フェルデ代表として異界監査局に協力せよとのことだ。無論、異界監査官として」

凛然と述べられるセレスの言葉に理解が追いつかない。え？　どゆこと？　聖剣が異世界にあるままじゃラ・フェルデがピンチだからセレスは帰ったんじゃねえの？

「詳細は教えても余計混乱するだけなので省きますが」と、誘波。

「要するに、ラ・フェルデの聖剣十二将は申請すれば神剣を通じて異世界出張ができるということです」

なんだよ、それ。聞いてないぞ。

「セレスは、知ってたのか？」

「いや、私も帰国してから初めて聞かされたのだ」

「俺が決闘した意味は？」

「……」

セレスは黙った。黙って目を逸らしやがった。そこで「決闘！　わたしもやる！」とリーゼが活き活きと発言しているのはスルーしておく。

すると――カチッ。なんかのスイッチが押されたような音がした。

《迷惑、ね。そんなどうすればいいのかわからないって顔で言われ

る迷惑なら上等だ。俺はお前の願望の代弁者になってやる。騎士としてではなく、セレス個人の想いを代わりにぶつけてやるよ！≫

「こんな台詞を真顔で言っちゃってきゃあ♪　レイちゃん恥ずかしい！」

「んなぁあああああああああああッ！？　て、てめえいつの間に録音してたんだそのボイスレコーダー寄越せ直ちに踏み潰してやるッ！？」

「これはコピーなので無駄ですよぅ。例によってオリジナルは別の場所に保管してあります」

「またかぁあっ！？」

よーし、ガサ入れだ！　今日辺りにこいつの屋敷どころか監査局全部引っ繰り返すつもりで探しまくって根絶してやる！

「あ……うぁ……はうぅ……」

縮こまって呻くセレスは、俺の台詞なのに物凄い勢いで顔を真っ赤にしていた。その台詞の対象者だからかな？　シュゥウウウ、と蒸気機関のように湯気を立ち昇らせている。いつ爆発してもおかしくない危険な状態だ。誰か、誰か爆発物処理班を呼んでくれ！

「これで当分はレイちゃんを弄れるネタができました。クロウちゃんは実にいい仕事をしてくれま――ケホンケホン。クロウちゃんも人が悪いですねぇ。無意味だと知っておきながらレイちゃんの決闘を受けるんですから」

誘波の本音はダダ漏れだった。

だけどそうだ、初めから全部説明してくれてりゃ俺も決闘だなんて言い出さなかった……と思う。あいつの言っていた『思いつく方法』がコレだってことも今ならわかる。茨の道と全然ちゃうやん。寧ろ俺が阻もうとしてたやん。悪役俺やん。

うん、精神的ダメージが大きいな。どのくらい大きいかと言うと、脳内ですら言葉遣いがおかしくなる。うぅ、穴があったら埋まりたい……。

「そ、それは違うぞ、誘波殿！」
と、セレスが羞恥から立ち直る。爆発物処理班は間に合ったようだ。
「陛下は零児のためにあえてなにも告げず決闘を受けたのだ。あの場で教えてしまえば零児の決意は崩れていた。全力で障害に立ち向かおうとする意思を否定していた。『誇り』を賭した戦いに水を差すような真似など陛下はしない。騎士としての尊厳を貶めることになるからだ」
熱弁するセレスには悪いから口には出さないけど、俺、騎士じゃないからね。あといいこと並べ連ねてるけど、俺にはあの陛下がSだと言ってるようにしか聞こえない。もうダメだな、俺の耳も。
まあクロウディクスよりも、知っててずっと黙っていやがったそこのボケナミに殺意が沸くんだが……どうしてくれよう？
とりあえず、ふう、と吐息を漏らして心を落ち着かせ、俺はさっきから話についていけてないリーゼを見た。
「リーゼ、今日学校が終わったらハンバーガーを食べに行こうな」
「本当！　アレおいしいから大好き！　嘘だったら燃やすわよ！」
紅い瞳をキラッキラと輝かせるリーゼ。ああ、なんだろう、癒される。俺、ロリコンじゃないのに癒されるよ。
「誘波様、ゴミ虫様が現実逃避に走りました。気持ち悪いので排除安定ですか？」
「お前はそこでただ突っ立ってろよ木のように！」
くそう、俺は現実から逃げることも許されないのか……。
すると、誘波がコホンと咳払いをして改まる。
「レイちゃんをイジメるのはこのくらいにして、少し真面目な話をしましょうか」
学園のトップが率先してイジメを行うのはいかがなもんなんだろうね。
「なんだよ、真面目な話って？」
「『王国』が順調に『次元の柱』を壊していくとどうなるか、レイ

ちゃんたちはもう知っていますね？」
　俺は黙って頷いた。『混ざり合う世界（シャッフルワールド）』って現象が起こって、様々な世界がぐちゃぐちゃになってしまう。簡単に言うと、滅ぶ。
「今回、ラ・フェルデに協力していただけることになったのはそのためです。この世界との繋がりができてしまったラ・フェルデは、真っ先に巻き込まれてしまうので」
　それは協力せざる得ないだろうな。特にクロウディクスやセレスはラ・フェルデの守護者のようなもんだし。ひとまずは納得だ。
「ですが、ラ・フェルデの協力は戦力的な意味で必ずしもプラスになるというわけではありません」
「？　どういうことだ？」
「ラ・フェルデは様々な世界と繋がり、交流しています。元の世界に帰りたいという願望の強い異世界人の方々がこれを知れば黙ってはいないでしょう」
「……そうか」
　帰るために監査局に入っている異世界人は多い。下手に秘匿したりすると暴動が起きかねんぞ。
「監査局は異世界人を保護しているだけなので束縛は理念に反します。なのでこの朗報を報せないわけにはいきませんし、自分の世界に戻れる異世界人を止める権利もありません。クロウちゃんもその辺りは承諾してくれています。まだどうなるかわかりませんが、ラ・フェルデという戦力が増えた分、監査局の戦力が減るということになるでしょう」
「これからはもっと人手が足りなくなるわけだな」
「しばらくは大丈夫だと思いますが、そのうち必ず人員不足は発生しますね」
　技術面など全体的なものもそうだが、これからは個人の戦闘能力もより重要になってくる。局員ならまだしも、監査官が抜ける穴は相当な痛手になるだろうな。
「そこは安心してくれ。人員不足だというのなら、その分、ラ・フ

ェルデが補うと約束しよう。常駐できるわけではないが、幾人かこちらに派遣することも検討されている」

誇らしげに述べたセレスに俺も納得する。

「まあ確かに、一世界が全力で支援してくれたら寧ろプラスになるんじゃないか？」

あの陛下だけでも力になってくれりゃ一騎当千、いや一騎当万だ。

「ラ・フェルデも他世界ばかり構っていられないでしょうから、一気に人員不足解消などということにはならないと思います。ですが、期待していますよ、セレスちゃん」

「了解した。その期待に応えられるよう、誠心誠意、努めさせてもらう」

騎士の顔つきで敬礼したセレスは、次に表情を少し柔らかくして俺に微笑んだ。

「そういうわけだ、零児。これからもどうかよろしく頼む」

「あ、ああ。こちらこそ、よろしくな」

握手を求められたので、俺はドギマギしながらその手を握り返そうとした。

その時――

「むむぅ……あーもう！」

なにやら癇癪を起したリーゼお嬢様が、触れかけた俺とセレスの手を両手でバンザイをするように弾いた。

「？魔帝？で最強のわたしを無視して退屈な話してるんじゃないわよ！　それに『たいこうせん』はもう終わったんだからレージは元通りわたしのものよ！　お前になんか渡さないから！」

ぷっくりと子供っぽく頬を膨らませて宣告するリーゼに、セレスもムッとして睨み返す。

「零児は誰のものでもない。前に教えたはずだ、？魔帝？」

「お前に教わることなんてなにもないわ。お前は目障りだから自分の世界に帰ってればいいのよ！　それとも今すぐ灰にしてあげようか？」

「やってみろ、？魔帝？。その前に貴様は我が聖剣の光で浄化されるがな」
「面白そうじゃない。決闘よ！」
「望むところだ。今日こそ勝負をつけてやる！」
片や睨め上げ、片や睨め下げ、視線を衝突させて激しく火花を散らす魔王と聖剣士。いつも通りの見慣れた遣り取りに俺は思わず唇が綻んだ。リーゼのやつ、調子戻ったみたいじゃないか。いいことだ。
リーゼが掌に黒炎を灯し、セレスが聖剣ラハイアンを鞘から抜く。空気がピリピリと張り詰める。
あれ？　ガチになってませんかお二人さん？
「そ、それじゃあ、俺は授業があるんでこの辺で……」
こういう時はそそくさと退散を決め込むに限――スシャッとゴスロリメイドさんが唯一の出入口の前に立ち塞がった。
「ゴミ虫様、退室なさるのでしたらレランジェに殺されてからが安定ですよ」
「もはやなにが安定なのかわからないッ！？」
「ではではぁ～、レイちゃん、後始末はよろしくお願いしますねぇ」
「そしてそこ！　転移で消える前にこいつら止めてからにしろよ俺に丸投げすんなぁあッ！」

いつも通りの、いつも通りな日常。
主に被害に遭うのは俺という理不尽極まる日常。
もうしばらくはこんな毎日が続きそうで、俺は心のどこかでほっとしいた。
なんというか、こういう日常だって実は悪くないんじゃないかって感じている俺がいるんだ。困ったことにな。

……あ、俺はマゾじゃないからね。勘違いすんなよ。

終章（後書き）

第三巻はこれにて完結です。
ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました！
予定通り公募作品の執筆のためしばらく休載に入ります。最低でも三ヶ月はかかるかと思います。
ですが必ず再開させるので気長にお待ちいただけると嬉しいです^^

それと第2回のアンケートを設置しました。質問はいくつかありますが、必須項目は一つです。下部のリンクから飛べるので、よければ投票してやってくださいw
読者の声が作者の力になります（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4523q/

シャッフルワールド!!

2011年11月26日00時55分発行